

『兼山秘策』全文テキスト

【凡例】

○底本 瀧本誠一編『日本経済大典』第六卷（史誌出版社、昭和三年）

○表記について

- 一、漢字の旧字体は新字体（通行字体）に改めた。
- 一、句読点、清濁を適当に付けた。
- 一、割注（二行書き）は、〔 〕に記した。
- 一、小字注は、（ ）に記した。
- 一、返り点（レ点、一・二点など）は無視した。

○その他

検索の便のため、一つ書きの上部に、底本のページ数を記した。たとえば、「237◆」  
とあるのは、237ページにその一つ書きの条が記載されていることを示す。

○注意

※本稿は科研費・基盤（C）「書簡・雑記資料を中心とした17～18世紀学芸史の研究」  
（課題番号18K00320、代表者・川平敏文）による研究成果の一部である。

起正徳元年至三年

237◆一 昨十一日新井氏へ立寄候処幸在宿にて一時計清談仕候、私申候は、御堅固に見へ候間珍重と申候へば、曾て堅固に無之候、此間も気分相滞候へ共、四花灸など仕服薬等も致し候間続申候、四体麻痺仕頭重く氣配鬱塞仕候旨被申候故、私申候は、夫は無心許儀にて候、麻痺など、申儀一旦の儀とは不存候、連々御勤勞にて御氣鬱と奉存候、一寸御引込にて御保養被成、末長く御用御勤被成候様に存候旨申候へば、左様にも仕り難く候、此間間部越前殿〔越前守詮房御側御用人〕より、何とぞ私に罷出候様にとて相談の儀共自筆にて一々調被越候、私罷出候へば、直談の上にて相済申儀候故、其を宿に罷在書通にて仕儀も難仕候、一日万機と有之通に候、諸国への機務、古来の例共より相考一々申下し候、先にてつかへ申所は、重て遂僉議申遣様成事に候、少も未決成儀は御嫌に候故、上より被仰下候趣、下より申上候趣共、一々書立候て僉議候て決し申趣、此末に委細書付老中諸役人諸国へ下し申儀に候、今度朝鮮来聘の儀に付候ても多端成事に候、手伝など有之候へば又勤よく候へ共、手伝仕候へば、其事の筋未決の内、はや外辺へも相知申様成事に候故、何もかも一人にて先相勤申山被申候、其体間部殿と兩人にて、上の御相手に被罷成候様子に相聞申候、御威光にておして取行候得ば諸役人に渡し事済申儀、御先代抔左様にて候、夫を少も無理をして被仰出事殊の外御嫌に候故、何も角も理を尽され候様にて御自身御勤被成候、上さへケ様に候へば、私共随分御用捨被遊候へ共、此方より少も休息仕心得は無之旨被申候は、私申候は、御苦勞千万成事に奉存候、上の御委任被遊候へば、御勤は多端候へ共御勤被成よき方有之候、其故御続被成候と奉存候、先以君臣御勤政の段天下の幸と奉存候、私共外間にて奉伺候に、穆々と被遊何の儀も無之御穩便相聞へ申候得共、奥深く恐れながら頼母敷奉存候、只今御物語を承りて扱こそと奉存候由申候得ば、新井氏被申候は、御代替以後一人も刑罰に彼行儀も無之、そろ／＼と政を被奉候事中々御遠慮有之儀と奉存候旨被申候、私申候は、保山老抔事御代替の砌は、日本一統に何卒可被仰付抔と申候処結構に被仰付候、是等御仁厚成儀と奉存候、御浅慮成儀とは相見不申旨申候得ば、保山其外御意に応じ不申面々皆結構に被成置事、悉皆常憲院様へ被対候ての儀候旨被申候故、私申候は、されば其故御仁厚之儀と奉存候、新井氏被申候は、扱政にさへ預らぬ様に被成置候得ば、其を御構に不被成儀に候、常憲院様御懇に被成候面々の儀に候へば、其を御代に悪敷被成候儀は、御本意ならぬ儀との思召に候、惣じて御決断の御事凡慮の及ばぬ所にて候、美濃守殿隠居は常憲院様御他界の日に被仰出たる事承り及び候哉、是等もはやき儀に候、常憲院様御他界の日美濃守殿御前へ被出、私事常憲院様御厚恩の儀に候得ば、追腹も不仕候ては不叶者に候へ共、御法度の儀に候へば不及是非候責て剃髮仕り度旨直に願ひ申上候処、其方左様に被存候処尤に被思召候得共、剃髮の儀は先御代より格有之儀にて候、奉公の品により賤者迄も剃髮仕者は定り可有之候、歴々其方など様なる者剃髮と申儀終に御格無之儀に候へば、此度此方代替に、御先代よりの格を御敗り被成候儀難被成候、御葬送も済申候は、早速隠居被致候て、剃髮願の通に被仕可然と御意に候故、もはや美濃守隠居愿不申候ては不成候、斯様の儀御はやき儀に候、不動声色相済申候、其後世上にて美濃守事いろ／＼申沙汰を御聞被遊、御笑被遊候て御座候。

239◆一 私申候は、御代替の砌、落書、狂歌、北地なども大分流布仕候、左様の儀少も御制禁も無之事、是も其節奉感候旨申候得ば、夫も只御構不被成にては無之候、其砌老中より余り甚敷儀に御座候、此儘に被遊置候ては、人心も動き申端にも可罷成と申上候得ば、御聞被遊候て、夫も尤に候へども、御前には左様には不被思召候、是は一段の儀と思召候、此方悪敷事を直には有体に難申筈に候故、誰共なしに落書等に出し候ては無遠慮候故、善

悪に付下情相達候故御聞被遊、よき事は御取、悪敷事は御捨可被成候、御心付被成事も可有之候、共儘被差置御用捨候は、此方に有事に候、各も善悪とも外さた聞候ては心付申儀も可有之候得ば、共儘指置可申候、落書等御覽可被成候間、上げ可申旨御意に候由被申候。

240◆一 又被申候は、常憲院様御遣銀すきと御遣切被成、御隠居所御立可被遊様も無之候に付、砂銀と申儀起り候て、是を以て御隠居所御立被遊御入用に被成積にて候、其内薨御にて候、其跡御継被遊候に付、金銀払底仕候ゆへ、老中被申上候て、金を悪敷被成候て多く致し御遣用有之候様仕度旨被申上候へば、金は元より吹替可被成、悪敷は被成間敷候旨被仰出候、兼て常憲院様の御時金銀吹替被仰出候て、金銀多被成候ゆへ、大地震にて御城中大分破損も御修理被成申候、明日にも地震火災等有之間敷物にても無之候旨、とかく金出来候様に用意不仕置候ては、手支候て如何様なる氣遣なる事出来も難計候由被申上候へば、御聞被遊、成程左様の処迄心懸候事尤に思召候、此上は御自分の思召をも先被仰候て御覽可被成候、各金銀吹替等御先代に被仰付置候故、地震等の時分無事に相済申旨申候、然共金銀吹替等の儀無之候は、地震等の天災は有之間敷と、御前には思召候、左様の儀不仕何卒將軍宣下等如何様にも相済、御取続可被遊と思召候、その上に不思召寄又地震火災等の大変出来仕候は、其時は天下の為に御一身御つぶれ可被成と御覚悟被遊候旨御意に候、誰とやらん新井殿被申候忘れ申候、其人此上意を開被申候て、御身に被替候て天下の難儀を御救被遊候事、とかく不被申候とて泣き被申候、私も其節は感涙にむせび申旨被申候、此事を承候て私も落涙に及申候。

240◆一 又被申候は、御代始右の通り御勝手御不自由の砌、諸簾本困窮子供養可申様も無之旨、御聞被遊、一度に七百人あまり被召出候、古今に一度にこれ程被召出候事可有之候哉、其砌十七以上とやらん申儀に候処、十三に罷成候ものを前髪をおろして出し申候、これは如何にしても上を軽んずる様なることとて老中などは不機嫌に候処、御聞被遊殊の外に御機嫌にて御座候旨、これ等も結構なる御様子と奉存候、とかく珍敷寛仁の君に御座候、私儀もかやうの御美德の儀を承り候て、何角理届らしく先を折申様に申は不調法なる儀候ゆへ、御もの語承り乍恐奉祝候、権現様御再来と奉存候、此御仁徳にては御家御長久と目出度儀に奉存候旨申入候(以上四ヶ条 辛卯五月十三日書)

241◆一 先日一夕新井氏へ参り語申候、佐藤五郎左浅野氏四十七人の義士の評、かな書にいたし置候物を貸被申候、新井氏も余り替たる儀と存候て写させ置申候由に候、只今御使に進申候、其許にて御写置被成、奥源左衛門殿などへ被遣可被下候、ケ様の異見可有之とは不存候処、佐藤氏學術是にておしはかり申儀に候、新井氏も此かな書を見候へば、佐藤氏は君の讐をも見のがし可申覚悟と存候など被申候、大罪人と申儀如何の儀に候哉、其上泉岳寺にて早速切腹不仕候段、名を求め禄を貪り申所為との申様など、四十七人泉下にて承候は、一笑を發し可申候、扱々無是非評判に御座候、ケ様の学者とは努々不存候、加州へも遣し候て学友中へも皆々見せ候て知せ申度存候、已後の心得にも可相成候(此一条 辛卯九月十七日、於江戸賜小谷勉善書、佐藤氏評在別紙)

241◆一 当上様御盛徳の事、狩野探幽の堯舜より以来代々聖人を書きたる極彩色の六枚屏風あり、舜杯には鳳凰の来儀を書たり、如形見事なる物なるを、先年御物にも成んかと上覧に入けり、久敷其儘御差置被成、十七日御忌日麻上下召候御時に始て上覧ありて、上意に尤見事なる絵なれども、聖人の像を懸物杯にして床に懸などするは不苦、屏風といふ物は筵席の上にてたて置て、平生対坐しても見るものなり、屏風杯に聖賢の像を書いて見る事勿体なき事に思召候間、御返し被成候由上意なり、常々聖像には假初にも上下召ずしては御対し不被成候、ケ様に聖人の貴き事をしらせ奉り申候事は、此方の侍講の力なきにしもあらず、林道春が家康公の御事を誉奉りて、孔子は唐の事は知たれども、天竺の事を知らず、釈迦は天竺の事は知たれども、唐の事を知らず、我家康公は、唐天竺の事を明に知り

給ふ故に、孔子釈迦の及ぶ所にあらずと書たり、箇様のてれんをいふ儒者世に用らるゝ故に、いとゞ人主己が位にほこりて、聖人などをも直下に思ふ、聖人を直下の思ふ心にては、最早聖人の言葉信じ用る事なし、大切成所なり。

242◆一 今秋〔正徳二年〕四国、中国辺大水の様子注進有之、新井氏へ御尋の儀共有之、被申上候趣荒増承候、尤なる事に候、天災を御慎被成候御様子に御座候、其上兎角上に合せ申者御嫌の旨被申候、此一事何より結構なる御事と奉存候、御中年に被為及候まで甲府に被成御座、佞臣の仕形とも兼て能御存知被遊、御懲被成候故と被申候、御即位おそく御治世の間末短し、今少早く御継続不被成事残念に候得ども、御年若にて御即位候はゞ左様の御氣付も有之間敷候へば、結句遅きも幸と奉存候。

243◆一 世道いまだ少は頼有之様子に候、当今漢宣帝に比し申衆有之候由、愚意も左様に奉存候、中興の主と可称候、恨らくは丙魏の臣無之候、周宣王、漢宣帝、唐宣宗何れも中興の主て候、当今御名宣の字御付被成候事、奇事と申事に候。

243◆一 九月廿日頃より〔正徳二年〕当主御不豫被成御座、廿八日及十月朔日大名衆出仕に御出座不被遊候、御療治最初は奥山交竹院、其後岡道慶、藪原通玄、洪江通玄院と、段々相替候得ども、御快驗無之につき、朔日より又交竹院御菓被召上候、御菓一貼に人參五匁つゝ、被加候、九日夜急に御指重り被成、夜中御老中俄に登城、大久保加賀守殿には忌中に候得ども、御免被成被罷出候、御肝癘左の方より強く差込候て、人參の類少しも被召上候得ば、殊の外御苦痛被成候ゆへ、独參湯上げ申難成、医師中も東手居り申候、翌十日昼頃殊の外御煩悶被成候ところ、少々御くつろぎ被成、夫より御疲れ出昼夜御寝成、をりふし御粥を四拾目余兩三度も被召上候て、成程御静に御座候ゆへ、十一二日時分は少し頼も有之、御本復奉祝候處、終に十四日暁天薨御被成候、近代に無之賢明の君にて、殊に当年より段々御仁政も行はれ可申体に候處、此仕合に罷成候段天下の不幸に候、十四日惣出仕にて罷出候へば御老中御出、今暁御他界の段被仰渡、其上に御遺書有之旨にて林七三郎高く読み上げ申候、各落涙にて拝聴仕候、則別紙に有之候、誠以言簡而義深とも可申候、御継続以来三年の間、日夜天下の事に御苦勞被成、御跡までもケ様に被仰置候事難有御儀に奉存候、御葬送の儀も御遺言にて増上寺へ御越被遊候、此儀も被仰置候趣乍恐御尤の儀奉感候、御当家は御代々浄土宗の筈にて、既に権現様、台徳院様増上寺にて御取置被遊候處、大猷院様はじめて天台宗に御成被遊候、それより御三代上野にて御取置申候、この度又上野へ御越被成候ては、もはや増上寺の方御由緒絶申にて御座候間、この度は権現様、台徳院様のごとく増上寺へ御越可被成との御遺言にて候、金銀の事も秋元但馬守殿へ委細被仰置候、その趣大略承り候處、金銀近年払底相成候に付、沢山に可被成と被思召候て、御先代に吹替被仰付候得ども、只今に相成末々難儀仕候様被及聞召候に付、御苦勞被思召いろゝ被尽御思慮候得共、急に御改難被成候に付御見合被成候處、此度被及御不幸候、民の難儀に罷成候儀に候間御跡宜敷致詮議、兎角金銀共に権現様、台徳院様御時代の通罷成候様可仕旨、則十四日此儀も秋元殿其役人へ被仰渡候、九日夜急に御指重り被成候處、少間有之御正氣付候得ば、拍手為致候へとて、御次にて拍子二番有之候、十日昼迄に御息絶へ不申内に、此度伺残し申儀共一々伺候様被仰付、透と被成御聞、それゝ被仰出不残埒申候、遠慮閉門も其節透と被成御赦免候、是も被仰候は、此者共畢竟御免可被成と被思召候、只今御免不被成候はゞ一生難儀に可存候間、皆々ゆるし候へとの儀に御座候、右御遺言書も其時分相濟候哉、則九日の御日付にて候、もとより後事透と其前より被仰置不残埒明申候、その後御近習衆何も久々御馴染被成候者どもに候間、御暇乞可被成候間、一人ゝ御前に罷出候様にと上意に付、名を名乗候て御目見に罷出候へば、それゝに御言葉を被懸候、其内老人一人余りに忍び兼て啼申もの有之候へば、その時御目を被明候て御しかり被遊候、御女中方へも御暇乞可被成哉と申上候得ば、無用に仕候へと御意にて御座

候、扱もはや何事も相済候間おこし立候へ、早御絶被成度候由被仰候、定て殊の外御苦痛被成、とても不叶儀に候故、少も早く御絶被成度思召候ての儀と御痛敷奉存候、去共より少づ、御くつろぎ被成候ゆへ、何も相談にて、此間人参にて宜敷無之、却て殊の外御難儀被遊候段は能存知候故、申上事何共難儀千万には候得共、此節に罷成人参を上不申候て、御隠れ被成候様有之候ては、諸人の残念と存候処も可有之候、此上は群臣の為に、被召上候様に申上見申べき由にて、独參湯を捧候て右の趣申上候へば、成程尤にも被思召候へども、只今迄人参に御相応不被成候に付不被召上候処、只今御最期に成被召上候は、結局命を不知にても可有之候間、何も志は同事に被思召候間、被召上間敷由にて不被召上候、御絶命被成候まで透と平生の御様子にて被成御座、扱日夜御草臥被成静に御寝被成候間、御近習の衆も後には何も勤申儀も無之、只伺候して罷在候由に候、御絶命迄は何れも付て居不申儀も成間敷候間、御傍に居候て捨て置候へば、天命にて候由被仰、成程安靜に御臨終の由に御座候、如斯御英明の儀申に付ても、扱々おしき儀に奉存候、東照宮の御神霊も無之哉と、余りの事に恨奉る程に奉存候、此上は犬馬の情只嗣君の御万福を奉祝候て、御成立を奉待候外無之候、右申伸候事は、透と外人不知儀共に御座候、私事は御存知の通り承候筋候故承申候、ケ様の儀独承り候を余り残念に奉存候、畢竟君の美を顕揚仕り候事は、人臣の本意にも候故申進候、(十月十八日書壬辰)

#### 御遺書

不肖の身東照宮の神統を承けしよりこの方、天下の政事常に神徳に副んことを以て心とす、然るに在世の日短くして、其志の遂ざる事、今に及ていふべき処をしらず、古より主幼く国危き代々を見るに、其世の人、権を争ひ、党をたて、其心相和らはずして、相疑ふによらざるはなし、胡越の人も、舟を同じくして水を渡るに、其心を一ツにして其力を共にする時は、風波の難をも渡るべし、況や今の世の人、当家創業の後、治平百年の間に、相生れ相長ずること誰かは東照宮の神恩によらざるものゝあるべき、人々其神恩に報ひ奉り、世のため人のためを存ぜば、古の主幼く国危き代々の事ともを以て深き戒とすべし、若其心ざしなからんにおめては、当家の危難といふのみに非ず、尤是天下人民の不幸たるべし、凡天下の貴賤大小、よろしく相心得べき事に思召者也。

正徳二年十月九日

#### 被仰出二之趣

上古以来我国にて金銀を生じ候事其数少く、天下の財用とほしく候ひし事ども、世の人伝承りたる処に候、しかるに東照宮御治世の始、慶長七年に及びて天運の時至候ゆへか、神徳の感し出され候ゆへか、天下の宝山一時に開け、始て金銀を生じ出候事、我国の始より以来いまだ其例を聞ず、是よりして公私貴賤の財用ゆたかに、事足り候のみにあらず、我国の外よりも金銀を求むべきために、渡来候国々其数多く、又我国の資用にゆたかに事足候て今日に至候、是皆東照宮の神恩にあらずとは申べからず、寛永年中我国に渡り来る事を禁ぜられ候国々多しといへども、今日に至る年々に渡り来り候処も其数すくなからず候を以て、我国の金銀は万国の宝に勝候こと、世の人又推して知べき所にて候、然るに慶長より以来或は異国の中に流れ入り、或は火災の為に焼失、或は神社、仏閣、衣類、器財の為に費し用ゐし処、凡九十四年の間我国の金銀大半を滅じ候故に、天下の財用相通じ候事其始に及び難し、是によりて、元禄年中金銀の法を改め造られ、我国通用の金銀又其数を表し候、しかれども其金銀の品は、東照宮の定め置れし処には大きに及ばず候によりて、工商の類あらたに造出され候金銀の価を賤し、各其利を失ふべからざることを謀り、物價を増し加へて商売し候に及て、諸物の価は年々に貴く、金銀の価は年々に賤く成来て、終には公私貴賤の難儀には至りぬ、異朝にしては古よりその宝貨の品、高下同じからざる事共にて、就中中古以来は、貨錢とて紙を以て金銀に加へらる、天下に通用せしめ候こと

今に至るの由相聞へ候、元禄以来の金銀たとひ其品は下り候とも、異朝の宝銭にはくらぶべからず、しからば我国の四民、各其家業を相伝て、其財用を相通じ候こと、東照宮より以来代々の国恩により候処を存候はんには、金銀の価もさのみには賤しからず、諸物の価もさのみは貴からずして、今日の難儀にも及ばしむべからず、しかれども財を重んじ利を争ひ申候ことは、工商の間に候まてはあながちに咎むべからず、只偏へに其余公私貴賤の煩と成もの、今更是非を論ずるに及ぶべからず、都てこれ等の事ども年久しく知れ候事に候へば、御代の始より常に御心に懸候処、金銀の品本のごとくに、諸物の価も平かに、いかにもして天下の煩を除かるべき御本意に候へども、凡は物一たびやぶれ候後、本の如くになし返しがたき事は、定れることほりにて、中にも今日金銀の品を、本の如くになし返され候事尤難心得事に候、若然るべきいはれもなく、今の金銀を以てもとの如くになし返されむには、天下の通用し来候金銀は、俄に其数の半ばを減じ、天下の人各其家財の半を失ひ、又工商の類の利を謀り候心は、本のごとくに候はゞ、其物の価は其半を減じて、商売候事も有べからず候、然らば金銀の数は今までの半を減じ、諸物の価貴く候事は、今迄の如くに候はんには、公私貴賤の難儀猶ほ甚しきに至り候べきか、是等の儀によりて卒尔に御沙汰にも及びがたく候て、新金の事は或は火にあひ候ては流失、或は物に触候ては打損じ、其宝を失ひ候輩有之由聞召及ばれ、止事を得ず、これは先其品をもとのごとくに改め造るべき由被仰出候、其形の少く候ことは不可然候へども、金銀の法もとのごとくになし返さるゝまでは、天下に通用し候金の数其半ばを減ずべきこと、尤以不可然事に有之候故に候ひき、然るに新銀の次第に其品下り候ひて、去年の冬に至りて、銀にて通用の国々貴賤の難儀に及候由聞召れ、殊に不可然ことに思召れ候を以、新銀を作り出し候ことをば停止せられ候、この上は猶更に金銀の品もとの如くになし返さるべき事、日々に御心を尽され候、但天下の宝は、天下とゞもに宝とすべき物に候へば、思召にまかせて御決定難被遊御事に候、たとひ今日金銀の品を元のごとくになし返され、其数の半を減じ候とも、慶長以前の代々にくらべ候はゞ、天下の財用猶ゆたかなるべきことは万々信じ候べし、然る上は天下の貴賤相ともに存候処、我国の金銀は万国に勝れ候て、万代の後までの宝とすべき物に候へば、たとひ各その財宝の半を失ひ候とも、其品を元の如くになし返さるべき事に致し、工商の類も相共に存候処、金銀の品もとのごとくになし返され候は、たとひ其利を失ひ候とも、其物の価は其半ばを減じ候て、商売可仕事に候と存候はゞ、年来の御本意のごとく、速に金銀の品を元の如くになし返され、天下の煩を除れ候べし、若天下の貴賤存ずる処も、今日通用の金銀その数の半を減ぜられん事、不可然候事と存、工商の歎も其利の半を失ひ候はん事はかのふべからずと存ずるに於ては、天下の人とともに其時を御待合可有之候、只何れの道にも金銀のことは、我国万代迄のために東照宮定置れし法のごとくになし返さるべき御本意に候間、天下の貴賤よろしく此旨を可存候由被仰出候者なり。

辰十一月十一日

249 ◆ 一 二十日申の刻御出棺にて候処、 天氣晴候て終日長閑に御座候、 供奉警衛の衆まで聊無滞増上寺へ被為入候、 路次万人愁涙にて、 御残り多奉存候体に御座候、 御出棺前二日より御出棺の日まで、 殿中夥敷金銀の花降り候て、 手にて受け候へば其の儘に消へ申候、 器物に受候へば小さき珠にかたまり申候、 小珠只今に致見在候、 かゝる奇瑞終に不承儀に御座候、 仏者信仰の衆は舍利降り申候、 或は雨珠とも申候、 かく可有儀に候へば諸人は不存候、 兎角難有御明主と奉存候、 九日夜より十日書まで、 御病氣危急の内少々御くつろぎ被成候へば、 其のまゝ急に御用の事被伝出候、 一事も御自分の御上の事は無之、 天下人民の事と、 末の事、 東照宮百年御法会の儀に御座候、 十日昼までにすぎと御正命を被絶候を御待被遊候由、 頃日も新井氏物語にて候、 十三日昼過ぎ新井氏御前へ被召出候由に御座候、

箇様の御臨終、古今人主には終に不承儀に御座候、金銀の花降り申候もことわりと奉存候  
(十月廿二日書壬辰)。

250◆一 九日夜被及御危急候て、夜中御老中方俄に登城に御座候、翌十日御三家御登城  
御対面被遊、御直に儲君へ重器御伝へ被遊候間、御後見の儀御頼被思召候段被仰出候処、  
尾張中納言殿御請、殊の外御尤成儀と相聞へ候、此儀は曾て無沙汰儀に御座候得ども、御  
三人は格別の儀に候間申進候、御請の趣は、人臣たるもの忠義を存知候と申儀は、よのつ  
ねの儀に御座候、御三家の儀は、箇様の時節の為に権現様御たてをき被遊候、被仰置にも  
及不申儀に御座候、御三家合体仕候て諸事申合、鍋松様へ御奉公可仕候、私身の上悪敷儀  
御座候はゞ、是に居破申候水戸殿、紀伊殿と被申合急度可被申聞候、若又紀伊殿など手前  
難心得儀も候はゞ、水戸殿など申合急度可申入候、兎角天下の御為よろしき様可申談候間、  
御心安く可被思召候由御請の以後、老中列座の方を御覽被成候て、此上は各心得大事と存  
候、各と申も皆当家御譜代の面々に候得ば、忠義を存知可申候段は、手前など助言に及不  
申儀おろかは無之筈に候、然ども諸事心得肝要に存候、只今御前にてかくのごとく申入候  
間、忘れ被中間敷候旨急度被仰候由、さすがの儀と承申人は感じ申儀に候、此儀は誰も不  
存ことに候間他意有間敷候。

251◆一 幼主様へ御伝被成候儀もとくより御思案有之たる儀に御座候、九月廿一二日時  
分の儀にて候、其時分は御不例軽き儀の様に有之、大方平生の通りに被成御座候へども、  
御自分はいか様御氣遣なる様にも被思召候、去ども又御本復被遊候儀も可有之とも被思召  
候、其時分筑州を御膝元へ被召寄候て仰候は、御氣分の儀、御医師中も指て重き様にも不  
申候、御自分も左様にも被思召候へども、何とやらん御心得難き処も有之候ゆへ、人の病  
氣と申すもの難計ものに候へば、はた／＼と仕たる儀も可有候間、御跡の儀、其方了簡御  
聞被遊度候、此儀御一人の御決断有之儀に候得ば、御相談被成儀にては無之候得ども、其  
方事は学者の儀、古今治乱も存知罷在候儀故、了簡御聞被成候得ば御安堵にも被思召候、  
先御正統の儀に候へば鍋松様へ御伝可被成候哉、是一ツ、但天下の安堵の為に候得ば、長  
君を得申度と可存候間、尾張殿へ御伝可被成候哉、是ニツ、但し御幼主御成長の内、御預  
被遊候て、御成長被遊候までは、尾張殿天下の政務を被執行候様に可被成哉、是三ツの内  
にてはいかゞ存候哉と被仰候、筑州其まゝおつ立て申上候は、天下のため大切に被思召候  
ゆへ、左様色々に御了簡被遊候にては、乍恐御尤に奉存候得共、何の御氣遣も無之儀に奉  
存候、古へは先君の子懐孕に候得ば、誕生の内委裘に朝すと申す事候て、平生召候裘を位  
にすへ置候ても天下を治め申候、況やはや四歳に御成被遊候、御正統の君有之上に、外に  
御伝へと申候はば、天下の人御て何角議可申候、扱甲府よりつき参り候面々合点仕間敷候、  
御他界の日にはやわれ可申候、まして尾張殿へ当分御渡しなど申儀候は、其内鍋松様少し  
御吐乳被成候ても、其度ごとに人心そはつき候て、二心出来候様に罷成候ては、却て危乱  
の端と奉存候、何の儀も無之候、幼主を御立被成、天下の重事は、御三家の方へ老中より  
相談候て、相決し申外は無之旨申上候得ば、申処一々尤に被思召候、鍋松様御四歳の儀に  
候へば、水の上の泡の様にも被思召候、自然不慮に御そだち不被成候ときは何と仕ると重  
て被仰候故、筑州被申候は、其時は尾州殿にて候、其為に権現様御三家立置れ候、御正統  
に御子無之ときは、尾張、尾張の家御子無之ときは紀州と、三家の次第を追て参り候事は、  
人誰か異談に及可申候哉、御先代の様に御連枝有之候処に、姫君御寵愛の余りに紀州へ御  
伝など申候ては、天下の乱れ申候得共、御筋目さへ不被違候ては、誰も違背は仕間敷候、  
其上に不存寄禍乱の発し申儀は兼て不存儀に候得共、其処は天命に御まかせ被成、御食着  
不被成筈に奉存候旨申上候得ば、成程御心得被遊候、此上は御幼主へ御伝の筈に御決定被  
遊候て、其余のことは夫より御もくろみ立被成候間、左様に心得可申旨御意にて、此儀は  
九月より極申儀に候、九月十日御危急の間、一事も御自分の私事に不被及、すきと天下人

民へ懸り申御政事の儀にて候、それより正寝にて被待御終命候、婦人を終に御近付不被遊候、十三日夜御絶命被遊候事、古今人主の終に箇様の儀未曾承儀と奉感候。

253◆一 当上様成程御機嫌よく、御生質も御丈夫の方に被為見候由、御目も成程よく御座候由に候、最前御目悪敷様に申候得ども、夫は当分の儀にて御平癒被遊候、比日も承り候へば、とかく御位に御備り被成御座候と相見へ、格別の儀と皆々奉感候、毎日老中御目見に被罷出候、御上段の上に御褥を敷、御傍に御腰物懸有之、御上段の際まで御もり衆御手を引て罷越候得ば、夫より御褥へ御上り被遊、御刀をば御刀懸に懸申候、御脇刺をば御側に指置候得ば、御自身に御取、御左りの脇に、仮に御挟み被成候て、一人〳〵御老中へ御逢被成、すきと御目見濟み候て座を起被申時分、ぢいと御呼被成候故、又立帰り候得ば、一人〳〵へ御側に御座候破(ハ)子(ゴ)などの様な物被下候、何れも落涙にて頂戴退出候由に候、御敷舞台の上へ御出被遊候て、ゑち〳〵と御呼被成候故に、間部殿被参候へば、と〴〵ぼん〳〵と御意の由、御と〴〵様此処にて御能被遊候との儀を、御かた言に被仰候儀を、何れも聞被申、此時は惣じて笑出され候体候に候、江戸中今以愁鬱の様子にて、随分静謐に御座候、比日も悪所へ参り候もの有之候得ば、悪所の亭主恥しめ候て、此節客など得候所存無之由申候て返し申候由、左様の所存のものも有之処に、夫にはぢき返され候ものも有之候、兎角人心不一事に奉存候、後々御国用もゆたかに相成候はゞ、聖廟を御建立可被遊との思召にて候由、大方境地も究り候やうに被申候、道灌塚か、小石川御殿辺杯よく可有之と新井氏被申候、扱崇廟御建立の御志も有之、是は紅葉山に被仰付筈に候、天子は七廟、諸侯は五廟の制に御したがひにて五廟に被遊、其外に東照宮の御廟は、百歳不遷の廟に被遊度との儀に候由に候、若左様の儀有之段々出来候はゞ、天下の人耳目を改め、儒教盛に可成と奉存候、申ても〳〵おしき儀と奉存候。

254◆一 唯今の御様子万端御老中方、間部越前殿、本多中務大輔股、摂政と相見へ申候、井伊掃部頭殿は、一おもて一「一本には一の字以下一等おもく」とあり」相見へ申候、御三家と御老中との間に、此人被立置て、「一本余の上に一段々次第を追て御政事等議定の御様子に候間部殿万端詳御功者候而」数字あり」余の老中方も、畢竟は間部殿の了簡の通りに帰し被申候由に候、先上様御遺言にも、越前守事は久々御身近く被召遣候ゆへ、御心入をも此もの能く存候間、御跡にて万事相談可仕言被仰置候由、さて間部殿は、筑後へ何事も相談可仕言被仰置候由に候、只氣遣に存候ことは賄賂の一事追付もとのごとく可成かと被存候、頃日はや間部殿へ音物差越候人有之候、定て残りの衆へも遣し申候哉と存候、残の衆は不存候、間部殿は返し被申候、脇を御聞合被成候べき哉と家来申候へば、手前事は脇は如何様にても候へ、受け申事は成不申候、聞合に及び不申旨にて被返候、上の御存生の内は、上を恐れ候て受不申候得ども、実は音物仕候をば悦彼申との料簡にて、頃日の御他界早々如斯に候、苦々敷風俗に罷成候、大久保加州より後藤四郎三郎末子への事、「此事当春の事歟京都に居宅を構申候」先日筑州見へ申候得ば、夫れはとくに此方知申儀に候、此儀に付間部殿相談にて、投鼠忌器と申事有之候、鼠へ投打申度候得共、秘蔵の道具に当り候はんかと氣遣候、後藤事は近衛太閤出頭人にて、太閤へ日頃馳走仕、江戸へ御下向の時分にも、道中にて殊の外馳走仕候由、然れば太閤より、御内意も候て、大久保も、京の所司も、斯様に後藤へ馳走仕候かと存候ゆへ、卒尔に御僉議候て、ゆるし難き儀も可有之哉の間、大久保へは間部殿より御尋御覽可被成候、その被仰様は、先年なたや十右衛門聖護院殿峯入の時分先達に罷越候さへ、町人の山伏の真似仕事、驕の所為に候とて急度罪科に被申付、況町人の武士の真似仕事至極法外の儀に候、後藤事比日沙汰承り候、若其通りに候へば不可然儀に候、御了簡可有之儀と存候ゆへ御尋申入候間、所司へは筑州より内処に尋に遣可申旨筑州被申候由、その段委細達御聴候処、なる程大久保へは間部より尋可申候、相尋候はゞ先可申候、箇様の儀尋常の役人などに有之候ては、急度被仰付候へども、



老中ども事は平生も天下の政事打わつて御相談も被成儀に候ゆへ、若又了簡も有之候ての儀に哉と御尋被成候由申候て、相尋可申旨被仰出候、大久保被申候は、扨々忝御儀に奉存候、私成程後藤四郎三郎へ扶持遣申候、何をかくし可申哉、先年富士焼の時分、小田原の砂何程のけ候ても埒明不申、人力大分入り申候、是を除け不申候ては城下も立不申候、其上に大地震にて城廓及大破修理可仕やうも無之、ひしと難儀仕候ところ、此者日頃念頃に仕候故、此度の儀に候間金子才覚可仕旨にて、過分の金子才覚くれ候て、それにて小田原城取立申候間、此恩を近頃過分に存候て報じ可申様無之候ゆへ、此礼に扶持方遣し可申と申候へば、私此通りにて御扶持方不被下候ても能御座候。左候は、末のせがれに被下候はゞ可忝旨申候ゆへ、此方はいづれに遣候ても同事、其方心次第と申候て、忝に遣し置申候、武士の真似仕候儀は曾て不存儀に候、只今存候へば、末のせがれに望申候は其心得にて申候哉と存候、此段同役中へ一往相談も不申候て、扶持遣し候はゞ、不念とかふ難申候、早速飛脚遣候て急度しからせ、扶持をも取放し可申旨に存候、扨紀伊守殿へは筑後より申遣に不及候、越前方より急度申遣候へ、何と仕たる儀にて後藤忝へ馬鎧音信仕候哉、可申上旨上意の由申参候、紀伊守殿返答少し難聞候、大久保加賀守より扶持遣候て武士に罷成候旨承り候ゆへ、馬鎧遣申との儀に候、先是にて所司よりもしめし、加賀守よりも中参候へば、後藤も右の仕形は仕間敷候、余り強僉議に及び申間敷候旨にて事済申候、何も角もすぎと上へ達候て、段々老中方も畏伏仕候体候、常は処女のごとく成程ゆるやかに静にて、御決断無之様に見へ、御思案決し申とずはりと致したる儀有之君にて御座候、龍の様なる御生質の由被申候、私の所見は、此の君も絶世の主、此人は絶出の身にて候、扨言聴かれ計用られ候儀は、古今に余り有之間敷候と存候、三代は差置き秦漢以後、斉の桓公の於管仲、燕の昭公の於楽毅、漢の昭烈の於諸葛亮晋符堅が於王猛、唐太宗の於魏徵、古今君臣の知遇と申候、新井氏の林、楽毅王猛に比すべし、然れども学術の正しき事は楽毅等は及ぶべき所にあらず、兼ては詩人にて詩文の材を好み被申候て、道学の志は有之間敷様に存候処、曾て左様にては無之候、対州の雨森東五郎を事の外称美、此人をも上に御在世にさへ候へば、選挙の筈に候由、残念の儀と被申候、梁田才右衛門事被申候て、役に立申ものにて無之由被申候故、詩は拔群の人に候処おしき儀と申候得ば、李白など詩を作り、韓退之ほど文を書き候ても、曾て珍重無之候、この方は箇様の者入不申候、天下の学風を愛し可申とて種子迄植置候処、まかずしてむなく致候こと、返す／＼残念に候由嘆息にて候、かく申候へば、自分の取成候様に候得ども、老夫など事被申上候て、御微辟も詩文の事は附たりにて、畢竟見処有之の儀と存候、梁田を捨て、雨森を取被申候にて相知申候、たゞ恨らくは、日外仮名書の書を寄せ申候通に候、「至公無我、舍己従人」の志は、いかゞ可有之候哉と存候、責備賢者にて候、近頃の人物と奉存候、既被召出候筈の処、御意被成候は、対馬守小身にて、只今朝鮮来聘の時分、両三人の内第一の者を此方へ取申候ては、殊の外難儀可仕候、今一兩年相立可被召出旨上意にて、延引の内今度の事出来、人の幸不幸如此の由、新井氏被申候、私申候は、左候へば拙者杯は先幸と申ものにて候、去共一分の仕合を申候はゞ、只今迄の列に替申儀も無之、御直に相成候儀重て望に可存儀にても無之候得共、上に御仁政段々盛りに相成、夫を間近く見聞仕候間、万分の一は其方の御用も勤候へば、是も大幸とも可申候処、此度の凶事にて、何も角も不足論候、只百二十里外に罷在草野の人を及御聞、遙に御微辟被成候事、是は相応の知己の主と可申候、此段は一生難忘奉存候由申候。

258 ◆ 一 此書状五枚、御三人様御覽候はゞ、早速火中被成可被下候、其外の衆へは学友中たり共、御無用奉存候、遠力の草紙にケ様の儀申遣候事、不慎の様にも候へども、御三人様の儀は面談にもケ様の儀早速御咄申儀に候へば、黙止がたく候て申進候。

258 ◆ 一 小笠原佐渡守殿事、新井氏殊の外誉被申候ゆへ、此人事兼て加州杯にても、御

老中第一の人の様に承り候故、御治世以後段々御寵任可被成と奉存候処に、存の外引籠被申候、尤この方より願の由には候得共、下にて沙汰仕候は、御上の御意に叶不申候故、身を引被申候と相見へ申候と、是如何の儀に候哉と尋候へば、曾て左様に無之候、先上様にも殊の外おしく被思召候歟、後々迄御懇意に御座候、此人西丸に被成御座候内より、真実被致御奉公候て、其時分は色々浮説共有之、浮説のみにもあらず、無三心許儀も少々有之候処、此人慥に候て柳沢方より少もおかし申儀杯不相成候、御代に相成候て、追付佐渡守殿願被申上、役儀達て御断にて候、此人朝夕武義を不忘人に候、然る所両眼ともに悪敷、かた／＼はすきと見へ不申候、今かた／＼も纒に見へ申体に候、大役被仰付置天下群臣の上に罷在申候処、両眼見へ不申候ては、万々一の変も有之候時分手にあひ申、おくれ候様に罷成候ては、天下の批判も有之、上の御為にも不可然候、無事を幸と致し候て変を慮り不申候はゞ、不覚悟者と申ものに候、それとも上の御身に氣遣成と奉存候儀も有之候はゞ、今暫此分にて可罷在候得ども、推参ながら只今最早天下も御手に入候て、少も氣遣に奉存儀無之候間御断申上候由被申立候ゆへ、其段被遊御聞成程申上候尤に思召候間、役儀は御免の由被仰出候、此度御出棺の日、子息山城守屋敷の前を御通被遊候時分、佐渡守俄に落髪、十徳にて路次まで只一人罷出候て、警固の奉行中へ使者を以、何とぞ法体名も付被申候はんか、俄成儀に候ゆへ誰の事に候哉知申間敷と被存候て、其儘小笠原佐渡守入道と名乗被申候、佐渡守入道申候は、私事御存知の者にて御座候、今日悴山城守屋敷前御遺骸御通被遊候に付、路次まで罷出度奉存候と御老中迄御断申入候処、如何様共可仕旨御ゆるし候間出度候、左様御心得可被下旨被申入候へば奉行中の姓名忘れ申候、流石の人と見へ返答の趣尤に聞へ申候、其返答の趣は、被仰聞段得其意御尤に御座候、思召の通り被成可然存候、然れども御存知の通り堅く警固仕候間、役人の外は一人も、他人はゆるし不申儀に候間、御老中は何れへ被仰入候哉、其儀承り置申度被申候へば、佐渡守殿より重て成程被入御念儀至極御尤に候、秋元但馬守殿へ申入候て、但馬守殿より右の通り被仰下候由被申候て、扱勿論一人供なしに佐渡守殿只一人、路次に平伏して殊勝の様子に御座候由新井氏物語にて候、法体は俗法に候へとも、上への志は此節是より外は無之と奉存候て、俄被致落髪候、被致法体候には尤成時節に候とて物語に候、新井氏も其日増上寺へ供奉にて候

260◆一 御遺書は先日進申候、比日新井氏もなに被成候哉、漢の文章に直し見申候へと被申、二通り調進申候、且又先達て評定所へ御出し被成候書付、並金銀の事被仰出候書付、定て可被成御覽と奉存候、評定所へ御出被成候書付、別て承事成儀と奉感候、語簡にして意至と申物に候、此度の御遺書は言簡にて義深と申物にて候、尤新井氏筆取にて可有と承候へども、上に御直に再三御吟味被成、思召を被仰候上にて相極り申様に兼て承り申候、文章は新井氏文章に候へども、趣向は皆上の思召にて、比日も間部殿と誰やらん、其の姓名は不承と被申候は、御遺書新井筑後書申には究り申候、御近習に筑後より外にケ様の事調申もの無之候、仮令少々学文仕候もの有之候ても、文章の体にて、少し目のあき申人は是は筑後守文章と存ずる筈に候へ共、其段は紛も無之事に候、去共右御遺書は、とくに御存寄被遊候て、思召を筑後守に被仰聞、其上にて再三御直に御改被成候て相極り申ものに御座候、其外に被仰出候物何も左様に候、然ば文章は新井調候ても、其趣向は不残上の思召にて候へば、筑後調申と人々申候ても、少も構無之事に存候、去共上より被仰出候儀を、我調申由人々へ申候筑後守にては無之候、夫は手前受合に立可申候、左様の儀軽々敷不申ものに候故、上も箇様の儀被仰付候と申候由、尤成返答と存候。

260◆一 評定所への書付に、早く仕廻申儀諸事に功参候て、はやく吟味埒明申候哉、若其理を尽し不申候て早々仕舞候はゞ、不可然儀に被思召候旨被仰出候、結構成被仰出にて迷惑成儀痛入申筈に候処、一円左様に無之候、とくに其事を仕廻、八ッ時分より暮迄は、

唯評定所に空く詰て居被申候由に候、上よりは暮過迄も懸り候て、公事の吟味委細にと被思召候ての儀に候処、口ふさげ迄に唯詰て居申候、是は筑後殿の御恩故、暮迄罷在候抔と悪口申候由、沙汰の限りと存候、其中に又御尤成被仰出にて、扱々迷惑仕と申衆も数輩有之由に候。

261◆一 加藤越中守殿事、若年寄すぐれて利発成人、その上御先代より久々若年寄にて諸事功者、似たる人も無之候、然る処に始終上にあひ不申候て、終に其身も鬱氣して致乱心死去にて候、散々しそこなひ被申候子細有之候、先上様西丸へ被為入候前日迄曾て沙汰も無之、御存知無之処に、前日の夜に入候て、甲府間部越前守殿へ、越中より肴一種と、文庫に入申もの一ツ封候て越被申候、披見候へば西ノ丸の絵図にて候、是は御覽被成置候て、御意得にも可罷成物に候間遣候由に候、其翌日俄に西丸へ御入の儀申来候、ケ様の儀殊の外不届に被思召候て御にくみ被成候、越中は第一の奉公と存候て仕たる事に候へども、御身の為にはよき様に候へども、大臣の体を失ひ、且又輕薄成仕形、此所存にて二心有之様にも被思召候と見へ申候、甲府の家老兩人、是は真実成儀も有之儀を慥に見届申候故、御治世以後筑後守申上候は、只々甲府より被召遣候を以、すきと御取立不被成候て、何も御本家の臣を其まゝ被召遣候事、結構成思召と乍憚奉感候、左様にても無之儀に候、右兩人のもの抔は、材は無之候得ども真実成心は見届申候間、此者とも御本家の老中抔へ御任せ被成候て被召遣候はゞ、老中も氣遣成処にて行状も嗜可申候、ケ様の処に御手当可有儀に奉存候由申上候へ共、上意には、成程尤に候へども右兩人の者共御見限り被遊候、此兩人の者共常憲院様御厚恩の者共に候、然るに此者共やゝもすれば御先代の御事を識り申候、是は此方を褒可申為に申儀に候得共、本意を忘れ申者に候、土は恩を忘れず、時世にへつらはず、始終かわり不申こそ本意にて候へ、ケ様の者一向頼母救敷不被思召候由被仰候故、新井氏もとかうの儀に不及閉口して退被申候由に候、少も諂ひ申事御嫌に御座候、其処明らかに候故其儘御覽被成候、おそろしき事にて候由被申候、是等は中華などにて、余程の君も及不申儀に候、我為に忠節の者と計存候て迷ひ申事古今の通患、夫故小人其機を見候て、夫より先上様の様に候はゞ其氣遣は無之候、御生質一筋に明らか成儀と奉存候、(以上十条 十一月七日書壬辰)

262◆一 文昭院様御諡号文字、つゝきはとくと合点不仕候得共、御徳義相応の事と奉存候、定て詩魯頌泮水の篇、「允文允武、昭仮烈祖」と申文を切申と奉存候、日本の称号は、文字の順逆を不辨候て、経書の文字を切候て用る事を好候ゆへ、文字つゞき多くは逆にて候、是等も漢人などは昭文皇帝など可仕候、嚴有院様なども有敵の筈に候、正徳の年号、不吉の例、唐日本の事跡相考朱引迄仕、林大学頭或御老中へ持参、此年号究り申時分より存寄罷在候得ども、御前代はケ様の儀御相談も無之ゆへ、不申上候由演述の処、御老中方は左様のこと不案内に候ゆへ、何も御詮議にて尤相極たる儀ながら、左様に古今不吉の例に候へば、畢竟国家の御祈にも候間、京都へ御断申上相改候様可仕など申儀に候、新井氏へ如何と尋被申候御方有之候処、筑州一円合点不参儀に候、是も古今の例事跡など相考被出候由、所詮是は古今の例不吉の証拠考申候、指当候て手近く申候はゞ、年号は年の名にて候、月積んで年に罷成候へば、年月は同事に候、正の字不吉に成候はゞ、一年の初の月を正月と申候て別して祝し申候、一年の初月を正月と申候事不吉に当たり申儀に候へば、十二月ともに皆悪月と可申候哉、是にて相知たる儀の由被申候旨、林家新敷儀を申出し何廉僉議に及び申候、正の字は、一に止まると書申候、不吉の事、南北朝やらん人の名の事に有之かと覺へ申候、それより又大学頭も被申出たる事にて可有之候、御代替りに候ゆへケ様の事考出候て、翰林の文柄を再び握り申度との儀と見へ、嘲笑申候。

263◆一 新井氏被申候は、先年甲府にて初て侍講の時分、何にても御聞可被成の旨被仰出候に付、申上候は、当分の御慰に御聞被成候哉、但始終経書の義理をも御聞可被成との

儀に候哉、此儀承り候て此方心得有之儀の由被申上候得ば、曾て一旦の儀にて無之候、始終御聞可被成思召の由被仰出候、左候はゞ先詩経を講じ申度旨申上、初講に詩を講じ申候、講過候て御咄に罷出、新井申上候は、三代の時は上に風化盛に候ゆへ、上の風下に移り申候、後世は上にて風化無之故、下の風段々上へ移り申候、只今江戸杯の風を見申候に、若き者とも髪の様、衣服の様、すきと堺町の野郎を似せ申候、女中の風は、委く吉原の傾城の風を似せ申候、ケ様の下のいやしき不正の風にて浸淫仕候処を、上より正しく被成候こと、中々可成儀とは見へ不申候処、文王の化闈門より段々外へ及候て、江漢の間迄化し申との儀、扱々聖徳の盛なる事と奉存候、唯今風俗を正敷仕候はゞ、先淫風を抑申こと第一と奉存候、其子細は唯今堺町へ罷越見物仕者ども、哀れ成事仕形に仕候を見候ては、偽と知なからあき男も涙を流申候、七情は一つに候ゆへ、あはれ成事計ケ様に感じ申にては有之間敷、淫乱の仕形を見候ては、定て胴へ涙落可申奉存候、是程に不正の儀をしみ付申様に致し候ては、如何様に正しき事を申聞為致合点候ても受不申筈に候、これに付候て聖人札樂の教御尤至極成事と奉存候、樂にて正しき事を歌ひ舞つゝ、只々淫乱の事を堺町にて仕様に人心にしみつかせ候ゆへ、風俗一たび改り候ては、不正の方へ参る儀にては無之候、只今樂の教の廃れ候儀残念至極成事と申上候へば、御うなづき被成候て尤成事其の由上意の旨物語に御座候、是は上の御好被成候処を此人見候て、ケ様に諷諫の様に聞申候、さりとは丈夫と感申儀に候、此御好み後までもすきと御除は不被成と相聞申候へども、勝れて正直にすなほ成御生質に候故、一両年は此処を随分御矯揉被成候様に及承申候。

264◆一 服式の儀被仰聞候、其初私も常服にて罷在候儀安堵不仕候て、總麻の服申付候半と存候得共、篤と思案仕候得ば、五服の私親とは品替申儀に候、是は天下へかゝり申儀に候、況御宗室を初服無之候処、私共御為に麻を着申事、僭礼と被存候て止り候、弥思案仕候処は只今不成儀に候、漢土にては短喪の以後に、国恤の時是有司服制を議じ候て、官の貴賤によつて違ひ申と見へ申候、夫共に初喪の時、葬送の時杯迄と見へ申候、三代の時分斬衰三年と申も、定て大臣貴戚の類にて可有之候、群臣一統に斬衰三年と申儀にては決て有之間敷と存候、とかく是は當時の制次第に御座候、制に無之儀を私に服可仕儀とは存ぜず候、夫を五服の私親と同事の心得にて、自分の服を着申事可為非礼候、今度増上寺参詣御位牌拜礼仕候節、一統に熨斗目長上下にて候、御位牌へはケ様に仕候て、私家にて麻を着申事不埒成事にも御座候、酒肉の事は只々諸大名衆、簾本家、五十日は素食と相見へ申候、至極疎賤の臣、去年初て被召出候儀に候へば、至極軽き方に御座候、夫共厚き方に隨て五十日素食可仕心得に候。

265◆一 先頃国恤の初、金銀の天花降申儀、奥村氏、青地氏、長公より被仰越候、御同意の見込に候、惣じて貴人は物精を用申事左伝伯有が処に見へ申候、是等子産が博物と申者と奉存候、譬ば衣服、飲食、居所杯を先として、天下万物の精華を御用被成候上、群臣賢愚を不択、対御前候時の至極の敬心に相成候て、自然と誠一の誠に罷成候へば、衆の精華鐘まり候処より平生此養有之、上に無類の御生質にて被成御座候、華奢に御流可被遊候とは不奉存候、毫髪も鄙吝の御氣象は無之、至極清徹成御氣質に、右の天下の物精合候て、此度此気散申候故此氣象を現し申候、古来高僧の内などに、臨終に異香薫じ花降申事杯申候、是れも物精は不用候得共、平生俗塵に不接、事物を放下仕候て、皮骨至極清徹に候故、其気散じ申時は香花の異も不図有之候、去共毎度有事にては無之、其時節不図天氣に感じ申処有之候て如此候へば、必然と申儀にては無之候、其感じ申処は何とも難計儀に候得ども、道理はケ様に候、当年は愆陽有之候て、冬に至り候てもひたもの電光見へ申候、然ば陽氣の軽浮に不図感じ候て如斯候も不存候、愚見はケ様に候、総て天に在て気をなし、地に在て形をなし申理に候へば、地に落候ては珠に成申筈に候、然ば祥瑞にても、怪異にても無之、此理有之候、其内あやしき方にては無之事と存候。

266◆一 新井氏被申談候儀は、爰に一つ建議の事出来候、某は此儀の相手に候得ば、何としても不幸の気味有之候、其方平心にて承り候てくれ候へと某申建候処、不入ものとも存候はゞ差止申候、此等の儀相談仕候者、其方外には一人も無之候に付申遣候、昨日御目付長崎半左衛門被参候て、御中陰も追付相済可申候、夫に付日光御名代、又は勢へ奉幣使など、御例の通たるべき由此間朝議に候、何れ先にて可有之哉と被申候に付、是は不存寄儀と存候故、間部殿へ申入候は、五十日御過候はゞ、追付御吉例共段々可被取行由朝儀の旨承り候、是は如何の儀に候哉、御先代より国喪の節御服一年の間は、神社等御遠慮の儀に候処、此の度に限り左様の儀は心得難く奉存候旨申候処、間部殿にも驚き被申よき時分に知らせ被申候、此の度林大学頭申立候て、元禄年中常憲院様某へ被仰付段々御詮議の上、服忌令被相定候て、七歳未満の小兒は相互に服なく候、然らば当上様御服は無之候間、諸事不及御遠慮の旨申に付、御老中方いづれも尤の旨にて夫に罷成候、とかく大学頭を為致合点不申候ては難成候由にて、大学頭呼寄被申候、元禄年中服忌令に、七歳未満の人無服と申儀は何に依て相定被申候哉、古来倭漢の服制に、七歳未満の人死去の時は、父兄親族其為に無服に依て、無服之殤と申儀は有之候得ども、七歳未満の人其父母等の為めに無服と申儀は相見へ不申候、此儀承り度旨間部殿被申聞候得は、大学頭以の外気色損候て、左様の儀は誰被申儀に候哉、儀礼家礼を初、歴代の服制に於て、七歳未満の人、父母之為に無服の事明白成儀に候、それ故常憲院様御定置被成候処に、只今左様の説申建候て、常憲院様御制作の令を敗申儀、以の外成御事の由申候、依て新井氏其段被申聞候に、新井氏礼経の趣き大略書出し、七歳未満の児も父母の為に斬衰三年、殊に当室の人は、其外の族人の為に、總麻三月の服も、長者に替申儀無之旨に候、其上御幼稚とて上にも御服無之、且つ又元禄令に臣為君服制も定め置れず候へば、群臣も無服に候、纔かに文昭院様の御為に服を被受候は、天英院様並松平兵部大輔殿御父子計に候、御先代に限り斯様の儀余り無御勿体事に奉存候、元禄の例を御破り被成候との事、批判も可有之候へ共、七歳未満の人其父母のために服あるべし哉否と申迄の儀に候、外の服忌に妨げ申儀も無之候、是れも服は不被受儀に候得共、あなた的心喪と申儀の様に、御代々国喪の時の如く、責て服の日数の内、吉礼御遠慮も有之候はゞ可然奉存候旨可申建所存に候、但いかゞ存候哉、是れは仮初の儀ながら、風教へもかゝり候て、ケ様の処に心を付申度ものに候由被申候故、私申候は、成程至極と奉存候、近世武家の服忌と申もの、衰麻をば服不仕候て常の吉服にて罷在ながら、神社等への遠慮を仕候様成るを服と意得罷在、名実の乱れ申儀不過之候、ケ様の儀も段々朝議に洩れ申間敷候間、以後は古に復可申と頼母敷奉存候処、此の度不慮の国恤にて、何事も空敷罷成候事残念に奉存候、せめて神社等へ御祭事杯を御遠慮と申にて、国喪の印も有之候得ば、夫を惜まれ申事、孔子気羊に礼を愛むと被仰の遺意にて御座候、左様の処御争論無之候ては、天下後世の人其元を罪し可申候、毀譽得喪は御心に被懸間敷候、急度被仰建様にと申候へば、新井氏も思案決し候て、右の趣一々書付出し被申候、後日承候へば、其書付を間部殿被致懐中候て、先何となく諸老中方の心底を尋被申候処、先入の者為主候て、何とも難転の勢に候故、右の書き付出し申候老中合点有まじく候、然ば新井氏の議、初て諸老と遇不申の端を開候て以後の害に可相成候、其上新井氏も是程に被申建候処、林氏の議の通に罷成候ては、不快可被存と被致思案又何卒可仕様も可有之と、料簡の上黙てやみ被申、右の書き付を天英院様へ上被申新井氏所存の通り委細被申上候処、天英院様並御実母様御両人の御願にて、服忌の御定は如何様にも候へ、只今急に御吉礼被取行御遠慮なきと申儀は、余り冥加恐敷儀に候間、此節御心喪の例に被遊度の旨老中方へ被仰入候故、此上はともかくも御尤に奉存候由にて、日光御名代なども止申候、此間鳴物御免の触有之候、然る処に所作に仕候者は御免の由に御座候、終に無之事に御座候、然らば慰に鳴物被行候事は、いまだ遠慮と聞へ申候、是はいつ迄と申候へば、定て来正月御謡初

までの儀と被存候由新井氏被申候、畢竟不都合成事ども不埒に候へども、先是程にかゝ置候事も新井氏並間部殿の力にて御座候、右の通に罷成候後に大学頭殊の外憤り候て、七歳未滿の人は、父母に無服こと周礼の礼にて候処、只今御遠慮などと申儀周礼の道に背き、且は天下の御大法を御敗り被成候事とて、重て五ヶ條の書付を出し申候、それを間部殿又新井氏へ為見被申候故、只今迄色々心を尽し申事も、人倫綱常の敗不申様にとの儀に候処、左様の儀を申候事風教の害に罷成のみならず、聖人を不忠不孝の嚆矢に仕ると申ものにて、御座候、是は本朝天下後世の患を残し申候間、急度此方より御聞届被成可然奉存候由にて、三礼初め一々書出し候て此返答急度可仕旨、大巻を調べ間部殿迄遣し被申候、大学頭へ見せ被申候哉、如何返答に候哉、其後の儀は不承候、委細明白成事に候、大学頭是にて何とも返答成中間敷と奉存候、洛蜀党の戒あるべき儀に候由、此上にも新井氏へ申儀に御座候、新井氏不入事被申候由、懇意の中よりも申もの有之候、私儀は尤と奉存候、不得止ことに御座候、此事の前に、正徳の年号不吉に候とて大学頭老中方へ申立候へども、これも新井氏弁正にて早速老中方も心服有之、事止申候、其書付も写置申候、聞事成事に御座候、是に心喪と申儀も不都合に候、酒肉は五十日以後上下一統に給候ては心喪の詮も無之候て、重て右の服忌の儀申出候と相見へ申候、御老中方御不学にて気の毒に奉存候、新井氏も是程迄には被致候へ共、何共志達し難き勢に相見へ申候、然らば只今間部殿相談相手にて、間部殿たより言をも納れ申様に罷成候ては、王叔文と申党の類にても可相成哉、勿論間部殿叔文にては無之候へども、上に新井氏を被用主無之ゆへ、間部殿の党の様に成候ては快からぬ事に候間、進退出処の事とくと料簡仕候て呉候へ、ケ様の処人の大節目に候間、苟且に不可存儀と先夜も被申候、只今まで勢を聞見仕候に、新井氏被申処も有之候、私申候は、御自分事文昭院様御寵任の儀に候へば、此御恩愛重き儀に奉存候、この御恩を被報事、只今は当上様へ御奉公被成、諸事心を尽され候外は無之候、此処重き儀に候、其上唯今何も身を引退かるべき事も見へ不申候、今少し御見合候て尤に存候、易は変易也、随時変易にて候得ば、明日の事は知不申候、今日迄は御辱しめと存事は無之候、少にても辱しめと存候こと候はゞ可申入候。尤御自分にもそこは御油断はあるまじく候、難進易退は君子の節にて候、吾党の学彼林家とは似申まじく候、可退の時至候はゞ、見幾而作、不俟終日の御心得御尤の由入置候、此人ケ様に致し居被申候内は未頼母敷奉存候、明日にも引退候得ば最早是までと奉存候、これは文昭院様御任用たらぬゆへに御座候、先夜も申候、古の聖人殷湯、周武の伊尹、太公望を被用候は、天禄を共にし天位を共にして人の上に立置れ候、さなく候へば天下の人服し不申候、本多中務殿を相役に被差置、此人を間部殿と同役に被仰付置候て、大禄をも被仰付候へば、此節御老中方も諸事相談にも有之筈に御座候、勿論此人伊尹、太公望にては、無之候得共、夫は上も殷湯、文武にても無之候、とかく賢人をば大に被用時は、権威を与へられず候ては用に立不申、此段新井氏に先夜申入候へば笑て居被申候、大方明哲保身の謀可有之体に御座候、尤に存候、うかゞと油断して禍にあひ申事は智者の所不為に候。

251◆一 新井氏被申候は、前朝御厚恩の人間部殿始め有之候へども、某を第一と可仕候、先日も御近習の衆と出合候て、互に悲嘆の上、右の通申候へば、其人被申候は、其方は材芸有之候て御用に被立候得ば、御恩と申ながら故有之候、手前共御恩派と申者に候由被申候故、某申候は、左様に無之候、毎度御顔色を犯し候て御氣にあたり申儀を申上候処、始終御懇意被召仕候事、無類の御恩と申ものに御座候、其人申候は、元曲選の時などは如何様あぶなき儀に候処、不相替御懇意、其の後は結句前より倍し申候、とかく御自分の事は炙と被思召候と奉存候、あつく候ていやなものに被思召候へども、御身の益に成申候をよく御存被成候ゆへ、御捨不被成候由被申候て、元曲選とは何の儀候哉相尋候へば、元朝の歌曲を書き申書と見へ申候、何卒其儀に付被申上候哉、其処をば委く承不申候、畢竟御

能を御自身に被遊候事御似合不被成御儀に候、古来五代唐の莊宗、喪天下杯の事、御戒可被遊儀に候、夫故唐も亡申儀に候、西丸に被成御座候内は御慰に被遊候ても、最早天下の主に御成被成候て、能杯御自身被遊候事、天下後世の議如何可有之候哉と被申上候得ば、余程御気色損候て其砌は不首尾の様に候得共、追付此事尤に被思召候由にて弥御懇意に被遊候由、其後又御庭すき被成候事御諫申上候へば、是も御気色に少し中り候へ共、追付尤至極に被思召候由上意にて候、御すき被成候事故透と御止被成候事は無之候へ共、其以後は御扣へ被成候て間遠に罷成申候、箇様の事にて新井氏事御究屈にも被思召候得共、始終御任用被成御懇意にて候由難有御儀に御座候、夫故只今に至候て衆心の感服仕候事、兎角誠の不可掬故と奉存候。

272◆一 御葬以前に増上寺祐天和尚、駕籠にて御城御玄関迄御免被成候様に願申候、前には上野御門主同事に増上寺僧正も御玄関迄乗物御免に候処、常憲院様御時より増上寺は不罷成候、此度御葬儀増上寺にて取行候に付右の願申立候此儀、間部殿新井氏へ相談候処、新井氏被申候は、成程前々は増上寺申通に候、今度御遣駭此寺へ御越被遊候儀に候得ば、台徳院様御代の通に被仰付候ても可然儀に候得共常憲院様上意にて御定置被成候事を、各御了簡を以御敗被成候儀は罷成間敷候、以後当上様御成長被成御聞届被成、乗物御免被成候は各別にて候、然ば増上寺此度の処尤にも被思召候間、此願書をば御預置被成候、以後上様御成長被成候はゞ、定て増上寺も上野の格に可被仰付候、夫迄はこの書付御老中の方に御預置被成候、只今上は御幼稚に被成御座候処、常憲院様御定置被成候儀を、老中心得を以許し申儀は不罷成候由被仰遣可然旨被申候て、其通御老中も御同心にて返答に候処、御出棺以後増上寺の僧和尚初一ツに罷成、右の願御免不被成候はゞ、御法事勤申儀不罷成候旨申立候、御老中何も行当にて間部殿へ如何と相談候処、間部殿暫被致思案体にて被申候は、増上寺は、大猷院様以来既に御三代上野へ御越被遊候処を、先上様昔の由緒を被思召出た徳院様計此寺に被成御座候儀を御嘆き被成候て、御遺言にてこの度此寺へ御越被遊候儀に候へば、増上寺一派の者どもぐつとも不申筈に御座候、然る処斯様成申度儘成儀是非に不及候、此上は御法事御差止可被成候、法事と申儀何の益も無之儀に候へども、世法の事に候へば其通に御座候、法事罷ならず候由申候はゞ、少も構無之候間、御指止可被成候、扱御棺の事は、此方より急度番人を大勢付置候て、御葬理の時分迄相待可申候、然上は御詮議を被遂、祐天和尚右の通申儀に候はゞ、和尚を遠島可被仰付候、祐天は左様に被申間敷候、役者共申出したる儀と存候間、首魁の者五人も六人も曲事に被仰付、其上にても衆徒たてあひ申儀に候はゞ、早速増上寺ふみつぶし可申候、此節諸大名申度儘申候ても踏つぶし可申候、若諸大名箇様の事申候て、ふみつぶし申儀に候はゞ、騒動にも及び気の毒に候はん、幸増上寺の事に候へば、是にて御代始御威勢もふるひ候て一段の儀と奉存候旨、間部殿急度被申候、御老中もとかうの異議無之候に付、僧徒共是を承り候て、御法事可相勤旨御詫言申候て事済申候、此儀新井氏被申候故、私事不覚落涙に及申候、間部殿是程に可有之とは不存候、是と申候も文昭院様御手柄に奉存候、只今の棟梁の臣と申者は此人と奉存候、夫程に決断有之人は難得御事奉存候、仰ぎ願ふ所は間部殿御息才にて、末長く当上様を御保護被成候様にと祝願にたへず候、秋元殿智深く其上廉潔成御様子と申候、新井氏も此人にて考申由被申候、文昭院様御時代より間部殿とあい口にて、今以其通に御座候、何事も間部殿と御相談と見へ申候。

此末岩田彦作福吉禍悪の説、此儀は密事にあらず候に付、別紙に秋元殿通鑑綱目被聞候事有之、しるし置候間こゝに省略す。

274◆一 此五枚御一覽の後、又火中可被仰付候書と申ものは、以後落散候て洩申儀も有之候故申上候、其上御他見御無用と申進候事は、若き衆余り箇様の事に感心なき方には、為申聞候も無詮事とも奉存候故に御座候、去共小寺武兵衛殿杯は各別に候間、被仰伝候て



悦ばせ申度候、以上(以上四條二月二十三日書壬辰)

尚以新井筑州事江戸にて何とかあしく申なし候、この度の事に付林家の者ども、別てわる口申候、大学頭此間年号杯の事方々にふれ廻り、宰相様杯にも申越様子に候、十分理屈に候処、新井氏意地あしく候て、間部殿へ申候ておさへ申杯申候、安芸守様杯へも大学頭切に罷越候て講談杯致し候由、小谷氏もの語にて候、この節きつて出候て御老中方に用られ、再び文柄を取申度所存と相見へ申候、老姦至極にて候、只可惜事は新井筑州と申もの近世絶出の材にて候処、最早是迄にて一生捨られ候はん事残念の儀に奉存候、同上、此末大猷院様御時、日光御再興御宝塔の事に付、島田幽也名言の事有之、是又非穩密に候間別紙に記之、此事略す。

小谷勉善来書の内

275◆一 江戸にて下々沙汰仕候は、東照宮御誕生壬寅年、文昭院様御誕生壬寅年、慶長六丑年より御治世四年、宝永六丑年よ御治世四年、元和二辰年御遠逝、正徳二辰年御遠逝、箇様に東照宮御事蹟と符合仕候旨申候、白石被申候は、御治世四年と申儀合不申候、牽合附会の事に候由、将又当上様御吉相の事有之、目出度事の旨書付候て、殿中にて奇瑞の旨沙汰仕候処、白石被申候は、御四歳にて先君御遠行被遊候得ば、御不幸至極に候、何の奇瑞か可有之候哉、一大不幸しれ申候旨被申候、尤成被申様平生の氣象如斯候。

同

275◆一 月光院様は最前浅野内匠頭奥方に軽き奉公被成、御名は小つまとやらん呼申候、〔私云、宇治茶師家来の娘なり、〕内匠殿一卷以後暇出候て、其後御城へ御奉公に御出被成候、慥成一族無之に付、瑤泉院殿〔内匠頭御内室〕老女中の内おぼに罷成、その子は徒弟分に罷成富岡助右衛門と申、然る処当君御誕生以後左京殿と称し候、最早瑤泉院殿御懇意被成候故、御厚恩を被思召候哉、老女中迄披露状にて御念頭に候処、今般月光院様と被称候てより直状にても無之、老女中の奉書にて、瑤泉院殿にも御状等参り申候、歳暮御祝儀如例年安芸御前様へ御広敷御番頭西山太郎兵衛殿御使に被参候、天英院様よりも跡々の通御小人衆御文使にて、歳暮御拜領物等到来仕候、月光院様よりも初て歳暮御祝儀被進、御使は御用人坂部弥右衛門殿被参候、此弥右衛門殿何位の人にて何ほど可為御会釈候哉、宰相様へも被参候旨相聞候故、駒込まで奉得御内意候処、弥右衛門殿御広式御番頭より月光院様御用人へぬけ被申候、御使西山殿よりは品重く候得共、兎角西山殿同事に会釈可仕との御事にて、御門より御広式御門迄の飾桶、聞番の送迎、三汁八菜の御饗、時服一重の御進物杯に候、天英院様御使とは各別の違に候、御城女中衆へは老女中衆より以下段々、御表使衆と申まで被遣もの有之候、天英院様附人は老女中兩人迄へ、跡々より被遣もの有之候、然る処今年初て月光院様衆人へは、老女中三人表使三人へ被遣物有之様に申来候、如此嫡庶の分乱候ては、事の端にも可罷成哉と眉をひそめ候。

276◆一 林大学士より段々邪説申出候へ共、白石明辯にて埒明申候、又此比家継公の御名乗字継の字不宜候、継とは、次第を経候て順々に継の意にて無之候、継子継母なども、継ましき所を持来てつくを継と申候旨申出候、一向評判にも不及こと不足論存候、惣て林大学士不興成事どもに候、旧冬金子二千兩封して安芸守様儒者津村惣右衛門を使とし役人中まで被申越候は、この金子当分入用に無之由に付預申度候、百兩に付一兩づゝの利足被下候様仕度との頼にて預被申候ゆへ、御用に無之候得ども御心安御出入の儀故預置申候、依之御役人共未々迄、儒者はケ様に欲深き者に候哉と嘲申候、惣右衛門も近頃難儀成使仕候と口説く、無是非申入候由、此儀先生御聞被成、大学頭事は兎角可申様無之候、惣右衛門使仕候儀も心得難き由被仰候。

277◆一 当月十五日木下深見と新井氏宅にて宴会、夜半まで罷在候、主人例の快談にて御座候、御袴着の御用意に付、井伊掃部頭殿御加冠役故、御具足杯緘の儀御詮議と見へ、



絵図彩色にて新井氏へ相談に参り候体に見へ申候、それに付被申候は、無用の処に華麗を致し候事気の毒成儀に候、先日も御破魔弓など何の用にも立不申ものに飾りしたゝめ、箱等の結構可申様も無之候、敵有院様御時のはま弓を近頃迄所持致し火事に焼申候、秘蔵致し指置申候小弓に候へども、やくに立申様に本弓のごとく拵申候、夏冬くるふと申儀無之弓に候故、秘蔵致置候ツル其節迄は御はま弓迄用に立申様致し、正身に念を入候て、外の飾りは殊の外匳相に致したる物に候、只今とはうらはらの儀に候、先日保科肥後守殿より御用には立申間敷候得ども、故肥後守、敵有院様御時、御理髪相勤め申時分、小笠家原へ相尋記置申候古実の書にて候、御考合の為にも万一可罷成哉と被致献上、見申候処奉書の紙を折候て象牙にてすり、夫に書付申候はんぞう盤の御櫛箱入と申ものをば絵図いたし、是は美濃紙の打たるに調へ、右の奉書の上にそくい糊にておし申に付、しかみしは、だらけの物に候、夫をこよりにてとぢ申候物を肥後守より献し被申候、それを見候て間部殿へ申候、近頃殊勝成物に候、只今時分ケ様の物を献じ被申候はゞ、紙などを致吟味きれば表紙にて、裏は金の布目かすなごなどと申筈に候処、ケ様のしはより申物を其儘に献被申候事、流石保科家の古風なる故と存候て感にたへず候由申候得ば、間部殿も成程左様にて候と被申候、其に付私申候は、文昭院様御代御政務の儀ども御詮議も有之候へども、此華侈の事には御沙汰不承候、如何様の儀にて候哉、貴賤の節と申処に御なづみ被遊、節に不及は礼にあらずとの思召より、此処に御氣付不被遊と奉存候、近年天下の困窮此時に候へば、節を抜群御落し被遊候て、儉約に被成候て時中と申物に御座候、況各別過て華侈に天下一統流れ申事は相知れ申儀に候へば、第一に此処を御改不被成候ては、天下困窮救ひ可申様無之、天下の困窮弥増に罷成候ては太平も続き不申候、只今御老中などいかに被存候哉、御長久の基を立被申候処、只今御老中昼夜の可為御思慮儀に御座候、新井氏被申候は、唯今時分左様の儀僉議なる物にて無之候、私いまだ時務を合点不仕候ゆへ、左様の儀杯は何角申候、只今指当申事務どもにて外の事へは手及び不申候、間部殿日夜御幼主様の抱扶にて、出仕の時分も色々被申上御出被成候様にと致し、又はお袴を召させ申候、夫に何の御儀式の、何の御祝儀のと申に付候ても、御幼主様の御儀に候故、此御介抱寸暇も有之者にて無之由被申候、成程夫は左様にて可有之候、左様の処急務に候へば、それに不被尽心力候ては、差当り申儀共滞申事共出来候筈に候へば、御尤に奉存候、乍去間部殿の御儀は、昼夜御介抱に御かゝり被成、他事に御暇なき筈に候、その外御老中方はいかに御心得被成候哉と申候得共、是も同事にて唯目前の政事に日を被送候、其比無懈怠勤方被致候由被申候、木下氏傍より、一通りの理窟にては不参事に候、只今御老中方毎夜の宿番つとめ、昼夜在城被成候、下にて何角と存候はおろかの儀の由被申候ゆへ、私申候は、夫は筋力の勞にて大臣の非本意候、簿書期会を第一に被成候こと難心得儀に乍憚奉存候、勿論只今の砌にて候得ば、毎日御在城毎夜御宿番被成候事も尤至極には候へ共、それを以て責を塞き可申候哉、私は難心得の由申候得ば、新井氏被申候は、人情を不知しては支申候、指当目出度の、太平のと申候得ば、一統に悦申候、夫に華奢に候間困窮の本に候杯申儀、只今時分御老中方取揚被申候儀にて無之候、是れ人情にて候、唯今病人に向ひ候て顔色能見へ申候、段々本復杯と申事定りたる事にて候、病人も悦申候、それへ氣遣成様子に候間養生第一に候などと申事、病人承候ても機嫌悪敷候、今はかうしたる儀にて候、是も人情にて候得ば指とめ申儀は不相成候由被申候、私も人情をはかり不申にては無之候、かく申候私もその通に候得ども、当分は不快にても退て思案致し候得ば、有様を申ものは難捨存候、只今御老中方一旦は御氣に入不申候ても、社稷の遠慮を申ものをば立退るは尤と被存まじく候哉、然らば折節氣を付申候様に仕度ものと申候得ば、新井氏被申候は、跡にて直言申ものを尤と思返し候事は学力なくては不罷成候、不学の人は死申候迄も、追付快氣と申候得ば悦候て、不致合点候と被申候故、夫なれば最早可申様も無之、頼なく候由申候てやみ申候、新井氏

被申候は、何を申候ても老中不学ものに候故申甲斐も無之、むかひに相手無之候ゆへ共に談申儀不罷成候、用被申の、又は用不被申のと申まで不及不申候、夫に付ても気味よき御人は文昭院様にて御座候、経史御歴覽被成、古今の事を御存知被成候故、此方より申上候事その儘御合点被成候事比類も無之儀にて、或時も申上候は、金銀を御費被成、結構成儀を以御威光を可被成と被思召候はゞ、乍恐御比興と奉存候、金銀づくの儀に候はゞ、只今富商大賈も御前にまけ申ものにては無之候由申候へば、御笑被成候て尤と御意被成候、斯様の君に逢候て一言にても被用候こと、今に至ては責ての思ひ出と存罷在候の由被申候、是を承り候て私は致落涙候て、御自分には左様にも思召間敷候得共、脇よりは残念成事にて候由申候、此外新井氏と色々致僉議候事有之候得ども、大方は此様成義に候、委くは筆紙に申難く候、新井氏氣くせにて、心に尤と存候ても先は人の申儀をおさへ候て争被申候、是は尤と早速申候へば其分にて止候ゆへ、わざと打もぎ候て人におもはくいはせ可申との儀と見へ申候、是程の儀にても新井氏と争ひ申もの無之候、残の衆何れも聞て居被申候。

280◆一 権現様御誕生壬寅歲、文昭院様御誕生寅歲、慶長六年丑年より御治世四年、宝永六年丑年より御治世四年、御他界元和二年辰年、御他界正徳二年辰年、御導師觀智國師七十六歳、御導師祐天和尚七十六歳、此頃江戸に申慣事に候、新井氏被申候は、権現様御在位四年と申儀合不申候、是は関東より駿府へ御隠居まで丸年四年かと覺へ申候、それに付候て牽合したる儀と存候由被申候、当十一日夜山本源右衛門夢を見候て、夜中歌よみ被申候、夢中に私申候は、寄松祝と申題にて歌よめと申候へば、今一人脇より権現様遠州浜松城に被成御座、夫より御繁昌被遊候故、今に至て浜松の音はさんざといはひ申候間、浜松の音と申事を歌によみ入候へと申候、其歌に

君が代は千さとのほまの浜松の 音なきなみに立かすみ哉

此懷紙を早朝調候て私方へ源右より越被申候て、米津清右衛門の妻夢に歌を見候、夫より権現様御繁榮の例を被申、上様御長久無疑候旨被申越候故、右の物語を申候て歌をも為見候へば、写置被申候、其夜の前夜御勘定衆の内にも常に連歌杯曾て不存人に候処、夢中に発句を見申者有之候、発句は

若みとり、ゝゝゝゝ、日のはしめ

中は忘れ申候由被申候、源右と兩人にて候由被申笑被申候、扱被申候は、此外にも上様の御儀に付奇瑞の儀六七事書出し、此日御城にて取はやし候ゆへ、某申候は、御四歳にて御親様に御離れ被成候御不仕合一つにて、最早祝申儀も入不申候、此御大不幸の上は何をか可申候哉、一向に不用の事と申候由被申候、只今時分の人いはぬ儀に候、尤至極成事と存感入候、又被申候は、其節目出度の、泰平のと申儀申慣候は、油断の基にて却て不吉の左右と存候、只大事の時節危き儀と申程は能御座候由被申候、流石と存候て今更感入候。

281◆一 大久保加賀守殿氣分滯食胸につかへ候て、難儀の由沙汰に候、是は存亡無構人にて候由白石被申候故、私申候は、人は同様に候得共、其人となりには軽重大に違ひ申儀と存候、只今時分秋元殿など左様に承候はゞ、私共迄無心元可存と申候へば、夫は勿論の儀に候、秋元殿は只今大事の人と被申候、水野将監殿いかゞと申候へば、先祖よりの氣象有之人にて候、自分の才にはこり不被申様に仕度候、少輕易にて氣の毒に候、比日も五十一歳に成人養子願の事被申候へばことの外叱り被申候て、其年齢まで養子不被願事不覚悟の至と被申候、其人去年一子病死故、今度願被申候由、左候へば只今まで願不申筈に候、監物殿手持ぶさたに有之候、箇様の事疎略なる儀に候、先如何の様子にて只今迄願不申候哉と尋被申候て、其後延引の子細有之候はゞ、咎被申筈に候処、頭より疎忽に被申事似合不申儀に候、此間も去る人に監物殿問ひ被申候は、御仕置段々押返し候て改り申様に仕候処に、不慮の御他界残念至極に候、されども末頼母敷存候へば、何卒可仕様も有まじき物にて無之と被申候、監物殿ヶ様に被申候へば、頼母敷候とて其人語り被申候由、箇様の事

殊の外あしき事にて候、やはか監物殿は左様に被申間敷候、最負の衆似たる事を左様に被申にて可有之候得ば、是は最負のころばかしと申物にて監物殿為にもあしく候、文昭院様御遺書にも党をたて申ことを御戒め被成置候、監物殿一人にて天下の御仕置改り申ものにては無之候、それを一人の材力にて改申様に被申候ては、その外の衆不快の筈にて候、左様の事を最負だてに申はやらせ候事大に害に罷成事と存候、ケ様の沙汰の有之事も、其身材にほこり被申故と存候由新井氏被申候、是も尤もと存候。

283◆一 其後雑談に罷成候、安藤右京進殿俳諧をよく被致候由、当年の発句に

日の春や周公旦のせなかり

是は、霍光に武帝より成王を周公旦に背負せられしところを画て賜り、その後武帝崩御の時分、昭帝幼主にて霍光受遣詔輔幼主候時節、右の画の事を武帝被仰出候由、漢書に見へ申候、右京殿これより被申と見へ申候、おもしろく奉存候、新井氏も若き時分俳諧を好み、随分よく被致候て、桃青杯とせり合被申候由、桃青も歌人にて、李白を字び候て桃青とつけ申候由に御座候、只今世に板行の内に新井氏の句多出申由にて候、かくし名桐陰と申候、桐陰と有之は新井氏にて候由被申候、或時孟子の出幽谷遷喬木の章をよみ候て、たちまちに前非を悔申候て、夫より俳諧をやめ申候、学者は詩文など工夫仕候筈に候処、夫に俳諧好み候ては下喬木入幽谷と申ものにて候、近比梁田才右衛門あれほどの詩才にて俳諧すべき仕旨承候て、此者は下喬木入幽谷と存候、果して此程逐電致し候由申候、新井氏むかしの俳諧覚へ被申句有之候はゞ、承度と申候得ば、白炭の発句に  
白炭やあさ霜きえて馬のほね

又玉子の発句に

ゆで玉子糸てひもとく水仙花

此句など人々ほめ申候、或人見物場へ参候て下緒をぬすまれ候ものに、下緒贈り申候て狂歌よみ遣申候。

もらはるゝ身をはおもはずぬすまれし 人の下緒のおしくも有かな

ケ様の儀どん／＼と咄候て被致大笑候、傍に人なき様に見へ申候、この人の気象に似申ものも無之候、此気象にて学に入被申候事得がたきものと存候、但気象の弊は今に有之様に奉存候（以上四条 正徳三年癸巳正月廿三日書、）

此処坂井氏へそと可被仰候、俳諧狂歌を好み被申人にて候、唯今新井氏詩をも會て作り不被申候、是は又一等遷喬木申とは存候、且恨らくは義理の精潔なる処、体認の功平生なく候故、聖人の学とは一膜へだたりたる様に覚へ候。

284◆一 物価追日踊貴、旗本中困窮以外の外の儀、宿番の衆夜着の物所持不仕もの多有之候、国々も次第に窮迫の体に風聞仕候、執政衆憂慮の御様子承り不申候、毎日寄合互に被申候儀は、万々年目出度杯と申儀のみと申候、先日も或人申候は、奥方女中局杯申者の申様成口上計被申候とて笑申候、文昭院様御代庶政御僉議の内、物価踊貴の事別て御苦勞に被遊、諸役人方へ此踊貴の子細、又は只今此弊を可被改に付て如何被成可然哉、各存寄の趣封事を以了簡を上候様にと被仰出候処、諸役人存寄共互に申内升遐被成候、然れ共被仰渡置候儀に候ゆへ、去暮面々存寄書付出し申候、其上を新井氏も一覽にて、是又存寄委細被申上候、其紙面比日見せ被申候、諸役人より申上候趣は、大方五ヶ条にて、御沙汰可有之次第は二ヶ条にて御座候、踊貴の子細、一ツには、金銀の品下り候に付物価上り申事、二ツには、近来風俗物毎に華麗を好み候て入用相増候上に、諸物元価高く罷成候故、売出候処の価も高く相成候由の事、三ツには、武家方買求候物の代を返済不仕候に付、売物の価を増候て其利を償候事、四ツには、江戸屋敷町屋等の数多く罷成、人別も多く罷成候に付、諸国より売来候物共売余ると申事無之候て、価も高く罷成候事、五ツには、在々所々農民等過分の振輪廻有之候故、田畑作物等の品々まで其価を

増候はずしては其用不足候、其故米穀はじめ諸物の価高く罷成候事、次に、只今御沙汰可有之次第は、一ツには、京、大坂、長崎其外遠国奉行所におみて、諸物の元価を減じ候様に仕候はゞ、江戸の価も減可申候との事、二ツには、華奢を禁じ儉約を貴賤大小の分限に応じ、事軽く仕候様に可被仰出候事、この二ツにて、新井氏の料簡は此上に委細成儀に御座候、事長く候ゆへ不申進候、右の通詮議も大方相済候て、経時候へ共如何の儀に候哉、今以何の被仰出と申儀も無之すたり居申候、其外の事共急に弁じ候はねば、不相成儀ども一統埒明不申由に候、如何の儀に候哉、ケ様に庶政塞滞仕候ては下民の難儀は不及申、如何の変も出来可仕と心有ものは笑止がり申候、第一は只今御元服、又は將軍宣下前に候ゆへ、余事は被差置被申とも見へ申候、此大札相済申候はゞ、如何様御初政も可有之かと存候、秋元殿さへ無事に御入候はゞ頼母敷存候、去ども一人にては如何様の御存念も難成事と見へ申候、万一老中不和に罷成候ては御為不宜儀に候故、其処を只今第一御慎と見へ申候、是も無余儀事と存候、扱は間部殿存外材力も有之其上温厚成人にて候故、今以諸老共此人を文昭院様御時の如く推尊被申体候、然共是は昼夜御幼主様の左右を離れ不被申候故、外事には先預り不被申候、大久保殿は気分あしく引込被申候、多分はよく有之まじくと申候、是は一統に悪しがり申候、此間も大名衆八人へ自筆にて金かりに越被申候由、紀国殿へも申参候得ども、御請合無之由申候、土屋殿は専茶湯、数寄茶碗、茶入など求め被申候、老人故此後隙に成候て、自分の樂を専らに被致候体に見へ申候、就夫承り候事に候得共、先此度は略申候、秋元殿、間部殿兩人の内、秋元殿は御譜代の家に候得ば、諸簾本の存入重く、諸大名の望も有之候ゆへ、此人別て大切に御座候、去ども六十七歳に候故、勤の間も有之まじくと気の毒に奉存候、先日も松平伊豫守殿より老中に音物有之候、受納可有之坎否の僉議にて候処、秋元殿今度増上寺総奉行の儀に有之候間、この人次第との儀にて諸老中尋被申候へば、何の会釈も無之疾に返し申との返答にて、残の衆もその通に罷成候由申候、随分潔白成人にて賄賂大成嫌にて候、役人等賄賂の沙汰被聞候へば、ひたもの悪敷被申候と申候、此人被居候内は、賄賂公行の儀は有之まじく候。

286◆一 柳沢美濃守入道保山近年淫佚至極に候、二十余の寵房有之、其方の用事承り候何の七郎右衛門とやらん申もの出頭いたし諸事乱候故、比日用人の者三人申合強諫仕候処、承引無之候に付、右三人立退申候、其内一人は儒者にて用人役勤罷在候、荻生惣右衛門弟子の由に候、門外に馬引立置候て、長屋には武器飾置き、右の儒者預りの書物有之候処、其書物も飾置候て、保山前へ罷出候て暇乞仕、直に立退申候、右出頭人を申請候て生害仕度との事と申候、立退申候処も書き付置候て、御用も候はゞ可被仰越と申置候由、無残所立派成事の由申候、保山も殊の外難儀と申候、先右出頭人は閉門被申付候へども、兎角此分にては相済申間敷候、右用人二人は家老の子弟と申候、萩原近江守も小川町の屋敷急に被追立、外の衆へ被下候（以上二条 癸巳三月九日書）

286◆一 保山家老三人諫言仕立退申候事、用人にて候兩人は家老共不逢者の由、一人は儒者にて用人役を勤申候平手七郎右衛門と申者、小人にて保山寵臣に候処、此者を右三人申請、為致切腹たくとの事に候得ども、承引無之候故立退申候、頃日承候へば、右七郎右衛門儀甲府へ遣押込候旨、右三人は如何被申付候哉、此分にて構被申間敷と申候得共、夫は余り無味にて候間、何卒京、江戸構被申候て事済可申候哉、保山其当座は殊の外立腹の体に候得ども、此節騒動に罷成事家の禍にも可罷成と被存候哉、兎角家老共宜仕候へとの事にて、右七郎右衛門押込申候、近年保山以の外姪乱放佚の沙汰に候、右七郎右衛門と申者其方の出頭人に候ゆへ、俄に權威を得候て家風を破り候故、三人の者不忍見候て右の通と申候、先は忠節と聞へ候得共、血気成仕形と存候、保山事江戸中に被

及沙汰、家も危き様に仕なし申儀不忠の臣と可申候、七郎右衛門と不和に候ゆへ、申立候処は保山為と申儀に候得共、実は私怨より起り申儀にても可有之候哉。

288◆一 簾本中困窮至極に罷成、宿直に夜着を所持不仕輩多く有之由、俟約の儀僉議にて、衣服の制を初め其外御新令追付申旨に候、阿部豊後守殿その外大目付横田備中守等と御穩密御用被仰付候由、町奉行へは御新令被仰出書付を先日見申候、二挺立の船御停止、江戸中駕籠六百挺有之候を、三百挺の外不罷成候、端々の遊女堅く停止、是等は皆奉公人私底に罷成候て、簾本中も難儀仕候故、遊民を禁んぜられ候故に候、其外にも有之候得共覺不申候、遊女御制禁の事、第一風俗に懸り、一段の儀に候、万一隠置候はゞ勿論曲事、其上吉原の者ども見合次第に取可申旨に候、吉原へ取候て傾城に仕候へば、最早一生彼境に沈候故、自然と遊女に罷成候者無之筈と申候、其上脇に遊女有之候ては、吉原衰微仕候故此被仰出候て、吉原の者共無油断見出候て奪取申筈に候、此事は新井氏なども助言有之候哉と存候、先日被申候は、鼠を猫に取らせ申候理にて候、人の取申よりは直ちに同類にとらせ候へば、殊の外恐れ候て鼠絶申由咄被申候、先は発明成儀と存候、衣服の事など追付相知可申候、承り申体、簾本衆袖、絹、羽二重よりの衣服不相成候、拝領の御紋付は各別、其外は不相成候、陪臣も絹、羽二重の外不相成候、是も主人より拝領候はゞ各別に候、此度は諸番頭へ被仰出、銘々勝手によき儀其方より申出候へとの儀にて候、下より申上候て其上にて被仰出由に候、是も御尤成事に候、上より一通り俟約の儀被仰出候ても、下にて左様に不罷成儀共有之、つかへ申候事も出来候て、結句難儀仕事も有之物に候、下より申上候て其上にて其の通りに御僉議の上被仰付事、是も一通りの事にては無之事に奉存候、今月廿六日御元服、来二日將軍宣下御用相濟、御政務の事専ら御僉議の段、乍憚結構の御儀に候、近世下の難儀並に風俗等のとほ人主曾て御構無之、如何様にも不苦儀の様に罷成候、侯国共に一統の通病にて候、然る処文昭院様此処に御心を被用候事、難有御儀に候、執政の御衆ヶ様に御政務に被用心候儀、是皆文昭院様御遺徳故と奉存候、其上井伊殿、秋元殿、間部殿、廉潔正直の御人の由申候、天下の儀頼母敷奉存候、井伊殿初め諸老中何れも間部殿をしつし被申候て、諸事文昭院様御時の様子に、少も相替る儀無之由、これも御殊勝成こと見事に奉存候、それとも間部殿御事御手柄と感申儀に候、孝は百行の本と申す儀今更存当り申候、間部殿御親父へ至孝の人と申候、只今見申候へば、日夜御幼主様御保護の体、且又万機に気を付被申候儀、有君を知て有己を不知と申通りに候、至誠人を感じ申と相見へ申候、大臣衆何も倣ひ申候、新井氏へ久々親炙にて、能事ども聞被申候故、常人とは各別成所ども有之候、此頃も一両事承申儀有之候、感じ入り申儀に候故、残の衆もそろ／＼感化仕体に候、先日も御役人御僉議の事にて、阿部豊後守殿或人を被致選挙候処、此人働は無之様に見へ申者に候得共、阿部殿被申候は、才智は余り無之候得ども、如何しても正直成人にて候間、此人に候仰付候はゞ、相応に働も出可申候、某此人を見込申儀一事有之候、先頃御法事総奉行被仰付候時分、諸役人等へ申談候は、此度御法事に付て、宿房へも、又は御宅へも不参の人は一人も無之候、この人計不参候、ヶ様の儀に付ても存合せ候処、心立直に有之と目利仕候由、被申其人に罷成候由、是等は輕儀の様に候得ども、気の付申処各別成事に候、子游が澹台滅明を目利仕と同事に候、井伊殿是も常人にては無之と相見、各別の処見請申旨新井氏被申候、常憲院様御代、松平美濃守威勢最中の事にて候、年礼衆多候故、井伊殿例年の外門の内に仮屋を打候て、そこへ取次の者出罷在候て礼衆請取被申候、玄関まで通し不申候、井伊殿屋敷外門の次に中門有之候て、玄関迄は遠故にて候、其節阿部豊後守殿飛驒守と申時分、井伊殿縁者に候ゆへ内意被申候ば、来年頭の礼に美濃守殿可被参候、此人無隙儀に候間遅可有之候間、十五日過にて、右仮屋を指置候て、兎もふく美濃守殿被参候まで被待合候様にと、家老中迄被申入

候、其後家老の者ども井伊殿へ申候へば、とかくの返答無之由にて候、いつも十五日まで右仮屋差置候処、其年に限り十日過早々仮屋引申様にとの事に候、十五日過候て、美濃守殿被参、玄関迄遙に通りに被申旨に候、ケ様の風儀今以毎に相見へ申候、此風儀失不申儀は徳川の御家のつよみと奉存候、間部殿事は長く候間追て可申進遣候、天下の事猶可為と古人の申儀只々存当候（此一条 癸巳三月廿八日書）

290◆一 江戸表諸物価踊貴に付御沙汰可有之次第、新井氏御老中まで被書出候紙面の写、近年諸物価高く罷成候仔細、並御沙汰可有之次第、文昭院様御在世の内奉行中に御尋被成候に付て、去年十二月被差上候書付の趣委細披見仕、彼書付の大意は諸物の価高く罷成候子細五ヶ条にて、御沙汰可有之次第は二ヶ条と相見候、皆々其謂れ有之事には候得共、某愚存の処は総じて如此の事に付て、御沙汰可有之次第は、縦へば医者病人を療治仕候如くにて、其病の出来候子細をつまびらかに見届候て、次に薬方をば立べき事に候、若其病源をつまびらかに仕候にも不及して、猥に薬をあたへ候においては、事により候て其病勢をたすけ候て、終には治し難き事にも可至候、然るに彼書付の趣を見候に、近年以来諸物の価高く罷成子細の事は、一ツに、金銀の品下り候に付て、諸物の価も上り候由の事、二ツには、近來の風俗物毎に美麗を好み候て、其入用も相増候処に、諸物の元価も高く成來候故に、売出候処の価も高く成候由の事、三ツに、武士方にて買求められ候物の代を返済なく候に就て、買出候物の価をまし候て共利をつくのひ候由の事、四ツに、当地の屋敷、町屋等数多く成來り、人別も多く罷成候に付て、諸国より入來候ものども売余し候と申事なく候て、其価も高く成候由の事、五ツに、当地の風俗在々所々にも及候て、農民等も過分の事共有之候事に付て、田畑作物等の品々まで其価をまし候はずしては其用不足候故に、米穀初て諸物の価高く成候由の事、次に、御沙汰可有之次第は、一ツに、京、大坂、長崎其外遠国の奉行所に於て、諸物の元価を減じ候仕方も候はゞ、当地の価も減ずべく候由の事、二ツに、過奢を禁じて儉約を貴び候て、貴賤大小其分限に応じ、事軽く仕候様に可被仰出候坎の事、是等其大要にて候坎、其存候処は、近世に至候て物の価高く成來候いはれ、其病の生じ出候処も其端多く、其病の長じ來候事も、一朝一夕の間にも無之候得ば、たとひ遠国の諸奉行中諸物の元価を糾され候共、三四十年来次第に増加り候価を一旦に減ぜらるべき事は、万々に叶ふべからず、次に、又風俗を正され候て、過奢を禁じ儉約を貴び候御制法候とも、其風俗の破れ來候本源を塞がれ候事於無之は、其法久敷たちなほすべき事共不被存候、某愚存の及び候処は、諸物価増加り來候事、其端は三ツ、其大本は只だ一ツより出候とは存候、其大端三ツと申候は、一ツには、御政務により候、二ツには、天災により候事、三ツには、風俗により候事、此等の三ツによりて、物の価は年々に増加り候き、但天災と申事も、風俗と申事も、皆々御政務により候て感じ致処と承り候得ば、其大本は只御政務の一ツにより候とは存候、又御政務と申事も、人主の御心より出候処にて、下にしては其御政務を輔佐被成候御方の御心に相像り候へば、是御政務の出来候大本とは存候、然るに唯今の御事に於ては、上御幼稚の御間に候へば、御心より出候て御政務可有之御時節には無之候得ば、執政の御方に文昭院様御他界の御時迄、御心に被懸候御事を、其御心と被成候て、御沙汰の次第有之候はゞ、士民の風俗も改り、天地の災変の生候事も無之、天下の財用もゆたかに事足候べき御事、何の難き事か可有之候はんや、況や物の価を平かに被成候程の事は、論ずるにも及ぶべからず候へども、某愚存の及候処、諸物価高く成來候大端を挙候て、各其類を分、其下にわかち記し、又御沙汰も可有之事共をば付紙を以て申入候、甚以恐人奉存候事共に有之候。

御政務によりて、諸物の価高く成候条々

293 ◆ 一 金銀の数多く成候事、近年以来世の人申沙汰し候処は、金銀の品下り候に付て諸物価は上り候由申候、奉行中の書付にも、総じて其品多きものは下直にて、少き物は高直成事に候と記され候、某存候処は、金銀も又物にて候、其数多く候へば、其価賤く罷成候事、諸物と替り候こと無之候、「但金銀の数多く候て、物の価高く成候事は十にして八ツ九ツ、金銀の品下り候て、其価高く成候ものも十にして一ツ二ツは有之候」我國六十余州の地東西南北の限り有之候て、其国により生じ出し作り出し候諸物も、其数の限り有之事、古今の間定たる理に候、元禄以来天下通用金銀昔よりは其数倍し候て、当時は下賤のものゝ手にも皆々に入り渡候へば、買求候人の数は昔より倍し候得共、諸物の数は常に其限より外に出来るべき所もなく候得ば、諸物の価年々に高く成来候て、是又定たる理とは存候、当時の米の価、昔大飢饉杯申候時の価と相同じく候といへども、乞食非人の類一人も出来候はざるを以ても、金銀の数多くなり候て下賤の手にも入渡り候事、推量せらるべく候て、此事の子細を詳に論じ候には事長く候へば爰に記し尽し難く、先大略をあらはし候。

293 ◆ 一 諸物の運上を被召上候事、附長崎表商買の法を被改候事、諸物の運上を差上候に付ては、各其買出し候物の価の中より、差上候程の金銀を取出し候はでは不叶候故に、其価の増加るべきは勿論にて候、一物の価の高く成候へば、夫に連る万物の価の高く成候謂は、諸奉行中書付の如くに候に付、運上の事出来候以後は、諸物の価高くならざるは無之様に罷成候、然るに文昭院様御代始運上の事共御停止に候得共、諸物の価既に高く成来り候上の事に候へば、指て其価の減じ候程の物も無之候、凡諸物の価一度高く成候後に、元のごとくに賤くなり難く候事、皆々此例に候欤、「大地震大火事の度々に高く成候もの初の価に減じ難く候事、皆々如此候」次に長崎表商買の法改り候て、白糸の類をはじめ菓種等に至る迄、唐物の価高く成来候事、其大本は御運上の事に起り候と申候、此表の事子細は其事多く候て、詳かにしるし尽し難く候故に、大略をしるし候迄に御座候。

294 ◆ 一 大錢を鑄られ候事、大錢いまだ盛に行はれ候はぬうちに、文昭院様御代に成候て御停止の事にて候へども、此事の害は深からぬ様にも候へば、御料の国により上納仕候処と、御用承候職人町人へ御払に出候処と、未だ不被及御沙汰候に付て御勘定方難立、御引替も不相済候得ば、是等の事によりて其価を増加候ものも可有之欤。

一 当地御倉に納候御米の数減候事、昔は御倉に被納候御米の数多く候て、御軍用の備事足候而已にも候はず、御切米の事多くは御米を被下候により候て、御切米出候時分必ず売米の価は安く成候趣、近年以の外米の数減じ候によりて、御切米を初て多くは御金を以被下候故によりて、御籟本の人々皆皆其飯米を買求められ候得ば、御切米の出候時分には、必ず売米の価高く成来候、自今以来も此弊改り候に不及候はゞ、当地米穀の価何を以て減じ候時可有之候はん哉、総て万物の価は米穀を以て本として、諸国の物の価は、天下の御座所の価に準じ候物に候へば、此儀に於ては、諸物の高下すべき事の至要とは存候。

295 ◆ 一 御料の御政法ゆるび来り候事、御料の地は国家の大本に候故、御代々御法最詳に候て残り候処もなき様に及承候処に、近年以来代官の衆中と、権勢の人の心だに相応じ候へば、その政務の善悪にもよらず、支配の処も替り、支配の地も増し候様に成来候に付て、其政務に心を被留候にも不及、其下にも心懸相勤め候輩は、其名主庄屋杯と申者と心を通じて、不可然事のみ多く候て各其家を富し候へば、農業などの事力を用候にも不及、日々に過分の行跡共有之事、奉行中書付の如くに候欤、又是により候ては、一寸の田地を持候はぬものども迄すぎはひをゆたかにし候へば、男女の奉公人など申す年々に減じ候欤「譬へば在々の者共、昔の如く繩にて髪をからげ候など申事は一人もな

く候に付、伽羅油元結又は小間物杯商候て妻子心安くはぐくみ申候、此一事によりて諸事之事推量あるべく候歟」

295 ◆ 一 御城中を初め御普請有之候所々其数多く候て、諸大名も増候御手伝の役少ならず候事。

295 ◆ 一 御本丸を始候て所々の御殿を作られし数も多く、其外御建立の寺社も不少、本所の川さらへ、中野の犬小屋等の事に至候迄、上に御物入の事は申に不及、夫等の御手伝被承候諸大名の物入其数を不可知候、是によりて諸国の士民及困窮候のみにあらず、当地を初め京、大坂の町人等の借金買懸等の公事訴訟も其数多く成来、世の風俗も又破れ候事共も出来候歟「此事に付ては、賄賂の風も盛に行はれ、其余よからぬ事の始まり候歟、殊には又上の御財用不足とて、金銀の品改まり候事を始て、種種の新法出来候事、此事を以て其大体とすべきものか」。

295 ◆ 一 所々御成の事、其家々にて御殿を作り出し、御儲の費有之候ばかりにもあらず、諸大名より物を被贈候事も、又其費尤以不少候ひし歟。

296 ◆ 一 上より被下物の事、其頃一位様に被進候物を始め、姫君様方へは不及申、御近習の人々に被下候物共に至候迄、其数多き御事の由申候歟「是等又御財用尽し候事の本の一事にて有之べく候歟」。

296 ◆ 一 諸大名の常例の外献上物共の事、此事又諸国士民の及困窮候事の一端にて候歟。

296 ◆ 一 諸大名火消役を被承候所々多く有之候事、其頃には諸家にて人数を多く召寄、日傭の者其多く雇ひ置、或は町家を借り、或は屋敷を買候て其人数をわかち置候、其外火消の衣類諸道具を初、提灯蠟燭等に至る迄其費多く候ひし歟。

296 ◆ 一 当地町役多く成候事、古来職人町人等屋敷を持候を利徳有之様に心得候処、大扶持並生類の事を初め、次第〳〵に公役の物入多く相成候へば、店賃を増候て其費を償ひ候得共、其利古来の半を減じ、又は度々の火災に借屋作り出し候事も叶ひ難く、地代杯申事にて貸候得共、猶々其利薄候て、売払置候にも、近年の風俗にて種々の物入など申事共も候処に、近年以来御用承候職人の有徳成輩は不及申、是等の輩の手代等迄も価をも論ぜず家屋しきを買求め、又は武家の者ども買求候者も出来候へば、沽券も高く成候に付ては、店賃も古来の如くには不減の故に、其店借候て商売仕候者ども、其々売物に店賃程の価を増加へ候事と相聞候。

296 ◆ 一 武士屋敷並新町多く出来候事、此事奉行中の書付にも相見へ申候、但事の子細を詳に考候に、古来は諸大名を始め候て、屋敷狭く数も不多候処に、五十七年以前の大火事の後、居所焼失の時の為に下屋敷杯出来候上に、諸家中江戸詰の人数も相増候様に成候得ば、此輩を召置候処狭く候故に、屋敷の数も相増し、又此輩の扶持の料を貯へ置候為に、蔵屋敷なども出来候て、次第に屋敷の数は多く成候、是一ツ、近年に及び候て火除のためと申ことにて、御城近くの屋敷を初て他所に移され候こと出来候処に、可然処には、諸大名、中屋敷、下屋敷、蔵屋敷など申物にふさげられ候故に、江戸の辺地に於て屋敷とも被引渡候に付て、次第に御城下も場広く成候て、是又これ等の屋敷〳〵にて朝夕の便り宜しかるべき為に、町屋をゆるされ候歟、是二ツ、新に御建立の神社、仏寺等も出来候に付ては、其門前の町屋もゆるされ、又例に準じ候て、古来は門前の町屋無之由の寺社にも其願をゆるされ候処も可有之歟、是三ツ、是等の風俗過侈に至候て、有徳の町人又は諸家中の輩までも、下屋敷杯構候て其数も加はり候歟、是四ツ、凡御城下の地年々に広く成り候事、古来には二三倍にも可及候へば、米穀野菜等を生じ出候地の減じ候のみにあらず、家屋敷を作り出し候料、其家屋敷に來り聚り候者へ、衣食、器具の類、其数も亦古来には二三倍し候半歟、然ば六七十以前前の事を以て今日にくらべ



候はゞ、昔の江戸とは二ツにも三ツにも倍し候計りに候、然らばいかほどの物共入來共、是等の人数を養ひ立候はんには、其物の数は常に不足して、其価の増加り候事其謂なきにあらざ候歟。

右十二条、是皆御政務によりて、諸物価高く成候事共に候歟、但十二条の内、其半は只今其弊を被除候事共有之候得ども、三四十年来諸物価は次第に高く成來候子細をしるし候故に書あらはし候、又是等の事に付て、此後の御沙汰の爲にも可罷成候歟と存候故に候。

天災によりて諸物の価高く成候条々々

298 ◆一 当地度々火事の事、火事の時其災にかゝり候ものは、人々住居をも作り、器財をも求め候に付て、諸職人の工料も商売物の価も高く成候処に、其災にかゝり候輩は、又各住居をも作り、器財をも求め候程の料を取出し候はんと仕候故に、彼是合て物の価高きことを増し候、其程過候ても一度高く成候価輒く減じ兼無候歟。

298 ◆一 大地震へ附箱根、荒井へ並長崎等御普請の事、此事近世の大変に候故に、上の御物入も不及申、諸大名衆御手伝の人数も多、公私の費量り不可知候歟「公私の費風俗やぶれの事、御政務の条下御普御手伝の所と其理同じく候」。

298 ◆一 京都火事の事、京都火事後諸物の価高く成候事は、当時の火事の例に同じく候、但諸国にて用ひ候もの、京より出候物共多候得ば、京の物価高く候へば、其弊天下にも及び候事は勿論に候。

298 ◆一 大坂高潮の事、此外火災も候歟、此儀京都の火事と同じく存候。

298 ◆一 東国砂降候事、此儀多くの地荒廢り候のみならず、諸国へ御役金を懸られ、又大名へ御手伝被仰付候て、砂をも被除候へば其流弊殊に甚しく候。

右五箇条、皆是天災により候て諸物の価高く成候事共に、但此五箇条とも過去候事に候得共、是又近年諸物の価高く成候て、其後価減じ兼候子細をしるし候に付て書出候。

風俗によりて諸物の価高く成候条々々

299 ◆一 御簾本の風俗昔に替り候事、武家の事は商人杯の商売に付て、不時の利を得候様なる事は無之候て、地方にても、蔵米にても、凡一年の入候処各其限り有之候て、其限りの外にはわづかにも増加り候ものは無之候、然らば其一年の入を以て、上は公役に随ひ、下は家従を扶持し、中は親族傍輩の付届を初、衣服、飲食、住所、器財等の用を足候事共に候、古来は御簾本の衆中皆々小身にて、御陣御上洛又は駿府御往來、遠州御鷹野杯申事、一年に一度も二度も有之候得共、財用も事足候歟、貧窮し候とて御奉公勤兼候人有之とは不聞候、この儀当家の御家風厚く候て皆人外の飾り無之、毎事に付て実を務られ候故に候、然るに寛永の中頃より一倍の御加増をも被下、御金をも破下、拝領金をも被仰付候事ども打続候て、其上又諸大名の子息、舍弟など御番入も有之候に付て、是よりして御簾本風俗衰へ來候て、美麗なる事を好み、過分の事ども出來候て、三四十年来は殊に其衰へ甚しきに至候歟、近年に及び候て、米の価は高く成候へども、諸物の価も又高く成候へば、物成御切米など売候処の金銀にて事足候にも不及して、御切米被下候衆中は飯米を買求められ候程の事に候、上は尚々事足らぬ事に候へども、當時の風俗に候へば、毎事世に随ひ候はでも難叶候へば、御役料拝領し候衆中を初め、御役を勤め兼られ申候、其外の人々は猶々御奉公も仕届兼られ候歟、其子細を承候に、其大本は皆其実ならぬ外の飾の事共に事足候はぬ故にて候、夫に付ては又種々承苦しき事も風俗の様に罷成候事ども候歟、古來將軍家の代々の事はふるき事にて候、上は今の代の引合にも難仕事に候、信長、太合両代の風俗は、外を飾候事を宗とせられ候へば、内の実は少く候て、毎事美麗成事共に候、然るに当家の御家風表裏に引替りたる事にて、

前に記し候如くに候ひし事、則天道の好み候処にて候へば、上も下も皆々天心に御かなひ候事と相見へ、終には天下は当家に帰し奉り候ひき、然ば御簾本の風俗昔の如くに候はんは、天下の事御長久なるべき基にて候へ共、近年以来の如くに成事返すぐも勿体なき御事に存候、只如何にも仕候て昔の御家風の失果候はぬ事は、いか成天下長久の御祈祷にもこえずぐれたる御事に可有之候欤。

300◆一 御簾本の衆中当地にて召連れ候供の者を初め、或は御役により、或は御使に付て、遠所へ往來の人数多く成候事、御軍役の御定も有之、又時により事に寄候て、本役、三分一役などの御定有之候き、就中寛永五年九月二日に出仕、江戸廻り召連候人数の御定を被出候時、是より少き事は不苦候、多く召連候儀無用たるべく、此定の儀は人をも致吟味召抱候為に候としるされ候、乍恐御尤の至成事、此等の事に付候ても、当家の御家風の難有御事と存候、然るに近年は次第に人をも多く召連候はねば不叶様に成來候、殊に遠來の往來にはその人数も多く成候て、日傭雇の者など申輩を召加へ候得ば、其物入多く出来候事は不及申、道中宿々の為にも不宜事共も有之候、惣て是等の類輩いか程召連候共、何事の役にか立可申候はんや、兼々非常の変も候はん時分、なまじひに大勢のものは逃走り候事も候はゞ、天下の人の存候はん処如何可有之候はんか、総じて御簾本の衆中、武辺の事におゐて、天下の人に沙汰せられ候事も候はゞ、其身の越度のみにもあらず、上の御威も薄く成候端にて可有之候、是等の事の如くに外を飾り候て其実もなく候事共は、当家の御家風に相背きたる事に候へば、願はくは寛永の頃の思召の如く、たとひ人ずくなに候共、中間、小者迄も慥成家従をも召仕候様之御定も有之、人にも其心得有之様とは仕度候事に候。

301◆一 武家方召仕候軽き輩を始め、町方の下々迄、男女の衣服美麗に及び候て、当地の風俗在々所々に及び候事、此儀奉行中之書付にも相見へ候、此風俗の出来り候事、条々子細可有事に候、近年以来現金安売など申事出来候て、衣服の類其見分の宜様に仕なし候て、心安く求られ候物共有之候、殊には元禄宝永の間、上より被下物夥敷事共にて、払物など申候て其物の恰好より心安物候き、又出仕の度に、同じ物も着用難仕候、又召連候者も見苦しからぬ様にとの事にて、家従へとらせ候衆も有之候を、其家従も亦売かへ候などと申事も有之それらの物を買取候て商売し候者も有之候故、下々の手に入安き事共出来候へば、下々の衣服以の外美麗に罷成候、町方にて召仕男女も又是に準じ候欤、近年以来下々の男女の給金なども増加り候事、是等の子細も可為其一端候、然ば此事下々の風俗過分に成候計共不被申候、上の風俗下々移り候とも可申欤、但寛永之中頃にも如此事有之候て、諸大名出仕の日、大下馬にて下々の衣服を取剥取らざされ候事共有之由、古き者の物語を承候き。

302◆一 近年以来現銀安売と申事出来候て、却て過奢の本と成候事、三四十年前以前世之人不勝手之事共に付、買懸りなど済し兼候に付て、掛売と申事共難渋に及び、売候もの買候者も、難儀成様に罷成候に及び、呉服屋にて始て此事を仕出し候処に、其価も心安く、又買物不案内者の為には宜しき事にて、此商売の道はやり出候て、其外の者にも此事多く出来候欤、買求候事の心安く候に付ては、おのづから買求候て用候人も多く成候て、世の風俗美麗成様に成候得共、衣服の類を始めて見候処は宜様にても、昔の物にくらべ見候へば、次第に粗相に成來候、是又外を飾り候て内の実なき謂たるべく候、又此事により候て、元のまゝに買売仕候商人共のすぎはひ半を減じ候故に、此等の輩が方より売出し申候物の価は減じ兼候、何れに付ても宜しからぬ事とは存候。

302◆一 近年以来衣服の染物を始め、諸物に珍敷ものはやり出候事、近年の時行物にて、衣服の類にも、染物の色にも多く成、其外膳部の類、皿鉢の類、はな紙袋、たばこ入の類ひにも、年々月々に珍敷物共はやり出し候、昔より是等の風俗の事、以之外に不

宜事之由申伝候由に候、今日珍敷物流行出候へば、昨日迄も世にもはやし候物は、用ひがたき様に成て其俣打捨候て、又珍敷物を買求候様に成行候に付て、只一ツにて用足候物を、幾つも〱買求候様に罷成実は無用之費とは此事を可申候。

302◆一 近年以来御用承り町人共の内、有徳に成候輩其数多く候事、金座、銀座、御普請方に懸り候職人商人を始候て、御用をも承候程の輩共、分限に随ひ過分の御蔭を蒙り、俄に有徳に罷成候者其数多く候、上之御費も無限、御役所〱の様子も、事の体不宣事共出来候、子細は不及申、此等の輩並其手代杯申者に至る迄、互に過侈を競ひ争ひ候風俗、よの常の町人にも移り、其害たる事悉くにはかぞへ難く候、近年已来の風俗を破り候事「去冬順風無之に、廻船ども入不来候由にて、炭油の価日々に高く成、下々の及難義候、其後南風吹いて一日に船共入来、炭六万俵迄は河岸あげ仕候所に、金座方へ二万俵、錢座へ三萬俵取候得ば、炭の商売仕候者共方へ、わづか一万俵ならでは買取候はず、是により船入来候ても、炭の価減じ候には不及候、但是等は私ならぬ入用に候へ共、此一事に付ても炭、油、塩などを始め候て、諸物の価高く候事の端は相しれ候御

歎」。

303◆一 近年以来僧俗共に種々の御願と申事多く相成候事、運上又は御請負など申事を初め諸寺諸社の願事種々数多く成、此事に付ては、諸国の輩当地へ入込人数多く、手入、付届などと申事にて候、風俗をもやぶり、財用をも費候事共に候歎。

303◆一 商売人の召遣候人数増候由の事、近年武家方並町人の下人共、物を持運候事を嫌ひ候に付て、軽き商売仕候ものも、持運為仕候者を、分限相応に幾人も召抱置候はねば、商売ならず候、其召抱候者の給金、又其衣類飯米の料を、其売物の中より取出し候程に、豆腐、こんにやくなど申類まで、其価を減じがたき由申事に御座候。

303◆一 諸物の価高く候事、誠の価には無之候由の事、奉行中書付に、当地の人多く成候に付て、何程の物も売余る事なく候故に、其価高く成候由相見へ候、此儀いかにも其謂有事に候へども、是は其一を知られ候て、其外の事を存ぜられぬにて候歎、近年物の価高く成候次第、先づ其価の高く成候上に、尚更価の増加り候子細多く有之候、御用を始め諸家の用を承候町人は、近年の風俗にて、其諸役人は不及申、其役人の召仕候小者、中間、門番などの類も、種々の付届無之候ては難叶事共候得ば、其物入の費をば、売上物の価を増してつぐのひ候、是一ツ、「同じ物を公儀へ差上候と、大名に売申候とはもはや価も違ひ候、小身成家へ物を売候には、弥価もちがひ候に付、おしはかるべき事に候」又其役人と申合、其代物をわかち取候事など有之候由相聞候得ば、又夫程の所をも増加へ候、是二ツ、「近年は軽きものを差出し、わづかの物を売候にも町人と申合、売上の証文には其価を高く記させ候て、代物は町人と分取候事世の常の事に候、左様に仕候はねば、外の所にて買取候故に、町人共必如此に仕候よしにて候」売物の代金を済兼候所を考候て、其利の程の所をも兼て価に差加候て売出候、是三ツ、此等風俗によりて物の価を増たるにて候へば、其物の元価に相応の利を加へ候と申事にては無之候、然ば縦万物の元価を正され候とても、風俗改り候はぬ内は其価の減じ候はん事、某杯の愚存には心得難く存候。

304◆一 日傭の類多く成候事、日傭の者にも其類あまた相わかれ有之候歎、御普請方の日傭の者、大名火消のやとはれ候鳶の者、又道中上下の者の類、年々に多く成候は不及申、近年武家方不勝手に成来候ては、然るべき大身の人にも、足軽以下の者日雇に仕られ候も有之、まして小身の衆中は、常に人を抱置候事難叶、歩士、若党以下雇者ども、供にも召連、使にも遣候事に成候に付て、町人にも是等の請負仕候者出来、辺士の町々には、此等の輩猶々多く、爰かしこの辻番所にも、五人七人宛寄宿仕候はぬ所も無之候

と承候、然ば是等の輩凡八万を以て算へ候程の事にも罷成候坎、近年奉公人のすくなく候と申も、皆々此類の者に罷成候て、世を心安く渡候故と存候。

304◆一 駕籠かき並二丁立船の事、一三年前迄は、駕籠の数三千程も有之候坎、然ば駕籠の者は六千人、其妻子をかぞへ入候はゞ、一万には余るべく候、其後駕籠の数を減じられ候へ共、未だ男女三四千人には可及候、次に二丁立の船と申ものも只今七百艘に至候て、是又二千余人の水手たるべく候坎。

305◆一 近年以来狂言芝居の数増候事、古来は堺町、木挽町兩所にて狂言之芝居一間有之候処に、中頃より一間宛増候て四間には罷成候、近年は棧敷を二階に仕り、見物の男女早朝より夜に入候迄、充滿仕候由及承候、芝居数は元の如く四間にて候得共、見物の場は、昔より八間相増候由にて候、其外茶屋など出来候て、珍膳美食以外の外美麗成事共にて候と申候、此事皆々御用初諸家の用承候町人共の、振廻などと申事よりはやり出候事に候、然るに諸寺、諸社に小芝居と申ものも所々に出来候、此外に又昔は当地にて手も及候はぬ舞子、遊女などの類も出来候坎、都て此等の事長く候ては、世の財用を費し、風俗をも破り候て、よからぬ事のみ候坎。

右十二条、是皆風俗により候て諸物の価高く成候事共にて候、此余こまかくの事共も可有之候得共先づ此等大だち候事と存候、御政務により候事共は、上つかたの思召次第に事改り可申事に奉存候、風俗により候事共は、猶更御僉議の上を以て武家方町方、在々への御制禁なくては叶ひ難く可有之、縦御政務を正されしとても士民の風俗改り候事もなく候はゞ、諸物の価も減じかね候のみならず、御政務も世に行はれ難く可有之候坎、天災により候事におゐては若其災も可有之時之事共、兼て其御備有之にしくべからず候坎。

癸巳二月十一日

一年号弁、一国喪正議、以上二部別冊写之

兼山秘策第一冊終

起正徳三年至六年

五月廿八日 以下五条

306◆先日私屋敷へ参候節、乍序新井へ立寄一時ばかり語申候、今度儉約の儀可被仰出候に付、先達て諸組頭役人等の存寄をも御聞候て、下情を被尽候以後、一統之御定も可有之との儀にて、存寄可申上旨御申渡候処、一人も一料簡申上候者無之、只一通り儉約相守り御奉公可申上との紙面にて候、或は自分の借金等申上候者も有之候、是とて人材無之儀相知申候、然処佐田玉淵と申鍼医、紙五枚に書立候て御政務へ懸り候儀申上候、間部殿感じ被申候て今度の総まくりと被申候、又御納戸頭今井五郎右衛門と申人、当代御政事風俗等の儀被申上候由、是は公儀表の沙汰不承候、右玉淵を感じ被申候に付て存候へば、間部殿には感高にて可有之と存候、残の衆いかゞと存候、五郎右儀承候へば、大目付中紙面被見申候て、面々勝手儀御尋被成候処に、御政務の事申上候段難心得旨にて、たわけざたに罷成、右書付返し被申候処、五郎右押返し斯様の序に無之候ては、私共存寄可申上時節無之候、狂人の沙汰に罷成、又は御仕置に被仰付候ても、私一人の儀に候へば存切申上候、此上無御構御上被成候へと申入候由承候、定て其上はしりて抑留被成間敷候間上り申たる物と存候、いまだ沙汰不承候、然処に昨日も服部藤九郎〔是は私共同役にて無之候、新井氏弟子木下平之丞殿弟子と罷成、只今奥向の儒者にて候〕罷越、五郎右事申候てたわけ者と申候故、某急度いましめ申候、御手前などは是を左様に被致批判候事不似合儀に候、世上の鼻かけ猿どもが笑申とて、儒者など夫に同じ申事不可有之、藤九郎などは合点不参儀とて嘆息の体にて候、此度被仰出候趣は、組頭は組切、役人番人等はその役切、番切に僉議致し、無用之費に成候儀可申上旨にて候故、支配無之又は役儀等無之者は勤方無之故、可申上儀も無之候、然れば私共あづからざる儀と存候て罷在候処、私共同役の内人見又兵衛、木下平三郎初として、不殘銘々に申上候故承合候得ば、或は借金の事、又厄介人有之儀、又火災に逢申儀など申立候、紙面にて候故私申候て、私儀は申上間敷存候、同役の内一人異見を申立様に候得共、各とは又わけも違ひ申候、其子細は昨今被召出はや借金等の事申立候事も不可然候、若何とて上げ不申と御目付中御咎め候はゞ、其節申様も可有之候間指除れ候様と申候へば、木下氏など少し不快と見へ申候、其後新井氏へ右の所存申候得ば、成程尤に候、此度の事無役の者迄触申儀は、御目付中心得違と存候、其故寄合中にも上げ申者も有之候得ども、某は上げ不申由被申候、源美三宅も私同意にて上げ不申候所に、先日御目付中より重て申来、人見、木下など同事に上げ可申旨に候故、又新井氏などへ致相談候て申上候は、私共儀御前代被召出、差たる御奉公も不仕候内当御代罷成候、此以後如何様の御奉公も仕候て、乍恐御厚恩の万一をも奉報度所存にて候、自余の輩に不可準者共に候得ば、別て可申上儀無之旨相認遣申候、外に手紙差添最前可申上候処此度被仰出候儀は儉約の儀に付、一統被仰触候へども、存寄書付候て上げ申様にとの儀は、勤方有之衆に限り可申儀と心得候て、何共不申上候処、重て御触に付別紙の通申上旨申遣候、かふじたる儀に候へば、遮て御政務の儀に及申候は、如何様少相違の方にも可有之候、なれ共今井、佐田杯さりとは志有之者共と存候、是を皆笑申候処に間部殿感じ被申儀、是又殊勝成事に存候、扱は新井氏も流石と存候由、今井五郎右事余程の学者にて候由、有用の学を好み平生周礼を見申候、佐田などより学問可有之候間、此度申上儀候も佐田より能可有之候と被申候、此兩人其内知人に罷成申度駿河台へ罷越候はゞ、今井へも押かけ参り候て逢可申共存候、佐田は私駿河台屋敷同町に佐田養逸と申人有之候、定て此人と同家たるべく候、養逸は同町に候へばあれへ罷越候はゞ、知人に追付可罷成候、左候はゞ玉淵等も逢可申

にて可有之候、玉淵は御弓町に居申候、今井氏は牛込に居申候、是程風俗衰へ候得共、未だ斯様の人有之故快存候、されば歴々御役人の内、一人も右兩人程の人無之段歎ヶ敷奉存候。

309 ◆一 新井氏被申候は、文昭院様御在世の時分、諫争の路を被開候様にと申上候、上にも御同意に被思召、何とか可被仰出筋も可有之と存候内、御代替に罷成候事残念の一ツにて候、間部殿此儀兼て聞置被申候故此度儉約の儀に付ても、下の存寄申上候様にとの儀にて候、是も根有之ての儀と被申候、扱被申候は、上より諫争の路を被開候ても、下の申上候儀益と可罷成儀は有之間敷と存候、其子細は常憲院様御他界の時分、江戸中の落紙狂歌等限りも無之候、余りの儀に御老中より制禁可仕と被申上候得共、文昭院様上意に制し申儀無用に候、下々申立候事御聞被成益を被取候儀も可有之候、訳も無之儀は御捨被成候得ばよく候、其儘言はせへと被仰出候、其時分某など奉感儀に候、然処に右千万の落紙等一ツとして上の用に立申儀は無之只訳も無之事共に候、是にて存候へば、只今下々に言せ候ても、一ツも益の有之儀を申上間敷存候旨新井氏被申候処、私申候は、それは御心得違ひと存候、諫争など申上候者は、落紙狂歌など仕候ものにては無之候、有志の人は結句軽卒成仕方は無之、且は落紙等に有益事無之候とて、正義の人有之間敷とは不被申候由申候得ば、新井氏感服にて候。

309 ◆一 先月初旬新井氏へ参り、具足櫃より一封の物差出候て封を切り私へ見せ被申候、私見終り候て及感涙候て申候は、近頃珍敷物を見申候、此一事は後日に漢字に直し百世へも伝へ候て、後代忠臣の心得にも可罷成もの、又は此事には文昭院様御盛徳後世人主の鑑にも可罷成儀に候由申候、萩原近江守殿扱々あぶなき事にて御座候、新井氏無之候はゞ、唯今迄被用候て如何様の害を可仕も不存候、中々難除儀に候処、此人一身にかへて申上候故埒明候て、社稷之福と奉存候、此子細を根源より申候に、罪は常憲院様に歸し申候儀に候、金銀不残用被尽天物暴殄にて其罪に当り、急に御他界にて候、一時に府庫空虚にて、文昭院様御位の初めひと御つまり被成候、外の儀は如何様ともに候へども、差当り將軍宣下の御入用、且又禁中御即位の御入用に用可申物無之候、是に御難儀被成、何卒つとまり申様僉議仕候へと老中方へ被仰出候故、老中方思案にあたひ不申候に付、萩原を召候て相談の処、流石材力有之者に候故、少も難儀の体無之、如何様にも致し此度の御急用に候間弁じ申様可仕候、御心易候被思召候様にとの儀故、老中殊の外大慶、上にも先御安堵被成候、然処に金銀を又吹替候て、其出目を以て右御物入の埒明申候、其節は先如何様に成共致し、右の大礼済申様にと上下存する外無他候処に、萩原受取申様被申候故、其外に僉議は無之候、夫に付萩原は御奉公のものに罷成、上にも御満足との儀に候故、其砌は間部殿も万端直に相談候て埒明候故に、諸人皆萩原を恐れ申儀常憲院様御時之通に罷成候、老中なども一同に誉被申、此人なくては不罷成様に御座候、然処に新井氏畢竟此人御用被成候ては天下危く奉存候旨委細に申上、扱畢竟此人御退け不被遊儀に候はゞ社稷を滅し申候、左候へば私儀御厚恩を蒙り罷在候上にては、君父の仇と奉存候、君父の仇には不戴天の法にて御座候、左候はゞ老衰のやせ腕に候へ共、彼者刺殺申程の儀は仕兼申間敷候間、打果し可申と奉存候、然ばIIに若輩より聖賢の書を誦候て、春秋の大義を承候処に、君命も無之人臣として君傍の悪人を殺し申儀逆罪同事に候由、急度聖誠有之候儀難犯奉存候、某進退爰に窮り申候、所詮彼と打果し死申候、命を上へ奉り候て幾度も極諫致し、白髪の頭を刎られ申外は無之と奉存候、某此者と両立仕覚悟にて無之候、此者被用候はゞ私儀は御奉公是迄と取極め申旨に御座候、其書付早速間部殿より被入上覧候処、即時に萩原役儀御取放御座候、右諫書の草案と、間部殿自筆の返答に、諫書早速入上覧候処驚被思召、即時萩原近江守役儀被召放候

旨被仰出候間、左様に心得可申旨の奉書の両通見せ被申候、新井氏極諫の儀は勿論、上の容諫の速なる儀、とりく不堪感涙候。

311◆一 先頃大目付中へ諸候の間番被呼候て、御老中へ音信付届有之時分、間部、本多へは差除申由承申候、是は不可然候、間部、本多両所へも御老中同時に可心得候、且又若年寄中へも其通に候、御老中附届有之時分、若年寄中残し申間敷旨被申渡候由、間部一人は何方よりも音物受不被申各別に見候所、扱は間部殿も同事に罷成候哉と申者有之候、此儀間部殿曾て不被存儀に候、右大目付中被申渡候趣聞被申驚き被申由に候、今度阿部氏と婚儀の時分、常々付届無之方よりも不残皆祝儀物参候故、いづれも断申候て返し申候、如何の儀と不審に存候処、扱は右大目付中被申渡候故と、初て致合点候由新井氏へ被申候由に候、是等の儀皆土屋相模守殿の所為かと申候、只今御老中上座にて諸事先此人発端と見へ申候、残りの衆も土屋に譲り被申体にて、御子息婚禮の時分諸大名よりの音物取申故、此度間部殿を同類に被致度と大目付中へ左様に被申渡候と聞へ申候、土屋、大久保兩人同事にて候、大久保は気分兎角本復は有る間敷と申候、土屋は極老に候間、久敷は勤め相成申間敷候、秋元殿御一人星の星と申候、井上、阿部は間部殿、秋元殿の風を学び被申候歟、然らば以後は只今より能方に可罷成とも奉存候。

312◆一 はや久敷後に候、或時土屋殿一人御城に居残り被申、間部殿へ逢申度由にて扱被申候は、人多きにては如何に候故居残り申入候、別儀にても無之候、我等事御先代より連判なども被指除、急度御あいしらひに御座候、前々より連判杯を被指除候ては、被下物其外之儀迄、自余の衆とは御格も各別成儀に候、殿有院様御代酒井稲葉など其辺にて候、然る処自余之衆と何の替り申儀も無之候、此儀は御自分御心得一ツにて如何様に罷成儀に候、且又御当代御幼少にて候得ば、老中威勢付申事上の御為にて候、我等共軽く候ては上の御威光も無之候、此処第一の儀と存候、今以我等共自身に泊番勤申儀不相応之儀に候、若年寄中にて不苦事にて、万一の変有之時分は、何も御城辺罷在儀に候得ば、手に逢不申儀は無之候、兎角我等共を人の軽しめ申儀は御為に不宜儀に候間、急度人に重んじ候様に仕度、全く自分の為に申上にては無之候間、御料簡被成候様にと被申候、間部殿被申候は、先以左様の御心付も、上の御為を被思召候故と乍憚感じ申儀に候、左候は、各様へ御威勢つき申候て、上の御為宜可有之候哉、又は不宜儀も可有之候哉、其処合点難仕候、御遺業にも党を立権を争儀を御戒置被遊候、其上只今各様に威光付候は、当分上の御為によき様成儀も可有之候得共、畢竟御成長の節に罷成、各様へ一度付申威勢御取返し被成候事上にも難被成候儀と存候、又は外聞なども迷惑成儀と申候、まして段々に右御威勢付申を、一通りに御取返し被成候は、其節各様にも御難儀にては有之間敷候哉、上にも御難儀成事に候へば、其時分は兎角御取返し不被成候ては御為不宜候、御自分様儀自余之衆と品をも替申様に仕候事、私一人の心得にて成候由被仰聞候は、何共合点難仕候、文昭院様御遺言の由私に申候へとの儀に候哉、一毫疑の儀も私自分の心得にて、御遺令を偽り申儀は不罷成候、次に又御泊番の儀各様御苦勞成儀に候、別て御自分様の儀は御老体にて御大儀奉存候、去共此節御奉公之儀に候得ば、御為を被思召候は、斯様の儀專一と奉存候、其子細は御代替りと申上も御幼稚に被成御座候へば、無事に候へばこそ其通に御座候、万一の変も有之時は大切至極の儀に御座候、左様の節各様御城へ御立合不被成候ては、下知き、不申儀可有之、本多中務、私兩人儀は、御預口より内の儀を受取罷在、其外の儀は不案内に候、たとへ大變には及び不申候ても、少々の儀にてもはや外の沙汰に及候て、御為悪敷儀を各様御城に御有合被成、御即時之御下知候は、外へ洩聞へ不申候て事済申儀も可有之候、若年寄中儀は一段軽く候故、下知き、兼可申候、勿論泊番之節は、各様同事に心得候様と申渡し候こそ可仕候得共、常々軽く存候ては、急には難相成儀とも可有之候、然ば各様御泊番指除申

儀御相談次第の儀には候へども、私は不同心に奉存候、且同役を御増候て、間等に御勤被成候様に被成候事は各別に奉存候、定て其元に御覚可有之、文昭院様御病中、此節の儀兼て無御心元、其思召各様被仰出、総御留守役を御究可被成由に候処、各様御請に御尤に奉存候へ共、只今急に左様の役被仰付候に及不申候、私共罷在候儀に候へば、御氣遣無之儀と被仰上候処、左様に存じ候へば老中役を御殖し可被成と被仰出候処に、各様又被仰上候は、夫にも及不申候、私共内として随分相勤可申候、御氣遣被遊間敷由被仰上候処、左様に存候へば御満足可被思召、御安堵被成候由にてやみ申候、去共其節老中に被仰付候人をば御定置被遊候間、只今其衆を御同役に御極め被成事、則文昭院様上意同様と奉存候、扱又各様只今迄より諸人重んじ候様に私共心得可申旨承届候、右申候通文昭院様御遺命などと偽り申儀は不相成候、左様に無之候て只各様をおもんじ候へと申渡候ても、諸役人合点仕間敷候、斯様の節は、只人柄の宜者をば諸人重んじ申物と奉存候、軽き役人などにてさへ人物おとなしく候へば、其人の分在よりは人々重んじ申と見へ申候、まして各様の儀は天下の執政にて候へば、御人柄さへよく諸事軽々敷無之候はゞ、おのづから天下の人重んじ可申候、誰か軽んじ可申候哉、御人柄にて人々におもんぜられ被成候て、御威勢付申儀は何程付申候ても権成儀にて、夫こそ上の御為何寄と奉存候、兎角私心底は如此にて、只今被仰聞候事外之衆も被仰談、又は御三家にも御相談被成宜様被成べく候由被申候へば、土屋殿被申候は、先此趣御自分に御聞候て置れ候様と被申、座を立被申候、後日井伊掃部頭殿、又間部殿に老中泊番之儀軽々敷も可有之候、如何と被申候由に候、其時分間部殿被申候は、是は定て自分様御一人の御料簡にても有之間敷と察申候、唯御自分様へ被仰入御方有之候哉、先日私へも左様に申聞候御方候故、斯様くくと返答仕置候由被申候へば、井伊殿殊の外感服の体にて、御尤至極と被申事やみ申候、此一事にては間部殿の儀御察可被成候、其外御寄特成事共幾つも有之候得共、委細には不被申候、如山などと申人にては無之候、如玉の人と可申候、只うつくしく温厚にて、しかも条理わかり候て見事に御座候、此度女中衣服の制禁も、先天英院様、月光院様へ急度被申立、御城御奥向より改り申候由来り申候、御両所様初め自余之老中も、いづれも此人を執し被申体に御座候、間部殿手柄と奉存候、只一人にて手廻り兼可申候、秋元殿計にて御座候、其上間部殿遠慮深き御人にて、其上不遠慮にて少も張合被申候ては、中々成り申間敷候故、自余より出申儀などと其分に致し置れねば不相成儀も有之と見へ申候、夫を間部殿一人を責申事無理と存候、あの地位に罷在候間、此人などの振舞申儀中々難成儀と奉存候、此紙面いつもの如くに候、以上(五月廿八日)

閏五月九日 己下六条

当月六日暮前新井氏へ罷越候処、其日新井氏居屋敷坪数不足の分(是は文昭院様御代、拝領の時分より被仰出置候へども、御用地にて急にあげがたく候に付、先其外拝領にて移り被申候、此分最前被仰出候通被下候由にて、則只今の宅の隣にて百七十坪拝領にて候)被下置候旨被仰出候にて、御礼は最前に相済候得共、此度無相違拝領仕候案内旁御老中へ罷越、夫より直に御城へ被罷出、何時可被帰も難計旨家来申聞、私も閑談可仕と遠路参候処、残念には候へども罷帰可申と既に立申処に、御城より被罷帰候てよくぞ相尋候とて、其夜八ツ時分迄語申候、先屋敷拝領の祝儀申入候得ば、されば重々難有仕合にて、御城へ罷出越前守殿に逢候て可罷帰と存候処に、御前へ被召出、幸登城の次でに被下候とて、御帷子御単物杯拝領致し、其御礼申上候処に、けふは目出度いと上意に御座候、乍恐御いたいけ成御儀難有仕合感涙候由被申候、「此頃萩野事記事殊記之、可觀小説にも載之」

316◆1 今度將軍宣下御祝儀、水戸殿へ土屋相模守殿、今一人は井上河内守殿、其外若年寄衆、高家衆以下も被参候処、よき最中土屋殿御庭見物仕度由にて路次へ出被申候、



俄の儀にて掃除なども不仕置候故、取込被申候様水戸衆被申候へ共、実は前日より土屋殿より被申入置候由に被申候、此度將軍宣下の儀も、目出度と申内に悲を忘れ申間敷儀には、凡御家来としては其心得可有之儀に候、況や股肱一体の臣として、無是非祝儀之座には臨み被申候とも、儀式迄にて仕舞被申候筈にて候処、庭見物などと申儀一向難心得仕方に候由、間部殿杯も被存体と承り申候、相伴の老中以下もあきれ被申様子に見へ申由に候、此批判成程尤成儀と奉存候、老中方など御仕方は仮初ながら大事の儀と存候。

317◆一 私申候は、総て御代に罷成被仰出候儀共、間部殿へ御老中方相談之上、間部殿より御自分へ御示談、一決にて御老中へ被仰入候体に御座候、是は間部殿御一分の御料簡とのみ被仰入儀に候哉と申候へば、新井氏被申候は、間部殿より手前に相談の儀は内証の儀に候得ば、畢竟は間部殿御料簡と申物にて候へ共、我料簡を間部殿迄申達の儀は、老中方もよく存知の儀にて此度も其儀沙汰に及申儀有之候、儉約の儀相極り申儀に付、上の御幼稚の間は長く急度定法に罷成儀に候へば、中々一往の事には被仰出がたく儀に候故、今以其僉議未相済候、其に付間部殿、井伊掃部殿へ被申候は、文昭院様御代斯様の儀被仰出候節は、新井筑後守に御相談被遊其上にて相極候て、筑後守へ被仰付文言など相定り申儀に候、此度杯も其通可被成候哉、但各様御僉議の上にて一決致し候はゞ、林大学頭など可被仰付哉と被申候処、井伊殿追取て被申候は、其儘文昭院様御時の通に被成可然と手前は存候由被申候へば、御老中の内「多分秋元馬守の被申候か」文昭院様御存生の時さへ筑後守に御相談被遊儀に候へば、まして只今は左様の人に異見をも承不申候ては罷成儀に候間、掃部殿御申候通其儘御前代の通に被成可然候由被仰候由に御座候、私新井氏へ申候は、是は珍重の儀に存候、左様に候ては御自分にも御勤被成よき儀に御座候、其上井伊殿、秋元殿など一向愚成人にて、如何様共只今迄の通と被申にては無之候、何も發明成御衆に候処、左様に御申候儀は、日頃御自分御料簡無残所と信向故にて可有之存候、然れば行々はあの御衆も、御自分へ御相談有之様に自然と可被成候様に存候、童蒙求我の時節可罷成と存候て、別て珍重成儀に候由申候、此処三美有之と奉存候、第一は、間部殿無我的人、其上毛頭おこり被申氣味無之、御老中と和し被申候故にて御座候、第二は、新井氏被申処理に当り、且又為人も兼て御老中方被聞及故にて御座候、第三は、御老中方自分の威を振候て權を専に被仕候事少も無之様に御座候。

318◆一 金銀吹替之事、何とも急に難成儀に付、只今銀十貫に七貫目程赤銅交り候、是を吹抜申に銀夥敷入申儀に候、其上其雑用是又夥敷儀に御座候、第一銀天下に夫程無之候、其内不意に鉛かな山より出申候か、又は銀出申候か何とも近年の内に直り申儀も可有之候、左なく候ては勘定衆などよりの積五六百年もかゝり候て、其後は元の銀に可罷成由に候、去とも頃日色々料簡致し、二十年程の内には先元銀可相成とつもあり申候、此事只今の難事に候、是に付ても萩原事天下へ害を残し申事、古今に無之程の大賊にくきやつに候由被申候、私申候は、左様に候はゞ銀の相場御あげ被成可然存候、兎角金銀は天下の宝に候へば、昔のごとく品をよく被成候様に、百年二百年立申ても御捨置間敷儀は御尤と奉存候、然ども左様計にては金銀の直り申時分迄天下の難儀、兎角可申様も無之事と存候間、其内銀の相場を先あげ候て、天下一統金一兩に六十目に相定度物に奉存候、是は上の御下知次第の儀に奉存候、此相談を被成御覧候様にと申候得ば、新井氏只今相場を改申儀も成申候へども、夫にては人を損じ不申候ては、成不申候、三十人ほども損じ申候はゞ、成可申候、其様は銀の相場をさげ申儀、是皆両替屋共の仕る儀にて候、銀相場を下げ、金と両替の間に利を取候儀に候、憎きやつ等にてても何も申合にて仕候故、僉議仕懸り候ては大勢人を損じ申儀に候、頃日深美新右とも申候へども、新右合

点不被致候、米穀と申ものは、能き米は味うまく、悪敷米はたべにくきに付善悪かへられぬ事に候、其外布帛の類は、能き布帛は濃やかにて膚当りよく、悪敷布帛は着用に悪敷候故に、是又善悪にて価高下仕事尤にて候、金銀と申物、善悪はいろの詮議迄にて候、只今用ひ申す悪銀を用ひ候ても替り申儀は無之候、何によつて銀を只今抜群さげ申候哉、たとへば玉などの様にかざり物などに致し申儀に候へば尤に候、金一兩六十目と申御定候処、悪銀とて八十目にも仕事難心得儀にて、夫を申候へ共新右杯合点不被致候由被申候故、私申候は、遠くは申不及候儀にて知れ申儀に候、只今の錢永楽通宝杯の古錢に比し候ては、至極に色悪敷品下り候へども、昔永楽錢にては金一步を一貫に致し候得共、唯今二貫文に仕などと申儀は無之候、悪敷錢に候得共通用の上は古錢と替り申儀無之候、総て金銀貨幣は時王の制令次第に御座候、米帛とは替り申由申候へば、新井氏錢の事は扱て氣付不申候、近き事にて能埒明申とて欣被申候、扱私申候は、三十人が五十人にも被成候へ、此者共故に天下の難儀に罷成儀に候へば、一々はり付に被成候ても不苦候、それを御用候て天下の難儀其儘御覽候事、天地の心にも叶ひ申間敷候、天地の全徳仁を主と申儀候へども、少しを害して多を養申儀は天地の心にて、況や罪過難逃もの共にて御座候、是は合点難仕由申候へば、成程其通りの由被申候、何卒難成儀外にも有之かと奉存候、さて来年比よりはや少々銀能成可申と被申候、如何の儀に候哉子細不承候、只今銀吹替申事大分の銀入申儀に候、此鉛天下に無之候、其上御入用至極大分の事に候、只今上にも金銀無之候故何とも不罷成候、其に付色々工夫致し候処、とかく上に御損不被成候ては不罷成候、天下の悪銀をそろ／＼錢にて御買上被成候て、其御買上被成候を、段々に吹替被仰付候様に仕候はゞ、当分世上に錢も沢山に罷成候て能有之候、金銀は只今すきと山に出不申候、錢は何程も出来申物にて候由、此料簡も成程おもしろく御座候、色々に工夫を費し被申候と見へ申、間部殿にも先日染み／＼と札を被申候、片うでの如くに存候間、随分息災に居被申様にとの事に御座候由承候、左様に可有之儀と奉存候、「段々少しづつよき銀に罷成候へば、此好き銀をおとりにして世間にかくし置、古銀をすひ出し申べきにて候、奉行中吹替候へば有銀へると御心得候て、世上にかくれ候古銀を吸ひ出し申事不被存候由被申候」

320 ◆ 1 間部殿賢明の事文昭院様御他界の砌、奥方御三所迄有之、就中月光院様御儀御他界の日より御威光自然に各別に罷成候、女中の儀に候へば、色々附く者共中より浮説共も有之候、一日天英院様老女中を以間部殿へ被仰入候は、御所生の御子無之候ても、鍋松様御儀日比御養子にても有之候へば、各別の儀に候得共左様に無之、外に此以後御便りに被成候方も無之候、京都は御故郷の儀に候へば、京都へ御越被成御暮被成度被思召候、此儀残りし老中方にも相談致候て給候様にとの儀に候間、間部殿即時に御返答被申上候は、此儀難訳儀ども候はゞ残の老中杯へも為申聞候て、其上にて是非の御請可申上候へども、是は僉議にも及不申儀に候間即刻御請申上候、鍋松様御儀、御所生にては無之候得共、御嫡母と申候時は、御前様より外に誰を可申哉、其上先上様御存生の内より御前様御養子に可被遊管に候得共、御夫婦様御相談の上、兎角只今迄御養子被成候へば、御育ち不被成候間、此度は格を御替可被遊由にて御苗字を世良田に被遊候、是は御前様にも御相談の上にて、態と左様に被成候御儀に御座候、然れ共此以後御嫡母様の御儀に候へば、御一生はなれ不被遊候て御養護被遊候儀簡要に奉存候、近頃恐入申儀に候へども、先年一度京都を御出被遊御一生の内ふたゝび京へ御帰可被成と被思召候はば御不義と奉存候、此処を第一御覚悟被遊候様にと被申上候由、其後天英院様より又被仰出候は、先日の儀は少御聞替被成儀共有之候故にふと被仰出候、然る処越前守被申上候所一々尤至極に被思召候、左候へば此事すきと思召切られ候間、老中杯へ申儀無用に可仕旨被仰出候由、其時間部殿又被申上候は、如何様の儀私へ被仰聞事有難く奉存候、此以

後とても思召寄られ候事何によらず私迄可被仰聞候、私儀は御存知被遊候通、幼少より先上様御心安被召仕者の儀に候へば、御隔心可被遊儀は無御座候由被申上候、是等など指当り無残処御返答と奉存候、此度女中方衣服の定出申時分も、間部殿より先天英院様、月光院様へ被申上、只今儉約の時分に候故老中僉議致、第一女中衣服の儀申出候、然ば第一上より儉約不被遊候ては法立不申儀に候間、向後御近習始め衣服儉素に罷成候様、急度被仰付可然奉存候旨被申上候得ば、成程被得其意尤と被思召候、左候へば老中方より急度書付越し被申様に致し候へ、夫を以て可被仰付由に御座候、御所様ともに賢女の由申儀に御座候、勝田帯刀殿〔月光院様御舎弟〕当御代に罷成御加増被下候砌、松平兵部大輔殿〔兵部大輔清武後改右近将監、文昭公同母弟〕招請にて、向後別て可申合旨にて色々馳走御座候、其後月光院様御聞被成候て、兵部大輔殿へ被申入候は、近比存の外成儀と存候、御自分御儀只今時分杯、急度おもく敷被成候てこそ御為にも可然候、然る処帯刀事は若輩者の儀に候処私兄弟にて候とて、俄に御呼候て御馳走杯被成候儀御似合不被成儀と存候、其上若き者に候へば、万一私などをかうにいたし、驕申気味も出来可申哉と是のみ無心元存候処、御自分杯より左様に結構に御あしらひ被成候ては、此者の為大きに宜しからぬ儀に御座候、此者の為不宜候得ば、畢竟私為にも大きに不宜、近頃御恨に存候由急度被申入、兵部殿殊の外弱り被申由に候、上野の准后もとより追従成る人にて、常憲院様御時は松平美濃守に御取入被成候て、御前よしにて御座候、文昭院様とは殊の外あひ不申候て各別に罷成候、然る処に御他界已後、月光院様へ被仰入候は、天台に秘密の祈禱有之候、至極御秘法にて御自身にて御執行被成儀に候、文昭院様御病中御願も有之候は、執行可被成と被思召候得ども、御願も無之、其上其節少御別行之御障も有之、御執行不被成候、当上様御繁昌の儀祈禱可仕様にと御頼も有之候は、御執行可被成候由被仰入候処、月光院様御返答承成儀にて候、辱被思召候得共御頼被成間敷候、第一被仰聞様乍推参合点難仕候、先上様御存生にて候得ば、天下の為と申上様御為にも是に不過御儀に候、唯今当上様御幼少にて天下の主に御成被成候事、御仕合と申者も可有之候へ共、御不幸と申物に御座候、然る処先上様御病中に、左様の御秘法御執行も不被成候て、只今当上様御息災の為、御祈禱可被成と被思召寄儀私共承り候て、曾て異議とは不奉存候、其上天下の為と申又は申にくき儀に候へども、段々武家の御厚恩御請被成候儀に候得ば、御頼不被成候とて、上に御繁昌可被成儀に候は、万事被指置御執行可被成儀と奉存候、御頼被成候に及不申儀に御座候、兎角思召次第に可被成候、此方より御頼申儀仕間敷由御返答にて候由、御親父只今隠居にて帯刀殿に一所に居被申候敷、是は此以後何程御知人に罷成度と申者有之候ても、必御逢被成被下間敷候、私為被思召候は、すきと外交御やめ被成可被下候、されども只今迄御懇に被成候人を御捨被成間敷候、新敷御知人御求め不相成候様にと常々被仰込由にて、是等皆文昭院様御遺徳故にて御座候、外戚等の勢を強く御抑へ被仰候を兼々能御存知に候故如此御座候、社稷の福に御座候

323 ◆一 文昭院様御質朴成御儀見事成事、いまだ西丸に被成御座候内、講筵の上にて御咄に罷成候て、誰はしわきものなど、僉議有之候、新井氏被申候は、しわきと申儀聊尔には不申儀と奉存候、費をはぶき候て節用申事、しわきに似申ものに候へば、万一方をしわきと批判致し候ては大相違と奉存候、つかひ可申節に臨で金銀を惜申者は、しわきと申物に御座候、私事少存寄にて人をしわきと申事は、只今迄終に不申候、其子細はしわきは臆病の唐名にて候、命と申物は、金銀の様なる事にては無之、第一をしき物に御座候、其に合候ては至極軽き金銀をさへおしみ申し候間、まして夫よりおしき命をば捨兼可申と存候、左候へばしわきと申批判は、聊尔に不罷成候、実にしわく候ては、臆病者と存候間、人をしわきと申儀能心付候へば、大切の一言と奉存候旨申上候処に、

御驚の御様子にて越前守方を御覽被成、向後しわきと申事を被仰間敷ぞと上意の由物語にて候、是等にて御生質の美成儀存やり申候、今以て御遺徳残り候て是程に御静謐に御座候、御老中方の手柄にも候得共、第一は御遺徳故にて候、(閏五月九日)

同年五月廿四日 以下四条

324◆一 昨日新井氏方へ罷越候処後藤参り居候故、金銀等の儀に付御用有之対談と存候間、他之座に指控、後藤罷帰候て夜四ッ時迄嘸罷帰候、此間御用の儀差支候て、氣分の養生も不罷成候故、氣分も悪敷候由に被申候、夫は五七年以前とは各別に可有之候、私杯も次第に精力衰候て年々に其覚有之儀候由申候得ば老衰にては無之候、六七年前は如何程昼夜精力尽し候ても、何の詮も無之様罷成候故氣の毒成のみに候、少々遠き慮り有之儀を申候へば、間部殿の外合点いたさるゝ人一人も無之、曾て心を留めらるゝ事には無之候、頃日も土屋殿被申候は、儉約等の儀追付被仰出候とも、去々年出申候武家諸法度の様成難き文言にては、天下に合点仕る者有之間敷候、林大学頭なども合点参りがたき事共有之由申候間、左様に御心得候様との事に御座候、去々年の御条目程の文言を大学頭合点不仕儀にては、儒者とは申間敷候、責て是程の事成共よみ候て、合点仕候様にとの文昭院様思召にて、色々御心を被尽候て天下の御政令に急度被仰出たるものを、夫を守り申第一の衆ヶ様に被申候ては、其下々の人に守り申心無之筈と存候、土屋殿、林大学頭を臆負に被仕候故、某杯をにくまれ候と被申儀にて可有之候得共、上を軽んぜらるゝと申ものにて候、天下の老中杯の被申儀にては、無之由被申候、唯今専茶湯を好被申、下屋敷にて毎度宴会有之、それへ参り候者、御静謐御繁昌の儀、又は追従輕薄のみ申候故、少も六ヶ敷儀は曾て不被致食着候て、一身のみ専に被仕候、諸役人などの不届成儀ども急度責問被致事など殊の外嫌にて候、是も日頃ぬし達懇に被仕置候に付、悪事聞被申候ても色々其者のため申わけ被致候て、通し候様拵へ被申候、天下の御為存知被申事は少も無之候、秋元殿よく候へども、是も無欲成処は抜群に見へ申候、世に申す上手つくと申類にて何の益も無之候、唯今上御幼主に候得ば、土屋殿、秋元殿など、被申次第にて候、間部殿力にて及申儀にて無之候、畢竟某杯は言用られ不申候へば、引退候て済申儀に候、間部殿には各別の身に候得ば、難儀至極成事に候、頃日氣分滞申候、人の精根も限り有之儀に候間、あの様にては、続き被申間敷と存候、此人一人にて天下の事を御苦労に被致候、日夜力を被尽儀に候得共、一髪を引申様成事にて危き儀と存候、頃日もあの寸隙なき中に、文昭院様御時公事沙汰の事を御苦労に被遊、間部殿を評定所へ被遣候へば、今以其思召を忘れ可申儀にて無之とて、十日程の間毎日評定所へ自身被出公事聞被申候、殊勝なる事と存候て感涙に及申候き、然る処に六ヶ敷公事一ツ二ツ有之候が、是を第一間部殿御出の時分及決断候て、役人中の智恵の程も相知れ可然儀と存候処、六ヶ敷公事をば指除候て、何の手間もいらぬ事而已沙汰に及申候、彼六ヶ敷事共、役人中の手前あやの有之、不審に及可申儀共をば差除き申候て、他日に埒明申候、間部殿をも騙し申候、是を後に聞被申候ても、老中初評定所諸頭、諸奉行一味に候故、何とも穿鑿不罷成候、先日も衣服の御定出申時分、いまだ不出以前に、町奉行より呉服所共出入の者方へ内証しられ候て、急に五百目以上の物売拂申候、斯様成事にて無是非儀共に御座候由被申、大息の体に候、私申候は、難治至極の病人と存候、夫は大承氣湯の症にて、四君子湯用申様成事にては、死に至り申儀無疑候、況や四君子にても無之、折漕まじないの類にて日を送り申様成事に御座候、去共間部殿一人有之内は、未だ元氣有之と存候、何卒此人息災に候様と念じ申儀に候、其処へ御城よりとて大巻の物二巻に間部殿の書状相添参候、其紙面も見申候、何やらん一条／＼自筆にて被申越候て、末に此間被尽御精候事は今に不初儀に候、此節別て可被尽御精候由被申越候、間部殿只今至極難致処置にて御座候処に、誠意懇切少も倦不被申、御為を存知被申、

大小の事一人して苦勞に被致候儀、扱て難有人と奉存候、秋元殿此砌身を捨て天下の事に任じ被申、残の衆も厳愼有之様に候へば、間部殿為に能き儀に候へども曾て左様無之、少にても外の衆の耳に障候儀は遠慮の体に候由、残念成事に奉存候、井伊殿材力は相見へ不申候得共、家風を守り被申処有之急度相見へ、此人只今柱石の臣に御座候由、新井氏被申候、是は文昭院様より御取出し被成置、只今社稷の為に罷成申候。

327◆一 頃日年寄へ町人に材有之者有之候て申候は、物価騰貴の事色々御詮議候へども、左様の僉儀にては、枝葉の上に候故、中々参り申間敷候、兎角武士には諸役人、町人には金座銀座始め、呉服所等の頭立申者共の人柄御吟味被成候て、相応廉直成者其威權をとり申様に不相成候ては立申間敷由、紙二三枚にて謂れを委敷書立候て見せ申候、尤至極成事に候由被申候、私申候は、是は最初より申儀に候、人材を撰申儀政の第一にて候、何程勇者にても、刀脇指きれ不申候ては働不罷成候、上より儉約の法度何程水も不洩被仰出候ても、それを守り申人悪敷候ては、法に依て色々姦曲を致申候、先日も申通人材無之とは不被申候、上より御求め被成候は、出可申候得共、只今御老中初臈負を以御撰挙有之、間部殿など被仰候ても用不被申様子にては、不及是非候、第一御老中方は只今迄仕来候役人等日頃氣に入罷在候故、指替の儀不同心にて諸役人共も随分手入を致し置候故、只今動し申儀不相成候、文昭院様には夫を能御存知被成置候、唯今御存生に候は、改り可申由被申候、如此候故人材下に有之候ても、誰有て挙可申様無之候、其上江戸には人材無之由被申候、是は先よりも左様承り候、是は如何の儀に候哉と申候へば、新井氏被申候は、畢竟御籙本中不学故にて候、日頃学問曾てはやり不申候故、数十年以来此風俗に化せられて、一人も古風を守り申者無之候、国方とは替り申由被申候、私申候は、不学にても性質廉直成者有之間敷とは不被申候、学文はやり不申故人材無之と申儀は一概の論と私は存候、但頃日致料簡見申候に、江戸には国方と替り候て、人材すきと無之と申儀一理有之候、譬ば物を煮申に、火氣盛に候て転化の力強候得ば、其物能にへ候て殊の外風味よく候、江戸は天下の勢にて運化の力強候故、人材も風化の強きに依て一時に転化仕候、其故名人伊豆殿、酒井空印等の様成人材は、国方は火氣弱く候て煮兼申候故にて候、然共只今は余りに煮過候て、残の様に罷成煮くさらせ候て、何の風味も無之様成物にて候、他国は火氣弱く煮兼申候故、唯今は却て生煮に候へども、いまだ風味残り申様成物にて候、此理は成程可有之と申候得ば、新井氏も殊の外感心にて御座候。

328◆一 儉約等の御書出の儀、新井氏杯存寄の趣はとくに埒明居申候得共、土屋など何角被申候て于今埒明不申候、定て頓て出申にて可有之候と存候、文昭院様御時の御格にて、ケ様の儀間部殿などへ御相談にて相極り其後孰れ被仰出候、先其分に罷成候へ共、只今は文昭院様御在世の御時とは替り、御老中の方に政柄有之候故、間部殿方より新井氏など料簡の趣其儘被仰出事、何も不同心の儀有之かとは私推量にて御座候、只今の時勢左様に相見へ申候、此上にも御老中方面部殿など隔出来不申候様に仕度候、和順にて候へば十の内ニツ三ツ程は行はれ申儀に候へば、責ての頼に存候、金銀吹替の儀、先書にも申入候通、只今何とも不罷成儀に候、錢にて悪銀を上にて御買上被成候て、そろそろ少し宛成とも、吹直し申様にと申簽議も有之と見へ申候、又は只今上に灰吹等の銀中々吹替申体無之候、其上金銀共に上にも御拂底に候へば、吹替の雑用も夥敷儀にて不罷成候、そろ／＼改め申にては二三十年も以後はもとへ戻り可申積り有之由、夫まで上方辺西国などの難儀に候へども、銀の相場をあげ候て可然旨私共も左様と存候、夫共何卒はかどりに可申仔細も有之候哉、とかく御簽議と見へ申候、外に何卒術も有之候哉、不存寄事にも可罷成と奉存候、此儀は省略いたし候。

同七月廿三日 以下一条

329◆一 昨日水戸様御屋敷へ罷越、小池七左衛門に逢候処、此間中納言様御城より御帰被成御物語被遊候由、御三家方御登城候処に、上様御上段のきわに間部殿伺候、御三家御目見被遊候、宰相様にも少引さがつて御着座候処、御三家様へ是へ近ふと御直に上意にて、何れも御礼被仰上候処、御立被遊候て、御自身に御文庫を御取被成候て、右の御座へ御着被遊候て、間部殿にあげ可申旨上意に候故、あげ被申候処、御自身に御文庫の内より御鼻紙袋御取出し被遊、尾州様へ被進候、其後紀州様にも何やらん被進、水戸様へは御巾着を被進候由、水戸様是をさげ候てわかやぎ可申と、一入難有奉存候旨御礼被仰上候、御尤成御挨拶被申候由、其後宰相様へも右のごとく近ふと上意にて、是も何やらん御取出被成候て、是は間部殿迄御渡し、間部殿御取伝候由に御座候、「宰相様御拜領無之様にも申候」其後井伊掃部頭殿より俄に御側衆上使に御越候、何事にて候哉承候へと御城使の者へ被仰付候処、承候て申上候趣は、上様御膳被召上候時分、きすのひらき申候焼物少し御手附申由、掃部ぢいは食事はや仕候哉と御尋御座候、井伊殿掃部宅以後にて候故其旨申上候へば、いまだ食事不仕候はゞ、此焼物たべさせ候へと被仰候故、俄に二重に家致し候て井伊殿宅へ御側衆為上使被参候由、掃部殿殊の外難有がりにて家来中迄祝儀の恩賜有之、其後右の上使を招請、料理の上に金五枚、折紙の刀出し被申候由七左衛門物語申候、兎角勝れ申候御性質と乍恐目出度儀に奉存候。

330◆一 先日井伊殿へ間部殿招請か、又は間部殿へ井伊殿被参候か、其段はとくと不承候、勝手へ参候衆直に見申候由にて物語の旨、きゝ申六太夫殿と被申候、料理の上に盃一出申候て、互に辞儀は有之候へ共、終に間部殿先に吞候て掃部殿へさゝれ候由、間部殿御威勢驚人申旨に候、以上。

330◆一 七月廿六日の夜、尾張中納言殿御逝去に候、尾張御事天下の御為と申御笑止千萬に奉存候、此度饅頭を参り候て御食傷とは申候得共、日比不養生御酒過申候て常々吐血被成候由、当年廿五歳に御座候、夕七ツ時分より少々御滞にて御登城無之に付、其後鳥居伊賀守殿為上使御尋の処、段々御快候て、廿八日には御登城可有之旨御案内有之候処、廿六日俄に御逝去に候、余急成事故何角雑説ども有之候、鄭莊公と姜氏との事に似申儀有之、御母堂とも近頃迄御対顔無之様に承申候、是は御家中と彼母氏と不和故より起り申候、実は御母子の間は無別事候、此度は医師も手に逢不申体候故、人の不審も有之候、万一彼母氏方より御近習家老中の方とがめ懸り候はゞ、御簽證なども起り可申哉と申沙汰に候、因奥村子復兄中風の症来示の書

331◆一 此度御病原第一御氣鬱より差発り申と存候、氣鬱候へばめぐり不申候、氣巡不申候へば血も滞り候処、一朝無遠慮御勞力過節候故差出申にて御座候、前書に韓文上張儀射書の儀申進め候、「退之上張儀射論擊毬有之候、是は子復兄中症は劍術より発起仕候故に候、元来人身五臓の繫絡甚微に候処、勞力過節候へば必貽害候不足怪事に候」定て御覽可被成と存候、先年御要職以後、神氣鬱の事無余儀御事に候得共、是以御料簡可有之儀に候、聖人憂時の心と楽天ものと、並行不相悖との事能御存知の儀に候、学者は聖人を師と仕候より外は無之候、然れば面々相応に人力を尽し候上には、泰然として罷在候外は無之候、時勢不可為候処は、雖聖人可被成様無之候得ば、況や其外之者力及可申儀に無之候、ケ様の処唯今迄書上にて御簽證とは替り、事物に御応接被成候て、思召の外成儀も出来、其処にて御工夫も増進可仕候、是又能御字問にて候、魯班が攻を受けて後、日頃路岐に泣申事を悔可申との詩作は致失念候伝霖が贈張詠詩かと存候、是は墨翟が故事を借て、張詠が政事に預り候以後の思案、前に存候とは違可申との儀に御座候、日比路岐の不一事を嘆き申は、未だ大様の分別にて候、魯班が雲梯の攻を受けて難儀の時分、日比路岐に泣申候分別にては不参儀初て合点仕候と申儀にて面白存候て、人にも咄候得共句を忘れ申候、幹案、伝霖贈張詩未考、及弟後以詩寄伝霖、逸人云前來失脚下漁磯、苦恋明時未得帰、寄与巢由

莫相笑、此心不是愛輕肥、是見名臣録、但与此所言異也。

332◆一 金銀吹替の事に付委細被仰越趣致承知候、新井氏頃日改貨議と申物を仕立申候て上被申候私に草稿を内見仕候へとて越被申候、扱て詳細成もの驚申候、上下二巻附録一卷にて候、勿論かな書のもの候へども、文章の明白成儀、事情懇成事、しかも忠孝の意を不失候て、唐陸宣公奏議の外は見不申候、誠以經濟の材と存候、中々行はれ申間敷候得共、文昭院様此儀は御苦勞に被思召候儀に候へば、挙て行はれ候様に此方より申入候間、其上にての用捨はあなた次第の由被申候、尤に存候、御奉公も是迄と存候由に候、以後何とぞ写し置申度存候、後世国史出来候はゞ、是等平準金貨の闕を補可申書と存候。

小谷兄 七月晦日来書

332◆一 尾公薨去の事兼て御病氣の沙汰も無之に付、江戸中上下共相驚き申候、去年御養君御成被成候て、此砌又々天下の騷動に可有之処、責ての儀と存候、去る十三日より少々御疝氣心に付、御近侍の医何某葉御用被成候、輕き御病症と存御家門方は不及申、御家老杯へも沙汰不仕候、危急に相成候て何れも御越被成候得共、最早御逝法の跡にて、松平摂津守殿杯殊の外立腹の様子にて、其砌罷越見受候由にて洪江通玄院物語にて候、脇の取汰沙には、成瀬隼人正も立腹仕候間、右侍医は其分には有間敷と申候。

八月廿三日書

333◆一 当十五日夜、新井氏へ昼より罷越深史に罷帰候、十六日亡女忌日に候故、十五日夕は例年何方へも不罷出候得共、新井氏方の会は珍敷と存候故罷越申候、新井氏即席の作始て見申候て驚申候、客と対談指て思案の体も無之処、和歌等段々出来、其上即席の詩に候へども、何も語熟し候て面白儀、即席に斯様に能仕候儀は中々私共及不申儀とて、其節も感じ申儀に御座候、深見新右、南部権蔵、益田助右衛門と申候て、本町五靈膏売の主人富有成者にて、二十年以来毎年仲秋には宴を設候て新井氏を饗応仕候、一兩年は酒食を新井氏宅へ致持參候、当年も右助右衛門亭主にて候、南部権蔵始て逢申候、存外老成に御座候て珍重存候、当年十九の由に候得共、利発にて指出候処能奉公人と見へ申候、内に断申置候由にて是も夜迄居申候、深見以下の即席は疾と覺へ不申候、私作も作り捨に仕留置不申候、尤いづれも見所無之詩に候へば、取集候て此度其元へ進申候に不及候、新井氏詩ばかり書付候て進申候、「別記之」一昨夕又参りて緩々咄申候、当月四日増上寺御廟出来に付、宝鐘を鑄候て懸け申候、鐘銘内々林家へ可被仰付かと申候、新井氏へ被仰付候、銘は新井氏筆者は深見氏にて候、夫に付私へ相談の儀有之候て参り申候、銘は至極短く候得共成程古雅に見へ申候、只今迄日本にての鐘銘とは各別成ものに御座候、重て写し候て進可申候、常憲院様御廟の鐘銘をば林家著申候、此度は間部殿より新井氏へ申来候と見へ申候、老中の内林家鼻負之衆も有之、新井氏とは不相口に候へども間部殿威勢強きと見へ申候、唯今は老中方間部殿へ急度仕たるあいしらいの由、是は流石老中方殊勝成事と存候、然ば籓本中過半は間部殿、次は新井氏を譏り申候故、間部殿を驕り候様に沙汰仕候、新井氏をば林家より譏り立申候由見へ申候、其故林家と被仰通候、大名衆は何も新井氏を能不被思召候と見へ申候、先日承候へば宰相様御発駕の砌林大学頭方へ御暇乞御出被遊、九ツ時より八ツ時過迄御出被成候由、御懇意成儀と皆々沙汰仕候、是も新井氏にて承申候、文昭廟鐘銘著申に付、御代々林家より出し申候銘共見申候処、「奉懸武州東叡山嚴有院殿廟前」と申題号にて御座候、絵馬の様に候とて笑ひ被申候、東叡山と申候て武州より外には無之候、武州東叡山もをかしく候、此度は縁山文昭廟宝鐘と申題号にて、是は一面に大書致し、銘は小さくくると廻文に仕筈の由に候、銘も書経詩経の詞を取候て、随分古雅に相見へ申候、十句程に可有之候、長くは不入ものと被申候、成程尤に候、縁山は増上寺の山号三縁山と申候。

334◆一 頃日間部殿増上寺へ参詣にて候故、被帰候時分、越前が迎に可出と上意にて御



玄関まで御出被成候、越前殿被參候へば越前歸りたるかと被仰候て御悦被成、越前殿に御抱かれにて入御被遊候由、御城衆の咄にて承申候、如何成奇縁に候哉、御親子様共に斯様に御意に被成候事、珍敷儀と皆々沙汰仕候、是は御馴染候故可有之儀に御座候、右之通に候へ共、殊の外越前殿を御おそれ被成候、御わやく被仰候時分、越前守に為聞可申と申候へば其儘御止被遊候由、少にても悪敷筋の事は、越前守殿急度被仰上候由に候、左様候へば結構成御儀に候、乍恐奉感候御儀に候、越前守殿好人には極り申様に存候、何とぞ蒙養正しく候様に朝夕被致候へば、天下の大幸と奉存候、此度尾張殿御逝去の儀も承候へば、御幼少の時分近習之者悪敷候て、十二三より女色の儀有之由、幼少にて情竇開候ては必天死仕るものにて候、幼君養護の事大切成儀と存候、此処間部殿一人の責に候、文昭院様もそれに似申儀ども有之と申候、其故御幼少之時分、御傍に旧功の衆後迄御取立不被成候衆有之、人々不審に奉存候、是は御幼少の時分御不養生の儀御進め申上候事不届と被思召候故にて候、兎角幼少の傍に居る人は、大事の儀と奉存候。

335◆一 新井氏被申承候朝鮮人、赤穂義士の事間候て感申候由、夫に付宗対馬殿家来など、五万石にては千騎も可有之処に、其中に纔四十七人はすくなきと、是は謙退して申と見へ申候、夫を承候て朝鮮人申候は、左様は不存候、孟嘗君、平原君などが客三千人有之候得共、鶏鳴狗盜の類迄にて一人も義士は無之候、赤穂侯はいか成人に候哉不存候へ共、能家来を多く持被申候にて推量候へば、常の君にては無之と殊の外感じ候、御奇特成事と存候、夫に付対馬守殿家老平田直右衛門と申者、先日私義人録をかり候て自身に写し候由、是は朝鮮人へ渡し候て、事の委細を知らせ可申為に御座候、とくより朝鮮人に此事の始終を知らせ度候へども、仮名書の物計にて何とも難成候処に、私義人録にては無残所通じ申儀に候間、早速写し候て遣し可申旨申候、此度私義人録を文章に仕置候故、外国に迄四十七人の事相達申候、是は四十七人へは余程の奉公かと奉存候、夫に付義人録に常憲院様御儀を將軍と書き申候、外国にて見申候て一円合点不仕儀にて御座候、上様を將軍と申儀、日本の称号ながら至て不当の儀に候ゆへ、いか様にもこの二字を改め可被給旨新井氏へ頼置候処、先日承候得ば、大家と改め候由被申候、其許に有之義人録も、みな／＼將軍之二字大家に御あらため可被成候、(以上三条 八月廿三日)

同九月七日 以下三条

336◆一 当月八日新井氏へ參候て深更に及申候、頃日は隙に罷能成緩々休息候故、詩又は細工など致し候て慰申候て、気分も段々快復候由に候、冑のしがみなど古式有之、細工に致し候由にて相見せ被申驚目申儀に候、絵も余程成申候、兎角英材と存候、去共英傑に候へば、詩文細工など為致置候事、其身慰には罷成候へども、嘆敷儀と存候、先日劣甥迄遣申候私詩に「徒使豪傑弄雕虫」と申候、此儀に御座候。

336◆一 新井氏被申候は、頃日宗対馬守殿儒臣雨森東五郎より書状差越申候、今度文昭院様升遐に付、朝鮮より弔慰の使対馬迄参り候に付、其答礼の為当表使者被申付朝鮮へ渡り候て、客館に十日程も致逗留候て、風俗等の様子見申候に、民庶耕作に精出し、風俗敦厚に見へ申候、尤都へは入不申、境上に罷在候得共、日本の風俗とは各別に御座候、日本は足利家御世之頃より段々華麗を競ひ、太平に成りては日々遊惰に相成候とかく朝鮮は中国に連り、其外外国の恐有之候故、油断不仕と見へ申候、敵国外患有之候は国の幸と奉存候、日本は左様の恐れも無之故、政事も衰敗、風俗も日々下り候事近世別てに御座候、只今賈誼陸贄などを置候はゞ、中々手を空しては居申間敷由申候、夫より前に御当代に罷成候ても、仮名書にては候得共、御法度の条目共見候に、其元の御文法と見申候て頼母しく存候よし申越候、其末に右の通に候得ば、雨森心有て申越と存候、我等返事に御申越候処一々御尤に存候、賈陸さへ見て居不申儀に候へば、況や賈陸たらざる者は弥左様に可有之候、但昔聖人退居被成候て後、陳恒弒君と御聞候て、其儘魯君へ御告被成、彼三子に告



よと有之候へば、何共可被成様無之候故、我大夫の後に従を以御告被成と被仰迄に候、三子へ御告被成候得共、三子も亦合点不仕候故、又右の通に被仰御帰被成候事に候、聖人さへ如此御座候、然所に胡安国春秋伝を著し候て、仲尼の此挙先発して後に告は可也と被申候を、朱子も同心と見へ集註に取被申候、乍去我等存候は、聖人は動容周旋中礼事に候得ば、聖人の被成事に誤りは無之事に候へども、胡安国、朱子は少々まだるく被存候哉、此評を下し被申候、其胡安国、朱子、聖人之挙動に誤り無之と申儀は、我等などさへ存ずる儀に候得ば、とくに合点可有之候得共、何卒存寄も有之候て如此被申たるにて可有之候、今其許の御料簡も、只今手を空して不居筈と被思召候、是は胡安国、朱子も聖人の上をさへ行たらぬ様に被申儀に候へば、御無理とは難申候得共、其時分魯に君在てしかも聖人の材にても、勢の不成所は可仕様も無之、唯告て御止被成より外は無事にて候、まして上に告べき君も無之候はゞ、御告被成儀も無之候てやみ可申候、高諭尤に候得共、未時勢をも篤と御合点不被成と存候、知時知勢は易道の第一にて、儒者の心を付可申所に候間、御工夫被成御尤に存候由申遣旨被申候、雨森氏当地の様子を遠境故とくと知不申故、新井氏油断の様に申越し候と相見へ申候、去ども志は奇特に奉存候、この人余程心懸け候処、先年長崎へ対馬守殿より学問の事にやり被申候へ共、長崎にて致遊興、其後在江戸の時分も、対馬殿より金子百両程貰ひ候を、一日に七十両使ひし由に候、総て宗殿家来遊女町へ不参者は無之由、一日に大分金銀遣申候とて、大気者として三宅氏は感じ申候、此儀は兼て新井氏も能存知被申候由、先夜も其儀被申、畢竟用に立儒者にては無之候、繕ひ者に候由被申候故、私も驚申候、斯様によく其為人を存知被申ながら、去年よき儒者と被申候事、流石人の長を拾不被申処感入事に候、中にも榊原事承り俗人にも無之作法にて候、死候て能御座候、余程博学に候故人も信じ申故、左様にては害を残し申候、最早此人もすきと頼には無之候、言行揃ひ不申は誰もはづかしき儀に候へ共、是程に相違候ては不足道候、風俗悪敷候故、余程有識の儒者も俗習に染申て、取失申事無是非儀と存候、其外南部草寿、榊原玄輔杯相見申候処は、成程好儒と見へ候へども、一人も悪所へ不参者は無之由、初て承扱て驚き申候、此儀其許気がさ有之衆へは、御咄御無用と存候、歴々名儒に左様に候と申候て、弥不苦儀と可存候、其元にも此類一両輩承及申候。

此一条は又例之通、火中被成可被下候

339 ◆ 一 諸籙本中へ簡略の御定書、新井氏料簡委細の書付を上置候得共、于今埒明不申候、日夜唯簿書期会のみ心を付被申、左様の処に及申衆無之候、御定五ヶ条にて、其外に委細の断書など有之候由、井伊殿、間部殿拜見被申候処、成程尤の儀に候、此上に我等など存寄は無之候、但是を一度に出し候ては事多に相成、諸役人合点不仕儀も可有之候間、先五ヶ条を出候、大略皆合点も仕候時分、追て委細の書付を出候様に仕候て可然旨被申候由、其内外の事共指つどひ候て、残の衆とくと不被致合点候内、又頃日久世殿老中に成被申候故、是へ見せ不申候ては成不申候、何角延引早速同心無之故、殊の外難渋の由に御座候、掃部頭殿是程にも奇特と存候、当年諸国洪水、殊に豊前柳川杯は海水溢候て大分の損毛、且又人家失人も夥敷溺死申候、夫故立花殿火消役など御免の由に候、大水よからぬ儀に御座候、兎角冷気盛なる故に候、此後後宮に威勢杯出来申べき哉、無心許儀と新井氏とも申儀に候。

已下三条 十月四日

340 ◆ 一 去月廿六日にも土肥源四郎と申同役の方へ罷越、終日夜迄語申候、土肥は新井弟子に御先代被仰付候、南部権蔵も参申候、詩は無之只学問咄共に候、何も経学の沙汰は無之候、新井氏も経学第一被仕とは見へ不申候得ども、兎角経学無之ては何事も無益事とは常々被申候、其身は豪邁に候故、経書の大義は明に候得共、精密なる事はいかゞ可有之候哉、先日も近思録殊勝の書に候、今以折々取出し見候て致自省申候、同じくは道体の篇

など不入物に候、克己為学のあたり親切成物の由被申候、道体の篇など不入物と被申候にて相知れ申候、

当月三日増上寺御法事始り、私共は九日に参詣仕申候、十四日以後御霊屋へ参詣の儀も申来、私共は十六日に参詣、光陰不留候て小祥忌に罷成、此節去年の御様子共存出、乍恐不堪追慕候、去共当上様御機嫌能、御法事等も俗礼ながら無滞恐悦の至奉存候、先日も御聡明の事承候て奉感候、今度日光御作事出来、御遷宮に付、准后にも日光へ御越候に付、為御暇乞先日御登城被成候故、兼て今日の御出家様は御送被遊筈のよし被仰上置候処、御帰の時分御中段よき程に御送被遊候、准后は畳の上に御つふりを御さげ被成候へば、上様は御つふりは御さげ不被成、ちよと御手を御つき被成御会釈被遊候、其御様子老成人も難成程の見事成儀とて、土屋殿など被致落涙候由に候、只今迄式日一度も表へ出御不被成儀無之候、是は間部殿手柄にて御座候、表へ出御の時分、女中老女一両輩は御供にて被出候、其外わかき女中も御鎖口迄被参候、女中のくせにて表へ出たがり候て、其のまゝ供奉可致と仕候へば、きつと御立ちどまり被成候て、是れにと上意にて候、其の故いまだ乳をあがり候へども、女中衆並御近習の若き衆など殊の外おそれ申す由承り候、一位様、月光院様へ御対顔に奥へ御入被成候時分、必ず御鎖口にて御立ちとまり被成、ひしりと立切鎖をおろし申すを、御きゝ不被成候ては御入不被成候、御出被成候時分も其の通に御座候由、月光院様書物御数寄、是れは真字の書を御よみ被成候由に候、只今専書物御覽被成候、是れは御心あつての儀と申沙汰に御座候、当上様にも御先代の御遺風御継被成、御学問被成候様に行く行くは可被成との儀と申儀に候、新井氏うしろ隣は勝田帯刀殿の由、御親父玄哲老も同居にて候、しかとしたる客来の沙汰も無之、しん／＼と相聞申候、少も繁昌の体は見へ不申由新井氏被申候、月光院様より日々其儀被仰遣候由、是等も国家の幸と奉存候、又一ツ尤成儀承申候、頃日紀州祇園与一郎より新井氏へ書状差越申候、先頃中納言様より被仰遣、学校と申す程には無之、学寮の様成る所国中に被仰付毎日被致講談候て、国中の士共に学問はげみ候様に仕候へとの儀に候、与一郎は頃日は是等一円不得隙候由申越候、与一郎外にも故老儒者も有之候処に、此の度最初に与一郎へ此の儀被仰付候事、規模に存候て大慶仕候由申越候由に候、定めて以後は儒者中不殘支配可仕候得共、最初に祇園を被仰付候事手柄に候、祇園氏も此後は詩計好では成申まじきと存候、中納言様平生学問の沙汰不承候処、学問致候様などの事、此の度の事御奇特千万奉感候、此節武芸の事抔嗜候様にも可被仰遣儀に候、然る処御留守の士共あなた方の被成儀は、天下の人目を付申儀に候故、ケ様に被仰出候と奉存候、尤成る御心付に御座候とて新井氏抔感じ被申候、殊の外強力の御生質にて、礼儀進退は御城にてもあらめに見へ申由に候。

342◆一 萩原近江守頃日死去の由申候、九月廿五日死、断食仕候由なり、一生の内天下の難儀仕出し、万民其肉を食はんと欲申候、糞下にて死候は大幸と奉存候、保山頃日弥淫乱放逸、無忌憚仕方と申候〔以上三条〕

342◆一 佐藤氏筆記の物を〔山崎嘉右衛門門人佐藤五郎右衛門、赤穂義士四十七人の輩を誹議して、忠臣義士にあらずと云〕先日遊佐次郎右衛門へ遣候処、頃日返書来候五郎右衛門議論を余り捨不申紙面にて候、只意思浅薄成事は不及申候得共、手短く能書取申由被申越、合点不参候、此儀に付遊佐氏至極の議論有之由、大方は四十七人の衆上に敵仕候様にて、氣に入不申候にて可有之候、只城にて自殺仕たる方至極と被存候哉、それなれば責にて御座候、若又兎角公儀へあたり申儀を不忠の筋と見被申候て、城を渡し一生隠居にて終身申が当然などと申儀にても可有候哉、此処も先年より私色々工夫仕候得共、兎角黙々として一生罷在候ては埒明不申儀と存候、たとひ寵臣にても、大悪人にて国家を乱者は、君の思召を不顧刺殺申すをば、不忠とは申まじく候、況や是は君父の仇と申者に候へば、外の僉議には及申間敷候、遊佐氏は私義人録余り氣に入不申様子に御座候、佐藤氏此

の筆記義人録とは格別の議論に候故、私氣に入申まじきと被申越候、可とやらんあなたへ同心の様子に見申候は、下一統忠義の士と褒申人を誹謗仕候事、人情に逆ふと申もの候、忠義の事は勿論、処置の処も大方義に中り申衆に候、少々出入の事は、又面々の料簡不同も可有之候へども、其儀には及不申儀に候、君子成人之美と申儀も候へば、是種の忠義に難を申事、君子の非本意候。

343 ◆一 国喪正議、同志の人へは見せ候ても可然旨最前新井氏と申合候に付、遊佐氏事格別の儀と存候て窃に遣申処、斯様の大切成もの見せ申儀別て大慶に奉存候とて被申越候、然共夫に付異論被申越候、兎角議論に及不申儀と存候て、其段申遣候遊佐氏紙面。

御著述に王と被遊候、帝王の様に惣体被成置候哉と奉見候、王と申事、漢唐の皇帝と国王との様に臣下を王と申候、此国にては諸王諸臣と申候て、王の字臣に見申候得共、是は王子王孫未賜姓の間は、姓氏の代の様に王と申を、オホキミと誦申候、漢唐諸国王とも違ひ申、我国帝王の外に王と称し候は尤無之候、然ば御著述の王は、帝王の事と相見へ申候、又王者勅賜にても御座候哉、仮令勅賜にても難被為居候半欺、乍恐御存生の御時に御安んじ御居り被遊候哉、又左様にも無之、勅賜も無之、下として只今推て、実は天下を知給ふ上は、京都は虚位、此方は実位と、只今各御議定の上に王と被遊候ては、別に王の文意をも被相立候哉、新井子御意も尤斯様に御座候哉、乍恐も將軍大納言二位三位などと申、御官位は何と被成候哉、王と申に斯様の官位有之ものに候哉、如何被思召候て如斯御書被成候哉、被遣候一冊を拜見驚愕仕候、手に取候も恐敷奉存候、雖末代始て如此に著述に書候を見申候て、嘆息不安奉存候、此一事にて御喪儀とても入不申様に罷成、天下後世の誹議可有之と奉存候、大事の御喪儀も是にておとされ、後世見る人も無之様に至り可申哉、世間に只今迄用來候様に御書被遊候ては、何の御指碍候哉、左候は、ゴ上には御謙遜の御志徳を顕し、下には我国家の事体に合、天下の人心に応し、喪儀の事も後世迄益伝り、天下の人心感服可仕かと存候、拙夫杯は日本国中大小の神祇を奉懸、此王の字見候ては動転仕、胸おどり心痛申候、筑州公も御同心に被成御座と益驚人奉存候、朝鮮へ御返翰に王と被遊とは及承候、此儀は林祭酒も御申候と承申候、乍恐も朝鮮の御事は、公儀の御事に候間、兎角申上儀も無御座候、貴体様御内々の御著述に、推て王と御書被成候は如何被相極候哉、乍憚も重て御示教被成下度奉存候。

#### 私より返書の趣

王の字の事勅許に候哉、但如何様の御僉議にて相極候哉、其段は不奉存候、足利家以来、外国の贈答に王と被称候事先例も有之儀に候へば、国書の儀は勿論、私共自分筆記の物も遠慮可仕儀にも不奉存候、秦漢以来皇帝を以天子の称に仕候に付、王号は一等下つて、人臣の号にも罷成候、日本も夫を字ばれ、既に天皇を以天子の号に被相定候得ば、王号は一等下り申候、其故和訓はいかやうにも候へ、親王又は某の王などと申事に候、皇帝の外に天下の刑政を主り申候人主有之事、外国には其例無之事に候得共、是は貴公の日頃被仰下候神国の風にて候はば、先其通に御座候、然上は皇帝の外に王と称し不申候て、何と称し可申候哉、王と申もの、將軍大臣など申官有之間敷と被仰下候、成程其通に候、然ば將軍大臣と申ものに、諸侯を朝し刑政を主り申儀可有之候哉、此儀は先年より奉受主教儀に候へば今更不及申儀に候、只聊御返答に及申迄に御座候、私筆記の物御手に御取候儀恐敷被思召候、且又日本大小の神祇を被懸候て御動転に被及候由、扱て御誠理成事に奉存候夫程に被思召候処へ、愚見杯申上候事憚多奉存候、此度筆記の物御写置被成候はば、早々御焼捨被成可被下候、御留置被成候事不入物、且は兼ての思召を妨申事に候、但斯申立候とて毛頭不平の氣有之候て申上候にては御神慮を以無之候、昔武王の征伐をさへ、伯夷叔齊は同心不仕、終に餓死にも及申候、其後孟子齊梁の君に王を勧められ候をば、司馬温公の大賢にてさへ、是を譏り被申候、尤忠厚の至には候得共、其故孟子を忠厚を害せられ候とも

難申候、兎角道は一偏には難心行ものと奉存候、右の聖賢大儒さへ議論不同如此に候へば、まして近世以来道の宗主無之、各其所聞を話し、各其所見を守候得ば、紛々異同有之筈に御座候、百世論定る時を相待申候。

右の通有増申分仕候、此等の見にて山崎神道の筋より固滞仕候て、不可救様に罷成申候、日本国王の事、日外長公よりも御料簡被仰下候、兎角王と称し申外は称号無之儀と奉存候、只今唐日本共に皇帝を天子の号に相定申候、朝鮮は唐の正朔を奉候故、清の皇帝に遠慮候て、朝鮮国王と称し申候、左候へばとて朝鮮の刑政は自国の所主にて清より構不申候、日本の武家も、京都皇帝へ遠慮にて、日本国王と称し申候、是又只正朔を奉じ申迄にて、刑政は悉く江戸より出申候、朝鮮の格と同事に御座候、若上に清朝無之候はば、朝鮮も帝と称し候て何事可有之候哉、日本も上に天子無之候はば、兎角刑政を主る人天子と申物に候へども、右の訳に候故帝号は遠慮被遊、王と被称候事当然之儀に奉存候、日本は神孫の天子百代不易にて、是は政事に御預無之其下に武家有之候て刑政を御主り被成候事、外国に無之事に候へば、国家政務に預らぬ主を帝と称し、政務に頂る主を王と称し、帝王二段に不仕候ては不罷成候。

346◆一 紀国の事成程其通に候、中納言殿日頃勇力の御聞へ有之、中々文学の儀杯は御嫌にて可有之と存候処御奇特成儀奉感候、先年御国にて鹿獵被成候処、猪を自身二ツ玉鉄砲にて御打被成候へども、殊の外大猪にて留り不申候て、真直に御前へ参候処を、右の鉄砲御取直し、只一打に御打殺し被成候、御歸の時分、右の猪を御かゝせ御帰被成候処に、十四五人にて昇帰候由、御大力と聞へ申候、〔臘月四日来書之内〕

同十二月四日

346◆一 林大学頭事弥不首尾と聞へ申候、頃日も承候得ば、七三郎、百助不和に候、其外林又右衛門は只今別に儒家を立居申候得共元来兄弟より別れ申候処、是杯も不和に候、門弟子各見限り申者有之候、頃日も承候へば先年孔子堂御建立候事、憲廟に御子無之故、大学頭申上候て孔子はもと尼丘山に祈り候て御生被成候間、御祈祷の為に、聖廟御建立被成候はば、御子出来可申旨にて御建立にて候、其身著述の物の内に聖堂開山林大学頭と称し申候由珍敷儀と申候、其許御家中共林家信仰の人多有之候間、ケ様の事御沙汰は御無用と存候、熊谷にて足輕の事、其許様より大学頭方迄被仰遣候旨の儀に候哉と申候、其に付ても頃日老中叱に合候て不理屈成返答物笑にて候、委細の事は筆紙に難申候。

十二月四日

同十二月廿四日 以下二条

347◆一 銀吹替の事、其後様子不承候、段々埒明申儀に候哉、元禄制に罷成候儀は承被申候、私承候は、古銀の通に罷成候様子との事に候、然共段々場所へ僉議替り候故、如何罷成候哉不存候、兎角唯今迄三四段の悪銀とも御取上被成、精銀に吹替候得ば、銀の数はすくなく成候へども、銀はへり不申候、勿論此度吹替候に付、へり目も大分の事に候得共、是は公儀之御損に被成候て、御足可被成との事にて、是に付先日も御勘定方役人衆の内尤成事申人有之候、此御足の銀大分御損と見へ候得共、常憲院様御代に、世上の精銀を被吹替候て悪銀に被成、其出目を上御取被成たる事に候へば、此度御返し被成候と申物に御座候、御損と申候得ば、今更の御損と聞へ候へども、畢竟下へ御返し被成と見申候へば、御損と申沙汰に及可申儀にては無之と被申候、諸人感じ申候、吹替申時は、世上の悪銀を不残上へ御取上被成候て、精銀に相成候迄は宝銭に被成、通用候様に被成候敷、又は元禄銀、宝字銀杯四段か有之候、悪銀一々吹ぬき候て、精銀の有目を諸人に御見せ、其上にて右三四段の悪銀に位を定め、たとへば元禄銀何貫目は古銀何貫目にあたり、宝字銀何貫目は、古銀何貫目と相定候はゞ、吹替の儀被仰出候日より、最早精銀に罷成たると申物に候由申者有之候、此者名譽のものに候、上方町人に候処、此儀を苦勞に仕先頃当地へ参候て、

公儀役人中へも申上候由窃に派申候、必御沙汰御無用可被成候只今迄は悪銀の古銀も一ツに相成候により、悪銀の通用難渋仕候、善悪の位定り候へば、たとへば、古銀にて百目仕候物を、元禄銀にては二百目に売申候、一倍の高き様に候へども、古銀にて売候時は百目に売申、是にて物価も踊貴不仕候、左候へば今日より古銀に罷成候と申物に候由申候、此儀にては宝銭もむつかしく候て不入ものに候、一段好策に存候、先ケ様に被成通用無滞様に仕置候て、そろ／＼と金子又は銭にて世上の悪銀両替被仰付 段々吹替申積に御座候、有増承候処に毫髪も無遣漏事に御座候、何の世にも無之材にて御座候、町人などの中にも奇材有之事に奉存候、委細の事は筆紙に申尽し難く候。

348◆一 儉約等の儀被仰出、定て年内か又は来春可有之候、然共一通りのあしき儀にて可有之と存候、日頃新井氏より申上候事共、一条老中心無之由に御座候、間部殿にも何共可被成様無之様子にて御座候、此儀委細の事は筆紙に難申尽候、新井氏よりの手紙此度進申候、是にて御推察可被成候、兎角死病良医なしと申古語の通に奉存候

十二月廿四日

新井氏手紙写

冊子等被返下候、依て思召の通縷々奉承知候、近世明季の事を論し候処に、「蓋若是輩有小人之心無小人之才、才能治天下亦能乱天下、惟才能乱天下、不能治天下、殆明季之謂歟」と申事有之候、今日の時勢これにいかんと存候、万々必奉待候、以上〔即時〕

正徳四年甲午

正月廿三日書

349◆一 少公より先発後聞の御議論、以書付被下忝存候、成程御尤に存候、先日是よりも申進候、愚見誤にて候、虚斎も同事に御座候、兎角朱子或問の説詳備に候、但胡氏の説辞不宜候故此惑出来候、新井氏にも可申と存候得ども、中々被致合点間敷、頃日も格物の事知人を主として申候、明善の儀に候はゞ何卒申様も可有之候、格物の二字僻に候、物は人物の物たるべきと被申候故、色々僉議致し候へども、老夫程朱の説を信じ候故、先入者為主と被申候、程朱の説と斯様に相違候儀、自見を被申立候所に、常に世事議論杯は大経の筋違不申候、中々稲氏杯の外には無之候、頃日稲氏への序文草稿見せ申候、最前名物の事に、賈誼が改服色易制度等の事を申懸にて、若水草木の名物に取付申様子長く書申候処、始終牽合附会に聞へ候て、後人私へも罪を帰し可申由被申候故、右の序文改候て跡より又若水へ遣申候、稲氏は初稿の方氣に入可申と存候得共、後に遣候を被用候様申遣候、斯様の事尤至極に存候、外人に是程に氣を付候て申呉候人無之候、益友にて候、老夫無この相口にて四五日に一度宛、兩人にて言談移時候。

350◆一 高階半次郎江戸輕薄の風を殊の外嫌候て、私へ婚をも求め申候、新井筑後を殊の外信仰致し候、熊沢了海其外公家にて舟橋の某此三人の筆跡三幅一对に仕置候、無学にて候へども能き友を得申候、只今朝鮮の記録御用被仰付候て毎日罷出候、奥御祐筆の中にも、御老中へも直言申者は此者一人と申候、夫故頭杯とふれ候て勤にくゝ候故、役儀御断申候て退可申と存候て、書付を調候へども俄に国喪に出会申候、只今上御幼少の節、身を引申事不忠と存候間、最早身を引申所存無之候、最前の書付焼捨候て御奉公死に相心得申候、人に咄候得ば、立身の望故勤申杯と存候故、誰へも不申候、我等式推參の所存に候得共、高きも卑きも御主への志は一つにて、只今時分身を引申候は不忠と存候、国家危難の節と可申候、此旨筑後へも申候て、必筑後なども身を引被申心得に候はゞ、沙汰の限りと申候、尤成事に御座候、是程の者当地にはきれものにて御座候。

350◆一 伴五六郎事見苦敷儀に存候、一度商賈を脱し候て士に罷成候事、一器量有之様に候処、又喬木を下り候て幽谷に入申事不足觀儀に存候、小人名利を計較仕候て、色々に変じ申事に候、初は氣象宜しからぬ者にて、合点不参候分際より、高尚に心得、便辟の風

有之者にて候き、如案如斯に候、若水など誉被申候、人を知申事古より難き儀に存候、御自分中村氏へ被仰入候趣、委細承知御尤に候、若水事は不被仰付候由、是又御尤に候、若水は御交友の事、其上此人は言語氣象各別にて候、又伴杯が論にては無之候、旧冬新井氏被申候は、在京の時分承候へば、北村伊兵衛を厚禄にて加州より御招候得共、伊兵衛所存候て不罷越候由、私に承候哉と被申候故、加州にて會て不承と申候得ば、慥成儀と申候、結局加州にては不承事も可有之由被申候、私も疑信相半致し候処、此度伊藤氏門派は何程博学にても、御用に無之旨に候へば、弥右の説は虚誕、大方は彼徒より名聞の為に申出したる儀にて可有之候、京師の儒者共中々風儀悪敷候て、其上に風俗巧儂に候故、色々巧出し候て名を売申と見へ申候、菅真静氣に入申間敷と存候、真静儀備前を立退候事、何やらん座席の事にて立退申候、当春は其御地へ引越申候由、其許に知人も少候て山本源右を諸事頼候由、源右より被申越候、其元の風俗に逢可申哉難計候、去とも其許は御大国故、自然とゆるやかに候故、少々出入は其分に相成候ても目に立不申候、真静出処恥かしからぬ者にて候とて、高階半次郎褒申候、伴が刀を御算用場より押へ申事、御意に応じ申間敷と存候、是は多分野村氏など所為と存候、野村氏奇特存候、其御地はどふ申候ても、余程の人才数多見へ申候、頼母敷奉存候、御一覽已後御火中へ。

352◆一 胃のしがみの事御尋候、其後新井氏へ相尋候へば、平之丞殿被申候は、しがみは醜女にて可有之候、鬼面の様に致候、醜女の事日本書紀に見へ申候、伊弉諾尊を追たる者にて候、すさまじき面に候故、胃の前に付申かと被申候、平之丞殿日本の書を能覚へ被申候と後に存候、康富記に其説見へ申候、然共某存候は、古き記録に見へ申候猪頭の胃此事と存候、シカミはシ、ノカシラと申事にて候、古はシ、カシラと申候て伝来候へども、近頃よりシカミと申候坎、又は古よりシ、カシラとも申儀に候坎、其段は難計由被申候、新井氏細工に刻み被申候は、古き手本有之候て、夫をうつし被申候、頃日魚籠を被致細工候、扱々見事成事にて候、魚籠と申ものは、名は承候て始て見申候、是もよき本にて写し被申候、魚に致し魚口の処に、弓矢を立申物に御座候、楽人は今腰に付て出候得共、弓矢は挟み不申かと覚申候、新井氏は半弓並矢を立て候て上に金箔を置候て、床の柱に飾置申され候、扱て風雅成よき飾にて御座候、稽古知今とは此人の事にて候、平之丞殿などの中々及び申儀にては無之候得共、其元様の風に逢申博学にては無御座候、文昭院様にも重宝成者に被思召、夫故直言も御容被成候と相見へ申候、本朝軍器考私も借候て、いづぞ写置度候へ共、無隙候故致延引候、只今博くは出し不申心得と見へ候間、其御地へ遣し候事は不同心に可有之候。

二月十四日

352◆一 当月二日朝、御城女中年寄江島、宮地と申兩人、其外中老かけ候て九人、下女共に五十人計、増上寺へ参詣に事寄、木挽町芝居へ参り棧敷かり候て、野郎生島新五郎と申隠もなき美男と申候、其外野郎四五人棧敷へよび寄せ酒宴に及候由、其事相知れ候て、急速に御僉議有之、右上分九人は一門へ一生御預被成候、於御城松平伊豆守御留守居役を以被仰渡、白小袖一つ着せ候て、其場より直に乗物に乗せ候て、一門方へ被遣候由に候、棧敷扱取持申者後藤縫殿助と申候て、奥の御用承り候町人承り候て、棧敷に手代兩人付置候て用事承候由に候、縫殿助も御法に被仰付候と申候得共、また承り候へば、此者は申分立申杯と申候、奥御用承候故、江島、宮地申付候事いなみは難申、二日木挽町見物に参り候間、棧敷等の事頼候由に候故、右兩人年寄女中の儀に候へば、少も氣遣成筋には有之間敷と存候て、取持申候由に候、下女不殘御追放に被仰付候、右江島、宮地共に月光院様付の女中にて此度御僉議厳急成様子に候、是は月光院様御下知、又は間部殿より出申と推量仕候、是にて御城奥方の御作法少直り可申と申候、常憲院様御代以来、段々不作法に罷成候時分も此類の事有之由、江島と申女中隠れもなきはで者にて御座候、年齢も四十に近き

人に候由、是は小身の簾本に一門有之由、宮地は俗姓賤しき人に候由、定て一門もしかと仕たる者は有之間敷候、増上寺祐天とくより被申候由、参詣とてから乗物計寺へ参り候、道より直に参会の宿へ毎々参申由に候、風俗何かも悪敷罷成候故と被存候。

小谷勉善一月廿二日書

353◆一 或説に、先々御代より先御代には、別て踊子等の女中芸を御好被成候故、御用の筋にて密に小女中方より役者どもへ通路在来候処、当御代伎女御用無之御暇被下候得共、御城女中へは総て其馴染の旧習有之、此一巻起申旨被申候、是はいやな沙汰に御座候、先年五丸様年寄女中増見と申すものも、江島同事の行跡有之候得共、御先代には役者へ参会不珍風俗に候故、ケ様の御吟味には及不申沙汰仕候、今般中村清五郎へ役者狂言作者へ申候、御先代には御用の筋にて狂言の仕組毎度仕上候杯と申候取沙汰仕候、昨日承候へば、肥後守様増上寺御宿坊も頃日出奔仕候、是も此一巻の事に付ての事と申候。

二月廿九日

御城女中之事、只今御僉議最中、ひたもの御預の物出来申候、交竹院〔是は奥山立庵と申候、親立庵は水戸様御医者にて候、先年被召出候、交竹院は奥御医師にて候、〕其外に普請奉行杯の中同類有之御僉議に御座候、交竹院従弟は奥山左内と申候て水戸様の頭分の者、頃日御預に御座候、水戸様殊の外御立腹、万一公儀より御免候ても、御預候て法度に被仰付候旨被成御意候由、大身の者へ御預候て敷敷仕候て差置候由に候、其外増上寺の僧、又は町人神主御歩衆杯の内御預の者多く有之候、此間江戸中沙汰に御座候、木挽町、堺町両所の役者野郎も、大分籠舎被仰付候由に候、只今迄毎度の事に候得共、相知不申候処、当月二日木挽町へ年寄女中江島、宮地など初め大勢参候て、後藤縫殿助と申御奥方の御用承候町人、棧敷杯の事取持候て終日酒宴野郎役者大勢参会にて候、只今迄斯様の事毎度有之候得共、公儀より女中あるき被申候時分は、添番衆と申者を御附被成候故、別条無之旨被思召候て被成御座候、唯今は彼添番の者へ金銀大分とらせ候て頼候故、付て参ながら共に遊び候て知不申候処、当二日に何と仕候哉江島添番の者を叱り申候て、一座へ罷出候儀は推参成事と申候由添番の者申候は、役者共さへ一座の上は、我等杯推参とは難心得候由一ツ二ツ申合候て、夫より申出候、され共添番の者も只今迄賄賂取候てだまり申候、此度も二日の事を見合候て、大方例の通音物など致し、江島などより詫言致し候半と存候得共構ひ不申候故、間四日にて公儀へ致言上候、夫故是も同類沙汰に罷成御預に御座候、此江島と申者隠れなき端手者にて御座候、根は御先代より交竹院奥に勤候故、其節より江島心安候て申合、扱右奥山喜内杯江戸悪所切者に候故取持申候、木挽町、堺町、吉原其外茶屋杯にての参会度々の事、此度役者の内拷問に逢申者有之候て、段々致白状候、余程之騒動に御座候、二月二十九日。

同三月十三日 以下三条

今度江島事於評定所、大目付仙石丹波守殿被申趣書付一々見申候、何も尤成儀に御座候、定て聞番衆より右の書付写可参候間御覽可被成候、江島遠流と被仰出候、是は定ていづれぞ大名衆へ御預け候て、領国にて座敷牢杯へ押込置候様可被成かと申候、先被仰出候は、長く遠流と申儀にて一生帰参不成事と申候、去共男子の様に放ち候ては埒明不申者に候故、女中遠流と申は大方御預に罷成候由に候、其外江島兄向井平右衛門死罪被仰付候、尤評定所にては肩衣等剥取繩付申候由に候、是は大御番にて先年大坂にて御普請方に懸り、大方町人の方より金銀押領に付、町人三十人程罷越候て断候処に、家来を致殺害此者致したる事と申掠候故、右の者共江戸へ罷越訴申候、其時分結構被仰付御有免候処、又此度江島と同道致し、堺町、木挽町、又は吉原杯へ罷越傾城どもにも引合、且又野郎役者杯出合候様取持候由、重罪によつて死罪被仰付候、交竹院事も段々被仰渡候て遠島被仰付候、水戸殿家来奥山喜内事、江島遊興の宿を致し何の由緒も無之処、交竹院と江島事奥にて毎度

出合候に付、其好みを以喜内事交竹院同姓の親類に付、喜内娘を江島為致養子候て色々悪事申進め候事、此度悉相知れ死罪被仰付候、去共是は水戸殿へ御渡被成候、水戸殿殊の外迷惑なり、此節手前など家来斯様ケ様の儀仕出し候事御面目も無之由、御城にても被仰候由に候、勿論しぼり首たるべきと奉存候〔後に承候へば、水戸殿へ公儀より相渡り候と、其儘下屋敷に引寄られて繩かけ候て、打首に御申付候由に候〕死罪は此兩人計にて、平右衛門事も其外同類と一ツに遠島被仰付候ても可然候哉、第一此度の張本は交竹院より起り候と申儀に候、然共本人江島女の事に付死罪を御宥免故、交竹院已下も遠島被仰出儀に候へば、平右衛門も其通可然候はん哉と申衆も有之候得共、間部殿初秋元殿なども、平右衛門重々の罪科にて候間、兎角死罪たるべきに極り申候、切腹にも可罷成様子に候処、又一人被申候は、左様に候は、縛り首たるべく存候、切腹は士を被仰付事に候、此者を切腹被仰付候ては、浅野内匠頭家来杯も同事と申者に御座候由達て被申候処、尤成事に罷成候てしぼり首に極り申候、其外歴々にては、御留守居番平田伊右衛門初め遠島にて候、役者など並後藤縫殿助手代の者などかけ候て四十人有之候、後藤縫殿助は呉服所にて奥方の御用承候に付、此度之事も取持申体に候、是は申訳立候て閉門被被付、有増如此候、委細の事は無益の事に候間不申進候、

357◆一 此度堺町、木挽町へ被仰出、向後棧敷一段に致し可申候、先年は一段に候処、近年三重にいたし候事に候、扱又役者伎芸相勤候節、緋、紬、木綿の外着申事堅く御停止に御座候、且又棧敷簾屏風など用候事御停止に御座候て、芸相勤め申外茶屋又は外へ出候事堅く御停止に候、此外見物場へ被仰渡共有之、絹、紬、木綿の外着用不相成候ては、見物も余り有之間敷候、其上右の被仰出にては、大名衆などへ呼申事は有之間敷候へば、半つぶれに候、是は御尤成事と奉感候、唯今すきと御つぶし被成候事も難被成候へば、是程の御仕置は可有之事と奉存候、ケ様成事此節可承とは不奉存候処に、人心を快仕候儀と奉存候、但人により候て嘆き申類も多可有之と存候、此度の事第一間部殿嚴重に御申候て、秋元但馬守殿御同意にて如此候、御先代よりの大弊を御のぞき被成候事、余程の儀と奉感候、去共ケ様の事出所は有之と相聞申候、兎角君子少しにても政事に預り候得ば、相応の益有之事に御座候。

五月十七日小谷兄書

357◆一 当月初旬より浅草にて、先頃江島一卷に付流罪被仰付候つがや善六、あげ屋敷にて銀の吹抜被仰付候、然処跡の吹替被仰付候銀座の者共へ不被仰付、何の御沙汰も無之に付、畢竟如何可被仰付候哉と安心不仕候処、銀に引替被仰付候旨御奉行所より被申渡候処、銀座四町の者共何も安堵仕祝など仕候旨、然る処当十三日御奉行所より御用有之候間、可罷出旨申来候間、弥右御用被仰付候と悦勇み候て罷出候得ば、銀座の年寄四人〔深江庄左衛門、関口善左衛門、中村四郎右衛門、細谷次郎左衛門〕頭十七人被召捕、人々宅へも罷出候跡へ与力同心三百人計急に罷越、家内、闕所、蔵へ封付申候、総て銀座京橋より南四丁の間に罷在候、其日は近辺の騒動不大形候由、京都も同事の旨なり。

五月十七日書

358◆一 荻生惣右衛門作候護園隨筆其許へも参り候由、定て御覽可被成候、牧野氏敬の工夫臍下に意を付候事など書置申候、牧野氏を褒候て置申候、此人至極の高慢ものにて、専ら己が名を売申体に御座候、此度の隨筆勿論皆浅露成事共に御座候、伊藤、山崎杯世に鴻儒と称し申候故、専に是等が非を論候て、己が是等より上に立申心得に御座候、牧野氏事など書載候も下心可有之と奉存候、牧野氏加州などにて人の尊信仕候事兼て承及候に付、其御地などへの聞へにも可仕ためと被存候、頃日右隨筆小谷氏より借候て見申候処へ、三宅九十郎見候て、序文の事を難じ申候、是は九十郎議論尤に奉存候、序文は彼が高弟書申と見へ申候、荻生を富士山にたとへ、外の山は富士の児孫と申候処、諸峯羅立して児孫



に似たりと申杜が句より申にて御座候、天下の学者は荻生が児孫に致し、扱富士山下に東照宮御出被成候て、天下の英雄割拠の者共何れも東照宮に帰し申候旨、皆々御当家の美をたすけ申候、荻生出申候て天下の儒者皆帰し候と、荻生の美をたすけ申由に候、区々黄吻の書生の分として、東照宮と並論し申事忌憚する所なき事と九十郎申候、是は確論と存候、後に禍を得可申者にて候、其上群雄の東照宮へ服し申事は、徳に候哉、力に候哉其段は不存候得共兎角来服申候、当代天下の儒者誰有て彼に服し可申候哉、夫を押付て荻生が手下に致し候事、口に申さへ憎く候処、斯様に板行も仕候て出し申事傍若無人と可申候、伊藤が文章の内、文字の用法を論じ申事、半は当り半は当り不申候、中々伊藤氏の徒服し申間敷候、是も伊藤氏は当代文章者と世挙て称し申候故、文字の非を論じ候て、己が文章伊藤氏の上に立申様に仕たがりての事に候、小人の情実不可掩の事と奉存候、稲氏より心術不宜様に被申越候、さすが稲氏にては御座候、よく見被申候。

359 ◆一 窃に存寄候は、銀座の輩極罪に候処、逢死刑候事刑罪不相当候得共、是は当路の衆忠厚の所致にて可有之候、其故は此輩奸曲獲罪於天下候得共、実は所受命有之候、首罪は遁死刑候上は連坐の者は可為未減候、且首罪の者も実は所受有之候、然ば至于今臣子の身としては、彼輩処極刑候儀は所不忍施有之候様に被存候、雖然時権施治の機会は被失候、寧失彼共此に不失の慮にて候哉、聊時運の厄にて候哉と窃に歎敷存候旨申候処、浚新若水申候は、某有一策而未著言候、幸為兄一言を可述候間、他日鳩巢先生へ面談の刻試に可申上候、銀座の徒御刑罰何と存候ても不相当候、幸に転禍為福の機会と存候、上御幼少に候得ば、罪己の詔を可被下様も無之時節に候、唯執政の方に不残一万石宛領知被指上、扱可被申上候は、常憲院様御代国家御費用御手支、且下民困窮の儀被為聞召、金銀の品下り候共其資用多罷成候は、公私共に其利多く宜候と被思召候に付、金銀吹替被仰付候、其砌私共遠き慮無之、只一旦の利迄に心付可然儀と存知罷在候、且又文昭院様御治世の初、銀の品又以て下り候て、御費を被贖候より以来、日々諸物の価甚高罷成、終に四民の大難に罷成候、是比日君上に御存知無之趣にて、却て無窮の禍に罷成候、御本心は下民の困窮を可被救が為に候処、還て如斯に罷成候儀は某共の不明不忠より事起り申候、然上は執政職を差上罪を可奉待儀に候得共、只今上御幼少の御事、且愍に国家の故事をも存知罷在候某共に候故、職掌を奉辞候儀は却て非本意候、夫故被下置候領知の内各一万石指上之申候、聊自貶の宿意迄に御座候と急度言上有之候、天下の人の視聴を相改め、扱近年以来金銀吹替の儀に付、奸曲の御役人にも相殘候輩は、幾人にては罪科に可被処候、第一銀座年寄共は磔にかけ、其次は梟首、其余は一人も不殘遠島流刑に被処、凶邪の人の種類国土に遺し不申候は、神人幽明俱に可扶候、然処只恨らくは君上の御誤を掩隠すべきとのみ主意を被立候故、尾をおさへ首を掩の病のみにて万人心服不仕候、頃日剩新銀通用の御定書出で、弥以人心合点不仕候、子細は銀座の余孽後藤庄三郎等の輩数人、又此度の新金銀の吹替の総用被仰付候故、一嚮を炊候て一鼎の味を窺知申候旨申候、此策私共及不申候、流石経済の事被心留候程有之候と感入申候、此翁常に実論とは違ひ、其説平易、其辞簡直にて面白御座候、鄙策の趣杯は書生の常談と不堪自笑候（浚新書）。

361 ◆一 若水謂、物価騰貴と申候者は小事にて候、此後弥以賄賂公行し姦吏暴横可有之候、昔唐徳宗播遷被成候時、陸宣公被申上、此時会悔過罪己不被成候ては興復難被成由にて詔の草をせられ候得ば、悍将強卒迄誦者流涙感激仕忠を致し、是を以唐室不亡候、一紙の詔百万の兵卒に勝り候と古人も申候、時勢朝廷の大臣過を謝し己を罪被成候は、転禍為福の一大機会に候事、扱々残念至極乍恐奉存候、臭物に蓋をなざる様の数通の御新令に付、天下之人心怨怒を懐き不服朝廷を誹謗仕候へば、上の御威光も軽く罷成苦々敷御座候、先頃於京都両替町の変可有御聞及候、小兒輩あふれ深江庄左衛門妻も自滅候にても、人心の悲怒発泄する所無之故に存候、官より吏人を出され、其場へ見物に罷越候者を数十人搦

捕牢舎仕申候、本より数百千人群をなしあふれ候へば、御鎮可被成事にて可有之候得共、何卒御処置可有之事にて候処、右の訳に付是は銀座の者の為に仇を被報事と、取沙汰仕人心不悦候、深江庄左衛門小供を京都御追放の時も、官吏臯負の沙汰にて保護仕送申候、常人の御追放被成候とは相替申候、因茲世上にて申候は、此輩暫時の間御追放と申事にて、来未年太祖御百年忌には皆御赦免有之、如本銀座の役儀被仰付筈などと、朝廷を測り種々誹謗を仕候、時世日々非に罷成候、嗅野梅時節と存候。

六月八日小谷氏書 以下二条

362 ◆ 一 今月三日夜、浅野故内匠頭殿御内所瑤泉院殿御帰泉に候、此人賢行の儀は義人録にも被載候、今般御逝去に付、又御尊承、平生御柔和成義真の上臆とも可申御容儀にて候、扱何事はと申時分は、屹度被成候御様子、中々尋常婦人の様には見不申候、彼一卷の時分、若上杉家より大人数等参候事有之候はゞ、慥に御働可被成御氣象と申候、尤芝泉岳寺へ御葬礼仕候。

362 ◆ 一 同日、月光院様御実父勝田玄哲老も帰泉にて候、扱は月光院様初瑤泉院殿に御奉公被成、其以後公儀へ御出被成、段々結構成幸を被得候、就夫始終瑤泉院殿への御勤被尽御懇懃候儀昔に相替不申、今度御病中にも毎々御懸意の由に候以上。

八月書

362 ◆ 一 本多佐州公筆記の物一冊為持被下、珍敷物御見せ被成忝珍重奉存候、且又此書の因縁共委細被仰知致承知候、如仰佐州公御事、兼て良平の倫と存候処、此録見候へば格別の儀に奉存候、宜哉、神祖を輔佐して百年の泰平を被開候事、ケ様に可有之儀と今更存当候、此書先電覽候処、佐州公自筆の記と申事未決に存候、当時学識有之人へ、佐州公儒道の有増御尋に付、其人より記候て佐州公へ進上仕たるものを、重て大君より治道の儀など御尋に付被差上たるもの、様に被存候、右の記中に、此段は筆紙に述尽し難きに依て荒々大筋目を云也、道を知る人に伝受有べし、是等の詞上より御尋に付被書上候はゞ、ケ様には有之間敷候、末に佐州公へ進上と聞へ申候、佐州公の跋に、此一冊は珍書也と有之も、御自分に被書立候ものを珍書なりとは有之間敷存候、扱記中の論共駁雜成事も候得共、大要尤成事共に被存候、今少留置緩々再覽仕度奉存候、是を漢語に訳せられ候事は不入ものに候、此通りにては漢語に難入候故、増減余程無之候ては難読可有之候、左候へば事実を失ひ可申候、此儘にて仮名の誤など御改正被成候て繕写被成尤可然奉存候、序跋などはなくとも可然奉存候、

363 ◆ 一 佐州公筆記の物、新井筑州へ物語申候得ば、江戸にては先年より取伝候て、新井氏も一部写置申候、佐渡守殿自記無疑もの慥成書に御座候、則御先代上へ一部写候て上候由に候、此辺にては本佐記と題号有之候、口の序は無之候、唐人に天道の事伝受と有之候、いづれにて候哉、其時分李文長と申朝鮮人参居申候、此者に候哉、吉利支丹の徒流、其時分いまだ居申候、彼が法には、天主を立候て天道を表し申候間、佐渡守殿天主の事を天道と御直し候哉、此儀は木下平之丞殿料簡の由にて、私は先日少公より御越被成初て見申候、存外成事に御座候、是にては東照宮を輔られ、百年の泰平を被開、佐命之臣と申事耻しからぬ儀と奉存候、執政の衆に此十分一の思慮有之候得ば能御座候。

363 ◆ 一 頃日上野佐野と申所の百姓体順治と申者井上河内守殿式台へ罷越、一封之書状を指出候、披見の内、牢の揚屋へ入申候、扱右之封書の内には、去年以来江戸表甚困窮に罷成候、其儀を御苦悩に被成、御心に可被懸御老中に候処、曾て其御様子無之、御救之沙汰も無之候、各様御苦勞に不被成候て誰が任にて可有之候哉と申趣を長々と書記申候、仁義の義を儀の字に認申程の文盲者に候得共志の処奇特千万成事、御老中も殊の外感賞にて、近々御褒美杯可被下御詮議の旨に候、順治事此後何の御沙汰も無之、空敷罷成候。

正徳五年四月十四日書

364◆一 先日深見新右衛門、此度次男被召出候祝儀振舞に、新井氏相伴に罷越、雨森東五郎も参候て終日語申候、僧の学文第一勸学のつゞき成兼候故、出家によきもの出来不申候間、何卒続候様に致了簡候へと、金地院住持へ先日申入候由、他語の序に新井氏被申候、一座尤たる由に候得共、私存候は、外人は左様に申候ても不苦候、新井氏一世の儒望も有之候人にて、不用の儀被申候かと被存候故、出家によき人出来ても無益の儀に候、左様の事金地院へ被仰候事不入ものと申候得ば、新井氏暫有之候て夫は其許偏見にて候、只今の僧の仕たる学問は、たとひ成就仕候ても中々不足儀に候得共、左様に申候ては弘法、伝教如き人も出来不申候、学問の道広く候へば、其内不計傑出仕たる者も出来可申と存候由に候故、私重て申候は、弘法、伝教の様成人出来候ても、何の用にも不立事に候、弥害には成可申候間、私儀は一向同心に不存候旨申候得ば、新井氏被申候は、左様にても儒者に傑出の人 有之候哉との儀に候故、扱は少いぢに罷成たると存候て議論止申候、其後に又文武の時太公望など無之ては成不申候、周公、召公に太公望の兵戈に鍛錬したる人指添候故、王業成就の由にて候、是又不忍黙候て、左様に候ては文王、周公は聖に候得共、聖にも不足成所有之、兵術の人加り不申候ては成不申と申ものに御座候やと申候へば、愚見はかた過たる由にて止申候、又翌日東五郎私宅へ被参候て、其日僉議承候処に私議論は一毫の雑無之、醇乎として醇なりと存候、異端に傑出の人出来候は、火に火を添ると申ものにて、御当代仏法流布の上にて申候は、出家にも学問よき人出来候様に仕度と申も、中間敷儀にても無之候得共、本源を究候て議論仕候はゞ、私申通に候由被申候、其座に大勢居申候得共、是程の儀申ものは東五郎一人にて候、余程頼母敷儒者、只今対州君臣共に信用候て、政事にも少々預り申と見へ申候、私も乍推参褒美の余り此度送行之序文遣し申候、未発出立申候。

正徳六年閏二月十三日

365◆一 新井氏へ先夜参候て緩々語申候、老臣中政務にすぎと被勞思慮事無之、諸事廢置候事 被申候て殊の外鬱憤不平之体に御座候、委細は筆紙難尽候、本多殿火事の時分、早速老中の内音物等被差越候て、其後本所辺火事の時分、其身下屋敷延焼致候事など不快にて、火元の者重罪すべき旨被申候、又彼翁被申候は、火元可罪儀に候はゞ本多殿も同事に候、貴臣は貪着無之音物などに被及候ては、火元を被罪事人心愁訴可仕儀に候、天下の御政道にヶ様の事無勿体事に被申候て、止み申候由に承申候、獄中三年四年囚人埒明不申、今度火事に付脱申候はんなど氣遣にて俄に及沙汰申候故、決断不審事計にて候由顰眉被申候、間部殿一人にていまだ少かゝり有之候、一髪の千鈞を引にて候へば、是からは天命次第国家の運にまかせ申と存候由にて候、何方も氣の毒成事に奉存候、其御地国老の衆御政事に被懸御心、且又諸奉行の内にも廉直の衆も有之旨被仰下、珍重奉存候、姦佞の人妨賢事古今通病にて御座候、是又天命次第と奉存候、伴五六郎事も被仰下、兼て其様御目利違不申と存候、老夫も先年一見の時分より何共合点不参者と存候、あの様成る者は大方拵へ者にて御座候、小人の至極にて御座候。

同日

366◆一 新井氏にて大石内蔵助父子の画像を見申候、松平越後殿家来真を写し置候由に御座候、大方後鑑録の作者たるべきと存候、湊川楠像を見申様に御座候、夜討の時分の像にて御座候、火事装束にて内蔵助は床机に腰を懸候て、主税は長刀を携候て前に畏り下知を請申体にて御座候、急に返し申候由に御座候故、留度物に候へ共不能其儀候、越後守殿家来尋候て、其内知人にも成置可申候、是も志有人と存候、先日松平大和守殿へ被招候て罷越申候、越後守殿は大和守殿の舍弟にて候、大和守殿家来にも大勢知人に罷成申候、是等へ相尋候ても筋可有之と奉存候。

小谷兄閏二月廿三日書

366◆一 先年於広島植田玄節へ玄節へ山崎闇齋門弟也と別て入魂仕候と申者に頃日逢申候付、其節出所の儀委細承候処、最前承候とは違申付粗申進候、石川丈山門弟に一万田三楽と申人能書にて御座候故、玄得院様御代被召出広島住居仕候、右三楽玄節妹婿にて御座候由付、一年見廻に広島へ参候時分、浅野甲斐守被致参会、事の外信仰にて広島に被留候得共、京都に老母有之に付達て断申候て致帰京候、其後甲斐江戸へ被参、帰国之時分京都玄節方へ立寄、是非広島へ被参候様に被申候由、老母敵島見物がてらに致同道候様にと、達て被申懇懃を尽し申候に付、其時分約束にて甲斐帰国の後、以幣聘迎の使者を以て被呼越候故、老母同道にて広島へ被参候、其時分御扶持をも可被下旨に候へども、達て断申候て唯御国内に被指置候はゞ、居住可仕旨に付、其通にて五六年致居住又帰京候処、重て甲斐方より幣礼を厚く被致又広島へ被招候、其後頭妙院様御代老母へ被下候とて二十人扶持被下候、右の首尾にて候故御奉公と申儀は不仕、折々出仕候て相勤罷在候由に御座候、右之趣に候得ば、玄節出所も正敷、扱甲州尤成事と感申候、只束髪無之一事耳難心得奉存候。

十二月十三日書

367◆一 其御地御国事等依旧の段被仰下、可為左様奉存候、此度本多周防守殿往来行装華麗成事、姫君様にも御見物被遊候様承申候、何方も同事の風俗不堪歎息候、阿部豊後守殿京都往来も驚目申様に申候、且又上京の時分、諸侯よりの音物等結構成事昔の通に罷成候、井上河内守殿日光への時分も、方々よりの音物にて候由相互の事に候故、ケ様の儀申衆も無之相見へ申候、唯今に至て昭廟の御時分の通に、賄賂曾て受用無之は、間部殿御一人の由申候、外の衆も是にて少恥可被申儀に候処、恬然としたる儀に御座候、結句ケ様の儀にて間部殿を何角に付候て悪敷申成候体候へども、又能存知候者は感じ申候、先日も承申候、月光院様附女中衆のがれぬ人を、一人も庇蔭を以出し申事堅禁し被申候、女謁の類少も行はれ不申候。

368◆一位様方の女中は都べて威勢御座候由承り申候、是等の儀尤成事に奉存候云々、安芸侯の御事、江戸にても殊の外褒申候、当代の賢侯第一の様に申候、此頃も承候得ば、広島にて家来侍中武芸御覽候て勝れ申面々へは御褒美抔有之由に御座候、御領地毎度御巡行候て、民間の疾苦を御尋被成候由に御座候、頼母敷人君と奉存候、何とぞよき師儒を被得候て、王道の趣きを御僉議被成候様にと奉存候、扱は有馬玄蕃頭殿も庸君にて無之見へ申候、頃日家中への条目を見申候、いづれも尤成事に奉存候、越前の伊豫守殿もとより名譽有之候、其外に少身にては松平右近将監殿、酒井勘解由殿など学問の志有之候、勘解由殿は殊の外好学被申由に候、隠居にて候得共、只今の雅楽頭殿へも移可申と奉存候、是も前より佐藤五郎左衛門を信仰にて候、佐藤事學術は山崎流に候へども、大石内蔵助を名教の罪人などと申者に候へば、定て経義の筋を不正義にて可有之と奉存候、残念成儀に御座候、勿論紀伊中納言様一統に褒申儀に候、去共御学文御好の儀は承不申候、其外指て替申儀も不承候、水戸様には頃日女中に能役者被仰付、シテ、ワキ拍子方共に御興行御座候、天下の手本にも御成方に候処、如何の儀に候哉と取沙汰仕候、太平目出度御世にて、ケ様の儀は却て被对公儀候て宜敷被思召候ての儀にても候哉、兎角愚案の及ぶ所にて無之候。

正徳二年壬辰冬、先生与白石丈人諫書

369◆一 昔延喜年中に有て、菅相公儒家に出て、時に被用権を専にす、時に三善清行書を奉て菅公を諫るに、身を慎み禍に遠ざかるの道を以てす、夫菅公の材徳古只今に傑出して、丞相の貴に居れり、本より天下の衆畏服する所にして、誰か教の間然する者あらんや、然るを、清行一介の賤士を以て、独其威嚴を冒して、人のいはざる所をいへり、そのかみ、恭靖先生いませし時に、僕と此事を論じて、清行を以て天下の奇士とせり、僕おもへらく、清行豈奇士の名を求る者ならんや、実に菅公を愛するの深きに出るのみ、今吾兄徳望の尊

き事、菅公に比するに、いかんといふ事をしらずといへども、其學術文章におゐては、恐らくは菅公の及ぶ所にあらず、加之、聖主の知遇に逢て、其材力を振ふ事も、菅公の後いまだ儒臣の如斯成る事をきかず、僕むかしより、同門交を辱ふして、近頃眷顧の厚きを蒙る事日久し、窃におもふに、吾兄を愛するの深き、誰か僕にしく者あらんや、清行是を疎交の相公にいふ事を得て、僕これを同学の故人にいはずば、既に切偲の情にそむき、又仁を輔くるの道にたがへり、今吾兄の冤除を聞て、来て忠告する者、必いはむ、今より以後、迎接を慎み、權利に遠ざかれとは、是常人の知る所なり、豈吾兄のために論ずるにたらんや、僕がいふ所は、こゝにはあらず、吾兄志氣の間に有、吾兄朝廷におゐて、奨順匡救の功、頗る赫々として人の耳目にあり、然共、古人天下に大勲勞あるに比せば、恐らくはいまだ並称するに足らず、吾兄の豪傑なるをもて、胸中に塵芥ばかりもせざるべし、豈是等公塵の事をもてみづから満るの志あらんや、唯盤根錯節利刃にのがるゝ事なふして、破竹の勢有によつて、其詞色の間、おのづから剛鋭果敢の氣盛にして、謙退抑損の心すくなし、吾兄も其れかくのごとく成事を覚ざるべし、書曰、「有其善喪厥善矜其能喪其功、」僕願くは吾兄其善を有せず、其功に矜らざらん事を、孟子反が其馬に策うつ聖人に称せられ、馮異が樹下に辟る、古今の美談とせり、是吾兄法とるべき所也、正考父が鼎の銘に曰く、「一命而僂、再命而偃、三命而俯、修牆而走、亦莫余敢侮、」蓋其位愈のぼれば其心愈下れり、譬へば堂を作るに、上一尺の崇さを添れば、下一尺の基をますがごとし、然らざれば、必傾覆の禍あり、方今聖明上に臨み、讒毀の患なく、彼延喜の時とひとしからずといへども、盈るを害して謙るに福し、盈るを悪んで謙るを好するは、天人不易の常理也、慎ずんば有べからず、僕願くば吾謙々の心に乗て天人の道にかなひ、よく其誉を終て德音瑕をかゞざらん事を、今吾兄寵錫の新なるを聞て、祝をもてせずして規をもてす、唯吾兄其愚を哀て、これを察納せよ、不備。

十一月 日

起正徳六年至享保二年

371◆一 今度当地の凶変御聞可被成候、天下一統に奉絶言語候儀御座候、去共御相続早速相極、是又一統奉安堵候儀御座候、私儀は御存知の通文昭院様御微辟の者に候故、此度の御儀乍憚別て御残多奉存候、然共天命不及是非候事に候得ば、此上は天下得長君、殊更御賢徳の事日比群臣奉仰望事に候へば、国家永祚の御基と奉恭羨候御儀に御座候、只今二ノ丸に被成御座候処、此十日林大学頭被為召候て、講談御聞被遊候由申候、此節早速被及此儀候事、天下に学風を御勸被遊候半との思召も候哉と奉存候、第一儉素の御生付にて華麗の事御嫌被成候て、何よりの御儀と奉存候、紀州御邸へ被成御座候時分に、御厩へ御成被遊、馬卒共御厩の二階に紙帳をつり置を御覽被成、紙袋の様成ものは何にて候哉と御尋被遊候故、紙帳の事申上候へば、広屋中にて蚊帳にてさへ暑氣難儀いたし候処に、難儀の段御察被遊候て一々蚊帳を被下候事も難被成候間、二階にふせり申候処に窓あけ候て、風の入申様に致候てとらせ候へとの御意にて、俄に厩二階に窓を明け申候由承申候、是も下情を御憐察被遊候上と奉存候、紀州より四十余人御供致し参り、是も御意に応じ申人被召寄と申にても無之、其日の用番人を共儘被召寄候由申候、惣て、誰出頭仕候と申儀も無之、一様に被召遣候由申候、小笠原主膳と申人被参候、此人四十余人の内頭たる人と申候、先以御家老分の人と申候、新番頭松平主馬と申人の兄弟の由に候、実体人と申候、紀州の御家老も其儘被立置、左京大夫殿此度紀国様ととなへ申儀に候へば、紀州御家中は其儘うごき申間敷候、去共被召寄人も有之候、祇園与一郎などいかに可有之哉、江戸へ被出候様仕度候、此後段々御新政ども可相達候、先江戸中落着申候て、別て静謐成事に候、此上は目出度率奉存候

372◆一 当地替儀も不承候、新井氏とも頃日緩々語申候、此度の御儀、新井氏など別て難儀に御座候、此後は隙に可被成候間常に語可申と被申候、間部殿も如何成可申候哉、曾ていまだ知不申候、移替の事于今不初儀ながら、傷心申儀に御座候。

五月十四日

奥村源右衛門様

追而私儀も次第老衰其上持病の痛もしかど、無之、世上の勤も別て難儀に御座候、何卒近年之内悴今少為致学文儀候て、名代に仕候て、私事は隠居願申度と存候、此身の境界何の望も無之候間、世間にも何の願も致節も見へ不申候、此上ながら学文もはやり候べしと存候、去共よき師儒無之候ては、学文はやり候ても人主の耳目をひらき可申様も無之候、荒川景元と申候て只今紀州の儒臣にて御座候、常年当地に詰候て居申由にて、此人は伊藤仁斎が弟子にて、其故かねてより上にも仁斎事御聞成候由、源蔵可被召出杯と申沙汰も有之候、此人など出候て仁斎が学派杯発向仕候哉、無心許存候、以上。

小谷兄成書 以下四ヶ条

373◆一 芸侯様、二三年前度々寒夜及深更候迄御読書被遊御座候処、柝の音を御聞被成、あの撃柝の者寒気の時分と申、終夜臥り申間もなく相勤扱々可致難儀候、夜食為給候哉と御近習衆へ御意に付、夜食は被下儀無御座候旨被申上候得ば、せめて夜食を為給候様被仰出、其後より夜廻り者へは夜食被下候事に罷成申候由、乍恐奉感候事、延喜聖主の寒夜に被脱御衣候と類し申候て、聖主の民は崇其沢候、右芸侯には仁心仁聞あつて仁政迄御兼備被成と奉存候、此咄終不承候処一両日以前青山御下屋敷の人咄にて初て承申候、御上屋敷夜廻り者夜食被下候に罷成候を、御下屋敷夜廻りの者共承候て、何れの邸にても同事の儀に候間、私共へも被下候様にと願候へば、尤其通りに相成候処に、御屋敷一統に被下候由、右の咄承候へ共、実否如何御座候と奉存候に付、追付表方の小役人に何となく相尋、撃柝

の者へ夜食を被下候と申候へば、成程其通に御座候、先年は無之儀にて御座候処、近年被下候由申候故、扱は実事と奉存候、右の咄を申出、ケ様に承り候故尋申儀にて候、然ば右の御意の時分より被下候御様子と相見へ申候旨申入候へば、右の者申候は、されば其事にて御座候、去年御帰国以後は真浦藏人指図にて相止申候、跡には無之儀にて候を殿様新に被仰出被下候事に候へば、御留守中は不入儀に候とて止可申候由承候、当年御参府以来は又被下候哉、其儀は未承候由申候、如此賢君の御取立被成候御家老に如斯の者有之は、是も又奇妙兎角絶言語申候比日世上譬大成物何々、小き物何々、能き物何々、悪物何々などと戯に書集候事流行仕候由御座候、其内に能き物当公方様、松平安芸守仕置と申由に御座候、全書は未見不申候へ共、人の咄に今日承り申候、尤市童の戯言より出たる物にて御座候得共、末々迄公方様の能を奉称候事、天下一統に大幸不過之奉存候、扱は芸州侯の御手柄、世上にても浮言にては無御座候、是又難有儀奉存候。

374◆一 九条故左大臣様の御簾中様は、安芸守様の御妹秀君様と申候処、二三年前左大臣様薨去の後、持法院様と奉申候、若君様御一所被成御座候処、是も当春御疫病にて御早世被遊候、夫より持法院様御病氣の由御座候得共、御愁傷一通の御儀にて、御不食の儀に候間、追付可為御快氣と、此方様へも度々御様体申来候処、終には御不食にて御逝去にて御座候、然処頃日密に承候へば、若君様御早世故九条の御家絶申に付、持法院様へ御相応の御贅婿を御取被成、御相続可被成候、撰政様思召に付、持法院様へも其段被仰入候得共、堅御得心無之先其分に罷成居申候、去共撰政様には是非右の通と思召候御様子にて御座候由、依之先頃安芸守殿京都へ御立寄被遊候時分、持法院様委細御物語被仰入、其上にて兎角郷国には引取被下候様御願被成候へ共、其段は難被成御儀に御座候故、御許容無之旨、其時分より思召切候御様子にて御絶食被成、終に御逝去被成候由申候、未実否は不奉存候得共、此咄密承大方泣哭仕程に覚申候、弥実事に御座候はゞ、京師辺より相聞可申と奉存候、尤此儀は尚更御他言被下間敷候。

375◆一 只今広島牢屋に禁籠の者一人も無御座候に付、囚獄の番人も被止候由沙汰承候由に付、聞合申候得ば、左様にては御座有間敷候、慥一人禁籠の者有之筈かと奉存候由申候、一人二人は有と申物にても無御座候、以上。

五月十二日

375◆一 当地御凶事以後は、随分御静謐に御座候、此十日には林大学二ノ丸へ被為召候て、御懇意にて御用など被仰出候由に御座候、世上には講談御聞被遊候様にも申候得共、講談は無之と申候、慥成儀は不存候、紀州よりの奉駕の衆四十余も有之候、小笠原主膳と申人御家老の由にて、当地新番頭松平主馬と申人の弟の由にて、能人物成人と申候、紀番に被成御座候内、御厩へ被為成候ての事先日申進候、又其後承候へば、紀府にて御小納戸役の衆の中一人泊り番の所に、外へ咄に罷越し御番忘候て不罷出候、翌日御小納戸頭の人此段可申上御前へ罷出候処、先達て其段御存知被成候て御近習人を御のけ被成候て被仰出候は、此者平生武芸も精出心懸有之様に被思召候、いかゞの由御尋の処、其通に奉存候旨申上候へば、左候はゞ此度の儀は某に對し候て免じ候へ、とかく人に全人は無之物に候へば、過失はゆるし可然候、去共御存知不被成分に致、扱彼者親類共へ申聞せ、向後を急度慎候様可仕旨御意の由申候、是等も結構成御儀と奉存候、以上。

五月十九日

376◆一 五月八日の貴翰到来忝致拜見候、如命上の御儀天下一統奉絶言語候、当春以来御意の分少々御指引御座候へ共、指て重き御様体にも無之、前月十五日迄も表へ出御被遊候処、御変症指出急に被為重候て、前月晦日暮過薨御被遊候、当月朔日の朝為窺御機嫌私式迄登城仕候処、御老中御列座にて夜前薨御、日又為御後見紀伊中納言様二ノ丸へ被為入候旨被仰渡候、追て被仰渡儀有之候間退出仕間敷旨、暫有て御老中又御出、中納言様天下

御相続に付、紀伊の御家は左京大夫殿御継候、向後左京大夫殿を紀伊殿と可申旨被仰出候、最初薨御被仰渡候時は間部殿にも御出にて、後に被仰渡には間部殿は御出無之候、翌日より中納言様を上様と奉称可申旨一統に令下り申候、夫より毎日諸候以下直参の面々二ノ丸へ御機嫌伺に罷出候、此度当上様御承統の儀、第一文昭院様御遺言の旨に御座候、昭廟薨御の節、御幼君の御儀不慮の御事も有之候はゞ、御三家の御中より御相続被成候儀も兼て被仰出、其時分の尾州様には御在世にて無之、其後御当代迄過申候、其節右の御遺言御請被成候は当上様と水戸殿にて御座候故、此度指当り当上様御承統の筈にて御座候、其上に東照宮御曾孫に候へば、尾州の御家よりも御世次も近く、殊に御英明の御聞も有之、天意人望の属する所に御座候へば、此上には天下の御長久の基と群臣奉安堵候御儀に御座候、第一結構成御儀には、御天性儉素を御好華麗の事御嫌の由、御質素成御儀と申候、驕奢当世の大弊に候処、此後此風改り可申と仰望此御事に奉存候、間部殿事雁ノ間御詰衆に被仰付、中務殿は御譜代大名並に被仰付候、其外御小性衆御小納戸衆不残、寄合組、又は小普請に被仰付候、紀州より随駕衆の四十余人二ノ丸へ被参、小笠原主膳と申人御家老分の由に御座候、実体成人の由申候、新番頭松平主馬と申人の兄弟の由に御座候、常憲院様以来、御老中方取次を以諸事御窺ひ候へども、向後は何事によらず御老中御前へ罷出候て可申上候、御直に御聞可被成由可被仰出候、当月十日には林大学頭二ノ丸に被為召候て御懇の御意御用も被仰付候旨に御座候是等も遺老御捨不被成思召と奉存候、追々御新政も可相達候と奉存候、以上。

五月廿四日

追て大行増上寺へ被為移、御葬礼以後法会有之、此廿三日私共迄も参詣仕候、御梓宮の事常憲院様以来御棺中へ御刀掛を致、御戸の後に御椅子を拵へ、御棺の外に御簾を懸、金銀を装ひ申候、此度被仰出候て、御刀掛、御椅子指止可申候、御簾杯も質素に可仕候、金銀にて光申候事御喪事には不相応の旨に御座候、其故俄に改り申迎御費用倍申候、其段御聴に達候得ば、御費用の事構申間敷候逆改可申旨にて、其通に罷成申候、御留守居朽木和泉守支配の中に、比日手打に致候者有之候、此節に候故其分にも難致老中へ窺候処、老中も如何裁被遊哉、上聞に達候処、手打喧嘩と申者は不存寄物にて、是等は時節又は場所の僉議は不及候間、少も構ひ申間敷旨被仰出候、是等御英明の機見へ申と奉存候、紀府被成御座候内、小納戸衆の中に泊番忘れ候て不罷出者有之候、翌朝小納戸頭驚き候て窺候て、急度可申付と御前へ罷出候処、先達て此儀御聞被成、近習の者はのけ被成候て被仰候は此者常々武芸に心懸候て弓杯は拔群に見へ申候、然れば用にも立可申と御覽被成候、如何存候哉と御尋故、其段は御意の通に候由申上候へば、左候はゞ此度の儀は我等に對し候て法を枉げ免し候様にとの御意にて候、其上にて被仰候は、兎角人は全人は無之者に候へば一方よき事候は、一方は免し不申候ては成不申候、向後其心得可仕候、然し当番を忘れ申は大成過失に候処、御存知被遊候ては其分に難被成候間、御存知不被成分に致可申旨、其方彼者親類どもへ此事申聞せ、向後は急度相嗜申様にと可申旨にて相濟候由頃日承候、是等も乍恐道理に当申儀に奉存候、紀府の儒臣は荒川景元と申者那波弟子にて、後は伊藤仁齋が門弟に罷成、紀州にて古き儒者にて候、只今景元隠居候由に候、其故兼て伊藤源藏事杯御聞被成、御抱可被成などと申沙汰も先年永承候、祇園与一郎など江戸へ罷出可申候哉、先は紀州の家臣は動き不申筈に候へ共、又被召寄候者も可有之候、御近習、御膳番、御医者等は此度参申候、新井氏杯は此後弥隙に可罷成、是は惜き儀に存候、御書中に、台徳院様御血脈此度御絶被成候と被仰下候、台徳院様御血脈は松平肥後守殿に御座候、此度大猷院様御血脈は御絶被成候、去年東照宮百年にて、当年百一年目に又御元祖の御脈へもどり申候、是皆天命にて人力の預り申候処には無之と奉存候。

379 ◆ 1 今日迄は直参の面々執も長髪に罷在候、肴商買普請等御免に御座候、服忌の儀



はいかゞ罷成候哉慥に不承候、先は上に御服忌は無之、五十日は只御慎と申沙汰に御座候、先日大学頭被召候て御尋の儀有之由に候、定て其時分何か被申上にて可有之と奉存候、松平大和守殿当月七日発足の筈に候処、今度の変に付何れも帰国の大名衆滞留にて候、先月は阿部豊後守殿月番にて、御暇の衆も御機嫌伺に二ノ丸へ登城被成候、様々と指図にて、翌日朝より久世大和守殿月番にて、是へ尋候衆は、御暇以後は登城無之筈に候間、使者を以可奉窺御機嫌旨指図に候、其故半分は登城、半分は使者にて異な物の由申候、箇様の儀は無相違候様に示談も可有之儀に御座候、いかゞの儀に候哉、此以後は上様諸事御聞被成由に候間、御老中中々油断被成間敷候、不僉議成事候はゞ可為難儀と申儀に候、以上。

五月廿二日後元遊兄書中小谷兄以下二箇条

380◆一 中納言様御儀、如被仰下候御賢徳と申御長久の基と奉存候、就夫次第を以申上候時、尾張様の筈と思召候へ共、当尾張様は文昭院様御在世の尾張様にて無御座候故と思召候、成程御当地にて其取沙汰御座候、文昭院様薨御御前に、尾張故大納言様と当紀州様へ御遺言被仰置候処、大納言様被薨候へば、此中納言様へ御讓被遊候事御尤成儀と申候、併中納言様達て御辞退にて、御年齢を以申上候へば、水戸様御統被遊候筈に思召候、御家を以申候へば、尾張様の筈と思召候、中納言様には、何れの道にも御立可被成訳にて無御座候旨被仰候得ども、右文昭院様御遺言の儀を以、水戸様急度被仰立故、其上にて落着仕候由風聞に御座候。

380◆一 中納言様には、先年の御養君と申儀御座候、御幼主様にて御座候得ば、いかにも御幼君と申候にては御座有間敷と思召候由奉承知候、漢にも此例御座候様に奉存候、天子にては無御座候得共、魯閔公の後僖公被嗣候、此例と奉存候、尤今般も御養君様と申候ても無御座候得共、御讓を受候て重く御座候故、三年の喪にて可有御座儀と先生なども被仰候、頃日世上に申慣候は、今般は跡々と違諸事御遠慮なども軽く御座候、五世にして親尽と申儀に候へば、先主と御当代と御服忌も無之故と申候、是は大方林家より出たる説にても可有之と先生被仰候、世上に箇様には申候得共、御讓を被嗣候事重く御座候、重きを受候上は御養君と申にては無御座候得共、定式の御服にて可有御座と思召候由被仰候、御昭穆の儀は、魯の僖公の時僉議にて埒明申儀にて御座候かと奉存候旨申上候得ば、成程夫には替儀無之由被仰候、乍然御服忌と申候ても、伊勢、日光等への奉幣使を御延引候迄にて、其外は追付將軍宣下等御能抔も有之、追々御目出度／＼と申続候世間に罷成可申と奉存候、慎終は人心の所不能自己者、上たる人の所当為者にて御座候処、若今如斯に候はゞ何を以下民帰厚可申候哉、当日日祭酒二ノ丸へ被為召候て御尋の儀有之由申候、林家より出候はゞ相違の儀ども可有之と奉存候、今般は新井氏へは何分御用も無之由申候。

381◆一 御当地御凶変の儀乍恐奉絶言語候儀先書にも申上候通に御座候、併御長主様御立被遊、其上御賢徳に候哉、扱々打続度々の国恤にて人心も慣申儀に御座候、何の騒敷儀も無御座候、随分世上穩に御座候、十六日より於増上寺御法事御座候処、今日四ツ時上様御参詣四半時還御に御座候、蒸暑に御座候得共雨天にても無御座、爰元御表御門前〔芸候桜田の邸〕御成被遊候処、何の相替儀無御座候、暫の間に事済申候、久々にて御成の儀に候間嘸嚴重に可有御座と奉存候処、跡々より終に無之程何のやかましき御儀無御座候。

381◆一 於芸州段々御善政の儀申進候処、御感情被遊候由御尤奉存候、頃日に至り候て密に承り候へば、過分の御恩沢には浴し候得共指て人々悦び不申候、其仔細は、随分過分に被下候得共、家来の驕り道中の入用衣類等の費用に罷成候故、勝手方は自若として荒候と嘆き申者多く御坐候体に相見へ申候、有仁心仁聞而不被其沢と申物にも可有御座候哉、此外持法院様御忌中并国喪の内も、私躰の了簡には難心得御儀共御座候、毎々祭酒へ御参会被遊候故、林家より出候儀にて可有御座と奉存候。

382 ◆ 一 当廿一日野矢理大夫役儀御免隠居被仰付、為代井伊清左衛門百石の御加増にて、大村七郎左衛門同役に被仰付候、廿一日廿二日此外御加増、御役替、御褒美等被下候者御座候、難有儀は勿論の儀に候へども、御喪居の内に候へば、今暫御延引被遊候てと奉存候、此外にも申上度儀とも御座候へ共指扣申候以上。

五月廿七日

追て此砌世間一統に上様の御儀迄を奉称美候、其内一両件別紙書附懸御目申候、間部殿事当主二ノ丸へ被為入候時分、本多殿と兩人共御老中跡に御附候て、伺御機嫌二ノ丸へ御越候、如何様の儀御座候ても、御尊骸の御側を離候事は無御座筈に御座候処、早当主へ被詣候御様子と其時分より沙汰にて御座候、御尊骸増上寺へ被為入候はゞ、追付隠居にても御願の場にて可有之旨諸人申候処、其儀無之其内あなたより鷹ノ間詰に被仰付候、未威勢を被貪候よりの事に申慣候、月光院様平生の御奢、且又一位様と御不和の儀余程慥成沙汰承申候、頃日に成り候て知れ申躰に御座候、是等の儀越前守殿は御存知無之事は決て無之筈に御座候、越前守殿平生の御勤労も知申候、有章廟御在世の内は曾て知不申儀に御座候、以上（以上小谷兄五月廿七日來書）。

別紙左に記之

383 ◆ 一 今般御相続被遊候事、天下の御政務の儀と被思召候故、只今迄の上様と違申候て、殊により御軽々敷奉存儀も可有之候、存の外成儀をも被仰出候事も可有之候間、兼て其段心得可申旨御書通に御座候由。

383 ◆ 一 権現様御代よりの御格式の儀においては少も儉約仕間敷候其外の儀は随分無用の御費無之様可仕候

383 ◆ 一 紀州御家より被召連候御用人内藤市郎大夫とやらん申人、殿中不案内故、御老中方御列座にて被成御座候処に罷通候時分、氣付不申不礼仕候に付、達御聴紀州へ御返閉門被仰付候由、先立仕候御道朋、是も紀州より被召連候者の由、是又無礼の仕形に付、迷惑被仰付置候由に御座候、以上。

383 ◆ 一 紀州に被成御座候時分、御鷹野に御出被遊糞桶の中へ御落被遊、御惣身不潔に御汚被遊候処、其糞桶の主を呼出候様にとの御意に付、御前へ罷出候へば、定めて御手討にも被遊候哉と何れも奉存候処、左様には無之、其方定て大切に可存物にて候処、風と思召懸も無之、卒忽の儀被遊候旨被仰出候て、其時分汚れ候御衣類の分は勿論、御腰物迄被下候由。

383 ◆ 一 江戸御屋敷の内二通り程往来仕候へば、一里の道程有之処に御座候由、平生御食後には必御歩行被遊候、然る処一日御歩行被遊候時分、御慰に御自身にも御近習も手を振足音高く踏付、供の下々の奴をふり候様に被遊候て、一通り御行歩被成御仕廻候て被仰候は、やつこを振候は手足共に草臥申物にて、箇様にては何の役にも立不申筈に候間、供の下々のやつこを振候事は、向後必無用に可仕旨被仰出、夫より御家中迄も異形成仕形の供廻無之候由。

384 ◆ 一 頃日も御用聞の呉服屋咄申候由にて承り申候、縮帷子御好にて被為召候、至極太き縮布にて御座候、常に御帷子も殊の外太布にて御座候由、冬には御膚着は木綿にて御座候、長福様も綿衣のみ被召候由、御腰物鞘三尺余、御脇指も二尺五寸計蔬菜の御料理黒飯御大食被遊候由、御酒も余程被召上候由、但最前主膳様と申時分は、御大酒にて御座候処、紀州家御相続の時分より分量御極被遊、御大酒は不被遊候と申候。

384 ◆ 一 御尊骸末御寺へ御移不被遊時分、何某組与力手討仕候を、此砌如何様の儀有之候共手討杯は遠慮の砌に御座候処、不了簡の仕合と申評判に罷成、下にて不得止奉達御聴候へば、手討か成敗かと御尋被遊、手討の段申上候へば、喧嘩手討の儀は時節にも場所にもより申間敷旨上意にて、其分に罷成申候由。

384◆一 久世大和守殿物語、何の五左衛門とやらん申者贅婿にて、親跡目にて百五十石取罷在候処、当月中旬組の足軽五左衛門妻と密通仕召連立退候を、五左衛門大和守殿へ暇を乞追懸候て、板橋にて兩人共切留申候由、以上(以上別書小谷兄)。

385◆一 上様先頃御老中方へ御白衣にて御逢被成、上意には白衣如何と可被存候へども、向後昼夜共毎心易諸事不申談候へば不叶儀に候ゆへ、其度々急度改申儀にも不及候に付、如此仕合と被仰出候由の事。

禁裏御用、日光御用等の時分は、先達て可被申上其御心得被遊候て、御逢可被遊旨被仰出候旨(斎賢私記)。

385◆一 吹上御庭の内結構成御亭多有之候由御聴被遊、何もたゞませ可申候、出御の節の為には、小き御茶屋にても一ツ有之候へば宜候由被仰出候旨箇様の儀共此外も咄し多御座候、実否は不奉存候へ共御尤の御事と乍恐奉存候、但早き御事にても御座候哉と取沙汰も御座候。

385◆一 薩摩守殿御檜重上り申候処、其御菓子可被召上旨上意に付、跡々より献上物は不被召上儀を申上候へば、御自身に御覧有之候、献上と申候へば精誠被入念候、誰とも可為其通候、其上薩摩守何の遺恨有之毒害可仕哉、是非上之候様にとの上意にて被召上候由。

385◆一 御台子有之候処へ御出被遊、御茶を被仰付可指上旨御直に御意に付、御茶碗を御陪膳衆へ可相渡と仕候へば、其儘上候様に御意にて御直に御取被遊被召上候、其上にて京焼外に葵の御紋付を御覧被遊、是は何の為に候哉と御尋被遊候処、跡々より被召上候御茶碗、箇様に為調候旨申上候へば、箇様の儀には及間敷候、御紋を焼付不申常の茶碗に仕候へと上意に付、其後は高原焼とやらんに成申候由。

386◆一 御帷子は太き縮御好被遊候由、さらしにても至極ふと布の由、御布上下も其通に御座候由。

386◆一 御大食にて至極怪き物を被召上候由御酒も余程被召上候由、武芸御好被遊、御力量も余程被成御座候由。

386◆一 水戸様へ御対面の時分御会積、最前紀州様の御時分の御挨拶に付、水戸様御難儀被遊其段被仰上候へば、未宣下も無御座候へば、跡々の通に被思召候由上意の由。

386◆一 長福様附人々、別て女中衆は長福様御登城の御供可仕と存じ、其心得にて用意杯仕候事無用に被思召候、只今まで被附置候人々可被為召も、又は被為召間敷も相知不申候由被仰渡、依之女中方杯殊の外用意仕候処、ひしと指止候由。

386◆一 一位様は御主殿へ被為入筈と申候、月光院様は吹上の内にて一万坪御屋敷被遣、御亭御修覆出来被為入候筈の由申候、法心院様、蓮浄院様は御願にて夫々御附人被指上、

386◆一位様に御勤被成度旨に付、其通りに罷成申候由沙汰仕候。  
386◆一 半蔵御門清水御門等の儀、跡々の通往来に罷成、昨日より往来仕候由申候、方々相勤候使者等の為にも一段の儀と奉存候、以上(右小谷勉善兄来書)。

六月廿一日

387◆一 御当地町方疫病被行候て、凡八万人程死人御座候申申候、頃日に到り候ては、棺もきれ申候故、軽き者は大方古樽に入候て葬申候由申候、火葬に仕候所も殊の外せき申候に付、俄に可遣と申候ても不罷成、帳に付置何れの釜にても十九番廿番過不申候へば成不申杯と申由に御座候、やき仕廻候ても骨を拾ひ仕廻候て、又葬申候故はかどり不申候、依之身代も宜候ものは新釜を為拵候へば、殊の外過分の金子費用懸り申候、土葬可仕と致候へば寺々寺内すきとふさがり、古き墓は不残切崩候様に仕候へども、夫とも尺地も無之様罷成候故、火葬にも土葬にも俄には難成、其分に難指置御座候に付、頃日は軽き者は大方薦に包候て築地、品川の海へ水葬に仕候由、箇様の事は何とぞ上より被仰付候様可有之と奉存候、当主御賢明の沙汰は御座候へども、中々箇様の御仕置には決て及申間敷奉存候、

歎敷儀に奉存候、以上(小谷兄与小寺兄書)。

七月廿二日

387◆一 昨十二日將軍宣下相濟申候、大雨に候処無御滞相濟恐悦の至奉存候、其後段々御新令も可被下と奉存候、御儉素の事は古今に珍敷程と奉存候、頃日も御印籠出来、黒塗内は梨子地、御緒<sup>ゞ</sup>はむくろじ、御帶着は象牙のくさりにて候、御大小皆赤銅、鉄、赤がね拵にて候、是等皆慥成儀に御座候、先日御馬乗袴被仰付候、小倉木綿に御座候、是にて御推量可被成候、先結構成御事に御座候、御鷹野追付可有之由頃日御鷹匠頭衆杯被仰付候、以上(先生遺跡書中)。

八月十四日

388◆一 頃日随分御静謐何も取沙汰承不申候、但虚実是不奉存候、御相撲の者被召抱候由先生御聞候とて御咄被仰聞候、扱は町人の者月額の鬢を剃さげ候様触申と申候、是も一兩人末々の者の咄にて承り申候、虚実は未奉存候、町中一統の儀に候へば追付様子相知可申候、是は上より出申儀に御座候哉、但上に御好被成故下より申付事に御座候哉、難心得儀に奉存候、鬢の厚薄の僉議を情の厚薄に移申度ものと奉存候、総ての御様子粗鄙浅露の四字を出不申と先生密に被仰候、又一統先頃御老中方御前へ被召出、相模守殿へ三品御尋の儀御座候処、二品は御覺候て被仰上、一色は中々御覺無之旨被仰上、是は御首尾宜候由、其次河内守殿へ年中御收納高御尋被遊候へども、御覺無之旨被仰上不首尾に御座候処、大和守殿へ御城中櫓の員数を御尋被遊候へども、是も不奉存旨被仰上、夫より豊後守殿、山城守殿へも、一色宛段々御尋の儀御座候へども、何も不奉存候と計被仰上候故、上にも御不興の御様子に御座候由、其以後御老中方より上意に可応儀共御伺候へども、なにも遅からぬ事と被仰、其以後は何の被仰出も無之との御事に御座候、此説の通りに御座候へば、深く御思慮も有之様に奥床敷奉存候、是は新井氏咄しにても御信用は難被成候へ共、各別の儀に思召候と先生被仰聞候、新井殿は今以越前守殿は賢人の様に被申由に御座候、世上に申候とは各別の事にて御座候、其内御事情相知可申候、以上(小谷兄書中)。

七月十六日

389◆一 一説に文昭廟御遺書には、尾張五郎太様、紀州長福様、鍋松様、有章廟万一の儀も被成御座候はゞ、為御養君、御立被成候て、尾張様にても紀州様にても御後見被成候様にとの御事に候処、水戸様御建議の趣有之、其段一位様へ急度被仰上候て此度紀州様御立被成、御後見の名も無之直に天下を御取被成候、但数度御辞退に付、水戸様御手を御取被成御上段へ御誘引、尾張様と被仰談即刻御拝礼被成候て、御位も定り申説有之候間、其段潜在先生へ申上候へば、先生御聞被成候趣具に御物語被成候、如右御座候、有章院様四月廿八日頃俄に御病症重く被為見、大方其日の内にも被絶候様子に申候、文昭廟薨御の前、嗣君御幼稚誠に水の上の泡の様に被思召候為、天下長君を被立度候間、其時の尾張様を御立可被成かと、御内々にて僉議も候へども、御実子様被成御座候上は、夫にては却て人心も動可申候、古人朝遺裘候て遺腹の児を立申儀さへ有之候間、只鍋松様御立被遊可然と申に相極申候、就夫御遺書には鍋松様万一の儀も被成御座候はゞ、其時に尾張様か尾張様故障有之御立難被成候はゞ、紀州様御立被成候様にとの儀御直にも被仰合候様と申候此度は上様薨御とは無之、御病氣被成御座候へば無御心許儀に候間、紀州様為御後見御城中に被成御座候様にとの儀を、一位様より土屋相模守殿、間部越前守殿を以被仰出候由に候処、紀州様被仰上候は、御家柄を以申候時は尾張殿、御年老を以申時は水戸殿にて候、私事は不存寄候間幾度も御辞退被成候旨を被仰上候処、水戸様只御請被成可然と御挨拶の処、其外には御老中一人も物を申人無之候、然処越前守殿御遺言と申、一位様御意と申、御辞退被及間敷儀に奉存候旨被申上候最中へ、奥より被為召候旨にて、紀州様御通被成候へば、文昭院様御遺言に被任御後見も御願被成候、御辞退無之目出度御祝被成候様にとの儀に

て、一位様御手自打あわび被進候処御頂戴被遊、御請の儀は表へ罷出候僉議の上にて可申上由被仰上候処、御辞退に被及間敷旨高声に被仰候、御中座被遊御請有之処へ、一位様御立出被成、越前守事は文昭院様御取立の者にて候間、以来御見捨被下間敷旨被仰候の趣、其儀も兎角表に出で各僉議の上を以御請可被遊と被仰御退被遊候趣、水戸様御聞被成、尾張様御家は五郎太殿にて先は終り申候、只今は新家同事に候、唯一位様思召に御隨被成可然儀と被仰候、此時も老中の内一人も御挨拶申方無之処、越前守殿乍恐天下の為を被思召、無御辞退御後見に御立被遊可然と奉存候旨被申上候、扱水戸様御誘引候て御上段へ御上り被成、則水戸様には中段に御着座、尾張様と同事に御手を御つき被成、御脇差を御取被成候へば、其儘くと被仰候て上段より中段迄御下り被成、達て御留被成候に付、御脇指御帶被成候、最早上段へは御上り不被遊御心安天下の御政務も御相談可被成候間、只是に可被成御座候由御挨拶有之、其上にて上様薨御の御披露有之、翌朔日諸大名へも其段被仰聞候由、此趣実説に相見申候。

391◆一 御儉素の儀段々世上に申候通にて、創業の君の様に相見へ申候、先頃御側衆の内北条対馬守殿綸子の単物着用にて候候の処、ひたと對馬守殿を御覽被成、後には御目を注させられ、何とも御目通難居程に相成候故退被申、於御次御同役中へ何坎私不調法の仕形も候哉心附申所は無之候へども、各御見分の通、上様頻に私を御覽被遊候て心掛りに御座候間、先退出仕候由被申候、何れも心付無之に付、小笠原肥前守殿へ主膳殿如何可仕哉と被申候へば、左様の儀前々有之儀にて聊御心掛の儀にて有之間敷候、多分御自分御着用の綸子に御目を被留候ものと存候、結構成衣服御好不被遊候内、別て綸子は女の様に見へ申候とて御嫌被遊候に付、紀国に被成御座候内より御前へ罷出候もの着用不仕候、御自分単物目立候間御着替にて御詰被成候はば、何の儀も有之間敷旨被申候に付、其通に被致又もとの処へ罷出被相詰候処、平生の御様子に候間氣遣無之被相勤候旨先生御物語にて候、先日本多作次郎殿被申候は、此頃は誰と申共無之候へども、綸子はすきと着用不仕候、後は又出申事も可有之候として形付置候旨咄被申候間、其儀を先生へ申上候へば、来歴有之事とて御咄被成候、且又阿部豊後守殿御伺の品十ヶ条を小紙に書記候て御前へ被罷出、段々御伺候処夫々被仰出、未一ニヶ条罷成候、透と御返答無之、唯豊後守殿の衣服をひたもの御覽被成、暫間を置候て又被伺候へども曾て御意無之に付、伺事指止退出有之、同役衆へ如何様の儀と談合有之候へども、埒明不申に付、又肥前守殿へ被相尋候処、其節私も御前に罷在御様子見受申候、外の儀は聊不存候、御自分様の御着用の帷子のし縮にて結構見事に御座候、蟬の羽の様成物に御座候旨、上様御平生に半さらしを被為召候、縮御好被遊候へども悪敷縮を被為召候、御自分様御着用のし縮は定て初て御覽被成たる物と存候、御着替被成候はゞ多分何の儀も有之まじくと存候旨被申、則其通にて着替罷在残る一二ヶ条被相伺候へば、何の事も無之被仰出候、此二品より人々心得各別に相成候由。

392◆一 紀国に被成御座候内、町回横目と言もの二十人計被仰付足軽位の者にて候、何事言上仕候哉相知不申候処、尊卑に不依小児を乳母抱あるき候もの有之、下着に絹羽二重の類を為着候者を見候へば、必其親を相尋役名を記し参候、門前に立居候ものも同事に仕候、不時に何某が当番に候哉、不出合候はゞ出勤の上可申上様との事にて、其者罷出候へば御次へ被為召、其方子供養育の仕様悪敷、内方の者にたらされあまやかし候と見へ、肌に絹羽二重為着申候、小兒温暖に過候へば、たとへ成長仕候とも病身に相成候哉、柔弱にて事の用に立不申候、不心掛第一に候、ケ様に御目付共申上候、向後布子木綿の類為着可申旨毎もく被仰出候、夫故紀国御家中の子供は随分疎略の衣類を為着申候

392◆一 江戸御城へ、被為入候後、御本丸へ火消番と申事御聞被遊即日被指除候、身共罷在候処失火の節火消は入不申候、あらゆる物ども打寄消可申事故、其役人極候には不及事に候、主人の家焼申に見遁居申者は無之儀と被仰候。

393 ◆ 一 御一門方の儀別て御大切に被思召候、紀国に被成御座候中も、尾張様、水戸様杯に御病人方有之候へば御詰被成、常には如何様に候とも、ケ様の節は御在合可被成事と毎々御意に候、松姫君様などへも、文照院様御代より結句御懇に可有之候と申候。

393 ◆ 一 惣て声色の御好薄く候事、御台様御逝去の後御召仕の女中有之、其御腹に長福様御出生被成候、其後御懷孕水の処、小産にて死去被成候、久々御召仕女中の沙汰も無之に付、御家老より其段被申上候処、何れに其分にも難被成候半間可然者選可申候、但長福様御袋方不便に被思召候、其人のゆかりの者を選候て可宜と被仰候、ゆかりの者相選書上申候内妹有之候、去とも容儀悪敷候に付後宮に備へかたく可有之と相談にて、其趣被申上候処御笑ひ被成其沙汰には及申間敷候、病氣にさへ無之候はゞ、此者に可仕旨被仰出、其女中御召使に罷出候処、其人に小次郎様御出生被成候、不幸相果被申、其後御召仕無之共、又輕き女中被召使候へども、紀邸に被指置御城中には不被為召と申候。

393 ◆ 一 紀国御家老の内三浦遠江守と申人有之候、先頃江戸より被為召候て、向後は御昵近に可被仰付旨被仰渡候処、遠江守難有仕合に奉存候へども此儀は御請難仕候、天下の者誰か違背可申上様は無御座候、乍然私先祖は紀国へ御附被成候節、從権現様御条目被成下、其内に於紀州如何様の儀有之候とも、御異見等も可申上候、是則江戸表への御奉公に御座候、然ば紀州に罷在、随分無遠慮御仕置等も御相談仕候事、則私先祖已来御奉公の筋と奉存候間御赦免被下候様仕度旨申上られ、其段達上聞候処、左様にも候はゞ尤思召候間其儘紀州に可罷在候、御呼被成候事別事にて無之候、其方事於紀州折節人の氣付不申事共申上候故、別て只今は左様の事御聞被成度思召候ての事に候、然ども御断申上候間、向後紀州に乍罷在存寄の儀ども可申上由被仰出候へば、遠江守承り届是以難仕事に奉存候、紀州に罷在間は私の職分と奉存候て推参も申上候、江戸へ御出被遊候ては、又夫々の御役人も御座候処、左様の儀申上候は職分を超申事故難奉畏由申上候へば、是も尤に思召候、左候はば、先差当り只今何とぞ存寄有之事も可有之候条、無遠慮可申上旨再度被仰出候処、遠江守左様に御座候はゞ一色存出候事御座候間乍恐可申上候、御生質御無造作に被成御座候て、御小袖のゆき丈も御恰好より短く、御腰物等殊の外長く御座候、御好次第の儀御仕置等害にも無之事と奉存候間、紀州に被成御座候内は、共分の儀と存不申上候へども、天下をしろしめされては又箇様の風俗にも掛り申事に候間、已来は少し御心得も可有御座候事かと奉存候旨被仰上候由、此間御城取沙汰にて承候、然ども此咄は不慥事の様に思召候由先生御物語に候、以上(以上七件先生御物語の分礼翰来書)。

九月朔日

395 ◆ 一 当地何の替儀も無御座候、御鷹野の御沙汰のみに御座候、御出は未無之候、諸候より御鷹献上はや十二三居も有之由、絶て久敷無之事故、鷹の目利など存知申者無之候、不案内至極の由に候、御鷹匠は頃日出来候て鷹の事稽古の由に候、上には却て能御存知被成御座候に付、御尋之事しかじか御請申上候者も無之由に候、頃日井上河内守殿より随分と被存鷹献上候処、はい鷹の由に候へ共まぐそづかみにて何の役にも立不申物にて、長福様方へ被遣候由、河内守殿殊の外難儀の由申候、大臣専に迎合の気味と聞被申候、去ども御聡明に候故、却て不首尾の様子に申候、河内殿守舎弟遠江守殿儀も役儀御免にて被退申候、如何罷成事にて可有之候哉、段々御新政も可有之と奉希望事に御座候(十月四日書)。

395 ◆ 一 当地弥御静謐、火災もそろ有之候へ共早速鎮り申候、此以後無心元奉存候、尾張紀国御邸にて將軍宣下御祝儀の御能有之候、此後は御本藩初方々御祝儀可有之と奉存候、昨日は初て浜御殿へ被遊候、御俵素無造作成御儀は古今未承事に奉存候、十八日に小次郎様初て御城へ被為召候、御母公様を御内所様と申候由、是も同時に御供にて御城へ御入被成候処、青漆の匳相なる乗物にて御長刀なしに候、長刀は御遠慮の筋と申候、其次に五六挺も女中乗物にて参候処、いづれも常のご乗物、しかも古く見え申候由、偕十

八日御城へ被為入候以後、医師衆も御守衆も一度も御機嫌の事御尋も無之由に候、先日御城御堀御巡見に御成被遊候時分も、御供の人申候、棧留の御袴にて御小袖一つ被為召候故、御白小袖は不被為召候よし世上に申候、御門に御通被遊候時分、請取の諸侯御番所の下へ蹲踞被致候処、何れも御言葉掛り候内、「桜田御門」本多中務殿蹲踞の処へ御乗物すはり候て、是へと上意にて息災にて一段に被思召候旨被入御念候御意と申候、頃日大番頭御前へ被召候て、御直に向後人を撰申上候時分、鼻負沙汰毛頭有之候はゞ急度可被仰付候、其上唯今迄禄により候て役人申上候旨被聞召候、向後は禄の高下に構不申候て、其人の材さへ其役相応に候はゞ、小身にても可申上に御座候、此時は御老中も被為召候て、御前に入るの由に候、其後大目附並町奉行等御前へ被為召候て、是又御直に被仰渡候事有之候へども、此時は御老中も被指除、誰も外の者御前に居不申候故、何事に候哉存知申者無之由に御座候、十五日には軽き役人被仰付候、御腰物奉行、御膳奉行などにて、其内に松平右源治と申人、桜田より文照院様に御奉公いたし候人にて、其後は小性組にて候処、此度御膳奉行に被仰付候、近頃昭廟へ奉仕候人は被遊御嫌候様に専ら沙汰仕候、是は執政の衆始御先代をおとしめ候様に被致と聞へ申候、其故わざと右源治を此度被撰出且又御膳奉行に被遊候と人々申候、只今まで御新政も未被仰出候へども、執政衆始諸役人共に殊の外畏服仕様子に御座候、御継続御始に候へば、前朝よりの老臣に御聞せ可被成筈と乍恐奉存候其上にて御意に不応候はゞ、可被下御手と被思召儀に相見へ申し候、第一、近来華麗至極に候処、此の大弊追々改り可申と存じ候、最早殿中などは華服遠慮仕る体に聞へ申し候、追々御善政とも相達可申と奉存候(与奥子復斎賢書)。

十月二十四日

追て前夜新井筑後守へ一夕参候て緩々語申候、筑州屋敷も絵図取に参候て指出候由被申候、是も畢竟屋敷替たるべきと申事に御座候、頃日も松平甲斐守殿御弓町の屋敷上り申候、急に明可申由にて余程騒動に候処、上り候てふらりと何の御用地と申儀も無之候、其外ちよろくと致事抔存知合候処、皆執政已下の衆逢迎に出て申事共にて、上には屋敷替等の事余り御心と不被成様子に聞へ申候、ひたと逢迎致見被申候へば、頃日は合不申候て執政衆も長懼被致候様に見へ申候由、是は目出度御儀に奉存候旨新井氏も悦び被申候、兎角英明の君と相聞申候、来春に至り候はゞそろそろと御手段も見へ可申候、頃日天下一と申諺定て御聞可被成候、是は目出度諺にて候、天下一の君に御成可被成と奉仰望候、是は君いまだ御開不被成儀も可有之候間申候、東照宮より当御代まで八代にて下字の小点有章院様に当り申候、此処にて面白御座候。

397◆一 此表弥静謐にて何の替申儀も無之候、頃日も新井氏へ毎度出合候、時事失望申儀計にて御座候、委細は筆紙に難及候、儉素と申儀も天下之為に華奢を抑らるべきにて、先人主の御身より儉素に被成儀は至極成事不及申上候、吝嗇成より出候て自分の勝手を専らに仕候は、華奢の弊同事に御座候、箇様の儀大学頭杯如何心得可申候哉と奉存候、頃日承候へば、最早御加増不彼下筈に候抔と被申由に候、老耄被致かと奉存候上下征利候様に罷成候ては国家の利に非る勿論に奉存候頃日時服拜領、何も御近習衆へは一ッ宛と申候、御台所酒食も此間俄に変候て、至極目つまり申儀と申事に候、其外事体を失申儀どもいろいろ承り申候、先頃町奉行杯御前へ被召出御直に被仰渡候は慥成事に候、何事候やらん其儀は他言無之と見へ存知申者無之候、其後町奉行中杯出合の時分、おどり子有之終夜宴遊の事承り申候、何を被仰渡候哉と奉存候、是にて御推量可被成候、何事も名計にて実無之事、風俗も又困窮も改り可申様無之候、乍此上来春にも至り候て、何卒御善政も有之、耳目を新に仕事も出来候へかすと奉願候、以上(十二月廿四日来書)。

追て教化なく候へば、風俗急に衰申候者と奉存候、新井氏事只今随分隙にくらし被申候、朔望に登城迄にて候、おしき人物に御座候、此人御用無之、林大学頭世に用られ候にて

時世も相知申候、委細の事は筆頭に不被申上候、以上。

享保二年

398◆一 旧冬十月十八日の貴翰も到来拜見仕候、被仰下候役者加増の説は浮説にて曾て無之儀に候、御儉素の事弥慥成事とも承り、とかく驕奢の風俗に候へば、箇様に格別御儉素に無之候ては此病難治候、先は能御儀に奉存候、是又声色の御好會て無之此儀も慥に御座候、其故椒房の風各別に罷成、当分難儀候人も有之由に候へども、是以近代の大弊に候へば珍重と奉存候、委細は筆紙に難申尽候、以上(正月八日)。

尚以御鷹匠頭間宮五左衛門旧臘役儀被差除候、尤五左衛門方より断には候へども、断申させ候との様に御同意有之の事と申候、五左衛門事親共父五左衛門事、殿有院様御代御鷹匠頭被勤候故、此度は又々役儀被仰候処、此人平生不宜候聞有之、此度は御鷹の事に付私欲の事共相聞へ有之、人民を暴役いたし賄賂等取申由、其段早速相達、間も無之役儀御免にて候、ケ様の儀も御先代とは替り、其儘上へ相達申躰に御座候、其故に諸役人共戦慄仕体に御座候、藩国に被成御座候時分能々御聞被成、此表役人共の事委細御存知被遊候と見へ申候、是等何よりの好事と奉存候、去年よりの天氣に近年無之長閑に御座候、何とやらん天意に御叶候様乍恐奉存候、尚又当春に至り段々御善政とも可承候、傾聴致罷在候事に御座候、以上。

399◆一 頃日御条目も出候て、諸候以下諸役人頭等は登城にて被仰渡候、私共杯へは御目付中より回し申候、御条目御代々潤色の事に候故、此度天和の通に御従被成候旨奥書有之候、宝永中文昭廟様御代定り申儀は、御代々の条令を多被致候に付御用ひ不被成候て、天和に立帰り申趣と相聞へ申候、衣服の事杯少々追加の事も有之候哉と相見へ申候、いまだ天和条目と引合見不申候故篤とは不奉存候、十一日諸侯列座の後出御被遊、御高声にて御直に治世久々故挙世美麗に罷成候、此以後随分国政の事可心掛の旨被仰渡候旨、安芸守様御帰りに被成御語被成候旨承り申し候、然ば慥成事に奉存候、只今迄御代替に終にケ様に御直に被仰渡候事承不申候、結構成沙汰に御座候、然ども仁心聞有之候ても御仁政無之候ては、其沢下に及不申候、定めて此後段々御善政も有可之候、仰望此事に候、来月増上寺御法会も、先例は十八日に候処、此の度五日に仕回候様に被仰出候旨、其に付住持断申上、已に代々御法事格違候ては、其出家一分難立候とて、住持職指上置立去申候、光明寺とやらんより今度新に居申候、是等も御簡略故と聞へ申し候、其外井上殿、森川殿兩人簡約奉行に被仰付諸役人手前御吟味の由申候、冗費を省き候事一段の事に奉存候へども、又是に付て其弊も不少致難儀候者も有之由申し候、先は常憲院様以来諸役人私欲を過し候と、不埒成事共と聞へ申候、此度御吟味無之候ては不叶儀に御座候へば、是れは当時の急務共可申候、此上に能人材を御撰挙被成、其人を御替被成候様に致度事に候、何程御吟味被成ても、又此の程跡へ帰り可申候、森川殿杯殊の外嚴酷成人の様に諸人申し候、定めて段々様子相知可申候、其上にて御聖断可有之候(三月十八日与天野氏)。

尚以当地の体、衣服等追々儉素に可罷成と奉存候、是は近代の大弊に候処、珍重不過之奉存候、何卒教養両縮の御政令出候て、四民の困窮を救、且又風俗の頹敗を振ひ候様仕度計に御座候、当地学者始めケ様の事に気付者一人も見へ不申候、勿論執政以下諸頭諸役人不学無術の事に候へば、望も大方無之候、以上。

401◆一 昨十一日隅田川へ御成にて御座候、向後方々御成可有之御沙汰に候、御成筋は其心得仕申候、毎度の儀に候はゞ下々難儀と奉存候、先日度々御出被成候事下々難儀に及申間敷候哉と御尋に候へば、毎日御出被成候ても下々難儀仕候儀は無之旨誰やらん申上候旨に御座候、本庄杯は大分の蘆出申候処にて、此度俄にすきとからせ申候、責て土用中に苧候様にと願候へども叶不申候、只今苧候ては何の用にも立不申候、此砌方々作事有之候故、蘆杯は急用成物に候処、此後扨底に可罷成と申候、先頃は麦杯も刈申候由承申候、わ



ぎに左様のもの有之候ては、御鷹場へ鳥寄不申にて如此被仰出候と申候、常憲院様御代には生類御憐とて諸人難儀いたし候、此度は御殺生の事に付諸人難儀仕かと存候、万端常憲院様御代の事神慕ひ被成候御様子候処、是も格別の儀に奉存候、松平右京大夫殿首尾好候由、此間も御前へ被召出御閑談時を移し申候、其跡へ林大学頭を被召出、また良久御閑談被成候由承申候、兩人共常憲院様御代政事に預り被申候衆にて候故、其時分の儀を御聞被成候為と申候、正月廿三日火災の時分、御本丸へも火子など参候て殊の外御さわぎの由、着込被召候由世には申候へ共其は虚説にて候、其節火事羽織召候、御立付杯は菖蒲皮にて候由、御頭巾をば帯に御挟み被遊大成戸を御自身御はづし候て、其さんを御つたい被遊屋根へ御上り火の様子御覽被成、其内一位様御のき被遊候とて、女中など出申し候を御覽被遊、御自身に御留被成候由、御軽き儀御先代に終に承り及ばざる儀に候故、旧宮人杯目を驚かし申候と承り申し候、御儉素下に近き御様子に御座候。

402◆一 御慈悲等も有之由に候へども、下情壅塞いたし人々艱難上へ達し不申候へば、何の甲斐も無之、其上迎合の衆のみに候故、能々明決に不被成御座候ては難成と奉存候、小笠原肥前守殿も先頃隠居被仰付、去年大病相煩、其上当年子息死去に付御役儀御免被成と被仰出候由如何の儀と申事知不申候、一説には言申上候故とも申候、又は肥前守殿手前賄路杯の事にて候哉と申候、諫言沙汰実には御座候てはもはや無頼儀に奉存候、此後段々御様子も相知可申と奉存候（五月十二日与修運齋賢書）。

小谷兄四月十七日書

402◆一 小笠原肥前守殿当月三日隠居被仰付候由、是は紀州御家にて主膳殿と申時分より、能人の様に申憤御城へも被召連、御側衆に被仰付置事頼母敷儀と申たる事に御座候、跡々にて度々諫言も申上、上にも被容候と取沙汰仕たる儀に御座候、然処今般隠居被仰付候は諫言より発たる儀と申候、御医師吉田宗仲老近き頃より爰許御広敷へ被参候、私是不承候、先日此儀に付宗仲老咄しにて候由、同役申聞候は、肥前守殿久敷にて御座候処、前月廿八日前廉御老中方へ案内無之出仕被致候に付、先達て御断も可有之候処、断無之出仕の段不念の仕合にて、其事発候て隠居被仰付候との事に御座候、ケ様有之間敷と奉存候、若此儀にて被仰付候連も、是に被托候ての儀にて可有御座存候、毎度御酒宴、今程は月光院様へ被為入候ては、女樂杯の被行候杯とも申候、是は風説にても可有御座候、青山のすへ勢多谷と申処の辺へ、頓て御鷹野に出御の筈にて御鷹野道を造り、又は構に罷成申処表をを刈らせ申に付、其辺の百姓殊の外迷惑仕候由、勢多谷の者参候て咄し候と承り申候。右の通申上候処、今日増田寿針老被来候に付、如何様の訳にて候哉と相尋候へばしかと知不申候、二説有之候、一説には養子の儀に付不調法の願有之候共申候、又は去年以来病氣故ひたと失念の事多有之、先頃より申上候儀に間違申儀共有之故とも申候旨被申候、御鷹場の事も勢多谷の辺の様に承り其段申上候処、今日亀井神戸天神へ参詣仕罷歸候者申には、あの辺も田畠の道を広く作り申に付、夥多人足を掛候て普請有之候、あの辺の者共は十万両程の費可有之と申由に御座候、左候へば江戸回所々不残如此と相見申候、已上。

小谷兄五月十七日書

403◆一 当十一日隅田川筋へ御成被遊候、江戸回民家の費不可勝数と夥敷風聞仕候処、人々申は皆虚説にて指て民家の費も無御座候と申候、尤御成前には末々の奸吏の所為にて、少々百姓難儀仕候事も御座候へども、人の申候十が一にても無御座と申候、御成の時分は男女罷出拜み申由に御座候、殊の外御軽き御様子に御座候と申候、御用船兼て百艘拵置候処、二艘ならでは御用無御座候由、是は慥成る咄承申候、此事にても相知申候、明日又千住筋小菅辺へ御成の由に御座候、兼て取沙汰仕候様には、民家の痛は無御座と申候へども、ケ様に毎度御鷹野に被為成候ては、何の御政務も無御座候ては、惣体天下の痛にも可罷成候哉と奉存候。

404◆一 当十一日隅田川へ御成、昨十八日又千住辺へ御成被遊候、以後毎度の儀と相見へ申候、遊豫は民の爲にも被成儀も可有之候へども、禽荒は古今の誠むる処にて御座候、十一日御成の時分の儀承申候処、木綿御脚半、かきの麻御羽織にて裳を御かゝげ被成、御草鞋を帯に御はさみ、其御体にて御玄閑迄御出被遊候、御殿に相詰申番人等驚申由に御座候、途中は御駕籠の戸両方共に御はづさせ被成候て、右の御体にて内々被成御座候、何とも御不相応の御様子由に候、隅田川辺御船に被召候て、間も無之船中より御鉄砲にて鴻を御打被遊候、上に被遊候とは不存知寄候故、船中の御供中以外の外驚候由に候、是は尤に候、路にて御案内も不被成候故、各驚申由尤に候御意の由申候、大猷院様品川辺へ御成の時分、何者に候哉鉄砲打掛申候、御駕籠に当申候、其節色々御穿撃候へども相知不申候、博浪沙中の椎にて候、然処に又翌日品川へ御成被遊、しかも御馬にて御越被成候由に候、御英主の所為と奉存候、ケ様の儀も皆々承及たる儀に候故驚申も理に奉存候、今度参向の公家衆御礼の時分、出御候へども御礼不被申上候、こなたより御会釈有之候て其時礼に被及候由、其故高家衆三人申合悪敷候由にて遠慮被仰付候、右公家衆上野へ参詣の筈に候へども、其儀も不罷成御追返し被成候、当地へ参り候公家の儀に候へば、威儀に習被申候事は勿論にて候、左様の失礼は有之間敷儀に候へども、余り御軽き御様子に候故間違被申たるものと奉存候、何も御暴横の儀は無之候、十一日にもせこ出申候、御徒にも一統に時服一ツ宛被下候、組頭には二ツ宛大頭には三ツ被下候、近年御簾本婦人の様に罷成美麗に流候故、態々輕易粗豪に被遊候て御見せ被成候かと余の儀に奉存候(与子俊兄斎賢書)。

五月十九日

尚以易履卦に有之哉、「眇能視、跛能履、武人為大君」と覚申候、眇は全く視る事不能、跛は全く履事不能候へども、時に当て能履申候、大君の位は本武人の居所には無之候へ共、時に依て武人に成申候、中国にても五代の時分天子と成申人武人にて、不学無術に候へども、天下唐末虚文に流候故、人々其弊を厭申時分にて、武人の輕易率直却て時弊を救申益も有之候故相応に治り申候、其所則跛能履、眇能視にて候、近代太平によつて人々柔弱に罷成驕奢至極に候へば、格別の事にて無之候とは揉直し申間敷候、ケ様の時節を御考被成、易に於て如此被仰置候、奇妙成事と奉存候、王侯以下書を讀も不讀も、おしなべて不学の人にて候へば、とても正道にて治り申事に無之候、一偏の益にて少々取直申にて御座候、無是非事と奉存候。

405◆一 当地何の替申儀も無之候、前書に申進候通に御座候、頃日大目附役横田備中守へ千石御加増被仰付候、人々不存寄儀に御座候、旧功を申候へば、仙石丹波守杯備中守より久敷御座候、此人常に御老中へすきと勤不申候、外より音物等定りたる格の外受不申候、ケ様の人に御恩賞有之事世人気の付申儀に御座候、一事に候へ共余程珍重成事と奉存候、先頃取替の時分、本多若狭守殿に一万石御加増被仰付候も其節如何の儀と申候、是も承り候へば能人の由申事に候、とかく前書に申進候御儉素の様子、且又此処横田杯へ御加増の事風俗を御直被成候思召と相見へ申候、常体の儀にては無之候、朝鮮来聘の儀も、宗対馬守殿へ被仰渡、来々年参申筈に候、一両日以前雨森東五郎に逢申候処、宗対馬守殿も御暇を相待被居候由に候、此度林大学頭差函可有之候間、格式又改候て常憲院様御代の通に可罷成と申事に候、日本国王の御称号、階下迎送等の事、先年段々被仰立候儀有之候と後々迄被定置朝鮮人も承服致候処、又此度変替候ては、外国への聞へ気毒成事に存候、頃日はや朝鮮来朝と御書出にも有之候、使官来聘の事に候へば、来聘と可申旨文昭院様御代相極候、御尤成事に諸人存候処に、いかに改め申度とて非を遂げ申儀笑止に奉存候、執政の衆何れも不学に候故、来聘来朝の差別も不被存、林大学頭申す通に罷成と相見へ申候、阿世曲学の儒、無知妄作の事無是非存候、以上(六月三日書)。

小谷兄六月七日書

406◆一 小笠原肥前守殿隠居被仰付候儀も其時分取々風聞仕候へども、指て諫争の儀も相續候ては沙汰も無御座候、病氣にて失念多、毎度被申上間敷事共を被申上候事多御座候故と申候、左候はゞ御先代より御代々どなた様も、御代始の時分より必御寵臣有之、俄高祿を賜り威勢を振候儀御座候処、当分只今迄左様の衆無御座候、却て肥前守殿杯被寵候事庸主とは相見へ不申候由先生杯も被仰候、其外御酒宴等の儀は虚説多御座候故其談も申進候、其以後増田寿針老只今一位様月光院様御用被仰付毎日出勤仕候故、何となく先日相尋申候処、月光院様杯へも御成の儀は、中々不時には不被爲成候御事に候、御道筋夫々御固めも有之筈に候、終に御成の御沙汰不承候由被申候、寿針老咄しの様子に候へば、容易には不被爲成候御様子に御座候、御鷹野の為江戸を中に仕、十里四方蘆葎を刈捨申儀も間違より起申候事の由申候、葎をからせ候て禽を可被得と上意有之候を、数十年來諸役人衆鷹野の儀不案内故、刈せ杯の上意を、薙せの事と存違申候儀と取沙汰仕候、以上。

407◆一 当地の儀何替儀も無之候、当月九日伝馬町より出火、下谷辺千住辺にて留り申候、大方長サ一里程も焼申候、此節珍敷儀に御座候、此間は御成の御沙汰も無之、秋までは有之間敷奉存候、前月十八日御鷹野時分、松枝に鶴とまり居候、御打可被成候に付御鉄砲を上げ申候処、御覽被遊鶴殊の外鳴申躰は、下に巢有之と見へ申候由上意に付、見届候へば成程巢有之候、左候はゞ御打被成まじく旨にて御止被遊候、其近所に驚とやらん居申候、是を御打可被成かと又御鉄砲を上げ申候処、右巢に程近く候間驚を御打被成候はゞ、巢中の雛も驚可申旨にて是も御打不被遊候、是等を考候へば、御仁心有之儀は元よりにて、其上「不覆巢不射宿」杯との事御存知被成候故かと奉存候、此間如何の儀に候哉、三日の間御老中御目見無之候、御老中の面々の不首尾成事に候哉、沙汰不被致候旨承り申候、是も御倦怠にて御目見へ無之にては無之と聞へ申候、横田備中守殿加増の事前書にも申上候通りに御座候、只今当地の大弊は賊吏発向にて、末々迄賄賂行れ申候事、商賈姦利にて物価踊貴候事、偕は火災度々有之追々困窮に及候事、此三事共根元は風俗悪敷故にて候、火災杯も付火は十に二三にて候、何も家々佚遊にて鎮り無之に付致失火候、其上火消役人仕方も虚文のみにて御座候、是等の儀急度御吟味無之候ては、中々治り申儀とは不奉存候、第一は人材無之故にて候間、人材を御僉議有之、諸役人貴賤共に剛明廉直の士を得候様無之候ては、兵具鈍く、され不申候故、何程の勇力の人も鈍刀にて働不罷成候、其御地の儀も当地大略同弊と聞へ申候(六月十四日賜書)。

408◆一 当地世上何の替儀も不存候、頃日御坊主頭兩人遠島被仰付候、吹上御殿へ御成の時分、御鎮り申付筈に候処不申渡故、掃除の者御目通へ入込候て不作法に付、其段御吟味有之候処、支配の坊主中へ申渡置候由に申候へども、誰承り候者も無之候故、偽を申に相究候て、頭をも仕に似合不申由にて遠島被仰付候、乍恐御尤成儀と奉存候、(同日賜子復兄書中)。

#### 礼翰来書

408◆一 外国黒船西国海上にて泊り罷在候儀に付、先日申進候趣は一通りの沙汰にて、実正の事頃日承り候故申上候、小倉城主小笠原右近将監殿へ奉書を以被仰遣候趣は黒船あなたより手指も仕候はゞ、目立候様に仕追払可申候、自身人数召連罷出候に不及可為在城候、惣て小倉より西浦の諸大名は、江戸よりの御指図を不相待、右近将監指引可仕候、五月参勤の時節に向候へば、十月迄可為東国の趣に御座候旨、小笠原は先祖以來小倉に罷在、西国諸大名の指引被相勤筈の御定に候処、致中絶其沙汰無之候処、此度黒船の儀に付被仰出候、但右近将監殿にては然と御披露無之候由、慥成儀にて藤田内蔵允殿被仰聞候、必咄申間敷由被申聞候故、爰許にては物語不仕候。

六月十八日書

409◆一 頃日新井筑州へ罷越候て久々にて緩々語申候、朝鮮人来聘の儀に付、雨森東五郎より示談の事共有之被申越候、筑州所存に不相叶儀共有之旨被申候へ共、其儀は追て可申旨にて不承候、何卒東五郎より御先代の儀承合候に付申越候品有之と見へ申候、対馬守殿は御暇被下帰国の筈に候へ共、東五郎儀は来年まで当地に罷在候筈に候由承申候、従公儀被仰出候は、朝鮮来朝の儀御先代の例僉議致御取捨可有之候、其内就中天和の格御用可被遊候間、左様に可心得旨に御座候、但御老中より被仰渡候書出は如此に候へ共、対馬守殿へ御任せ被成候間、兎角宜様に相計可申旨別に被仰出候故、東五郎杯殊の外難儀仕候事も有之旨に御座候、朝鮮来聘の御用一卷は、井上河内守殿へ被仰付、文書等の事は林大学頭へ被仰付候へ共、右の被仰出杯を以考候へば、来年迄の内如何様に相極可申も難計候、惣て上の被遊方必しも天和の通に被思召候共相見へ不申、第一殺生の儀其外御規式等常憲院様御代とは格別の儀と見へ申候へば、御条目始天和の例にて有之儀合点不参儀と申候、

410◆一 金地院事、権現様已来寺社の事は代々掌り候て、寺社公事等には御老中又は京所司杯連名致来候、大猷院様御代に至り候て南光坊杯申候歟、金地院寺社役御指除被成、始て幸社奉行と申物被仰付候、此寺に喝食小僧両流有之候、惣て禅寺は同事と申候、喝食より旧功有之候はゞ、小僧より出世仕候者より重く仕申儀候、普濟竹林とやらん両僧の末流より嗣法仕来候、普濟は喝食方にて候故、此流の弟子嗣可申処に、竹林方に森川羽州臯負の僧有之候て、是を羽州居申度と被存何かと取持候へども、文昭院様御代御僉議候て、筋目の通に普濟の方へ被仰付候、此儀専ら筑前へ普濟方取入候て、其時より被仰候様羽州被存候て、切齒申旨兼て承申候、然処有章院様御代、右の住僧吉利支丹の末類たるよし羽州被申出、終に右臯負の僧を居申候、此僧大千と申候、「文字は不存候」近頃大千病死いたし、林大学頭此僧と別て懇意候故、病中大学頭杯相談にて、兎角普濟方の僧役に立申者無之候間、後住の事は金地院に重立申僧役者初皆合点不仕候て、跡式事久敷埒明兼、羽州様大千遺状の通り尤至極に候由、林家同事に申立候て、上聞にも達申と聞へ申候、其後金地院役者の僧筑州へ参候時より、右大学頭同心の儀申候故、筑州申候は、大学頭には左様有之間敷儀に存候、金地院の儀は代々普濟竹林両流より嗣法仕事に候処、此度其器量の僧無之候て、五山より嗣候ては家筋に無構、器量次第に嗣申様に罷成候、只今聖堂は代々林家より持申事に候、則文昭院様御代其被仰出候事に候、器量次第と申事に成候ては、大学頭殿子孫とても、儒の器量無之人有間敷にても無之候へば、五六代も過候て不器量の人出来候て、金地院の格に罷成可申候、是は大学頭殿不思議と存候旨物語申候由に候、右の役者よき事承り候と存候て、早速大学頭へ罷越候て申候へば、大学頭驚候て、早速羽州と僉議申候、とかく金地院は権現様御代御定被遊候て、普濟門流嗣申候、其上文昭院様、有章院様御兩代の御黒印も、反古に成申間敷候、御兩代の御黒印を指置候て、大千遺状を用ひ申事甚不可然の旨申候、羽州御兩代の御黒印は必上の思召にても無之、筑州所為候よし被申候へば、誰が所為に候ても御印成候て、御老中被仰渡たる事に候へば、世に合点不致事にて候、其上五山より被仰付候ては、金地院の僧共一人も寺へも留り申間敷由申候へば、御威光にて首に縄を付候ても引寄申事に候、ぬるき事被申候由、羽州返答有之候由に御座候、如此にて兎角長引罷在候処に、上には兎角被仰出無之、先頃御法事の節、五山僧共罷下り候時分、内より被仰出候は、金地院後住の事、普濟竹林両流の僧の中に、住持職可仕器量の僧を五山之長老に申上候へど、銘々に存寄の者名を書付候て、指上可申旨被仰出候、其内只今の住持を選挙仕候人多候哉、今は住持被仰付候、依之羽州客氣盛に被申立候処、不存寄迷惑の体に候由御座候、五山の僧に選挙を被仰出候て、大千の遺状の筋も相立申と奉存候、御尤成儀に存候。

412◆一 長崎一巻の事は、御先代より井上河内守殿被仰付置候処、只今は外の御用同事に月番に被仰渡候、御先代被仰出候筋不同心に候、此人第一に御先代の儀を打破り被申候故、右の仕方と相見へ申候、近来長崎の事何角取沙汰共も有之、上にも大事に被思召候、兎角長崎奉行罷下り候て、御僉議と申に罷成候処、先頃大岡備前守罷下り申候、此人御先代より被仰付置、新法の趣能存候故、早速御老中にも段々御聞可有かと存候処、格別左様に無之、対面の節は長崎表替義も無之哉杯と当座の挨拶にて、何の尋も無之候故、幸に小笠原肥前守と少由緒も有之候付、肥前守に其段申候処、肥前守被申候は、外の儀にて候へば、一円此間見合申候義に相成候へども、是は外国の事に候へば大切の儀に候、左様に延引候ては不可然候間、可経御意旨にて被申候処、上意にはされば是は重き儀に候故、三度迄老中とも如何致候やと相尋候へども、于今何共不申上候、三度迄被仰候儀に候故、其上に又御催促も難被遊候、其方了簡を以て老中へ長崎の儀如何仕候哉、上にも度々私共へ御意に候間、御詮議被成可然旨申候へば、御意に候故其段肥前守老中へ申入候得ば、俄に老中列座にて大岡を召申候、其より前阿部豊後守殿月番の節、大岡より有増申入候処、豊後守殿被申候は、此儀は成程文照院様御代より御僉議の趣、間部越前守為申聞候て承申事に候へども、只今は鬼居不申候故、何とも難決候、「鬼とは新井筑州が事なり」其方能合点被致候事に候間、同役共如何様に申候共急度可申立候、御奉公の儀に候間、身をかばひ申間敷旨承り、事成被申様に候処、列座の節は豊後守殿も井上殿も同事に新法殊の外悪敷候とて、備前守申処を打破被申候、戸田殿は無口成人にて始終何共不被申候、其節久世大和守殿は幸月番にて、井上阿部と備前と僉議の趣始終聞被申候て其上にて、被申候は日本の内の儀に候へば、豈逆様の儀にても、一旦は御威光にて罷成候、是は外国の事に候へば、そゝうに相改め難く候、御先代の段々御僉議にて唐へも新法の趣被仰遣候、此度又御止被遊候とても、何卒唐へも被仰遣候辞無之候ては不罷成候、日本の勝手却て悪敷候間、又如件可仕とは難申遣候間、何とぞ此訳に候故不得已との儀を、篤と御僉議被成可然由被申候て、其日は止申候、然る処に加納遠江守殿を以大岡備前守へ、御内所より一々御聞被遊候、御前代に新法被仰出候時分、御条目の書付可有之候間可差上旨に候、其条目は七冊有之篤と御老中迄出置候へども、御老中被指扣候て上げ不申候、備前守より遠江守方迄申上候に付、老中へ御尋被遊候、最早隠し申儀は不被成候て上げ被申候、逐条御覧被成、一々御張紙にて此通尤に不忠召候旨に候、其定書御張紙共に老中へ御出し被遊一々尤に候此外は有之間敷候、斯様の良法に何角非難を世に申事は法に不叶と被思召候、然処備前守方より此通り必定宜きと不被申上候、如何の存念に候哉と被仰出候、是は御老中へ御あて被成候と聞へ申候、其をば合点無之、其節に罷成候て、備前守二半成儀申上候杯と申由に候、打ッ舞ッ狂言の仕方にて御座候、其後は、備前守を河内守殿始殊の外懇意に被申、林大学頭方へ備前守を長崎への暇乞に呼候て、馳走けしからぬ事に御座候、不幸にて備前守俄に肺癰相煩当地にて相果申に付、日下部作十郎を被仰付候、此人如何可有之や不存候、長崎の事は兼て承り申候、詮ずる処御先代筑州杯、新法は只今の通にては、日本の金、銀、銅、鉄後には皆唐へ参り申候間、信牌と申物を唐の商人共へ被相渡候、此牌所持不仕者にはふつと交易不仕候様相定置候、其故衣類、人参其外珊瑚珠、伽羅など払底に罷成候を、老中始新法故に唐物高直に候て、いやがり被申候、其上信牌無之候商人多数日本へ渡り候て、相對にて交易仕候様に去年以来罷成、却てぬけ荷も多罷成候事も是故と、異口御同音に筑州故とて譏申候、兎角日本の為に永久の害を除申事にて候へば、上意の通良法にて可有之候、然ればぬけ荷等の制禁有之候て、何卒右の法立申様には僉議無之、良法を打破り申様に人に申事候、上には良法と被思召候と相見へ申候、日下部も器量の人に候哉不存候、中々貴賤一同にいやがり申事に候間、此法立申様には難成可有之と奉存候、其上是

に限り不申、上には尤に被思召候ても老中牽制有之候故、壅蔽仕事而已にて候、然ども所頼は上の御英断にて候、一兩年内其効可有之候様私は存申候、其上只今迄の通に候ては、兎角埒明不申物に御座候、いやともに御裁決無之候ては成申間敷奉存候、朝鮮の儀なども何やらん昭廟御代定の通に可被成候様に被存候、其機を見候て東五郎なども、筑州へ示談の事共有之と奉存候。

◆一 頃日御城に御平産有之由に候へども、すきと沙汰無之候、中々軽き御様子に候故、外に存不申候、長福様御そだて被遊候も至極軽き事共に承申候、先頃江戸近辺の巡見の御目付罷歸、何の替申儀も無之旨申上候処、一事も不申上候段巡見被仰付候、甲斐は無之由にて不首尾に候、江戸廻は不殘、御老中御近習衆の領地にて老中の威に恐れ候て、何事も不申様に被思召候かと奉存候、夫を承り候て井上殿百姓、阿部殿駕籠にすがり訴状上げ申候、阿部殿おさへ申儀不罷成河内守殿へ被申候へば、早速被上候様にとの挨拶にて候故達上聞 候処、河内守殿御前へ被為召右訴状御渡被遊、此儀は其方存知候儀に候哉御尋候処、曾て不存儀に候由被申上候へば、領地の民政の事不存儀油断に被思召候、向後心を付候様にと被仰渡候て、右訴状をば河内守殿へ被下し由に候、度々御成も可有之と存候へば存の外無之候、是も御老中方より御成被遊候様にと被申上候へば、御鷹野杯に御出被遊候事は下々の事をも御聞被遊、耕作の様子も御覽可被遊と被思召候ての儀にも有之候処、却て下々難儀の様に御聞被遊候処、御出可被遊旨上意に候由、其故か先日舟にて御出の時分などは、すきと御通筋かまひ不申候、向井将監よく働として船中にて御盃被下候由にて、殊の外首尾宜敷旨申候、先頃横田備中守御加増の時分も、其前日備中守御前へ被為召候て、一人何やらん申上候、其翌日実体に勤申候由にて千石御加増にて候、只今は諸役人独身にて御前に被為召候故、御老中を始め氣遣候体にて候、御前代終に無之儀と申候、然共天下御取被遊候て末日浅候故、諸事遠慮有之体に相聞へ申候、下にて存候とは相替り成程御遠慮可有之儀と奉存候、前に御両殿より被継統候とは替り一等疎遠にて御老中勸進の事に候へば、唐にても援立の臣と申候て、中々人主も自由には難被成、急に抑へ候へば、君臣離間致し禍難も出来申候、日本にても北条の世如此にて候、唐の末か門生の天子と申事有之其時分王室度々無嗣に付、当時の権臣外より援立いたし候故、門生天子とは申候、明德記とやらんにも新座の主人譜代の家人に向て箇様の儀を申など、有之候、唐日本同事に候、此場合に臨んでは、第一人心はなれ不申様に用意候て、そろ／＼大臣の威を抑へ候様に仕事明智の君たるべく候、如何様近年の中相知可申と奉存候、右の件は御他言被成被下間敷、御読過被成候て、此紙面火中に被投可被下候、遠方不入儀と奉存候へ共、ヶ様の儀外より御聞被成まじく候の間、御知らせ申度如此候、以上(八月八日賜齋賢修運書以上五件)。

当地世事無替儀候、水野殿和泉守御老中石川近江守殿若年寄衆は御聞可被成候、松平右京大夫殿只今御政務も預り被申候、先頃より惣下座にて、只今殿中にも御先代護持院溜の間に独座にて、日々御前へ被召出候由に候、小笠原佐渡守入道殿只今峯雲とやらん申候、是も毎度被召出候て御閑談候由申候、ヶ様の衆何卒輔益の功も有之候へかすと奉存候、抱屋敷杯の事も畢竟驕佚を御禁戒の御下心とは見へ申候へ共、指当難儀の者多有之候、新井氏只今被居申処も無心許候処、是は百姓地にては無之、格別の事にて少しも構無之旨、先日新井氏被申候、弥左様に仕度候、作事大半出来申候、役者より出申候者、先頃より御吟味御座候、御存知之通り中条藤平杯は只今諸大夫に成申事に候、其外軽き者に多有之候、是等は跡目不被下筈に成申杯と申候、いまだ慥成事は相知不申候、何卒厳酷に成不申様に仕度奉存候、以上(十月十四日賜書)。

◆一 十七日の事か、森川出羽守殿役儀御免にて御座候、残忍至極の人にて一統にくみ申し候処、此の度人心を快し申儀に御座候、飯高七兵衛と申御祐筆有之候、如才も無

之人にて候へども、天然不恭に見へ申候由、森川氏不合口にて、常に自身上にかへても罰し申し度者に候由被申候、此の一事にて殘忍刻薄の処御了簡可被成候、恩讐分明有道の言に非らずとさへ申し候処、小人の心底と奉存候、私共支配にて候故、別して氣の毒に候処、此の度はたして右の仕合に成申候、兎角剛明成る御儀恐ながら奉感候、右羽州杯上へ諂申事は衆に越と申す事にて候、吹上御殿へ御成の時より、自身に酒のかんを致し申す体にて御察可被成候、不明之君に候はゞ被蔽申儀無疑候、兎角諂申す者阿佞の者御意に入り不申由申候、此の度石川近江守殿若年寄に成被申候事も、本願寺と高田門徒の公事よりと申し候、高田門徒は勢州に候哉、伏見殿の御子養子に參候、紀州に被成御座候時より、御簾中様より御連枝にて、内々此の公事の首尾能御存知被成、十分本願寺無理の様に御聞被成置、此の度段段僉議の処、近江守殿寺社奉行にて、始終本願寺の方道理の由被申候へども、いまだ先入者為主候哉、御理屈被仰立候故、殘の衆は御裁断の通りに御請被申候処、近江守殿兎角理非に御構不被成、御意の通り可被遊との儀に候へば、如何様とも御意次第可仕旨被申候由、左様にて無之候間、弥所存可申上旨にて、其の上にて御をれ被成、御聞誤り被成候由被仰出、本願寺勝に罷成申候、其れより十日過候て、若年寄に被仰付候由申候、先今日迄は声色の好會て無之候、巧佞の人すぎと御意に応じ不申候、毎度御鷹野吹上とは大方毎日御成、比日も御拳にて鶴杯御取り被遊候由、至極御数寄と相見へ申候、禽荒み氣遣のみにて御坐候、偕椒房の驕すぎと無之候、頃日も御城女中の衆承り候、哀れ成程の事にて是れも過可申も不存候へ共、御先代杯は各別の儀にて候、此人于今鳥并虫介の類すぎとたべ不被申候、家中へも法度に被申付、常憲院様御代の通少も違ひ不被申由、阿部殿御老中御免の時分、此方より先達て若御老中役被仰付候ても、御断申上候間、御免可被成候、被仰出候以後は難申儀に候故申上置候由、是も老中杯に被成候はゞ、常憲院様生類御憐の御志に違申事も不得已候て被致可申哉との氣遣に候由申候、愚成事には候へども、一筋成人と存候、果敢而室との類にて可有之や、松平右京大夫殿御用候も、諂無之人にて一筋成処御意に応じ申と見へ申し候、頃日も承候へば、御鷹野御供御免可被成候由被仰出候、御供被仰付候以後御断申し上候へば、上意違背に罷成候間、兼ねて申し上置候由断りに及ばれ候由申候、ケ様の儀は結句御意に応じ申と見へ申し候、其の外少々の事共兎角質直成事共に御座候以上

(十一月九日賜書)。

森村先年有章院様御他界の前年御大切に見へ候時分に候、御相統の僉議にて紀州様に極り申候由、去共廟堂の秘事にて候処、森川氏より密に紀州へ内所にて申進候由、松平紀伊守殿と兩人より申来候由密に承り申し候、是れ等反復の臣と可申候、ケ様の事、只今は却て身の禍に御座候、小人の愚成る処と奉存候。

419 ◆ 一 先日申進候通、森川出羽守殿若年寄役御免被成候、此人衆のにくむ処にて候処、此度一統に歡申事に候、殊の外奸智巧邪の上、殘忍刻薄の人にて候、頃日も人々御承り候処に、或は当代の大悪人と申人も有之、或は羽州斯様に被仰付候事直成御代の印に候由申人も有之、又は此儀承り候て、正月を小兒の待申心いたし候て、何となく歡敷候由申人も有之候、是にて御推察可有之候、御鷹野杯に御成の時分も、御威光をかり候て權威を肆し候由、其故下々の難儀の事も毎々有之候、其上に西丸御作事神田橋御造營の事見廻候様被仰付候の処、此儀に付己が權威を快し候事、此度御意に合不申由申候、久世大和守殿は御月番にて、只一人にて被仰渡候故、如何様の儀に候哉慥成事存知たる者は無之候、遠慮には及不申候由に被仰出候へども、席を不被仰出候故、今以屋敷に引籠被申候、比日又大島因幡守、三島清左衛門と申す御目付役儀の勤め様不宜候に付御取上被成、大久保佐渡守宅にて被仰渡候、是は遠慮可仕旨にて候、是も羽州同類と申候、西丸御當作初り申時分、右兩人は御前へ被召出、御直に段々被仰付候筋も有之由、然処

に羽州被致様相違候へども、同じ申由段々其品有之候て、役儀御取上と申候、只今戸田殿、水野殿御前宜由、久世殿は其次と申候、久世殿余程器量も有之候様申候、是も御前悪敷は無之由申候、松平右京大夫殿とは合不申由候、井上殿は此間不首尾の様に取沙汰いたし候、是も久敷続中間敷由、先日申進候高田門徒の事、井上殿高田の方引被申候由、石川殿其故御選挙と申候、ケ様の儀にて井上殿不首尾の由取沙汰いたし候。

200◆一 鋸町住人桐屋藤八桐木商売仕候者にて主人の妻子を養育仕候処、諸物高直にて兎角及餓死申体に付、其身股肉を切、大根を以包箱に入認候て、上に御本丸御用と書付、上野辺へ捨置申候に付、其趣上へ相達候処、内に鋸町桐屋藤八と書付置候間、御吟味の処主人の妻子をばごくみ候へども、段々困窮最早可及餓死体に付、此度訴申度候へども、何を以私の真実可申頭様無御座候に付、幸肉厚く御座候故、股を切候て如此仕候、何卒相応の金子被下、私儀は肉厚く候間、御ためし物に被仰付候ても宜奉存候間、右の金子を私の胸にかへ申度願にて御座候由申上候へば、忠義の志御感被遊候て、金子三十兩被下候趣本書の通にて、同町の者へ妻子の者不便を加へ養育可仕旨被仰渡、尤右の者只今之通り弥奉公情入申候由。

200◆一 先日申進候桐屋藤八事弥実正に御座候、上野寺中へ御用の物と書候て、箱に己股の肉を切候て入置申候、町奉行所へ被召出、謀書致候事は不届に思召候へども、主人の難儀を救ひ可申為仕候段きとくに被思召候由、闕所金三十兩被下候由、去年被申進候白須賀之義僕平八事も、二三日前萩原源左衛門に逢候て、尋候へば、成程実正にて、此度田宅買戻し申候、金子を四十兩余被下候由に候、是は主人の田宅公儀へ没收にて候処、御払の直段に借金いたし候て買もどし申候、其金は豆腐屋孫兵衛と申候、江戸にて平八当分の主人才覚致し申候由、其金子をば公儀より被下候様に致度とて、源左一人世話にいたし、此度も源左より最前の同役中へ委細申入候て、久世殿へ申達、ケ様の埒明申由に候、源左奇特成事に存候、ケ様の儀も下より申上候へば、すなほに御用被成候と相見へ申候、「剛毅木訥近仁」と有之通に御座候、以上(与大地甥書)。

十二月四日

201◆一 当地時事何の替申儀も無之候、毎度御鷹野に御成被遊候、御鷹野還御之後、諸大名より御機嫌伺無用の由にて、安芸守様などよりも此一事止申様に承り候、御鷹野先人を払申事忝も殊の外ゆるがせに成申候由、毎度の儀に候へば、左様にも無之候ては、人の難儀にて御座候、其さへいまだ難儀の事有之由申候、段々御耳に達候て改り可申と奉存候、水野和泉守殿も十八日か京都より参着の由申候、只今御老中の中、久世殿第一に御用をも被承候由に御座候、一統に誉申候、余程器量の有之人と相見へ申候、近頃病者に被成申候、此間別て悪敷由、其故毎度引込養生にても快氣有兼可申と申候、秋元但馬守殿の様子にて御座候、当春火災以後又神田橋内本の屋しきへ帰被申候、其迄被居候大手の屋敷を差上被申候、其時分迄は阿部殿と合不申候、井上殿威勢盛に候故、引籠可被申体に候処、阿部殿御免、井上殿も此間は段々威衰申体に候故、久世殿第一御信用に付、思案も違申候哉、病氣をも押て勤被申候の御奉公仕死の覚悟由被申候由に御座候、火事後新井氏見廻被申候処、此節登城の節にて玄関まで出被申候処、新井氏其外大勢被差扣候処、新井氏のそばへ近付候て類焼焚止に候、書籍焼不被申候哉と尋被申候由、新井氏書物は焼不申候由被申候へば、天下後世の為と申一段の儀の由挨拶にて候、是も外の衆の不申儀にて御座候、只今井上殿杯は新井氏をば見ぬふり位にて候故、格別の事と申候、阿部殿と不合由に候処、役義御免の節即日に見廻被申候、只今迄同役にて相勤被申候処、残念に奉存候由被申候由、ケ様の儀取合考候処に、兎角器量人と見へ申候、重病おしき儀に御座候、此十五日萩原源左衛門へ新井氏御城帰に被寄、私にも参候様にとの儀にて、終日夜半過迄緩々語申候、朝鮮の一事も天和の格に可被随との事にて候処、



此間は少し違候様に聞申候、正徳年中來聘の節、前格を被改候思召を委細新井氏に被仰付、かなにて記候來聘事略とやらん申候て、御老中役所に被指置候、儀式等は外へ被仰付、高階半治郎付候て録置申候、右之事略を此程御尋被遊候様子と申候、只今御城に無之と見へ申候、昭廟時分の記録は御当代に至候て、老中方もすぎと御用無之候故致紛失候哉、又は態とも焼捨申候も不存候、いかゞして此記有之事御耳に立申候哉、此体天和の格と申儀は井上殿林大学頭など示談候て起り候て、十分上の思召にては無之と見へ申候、比日上の旨を受候故か、林氏も口違にて、筑州改置候朝鮮の事皆悪敷にても無之候、只々不捨事も有之由申由に候、來年に至り候はゞ、様子段々相知可申と奉存候(十二月廿六日書)。

422◆一 世上相替儀承不申候、十九日小石川筋御鷹野に御成にて、還御は夜に入申体に御座候、鶴一ツ鷹二ツ御手に入申由申候、其日より被仰出候て、還御已後御機嫌御伺御大名方より被仰上候儀無御座候、向後御鷹野并御堀廻御成之還御には御伺入不申候、御道筋之掃除、且又御道筋に火を出申儀も無用に可仕旨被仰出候と申候、町之風呂も無構たかせ、人留も御成先迄暫の内留申候て、諸職の業作商買等も無構仕答の由申候。

423◆一 高野山に數百年來集候金銀、際限も無之儀に候由に御座候、今般不殘公儀へ御借用被遊、高野へは只今まで二万千石の寺領の上、一万石被下付候由に御座候、過分の金銀無用の地にすたり居申候処、乍恐近比御尤の御儀と申候事に御座候、是は水野和泉守殿御裁判共、又は紀州に被成御座候時分能被知召候故、上の思召より出候事扨共とり／＼風聞仕候、無際限夥敷儀に御座候、是を以御旗本衆御救可被遊哉と申儀に御座候、四十六億七千万歳の年季にて相済可申と笑顔仕候、御英明の主には相極り申と申儀に御座候。

423◆一 此間廻状有之由、私共へは不參候、御鷹野道商買其外何事も平生に聊替り不申様可申付候、若役人共御奉公だてに諸人難儀に及申も不顧も有之候はば、御慰の妨を仕にて御咎に被仰付候、御鷹野は御慰に御出被遊候処、諸人難儀にては御慰に不罷成候、此思召を能々合点いたし被仰出候儀にても、諸人難儀に成申儀は随分心付候て下知可仕事、且又御鷹野先にては御不自由被遊候覺悟にて候処、自然入可申哉と無用の者扨致持參候事、一向思召に叶ひ不申候、随分事少なに可仕事、此外委細の儀に候へども失念いたし候。

424◆一 弥御鷹野還御已後御機嫌伺は諸大名より指上不可申由被仰出候、尤国許より勿論候事。

424◆一 小石川堀の内に、鉄砲十挺泥之内に捨有之候、先頃見出候て公儀へ其処より申上候処、主を御尋ねにて、去月の事歟廿八日前に早速可申出旨御触にて候処誰も不申出候、其後又被仰出、廿八日已後出し後れ候故、不申出儀も可有之候、少しも不苦候間相知候はゞ、可申出候旨にて候処、鈴木主膳とやらん申候人鉄砲にて候、当春火事の時分急候て家來之者打込申旨にて、御吟味の上弥無紛候故、主膳へ被相渡候時分被仰出候は、御吟味の上其方鉄砲に無紛候故御渡被成候、但し武器をそまつに仕候事不念成儀に候間、向後相嗜可申旨にて候、是等も御尤成儀被仰出候由申候。

424◆一 役者より出申候者共跡目無相違両三人被仰付候、これは出羽守殿上聞に立ち不申申にて滞らせ申事と聞へ申候、此頃は一統役者より出申候衆安堵不仕候、其儀御耳に立候歟、常憲院様時分御廊下番之内、兩人御扶持放され申者有之候処、先頃被仰出候は、御番帳御覽被遊候処、兩人只今見へ不申候者有之候、是は如何様の儀にて御扶持被放候や、其時より番頭中条丹波守、藤本筑後守に御尋被成候処、此者共番頭被仰付候前の事にて存不申候由申候、只今在所存候やと御尋被成候故、在所及承申趣委細申上候様

子により、被召返候半かと申沙汰にて候、是にて役者より出申衆一統に安堵致申候、是は出羽守致方委曲御聞被成、上の思召にては無之段相知候て、諸人安堵いたし候為にと態々御尋にても可有之かと申候。

425◆一 有馬次郎兵衛と申御書院番衆七百石取申候、其嫡子伝四郎五十に及まで次郎兵衛息才にて勤申候、伝四郎は別に被召出三百俵被下候、是は御先代の事にて候、然処次郎兵衛相果候以後、伝四郎病氣大切に候故、末期養子書付申候、五十以後の末期の養子は成不申御格にて候故、出羽守殿中々請不申候、然ども伝四郎部屋住にて、養子願可申様も無之候、此筋にて是は格外の儀にて候処に、出羽守殿聞不申了簡と申候、其内伝四郎は相果弥断絶に究り申候、先頃上より被仰出、伝四郎願申候養子有馬玄番頭殿家来にて筑後に罷在候、急に呼に遣し可申旨被仰出候故、定て伝四郎跡三百俵被仰付にても可有之哉と一門歎相待候処に、此度祖父次郎兵衛七百石無相違被仰付候、諸親類難有かり申事とかく不被申候由物語りにて候。

425◆一 御成の日は、只今迄堺町見物一日御停止にて候、一昨日は御成の時分より、是以商売同事に候へは無構可仕旨被仰出候、歳暮故勘三郎はもはや其前日仕廻申候、竹村市之丞は未仕候処に其日其儘致申候、勘三郎にも此被仰出候間、兎角仕候様に町奉行より申渡、当年は最早止申候処、態々法楽一二番致申旨今日の咄しにて候、仕廻候はゞ其分の事にて候処態と致させ申事是もはや上の思召にあわせ申氣味に候、思召には叶間敷候、兎角御嫌に候へども諸役人くせに罷成候間、合せたがり申由に候。

425◆一 頃日徒目付の者兩人が賄賂取申事相知、改易被仰付候、日比猾吏共、此間は殊の外戦慄いたし候由。

426◆一 頃日大久保佐渡守殿に、御鷹野場に於て御羽織時服被下候、御羽織は召候を直に被下候、小倉木綿にてゑり杯少々すれ破れ有之由に候、此間も木綿頭巾を召候て御鷹野に御出被遊候由に候、是にて老中始め華美は不成筈に候間、何の被仰出は無之候へ共世上にも移可申候、珍重に奉存候、此間江戸中の様子余程改り申様に見へ申候。

426◆一 天文御好被遊、毎日猪飼豊次郎と申、只今は御徒にて候保井助左衛門高弟にて天文達者の由に候、此者罷出申候、追付天文者に可被成と申候、何卒経字に罷成候様仕度候、来年あたりはこれも知可申候。

426◆一 先日申進候股切の僕町奉行最前溜へ入置申候、たまりと申候は、死罪流罪等決し申者を、其刑に行はれ申迄溜置申所にて候、此段御耳に立仕方如何様にも致候へ、忠志の者を溜へ入置申事不吟味千万の由、以外の外上意に応じ不申、俄にあがり屋へ遣申候由、かりそめの儀ながら奉感事に候。

426◆一 今日御拳の鶴御ひらきにて、御三家の御連枝方、御譜代大名衆、御老中諸役人於御城御振舞にて候、以上(賜修連齋賢書)。

十二月廿三日

起享保三年至五年

㊦◆一 昨日上野より還御の節、下谷茶店の亭主直奏いたし訴状指上申候、元来阿部豊後守殿百姓の処罪科候て田地没収せられ、江戸へ参り茶店を業といたし罷在候由、先年罪科服し不申冤を訴申由に御座候、是も豊後守殿為宜しからぬ事と申候、旧臘火事の時は御差図も無之処、阿部殿にも人数引連れ候て被罷出、増上寺防と申候て一段の首尾御感の御意有之候由御坐候、年明候て毎度御鷹野に御出被遊候、去とも御鷹野場百姓は年貢十分一差上可申旨被仰出候て殊の外忝かり申由に候、御国用不足候て旧臘も町方御払無之、町人共難儀の由申候、其故御簡略第一と見へ申候、対馬守殿被出候人参杯只今迄は悪金にて定りの価に致し、朝鮮へは悪金成不申夫に付、悪金をば公儀より精金に御替被成下候に付、公儀より半分御償被成と申物に御座候、是等も此度公儀より御償不被成候間、人参代金一倍に可仕旨にて俄に一倍に罷能成候、斯様の儀ども色々有之候て、下々難儀にも罷能成候由申候、去共上に声色の御好曾て無之故か、下情も服し申候て怨申者も無之候、畢竟是は憲廟御一代の華奢より出候て、其弊中々急に救可申事にも無之と見へ申候、旧臘など御米も無之候て、小身の者共切米扶持杯極月廿七日迄渡不申、殊の外致難儀斯様に手つまり候ては如何成可申哉と、執政の衆難儀と存候、上にも宵肝の節に候処、毎度御鷹野など有之事御苦勞にも不被思召候哉と奉存候以上。

正月十一日

㊦◆一 前書申進時節御承知被成候旨、此間は替申儀も不承候、少宛の儀は毎々有之と見へ候へども、私も只今新井氏杯へも疎遠に罷過候、其外交接寡く候故何も承り不申候、朝鮮事略の抄出申哉と奉存候、其後沙汰無之、一ツ橋外護持院跡、並其辺悉く畠に被仰付、麦を蒔、頃日出来申候、是へも頃日も御成被遊御鷹野被成候、先日本庄へ御成の時分、百姓荷擔候桶の様成もの二ツ棒にて御荷ひ被成、御半着物「木綿の様に見へ申候よし」一ツ此の寒氣に被召候て御供中すきと御残し被成、左の御手に鷹御すへ候て一人野辺を御越被成、御拳にて鶴御合せ羽を御自身に御抑へ被成候て、御鷹に又御自身に御餌飼被成候、其の鶴血を御茶碗にて被召上候、御手に付申血を御鷹匠の頭巾にて御拭被成候由、其時分御供の衆物語にて候、其後百姓の家へ御入御酒上り申候、御供中へも御すゝめ被遊、大久保佐

渡守杯酔顔に見へ申候、其外承り申事共皆無類にて候、至極御軽き儀に見へ申候、「君子不重則不威、且又望之不似人君」と申聖賢の戒には御違被成候儀と奉存候、火事をば殊の外御苦勞に被遊、旧臘廿七日火災の時分も、御城楼へ御成被遊御巡見被成候て、火事場へ度々御下知候て、奉書火消もひた物被仰付候、夫故其時分火事も脇へはひろがり不申、風強く風下の方へ長く焼く申計にて候、是は御威光故と皆々申事に候、翌日火消衆御城へ被為召、段々消様の事御尋被遊候、初は御近習衆を以御尋被遊候へ共、後には火消衆御前へ被為召候て何も罷在候処、御曰衣にて御刀を脇に指置れ候て、御直に御意は、昨日火災の時分、面々手下の者迄も精出し候事委細御承知被遊候、少も不精と被思召候にては無之候へ共、市ヶ谷の堀をば越させ申間敷儀と被思召候、あの処にて消様可有之儀にて候、向後も可有之儀に候間、堀を越し申時分越させ不申様には、如何いたし候はゞ能可有之哉、此儀存寄申上候へとの儀に候へば、当座には孰れもはつきりと御請無之故、兎角只今余所へ御出被成候「余所へ御出と御意は、定て二丸杯へ御出の事と存候」追て了簡可申上旨にて何れも退出の由申候、関兵部と申候寄合下谷金杉に居申候、正月十二日御成の日火出し候て自分遠慮いたし罷在候処、其後大久保長門守へ被召候て、石川近江守並御目附鈴木伊兵衛立合、御成の内と申別て火の元可慎処出火、其上平生身体不相応の人も所持不仕候て火

の消力も不宜候、旁不届に被思召候旨にて逼塞被仰付候、先日上野還御の節、下谷茶店の主人直訴申上候、其時分御目付衆〔名は失念いたし候〕不案内にて目安を町へ預け、勿論其人をばしぼり候て預け置候、御城御玄関へ御上り被遊候て、其儘先刻の目やす上げ可申旨に候処、町へ預け置申候付取に遣し候不調法の仕方にて被思召候由にて遠慮被仰付候、向後は直訴の者有之候ばしぼり不申、其儘町へ預け置可申旨被仰出候由に候、西ノ丸御普請御手伝松平甲斐守殿被仰付、去秋より取掛り去年中に奥は出来候て、一位様御移被遊候、総奉行は森川羽州其外に御目付兩人御付被成候、然る処に森川不首尾にて御役儀御取上げ、兩人の御目付も役儀被召放、是は其上にて遠慮被仰付候、森川と一ツに罷成甲斐守家来家老用人、此度御手伝に懸り申者ども三四百人も、一時に指扣何れも国へ被追返申候、是も森川を恐れ候て色々手入いたし候由申候、森川ひきにて指置候事不被成候由に候、加藤右近並御目付すぎと申上候由、右近は早速役替被仰付諸大夫に罷成申候、只今何とやらん申候、甲斐守殿不首尾、当正月御謡初の時分、例年御盃被下候処、阿部豊後守殿、間部越前守殿、松平甲斐守殿三人は金御盃被下候、其故殊の外甲斐守殿君臣共に迷惑に被存体と申候、去とも西ノ御丸表いまだ不相濟候て、当春も其儘甲斐守殿へ御手伝被仰付候間、指て氣遣成儀とも不存候、只今町奉行、勘定奉行、寺社奉行、大目付中杯毎度御前へ被召出、御直に諸事御聞、且又御直に被仰渡候、御老中会て知られぬ儀御座候に付、各別の世には罷成候、上下の情者すこしも塞不申何もかも相知申と見へ申候、其故にも候哉、当年は元日より天気長閑に、此間は終に此節覚不申好雨ひたと降候てしめり不絶候故、火事沙汰もやみ申候、此通りにて段々天気和順に候へば、人心も自然と安堵いたし申候、是は御手柄かと乍恐奉存候、高野金銀等御取上の事は虚談の由申候、如何様少々は沙汰も有之儀にて候哉、不慥成儀に御座候。

㊦1◆一 当地何の替儀も不承候、紀州へ太母御迎の儀被仰出、御迎の面々大勢相極り申候、若年寄石川近江守殿総頭と聞へ申候、是はとくに御迎可被遊儀と皆々申事に御座候、何とか思召も候て只今まで御延引被成候かと奉存候、松平右京大夫殿頃は御前宜しからぬ体に候様申候、是は鶴の御料理賜候処辞退候てたべ不被申候、且漢御鷹野一事御断申上候て食着不被致候故と申候、是も馬淵氏同品にて少偏塞成処有之人と見へ申候、左候へばたとひ大に被用候ても何の頼も無之奉存候。

㊦2◆一 当月二日深見新右衛門次男久之丞事逐電いたし、七日迄内所にて相尋候へ共見へ不申に付、八日の朝申上候、斯様の儀同役より申上候御格の由に候、其故私へ頼候故拙暁に罷出、石川殿月番に候故申入候、遺書も有之候、紙二三枚とち候て長き事に候へども、畢竟神仙を学び大道成就いたし度念望に付、山林へ入申旨に御座候、不孝不忠の処は如何に候へども、小節に拘り候ては大道成就不仕候故存切り申旨にて、其外に長生訣と歌行長篇の詩を残し置申候、是は近江守殿へ見せ申物にも無之候ども、右の遺書の中に此詩の事書入置候故、遺書を出し候へば、此度もひかへ申儀不罷成候、其儘出し申候、右の遺書並詩井一々近江守殿私へ被相尋、扱々難儀に逢申候、詩は深見家の草書にて唐紙に書ちらし、中々私共よめ申物にては無之候、其上、当地に谷口一雲と申百歳に及申由にて仙方伝授候老人、近比江戸中取はやし、還童丸と申薬を出し方々争伝候て、此薬にて大分金銀出来申由に候、此老人へ久之丞も当春出合申由に候、其節も山林へ入度旨申候処、一雲申候は、共儘市朝に居候ても仙方は成申間、必無用に候ととめ申旨只今一雲申候由にて、兎角左様の儀に付仙方存立申候、右詩中に一雲無中の翁とやらん申句有之候て、近江守殿何の儀に候哉と、私氣付候へども、有様に申候ては、一雲手前杯も御吟味も候ては、無益の儀に六ヶ敷罷成候ては如何と存候て、音にて読候て谷の雲中の仙翁と申儀と存候旨申候、是に付候て存候は、世に交接候ては斯様の儀直にばかり意得候ては不罷成候事と奉存候、小事ながら権道とも可申候、然る処に九日昼立帰り申候故、十日暁天又近江守殿へ罷越其段申上

候、久之丞申候は、二日朝ふと罷出、日光迄参候て御宮拜し候て正氣に罷成立帰申旨に候、立帰り候ては成程正氣にて候旨、新右衛門物語いたし候趣も近江守殿へ申入候、其後六日に呼に参候て罷出候へば、久之丞立退候事、畢竟乱心の仕方付御扶持被召上、其身は新右衛門宅に押込可指置、候旨被仰渡罷帰候、其段新右衛門に申渡し、直に夜に入候て御老中若年寄衆へ新右衛門名代に御礼に罷越候、不存寄宜しからぬ儀に世話いたし申候、折節脱肛痛にて指出難儀仕候、去とも早速軽く相濟此上珍重に存候、新右衛門老年に罷成散々の仕合と申儀に御坐候、不入儀ながら珍敷儀に御座候故申進候〔久之丞事当年廿六歳に罷成先年別に被召出二十人扶持被下候〕。

433◆一 先日申進候中川正軒〔字はじかと不存候〕対山様御遺腹とやらん申候て申出吟味被仰付候処、白状いたし虚誕に相極り、比日獄門に被仰付候、至極悪敷奴にて候へども、大膽者の由收取沙汰にて候、町奉行所にてしかり被申候て、事にこそより候へ、斯様の儀たくみ出候事大罪至極の由被申候処、正軒居直りあざ笑にて、初心成儀を承り申候、古来大悪を巧み申者、必仕得可申と存候て仕候者は無之候、仕そこなひ候ては死申外は無之候、覺悟前の事にて候、其上われら式の者公儀の御詮議に逢候て、天下の人に知られ申儀は生涯の面目と存候、むだ／＼と追付老死仕には抜群ましたる儀にて候由申候へば、誰も一言申出人も無之候、扱籠屋にて頸を打れ候時分穢多に申候は、総じて死人の衣服はおのれら取申候由兼て承り候、弥左様に候哉と尋候故、其通りに候由申候へば、左候はゞ血のつかぬ先に其方へ遣し可申とて裸に成候てきられ申由に候、此事不承候以前、去人参候て獄門の頸を見候処、殊の外頸よろしく見へ申候、正軒只者にては無之と見へ申候由、正氣静り候て覺悟よき人の頸は色よろしく見へ申由にて、其後此事承り候て扱はと存し候、右の者もよく見へ申候と存候。

433◆一 当月十日終日風雨、夜に入候て雷地震も有之候、其後本郷本多帯刀殿の長屋三十間程龍まき上申由にて崩れ申候、遠藤民之進長屋も十間計取申候、本多長屋は遠藤方に落し、遠藤長屋は本多方へ落し置申候、龍のめぐ申度々に落し申故にても候哉、但旋風にても可有之哉と申候、羊角風と申物にて候、いづれにいたし候ても珍らしき儀と申儀にて候、本多長屋は只今新井氏宅の近所に候故、新井氏子息被参候て見旨先日物語にて候、帯刀殿へは御由緒も有之候、御尋被成候ても可然儀と存候、火災以後又斯様の破損にて難儀と存候〔二月廿五日〕。

434◆一 当地何の替申儀も無之候、頃日紀州へ国母御迎の事被仰出、大勢相極り申候、若年寄石川近江守殿惣頭と見へ申候、西丸御作事も奥は去年相濟、当春以来表御修復被仰付、段々相濟申旨に候、此儀に付森川出羽守殿去年役義被召上候、権成を振ひ賄賂など收候沙汰にて候、御手傳松平甲斐守殿も不首尾に候へども、其儘当春も御手伝被仰付候、頃日承り候へば、甲斐守殿家老豊原周防甲府へ追返され、已後切腹被申付候由に御座候、公儀御役人へ取入御材杯押領いたし候共申候、其外或は追返され又は預けられ候者にて、元の役人は纔十人計ならでは残り不申よしに御座候、頃日料私同役の内変非出来候て、其儀に付度々石川近江守殿へ逢申候、殊の外温和平易成人に御座候、箇様の人御意に応じ候事珍重に奉存候、同役中変故の事は青藏人殿まで委細申進候、勢州神戸の百姓共聖人の様に申候より、若年寄被成被申候て所替可有之と申候て、殊の外氣遣がり申候由に候、いかさまよほどよく見ゆる人にて候〔与奥子復書中〕

二月廿五日

434◆一 当地時分指て替申儀無之候、紀州御迎も前月廿八日与発足にて候、京へ御寄被遊などと申候へども、何方へも御寄不被遊由に御座候、石川殿にも一万両程も入申候由、難儀被致候由申候、其外小身の衆拝領金僅の事にて何れも借金いたし申候、勝手ひしと参り申間敷と申事に御座候、この儀に付小身者には拝領金少々被下、難儀不仕候様に致度旨、

水野和泉守殿再参井上殿へ被申由に候へども、最早伺申事済申由にて許用無之候、久世殿兎角の事不被申、是にては定て何も難有がり可申と態と挨拶被致候由、兎角井上殿権を専らに被致候体に見へ申候、折節争被申候は大和守殿和泉守殿にて候由、戸田殿は井上殿次第に被申候由、いかゞの儀に候哉、是にては大政埒明不申儀と奉存候、頃日両番〔御書院御番小性組を両番と申候〕、不足仕に付御簾本嫡子被召出御補被遊、二百人余も有之由に御座候、嫡子までに御座候、それも父たゞ今まで勤罷在候者にて御座候、ちとは御褒美の心も有之と存候、おつて承り候へば、嫡子被召出にては無之候、小普請の内より両番へ被仰付候由、然処中川淡路守組小普請の内より、一人何とやらん申者嫡子を出候て跡にて相知れ、その者は閉門被仰付候由にて、淡路守も遠慮にて候由、是等は有間敷事に奉存候、如何の間違にて候哉、其とも兎角上を欺申筋に罷成候へば、重く被仰付候ても御尤の儀に候処、結構成事に奉存候、無造作にはかの参たる儀に御座候、兎角冗官を沙汰被成候、是は中国にて歴代沙汰冗官と申旨有事に御座候、無用の人を減じ申事に候御様子に候、夫故五十年以来新参の者は、一代にて跡不被下杯申沙汰も有之候、是は頃日新村何某と申者、桜田より文昭廟の時分付参候、弟は別に被召出候、右新村の家は何某頃日病死、外より養子願置申候処叶不申跡断絶いたし候、御老中御詮議承り候に、弟が方にて新村の家は立申候、然ば養子致候て立申儀不叶儀に候由、向後此御格に成候へば、新参は同姓両家有之候へば一方計に成申事に候や、斯様の事ひたもの有之候て、何角御老中御詮議の上、誰やらん御取立の由緒申上候て跡を願申者有之候処、戸田殿の挨拶に左様に候ては、御人減じ不申由被申候由に御座候、此一言にて扱は御人減ぜられ候儀と諸人申候、しかといたしたる儀は知不申候、いかさま何方もと申ながら、公儀には別て冗官多く有之候事に御座候、是を沙汰せられし事政事的一端にて御座候、但唯今の勢にては人情に叶ひ不申儀に候間、御威光にていか様とも可被成候へども、人心安堵不仕候ては、天下の御為如何とも奉存候、新参者は跡断絶の格に罷成候はゞ、私共は子孫御奉公の望は無之候へども、夫は私事に候へば少も遺恨は無之事に御座候、去ども一統に新参の者跡断絶と申儀にて有之間敷候、頃日毛利右京殿十五歳とやらん疱瘡にて死去、跡断絶にて御座候、笑止に候、近年毛利家不仕合にて御座候、五万石かにて候本家へ御返し可有之と奉存候、但御朱印別に候哉と申者有之候、左候はゞ如何可有之候哉。

436◆一 養仙院様御用人宿屋源左衛門事、一柳対馬守殿へ御願被仰付候、先頃の事に候間御聞可被成候、諸行不宜勤方不慎急度可仰付筈に候へども、御宥免を以右の通り被仰付候由に候、御鳥見より立身いたし、去年も二百石御加増被下、七百石にて布衣にて御座候、御老中の権をかり御守殿にておこり申体にて候由、其上酔狂いたし女中に対し候て脇指抜申事も有之由、積悪と申候、此度は水戸様よりも御断も有之様に申候、御守殿付の者是にて心付可申と申候、貴藩御守殿大岡も沙汰不宜候、御守殿にて大酒など致し申取沙汰にて候、慎み可申儀と存候、宿屋事無忌憚の小人と見へ申候、先年湯治の願申上候時分、子息縫殿に其方命をもらひ度旨申候由、縫殿承り候て如何の儀に候や無御心許候、勿論御用の儀に候はゞ、只今にて成共自滅可仕候、不及仰儀と申候へば、只今の儀にては無之候、此度湯治いたし是にかてこつけ京大坂見物可仕と存候、かくしおほせ候はゞ其分に候、自然相知候はゞ其方迄御法に可被仰付候間左様に心得よと申候て、湯治より京都見物に罷越候、罷帰候て人前にて近頃其儀申出候て、御法度そむき申候もおもしろき物に候由、定て酔中の儀にて可有之候へ共、世上には斯様の者も有之候、驚申候、然処に世間上手にて御老中氣に入申候て、已に去年まで加増致し候処に、此度不存寄斯様に被仰付事、水戸より御断は不存候へ共、御明断の事と奉存候、惣て諸頭御役人すきと或は一人或は二人三人宛、毎度御前へ被召出、御直に御問答共有之、諸士の賢否よく御存知被成候体に御座候、当月御法事も相済候はゞ、彼仰出候儀ども有之由沙汰仕申候、いかゞ可有御座候哉、以上。

四月廿三日

437◆一 前月晦日増上寺御成還御の節、尾張中納言殿宿坊より熨斗目着用の者のぞき申旨御近習衆見候て、御目付稲葉多宮へ被申候、其段宿坊へ其日参居申候尾張殿御家来へ断候処、詮議いたし候へども窺き申者無之旨申候、慥に見申候由申候、左候はゞ其紋など見届被申候哉、其儀承り候て詮議可仕旨申候処、紋は見届不申候へども、慥にのぞき申由申候へども、尾張殿家来中一向承引不仕候て、左様に候ては何を以詮議を可遂様も無之候、此方吟味候へども一人ものぞき申者無之候、証も無之儀をいか程御申聞せ候て難畏候よし申切候、多宮も互ひに声高に罷成候て先つ言被申候、其跡へ御徒目附中参候て、只今被参候は稲葉多宮と申御目付衆にて候由申聞候へども、尾張殿御家来多宮にもいたせ、何宮にもいたせ、不埒なる事は難承知候旨申由にて、其御成の節警固等いたし候御徒の衆兩人御徒頭雀部新六へ御預け被成候、一両日以前兩人共に闕処に被仰付候、新六は閉門いたし候内申付方不沙汰に候由に御座候、尾張殿方何とも不将なるものに御座候、其後尾張殿よりのぞき申者は無之候、但し其日当番にて宿坊へ詰申頭分の者、切腹にても可申付哉其段は御指図次第の由、御老中へ被申達候旨承り申候、先是にて御沙汰無之埒明可申と奉存候。

438◆一 当月朔日浄円院様紀州より御着府被遊候、御祝儀御能も有之候。

438◆一 当月十八日儒者役人見又兵衛友元子、同七郎右衛門、林又右衛門三人被為召候て講釈被仰付候由に候、向後聖堂へ罷出講釈可相勤候、何卒聖堂聴衆不絶有之候様被遊度被思召候て被仰出候よし承り申候。

439◆一 先月晦日増上寺御成の時分、増上寺前任祐天和尚へ御逢可被成候間、寺へ呼寄置可申旨被仰出候に付、只今麻布に隠居いたし腰立不申老衰至極に候、其段申候へば、中々罷出可申とは不申候、斯様に腰も立不申僧を御覽被遊、何の益も無之事に候間、其段可申上旨申上候へば、上意の儀に候間兎角不罷出候ては難叶事に候、其上御前にて死被申候ても、宗旨の爲にも眉目にも候間、達て罷出候様僧徒中もしる被申候へば、左候はゞいかやうにも致し候へと申候故、御次迄蒲団にのせ候て移置申候て、還御の節御唐紙明候て御逢被成候首尾に有之候処、御立被遊祐天側まで出御に候故、祐天少蒲団よりにぢり下り可申様にいたし候処に、其儘と上意有之候て敷て御逢被成候よし御意共有之、退屈にて可有之候間歸し候へと上意にて御座候、其時分祐天落涙いたし申候、御近習衆如何の存念にて落涙いたし候哉、何もか心得の様祐天へ相尋候様に上意に付、近侍の僧を以相尋させ申候へば、祐天申候は、忝くて落涙するには無之候、今日有章院様の御忌日にて使候、御在世にて候はゞ此節最早御成長にて、此寺杯へも御参詣被遊御言葉などかけらるべきに、御他界にて時世も替り申候、夫に付候ても、世の無事を一入存候て及落涙候由申候、其段御耳へ達候へば御感被遊候て、左様に可有之候、さすがの出家の由上意有之候由申候、祐天仕方出家には相応の事潔白に相聞へ申候、感入申事に御座候間申進候。

五月廿三日

440◆一 水戸中納言様当月十一日御逝去にて御座候、卒中風にて八日より二三日御煩にて御逝去の由、七日は鳴物停止候由触申候処、十五日神田明神祭礼神事障無之由にて共儘有之候、合点不参儀と奉存候、儲君御見物とて棧敷御用意杯も兼て有之候故とも申候、先月十五日御鷹野にて俄に月次の御礼無之候、これも大猷院様御時有之候、其後は式日に御鷹野にて出仕延申事は無之由に候、入月十五日は八幡祭礼にて殊に放生会にて、御鷹野は御殺生にて候、然ば神事に御遠慮は無之と聞へ申候処に、神事は格別にて御三家はおもき儀に候処、今度明神祭礼其儘有之事前後不都合成事の様に申候、何卒御詮議有之候ての儀にては可有之候へ共、愚案及処に無之候。

440◆一 聖堂にて毎日両座宛講釈有之候、四書の内の近思録、孝経、小学にて候、正蒙の筈に候処耳遠き物に候由にて候、孝経被成候由に候、丁の日は直参、牛の日は貴賤入込

承候へとの御事にて候、先日直参の人七人有之由に候、其後も半日共に聴衆わづかの儀と申候、後には有之間敷様に申候、此儀先日大学頭御叱被遊候は、聖堂講釈聞手無之由御聞被遊候、紀州杯にてさへ大勢有之候、殊に江戸の事にて候処、ケ様にはやり不申事大学頭杯不精に候故と被思召候由、大学頭御請には迷惑至極に奉存候へ共、不罷出候を罷出候へと私より促可申様も無之候間、御威光をかり候様仕度旨願にて、講師御ふやし、旗本へも町中へも勝手次第罷出承り候様にと触有之候然共此辺杯に居申直参の人罷出候かと尋候へば、罷出候者は聖堂にて帳に書付け置候、然ば一兩度二三度罷出候ても、末へ続き不申候ては結句見苦敷可有之候、又統て承程の心懸も無之候故、何れも扣へ候て不罷出候、比日深川本誓寺とやらん申寺のらん塔に石地藏有之、ふと何とやらん利生有之と申はやし群集致し申候、夥敷事にて御座候、俗に申候は、賽銭二千兩程はや有之由申候、五六日は少薄く成申候由承候、大学頭御比日御老中前へ罷出、聖堂講釈に衆聴無之候、急度重て被仰渡候様にとの事に候故、不罷出候とて重て必罷出候へ共難被仰渡候、兎角今少見合候へば次第に出申者も多く可有之と被仰渡候へば、大学頭せかれ候て、此程深川の地藏さへ大分群集致し候処、講釈に参候者無之候は沙汰の限りとて腹立候由、何れも笑ひ申候、深川地藏をひかずともと申候、脇より承候へば、公儀よりは惣様儒役の者は、替るゞ人聖堂へ罷出講じ候様にとの思召に候処、大学頭より被申上筋何かと有之候て、林家の学者に限り申由に御座候、先日其人参候て、是は大学頭心得悪敷御座候、此方より望候て成共、いづれも備者中へ罷出候様致度ものに候、左候はゞおのづから聞手も多く可有之由申候故、私申候は、講談と申者境町の珍敷役者仕候とて、大勢見物有之候様成儀にては参る物にて無之候、ケ様に候ては四五日の事にて続き申物にて無之候、外に学文はやり候様に被成筋も可有之儀と奉存候、儲私共へ罷出候へと有之候はゞ、上意にて候へば兎角出にて可有之候、中々辻談義様成中へ打交り候て成申物にては無之候、却て不罷出が仕合と存候、此程も去人におどけながら申事に候、私共罷出候はゞ実盛語と存候、若との原と争て先をかけるもおとなげなし、又老武者とて人々にあなどられんも口惜しかるべくと申物と存候よし申候へば、笑ひ申候。

◆一 佐藤五郎左衛門当地にては理学者と申候て、井伊掃部頭殿、土井大炊頭殿と其外大名中にも尊敬の方多有之、第一酒井勘解由殿前々より信仰にて下屋敷に急度あいらひにて被指置候処比日勘解由殿は不首尾に致し上京いたし候由に候、当地に妻子など指置罷越候、追て又罷下り申候由申候、先づ一往勘解由殿手前を立去り申候に付、湯治致度由にて上京仕候由申候勘解由殿家来中杯噂承候に一年に百兩宛合力有之候処、近年屋敷類焼くにあひ被申、其領地不作等にて不勝手に付、家来中知行もかり被申候、夫に家老共詮議にて、五郎左衛門は格別には候得共、百兩を両度と致し度由にて五十兩遣、今半分は来春進可申由家老共申遣候処に、五郎左衛門家来中と同格に家老共致し候事を不快に存候哉、五十兩を返し候て請取不申候由、其段家老共より勘解由殿耳へも立、不屈の様に罷成、去り不申候ては不罷成候様に成候て去り申候由に候、是は五郎左衛門金銀の事にては有間敷候、只礼待の衰へ申処にて去り申にても可有之候得ば、此度の端合力より起り候故、諸人は金銀の事故と申候て笑止に存候、五郎左衛門処置何卒可有之事に奉存候、惣て勘解由殿家老初家中一統にくみ申由に候、殊に浅野家四十七人を乱臣賊子と申議論より見限り申由承り候、此度上京の時分も掃部頭殿領分掃除など致し殊の外馳走、家老杯出候由沙汰致し申候、掃部頭殿いまだ若輩の人に候処奇特に奉存候、定て家老共申入候て学文に志申候哉と奉存候五郎左衛門も余程の老人と聞へ申候、当地にて大名衆懇意の方多く、大分富有に罷成候杯申者も有之候、いやなる沙汰に奉存候、殊の外吝嗇成人の由に候、毀誉相半致し候、兎角是も山崎流の高慢のくせ有之候て、下聞を耻申体に候故此後出合申望も無之人にて候、其外当地の学者俳優同事の体にて候、(以上三件 九月二十三日与小谷勉善書)。



443◆一 当地何の替申儀も無之候、宗対馬守殿死去の事申来候、舍弟養子の願と申候、兎角来年の朝鮮人来聘はのび可申旨申候、夫共に上次第に候へ共、対州代替りには朝鮮より符節の様成物相渡り申候、此符節調不申内は、往返の事難成事に候由申候、此符節国王より下り申事に候故、中々急には難調申候、左候へば来年杯は埒明申間敷と申候、如何可有之候哉、当地一統に延申様に人々願申候、国家の費用も大分の儀に候へば、此節不入物とも奉存候、只今公儀第一冗費を御除被成思召に候故、御老中より諸役人迄の心得にて御座候、華麗の風は次第に薄く可罷成候へ共諸事苛酷に罷成、忠孝の気味段々なく成可申と奉存候、此日も闕所金を掠取候て公儀へは僅かに没取候事相知、御目付方は其者頭中より大和守殿へ何御吟味可被仰付哉と申候、久世殿被申候は、其分に仕置候へと御申候由、去とも外より相知れ候ては不吟味に罷成事を恐れ候て、再参久世殿へ申入候へ共、久世殿頼着無之由に候、三度目とやらんに久世殿被申候は、公儀より闕所被仰付候事御本意を如何合点被致候哉、是は御法へ懸り候て闕所被仰付候事に候、金銀の多少御詮議にては無之候、闕所と有之候へば、其金銀は多候ても少にても貪着無之事に候、悪敷心得に候由被申候故、其人も御尤と申候て重て久世殿へは不申入候へ共、とかく氣遣に存候て有馬兵庫へ申候へば、兵庫吟味可然旨申候間、右掠取申候者罪に被行申候、殊に旧悪に候処、斯様の事は跡の儀遂吟味有之候へかし、目付輕者廻り候て下の儀早速相達申候、夫故にせ出来候て江戸中難儀仕候、下の事相知候故家々恐れて、此間はおどり子参弦杯の遊び殊の外薄く相成候、是はよく候へ共苛察に罷成申候、御目見不仕候御扶持人等は比日も大分御扶持被放、且又跡目立不申者多く有之候、御目見以上実子無之候へば、養子の分は跡目大方立不申候、昨日より増上寺御法事に候へ共、御儉約第一にて此度事体を失ひ申儀も有之と見申候、委細の事は筆紙に尽しがたく候、御近習衆被仰出候、御条目奉感候旨小寺氏より被申越候、一向に諸簾本は感じ不申と見申候、千里を隔候ては不被知事と奉存候、容易には不被申儀に御座候、但声色の御好は今日迄すきと無之、椒房の奢杯はやみ申候、是は御前代に無之儀に奉存候、良輔さへ有之候は、頼母敷御代とも奉存候処に、可惜至に御座候。

444◆一 来年朝鮮聘来相違候由、此比故対馬守殿御舍弟式部參勤早速御札相濟、且又家督被仰付候、追々可為発足候、来春に至候て可為帰着候、其後朝鮮へ可参候間、来四五月時分にも来聘使あなたを罷立、秋末ならでは当地へ参着有間敷候、琉球人は先比参候て御札申上候、最早罷立可申と奉存候、前に何の替り申儀も見へ不申候。

444◆一 此度金銀引替新法被仰出候て、関東筋は金遣にて候故、当分指て替申儀も無之候へ共、西国上方筋は御国杯も難儀の旨沙汰有之候、有馬玄藩頭殿家来などひと行当りつづれ申様に申候、四分一の身上に成申同事に候へば尤に存候、此儀とくより相極り候へども衆議難決候て只今迄延引の処、此度上の独断にて被仰出候由申候、いかゞ成行可申哉合点不参候、定て何卒つかへ不申処置可有と存候、当地なども米価は日に賤く候て金半分に罷成候、一倍の用に立不申候ては不参候処中々左様に諸物直段究申事にては無之候、畢竟は金参四十匁替にとりやり不仕候は、物売申間敷由申候、左様に成候は、当地土中も困窮いやましと存候(十一月二十九日与小谷成之書)。

大工作料の極

445◆一 一匁八分 大工棟梁仕手大工一番作料

445◆一 一匁九分 仕手大工上手の内七人分

貞享元年御勘略奉行山崎半左衛門を以柿屑大工ともに不相渡、二分宛の増相渡候事

445◆一 大納言様御代より中納言様小松へ御隠居被遊候迄、一番作料九升宛、夫より五升外迄段々有之候。

445◆一 一匁六分 大工一番作料

445◆一 一匁七分 棟梁役但柿代一宛増之

右は寛永十九年米石に付二拾目仕に付、銀子に御直し被下候様棟梁共奉願、一匁六分宛に相極め、万治元年迄此通被下候。

446◆一 三分宛

大工壁塗増銀

446◆一 二分宛

大鋸、木挽、屋根葺、板枇増銀

右は万治二年米高直にて石六十目宛仕候に付き、増銀の儀奉願、万治二年より寛文元年迄此通増被下候、寛文二年米石に付四十目に罷成に付き、右増銀被指除候。

延宝八年米石に付き五十四匁仕候に付、職共奉願大工、壁塗、板枇、屋根葺、大鋸、木挽向後米高直の時節は二分宛増銀被下候様に、同年七月御作事奉行及御断候処、同年八月朔日より此の通増銀可被一旨、月番本多安房守御作事奉行紙面に付札印章を以て申渡候。

但天和二年迄二分宛被下候、同年七月米下直に付、右の増銀差除申候。

446◆一 元禄九年夏米石に付五十六匁余仕候に付、奉願二分宛増被下候、同年秋より五十四匁より下直に罷成、増銀差除申候。

446◆一 元禄十三年一兩年打続米石に付五十六匁七分以上、段々高直に有之候処度々職共及断、同年七月二日より二分宛増銀被下候。

446◆一 宝永四年七月朔日より二分増銀大工、木挽等被下候、此節米石に付六十五匁、同五年九月米石に付三十三匁余仕候に付、九月十日より右増銀指除申候。

446◆一 正徳二年七月米高直に付同月二十四日より二分宛増銀被下候、同年弥高直に付、十二月廿日より又四分増銀被下候。

享保三年宮腰の者と大野村栗崎村の者共争論有之、於御算用場佐藤仲左衛門内々を以吟味の処、宮腰役銀小物成等、寛文十年村御印の趣き相違取立間敷、役銀を永々指上可申、役銀をも不足の体に候旨、依之仲左衛門御年寄衆に及相談諸方支配所小物成取立の様子承り候へば、悉村御印の趣に相違仕候、是は時の指当り候処迄詮議を以て、毎々御算用場印の紙票渡候故に候由、如此にては末々弥其本を取失ひ、御仕置の筋可致相違候間、此次の惣様御改可被成候哉、左候はゞ主付承届候て追て書立、上に達し御聴被仰出次第御改可被成哉の旨申入候へば、一段尤に候、追て可相改旨年寄を以御中渡候由、右御吟味の様子有増承り候赴左に記之。

447◆一 宮腰村御印奥書に小物成の分は、十村見図候上を以指引有之候はゞ其通可出旨の事。

此通に候処、取立の儀宮腰町奉行の支配に罷成、下役人を定其者へ見図次第にて、拝見人も無之、口銭取立等も不慥、勘定も此者共直に相違申候、是は寛文二年年寄衆及共節御用人の紙面致所持、其趣を以勤候旨文書如左。

覚

447◆一 於宮腰諸魚商売仕口銭取立候儀、同町菓子屋佐左衛門に被仰付候間、無油断精を出候様可被申付候事。

448◆一 年中取立候口銭の内、十分一佐左衛門へ被下事。

448◆一 口銭銀取立候刻は、佐左衛門書付に致奥書直に上させ、一ヶ年切に為懸勘定可申候事

448◆一 諸魚猥売買の作法以下、金沢魚問屋聞合、相違無之様可仕事。

右の通無相違様念を入、度々改可被申付事、以上。

寛文二年五月廿七日

今枝式部

判

伊藤内膳

判

前田七良兵衛

判

奥村因幡

判

奥村河内

判

寛文十年村御印御改の時分、此紙面可相改処此通に罷成儀如何、其後被下銀は拾枚に相

極、御算用場紙面有之、今以其通に取申候。

448◆一 宮腰三步半口銭取立人と申候て、肝煎の内三人極有之候、此処に三步半口銭と申儀は、村御印にも無之事に候、此三人は高田彦太夫奉行の時分申付候、其以前の儀は不存由三人共に申候、右三人裁育の内諸魚塩仕候程に大どれ不仕候故、終に口銭取立候事無之旨申候、夫故馬淵友之進勤候内、終に三步半口銭取立不申、彦太夫勤候時分只一ヶ年三步半口銭取立有候、御定に無之口銭取立候段難心得に付、仲左衛門相考へ候は、惣て魚口銭の事、生魚にて金沢問屋へ着中分は六歩口銭にて、遠所の分は塩魚に仕り他国へ出候に付、いづれも三步半口銭の御定に候、三步半は他国へ商候口銭なり、依之宮腰を近辺浦方にて諸魚多く取れ候時分、塩を致し他国へ洩し申度候旨御為の様に申成候て相願候を、奉行も口銭上り申処へ迄心付取立候と被存候旨、仲左衛門申候事。

449◆一 同所魚口銭取立候内に、八歩口銭と申事有之候、且又村御印も其外にも御定無之事に候、宮腰の儀諸事金沢問屋並に相勤候様にと有之候て、金沢問屋方に六歩取立候故其通に仕候、金沢問屋手前にては入歩口銭の事は、其子細は問屋共不存候へ共、先役人以来取立上来候故其通に仕候旨申候、八歩口銭は、小魚の方に取立申候旨に候、口銭両様有之候は、大魚は八歩、小魚は六歩にて、可有之の処、却て小魚は八歩と申儀は先年金沢問屋最前運上にて、一ヶ年何程と請合相勤候時分、数取魚の分は問屋方にて数取と名付、其内にてよき魚を撰み候て其分を問屋取分に仕候故、浦方の者致迷惑候、右数取魚用捨仕候は、小魚之分は六歩の上に二歩を八歩口銭に仕可差上旨相願、両様に罷成候て浦方に覺書仕置候、然ば問屋手前にて自分に相増候口銭に候、小松問屋にて今以右数取の魚百に二ツ宛取申由に候、此趣きに候へば、八歩口銭御印物御定にも無之口銭に候間被指止、勿論数取魚も取不申様可有之哉と存候、金沢問屋に問屋相場と申義を極置、外に無之指引仕候、左候へば銀一匁の代銭渡し時刻、其時分何程の銭相場にても、其相場をば用不申、一匁に銭五十文余にも仕取申候、其外目銭杯と申指引も仕候、依之御家中へ求申候魚、直段もおのづから高直に罷成候。

449◆一 材木被召上候時分、直段極人と申候て宮腰にて三人、金沢にて一人、都合四人役人を極置、御材木直段付仕候、能登越中にて被召上候時分も、此四人の者共罷越直段相極申候、此者共最前相極候時分御算用場の紙面に被下銀は被召上候間、御材木代銀之内にて木主より請取筈に候間、弥可申渡旨被書記候て、何程と申極も無之候、依之前々より御材木代銀百目に付一匁六分宛請取申旨に候、左候へば百貫目の御材木には一貫六百目取申候、同所の者に候へば材木問屋と申合申儀に候へば、何程に仕取申候哉難計儀に候、右銀高に仕候ても四人取候へば、大分の銀高に御座候、売主は其分を御材木に懸申候故、高直に罷成候はでは不叶事に候、御作事被召上物は年中大分の銀高の処、ケ様の儀にて高直に売上候へば、過分の儀第一右の首尾に候へば、此者ども直段極候節下直に積り可申様は無之事、一貫目下直に回り候へば、其内にて自分の十六匁減申候故、兎角下直には回り不申候筈に候、仲左衛門儀は御勝手勘弁の儀も沙汰仕候役儀に付、旁以御作事奉行へ申談、御大工の内功者を相撰、見図候様には罷成間敷哉と致相談候処、御作事被召上物を大工に直段為図候儀は難相成筋と申候、此儀も尤に存候へ共、兎角今迄の者共は被差除金沢木屋共の内を撰み、少々骨折銀被下候て為相勤候様にも有之間敷哉と、重て仲左衛門申談候へば、於御作事致詮議只今迄の通にては御材木下直には不相成筋と存候間、安江木町、伝馬町四丁木町三ヶ所材木商売人の内撰一人宛可相極旨申候、仲左衛門存候も御作事奉行申候通材木屋に申付候へば、自分商買の材木求候相場にも罷成候故、高直にて直段極不申筈に存候由候。

451◆一 本吉、湊村両村も村御印御文言腰同事、

然処是又小物成之儀十村不承知、肝煎取立候故不埒に御座候、小物成の内潟役銀近年指上

不申候、他国船着岸仕候はば紛無之候故、少々取立上不申段仲左衛門承届候へば、尤村御印には有之候へども、御算用場印取立帳に無之候故、前肝煎ども申送も不仕奉行も不申渡候に付取立可申事共不迷惑仕候由書付申候、他国船入候儀紛無之候故、已来取立指上可申旨申候、右村御印に有之候を取立帳に漏候は、前に其節の算用承り候へば役人心得違有之候、惣て小物成は年により増減も有之、或は少々も取立不申品も有之候、其子細を承り届勘定の書替目録相渡申事に候、奉行又は役人の代り目には入帳と申候て、取立申品に書記御算用場印を取相渡候極に候、左候へば其時に必村御印の表に有之品々不残書立可相渡処、前年の御算用目録表を写し、此通り取立可申旨相調取立帳遣候に付、前年の取立帳に無之物はおのづから洩申候、末々にては御算用場の印有之紙面故、夫を証拠に仕、不載分はたとひ村御印に有之候物にても、取立不申筈と心得取立不申由に候、又は下よりは取立ながら、指上不申族も可有之哉と仲左衛門は存じ候、向後取立帳相渡し候節は、御役銀有無に不拘、御意の名目を以て相記し相渡し候様今般小頭どもへ仲左衛門申談候有無之儀は其年切の儀に候、右の筋にて渡置候帳面の分は不残取返し、御印の名目書落不申様調替可被相渡事歎。

六二◆一 同所魚六歩口銭の儀仲左衛門致吟味候処、前々は銀高指上候へ共近年次第に致減少、享保元年二百六匁七分五厘、同年湊村二十七匁九分六厘指上申候、年中大分の獵仕候へ共少分の口銭指上候段、肝煎共手前仲左衛門吟味仕候処、肝煎共も兼々左様存罷在候、乍去先年金沢町人の内、本吉魚口銭年中二十貫目の運上取立指上可申候間、其内五貫目諸入用に被下候様相願候に付、其通に被仰付指上申儀も無之哉の旨御算用場より申来、其時分所の奉行石川三之丞獵師共へ相尋候へば、運上に被仰付候ては迷惑仕候由及断、其以後兎角之儀被仰渡候故、獵師共何れも口銭は御用捨の様に数年相心得、右銀高も為冥加上之候杯と申候故、弥減少仕候由申候、其時分町人も右の通願候へば、慥に銀高上り可申候と仲左衛門考申候、去れば久々癖悪敷罷成候処に候条、只今俄に銀高指上申間敷候間、望人有之候はゞ一ヶ年運上に被仰付、其格を以已来指上候様可有之哉、町人数年相勤候儀は又所の者難儀可仕候、惣て肝煎口銭等吟味仕候様不縮成体と相聞候由同人申候。

六三◆一 能美郡安宅浦小物成村御印御文言同事、

是又十村指引仕儀無之、小松町奉行支配罷在町肝煎共取立申候、其内葎役銀は十村より今江村三左衛門支配仕候、同所魚口銭は、諸魚不残小松町問屋へつけ六分口銭指上申候、右問屋九津屋治太夫相勤申候、則治太夫手前口銭取立候様仲左衛門承届候へば、安宅の外近辺の浦々にて捕申候諸魚大小共、不残問屋に持参仕候て、如御定の六歩口銭取立上之申候由申候間、右口銭の内十ヶ一其方へ被下候や、又は金沢問屋並入用銀何程被下候や承届候へば、私被下銀の儀は前々より極不申旨申候故、受取切の運上に候哉と相尋ね候へば、先左様の筋にて前々年に差上候口銭高書記出申候処、段々銀高多少有之、殊に魚鳥多少により指引仕候由前々書付も有之候間、左候へば決て運上と申筋にても無之候、只今迄運上銀取立申内、其段勝手次第指上、相殘候分は自分に取申段紛無之に付其段申聞候へば一円申分無之、其段先祖上使宿仕候に付、正徳四年微妙院様御意に付、祖父次郎左衛門上使宿仕候扶持と同事に、小松魚問屋被仰付候に付、其年より九ヶ年の間銀七十枚宛指上、其次は二ヶ年五十枚宛差上、又三ヶ年目より天和三年まで廿二ヶ年の間は銀三十枚宛指上申候由申候、其後又六十枚九十枚指上申候年も有候へ共、夫にては自分の勝手に合不申候故御断申上、六十枚の割を以増減指引仕指上来申候由、運上銀に請合候へば指引は無之筈に候、右微妙院様御意の趣書付申物にても有之候と相尋ね候へ共、一円紙面も無之、右先祖より申伝候迄の由治太夫申候、左候へば自分勝手次第に取込申段紛無之候、十年以来の運上銀高為書出、其内何程上納何程自分に取候段為書出候処、年々上納銀よりは自分の方へ多取込申候、享保元年は惣高九貫二十八匁八分一厘の内、四貫三百八十九匁七分一厘六毛指上、

残る四貫六百三十九匁九厘四毛問屋為入用自分に取申候、同二年は惣高十一貫九十五匁五分の内、五貫三百九十六匁四分六厘五毛指上、残分は自分に取申候、如此に仕度まゝ成儀、数十年大分の銀子を自分の心得を以取込申事不届千万、御仕置も立不申儀と仲左衛門被存候、乍去如何の儀に候哉、先年より御算用場奉行改作奉行先役の者共、小松町奉行等不及食着、且又先年山崎半左衛門斯様の品々吟味仕候時分も其通に仕置候、左候へば只今の治大夫決て不届共難申奉存候、上使宿の儀申立候へ共、上使宿仕候者は御領国何程も有之候へ共、毎度入用被下自分の費無御座候、其時分定て上使宿も仕者故、御褒美に問屋被仰付候杯と申儀にて可有之哉と被存候、其上弥承届候へば問屋も下より願候体に御座候、祖父治郎右衛門に被下候御裏書の写の旨にて、其写見届候処、尤被下候趣の証拠にも罷成物にても無御座候、右紙面如左。

乍恐申上候

454◆一 魚問屋口銭の儀、金沢富山並に六歩に可仕は不及申上、魚鳥通り荷物に口銭取申間敷候事。

454◆一 御運上銀七十枚の銀子、金沢並に毎年正月中に指上申様被仰付可被下候事。

454◆一 魚屋方の外、当地商人他所より罷帰候砌、干魚の類荷物の差合に仕罷越、直に売申分は少も構無御座候、但魚屋方並振売の者に卸売に仕候はば、金沢並に口銭出し候様被仰付可被下候事。

454◆一 鯉鮒の分口銭取申間敷候、其上魚屋の外浦方より魚買寄に、自分に遣申儀構無御座候事。

454◆一 魚屋方並振売の者方々へ罷越魚鳥買候て、自分振売仕候儀構無御座候、過分買罷越候て問屋へ案内不申入、直に見せ候て売不申様、金沢富山並に被仰付可被下候事。

右の通被為聞召届被仰付被下候はば、難有忝可奉存候、以上。

正保四年八月朔日

九津屋次郎右衛門

浅野藤左衛門様

神戸藏人様

表書の通無相違様に可被申渡候、以上。

前田内藏允判

此外に曾て紙面も所持不仕候由申候、此紙面を以考候へば、最初運上銀七十枚と相極請取切々相違無之候、其以後一兩年七十枚より過を指上、御為の様に申立、運上銀最初の極高の格を乱し、二十二ヶ年の間一ヶ年に四十枚宛の不足を指上、其後又五十枚六十枚と一兩年相増、畢竟運上と取立人との差別を紛はし申仕形、たくみ成仕様に奉存候、たとひ先祖に如何様の御奉公仕候ても不埒成儀、如斯の役儀相勤候者終に不及承儀に候、浦方の者尤渡世ながら、風波の難を凌ぎ身命を擲、捕申候魚の口銭を全く上納不仕、数十年來町人の潤色に仕候儀近比難心得儀に御座候、乍去祖父以来の儀、其上代々役人中も心付無之斯様に成来候へば、只今越度にも難被仰付可有之候坎、六歩口銭も紛敷仕様の旨承候間、問屋を取放外の者へ可被仰付候哉、左候はば金沢問屋並入用銀可被下候哉、当地にて問屋兩人へ銀子十貫目被下候、小松の義に候間十貫目割を以或は三ノ一四ノ一計も可被下候哉、十分一の被下銀例も有之候。

元禄十六年御算用場より諸運上の儀伺候節も、段々被仰出候内運上の内先年と違、其請合の者過分に取込、又は取おとり候品も可有之候、斯様の儀連々致勘弁沙汰仕候様被仰出候得ば、此者の手前にはひしと合申趣と同人存候事。

456◆一 今石(不) 動町小物成村御印御文言同断

是又十村不及沙汰御奉行支配に付、町組合頭共出来退転相しらへ、帳面肝煎吟味仕、奉行加奥書御算用場へ出申候、役銀等の儀は相替品無之候、川役銀計は帳面相添、町肝煎入方

より十村御扶持人へ相渡申候、川役は散小物成に付右之通に候哉。

456◆一 氷見町右同断

是又町肝煎共取立、其品々年の暮に帳面相添上之申候、但散小物成は取立代銀十村へ相渡す。

456◆一 城端町右同断

是又町肝煎指引仕候、散小物成は右同断。

右三ヶ所散小物成は十村御扶持人等へ相渡候故、御印に合申様御座候へ共、増減差引は定小物成には無之、散小物成に有之処、其見図の指引組合頭肝煎等仕候儀、御印の表相違仕候事。

456◆一 埴生村伝馬役銀支配の外に候へ共、塩川安左衛門取立申候、埴生村本宿にては無之、常々在所にて農業第一の処に候処、今石動俱利加羅峠の下にて宿馬立兼滞候間、加宿に奉願、寛永十五年其通に被仰付候乍去開作つかへ迷惑仕候段及御断一ヶ月の内五ヶ一六日相勤候様被仰付候、右の首尾に付伝馬役銀は石動へ上候事。

457◆一 魚津町小物成、村印、文言同断

万治三年岡田十右衛門町奉行の時分より、十右衛門方へ役銀取立上之、今以其通に候、勿論小物成見図も同所肝煎へ指引仕候、小物成の内胤船外海船擢役出来、退転は生地村牛之助へ相達、牛之助加奥書奉行より御算用場へ出申候。

457◆一 所口右同断

是又町肝煎共取立申候、魚口銭は山下屋仁兵衛と申者取立申候、宮腰同事に口銭勘定直に相遂申由に候、拜見人の儀は家来を兩人極置候由、不埒成事に候、其上村御印に無之三步半他国出之口銭取立申候、是は延宝四年山崎半左衛門奉行の時分始て取立申体に候、其以後代々奉行其趣を請、代りの時分御算用場より取立帳相渡候故、今以取立申候、最初半左衛門取立候は如何の儀に候哉、間違にても可有之候。

457◆一 高岡町は村御印無之候。

457◆一 金沢町は村印も無之候へ共、小物成算用等御算用場より承届、畢竟改作奉行引合仕儀故、今般の次で仲左衛門相尋候処、惣て小物成、諸魚役銀等取立候儀は其品承届、書替目録渡申儀と存候へば、左様にては無之、江森半左衛門、和田小右衛門支配之時分、貞享四年六月十八日と有之、御算用場の印に帳面を以取立申由に候、右帳面に有之品々定て其以前の帳面を以書記申儀と存候に付相尋候へ共、其時分の古帳は反古に成無之候、右在家の小物成の格を以相考候へば、御算用場印帳も不慥に候、根本御印帳無之、御算用場町奉行等の了簡にて小物成相定候儀は一円有之間敷事に付、御算用場町会所等も相尋候へ共、御印等の物無之由申候、斯様之重き品下にて可相極様無之儀奉存候、先年御領国中村へ被下置候、微妙院様御印の小物成御目録、先年御算用場へ取上置、其後御前へ上り候由毛利故又太夫申候、其時分金沢町御印物も一所に上り申候哉と奉存候、但御印物は何れも定小物成にて候、在方も散小物成の准にて、御印物は無之候哉、夫にても最初散小物成相極候竃端の紙面は可有之事に候、微妙院様御印物石川郡田井村次郎吉、村井与三右衛門、河北郡五所村源兵衛方に三通所持仕候に付、仲左衛門写置申候、是は一統取立候御算用場詮議にて毛利又太夫申渡候故、ケ様之物不残指上候ては、以後取立候儀も区々に可相成と奉存候、右三通以来の証拠に残置申度旨次郎吉相願所持仕候由申候。

小物成指引取立候儀、村御印の通向後十村へ被仰付候はゞ、左に相記申通に候

宮腰町

本吉村

湊村

安宅

石動

城端

氷見

魚津

所口町

ゞ九ヶ所、此内宮腰・本吉・湊は別て不埒に御座候。

458◆一 十村に小物成取立候は、其組々十村に不限、御扶持入十村等骨折申者に申付候儀先格有之、取立銀の儀五十ヶ一可被下候由の事。

459◆一 十村支配の内村御印無之肴、他国出し三步半口銭取立候処々、

高松村 松波村 遠塚村 北村 白尾村

右村々小物成取立人御所村源兵衛、能瀬村弥右衛門に候、御印無之候処取立候は如何と、  
仲左衛門被相尋候処、延宝四年九月御算用場より相渡候取立帳に、書記有之に付取立申旨  
申候間、右取立帳見届候へば、三步口銭書記有之候、御代官割仕役人へ相尋候処、先格に  
て役人代り申節、前々帳面を以相調候定にて、其前の帳面に有之候故、其通相調候ものと  
存候由申候、依之十村共手前越度共難申付候、乍去たとひ御算用場より申渡候ても、村御  
印に無之儀に候へば一往可及断儀其以後にても心付可申処、其通仕置候儀十村に不似合事  
に候、今般仲左衛門浦方十村高松村平兵衛白尾村理右衛門に急度申渡誤書付を取申候、取  
立人に如在は無之事仲左衛門申候事。

459◆一 小物成取立帳は、向後御印帳の名目を不残相記可相渡事に候、寛文十年村御印  
御改の時分、安宅三郎左衛門、近藤四郎左衛門兩人仕立候、覚帳にも先村御印に有之候、  
小物成の内只今退転の品品指除可相調哉の旨年寄衆へ相尋候処、退転にても又以来出来候  
様に候間、御印の通相調脇書に退転と書付置候様御申渡、其通に調候由記置申候、是を以  
相考候へば、前々御算用場より相渡候帳面に、村御印の分書洩候は弥心得違と存候由仲左  
衛門申候。

右仲左衛門物語の様子承候故、咄候趣覚書に仕置候条、尤相違も多く可有之事。

460◆一 当地の事御察の通、此間風高にて毎度火事沙汰さわがしく御座候、当五日十一  
日度々大火の儀御聞可被成奉存候、五日の火事染井御屋敷も危程に候処、御別条無之目出  
度奉存候、西南風強く方々火飛候て行先ふさがり候故、大分焼死の人有之、不便千万成儀  
に御座候、近所より早速かけ付候様御新令有之候故大勢入込、火消の追々に馳加はり、小  
火の時は早速得物候得共、烈風に相成候ては夫も何の益も無之候、けつく大分人数急に詰  
かけ候故、足弱の者共ふみ倒され又はのき場を失ひ候て、是にも焼死候由申候、太平の御  
代には有間敷儀どもにて苦々敷奉存候、只日夜火を消し申候御詮議のみにて、火事出来不  
申様に仕度事にて候、第一風俗悪敷候故慥遊惰の人多く候故、火を警申事無之候、只今  
江戸中在家に雑り居申候遊女遊民等無限候、失火は皆これ等より出申事に候、風無之日は  
其儘消申候へ共、風高成日に出合候へば其儘大火に罷成、人の力にも及不申、万人の害を  
なし申候、斯様の御吟味第一有之度物に奉存候、連々風俗淳厚に成吹風枝をならさぬ御代  
に成候て、火消も入申間敷奉存候、斯様の事世人承候ては、腐儒の迂談と申候て聞入申者  
も無之候、中々肉食の人信じ申儀にて無之候、無是非事に奉存候。

460◆一 此度金銀通用御新令諸国一統に被仰出候、其御地杯も御詮議にて諸士中も難儀  
之由承申候、左様に可有之と奉存候、京都西国一統つづれ申様に申候、当地杯は金遣に候  
故当分夫程難儀は不仕候得共、物価くるひ候て間違候もの有之候、金納の所々杯は急に一  
倍に成故ひしと離儀仕体に候、其上物価四倍に罷成候て、又は金子三四十匁替に交易不仕  
候ては、京都の売人も統申間敷由申候、左候へば、当地も可為困窮候、高野の金子五十万  
両程も有之候、此金子公儀へ御かり被成候由、当年中に被召上候由、此金子上方の町人ど  
もかり候て、米はじめ諸物買置候て回し申候、急に御取立被成候に付難儀仕候由申候、其  
外代官の預り金子杯も当年中御取立被成候、是以方々へかし置まはし申事候処、此度集申  
候に付江戸中金銀のかしかりも不自由に罷成、是にて困窮の者は指当り難儀仕候、高見の  
如く行々は古風に帰り申端にも可相成と存候、ちと急に御座候故諸人行当り難儀仕候、此  
度の御新令三年早く候由、先日御先代金銀吹替の事に預り申人被申候、いかゞ成行可申哉  
愚見に及儀にて無之候、私共御切米とくに請取申候、五十両を新金二十両にて相渡し申、  
上納金は五十両をば新金にて上之申候、斯様の儀も不都合成事にも人心服いたし不申候。

461◆一 来秋朝鮮来聘いよ／＼相極り、先日宗式部殿対馬守殿御舍弟に御座候、当地へ

被參早速家督御札相濟最早發足帰国と奉存候、来正二月時分国へ參着にて、早速朝鮮へ參候はゞ、朝鮮使者来夏あなたを可為發足候、無左候ては当地へ秋參着の事成兼可申候、十一月の火事には宗殿屋敷殊の外危候処、のがれ候て一段の事に奉存候(十二月廿四日)。享保四年

462◆一 今日増上寺へ御廟參拜候、誠に堂宇金玉をかゞやかしいと殊勝には見へ候へ共、戸外に番僧番つとめ守り居申外は人の独もなく、折々參詣の人顔見へ申計にて候、寂寞として春とも見へぬ有様にて候、御在世の時は、年初には群臣列座し、私ごとき賤しき輩は遙に奉拜事にて候ひつるに、斯様に御あたり近く拜謁し奉り候事ひとへに追慕し奉り候、夫より間部越前守殿宅へ參候て賀儀を申置候、是は只今在所居申され候、門前車馬の跡無之候て、礼をつとめ候人も、折しも私より外には見へ不申候、そのかみはさしも権門に群集致し候事まのあたり見申事にて候、時世の移替候事よと心をいたましめ申候、其歸りに高階半次郎許へ立寄候て暫話申候、亭主酒杯すゝめ候て、古今の物語の序に、当代風俗の無下におとろへ候て、廉恥の風たへはて候事を申出し互に眉をひそめ申候、旧臘の事に候、久世殿御目付中を以の外譴責いたされ候事有之候、有馬兵庫殿、加納遠江殿兩人勢盛にして君辺の柄をとられ候故、老中杯いづれも彼に媚申さるゝ事目ざましく候、水野殿杯日比人のおもひ入とは大に違ひ候て望を失ひ申候、夫故目付中下の陰事杯承り出し候て、執政の詮議をもひそかに彼兩人の衆迄達し候事共有之候由、久世殿目付中を不殘呼連候て、各役儀をばいかゞ心得候て勤被申候哉、人の陰事を聞出し候て、此方へも不被申候て、詮議をも歷す御近臣へ達し候事は、一分の立身をのみ心懸候て、法式も武士の儀をも忘候事に候、只目あかし杯の所存にて勤被申候と見へ申候、沙汰の限り成事に候て、此後斯様の事候はゞ、手前より願候て身をはたし可申候、手前など斯様に勤候得共、立身などに心懸申事はなく候由被申候へば、御目付中苦々敷体の由にて候、是は御目付中計にてもなく、外へもあて申さるゝ体にて候、又兵庫より御用申談度事候間是へ御出候へと申まいり候、久世殿被申候は、表向の御用は大切の事共にて、左様に立さわぎ候ては御用半着に成申候、御相談の事候は是へ御越候へと被申候由、外の御老中は右兩人の被申事候へば、足を倒にして飛回り被申候、其中に居られ候て流石と申て人々感申候、今に大臣の体を失はぬ人は久世殿一人と申候、是に付ても過し世の事思ひ出し申候、日光御社參の時にや、道中絹幕御法度の由に候処に絹幕見へ候とて、御老中誰やらん御目付中を呼ばれ候て、急度可申渡由被申候へば、其人申候は、昨日迄申付候、今日より申渡候事成不申候、たとひ申付候ても聞申間敷候由被申候へば、御老中気色そんじ候ていかゞの儀に候哉と被申候へば、其儀にて候、昨日迄絹幕打候者一人もなく候、今日御自分様御宿絹幕見へ候故如斯にて候、然ば私共何共難申付由申候由、此時分は御目付中も斯洋様にて候、御老中へも此方より急度申候故諸事正敷候、近く斯様に候ひし者をいつの間に替り果候やとて、高階嘆き候て申聞候。

正月五日

463◆一 御前代以来長崎ぬけ売と申事堅御停止候処、とかく止み不申候、公儀より御定置候外は売買不被成筈に候へ共、唐人日本人共に利を要とし申に付、窃に船上にて夜中杯致交易候事に候、当御代に至てぬけ買の張本大勢被捕候て少やみ申候、ぬけ買の者御法度背申に付必死罪に被行候処に、御代如何の思召候哉、耳鼻をそぎ候て命を御ゆるしにて候、旧冬は別ての張本三人耳鼻をも構不申其儘御助にて候、其節奉行中申渡候趣は、死罪にも被行程の罪に候へ共、大勢同類を指申に付耳鼻もそぎ不申、其儘助可申旨被仰出候、是殊の外成御慈悲難有可奉存候、此御奉公に何とぞ先生(シヤンスイ)金石衛門を己等三人申合候て捕出し候はゞ、一廉の御奉公に可罷成候、此度の御慈悲を難有奉存候て、此儀隨分心懸可申候旨申渡追放申候、然る処右三人して金石衛門を捕へ当地へ罷越申候、此金石衛



門と申者第一の首魁にて、唐人の着用いたし唐人と合体いたし、唐人の船中にて唐人に罷成、日本の案内いたし日本人を招集め、此者被捕不申内は、ぬけ買やみ申間敷と申候へば、此金右衛門と申者は唐へも渡り、唐人と申合候て海上を自由に回り候故、中々難捕候、唐人の海賊ども首魁をば先生と号申候、福州音にてシャンスイと唱申候、然処に此金右衛門を此度右三人捕へ出し候事諸人驚申候此三人金右衛門と一体の者にて、此三人より外には金右衛門を捕へ申事成間敷と申儀、上によく御合点被遊候故、右三人死罪に御老中先として決断有之候上を、特命にて御免しさて右の通被仰渡候へば、果して御手に入申事、御智恵の程御老中初諸役入も奉感由申候、箇様の儀は御得物と申事に御座候、是類の事は察と申物にて可有之候、「人君貴明不貴察」と有之候、箇様の盜賊を捕申類の儀には察にて能く御座候、向上之事にはいか有之候哉。

二月七日賜修運齋賢成之書

465◆一 毛利飛彈守殿事御聞可被成と奉存候、不存寄御免被成隠居被仰付、子息を家督願候様にと本家へ被仰渡候、元来御先代に民部殿より飛彈殿隠居いたさせ、子息へ家督被仰付候様にと願にて候由、此度願の通被仰出と申物に候へ共、何とやらん本家不首尾の様罷成申候、御先代此事井上殿始終本家よりの付託を請取申候て、戸沢殿へ御預けに罷成候由に候、井上殿も不首尾に候由申候、是は第一此度本家吉川殿申分により被仰出事と申候、吉川只今は幼少にて候、本家百姓と吉川百姓と申分致し候てむつかしく罷成り本家より吉川領知を所替為致可申旨に候処、吉川家老合点不仕候て、互に及異論余程六ヶ敷候由申候、本家無理と申候、此度俄に御免は本家にあて被成たる故と申候、いかゞ左様の儀候や、民部殿隠居願に候由、是も何とも不被仰出候て不埒明候由申候、是に付候ては、浅野又吉殿家督芸州危より御願可被成などと申候。

465◆一 一三日以前に小普請支配役と申物を新規に被仰付候、只今迄小普請は御留守居中の支配にて候、御留守居の手を放し可申事に候哉、いまだ委細の事は不承候、此儀小普請支配役と申物、寄合番頭の中十人被仰付候、何卒思召も有之候ての事と奉存候、芸候へ出入の瀧川讚岐守なども右十人の内にて候。

465◆一 或人の物語にて承候、馬を馭するの道にて、天下を治る道を御得心被成候由申候処、去大儒申候は馬の儀は不存候へ共、御尤成御事と申上候、其時汝馬をしらずして尤とは難心得御とがめ候へば、迷惑して思召承度奉存旨重て申上候処、されば馬といふ物やわらかに乗ても不参候、又きつく責候ても参り不申候、其間に乗様有之事に候由に候へば、大儒稽首して古より聖々相伝候分如此にて候、中庸の御覚悟の事名譽に奉存候旨しきりに奉感候由、是は寛猛互に用候て一偏に無之と申儀にて、中庸と申にて可有之候、去とも寛猛を互に用ると申計りにては参問敷候、馬さへ稽古無之候ては不参候、況民を治る事古の聖賢の法を学び不申候て、寛猛両用と計にては参るべき事にて無之候、されば箇様の処よき機会にて候間、政は寛猛互に用る事御尤成御心付にて候、但寛猛を施し申処に当否可有之候、其処は聖賢の道を学び不申候て、一分の智にて行ひ候ては過失有之物に御座候杯申開度事に御座候、夫を中庸を被得候事、聖々相伝の意に御叶被成候杯申儀いかゞの儀にや、弥以驕慢の意を長し申にて可有之候、阿世曲学と可申候、惣て比譬と申物一通りの事にて候、右のたとへも為政寛猛の事計にて候、是にて聖々相伝候旨と申候て、礼楽等の事は如何無益の事にて候哉、人は万物之靈にて候、馬を馭し候道にて埒明申儀にては有之間敷候、去とも馬を馭し候に付此品に御氣付の事、是は一理有之事庸主の可及処には無之候、其美を奨順して大道へ導申事無之候て、却て阿諛して驕を長し候様致し候事無是非事と奉存候、白石と比日此事申候て嗟嘆仕候と、今奥村殿青地殿へも御物語被成、此紙面御火中可被成候(六月廿九日 賜勉善書)。

466◆一 先日ちよと申進候、高倉屋敷にて講談の事いまだ相極り不申候、木下家門人計

にて講じ候様に被仰渡候由、石川近江守殿平三郎迄被仰渡候、上には平之丞門下大分有之様に内々被聞召たると奉存候、御直参には老夫服部藤九郎二人計にて、陪臣にも只今故老皆帰泉候故誰も無之候、雨森杯類少々候へ共、是も在国の事おほく、当地に在合候は兎島平兵衛、其外紀伊国殿に岡田文蔵兩人より外無之候、其故平三初老夫藤九郎右の兩人合候て五人有之候、五人にて毎日ならば二番に勤申候、隔日に相勤候様に可仕旨平三より近江守殿迄被申上候、新井氏は寄合組にて儒官にて無之候へども洩間敷候、先日高倉屋敷も見分に参申殊の外狭く御座候、上段の間を除候て玄關共三間有之候、二十畳程の間にて候、林家聖堂の講話は御直参を陪臣町人等と日を違へ候故、弥聴衆すくなく候間、同日にいたし席を違へ候様致し可然旨相談候て其通申上候、書は大学、中庸は平三初日、次に論語老夫、次に孟子藤九郎、次に近思録文蔵、次に小学平兵衛と内談相定申候、老夫藤九郎へはいまだ何共被仰渡も無之候、いかさま相極り候はゞ兩人へも被仰渡可有之と奉存候、平三より申談候計にては済ぬ事と存候、兎島、岡田へも御老中方より御主人へ被仰渡可有之儀と存候、右五人の事並講書等先日近江守殿迄平三より申上置候得共、未何の儀も無之候、比日朝鮮人の事にて他事は延引と見へ申候、朝鮮人発足候はば可被仰出存候、聖堂へ罷出林家の衆へ加り講じ候へと有之候ても、上意に候へば難辞事に候、此度ケ様に此方学者別式に被仰付候事一段の儀と奉存候、何卒聴衆も不絶有之候て、学風おこり候へば能候、中々左様には有間敷と存候、聖堂も只今は弥零落空谷足音位と申候。

468◆一 先日林家の高弟桂山三郎左衛門老夫扨同役にて候、詩材有之候、詩は林家にならひ申者は無之候、外にも余り沢山には無之程の詩人にて候、其外経学等も好み申由兼て承申候、先日御城にて逢候へば拙者へ尋可申旨申候、大学を講じ申時分、新疏の賜を大分得申候故、始て承り合点不参候故、篤と承候へば、新疏を下見の時分見申候て益を得申との事にて候、天下の宝にて候、何卒中庸も出来候様にと申候、中々只今時分林家の門下など、他門の学者にケ様の事不申候処、右桂山氏奇特成事と感じ入申候、被尋候はゞ語り可申候、夫にても学力も相知れ可申と存候、此三郎左衛門、梁由才右衛門と詩友にて別て語申候、拙者才右衛門を送り申序をも見申旨被申候、比日才右衛門文柄と申文章を著し越申候由、三郎左衛門物語にて候、偕如何様の文にて候哉と尋候へば、当代文章の権柄を持申名儒を悉く挙候て評を致し申候、老夫事は鳩巢先生は醇乎醇者と書候由桂山氏物語にて候、不覚失笑致し、又は恥かしくも有之候、才右衛門口きゝにて候、此病いまだ依旧候と存候。

468◆一 朝鮮人前月廿七日に当地へ到着、当月朔日に登城直に御三家御相伴にて御饗応相済申候、五日に曲馬御上覧、来る十一日は御暇被下候由申候、十五日十六日時分発足候て三使へ日外姓名申進候、学士は申維翰字は周伯、青泉と号候由、張書記名は応斗、菊溪と号し候、成書記名は夢良、長嘯軒と号し候、姜書記名は柏字は子青、耕牧子と号申候由、比日斯様に承り候、追て慥に相知れ候はば可申入候、其内わきよりも段々相聞へ可申候、偕学士初扱々文辞劣弱と見へ申候、正徳中に参候人より各別下り申候、林家の学者一兩度も筆談贈答有之由、其外は此度殊の外すくなく候、対州よりの制し申候と見へ申候、申学士など遅吟にて候故、前の如く大勢筆談候ては難儀可為との事と見へ申候、大坂にて唐金喜右衛門贈答の詩も新井氏迄指越見せ申候、比日当地にて川口庄三郎筆談に罷出、贈答の詩文見せ申候、庄三郎殊の外称美の由東五郎物語にて候、東五郎も脇にて見申候、庄三郎敏捷にて朝鮮人も感申候由、此度日本へ参候て贈答の第一たるべきと東五郎は被申候、毎日参候と見へ申候、只今我等など門人と申候由、我等など当年筆談に出不申儀を不審申候由東五郎被申候、観瀾死をも承り候て驚き申候由、あなたにても李東廓去年七月相果申候にて、三宅は八月にて候、一月違にて不思議に存候、当地にても先年筆談の一人宛も同年に帰泉にて候、感慨此事と存候、東廓は六十五にて候由、先年我等年詮談致、其時拙者よ

り三四年程兄と承候、左候へば六十五の筈にて候、夢の様に被存候、東廓は能書にて候、小谷殿一卷得被申候、定て其許にて見可被申候、見事に御座候、此度の学士は手跡能無之候、第一學術何とも難心得候、川口生への挨拶の文章に三世宿縁と申候、是にて御推察可有候、勿論朝鮮にて俗語に三世宿縁と申習の事故書申にて可有之候へ共、学士杯と申もの外国の人へ申候文に斯様の事書申候事、學術も量り知られ申候、其外詩なども一句も面白からず候、老夫文章を写し候て呉候へと川口生へ申候由、詩文ともに旧作を得て参度旨申由に候、又妻柏の唐金喜右衛門への文章に、文章是万古之一器物と申事有之候、日域見儒臣申句有之候、何の事に候哉、儒臣は唐金事と見へ申候、日域に見へ申事一円通じ不申事と存候、是にて御察可有候〔十月九日 与大地昌言書中〕。

享保五年

㊦の◆一 当地何の替御沙汰も不承候、比日承候へば、廿日御佛殿〔今年三月廿七日焼失〕御造作、大名衆御手伝不被仰付、公儀より被仰付候、三方両にて仕回候様に可仕旨被仰出候由申候、事実に候へば乍恐御尤成御儀と奉存候、総て御無欲成被遊方とも彼是少事にも承申候、今日迄は御好色御遊興も曾て無之候、先日も去人被申候は、唐太宗よりは賢君と存候、太宗も閨門の中はおさまり不申候、当上様の御儀は、椒房の内寂寞いたしたる事古今無之と被申候、成程其通に私ども奉存候、偕又諸役人共に御先代より兎角賄賂止不申処に、当御代ひしと無之候、御老中御近習衆權威の事すきと不承候、是等近代不承儀に奉存候、比日も萩原源左衛門と申候、御勘定吟味役にて候処、有章院様御代々井上殿杯不相口にて二丸御留守居被仰付候、是は同格の役柄と申内、結句左遷の方にて御座候、然る処に先日不存寄御前へ被召候て、御直に段々勤方の儀被仰含、元の吟味役に帰役被仰付候、諸役人不存寄事とて驚申候、此人文昭院様御代に御挙用被成、新井筑後守と別ての人にて候故、思召も悪敷候様に諸人も申候処に、右之通にて候、兎角上には公成思召と見へ申候、下の了簡とは格別成事に奉存候、何卒段々御法令も出来候て、此後御旗本の風俗改り候様に致度存候、近比は御威風にをされ候て少は改り候へ共、華麗を好み遊興に耽り申事はやみ不申、上には是程御儉素且又遊興の事すきと無之候へ共、曾て合点不仕候、兎角急度御法令出不申候ては、埒明不申儀に御座候、〔五月十四日書中〕。

尚以老夫など高倉屋敷へ毎度罷出申候、聴衆も不絶三四十程宛有之候、是も承候処に、御書院、御小性組などの中に出申度と申人もおほく有之候得共、相番の中過半は嫌にて、自然出申候へば隔申候故、夫を恐候て出不申由に候、風俗悪敷候故と奉存候、斯様の儀も勝手次第に罷出可承旨被仰渡にて候故罷出不申候、急度可罷出と候はゞよく可有と申候、中々学問などはやり可申勢には見へ不申候、以上。

㊦の◆一 当地時事替儀も無之中、久世大和守殿大病にて候、たとひ本復候とも最早御老中は御勤被成申間敷と申候、京へ松平伊豆守殿よびに参申候、御老中に成候哉と沙汰にて候、戸田肥前守殿御書院番頭より比日御側衆に成申候、是は青山備前守殿替りにて候、千石御加増にて番頭より御側へ参る事先例無之事にて候、肥前守殿手柄と申候、殊の外実体成人の由事候、河村弥兵衛と申は河村平太夫跡にて、久敷小普請にて罷在候処、比日不存寄御代官に被仰付候、小普請の者役儀被仰付候事珍敷由申候、又小普請の内猪股何某と申者二百位の者、父子兩人外に大番一人平生不行状至極之由、御聞被遊候由にて御改易被仰付候、是等皆諸人存よらぬ事にて御座候〔六月十一日書中〕

久世大和守殿死去の事

六月廿七日夜大和守殿於深川下屋敷死去にて御座候、依て来月朔日迄鳴物停止と申儀に御座候、御尤成御儀に奉存候、此人当代にては抜群に相見へ、御老中一人の様に申候処、おしき儀と諸人申儀に御座候、享年も六十一に御成候由、未盛にも候処国家の不幸と奉存候、其故上にも殊の外御おしき被遊体と相聞へ申候、前日病気散々にて廿日余除絶食にて麵類

など少し給られ御続き候処に、廿九日おして登城諸人承驚申候、上への御暇乞と被存被罷出体に御座候、御前へ被罷出良久御閑談の由、何を被申上候哉承人は無之、定て御用の儀と奉存候、夫より退出の砌有馬兵庫殿を「御側衆紀州より被召連候」尋被申候へば、有合不被申候、逢申度由奥へ被申達候得ば、其儘有馬被罷出候、段々上の御懇意難有被存候趣一礼有之、其以後御自分に懸御目候事御暇乞共存候、偕常々御自身御覚悟の処承度事有之候、御奉公と申物の役儀と勤方ニツ有之物に候、いかゞ其差別御意得候て御勤被成候哉、御所存承度由被申候、有馬殿何も急に御返答難申上候、思案仕見可申旨被申候へば、最早ふたゞび逢被申候意得にて無之候故、其儘被申候は、総て能合点致したる事は早速出申物にて候、指当り御了簡無之と御申候へば、此事御合点無之と存候、御奉公の筋と役儀筋とは違申事にて候、御奉公の筋と申物は、何にても上の御為に存寄候事は、一分の覚悟一ばいに勤申事にて候得共、役儀の筋は格別の物にて候、役儀の筋は老中は老中の役儀、若年寄は若年寄の役儀、御近習の役儀少も乱申儀は不罷成候、御為の儀と申にても夫々の役儀有之儀に候へば、其格違候ては天下之害にて候、其処を能御了簡候て御勤候事に候、最早御暇乞に候故所存中入候由被申候、偕翌晦日増上寺へ御名代被仰付様にと願被申候、病氣にて成申間敷由同事に被申候へども、達て願被申候て翌日増上寺へ被参候て、直に引籠被申候、呼吸も途中にて度々絶申由に御座候、是は有章院様御代に御老中に被仰付候に付、御暇乞御礼可申上為と聞へ申候、扱死後葬送の式迄すきと被申置、家老一人被申付五百石加増、其外家来恩賞段々被申付、府庫の中絹帛の類すきと末々まで施し被申候、御子息隠岐守殿も乱舞方を好被申候に付、少は不苦候、長じ不申候様と被申置候由、其外遺言も有之由に候へども、委細は不存候、昼夜見廻衆門前市のごとくに候、夫もいやに被存候哉、当月廿日比深川下屋敷へ引込被申候、中々絶食身を動かさし申事も難儀の体候処諸人驚き申候、川船幕など打候てりつば成事にて被参候、御嫡子隠岐守殿は上屋敷に罷在、御城辺にて候間火の用心等急度相守り候様に可申付候、深川へ見廻りに参り申間敷候、参候ても逢不申由被申渡候、次男ばかり看病の由にて、其外一類中見廻被申候ても逢不被申候、御役儀の断も病中度々申上候得共、上より御赦し無之候、上屋敷に被居候内も度々上使にて御看御菓子など被下候、前廉に御内意有之上使御挨拶等には隠岐守罷出候て、大和守にはすきと構ひ申間敷候、若上使に對顔候はゞ却て思召に叶不申候由堅く被仰付候故、御請は隠岐守殿被申上候由に候、去共上使には顔致教度由にて被罷出候由に候、深川へ被参候てもひたと上使も有之、何卒少しも口にあひ申物にて食氣も出来候様にと思召候哉、色々賜物被下置候、必上意と申間敷由、被仰出候由上意と申候はゞ頂戴致し候とて、苦勞御かけ被成候事御用捨と聞へ申候、上よりの御待遇も無残処御様子にて、其身も死に至り申迄被申出候て落涙に及被申由に候、寺は上野近辺に有之由に候へども、御亡父の墓同所に葬候様にと被申置候て、宗旨も遠候へども法華寺へ被参候、長明寺とやらん承り申候、丸山辺にて候故、此人一人に諸簾本も目を付候て頼母敷存候処、扱々残念成事と江戸中一統に火も消へ申様に申候、是は手柄にて候、息災にて被勤被申時分の事にて候、堀隠岐守豆州下田の御代官被仰付候、先例船にて参申候、然処に陰岐守舟不得手に候間、陸地を参り申度由大和守殿迄願申候、是は陸にて参り候へば延申に付、船にて先官罷下り申候所を陸を参り度と申事願立不申候ては、難成御格と聞へ申候、其段大和守殿聞被申候て、成程不苦候事と存候、同役中へも可申談候間左様に心得可申旨被申候処、直に有馬に逢候て右の事大和守へ願申上候、何卒成候様に仕度旨隠岐守被申候へば、有馬聞被申候て、夫は少も苦しからぬ儀と存候、窺可申旨にて其儘窺被申候処、其通に被仰出候、其段又大和守殿へ隠岐守被申候処に、大和守殿申され候は、先以早速埒明一段の事に存候、向後御役儀の事兵庫を以て直に御伺可有之候、手前など年寄候て御用の事早速埒明兼申候由被申候故、殊の外迷惑致し候て兵庫殿を以願申にては神八幡無之候、只御自分様迄願置申と物語仕候処、早速

御伺候て右の通に候、近頃迷惑仕旨断にて候へ共、聞入不被申候て其儘座を立申候故、可致様無之候て、一類中大和守殿へ出入の方へ被參候て、右の御詫言申上度旨隠岐守被申候得共、其人請合不申由、偕其翌日か御登城にて老中列座の処へ兵庫殿を呼出し被申候て、大和守殿被申候は、堀隠岐守陸にて下田へ参度旨手前迄願置申候、然処御自分より被申上相濟申旨隠岐守為申聞承候、手前より奉伺候て下へも申渡候事を、中より御自分に被申渡候は如何の御了簡にて候哉、急度承届度由被申候処、有馬殊の外難儀兎角の返答も無之候、水野和泉守殿傍より兵庫殿不出来至極の事に候、大和守殿只今仰の通り、各より此方の勤方を指越候て、上へも伺下へも被申渡候事法外の仕方と可申候、急度あやまり申旨只々被申候へと被申候得ば、兵庫も兎角可申様も無之、意得違候事あやまり入申旨被申候て事済申由に候、右故後に兵庫御奉公の筋と役儀の筋と被申候儀も、此事などを以被申置と見へ申候、只々小普請支配新規に被仰付候、其中に石川兵庫と申人の支配に何某と申人、常憲院様御時分役者より被召出参只今三百俵被下候て、小普請にて候、此者実子無之に付養子願兵庫迄申入候、常憲院様以来被召出候者は実子有之候へば跡目相違無之、実子無之候へば、跡御立不被成候様に候由、慥に被仰渡は無之候得共、常憲院様以来の奉公衆は養子願すきと取次不被申候、去ども其格慥に被仰出無之儀に候処、頭衆も殊の外処置にしがたく由申事に御座候、右何某が願書附を兵庫持参致し井上殿へ申上候処に、是者成不申筋に候由にて返し被申候、一度にて指止申事無味に覚候ゆへ、また持參候て何卒奉願旨被申上候へば、先日申通に候由にて又返し被申候、其上を又持參致し候て、両度御返しの上を申候事は不調法に候得共、此度は私願にて候、何卒養子被仰付候様御了簡も被遊被下候へと申候へば、河内守殿以外の外腹立、再三成不申旨申渡候処に不合成由にて、最早取付可申様も無之候故、不及是非罷帰り右何某を呼に被遣候て、三度迄何卒と存候へ共不成候由被申渡候へば、右の者殊の外せき候て、偕々無是非仕合にて候、私事常憲院様御時分被召出候節、達て御断申上候処、子孫迄相続可被仰付由にて候故無是非御請申上候、然処に只今跡目御絶し被成との儀、御法の事に候へば不及是非候とて座を起ち申様子、顔色慥に自滅も可仕体に兵庫見請被申候、いつも支配中被參候時分は送り立不申候へども、わざと送り候て又呼返し申候へば、右の者不存寄事にて驚き候て立帰申候、其時近く寄候て兵庫被申候は、御自分様子殊の外せき被申体に見へ申候、尤至極の事にて候、去乍此度は何共可致様無之候、然共此儀は手前一生心に懸罷在候、又時節も可有之候神八幡捨置は不申候間頼母敷存候て時節を待可申候、若万一の事抔候へば、即時に断絶の事に候、必短慮有間敷由被申候へば、右の者落涙に及び罷帰り候、直に養子の親の処へ立寄候て、右の段々申聞せられ不及是非事と可存候、最早手前存生無益の事に候間罷帰自害仕候、暇乞に候間酒出し候へと酒を乞申候処、亭主成程承届申候とて酒を出し盃事致し、其後近く寄候ていかゞ思案にて自害いたし候哉承度被申候へば、別に仔細は無之候、足腰も立不申時分養子も致候て助り可申候との事にて候、其儀不成御法にて候へば、左様に見苦敷成不申内に自害して埒明可申事にて候、亭主承り候て成程聞へ申候、去共不忠不孝と可申候、其仔細は子孫相続可被仰付との上意も重く、親の名跡も重き事に候、然ば此上は何卒時節をも相待候て、上の御言葉も立、名跡も絶不申様に随分心を尽し申筈にて候、然る処に支配衆も時節も可有之候間相待候へと被申候上を自害いたし、端的に跡をつぶし申儀無分別と可申由委細為申聞候へば、右の者合点いたし候て、手前せき候てあやまり申候、自害存とまり可申候、存とまると申候ては最早氣遣致間敷由申候て罷帰候、偕て右の被召出候時分の首尾此度再三願候へ共、井上殿取上無之委細紙面調候て久世殿へ持參、用人に逢候て何の何某と申者にて候、終に御玄関へも罷越不申処に、奉願候事有之參候由にて右の書付渡候処、用人一覽致し成程承置申候、去共御支配兵庫殿へ被仰入、兵庫殿より此方へ被仰候様に可被成由申候て書附返し候へば、右の者申候は、成程御尤に存候、其段はとくに私も了簡いたし候

へども、兵庫殿三度迄井上殿へ被申入不罷成事に相極り候、只今其上を兵庫へ申候ては、中々請取被申事にて無之候、是は私無分別にて大和守殿御人柄を見請候て駆込同事の存念にて候間、兎角被入御覽候へば念願相叶申候、其上不相成事は不及是非候由申候処、用人承届申由申候て、早速大和守殿へ参候て為見申候、一兩日過候て、右の者又大和守殿へ参り候て、右の用人に逢候て様子尋候へば、早速大和守殿へ為見申候、大和守申渡候は、定めて重て御出候て様子御尋可有之候間、大和守請取候由申渡候と可申旨に候間、左様御心得候へと用人申候、右の者偕々本望先相叶申候、此儀大和守殿へ御耳に立置度と存候処、慥に書附御請取被成との御一言にて先致安堵候由申候て罷帰り申候、大和守殿は此儀始終不同心にて候へ共、井上殿第一被申上候て新座者の養子相叶不申候、常憲院様御時分被召出候人人には役者多く候故、第一是を御沙汰被成度との儀より事起り、実子無之者断絶致し候へば次第に減じ申積りと聞へ申候、乍去是にて断絶の者多く候ては、妻水流浪不便成事に存候、且又只今存生の風を敗り候てよろしからぬ儀と存候、夫故大和守殿は右の願書附など、其外にも請込置被申、時節を以相続候様に猶願可申と被存候体に御座候、其故此度の死去さやうの者どもは、別て力を落し申候。

備後国甲奴(カツヌ)郡有田村百姓名主甚三郎、庄屋一郎右衛門、並孝子又右衛門事

備後に御貢料六十余ヶ村有之候、風俗桀黠成と見へ、御代官の非を訴へ、毎度公事をいたし申候、其上御年貢をも毎度疎略にいたし候て難治処の由にて候、然処に右六十村の中に  
有田村一村ばかり終に公事不申出、毎歳御年貢をも随分理直に致申候、只今迄不思議の事に申候へ共、いかゞの仔細と申儀誰申人も無之候、先日萩原源左衛門御勘定御吟味役に帰役被仰付候以後、一夕逢候て直に承申候、上の御盛徳の事奉感申候、帰役被仰付三四度御前へ被召出、直に勤方の儀杯委細被仰渡一々驚申儀共候へ共、是は他言不成事にて候、其外同役中へ一統に被仰出儀は別て秘し申儀にても無之、其上外様の衆へも為聞置申度事も有之候、先日御直に御意被成候は、御代を御取被成候て以後、悪の儀のみ御耳に立、終に孝子又は志正く行宜しき者有之と申儀、一度も御耳に立不申候、是は何も法度を第一にいたし法に背き申者有之候へば、其後致吟味申上候、行よろしき者などは法にかゝらぬ儀に候故、承候ても耳にとめ不申物と被思召候、上の思召は左様にて無之、悪人吟味よりはよき人を御吟味被成度候いづれも役儀品もおほく候へども、向後は郡国民どもの中人柄よき者の儀随分心懸け承出し、御恩賞行はれ候様に可仕由被仰渡候故、夫より吟味致し候へば、  
右有田村の事出申候、右有田村名主甚三郎と申者常に申候は、御代官悪敷候ても、公儀へ対し民として疎略の儀仕管にて無之候、手前作り申高は勿論の儀、此一ヶ村少にても年貢延引仕候敷、又は上へ対し慮外成所存候は、手前どこまでも申出候て赦し申間敷候由申候、近頃も右六十村の名主共申合、上へ訴申儀有之候へ共、有田村計同心不仕故、残の村も難儀に付、右名主共甚三郎宅へ罷越惣様同心致し候事を、此村一ヶ所同心不致候事不届千萬の事也、此村も百姓中同心の者も候へ共、其方申渡故色々にて同心無之候間、其方同心無之候は、惣様の者推込候て意趣を致し可申由申候、甚三郎自若として罷在候、多勢に無勢に候へば如何様にも可仕候、いきの有内は同心仕事は不罷成由申候、其後にも六十人計甚三郎宅外へ罷越、是へ出候へと悪口いたし候へ共、甚三郎取合不申外へ罷出、右相手には不罷成候間、是へおし込候て手前一人の儀に候間如何様共致し候へとて、其後は一言も不申候、さすが殺申儀も不罷成候て、思ひのまゝに乱暴いたし罷帰り候由、其手下の百姓に又右衛門と申者、継母に至て孝の者にて候、わづか高六七石程の作り百姓に候処、朝夕母には美膳を備へ、三百六十日朝夕自身に配膳致し、其食の余有之候へば、母に請候て母前にて頂戴いたし、さて妻子にもたべさせ申候、近郷の百姓共常に親に孝をいたさば、有田村の又右衛門を手本に致せと申習候由、此度委細言上の由、定て御恩賞可被行と奉存

候、珍敷儀に奉存候、右又右衛門至孝の感に候哉、毎度隣の田迄は早損有之候へ共、わづか五六石の高の田地終に早損無之候由、早損多き処と相見へ申候、右二件感心に存候故、御慰みに申進候(六月廿八日賜書)。

480◆一 廿日御仏殿御建立不被遊、万年後御自身にも御牌銘計り被残置、御靈屋は被遊間敷御覚悟に候、然上は上野増上寺にては各御一廟にて被指置由、上野御門主へは戸田山城守殿を以被仰進候、増上寺僧正は御城へ被為召候て被仰渡候、其故廿日御位牌は八日の御仏殿へ被收置候、此度御法事にも例年は上野にて万部被仰付候へども、増上寺にては千部被仰付候処、増上寺千部可被指止由被仰出候、此後上野の万部も有之間敷由申候、此被仰出の前に上野慈眼大師の堂頽破に付、修復の儀御門主より御願に候へば、何れも明申候堂へ收置可申旨被仰出候由、御門主より重て御願も有之様に申候処、此度御仏殿の事被仰出候に付、沙汰にも及不申候、諸寺とも向後堂塔建立候はば、焼失前に分に可仕旨御制禁にて候故寺に衰微の由申候、乍恐御尤成御儀に奉存候間、間部越前守殿も死去忌明候て、此間家督無相違下総守殿へ被仰付候、村上は被召上越前の鯖江へ所替にて候、御家中は難儀可仕候へ共、無相違被仰付難有仕合の由中候、頃日被仰出未々同心体の者迄も、御政務の事言上の事有之候はば可申上候、御奉公と可被思召旨に御座由慥成事と申候、然共私へは會て御触も無之候、上の思召は右の通に候得共、中にて滞申と見へ申候、暫く滞共上に右の思召にさへ候はば、追て相知れ可申と奉存候、期様の儀終に不承候儀と奉存候、何卒風俗も改り、未々迄御仁沢を蒙り候様にと奉願候儀に御座候、比日又寛平太夫と申人、只今迄御目付に五百石取被申候、此度御勘定頭被仰付「勘定頭は寺社奉行、町奉行、三奉行と申候て江戸にてはおもき御役儀と申候」此人平生至極朴実成人にて材智の沙汰は無之候、諸人不存寄事と申候、五百石の御加増にて千石に成申候、兎角被用人も質直成人を御好の体に御座候、是も結構成事に奉存候。

小瀬復庵書、新井殿へ申候、上野の事、其砌大猷院様御草創の地に候へば、外の御廟はたとひ外へ御遷被成候共、大か小か大院様廟は別に可有之候、清水にて申候へば、坂上田村丸にて候、先比上野へ被仰渡有之、則日光宮様より被仰進候は御再興被成間敷旨當時御指止の儀御尤候、惣て上野、日光、叡由等莫大の寺領被下置候、是を以年々造営料被指除候はば、近年の内小分にも御廟御自力を以何卒可被成候、公儀より御手伝會て入不申様に可被仰付由御答の由、近比御殊勝成御事に候、夫故か焼残候二天門取仏申筈に候処、先其分に成有之候、是は宮様御願の筋有之故かとも申候。

劣甥小池源太左衛門水戸史館に罷成候由御聞被成候、此前藤田内蔵亮殿系譜も彼史館へ御頼相知申候間、幸源太左衛門へ申候て佐々木氏前代の事跡、及は貴家本並本田氏の儀委細御聞被成度御紙上奉得其意候、先頃私も氣付候て、佐々木氏先年吟味候て相知不申儀ども承に遣度儀と存候へ共、多事取紛其上只今老衰記憶一円無之、先年佐々木系譜の内相知不申候処、何にてもすきと失念仕候、只今史館西山様時分とは各別に罷成、第一其時分の宿儒すきと死果申候、只今は当代風の男共にて候日夜酒色に耽り、史館の職も修り不申体に御座候、中々藤田殿系譜の事御尋被成候時分とは遠申候、私甥を先といたし記録等の事不案内御座候、こゝに一人有之候安積覚兵衛と申候は、西山様時分より史館の総裁にて、只今に残申候者此人計にて、随分必学に博明、其上記録等の事に心入深き人に御座候、夫故如此覚候て居申候、此人老夫を一兩年以前より信向致し不絶書通致申候、此度讃岐守殿を以て西山公へ被仰付候大日本史出来候由、上聞に達候間、可致献上旨被仰出、彼御家急に吟味被仰付、昼夜劣甥とも此儀に取懸り申候、夫に付本紀列伝はすきと出来候へ共、論贊いまだ加り不申に付、近き比御逝去被成候中納言様諡を肅公と申候、西由様をば義公と申候、肅公より有右安積氏へ論贊被仰付、段々論撰いたし懸り申内、急に献上の筈に罷成候故、昼夜取懸り論贊著し申候、毎伝に論贊を加候故数百篇に及び申候、私事など文辞の



事多年意を用申候様に安積承及候て、去々年か当地へ一寸罷越候時分、知人に成候故、いやとも難申請合申候へば、其後水戸より段々指越候て老夫駁語を請申候殊の外得益候由申候て悦び申候、私もふと請合候て殊の外心労致し申候、夫故私方より頼候事不精には不仕筈に御座候、この者方へ佐々木家事など尋に遣可申候、十に一ツも知れ申儀に候へば珍重に奉存候、かさねて佐々木家譜の内富士川合戦の事などその外知不申儀、御書き出し候て被遣候様兵庫殿へ可被仰候、ふじ川の事もいつ時分の事にて候哉覺え不申候、すきと只今失念致し申し候、その外叡山にて自殺の事など如何の儀に候哉知不申かと覺え申候、すべて是等の儀ども委細に御書抜可被遣候へば間に可遣候、その時分青地、本多両家の儀も御不審の事ども一ツ御書に被成可被遣候、随分精力ある人にてすこしも疎略は無之人にて候間、私方より頼遣申候はば成次第は申越にて可有之と奉存候、安積只今はあなた御家にて小性頭と申候て、おとなしき役儀勤め、史館のことは撰ひ不申候へども、博学宿儒にて候故、肅公より右論贊被仰付候由に御座候、論贊も当夏迄に不残仕廻申候て清書も相済申候、追付水戸様より献上被成筈にて候、三百巻計有之候と相見申候、神武より南朝滅申迄にて御座候、義公元来日本史御編集の御本意、大友皇子を帝統の数に入れ、神功皇后は帝統の内より差除、是は皇后の伝に被入南期を正統に致し、南朝滅候て以後より北朝を御用被成候、是等名分を正し、千古の誤を御改可被成との思召にて候、先は御尤成事に候、然ば此度の日本史日本の正史と奉存候、文辞はいかが余り能は有間敷候、大分の儀に候故、史館の学者ども大勢にて請取著候ては、覚兵衛並の総裁とも筆削いたし相究申にて御座候、文辞の善悪はともかくも、事跡は義公威勢にて、日本の神社初め公家武家の記録、多年御搜索御編集の事に候へば、随分慥成事と聞へ申候、本紀と列伝にて世家は無之候、帝紀の外は悉く列伝に致したるものにて候、前漢書の格にて候、肅公の時に至り義公の御志御継ぎ候て、南朝以後豊臣氏迄の事跡を御編集被成度と思召に付、右安積など御相談候て其用意にて御座候、先夫より前に右の日本史に、地理志、天文志、職官志等著し附申筈に候得共、是もいまだ出来不申候、中々埒明申間敷様に候、先此度は帝紀列伝論贊ともに出来候分献上に成申候、三浦源八郎拙者も知人にて候、多年御城附にて世上風の男にては中々埒明申間敷奉存候とかく右安積に過たる人は無之候間、いつにても御問目条々書に被成可被遣候。

484◆一 公家衆も当月十八日帰京にて候、追付御法事に付段々公家衆又参向候由申候、青蓮院御門主杯御下り被成候由に候、此度奈良大乗院、一乗院両御門主一度に御下り被成候、御使者を以寺社奉行土井伊豫守殿へ被仰候は、両御門主被仰合被仰入度事有之候、其日御門主御出合被成候間、其間伊豫守御旅館へ可罷越候、若公儀御用繁難参候はゞ豫州宅へ両御門主御越可被成と申来候、伊豫守殿下にて返答難成に付、御内意伺候処へあなたへ可被参と被仰出候に付、伊豫守殿被申上候は、左候はゞ私一人にてはいかゞに奉存候間、今一人同道仕度旨被申候、成程尤に被思召候由にて、酒井修理殿を被仰付、兩人被参候処別事にて無之候、南都興福寺の事上代より大伽藍にて候処、先年焼失致候事嘆かはしく被思召候、御建立候様にと御額被成候、両御門主計にても無之候、則天氣をも被経候処に、此度江戸へ罷越候はゞ右願可申旨叡慮にて候間、達て御願被成候条此段可申達遠旨に御座候、兩人の衆とかく老中へ可申聞旨被申候て、右の趣老中迄被相達候、則御内意を被得と見へ申候、兩人の衆御門主御旅館へ参り被申候は、御願の趣老中共に為申聞候処に、只今時節柄寺社建立の事言上難仕候間、左様御心得被遊候様にとの事にて、両御門主も御困被成空敷御帰被遊候由に候、天氣と申興福寺の儀に候へ共如此に候得ば、此以後寺社は年々頽破に及び可申候。

485◆一 当地何れの御町にか、新右衛門と申者御法度の場に遊女を抱置、然処に浦賀にて邑人久右衛門と申者、右の女を盗出し江戸へ召連参候て、新右衛門逢候て右盗出し申由



有様に申候、其上に七右の女を呉候様にと望申候、新右衛門中々合点不致、浦賀へ預置申者へも不申候て盗出し、其上にて無理に所望致候事沙汰の限りの由申候、金子杯出し可申と申し候へ共、中々少分の事にては合点不致候、其内右の女町奉行所中山出雲守番所へかけ込申候、下奉行の者様子尋候処に有様に申候、偕申候は、当地は御法度にて候へば居住難仕候、浦賀へ帰り候事も右盗出し候首尾にへば難成候間、御慈悲に新右衛門へ被仰付候て、久右衛門へとらせ候様に被成可被下由申候、出雲守聞被申、早速右新右衛門、久右衛門共呼出し相尋られ候へば、女申通に相違無之候、先久右衛門事人盗に候へば第一の罪人にて候、新右衛門儀も御法度違背候て町に指置申候、尤御詮談候時分は鎌倉へ遣候へども、最前御法度を背候ものにて候へば是も罪人にて候、三人共籠舎被申付候其上にて罪名を付上げ言上にて候、斯様の者言上の時分は先下にて僉議の上罪科の品を付候て言上仕事にて候、定て久右衛門事第一罪重く候へば流罪とか、新右衛門事追放杯申儀にて有可之候、其科付けはしかと不承候、然処に被仰出候は、是は町奉行共さばき違申由、第一の罪は新右衛門にて候、法度を背候て遊女を指質申事、急度遠島可申付候、右の女は久右衛門にとらせ可申候御構ひ無之候、向後も御法度を背候て指置候遊女は何程も盗ませ可申候、盗徳に可被成由被仰出候由、何れも存の外成事の様に申候、是にては此以後隠候て遊女指置申者無之筈にて候、御尤成儀と皆々申候、又牛込円福寺と申法華寺談議はやり群集致申候、念仏宗を殊の外譏り申候間、一日浄土宗参り候て宗論いたし争鬭有之由に候、左様の意趣有之者の所為に候哉、江戸中十四五ヶ所張紙致申候、同筆にて同紙の由に候、牛込円福寺公儀を調伏仕候由書付申候者、所々より町奉行所へ指上申候、則言上に及び候へば、御笑被遊、斯様の事取上候事にては無之候、何程も調伏致させ可申候、御構ひ無之候、但此後斯様の落紙等有之候はゞ公儀へ断に不及、見付決弟に其所の者へぎ候て捨可申候、張申を見付候て其者をとらへ可申由被仰出候、古の良吏日本の板倉周防守股杯さばきの風に似申候、御頓知被成候儀と奉恐察候、是等の事ひたと承候へども忘申候、只今存知の分書付に進候(九月二十四日賜書)。

486 ◆ 一、(ご)や申進候、備後有田村孝子名違申候、又右衛門と申候、名主甚三郎庄屋市郎左衛門と申候、右参人の儀備後御代官飯塚孫四郎より言上の処へ、弥隣合の沙汰も承合可申旨被仰出候に付、其辺の公領私領の名主、庄屋共へ尋可申旨にて、安芸の御領分よりも書付出し申候、其外数十通に及び申候処、いづれも異論無之候、右紙面共の内別て感申候は、甚三郎、市郎左衛門常々御年貢毛頭如在不仕候、残り六十村公領の名主共年貢疎略に致し、色々偽を構へ御代官を欺中候処に、甚三郎少も同心不仕候故各申合、右甚三郎、市郎左衛門を打果し可申由にて大勢押よせ申時分、甚三郎申候は、公儀を敬ひ御年貢等理直に致し候事不届とて、各の手にかゝり申事此身の本望にて候、早速某が首を取て参り候へと申候て、少も敵対も不仕候、安然として罷在候、さすが右悪党人ども恥かしく存候哉、仇を不得仕候て罷歸候由申候、此事いづれの書付にも書載申候、昔の義士の覚悟にも恥かしからぬ事と存候、不学の土民に斯様の心底有之事、兎角生質の美と申ものは格別と存候、又右衛門米五六石程も高作り申百姓にて貧窮に候へども、継母には相応に朝夕の膳美を尽し申候、朝夕自身に配膳致し、其余をば母前にて頂戴致し候て、妻子ともに次の間にて被下候、天の加護にて候哉、隣の田地迄は度々早損等有之候へ共、又右衛門田地は毎の如く出来候故、近郷にも不思議成事に沙汰いたし申候由に候、奥州にも一人此類の者注進有之候、是によつて御褒美の事御僉議有之候、先年駿河孝子五郎右衛門に常憲院様御代御恩賞被仰付、代々高何程やらん作りと申儀に御座候、是等は御同心に不忠召候、右の者共行跡元来人だる者可仕事にて不珍儀にへば、只今風俗悪敷候て外に無之候故御褒美被成候事にて候、畢竟は人に如此に罷成候様と被思召ての事にて候処に、右五郎右衛門ごとくに代々作り取と有之候ては、大勢出来候時分あまねく左様に難被仰付候、名主庄屋又は其在所に

て高も大分有之、頭立たる者に候はゞ、名字被下並刀御免被成、白銀何程も被下候てよく被思召候、若し又右衛門ごとき百姓に候はゞ、白銀三十枚計被下、是は脇差を御免可被成候、此格に心得申様にとの事と申候、先日其方にて此咄にていづれも奉感候由、私乍推参申候は、結構成御事不及申候、但百姓よりは第一江戸御旗本御家人の中を御僉議被仰付、御賞罰候て群臣の風俗改り候様致度候、其後には国々へも及び候て可然候、定て此儀も何卒御英断有之にて可有之候。

488◆一 奈良興福寺再興の事一乘院、大乘院両門主御願も調不申候事先日申進候かと存候、其後被仰出候は、向後日本諸寺、諸社上より御興立不被成候て不叶堂社仏閣は、上より御再興可有之候、其外は御構被成間敷候、但古き寺社等類破致し申事、寺社の者共難儀にも候はゞ、相對勸化御免可被成候、左候はゞ伝馬杯をも被仰付可被下候、偕其所々に集候金銀等其寺其社へ伝達致し候様、公儀より御下知可被成候間、其段々いかやうにいたし可然哉、評議可仕旨被仰出候由に候、大坂天王寺、京都の大仏様成ものにて可有之と奉存候、類破の時分公儀より被仰付事国家の費にて候、斯様の儀も如何様御手段有之事に聞へ申候、二三年も過候はゞ、御新政も可被仰出と奉存候、何卒風俗改り候様に致度使、当代武士に華麗の弊有之、商売に専利の弊有之候、斯様の儀急度御禁令出候様に仕度候、殊の外御政務に被尺御心候様に聞へ申候、頼母敷被存候、比日林大学頭子息七三郎事講釈委く無之、人柄儒者に不相応に候由にて、御叱被遊候由沙汰致し候、虚実是不存候、虚文をすて、実を御好被遊候と見へ申候、御尤成事に乍恐奉存候、先頃寛平太夫を御勘定頭に被仰候時分御前へ被為召、御直に段々被仰渡候由、平太夫御請に不調法者に候由申候へば、不調法成は少も不苦儀に候由上意の由、是計は承り申候、其外の被仰渡は外に誰も不存候、当地の事各様へ為御知申度如是に候(十月十八日賜書)。

489◆一 御別紙拜見仕候、此度御守殿御凶変の儀、被仰付候通とかく奉絶言語候儀に奉存候、此儀も先書に申上候、其後橘隆庵に逢候て、其節御守殿へ談被申候様子相尋候処、前月十九日の早朝戸田由城守殿より奉書到来、早速御守殿へ罷越可奉伺旨上意に候、早々参上可仕旨に候処、共儘参上仕候処、御医師女中衆御交りに七八人口を揃へ候て被申候は、御持病の肝癩度々指込申候、此度も御持病と見へ申候、夜前はつよく候へども今朝は少御快被成御座、御粥も十何匁とやらん被召上候由取々被申候、内々はやゝと引立候、御前へ罷出申候、斯様の上々様御前へ始て罷出候時分御挨拶は無之候、御言葉なしにて御熨斗を御取被成下、其後御手を被出候て御脈伺申儀に候、左候へば、此度も御言葉は無之筈に候故、不審とも不奉存候て御容体を伺候処に、御目をばすきとふさがれ御寄懸り被成、右の御日が引つけ被成候て、ちよと見候へば隆庵への御挨拶に御笑ひ被成候かと奉存候、偕御脈と申上候へば、御手を御出し被成候様奉伺候処、火の如く御熱氣にて候、御脈は鉄砲の如く強く急にて候、隆庵被申候、左候へば至極の御熱と覚へ申候、御腹をと願候へば、女中衆など寄候て少御衣服をくつろげ申候、中々とく被伺申儀にては無之候、少手を添へ候て奉伺候処、右の御脇より柱の如く指込有之候、御左も其通にて候、初中後御目はあき不申候、其より罷出直に登城候処、上様にも御待被成いかゞ致候哉と御尋被成候、隆庵も其外医師中同意、御肝癩の熱と奉存候故其段申上、大方御当分の儀にて可有之奉存候、段々御熱氣退候て御快可有之哉と申上候由に候、又参候様に上意に候故罷越候処、先劍の通少もさめ不申候、其時分若狭守様被仰候は、とかく養安院御薬数服被召上候へ共替儀無之候間、隆庵薬指上候様御意に御座候、其より前に養安院も隆庵へ御薬の事被申候得共、大事の御病気の事御自分申分にて、中々成申儀にて無之由堅申由にて候、右の通り若狭守様被仰候故、其節も此儀は御意は重く候へども、御意計にても難仕由申事候へば重て被仰候は、其方を上より御附被遊候は左様の為と申候、無左候ては何の為に可被遣哉、早速御薬可上候由の御意候故、隆庵申候は、一々御尤の御意に奉存候、此上は如何様其仰次第に

可仕候旨申上候て御薬調合、人參一分とやらん加へ候て上之申候、此薬の外に相応と見へ候て、御目を始て御明き被成候て、隆庵と御言葉被懸候、去ども前朝のまゝにて御食氣無之候、御薬も中々いなみ被成るくに不被召上候故、隆庵申候は、何卒御薬被名上様奉願候由申候へば、薬と御意にて候、銀の御茶碗の小さきに少上候を、ちよと御吸被遊迄の事にて候へども、兎角強くも不被申候故、又申上候は、とても儀に御粥を少被召上候様にと申上候へば、女中衆杯も御粥を被召上候を、隆庵奉見候て、上様へも申上候はゞ、御安堵可被遊候間、少上り候様にといろ／＼申上候へば、かゆと被仰候故、おも湯の少こき様成を上候へば一口被召上、其より登城候て御様子申上候、其時分夜半前にも可有之由、其より前に段々御快候由注進有之候て御聞被遊候、隆庵罷出候へば、宜候て一段の儀に候由被仰候故、隆庵申上候は、先少御快方に候へども、至極と申上候へば段々御快を奉見ながら左様に申候事洪き生付と被仰候故、態と大事に奉存候計にて上候ては無之候、心底に請合不申処有之候故申上候由申候へば、暫く御了簡の体にて、兎角罷越候て附候て居可申候旨御意にて候故、奉畏候由申上候て罷出候へば、大音にて御呼返し被成、薬事不及言儀ながら外の医師などへも談候様にと御意に候故、奉畏由申候て又罷越候へば暁天に罷成申候、偕又御脉など奉伺候処に少も御快御様子には無之候、御熱同事に御座候、其上隆庵能帰り候以後御薬一度も不被召上候由に候、隆庵達て御断申上、外の医師へ御薬上候様にと願申候、先呼に被遣可然由にて齋藤長八郎へ申談候へども、中々埒明兼申氣の毒にて、其内岡道漢杯も参候て伺申候、道漢杯軽く申候由申候、とかく道漢能可有之由にて、其より道漢薬に罷成申候、去ども申談候て、煎湯の外に独参湯を上申候由に候、其より何の替申儀も無之、夜に入候て段々彼は申うち御指つまり被成候、無是非事にて候とて物語にて候、其後日数経候て御黒書院へ井上河内守殿、戸田山城守殿杯御出、医師中被召出委細御僉議被成候、惣て不残御灸熱故にて有之間敷候、御持病の肝癩にて御さしつまり被遊候由御請にて候、御前より降庵を御呼出し被成惣医の申様ども御聞被成候、御灸熱故の様に申候得ば、迷惑仕者も出来候てむづかしき事と被存候故か、御老申初として惣医の申様同心にて候、又惣医も右御老中の存意を合点なく、とかく御持病と申候、偕降庵はいかゞと御老中御申候故、隆庵申候は、無論御灸熱にては有之間敷候へども、御灸不被遊候はゞ余の事にて指出可申候、然ば御灸にてさそひ申にて可有之候、肝癩と申儀に候へども、私は左様に不奉存候、肝癩にて急に指詰り申物にては無之、腎積と申物は急に指詰り申物にて候、此度つかへも腎積たるべく候、御灸ばかりにては無之候へども、御灸もよろしきにては無之候、是程に申置候へば、惣医の中に小兒の驚風の類に候由申有之、老中何も尤と有之儀にて其段被申上、先無事に相濟申候、十五日以前御氣分御勝れ不被遊候処に、十五日には御庭へ御出被遊御氣分御快候、夫より前御経行不順にて御灸御延引被遊候故、第一御氣分も御勝れ不被遊由女中衆被申、十五日御快を幸に十六日に御灸被遊候由に候、御灸も御脊腰脇とやらん申候、左候へば隆庵被申通に御腎積を動し申かとも被存候、此度中村玄は御灸能有之間敷候由申候処に、女中衆第一梅津指図にて被遊候由に候、医師などへは隠し候て御内所にて被遊候様にいたしたりと申候、其故此度梅津さんぐの様子にて尼と成候由申候、尼に成候ては濟不申儀に存候、姫君様御兄尾張様も御急死にて候、是は女中局へ御越被成候処、其女中衆局の庭に覆盆子有之候を取候て進申候へば、風味宜由にて被召上処、其覆盆子にて食傷被成御逝去の由にて候、然処右の女中致書置自滅致し申候、書置には、私事ふと乱心いたし自害仕候由に候、此咄を此度御病中に御守殿にて梅津板花檢校に被申候由に候、御快氣の様に被存候て、若変も候へば、其身も覺悟の事に候処にと申儀にて被申哉、左候はゞ此度いかゞと奉存候、右尾張の女中はいさぎよき事と存候、よき手本と存候、不入儀に候へども此度の儀当地の沙汰御聞被成度由被仰候故承申体に申上候、長公並源左衛門殿杯小寺杯もそつと御見せ被成候て、其後火中被成可被下候、斯様の儀申進候

時分も必小谷殿をも書加へ候処に、事闕候様に被存儲々残念に奉存候、老境一ツの楽なく成事にて候、頓て同じ道に可罷成候、以上(十月廿九日賜札幹書)。

493◆一 安積寛兵衛儀当代にてよき儒者にて御座候、中々当地杯には無之候、其上史学に殊の外多識にて候、二十一史など何も慥に覚候て居被申候、拙者も益友と存候、別て申通候儀に御座候。第一無我成生質にて人の善に服申事天性難及処有之、此度論費の中杯ひたと往復致し、愚案を尋候て、愚按千慮の一得候へば、早速服し候て殊の外得益候由にてよろこび被申越候、さすがと感じ申儀に御座候、其内此方存誤候事は又急度申越候故、此方の益に罷成申候、先日も安倍仲磨事日本より渡唐いたし、羈旅の臣を以大唐の歴々の詩人英材どもと交遊いたし名譽を施し候事、論贊の中にも少も褒称の詞無之故いかゞ上申道候処、安積申越候は、仲磨入唐して異朝の官爵を請け、唐に臣たる事不義の人と申物に御座候、斯様の人大義におみて関申事有之候処、材を以称美致し候故、我朝にて古来仲磨が罪を不存候、名教の罪人と可申由に御座候、是にて拙者も初て合点いたし、只今迄氣付不申事に存候、斯様の所學術大筋正しく御座候、其故此度論贊一ツも議論正しからぬ事は見へ不申候、只勝れて菊数寄にて当任菊の栽植にかゝり居申候、是はいかゞに候へども其外の儀は赦し不申候て成不申候、此度論贊相談の事安積が内所にて拙者へ相談と存候趣、下間を恥ぬ心底を感入候て、随分不殘心底を遣候、去年より一年余りの事にて御座候、此度論贊出来に付、大日本史二百五十卷水戸侯より御献上成候処に、上にも内々御望に思召候物を献上候事御満足被遊候に付、即日有馬兵庫殿為上使被遣候、首尾残処由にて水戸侯御大慶、劣甥始め史館の役人不殘御祝儀など被下候、然る処拙者論贊の事相談頗勞心力候由、役人中迄安積内々にて申達候処、水戸侯にも内々に御開聞被成御満足の由にて、安積より水戸出産の品など大分給候、態々水戸侯より表立候ては御付届無之故、安積より申達候由不存寄事と存候、かやうの儀も安積有様成生付にて、人の善を我致し候様掩候事仕間敷と存候故と見へ申候、よほど生付も能見へ申族、今度大日本史の序、当水戸殿御代作を安積被仰付候て書申候、其節急に候故、先達て拙者へ草稿をば相談いたさず残念至極など申越候、跡に成候へども向後の為に候間、見候て呉候様先日越申候、大方より調申候、其内少々愚見候処申遣候、未返事は無之候(十一月廿九日 賜書)。

尚以当地折節雨降にて不絶しめり有之候、風も吹不申今日迄随分静に御座候、何とやらん天氣も各別に罷成候様見へ申候、とかく泰平のくせにて段々驕至極に候故、天氣も高ぶり風高に候処、御当代御儉素古今に不承候程の事に候故、天氣も改り申候と奉存候、水戸侯も比日御半元服被仰出、当十五日御祝にて候、只今迄駒込御屋敷に御座候処、先日小石川御作事出来御移徒被成候、御弱齡に候処、当代めづらしき御秀発にて江戸一統ほめ申事に候、上にも殊の外御懇意に見へ申候、先日有馬兵庫殿、加納遠江殿御加増として金子五百両宛被下候由、御加増にて候へば毎歳の事と聞へ申候、其時分被仰渡候は、御前代は藩邸より御知行直に御合被遊候故、潜邸の臣へ御加増被仰付候、御当代は最前の御領知御取不被成候故、紀州より被付候臣下へ可被下知行無之に付、金子にて被下由被仰渡候由申候、是も珍らしき儀と存候、とかく紀州よりの御家来、御前代よりの直参へ驕り不申様にと常々御心遣と承候間、是も左様の思召と奉存候、其外何角承合申候処常の御事にては無之候、偏に無之中正成筋を御合点被成候様に仕度候、御学問御好み沙汰は曾て不承候、林大学頭いかゞの儀を申上候哉、大方は御推察被遊候て可有之候へども、是も累代の儒家に候故、御用に罷成候て可有之奉存候、以上(同書)。

495◆一 先日御城中女中衆御前代より大分有之候処、容色よき女中をゑらび候て不殘申上候様にとの事に候故、定て御あたり可申敷とて、容色有之候女中の父母等殊の外悦び候て、前に祝などいたし候由慥成事にて候、五十人余名を記し候て申上候時に、此分御いとま被下候、容色見にくき女は人の

妻にも望申間敷候へば、御暇被下候はゞ難儀におよび可申候間、容儀悪敷分は其儘可被召仕由に候、斯様の儀終に不承候と奉存候、古代たま〜有之候へば盛徳の事として申伝候、此度松姫君様附の女中へも金子千両被下候、其内当地に宿無之女中三人有之候、其儀御聞及び被遊御城にて可被召仕由にて被召出候、御慈悲とて何れも申伝候、此事新井氏とも申候て御仁慮と申候へば、何角異論有之候、程子の言に候哉、君子は人の有過の中にて無過を求る由有之候、況や無過の中に有過を求る事心の公ならぬと申物に候歟の事、「此外有数条可觀小説の内に記之」右御慰に書付進申候、拙者只今各様知己の恩に報じ可申様無之、斯様の事申進候儀、其御地にて折節得貴意候時と同事に存候故、無益の儀ながら自分におもしろく存候事は申入度存候て如此に候、小寺殿、成田殿、兵庫殿などへも御見せ可被成候、紙面の外人に見せがたき事もまじり候間、其御心得被成可被下候、以上（十一月廿九日 賜奥村子復斎賢札幹書）。

兼山秘策 第四冊終

起享保六年至七年

497◆一 当月十二日暮時、石川近江守より御奉書参り、明十四日四ツ時御城へ可罷出旨申来候、御請紙面調進候、斯様の時分追付奉書の御方の宅まで参候て奉畏候旨申上筈に候故、夜中近江守殿宅まで参候処、用人を以明四日四ツ時とは候へども四ツ前罷出可然候、衣服は服紗麻上下にて候得共、万一人可申推量候間、熨斗目は狭箱に入持参可申旨御申渡候。

497◆一 翌十四日五ツ時登城候処に、木下平三郎、服部藤九郎、土肥源四郎段々罷出候、四人揃候以後御目付を以近江守殿へ御案内申入候、躑躅間に四人共にたまり候て、脇へちり申間敷候旨御申渡にて候故、四ツ時より八ツ時まで相待申候、其日は寒気つよく老身別て難儀いたし候、近江守殿御氣付被仰候て、御台所へ参候て罷在候様にとの事にて御料理被下候、酒など少被下候へば少し寒気を凌ぎ申候、追付奥へ参候様にとの事にて斗圭ノ間迄は渡辺外記「是は御側衆戸田肥前守殿の兄にて候、肥前守殿は戸田家へ養子にて候」同道被致、夫より末は御目付衆も御入申儀不罷成候、近江守殿御出御迎候て、夫より近江守御連にて御廊下伝ひ幾間も参り申候、御座の間次に暫くたまり、脇刺取候て罷在候内に、近江守殿御出四書の内いづれなりとも一二章講じ可申候、はやく埒候様短く講じ可申旨にて、私は不案内と被思召候哉、近江守殿必長く申間敷候、大義さへ聞へ候へばよく候間其心得可仕旨御申候、扱何を講じ申候哉はやく上候様にとの事、殊の外調子急迫成事にて候、不取敢論語学而篇首章前一段を平三郎、朋自遠方来と人不知云々の二段を新助、余の兩人は其すへいづれの章成とも短きをと有之候て、有子信近於義の章を藤九郎、君子食無求飽の章を源四郎と相究書付候て指上申候、追付近江守殿御書講積前、於御座之間御目見可被仰付候間、左様に心得可申はやく参り候へとて罷出候、御座の間杉戸の内近江守殿着座、杉戸の外に御側衆三人「戸田肥前守、有馬兵庫、加納遠江守」伺候にて候、其脇の間に御小性衆、御小納戸衆伺候にて候、平三郎より一人宛罷出候へば、近江守殿名を御名のり御目見致し候、上様には御上段の際に御成被成候一人宛御目見致し、直に御目通に着座いたし申候、上様との間二間ほども御敷居にて隔て、殊の外近き事にて御座候、四人着座両手を突罷在時、近江守殿四人の者御前へ被召出、御目見被仰付難有奉存候旨御礼申上候時、御唯諾の御挨拶有之候、日比諸役人中ものを申上候事、老中よりは心易き由物語にて候、成程左様に被存候、さて大音声にて高倉屋敷聴衆の多少御尋被遊候、近江守殿脇よりたへず聴衆有之候由御請にて有之候へども、おしかへし被成平三郎いかほど有之候哉と被仰候時、近江守殿直に申上候へと御申候時、平三郎五六十人ほど有之由申上候処、重て御意は何とぞ聴衆多く有之候様に被遊度被思召候番等勤申者なども隙の時分は罷出承り候様にと被思召事にて候、其方ども講じ様にて又聴衆も多く可有の事にも被思召候間、随分精出し講じ候様にとの御意にて候、四人ともに奉畏の旨申候て平伏致し候時、今日講釈御聞可被成候間、左様に心得候へと被仰候故、近江守殿脇よりはやく立候へと御申の時、四人ともに退出御次の御縁頼まで罷出候処、早平三郎罷出候へとこの事にて、右の着座の処に御見台に論語のり出候て平三郎より段々に四人ともに講じ候て退出いたし候、其後は何の上意も無之候、扱御次へ罷出近江守殿御礼申上候処、御月番井上河内守殿御一人へ御礼に参り可然、若年寄衆三人へ不残参可然旨御申候、三人の内一人は近江守殿にて候、近江守殿殊の外すなを成人に見申候、只急迫にて是に難儀いたし候、御側衆三人へも近江守殿四人を御引合候て御礼申入候、四人とも唯相済申を第一に意得候故、何を講じ可申様も無之候、殊に老夫儀は終に罷出不申候、調子急に候故不取敢問にあはせ申迄にて候、残は常憲院様御代に毎度御座の間へ罷出講釈致し付申候、藤九郎、源四郎は文昭院様御代毎月御

座の間にて講釈致し来候、此辺案内者にて候、老夫事は不案内至極のことにて定て不調法に可有之と奉存候、去ども先大方に仕廻候間御心安被思召可被下候、少調子ゆるやかにて長く講じ申儀罷成候はゞよく可有之候、近江守殿初め無学故、たゞはやく済候て上にも御退届無之様にとの心遣ばかりにて候、何方も同事と奉存候。

499◆一 翌十五日本郷御屋敷へ罷越、佐々木左兵衛殿を以右の御礼宰相様へも御序に被仰上被下候様にと申置候、然処に藤田内藏之助殿御出にて、右の委細紙面に調申上候はゞよく可有之由、老夫も左様に存候へども、結句子細らしくも可有之かと存候よし申候へば、余の事とは違申、老夫事御家出のものに候へば、宰相様にも御聞被遊候はゞ御悦も可被遊事に候間、委細紙上にて申上可然の由御申候、成程御尤至極に候、能御氣を被付被下候由申候て、則御屋敷にて大野木舎人殿への紙面調遣申候、其晩早速御直書被成下、右の事御聞被遊御悦被遊候、且又私紙面に私相応に学文仕候事、御家に御取立にて候へば、此度の儀も御厚恩故と難有奉存候旨申上候処に、鄭重の謝辞御感涙被遊杯結構成御書頂戴仕、是又難有奉存候、各様日頃老夫事御心に被懸被下候故、委細申上度如此御座候、此紙上の事の中にも少し他見難仕事も少々有之候間、各様御覽後火中被成可被下候、以上。

正月十八日

室 新助

奥村源左衛門様

青地藏人様

同藤大夫様

小寺武兵衛様

成田宇兵衛様

佐々木兵庫様

稲垣与三右衛門様

大地彦右衛門様

同新八郎様

亡友小谷伊兵衛殿事存出し申事に候、日ごろ私侍講の儀相待申杯と御申越候事存出し、今更咽悲涙存生に候はゞ嘸悦にて可有之と存候、已上。

500◆一 扱申上候、当月十四日不存寄於御座間御目見被仰付、且又講釈も御直に被仰付候、委細は別紙に書付進申候、誠以難有仕合奉存候、只今まで高倉屋敷の事事体軽く、たとへば誰に成とも儒者に申付候へと有之事かと被存候処、此度の儀にて慥に罷成珍重成事に候と新井氏も被申候、成程左様にても可有之候、其上何とぞ世間にも儒学流行致し候様に被成度被思召候段、御倉に御意承欣幸成事とも可申、此度急度御目見杯被仰付講釈被仰付候も、第一高倉聴衆有之候様に被成度、又は私共油断不仕候様に被成度との思召と奉存候、聖賢の道を御好み被成、御自身に御聞被遊度との御事にては無之様に相見え申候、乍去其段はいまだ難量奉存候、此後の御様子にて相知れ可申候と奉存候。

正月十八日

室 新助

青地藏人様

右一書の内

501◆一 佐々木系譜安積氏へ申遣事前書に申進候、当春の書状到来、又申越候は、右系譜其後致熟覽候処、文辞記事等精密無残所相見え申候、何とぞとても儀に、疑問の事件一事にて相知候様に致し度存候、急には難考出候間三月中までも掛り可申、夫共に考出可仕とは請合がたく候へども、随分考可申旨申越候、其返書先日遣申候、右考の事少もいそぎ不申候間、当秋中までに考給候様にと申越候、安積も疏略は無之体に候間、何卒一両事成とも相知れ候様に致度候、本多の系譜は結句相知れ申事も可有之かと奉存候、佐々木の事実は久しき事に候間難相知可有之存候、比日承候へば、あなたに日本の社寺等の文書書きと御取集、一ツに被成文書纂と申物大分有之候、且又諸家の系図方々御集め、一ツに被成系図纂と申物は又大分有之候、第一老夫申は是にて御座候、彼丸山雲平と申者佐々木助三郎と申、西山様時分の儒臣と同道にて、諸国巡行致し文書を搜索致し申候、其故文書の外に聞書の事も多く有之候由、助三郎はとくに泉客に罷成、只今は右の雲平一人残り申候、是も老人に候故昔の様には有間敷候へども、今以系図等の事は此者にて埒明申事度々有之、重宝成者に候由承り申候、然ば此度の事には天下一の人と奉存候、右雲平諸国巡行の

時越後極寒の時分一宿いたし候て、水風呂に入候へば其まゝ耳聾、夫より大聾に罷成すきと物を承事不相成候、是も相談などの時分は余程の妨と存候、安積への御挨拶の趣も重て書状遣候時分可申達候、其元より被遣候御問目成程よく聞へ候則其儘遣申候、去ども外に私より条子書を調添て遣申候、是は水戸の風あしく候故、万端数多く候へば見落申事有之候、其故是々の儀第一承度候、次には是等も承度と申様に申遣事に御座候、たとへば佐々木系譜の中には藤川戦死などの事第一御考頼申杯と申遣様成儀にて御座候、水戸衆のあいしらいには口伝有之儀に御座候。

502◆一 水戸安積覚兵衛より前月十八日の書状参り候、佐々木系譜其他青地氏等の事件に、前月十三日より水戸史館の事始にて、各寄合申に付丸山雲平へ委細筆談仕候、雲平事大聾にて杜微徐仲車か類にて御座候、筆談にて無之候ては少も不相叶候、然処に十四日は世上の年越、十五十六日は例年相定り史館の休日に候故、十七日又史館へ右の系譜並問目等覚兵衛持参致し、猶又委細致筆談候処、精力の所及随分考索可仕旨雲平申候、覚兵衛も存寄記録ども相考可申旨申来候、然処に同月廿九日の書状又到来、佐々木系譜の事丸山氏前月中旬より取懸り随分吟味いたし候、尤覺書も記録とも致考索候、先只今まで指て考出候事も無之候へども、此以後随分致考索、当月中には大概様子も可申越候、全く相済系譜等返し申儀は三月中に至り可申候間、兼て左様に意得可申旨申来候、此趣にて候へば兩人とも随分心懸考索の体に相聞へ致安堵候、只今系譜等の事は此兩人に過たる人は有間敷と奉存候、就中雲平事は西山中納言殿御代、系譜の事佐々助三郎と申人と兩人請取候て、諸国へも経歴訪問仕候故、耳聞の儀も多く有之候由に御座候、此兩人考候て不相知候へば、無遺憾事に奉存候、右の趣兵庫殿並小寺武兵衛殿へも被仰達可被下候。

503◆一 先日正月十四日侍講の事申進候、定て相達可申と奉存候、其後石川近江守殿まで被仰出、弥講釈承候もの多く有之様被成候間、平三郎始四人とも料簡可申候、其上にて上に御取捨可被成候間、いかゞ致し候て承者多く可有之哉と、平三郎を近江守殿被召寄御尋に御座候、平三郎帰宅候て私共宅へ呼候て承合候故、拙夫申候とかく講釈仕候はいか様共私ども料簡可有之候、聴衆の儀は私共力に不及申儀、夫ともに料簡申上候様にとの儀に候はゞ、指当り今少し急度被仰出候て承申者可有之候、只今の様に勝手次第に可罷出杯にては向後も聴衆も有之間敷奉存候、大番中番の頭中へ被御渡、御旗本中学文仕候様に被遊度被思召候はゞ、頭中初隙の時分は罷出可承候、勿論支配へは御番等の隙には、心懸候て罷出承候様可申渡旨被仰渡、扱又諸大名諸役人も上の思召如此に候間、折節罷出承り候様に被致候はゞ可然などと、御老中より被仰渡候はゞ先いやとも可罷出候、其内会得致し実志し候も出来可申候、是より外に聴衆有之候様には仕候様は無之旨申候、残り三人ともに同意にて、其段委細書付候て近江守殿まで進候処、先御請取被成候、尤是は少し難儀の筋有之候間、弥此外にも存寄可申上候、場所など替候はゞ聴衆も可有之候哉、少々費用掛り候ても不苦候間、外に料簡も候はゞ追て可申上旨に御座候、然処に追付浦上弥五左衛門と申候御小納戸衆〔是は御小性衆など同事に御近習相誥申候〕平三郎宅へ被遣候、先達て平三郎へ上意に付参候間、他客無之候様致し可申旨申来候由、追付被参候て被申候は、上意には四人の者ども料簡近江守に承候様被仰出候へども、いまだ返答無之候、四人の者共近江守へ直には難申処も可有之と被思召候間、其方事幸平三郎と知人の由に候間、平三郎宅へ罷出、直に心底を承候様にとの儀に御座候、勿論残り三人ともに申談料簡申上候様にとの御意に候へども、先御自分料簡を以御請可被申上旨被申候由、平三郎則近江守へ申合候趣を申候へば、其儀は御同心無之儀候、たびく林大学頭より上より被仰渡候様にと、聖堂講釈の儀に付願申上候得共、御承知不被遊候、其子細は上の思召に、学問と申物は權威を以人にさせ候ては何の益も無之候、面々に信じ候て自然に趣き不申候ては仕形ばかりに罷成申候、既に常憲院様御代人々に無理に学文被仰付候て、殊外難儀致し至于今懲り



申候様に罷成候、外の所存を申上候様にとの儀に御座候由平三郎申候、残りの者は不存候、私存候は、右の外には講堂御建被成、講師も多く被仰付、書籍も御文庫の書籍拝借自由に被仰付、扱とかく師儒軽く候ては人々思入薄く難信候、然処藤九郎、源四郎など至て小扶持貧窮にて難勤体に御座候、新助拙夫杯も其通に候、斯様の儀も難儀不仕様に被成下候へば、人々存入もよく可有之と申候由申候、弥五左帰り被申候以後、私ども呼びに越右の趣為申聞候末に申様、物語ながら扱々不入事と存候へども無是非候、とかく私申候は、講堂被仰付師儒等多く罷成候ても、此通にては替る儀有間敷候、其証拠には、大学頭すでに聖堂に在之講師数多く候へ共、彼の如くに御座候、学文権力にて無理に被仰付候事、御同心に不被思召候段は乍恐御尤至極の思召には候へども、只今の風俗にて中々自然に信じ候て趣申者は有間敷候、先一往御威勢にて被仰付、其内世上にはやり出候はゞ、自然と趣き申様にも可罷成、父の子に学文為致候様成事にて候、いやがり申者を初はしかりなどいたし無理にさせ候へば、後には己と合点いたし候様に罷成申候、子次第にいたし候ては学文好申事は無之物にて候、とかく教と申物は、厳励に無之候ては難行奉存候、とかく幾度も此段申上度奉存候、扱は世上に学文はやり候様に被遊候事は、講釈一通りにても難成奉存候、連々上の思召に可有儀と奉存候、去ども此度は聴衆多く罷成候様御尋の儀に候へば、先右の通りより外は私所存は無之候と申候、残りの者も左様に申入候て、平三郎も合点致し被申候へども、とかく講堂建立の事を可申旨に候故、夫は如何様ともと申罷帰候、講堂を外に被仰付候様に致し、木下家に学流を一派立、林家と並申度所存も候故、其方へ引付願被申様聞へ申候、左様にてもすでに聖堂聴衆も無之候へば、同事たるべき事分明に御座候、上の御尋の筋には叶不申事に御座候、御聞被遊候はゞ迂闊に可被思召と奉存候、其後近江守よりの御請を御待被成御座候間、右浦上氏へ申入候、講堂を立場所を替申所存の儀も近江守殿へも申入、則浦上氏を平三郎迄被遣料簡も粗御聞被遊候間、最前申上候趣と両様とも、早速被仰上候様にと申入候様に浦上より申来候、則近江守殿へ平三郎罷越右の趣書付申上候へば、近江守殿請取被申候、平三郎へ御小納戸衆を被遣事を近江守へ申達可然候、少しもかくし申儀にて無之由に御座候、斯様の処各別手段と奉存候、其後は何の事も無之、当月二日より其儘高倉屋敷講釈前の通始申候、いかさま何卒品付可申かと奉存候、先日萩原方にて橘隆庵に参会候、隆庵尋被申候故有増咄申候、隆庵被申候は、中々其分にてはきく聴衆有間敷候、比日御側衆へ申入事に候、とかく御近習より始り不申候ては外へ移り申間敷候間、此後不絶四人の者にも、一人宛御座の間へ被為召候て、毎度講釈仕候て、御前にも御用被遊、且又御近習拙者式までも承り候様に被遊候はゞ、自然と表向へもひゞき候て、学文好み申衆も出来可申、御前には御政務等にて御用可有之候歟、又は御鷹野に御成被遊候はゞ御勝手に被遊、とかく御近習の不絶承候様に致し度候、有馬、加納などへ申入候へば、其通り御前へ申上候様にと被申杯と隆庵物語にて御座候、隆庵存の外学文を好み申人にて候、是程の人も当地にて難得候、御意に入被申候と見へ申候、只今拙夫に易を聞被遊候、其外萩原氏にて孟子講釈の席へも不絶出被申候、其儀も御前にて御物語申上御聞被遊候由申され候、侍講の事前書に申上候通、只短くよみ早く埒明候様に致し可申候、必長く仕間敷との事にて、論語の首章を兩人にてよみ申体に候へば、眞の世上に申祝儀一通りと申様成事にて、其上江戸の学文御前代より講釈も林の格に心得候て、講じ申者さらにと耳に当り申事無之、聞よき様にとまで講じ候よし、義理の聞へ不申事は構不申候、親切に講じなどと申儀は曾て無之候、人も左様に講釈を承付候故、精しく説申さば却て譏り申事にて候、老夫杯講釈はいかなる講釈とて笑申位にて候、先日侍講杯の節精義は不申、其上朋自遠方来杯の段は、指当り人主の上にあづからぬ儀に候故、何を述可申様も無之間を合申迄に候間、御前に御間被遊候ては、結句弁の面白き方を宜敷被思召候筈と心得候処、先日河野昌庵と申御側医師、隆庵などと同事にて候、此人被申候由にて或人被申聞候は、

私講釈御聞被成能候由御意に候由、左候へば御聞わけ被遊可有之哉と奉存候、殊の外御聡明に候故、世話の料簡の外の儀毎々有之候、此間も深川辺医師の草履取主人を殺し、主人の妻取付候処を妻をも殺し候て逐電いたし申候、此程人形を以御尋にて御座候、何卒はやく尋出候様にと上下一同に願申候、主人を兩人殺申事重々逆罪、承程のもの扱々悪き奴と申処、御聴被遊にくき事と必可有上意と奉存候へば左様には不被仰、遠国辺杯にかやうの者有之候さへ有間敷儀に候、されども夫はいまだ有まじきにも無之候、江戸御城下御膝下にて斯様の者有之事、御気の毒千万成儀と上意の由申習候、実にて候哉いまだ慥不成儀に候へども、御尤至極成思召と乍恐奉感候、先日隆庵に咄候へば、其儀は不承候へども常々の思召左様の趣にて候間、実にて可有之と被申候(二月十三日 賜齋賢書中)。

508◆一 大坂城御番衆の内物語、近頃奇怪の儀ながら慥成人の物語にて候、御城中の事沙汰不仕筈に候へども、年来心安候て咄合候故、唯今は誰にも承及候、前々より御番人夏中蚊帳を釣り不申、紙帳を用申候、是に子細有之候、然処或人無構常の蚊帳を釣候て臥り、夜深蚊帳の上を見あげ候へば、大成人の首は無之手足体計横はり少もうごき不申候、とかく寝入も不仕夜明まで致難儀候、翌日相番中へ語候へば、夫故いづれも蚊帳を釣不申紙帳を釣り申事に候、必驚被中間敷候、此方へあたり申事は無之候、又或る時は奥の間の方より、大成男二三人も致同道襖障子より首計を出し人の咄を承り、いづともなく消失申候、又或時御書院の庭に人馬の音躁敷聞へ申候、戸を明候て見候へば何も無之候、斯様の類毎々有之候、冤気の結たるにて可有之候、此咄白石承被申候て、福島大夫配所にて老年の伽に罷越、直談仕其者見申由にて物語有之候、大夫殿は向に座し居被申候、其対座に二三人咄罷在候処、一時に首を伏て仰ぎ見不申候へば、大夫殿また出申よなど被申、振返り脇刺をねぢ廻し叱被申事毎々有之候、其様子如何と見候へば、大夫殿御座うしろへ、色々様々の首幾ツといふ数を知らずあらはれ申候、一目見申者はとかく仰見申事難成ひれ臥申候、大夫殿叱候へば、湯の消たる様に消失申候、是等も冤魂の鬱結したる成るべし。

509◆一 鳩巢先生印文、池田道雲篆文並刻〔道雲事第三四記〕可觀小説。

備中丹姓英賀郡人、字静儉斎〔条印〕魯有大臣史、失其名〔楊子法言叔孫通故事〕。

509◆一 鳩巢先生少年の時、北野菅廟へ参詣通夜候処、内陣より白雲出で感応のしるし有之と申儀、礼幹先年より伝聞仕候へども、神怪の儀請問仕候事も致遠慮終に不申出候処、享保四年九月於江戸礼幹御小屋へ御見の刻、偶菅廟靈驗の事ども座談の序に此事申出候へば、御物語候は、十八歳の時於京都順庵に従ひ勤学せしめ申時分存寄候は、学問といへども神助ならではと存願書を調申候、其趣は名を後世に揚て父母に命名を遺すは孝の一事なり、むなしく生候ては百歳を保ちても何の詮も無之候、文章を以て天下に聞へ候様に神助を奉願候と申事に候、扱一夜致通夜度心懸候得共、北野辺は遊女町多く候故、若年の間師友の聞を憚り、此事を順庵に達し、二月頃と覚え申候社参致し、願書を内陣へ捧候て、こもり屋と申板さくみの内へ唯独り参籠致し候、社僧の方より行燈に竹筒に油の入を添へ差越候、夜着の物も差越候へども、拙者存候は、七日七夜参籠の者さへ有之候、只一夜臥り申には不及儀と存じ臥り不申候、深更に及候て頻りに眠を催候故、両手を組み夫に額をのせ少し眠候様に有之候処、内陣より雲起り全体を覆ひ候様に覚候て眠覚申候、是は感応のしるしと存、弥書夜致勤学〔先年十六七歳の時、自警の誓詞別目錄有之、此願書と合考ふへし〕右雲色いかゞ御覚へ被成候哉と御尋申候へば、黒く覚候由被仰聞候、扱御物語は、其後加州にて結構に召つかはれ文章の御用相勤、江戸へも被召出候上にて見候へば、菅廟へ此方よりの願は御叶被成候と申物にて候、一身の幸不幸は天命有之候、然らば菅廟へは急度御礼を可申上候事と存候へども、薄祿の身に候へば力不及候、せめて一月に一度宛参拜可仕儀と近年に成候て心付、毎月廿五日には湯島天神の廟へ拝し申候、前月廿五日には雨に逢濡候に付歌をよみ申候。

村雨のかゝれる袖におもへとや 神もぬれきぬきにしむかしを

礼幹承り、私儀正徳二年の比二三月と覚申候、一月の内に五日十五日廿五日三度に、夢想の句三首を得申候、其内二首は忘申候、一首は

ぬれきぬをきた野のすへにぬきすてゝ うつりぞきぬる梅の花垣

扱御物語候は、住吉内蔵助咄申候、京都或町人浪人の方より名物の茶入を預り置、年を経て後返し候へと申に付尋候へど見え不申候、此町人貞信なるものにて致迷惑一分も難立存、此上は神力を頼可申外無之と存北野へ参籠いたし候処、感応の奇特を覚候間、能帰布上下の儘煙草を給候て罷在候処へ、台所へ乞食体の者罷越、此作花買て給候様にと申声聞へ候、兼て作花入用の事有之候に付、其作花求候て何とぞ箱へ入置度存、棚にいと古き箱の有之候を、それへ入可申とて蓋をひらき候へば、其内に彼の茶入有之候、ひとへに靈驗と存候由その人内蔵助に咄申候、則茶入浪人に返申候、本藩より御代参として前田修理被遣候、御太刀奉納の時に修行齋能順杯も有合申候は、七百五十年時は雷鳴致し奇特の事と申候、今日は如何可有之哉と申候処、間もなく雷鳴仕候、各不思議の事と致感動候(寺西十左衛門話)。

511◆一 文昭院様御即位以後、瑞春院様(徳松様御生母白須氏、常憲院様御代五丸様と云)御機嫌伺のために御医師養安院祇候の節、松平美濃守最早剃髪にて保山と称し、先達て瑞春院様御前に被罷在候、保山時事御仕置の改候事とも色々被申上候は、近年御徒の内何某深川にて魚を釣り、生類御憐の御法を侵候に付流刑に被仰付候、然る処其者を被召返御赦免被成候までにも無之、此間上野御供も無構相勤候様被仰出候、是は余成事に御座候旨被申上候処、瑞春院様急度御言葉を被改、扱は常憲院様近年の御政道を御尤成事と被存候哉、すきと斯様の事ども其方杯被致事に候、此度段々御改被成候を、却て左様に被存候儀は弥聞へ不申儀と被仰出候処、保山一言も出不申退出に候、其後女中を以向後御用候はば可被召出候、其方より被罷出候儀は無用に可被致旨被仰聞候(養安院直に咄候旨、堀部養順話)。

512◆一 当月四日吹上御殿にて公事御聞被遊候、一兩日以前に公事不残書上候様にと被仰出候、唯今訟三十六有之内十五御撰被成、此分は御聞可被成候間、前に能吟味いたし置可申旨被仰出候、右三十六の内には井上殿有馬殿領分の百姓の公事も有之候、左様の公事御聞候はゞ度々御両所の名も出候て気の毒成物と存候処に、上にも其段御気付有之候哉、左様の公事はすきと御指除被成候由に候、吹上御殿の御玄関の上御縁頃に御簾かゝり其内に御成被遊候、御簾の外左右に御老中、若年寄御側衆、大目附杯列座にて候、扱白砂の上左右に板を敷候て假屋を打申候、板の上うすべりを敷候て、其上に寺社奉行、勘定奉行町奉行列居、むかひには御目附中列居の由に候、酒井修理殿扱白砂板の上に座せられ候事、是一代の始たるべきと存候、扱訴訟人双方其中の白砂へ引出申候て対決いたさせ、右三奉行さばき申趣を御聞被遊候、其日のさばき殊の外出来候由に候、朝より暮過までに済申由に候、八ツ時分御中入にて候、其間に小用に立少休息有之由に候、相済候以後に御二階の上に入御被遊、三奉行始其日の諸役人不残御二階の下へ参候様にとの事にて、揃申時分御おり被遊御立被成候て、今日の様子御覽被遊候処いづれも心苦仕事と被思召候、さばき申様も一々宜敷被思召候由御感にて、三奉行へ時服五ツ其外三ツ二ツ宛拝領被仰付候、萩原源左杯も時服二ツ拝領の由一段首尾よく相済申候、是は向後三奉行初精出させ可被遊との思召と奉存候、此後は折節御聞可被遊と沙汰にて御座候、高倉屋敷講釈の事に付先日申進候通、講堂を建候て御書物など御貸被成、出精に学文仕候様にも被成候はゞ、講釈の聴衆も可有之と平三郎方より申上候、其後浦上を以平三郎方まで被仰出には、とてももの儀に学校御建被遊候間、相応の地並学校の堂舎門廡等の制法、中華の式を以書上候様にとの事にて、勿論残り三人へも相談いたし候様被仰出候、此間有増書き上候、此紙面表より石川近

江守を以上げ候へと被仰出候故、平三郎近江守殿へ持参致し、右浦上を以被仰出候子細申入相渡し申由、定て早速近江守殿より被上之と奉存候、其後何の被仰出も無之候、五六日以前の事に候、所は小石川御殿跡か、小石川馬場の上松平備前守屋敷か、幸是は此度類焼にて候、扱は牛込酒井修理屋敷か、是も類焼かと存候、とかく高燥の地にて無之候ては不可然由、何れも申候て右の通相定申候、此上いかゞ成可申も不被存候、先御沙汰は御無用奉存候、去ども例の御衆へは可被仰人候、是等はよき沙汰と可申、此日朝鮮人往来候国々へ其時分の費用割賦有之、公領私領とも金銀出し申候、御先代すな金の様成事と聞へ申候、大分の事と申候、比日町々へ被仰出候火を出し申者ども只今迄は手錠おろし籠者いたし候、其後火を出し候町人百姓は、日本橋両国橋にさらし申候様被仰出候、其間にては出火やみ不申候、此度は火を出し申家は、其地主より其地に有之家数不残家賃指上可申由に候、出火以後三年の宿賃指上申答の由申候、委細は未承候、箇様の儀にて町方百姓中などは殊の外嗽々譏議に及候由申候、何とやらん聚斂の様子相聞へ申候、事気の毒に奉存候、火消役の衆へ被仰出も、とかく大風の時分火を消し不申、何町程の脇にひかへ候様にとの御令有之、夫を背へば御罰責に候故此度など火にかまひ不申候、前には風下は力に不及候へども、脇を防候故火口広がり不申故此度の様にては無之候、此度は火にかまひ不申候故、火広がりに候てはゞ広に吹付候故大分人も焼死申候、只今は火消役中も掣肘の意味有之候間働申儀不罷成候、箇様の儀凡慮の所及にあらず候、如何の儀に候哉と奉存候、何卒来春など大火無之候様にと奉存候、此上に又大火有之年々左様に候ては、武家商家ともに取続き申間敷と奉存候、当年焚死人夥敷有之候間、箇様の翌年は凶年たる由是も氣遣奉存候、此紙面各様御覽の後火中被成可被下候(四月十三日賜書)。

◆学校の儀其後は私共方へは何の御沙汰も無之候、如何様表向の御詮議に罷成候処、平三郎申上候通に大成御造営被仰付候ても、講釈聞申者無之候ては畢竟無益の儀と被申衆も有之と見へ申候、其衆に候哉、此間ひた物衆議を御聞被遊候、唯今隠居致し法体名付申人姓名は睨と不承候、此日石川近江守殿宅へ被召候て、只今聖堂高倉屋敷両所にて講釈被仰付候へども聴衆しかゝ無之候、いかゞ被成候はゞ聴衆も段々有之学文世にはやり可申哉、所存申上候様にとの儀にて候、此人申候、指当り存寄無之候、但一ツ存寄には、法中宗門の儀にて考候へば同仏法に候へども、宗旨替故面々の宗門に帰依致申候、儒者も流々可有之候、一流に限り不申、其流々の儒者に被仰付候て講釈致し候様に被遊、江戸中に幾ヶ所も講堂有之候て、世に学文はやり可申と奉存候旨申候由に候、其外委細の儀も申上候様に申候へども慥に是は不承候、此人も定て常に学文致し相応に志も有之候様子上にも御聞被遊候て御尋被遊たる儀と聞へ申候、然ども邪正の差別なしに多流にいたし度との申分さながら俗人の了簡と奉存候、伊藤仁齋流など打まじり候ては何ほどはやり候ても却て害に罷成候、三輪善藏と申て当地飯田町辺に住居教学の者有之候、余程発向致し私も兼て知人にて候、王氏の学を好み専門の学趣にて御座候、松平紀伊守殿京所司の時分尊信の由に候、近頃まで当地にても彼家より宛介(アテガイ)取申処に嗣君に合不申哉禄を辞し申候、出処進退守り有之儒者にて候、此者も右の御尋有之候て所存申上候様承申候へども、是はしかと不承候、酒井修理大夫殿の家に居申候儒者松田善三郎と申者、是も当地にて人の存知たる者に御座候、元は人見友元に学び申由、其後山崎嘉右衛門学流を信じ候て経学を専にいたし申候、為人随分厳正成者の由承申候、私儀もいつそ逢可申と申置候、此者に学び申人に武藤庄十郎と申候て唯今隠居いたし子を大御番に出し申候、当年四十余りの人にて御座候、公儀は四十以後は病氣に候へば申立候て隠居いたし申候、此人松田善三郎と心易く候故、此人物語にて比日承り申候、御城にて石川近江守殿修理大夫殿へ被申入候て、其元御家来松田善三郎と申者へ御用の儀候間、私宅まで被差越候様にとの事にて候、善三郎事当三月火災に小日向罷在類焼いたし、是も先年私同事に土蔵に火入候て、書物はじめ

すきと焼申候、只今小屋がけにて罷在候、然処に不存寄近江守殿へ明番致同道罷越申候、近江守殿御逢候て又右の御尋にて候、善三郎申候は、御用と有之候故何の御用とも不奉存候て先参上仕候、然ば只今差掛り了簡等難申上奉存候、其上修理大夫儀もケ様の御尋とは不奉存候哉、私了簡の趣申上候様にとて不申付候へば、旁先罷帰候て修理にも為申聞候て御請申上度奉存候旨申候て罷帰申候、其後修理大夫殿へ近江守殿御城にて被申候は、重て手前より善三郎方へ直に可申遣様候、左様御心得候様との事に候、其後修理殿其段善三郎へ被申渡、近江守殿より案内次第に早速罷越、其方了簡の通申上候様にとの事にて御座候、翌日とやらん近江守殿より申来善三郎又罷越候処に了簡の趣にとの事にて候、善三郎申上候は、此儀一旦講釈聴衆有之候様に被遊度との思召に候哉、但其実より人に学文を好み申人に不仕候て不叶物と被思召候、然ば真実より趣候様に被遊度との事に候間其段了簡申上候様にとの事に候、善三郎申候は、人々真実に学を好み候様に被遊度との事に候はゞ、先各様より真実に学文御好み被遊候て御見せ被成候はゞ、人々興起致可申候、各様にも学文御嫌にても有之間敷候へば、真実に御教寄被成候とは見へ不申候、唯一通り学文いたし候と、真実より好み候とは各別の儀に御座候、たとへば親類を不存候て他人と存候て交り申候と、親類にてのかなはぬ中と申儀を存候て交り申とは、其親切はいかばかり違申と被思召候哉、唯学文を仕候と学文は元来吾性に具り申道にて、人としてはのがれ得ぬと申儀を存候て好申とは、虚実大成相違にて候、然共聖人の教世に磨り申候故、人々学文を実に好み申事無之候、まして各様には御幼少の節より、唯御気の尽き不申様に御氣に入申事計を御好被成来候故、中々学を実に御好み被成候儀は無之筈にて御座候、夫に入らせ候ては、ケ様の御大役を御不学にて御勤被成候事乍憚奉感候事に御座候、能々御生質宜敷故と奉存候、乍去御生質の御美は限り有儀に御座候、御学文不被成候ては畢竟御安堵は難被成儀と奉存候、然ば真実に御心懸候て段々下へ移り、自然と人々学文好み候様に可被成候、此外に存寄は無之候、若又一且聴衆多き様に被成度との儀に候はゞ、何の手間も不入儀に奉存候と申候へば、夫は如何と被申候故、善三郎申候は、上に学文致し候様被成度被思召候間、各御奉公と存候て講釈承り候へと被仰渡候はゞ、早速聴衆出来可申候、然れども是にては何の益も無之と奉存候、近江守殿にも成程尤と被存候由、此方身上の儀まで申聞せ候て満足被致候旨御申にて、善三郎帰申候、善三郎申様一々尤に存候、さすがと感申儀に御座候、畢竟如何成可申哉不存候。

517◆一 御城中ノ口門番山本作左衛と申者有之候、当地には御小人同心と申者有之候其御地の足軽なみの者にて候、右作左衛門事其格の者にて候、当年六十に近き者の由、若年より学を好み、谷三平と申当地に昔居申候儒者有之候、此直弟子にては有之間敷候、又弟子に候哉、三助弟子の由承申候、此者先年父の死申時分三年心喪勤申候由、平生貞実御奉公精出し申候由、左様の者只今まで埋れ居候て誰申し候者も無之候処、先日ふと御側衆部屋まで被召出、講釈被仰付御側衆聞被申候由に候、其以後御感賞にて進上の番所上番と申役に罷成申候、是は上下御免にて御徒目付位の格にて候由、大成立身と申候、右の通の者に候へば、いか程立身被仰付候てもはづかしからぬ者と奉存候、去ながら先ケ様に御取立被成候へば、諸人耳目を改申事にて候。

518◆一 当年より山王祭家台無用に可仕旨被仰出候、当年端午より御前にはさいみ帷子御召被遊候、是は下へ被仰渡儀にては無之候、向寄の外様の衆へも話し聞され候へと、先日御近習衆或人に物語の由に候。

518◆一 先日被仰出奥方女中帷子常に着仕候はゞ、染帷子に可仕旨に御座候、其後は御前に被居候女中には何とも不被仰出候へども、是に自然と結構成物遠慮致し候由申候、浄円院様、小次郎様、御袋様被召出候、女中いづれも当春より縞着物の上にさげ髪致候由、

縞の着物はしま則もやうにて候処、其上に切付紋など致し候事無用可仕旨被仰出候由に候、女中の又者などは一統に木綿着用仕由に候、御儉素至極古今珍敷儀に奉存候。

518◆一 先年蔵人殿より悴七十郎へ御土産に被下候明君家訓、御前にも上り申様成さたに御座候、左様の故に候哉此間殊の外はやり、御近習衆よりも書物屋方へ度々取に参候由、夫故当地草紙屋に重板仕者出来候て、最前の板本京都の書坊茨城多左衛門手代当地に罷出、書物屋の法にて重板は為致不申由にて、わきの板を毀らせ申候、とかく作者無之候故色々沙汰致し候、水戸西山中納言御作などと申者も有之候、私作と申儀承候間其段を奥書いたしくれ候様に比日頼候故奥書致し遣申候、明君家訓又は序を除候事いかゞの儀に候哉、此度序をも望候故遣申候、大方楠諸士教と元の名に復し序を加候て板行致し直申候にて可有之と奉存候、ケ様の物只今世に申様に罷成申候、そろく〜と風俗も改り可申哉と比日は余程頼もしく奉存候、此外少宛奉感心に及儀ども度々承申候、筆紙には難尽候、気根よはく成、ケ様の儀調候も致難儀候間省略いたし申候、筆に任せ候間文言聞へ兼可申候、筆跡も正体なく候間御よめ被成がたく可有之候、御推量にて御読可被下候、以上。

五月十九日

室 新助

奥村源左衛門様

青地藏人様

同藤大夫様

小寺武兵衛様

其余例の御衆並劣甥にも御見せ被成可被下候、以上。

519◆一 其元御家中へ被仰出置候御条目、又は御定書等拝見仕度奉存候、比日佐々木左兵衛殿へ申進候処、当地へは御持参不被成由に御座候、勿論他所へ御出し難被成筋の儀は格別に奉存候、左様にも無之御家中へ一統被仰出國中諸人兼て見聞仕候、御定書等は少も御秘し可被成物とても無之候、左様の御定書等有之候は、劣甥新八郎まで御借被成可被下候、此書同十四日到来、十九日家兄兼山より御返答申上候、但被仰下候通の御定書は覺無御座候、一通五冊の御定書と申物有之候へども是れは公事場、算用場、割場、会所、普請作事等の場切二事三事宛覺書の物にて、國中一統に申渡候品などは無御座候、其類の品見当り候は、進覽可仕と申進候、将又此御書中の趣は一通の儀にては無之、相公様御尊居多有之入御内覽可然御書面に付、則先生への進書も写相添大野木舎人、成瀬内匠まで副状を以差上候事写候て指越候様にと新八郎方へも申遣候、先年私共其御家へ被召出候時分は、始て御奉公仕候者どもへ頭中より御定書の物四五卷廻し被申、奉得其意候由の御請を取置被申候、其時分私儀写置申候処、年久しき儀に候故いかゞ仕候哉其後失申候、其は江戸詰の時分の御定書にて御座候、定て各様御手前には可有之と奉存候、夫に限り不申、御定書御条目の類御遠慮の筋さへ無之物に候は、御見せ被成可被下候、御手前に有合不申候は、御才覚被成可被下様に仕度候、少々にてても外へ御出し被成がたき物に候は、勿論御無用に奉存候、左様も無之誰見候ても不苦筋のものばかり数通にてても、又は一二通にてても御有合次第に新八郎に御写させ候て御越し可被下候、不苦儀ながら此儀申進候事も御沙汰無之様にと奉存候、但例の御衆は格別に御座候。

520◆一 比日安積覺兵衛へ内々頼置候佐々木系譜、並青地、本多、小寺等先祖の儀共考の趣委細に書付越申候、佐々木は名家故、あなたにも系図文書等も数多有之候故、彼是考随分精力を尽し申様子に御座候、丸山雲平よりも答目一冊仕立候て逐一返答に及申候、去共富士川戦死、叡山自殺等の事は相知不申候、去共是も少々、考略の儀は申来候、此後考索の便りには可罷成かと奉存候、私著し申候佐々木系譜の中も所々批判申来候、長き物候処委細に見被申と存候、精力の程感入申儀に御座候、其上一々尤成儀共に奉存候、是は追て系譜の面を改申敷、又は系譜は宰相様へも被上に相極り申物にも候間、別に附録の様成物仕立候て添置候様に成共仕可然候、其段は其元にてとくと御料簡被成御尤に奉存候、私事此間公私用事有之不得已儀ども指集一円不得心隙候故、右の書付共入組申儀に付とくと吟味仕候事難成候、等閑の返書はいかゞと安積氏へもいまだ返書さへ不遣候、劣甥小池源

太左衛門まで先一礼は委細に申遣候、其内得閑暇候はゞ委細に檢閲仕候て、其上にて其元へ其儘可進候間始終とくと御覽被成、此度考の趣にて御考索の筋も候はゞ御吟味被成候様にと奉存候、私事只今精神衰耗其上類焼以後は東鑑の様成物さへ手前に無之候故、委細考申事は難儀奉存候、其元にて兵庫殿など随分御吟味被成可然奉存候、御吟味済申以後了簡共相極候はゞ、其上にて右の系譜相改申儀は此方へ可被仰下候、其節最前新井氏紙面の趣なども打合候て、系譜の文言改候様に可仕候、左候はゞ佐々木系譜を兵庫殿にて成とも冊物に御写しかへ被成、冊にて被遣可被下候、巻物にては前後考合候時分紛はしく候てあしく御座候、其冊子紙面を改候て可進候、とかく頓て其元へ進可申候間、其時分委細可得御意候、安積氏丸山氏など精力を用ひ候儀も御目に懸申し度候間、旁其まゝ可進候。

521◆一 内々学校の儀も、其後は御僉議の上とかく只今大き成御造営被仰付候ても、講釈など聴衆も同事に候ては無詮儀候間、先有来候処にて講釈被仰付、其上の様子次第に追て学校可被仰付に相極り申候、其に付此間毎度木下平三郎宅へ参会仕申候、いまだ慥には相知不申候へども、大方浜御殿に被成候様子に御座候、高倉屋敷は余り見苦敷候間歴々など被参候儀も難成候、向後浜御殿にて講釈有之候はゞ、いか様上よりも急度御下知も可有之様子に御座候、講釈ばかりにて無之素読の指南も仕候者なども御僉議被成、毎日罷出御簾本中の子弟罷出候様に可被成との事に御座候、とかく急度被仰渡さへ候はば何れも罷出可申かと奉存候、浜御殿に罷成候はゞ当分私などは難儀と存候、私宅よりは一里半も可有之候、老人と申御存知の通痛も有之候、駕籠にて通ひ申にて可有之候、不勝手ものに候へば毎度日用の者やとひ申儀も難仕候、成次第に相勤不罷出時分は御断可申心得に御座候、先頃大坂より古林見宜被召寄候、前月廿八日より神田橋外御借し長屋に、紀州より被召連候医師林良意と申人居申候、其宅にて見宜医書の講釈始申候、先立て公儀医師中又は町方医師も一統に相触候て罷出候様にとの事御座候、三百人程も聴衆有之候、勿論皆医師にて御座候、良意宅せまく地上に席を布候て罷在体候、其故昨日よりは是も高倉屋敷にて講じ候儀にとの事にて、私共とは刻限を替候て罷出申事に御座候、私共は四ツより九ツ迄、見宜は八ツより罷出申候、見宜は一人にて講じ候故隔日に罷出申候、難経を講じ申由に候、是は大坂にて自分に講堂を建候て多年医書を講じ、常に医生を大分学寮に指置取立申候由承候、左様の儀御聞被遊此度被召寄候哉、名人の見宜が孫の由申候、奇特成事と奉存候。

523◆一 明君家訓の事前書にも申進候と覚申候、只今当地一統に取はやし申候、比日は拙者作と申儀存候て方々私噂も有之候、替たる儀と奉存候、此書板行候て十年余にも可相成候、只今迄しかと見ものも無之処に、ふと御近習に取はやし候故、俄に江戸中流布致し候、とかく万事時節と申事有之と奉存候、当春火事以後にて候、小宮山友右衛門と申候御勘定所組頭有之候、此子息杵之進と申人先年より学文の志も有之申通候、実は辻氏にて小宮山氏へ養子に参申候、此人被参候て明君家訓の事被申出拙者作の由承申候、此間打寄申候は、ケ様くゝの事申出し候ものはおよそ近代にも無之候、誰の作にて候哉、ひたと承候処拙者作と申事相知れ、扱こそと存、其に付御近習の衆へ縁にて右明君家訓を遣申候、何卒斯様の筋上へ達候様にと奉存候、大方上覧にも及可申と珍重に候由物語にて候、此筋にて御覽被遊候哉、御覽被遊簡要成事どもに被思召候由、且又御近習の者へ求候て見候様にとの御下知有之と聞へ申候、其以後御近習衆家々に求候故、御城へ罷出候程の者求申候由、日本橋南一丁目に茨木多左衛門と申京都書肆の出店有之候、是板本にて御座候、俄に大分の利を得申とて、先日私方へも罷越悦申候、私序文をもらひ、且又奥書を望候故其通に致遣申候、大方は楠諸士教と題を改、私序を加候て改て板行致申候にて可有之候、其後御小納戸衆より平三郎まで申来、私序文望の由にて写候て遣申候て、是も上よりの事と聞へ申候。

523◆一 前月廿四日木下平三郎御用にて登城候処に、有馬兵庫殿を以加州には学校有之



候哉と御尋にて、平三郎申上候は、学校の儀は承及不申候、然れども私事は終に加州へ罷越儀無之候、委細は室新助存知可罷在候由申上候へば、明日新助同道登城可仕旨にて、翌廿五日四ツ時平三郎致同道罷越申候処、四ツ時分まで焼火の間と申間に相待申候、其後山吹の間へ参候様にとの事にて平三郎兩人罷出候処、有馬兵庫殿被出候て私へ尋被申候は、加賀殿多年学を好み被申儀に候間、国中に学校か又は教授の場所も有之候哉、承度旨に御座候、私申上候は、如仰年若の時分より学を好み被申、只今老人に至る迄其通に御座候、学校等の儀は遠慮も有之候哉終に相極り不申候、折節近習杯にて講釈又は素読被申付候儀は有之候由申候、兵庫殿被申候は、加賀守殿国政の儀常に被掛心、万端詳成様子共紀州にても承及候、大国の儀に候へば品多き儀にて可有之候へども、先家中へ被申渡候筋如何様の儀に候哉と被申候、私申候は、私事加州にて軽き者の儀に候故、委細の儀は承知不仕候、乍去兼て承候は、領国の儀は上より御預け置被遊候儀に候へば、国政の事各油断仕間敷候由、家老以下の者どもにも精誠被申付候、左様の存念に候哉国政の事大小によらずすきと自身に聞被申候、別て民百姓の儀は大切に被存候、先年凶年の時分杯にも、民の衣食等の儀まで自身に被申付、飢寒に及不申様に被致候、勿論郡奉行など申役人は其の人を被選候て、百姓共難儀不仕候様に心を付被申候、さて諸役人並私式軽者共迄常に被申渡候は、公儀御法度の筋相背不申様に、是を第一に心得油断不仕候様にとの事に御座候、先ケ様の儀を慥に承及候由申候、兵庫殿被申候は、大國多事の儀に候へば、自身に聞被申候事難及事に候、其故に候や終に粗略成事承不申万端能熟候様に承候、暫待候へとて奥へ被参候、平三郎脇にて承居申候、其後又前の処へ兩人参候へとの事にて罷出候へば、兵庫殿十村と申者有之候由いか様の役にて候哉と被申候、私申候は、郡方の事は私別て不存儀に候、去ども承候は十村と申者は、関東などにて申候名主庄屋などと申類の者にて、其村の百姓を支配致し候、たとへば年に豊歉杯申立申事杯は役人共右十村などへ承合申事にて候、去るに其所にて地方の事至極巧者の者を撰候て申付候、惣て春耕申時分は、其村に米倉有之民共飯米不足不仕候様借し渡申候、秋以後又收置申候、ケ様の類常格の事共有之候、其を掌どり申事にて候、此時中言に兵庫殿それはあなたの常平倉遺法にて候由挨拶に候故、成程其通に奉存候旨申候、此一言にて兵庫殿学文有之と奉存候、常平倉杯と申事当地役人など中々存候儀にて無之候、何の益も無之唐にての詩と申す事は心を尽し候て、それを学文と存罷在候、兵庫殿手中に覚書持被申、それを見被申候ては尋被致候、さて被申候は、役人等被申付候時分は定めて諸士頭中より其の人を選申出し、其上にて其器量を以被申付にて可有之候、但左様にも無之目がねにて被申付候哉と被申候、私申候は、役人等相極申時分は自分目がねにて被申付儀も有之候へども、平土杯より取被申候時分は、必其頭々より吟味致し候て申出候、其内には自分には不心得に被存候者有之候ても其頭たしかに宜敷由申候へば、先其通に被申付儀も有之候、其故諸頭も組の者共事無油断吟味致し候由申候へば、兵庫殿又被申候は、定て賄賂等の事、又は惣て依怙鬻負の筋は堅く制禁たるべきと被申候故、私申候は、賄賂杯と申儀は不及申候、少にても依怙の筋有之候へば急度吟味被申付候故、家中諸役人此儀は平生別て相慎候故、只今などは賄賂杯と申儀はすきと絶へ申候由申候へば、兵庫殿何も感心の体にて奥へ被参候、其後又前の所へ参候へとて兩人参候へば、加賀守殿学文は定て無点の書も読め申程の事にて可有之由に被申候故、私申上候は、学文の事私平生役儀にて候故よく存罷在候、和漢の事余程博学に御座候、無点の書は書により候て私どもさへ読不申物も有之候へば、一概には難申候へども、私共よめ申程の書は大方よめ可申と奉存候、平生外の好みすきと無之、若年時分より昼夜書を好み被申候故、学文の儀は近代大名の中には無類成事の様に私共は奉存候旨申候へば、左様に承及候由被申候、其外相尋被申事私不存候儀は不存由申候、存候事は返答申上候、非人小屋の儀杯も尋被申候、扱御尋の儀など相済、其以後兵庫殿被申候儀は、此間各はじめ何れも料簡共御聞



被成候、いかゞして世に学文はやり可申候哉、講釈承申者も多可有之と存候哉と被申候故、私申候は、此儀は先日より平三郎私共へも申語候て、料簡の趣申上候、其外別に料簡も無之候、但私乍恐存候は、上より行はれ不申にては畢竟下へ及不申候、上に真実に御好み被遊、第一は御近習より学問仕候儀に罷成候はゞ、自然と外様にも及、又は江戸中へも及、其より諸国へも及可申候、比日明君家訓にて別てよく存当り申儀に候、此書十年以前より板行に有之候へども、しかゞ見申者も無之候処、比日此書御近習にはやり可申由承候て、江戸中の方々取はやし申候、軽き儀にてさへ如此に御座候、まして学文の事は誰否とは不申儀に候へば、御近習より段々発向仕候儀に被遊、其上にて弓馬同事に心懸候へと被仰渡候はゞ、慥にはやり可申由申候、是は兵庫殿別て感心の体にて御座候、其後奥へ被参候て暫有之、又前の処へ兩人共に参候様にとて参候へば、兵庫殿被出候て最早御用相濟候間兩人とも罷帰候へと直に被申渡候、及暮罷帰申候、不存寄儀に出合候処、先首尾よく余り不調法成事も不申候て致安堵候、かりそめながら私一人の身の事とは違候て、宰相様に懸候儀に候間、不調法成事などふと申候ては迷惑千万成事にて候、勿論御取成にて無之、悉皆有体の事にて候、上にも殊の外御国御政事よろしき事兼て御聞被遊候故、私御国出の者に候故、弥慥に御聞被遊度との事と奉存候、今に不始儀ながら宰相様御手柄なる御事と乍憚私儀も恐悦此事に奉存候、御内意にて御尋候事はすきと沙汰不仕事に候へども、各様の事は格別に奉存候故申進候、夫とも少も御穩密がましき儀に候はゞ、中々遠方申進候事にては無之候へども、右の件には差てかくし可申儀に無之候故申進候、必外へ御沙汰は御無用奉存候、此紙面御一覽の後火中被成可被下候、以上。

六月四日

室 新助

青地藏人様

527◆一 五月廿五日登城の事に付申進候件々、御承知被成御同志の御衆へも被達候へども此間有馬殿、加納殿より召に参候間登城仕候、於御御黒書院廊下木下平三郎私兩人へ段々御尋の儀も有之候上、並書付にて御請申上候、兩人不申合銘々料簡を以可申上旨被仰出候に付互に不申合候、此間も言語を被聞候事、又は御先祖様へ御孝敬の筋など所存の通申上候、委細は筆紙に難申進候、此体に候はば此以後も愚見御聞被遊にて可有之奉存候、平三郎儀は父平之丞をよく御存知被成、且又平三郎も紀州に被成御座候時分より、書物の様など御用承り御馴習の者にて候、私事は曾て御存知被遊筋の者にては無之候処、同役の中より平三郎私兩人被召出、ケ様の儀御尋被遊候事難有仕合奉存候、此上の御奉公は唯身かまへを不仕、所存の通少も枉げ不申より外は無之と覚悟相定罷在候、遇不遇は畢竟天にて御座候、何とぞ五常の筋へ参候様にと奉願候、何とやらん仁義を仮り申様に被存候、是のみ氣遣に奉存候、段々相知れ可申候、近々御誕生の御沙汰にて島田弾正忠墓目被仰付筈に御座候、其に付先頃京より名譽の産母被召寄候故、方々難産の家より頼来候、先日御城より召に参り候処に、外へ罷越有合不申候に付、町奉行中右産母呼寄殊の外しかり申候、其後は何方より申来候ても不罷越常に在宿いたし罷在候、此儀御聞被遊町奉行中山出雲守を御前に被為召候て、御直に被仰渡候は、其方共の心得も尤には候へ共、御城は御急用にても無之候、御臨月に被為成候はゞ、他出やめ候て罷在様に可申付候、其より前は難産の者有之候て申来候はゞ、御城をかゝ候て成共先急方へ罷越候様に可申付旨被仰渡候、輕儀に候へ共扱々結構成御儀と乍恐奉感事に御座候、比日主人殺し申者兩人日本橋にてさらされ、其後品川口にて張付に被仰付候、一族の儀は御構不被遊候由早速被仰出候、御前代に主人殺し申者有之候へば、父母兄弟も刎首に被仰付候、是は不易の法の様に一統に心得罷在候処、此度御独断より被仰出と上奉存候、「聖人人殺人不孥」と申に御叶被成儀と奉存候、三族を夷ぐると申儀は三代の時分其沙汰無之候、秦の始皇より始り申儀にて後世は逆罪の定法に罷成申候、其身は逆罪に候へ共、父子の間にて曾て不存事に御座候、然るに

父子兄弟等に及候事ある間敷事に御座候、御尤至極成事に奉存候、当地にても半合点不仕者も有之候て何角と申候へども不宜申儀に御座候、惣て御刑罰余り寛に過候様に沙汰仕申候、比日も上州辺にて御法度を背鉄砲打申者有之、久々禁牢の上流罪に相極り申候処、去年か流罪の者島よりのがれ出申をとらへ候て籠へ入候、右鉄砲打申者へ同居致し、籠の中にて島の様等咄し承候処、島へ参候ても餓死に及候故、とても死なぬ先のがれ出、数日の命成共のべ申度とらへられ申覚悟にて島より逃申候物語致し候を右鉄砲打申者承り、ケ様に候ては死罪を御宥免被成島へ被遣候詮も無之儀にて候、何とぞ島を今一統軽く被仰付候様に仕度、其代に只今迄不申上候へ共、同類多有之候間さして可申旨申候、則町奉行中へ其趣を籠の番人達候処、同人さゝせ可申旨にて数輩さし申候、此者共始は陳じ申候へ共、去年霜月とやらん獸の皮をはぎ売申候を、買申者さし候ゆへ此者罷出、なる程右の者共皮を売候事分明に候由にて、是も同罪に候間流罪可申付旨窺申候、然共去年霜月迄は渡世可仕様無之候故、かくし候て鉄砲打申候へ共、御詮議つよく候故、去年極月より鉄砲をやめ申候て土に埋み置申旨上聞に達候処、其理申候へ人を被遣御見せ被成候へば、成程鉄砲ほり出申候、其上にて被仰出候は、去年霜月迄は罪人にて候へども、極月よりは改め申候上は旧悪の事に候間、不浅過料申付候てゆるし在所へ返し可申旨被仰出候、扱各々同類さし申者は同類さし申によつて過料にも不及、早速ゆるし候様にと被仰出候何れも忝がり泣申由に御座候、ケ様の事にて御座候、最前二ノ丸へ被成御座候時分、林大学頭召候て孟子梁惠王篇不嗜殺人の章を御聞被遊候由承申候、さやうの儀により御心付被遊候哉と奉存候、(後七月四日賜書)。

530◆一 当月十三日木下平三郎同時登城候処、不存寄御前へ被召出、結構の上意冥加至極難有奉存候、先頃以来御尋の儀共有之申上候処、六諭衍義と申書物御前より御出し被成、かなにて和らげ可被遊候、如何奉存候哉、宿へ持参仕候て熟覽可仕旨被仰出候、其故十三日兩人右の書物持参、所存の通申上候、然処に俄に兩人御前へ被召出、先日以来兵庫、遠江を以御尋被遊候儀よく申上候と被思召候、此儀も御尋の儀可有之候間無遠慮可申上候、とかく御前に成替り了簡仕候様に心得可申旨御直に御意に御座候、其外高倉屋敷の事なども御尋被遊候、退出以後兵庫殿を以書物御出し被成、兩人の内新助に被仰付候間、此書かなにて和らげ可申旨被仰出候、只今高倉屋敷講釈も御断申上引籠り、右の御用に取懸り罷在候、先日以来両三度御尋の儀有之、私体に過たる儀ながら申上候品共有之候、いかゞと無心元奉存候処、右の通上意にて安堵、此上弥所存御尋候はゞ申上にて可有之奉存候、此事御老親はじめ青地殿、奥村殿其外例の御衆へ御物語候へと、此度御用に取懸り心いそがしく候故、何れも書状を以不申進候、不諱の朝に逢事老後の幸とも可申候、此度の書も来月中には出来可申かと存候、何とぞ御意に応じ候様にと願申候、余程風教のためにも成可申かと存候、是も楠諸士教御意に応じ申故と奉存候。

閏七月十九日

室 新助

大地新八郎殿

尚以当十五日夜御城御誕生、御男子様にて御母子様共に御機嫌候由、恐悦の至奉存候、段々御繁昌と奉祝候、当地此間色々浮説も有之、且又半は実にて有之候、委細は筆紙に不及候、已上。

531◆一 御用の物上中下三冊に書立紙数六七十丁程有之候、先日首尾よく指上候、書の仕立並詞つゞきよろしく、御近習衆にも御きかせ被成候処何れも感通いたし候、是は御前に御とめ置被成候、但余りくはしく長く候て、未々の者へ御見せ被成候はゞいかゞに候間、短くいたし直し可上の旨重て被仰出、只今又取懸り罷在候、先一段致し上候様にと被仰出候て、一兩日前一段さし上申候、いまだ何の被仰出も無之候、弥一通に可仕旨被仰出候はゞ不残仕立可申候、此間林家父子三人へ謡の抄被仰出候、出来上り候処不応御意、致し

直し可申旨被仰出御返し被成候由に候、拙者此度さし上候へば御前には御とめ被成候由被仰出候へば、御意に応じ申と奉存候、随分首尾能候間御氣遣有間敷候、以上。

八月廿四日

室 新助

大地新八郎殿

532◆一 目安箱の事御聞被成通に御座候、八月三日より評定所外腰懸の前に箱出申候、毎月二日十一日廿一日三度出申候、朝より九ツ迄出し候て九ツに徒目付中付にて御城に上り申候、一昨日は高倉屋敷へ罷出候時分、伝奏屋敷に居申人講積承に罷出候人有之、承候へば、一昨朝も未明より訴状上げ申共箱出申を相待罷在、箱出申と其儘打こみ申由に候、右の人見申由に浪人らしき者麻上下にて挟箱もたせ参候て訴状取出し入申を見申由に候、此儀閏月に日本橋へ新に御制札出申候、其制札の趣は近き頃落し文等方々に致し置申候、其処あしく或は様子により候て、罪科にも不被仰付候て不叶儀も可有之候、其に付来月より評定所外腰懸の前に箱出しおかれ候間、申上候儀は此箱へ入可申候、箇様の場所被定置候上に、わきに捨置候とも御取上げ被成間敷候、申上候品は、御仕置に掛り御為に罷成事諸役人裁判私曲の事久敷頭へ願候て埒明不申事、此類にて御座候、其外自分の利欲に懸り申事、人に被頼候て不慥成事など申上候はゞ、一向に御取上げ被成間敷候、品により科に被仰付儀も可有之由申候、然処に其後申上候儀ども、何も借金之事又は自分の為に懸り申儀共多候間則右箱の前にて焼捨其者を召寄其段を奉行中より被申渡候由に候、たとへば二日に上げ申をば、十一日朝箱出申時分に焼捨、十一日の訴状をば、其次の廿一日の朝焼捨申候、其時分其訴状上げ申者を呼置候て申渡候由に候、其に懲も不致候てひたと焼捨申訴状多く有之候、とまり申はすくなく、去共是にて諸役人油断不成事に御座候へば、下より申上候事は無用の事にて、無益の事とは不被申候、其段は先日兵庫頭殿へも申入候、又其内志ある者有之候て、御政事に付簡要の事など申上間敷物にても無之候間、御心長に御覽候様に先日有馬殿へも申入候へば、一言にてもよき事申上候へば御為に候由被申候、兵庫殿随分すなを成人にて物の申よき人に御座候、是も上の御手柄と奉存候、拙者などにても右箱へ封事を入候てもよく御座候、御為に成候儀を申上候へと被仰出候、上を差控候へば本意に無之事に奉存候、見合罷在候、其子細は私共へは直に御尋の儀も有之候へば評定所へ出し候事不相応の様にも有之、且又きはの辻番所に、其日は御徒目付中罷出居被申候て、上申者の姓名を承置申候、先日も旗本の中に家来に為持遣申者有之候由、主人の名を承置候由申候、公儀へ上申物を家来に為持遣候は不敬に聞へ申候、私など申上候はゞ直に上下着にて罷越、右の御徒目付に私姓名名乗可申と奉存候、少も不苦事に御座候、去共左候へば、おし出し世間の沙汰に罷成可申と奉存候故、見合候て罷在事に御座候、其内に急に御為と奉存候儀候はゞ上可申候、其時分即日に御覽に入候故ちか道に御座候、以上。

九月四日

室 新助

奥村源左衛門様

534◆一 六諭衍義最前被仰出候以後、かなに和らげ上中下三冊に仕立指上候処に、四五日過候て被仰出候は、書の仕立宜敷被思召候、御直にも御覽被成、且又御側の衆へも御読せ被成、各へ御聞かせ候処、何も感通仕由申候、然ば和らげ様も宜敷と被思召候、然共思召には是より短く被成度被思召、此度上候は一段の紙数七十程も有之候、一段を三枚位につめ可申、左候はゞ文意達しがたく可有之候間、只今の様に感情うつり申間敷被思召候、とかく人に承候て感じ不申候ては、又詮なき事に被思召候、とかく本書の意を取候て短く致し、且又感情のぬけ不申様に仕見可申候、先一段仕候て差上候様にと重て被仰出候故、其後父母に孝行の一段短く仕直し、先さし上候処に、二三日前兵庫頭殿よりよびに参候て登城候処、一段宜敷候間此通に不殘仕立候様にと被仰出、只今宅にて取懸り罷在候、けつく最前くはしく致し候よりは六ヶ敷御座候、先は私兵庫頭殿へ申候は余り短候て紙数無之

候ては却て見申者軽く可存候、最前上候通に候へば、上中下にて一部の書と可申、其上文末長く候へば其品とも多候故、面白くも存候て見可申、然ば箇様に被仰出候上に申上候事いかゞに奉存候へども、愚見は右の通に奉存候旨申候へば、幾度も左様の料簡は申上候てよく候間、可申上旨にて被申上候へば、重て被仰出候は、成程長く候へば文段の移もよく、道理もくはしく候へども、末々御見せ被成度との事に候、然ば三冊共有之候ては、軽者などは求めがたくも可有之候、一冊にて求候も心易候へば、遍く末々に取はやし申筈に被思召候、何程短くても、此度上より被仰付御広も被成と有之候はゞ軽は存まじく候間、とかく短く被成度と被思召候由被仰出候、御意加り候て箇様に手短く被成候儀に候へば、御威光にてはやり可申候、其段は乍恐御尤に奉存候由申候て罷帰申候、幸最前清書仕候時分書損の一段有之候間此度進申候、六論は「孝順父母、尊敬長上、和睦郷里、教訓子孫、各安生理、母作非為」此通にて候、此度進候書損しは孝順父母の一段にて候、残りも此格に和らげ申物に御座候、左様御心得御覽可被成候、箇様に致し候へば、上中下にて二段宛を一冊に致し、合て紙数六七十張も有之候、此度改て調申候、一冊に致し紙数も三十枚迄も有之間敷と存候。

535 ◆ 一 当地評定所外腰懸に目安箱出申事御聞可被成候、是も元来根有事にて御座候、早速の事と驚申儀にて、世に志有之者無之、末々には己が身上事にあつからぬ儀を申上候て、六ヶ敷事にもあい候へば不入物と存候、此間の書一統大方は焼捨申候(九月四日 賜書)。

535 ◆ 一 私御用の事六論衍義、書体先日かなにて和らげ申候、初篇草稿有之に付長公迄進申候、御覽可被成存候其後事短につめ候て調可申旨被仰出、半分程に短く仕直しさし上候へば、奥の律の処御前にて御自身御考被遊、御前より調候て出申候、律は其通に可仕由に御座候、口の勸諭の処も今少和らかに仕見可申由、其外少づ御好共有之候、只今に至り未相済不申候、愚見と合不申候処共有之候へども、とかく御好みの事に候へば、先其通仕候、何とぞ此後御学文被遊候様に致し度奉存候、其所教を臣とする事を好て、其所受教を臣とする事を不好の弊、古より明主にも有之事と見へ申候、左様にては大有為の望は無之と奉存候、以上(九月十八日賜札幹書)。

536 ◆ 一 今日高倉屋敷講日に付罷出申候、御用有之候へば、此講の儀御断申候へども只今土肥氏病氣無人に付、兼て相勤申儀に御座候、伝奏屋敷守の人高倉屋敷へ罷出物語にて候、当廿一日目安箱例の通評定所外腰掛の前へ出申候、只今まで目安上申者何も自分の事申上候故、過半は其箱の処にて穴をほり候て、次の箱出申日に焼失被仰付候、毎度其通に御座候、せつかく右箱出申候処、其以後一人もしかと致したる御政事に懸り申儀申上者も無之体にて気の毒に存候、然処に当廿一日何者に候哉、一僕召連申もの兩人つれ候て罷越、たてふみの様に余程のかさ有之物各一卷持参致し箱へ投し申候、一人は上書に御為の儀申上候由調申候、一人は御忠節の事申上候由調候、其際辻番に必御小人目付「其元足軽目付の事」一人罷在候て、其姓名を承置申候、右兩人に相尋候処、各へ申入に不及候、書付の内に調置候由申候故、左様に候ても奉行中より被申渡候て、承申筈に候由色々申候へ共、夫に不及候、総て只今の奉行中何れも物のわけ知たる人は無之候、それとも不入事にて候、散々に町奉行などを悪口致し候由、左様の者を達てとがめ候は、向後上げ申間敷候間、強て申間敷由申し渡し候故、目付まけ候て、たゞ兩人一人宛供召し連れ書付両通入れ申とばかり当番申す由に候、只今迄終に箇様の者無之由に候、上書の致様も一くせ有之候、たゞ者ととは不被存候、何を申し上候哉、心にくう存じ候、先日も兵庫殿只今まで何の益もなき事ばかり申上候とて、気の毒がりにて御座候、私事は此の方より申し出したる儀に候故気の毒に存候、何とぞ直言の人も世に有之様にと存事に御座候、今日承候故早々書付進申候、以上(九月廿四日 賜書)。

537◆一 従是進申候六諭衍義和語の物も相達御覽被成候由致承知候、其後半分程簡略に致し候て不残仕直し、前月廿七日指上申候、其後何の被仰出も無之候、如何相濟候哉難量奉存候、先日申進候草稿一篇其元に御留置可被成候此方に入不申候、殘篇も追々御目に懸可申候、此書郷曲小民の為に仕物に候故、君上の為に成申儀は見へ不申候、此度和語に御直し被成候も第一在々所々町人百姓の教諭にて御座候、余事致省略候。

十月十九日

室 新助

青地藏人様

537◆一 六諭衍義先以長公へ草稿一段進申候、御覽被成候由致承知候、其後各別簡略に調直し不残相濟、前月廿七日指上申候、其後何の被仰出も無之候、大方宜敷可有之由有馬兵庫頭殿御申候、去共此分にては中々いまだ相濟申間敷と奉存候、定て追て何とぞ可被仰出と奉存候、明君家訓比日楠諸士教と改名私序をも加、且又末に此度調遣候跋語をも附候て新に仕直し申候、尤板は旧板を用候て少宛相違の処は埋木を致し改申候、火葬の一段も此度加へ申候すきと原本の通に罷成申候、其上書柄も各別宜敷相見へ候故、早速入御覽度有馬殿まで遣し候処、少相違事出来滞申と見へ申候、元来新規に仕出し候ものは書物に限不申、先達て公儀へ相達し申筈に当夏か町人へ被仰渡候、右諸士教は明君家訓と同物にて、少宛旧板を改申ばかりの儀に候故、序文等加へ候へば是以新規の物に候処、御届不申事書物屋不念と申物に御座候、去共此儀は私は曾て不存儀に候、此書の儀は兼て上も御存知被遊候故、此度新製早速御覽に入度指上申事は成程尤に候間、先請取置様子次第に御覽にも入候様に可被致旨兵庫頭殿被申候、右書肆は京都にて茨木多左衛門と申候、柳枝軒と号申候、水戸御家書とも此者不残請取印行いたし、印板殊の外念を入候て、此度の諸士教なども随分雅に仕申候ゆへ、私料簡には御覽にも入置候て、追て板行の儀など有之候はゞ、此者に被仰付候様にもと奉存候処、右の間違にて茨木方不念の様にも罷成可申哉と氣に毒に奉存候、新板とは違ひ申段は有馬殿へも申入置候、有馬殿も其合点にて御座候、さしたる御咎は有まじきかと奉存候、此事長公へも御物語被成可被下候、外へは奥村殿杯の外には御沙汰御無用奉存候、ふと書肆方杯へ相聞へ候へば、書物屋と申物は互に妬忌仕候故、沙汰仕候へば浅露に罷成候間、其御心得被成可被下候、以上、(十月十九日与礼幹書中)。

539◆一 先日黒書院へ出御、御譜第大名衆不残被罷出、御直に被仰渡有之由、委細の儀は不奉存候、大抵御譜第衆の儀は別て御大切に被思召候、然処に近年風儀悪敷、思召に不相叶儀共有之に付ての儀と申候、其故御懇意難有と申段は何れも外にても被申候へ共、被仰渡候儀御沙汰無之候、追て諸大名一統に火事場並番所等へ出し申候騎馬人数減少仕候様に御定被仰出候、且又日傭をさしやめ候様にとの儀に御座候、是は御書付申候、定て貴藩杯へも被仰渡可有之と奉存候、只今迄は御城門御番など被勤候衆過半日傭にて御座候、侍分の者ばかり家来にて御座候由に御座候、火事場杯へ被出候時分も其通に御座候、是にては頼なき儀に候由、兼て世上にても申習候、連々御聴に達し申故と奉存候。

539◆一 会津近所公領十万石ばかりの百姓、人数五万人程御代官と確執に及び候て、此の間御僉議にて御座候、此処元来直江山城守領分にて、百姓共其の時分よりの地侍にて、兼ねて六ヶ敷候由に御座候、如何様御代官の誤も有之に付、理非御吟味の上御裁断被仰出にて可有之と奉存候、万一百姓共礙はり候はゞ一々搦め取る様にとの儀にて、会津の御家へ其の用意被仰出候、夫に付彼御家中此の間勿劇の由申候、十万石の民共に候間徒党いたし候はゞ、少し六ヶ敷可有之と申候、定て無事に相濟可申と奉存候。

539◆一 寺社方随分軽く造営候様に被仰出、修理等大方は指止又は延引に罷成候に付、方々寺社修理の願等一円難調相聞へ申候、其に付上野中堂大師堂などの修復も宮様より御願埒明不申、其上御本坊御願被成候へ共はか取り不申候由、其に付宮様御隠居御願可被成などと先頃取沙汰御座候、法皇様へ御窺も被成候哉、俄に京都へ御家老罷上り申候、此儀

風説にも及候て如何と奉存候処、比日相濟候て珍重奉存候、先頃御小納戸衆浦上弥五左衛門と申人を御城より直に被遣、只今国用不足に付寺社方造營の願等諸方取次不申候、上野の事は各別の儀に候故、外の寺社と同格に不被思召候、其段は寺社奉行中とくと料簡不仕候故、一統に御取次不申と被思召候、第一御本坊は修理の事などは御延引被遊儀にて無之候、いか様にも御願の通可被仰付候、乍去近年寺社方以外華麗広大に罷成候、無益の費と被思召候、此儀は宮様杯より急度御改被成候へば諸宗の規範にも罷成儀に候、然れば天下の為に候間、御居宅各別小分に被遊修復御願被成候はゞ、思召にも相叶可然旨被申候由、宮様にも御合点被成すきと此度こぼち候て、此度慈眼大師の時の広さに被成、立家八百坪ほどに被仰付候由御座候、「是迄三千五百坪計有之由」只今迄の御本坊は至極大なる事にて候、大方御城の少は狭き物に候由申候、伝通院も比日本堂出来申候、先日参候て見申候、七間梁ばかりにて卑狭成物に御座候、箇様の寺より如此に罷成候間、向後は寺社は段々軽く罷成候。

540◆一 嶋田弾正御留守居組小身成人〔山本喜右衛門と申人の由〕比日封事を指上申候、彼箱へ入申旨申候、又は弾正に直に出し申共申候、御旗本困窮を御救被成候様との事に候、上にも金銀御不如意の事はよく奉存候、金銀の出処有之と御座候て御費用も懸り申間敷候、其儀は御尋被成候て可申上旨申上候由に候、いかゞの才覚にて候哉、此間の目付衆を以御僉議被仰付などと申候〔木下清平と申御目付衆を以、御僉議被仰付候由、一往申上候へば尤成事に被思召候由被仰出候由申候〕其身老人の事にて余命も無之候間、如何様被仰付候ても不苦候由申上候由申候、其籌策はいかやうの儀に候哉不存候へども、志は奇特と奉存候、小普請は不殘御留守居の支配にて候処、去年小普請支配十人被仰付候て、二百俵以上の面々はすきと此支配に罷成申候、二百俵に未満の人々計其儘御留守居の支配にて居申候、又は封事上げ申人は定て百俵二百俵ばかりの人たるべし。

541◆一 飯田町名主江塚五郎兵衛と申者日比学文を好み、近所に三輪善藏と申候て、只今江戸にて専ら王陽明の学を唱へ申人有之候、講席へ罷出申候、人からも実体成者に候由兼て承り申候、高倉屋敷へも一兩度見へ申候、比日町奉行所へ被呼候て、奇特に被思召候旨御褒美にて候、何も賞は不被下候へどもいかさま町中の勸にも可罷成候。

三輪善藏江戸に王学を以発向致し、歴々にも余程信用の人有之候、先日若年寄衆へ被呼候由承申候、講談などいたし候哉、其儀は不承候、人がら実体の者にて候、私も知人にて候、久しく酒井雅楽頭殿に用人役勤申者にて、世間体もよく見へ申候、酒井修理大夫殿儒臣松田善三郎も、其後有馬兵庫頭殿へ重て被呼候て講談致し候由、達て辞退候へ共ゆるし無之由にて講じ申候由に候、是等の人畢竟被召出との御儀候哉、いかゞの思召候哉不奉存候。

542◆一 先頃より林大学頭父子には謡抄を被仰付、一通り相濟上げ候処にあしく候て聞へ不申候間、仕直し可申旨にて御返し被成、于今相濟不申、人見又兵衛、林又右衛門、人見七郎右衛門三人へは令義解令集解〔令義解は板有之候、集解板に無之候、定て板行可被仰付被思召、点被仰付と奉存候〕加点を被仰付候、是もいまだ出来不仕由に候、六諭衍義をば荻生惣右衛門に点被仰付候、惣右衛門は惣七郎兄にて御座候、父は元來荻生芳庵公儀の医にて候処に、常憲院様の御代歟、子細有之候て御扶持を被放候、其時分惣右衛門兄弟上総へ引籠候て、多年罷在候内学文いたし候由被申候、牧野左平次殿と由緒有之者に御座候、左平次殿舎兄新九郎も、其時分上総へ一所に引籠被居申候、然処に常憲院様御代惣右衛門事松平美濃守殿家に仕へ御目見など仕候に付弟惣七郎を被召出候、兄をさし置弟を被召出候事、いかゞの儀に候哉不存候、美濃守殿殊の外惣右衛門を馳走被致、死去候時分遺言にて加増被申付候、只今五百石取申由に候、美濃守殿全盛の時分勤候故、長崎へ申遣書籍杯大分搜索致し候由、只今甲斐守殿へ其儘仕へ候て罷在候、金銀書籍共に富有の者にて

候、当地にて第一の博学と最負の人には申候、其身も殊の外自負致し罷在体にて候、只今五十余の者に御座候、此度六諭衍義の点被仰付候事も、彼が門下にては規模に申と見へ申候、先頃六諭衍義本書も板に被成度物に御座候、御聞被成候へば中に俗語どもまじり合点難仕由に候、唐の俗語よく存知申者をば承及不申候哉と有馬殿被申候、私申候は、俗語は字義にて不参者にて候、前後の文段にて料簡仕候へば大方通じ申儀も有之候へども、夫は推量と申物に候間、俗語をよく存知申人に被仰付可然と奉存候、岡島援之と申者長崎に久しく罷在候、唐人と出合俗語も熟し申由承申旨申候、援之は是も甲斐守殿扶持人にて获生惣右衛門より才子に御座候、其故惣右衛門も援之に唐音など承申候由に御座候、さやうの儀にて六諭衍義の点惣右衛門に被仰付たる物と奉存候、深見新右衛門父子などへ被仰付可然物に候へども、新右衛門父子には外に大清会典と申大部の書の和らぎを被仰付候大明会典と申書有之候、夫を清朝に至候て少宛増減致したる物と見へ申候、新渡の書にて外には無之候、大明会典は見申候、中々難読物にて候、新右衛門父子も難儀に見へ申候、其故新右衛門家督久太夫比日長崎へ罷越、唐人に出会吟味可仕旨願申上候て追付罷立申候、太儀成事に御座候、来年一年も逗留可仕様子に御座候、存出し次第に申進候、例の御衆へ御伝可被下候、以上。

十月廿四日

室 新助

青地藏人様

追て当地大手並桜田下馬札立直り申候事御聞可被成と奉存候、已上。

543◆一 御書物御献上の事比日承候へば、大名府志の類地志の書十四部御献上の旨御座候、上にも御書物御好み被遊と奉存候、比日は時節に候故毎度御鷹野に御成被遊候、比日麻布辺に居申候山下広内と申謙信流の軍者、一冊の諫書を目安箱に入候て上申候、近年不承直言の由承申候、勿論申所は謙信を聖人の様に申候、畢竟軍術へおとし申主意と聞へ申候へば、信用には不足候へども、いかにしても申度事只少も無遠慮申上候、委細は不能筆紙候、然処御黒書院溜りの間へ御老中御列座にて、寺社勘定町三奉行並其外諸役人とも被為召被仰渡候は、広内事輕者に候処奇特被思召候、斯様の儀御聞被遊御機嫌に被思召候、各事は其役人に候処終に箇様の儀不申上候、夫に付右広内諫言も御見せ被遊候由、夫故三奉行方には写置申由に御座候、扱々上の御度量広き事乍恐奉感候、皆承候者さへ推参の申様など、申候て不快に見へ候処、上には一向に無御構却て御機嫌に被思召候旨、御老中はじめ諸役人に被仰渡事中々凡慮難量事にて諸人奉感候、小柳町に九歳と成申候竹松と申小児、父盲目に成申を青菜など売候て、毎日二三十錢程を得候て、小米を買粥にいたし父を養申候、其身は去年以来豆腐の糟を給居申候、其段上達候て先日町奉行所へ被召銀子など被下、町の者に被仰渡養育候様にとの儀に御座候、九歳とは申候得共七歳計に見へ申由、是等も前代未聞の孝子と奉存候、飯田町名主江塚五郎兵衛と申者町人にて学文好み、人品実体にて其品にても人々誉申者にて候、先日町奉行所に被召是も御褒美にて御座候、箇様の者も出来候へども、又侍には盜賊有之候、比日も追はぎなど致し候由承り申候、何とぞ上の御徳化あまねく下へ及候て風俗改り候へかすと奉存候、以上(十二月九日 先生与山本基庸書)。

親類又は仲間出会の節覚

544◆一 祝儀出会の節は吸物一ツ肴一ツ取肴一ツ

料理平生の通に可仕候、平生出会の料理一汁三菜、此内一菜は魚類にても、平生より心を付候儀勝手次第、其外に香物吸物一、肴一二種、料理数堅く右より過不申様に相心得、其内可成程は輕仕候様に可仕候、且又後段無之、濃茶出候儀勿論無之筈の事に候。

但有合時分くわし一色程は、時により出可申候。

545◆一 麵類出候節は、料理相止可申、所望の者に計有合香物一出可申候。

545◆一 親類等も右の段兼て申聞置、先様にてても急度右の通相心得、先様へ参候節、万  
545◆一 右定を背候儀有之儀に候はゞ、料理給候儀不仕様相心得可申候。

巳十二月十六日

右の通御側向の衆より被仰聞候間、定て此間仲間にてても右申合何も可相心得候。

545◆一 荻生惣右衛門に和点被仰付、頃日書肆に被仰付印行仕候、当月廿日時分出来可  
仕旨承候、去どもいまだ出来の儀不承候、此儀は段々子細有之儀に御座候、荻生門下にて  
は殊の外規模に仕様承候、とかく重て可申上候 以上。

十二月廿四日

尚以先日山本源右殿へやらん有増申遣候、当地青山に山下広内と申者謙信流軍者にて  
候、先日目安箱へ一冊の書投進申候、題は武門大和大乘と申候由、其書去方にて一遍ひ  
そかに見申候、さてゞ直言共にて御座候、去とては豪士にて御座候、去ども畢竟儒者  
にては治りがたく候間、日本は中国の風俗と違候由、又は儒仏神共に捨がたく候事、又  
謙信を聖賢の様に称し申事、是等にて御推察可被成不足信用儀に候へ共、御当代事を少  
も不憚論申候、其処にはいか様尤成事も有之候、明君家訓をも散々に申置候、かやうの  
小さ成事にて天下は治申事にて無之由申候、其外委細は筆紙難申尽候、右広内書中へ申  
置候事、其元長公源左衛門殿、武兵衛殿などの外へは必御はなし被成間敷候、上には其  
一冊を御老中三奉行手前へ御出し被成、且又御黒書院溜の間にて、御老中御列座にて広  
内事奇特に被思召候、広内など軽者にてさへ如此事申上候処に、三奉行など終にかやう  
の事不申上候、広内一冊其に付御見せ被成候、則御老中被仰渡候、是も終に不承事に存  
候、英主の所為と奉存候、右広内書中には上の被遊方は小器と申物に候、天下は左様に  
ては不罷成候、紀州を治られ候格に被思召候へども、天下と国とは違申候、御簡略と有  
之候得共畢竟御手廻に罷成候、其段衆人よく存候、中々心服不仕候、御鷹野は昔より有  
事には候へども民の難儀に及申候、此外に御慰に成申事も可有之、度々御出被成候ては  
民の難儀を御慰みに被成候事合点不参候などと申事にて、さてゞ何世にも人有之と存  
候て感涙に及申候、明君家訓をば細川殿家来武士訓の作者と同事と心得罷在候滅板被仰  
付可然などと書し、世に上の御作などと申者有之候、左候はゞかやうの小さ事、上の被  
遊と存候ては、御為いかゞ候間滅板被仰付候様との事にて候、二十枚ほども可有之候、  
細かに書候て余程長き物にて御座候、此事外御きたは御無用に存候、以上。  
追て広内書中今一ツ尤成事は、古より明主名將終に金銀を大切に不仕候、不足申様に候  
へども、近頃正雪ごときの者にててもあれ程の事を存立候へ共、金銀に心は懸不申候、天  
下の金銀は上の金銀にて候、其を必府庫におさめられ度と被思召候事至て小さ事の由書  
申候、さてゞ申たる事と奉存候、已上(右賜札幹書)。

享保七年

547◆一 六諭衍義に旧臘唐本を荻生惣右衛門に和点被仰付印行被仰付、臘月廿四日時分  
出来仕候筈に候由書物屋申聞せ候、其後出来の儀未承不申候、此書中国の俗語まじり候由  
御聞被遊候、左候へば左様の儀不存候ては、和点難仕可有之と被思召いかゞ哉と去秋有馬  
兵庫殿御尋にて故、前後の文体にて見候へば、大方は相知申物に候へども、俗語を兼て存  
知候者に被仰付候はゞ可然奉存候旨申上候、其後惣右衛門に被仰付、是は松平美濃守殿時  
分より彼家に仕へ、只今甲斐守殿家来にて御座候、惣右衛門弟惣七郎只今私共同役にて、  
高倉屋しき講釈も相加り勤申候、惣右衛門事只今江戸にて博学文章等をもて鳴り申候、門  
弟も数多有之候、六諭衍義の訳文は印行不被仰付筈にも罷成候哉何の沙汰も不承候、但先  
本書を印行被仰付、其上にかな書をも可被仰付被思召候哉難量奉存候。

547◆一 旧臘少公より預貴翰候故、其返書に当地青山山下広内と申者の事申進候、定て  
御聞可被成と奉存候、其後何の沙汰も不承候、当年には段々御改格の儀可有之と申事に御



座候、京大坂等の御番人向後は引越候て、定役に罷成可申などと申候、小普請の内病気の者共は八王寺辺の在郷へ可参などと申候、いかさま少し存当り申儀も有之候間、左様の儀も可有之と奉存候、第一江戸余り人多に罷成繁華至極にて、夫故火事も度々有之諸物も高直待屋敷も払底に罷成申候ゆへ、江戸の戸口を減候様に可被遊との儀にても可有之と存候。

正月七日

室 新助

青地藏人様

548◆一 松平伊豫守殿跡結構被仰出候、乍恐御尤の儀と奉存候、去春か御城下乗へ松平原七郎と申人箱を捨置申候、即刻上り申候、旧臘か被仰出参州の内中根村とやらんにて芝地十三町被下之、此地田地に辟き代々領候様にとの儀にて、左様の入用とて白銀百枚被下候、於御評定所大目付横田備中守御目付平岡市右衛門立合被仰渡候、但源七郎親市郎右衛門とやらんに被下候、源七郎儀は東照宮御判の物路次に捨置申儀、不届被思召急度可被仰付候得共御宥免被遊候、当分は親市郎右衛門方へ指置、徘徊不仕候様可仕旨に御座候、右市郎右衛門事只今老人に候、子源七郎右の通訴状に及候、御前代も訴訟仕候得共御取上無之候処、此度御聞届被遊候由御座候、市郎右衛門は清泰院様曾孫の由御座候、其後祖父か父か三州の内城主にて、其時分の儀に候哉東照宮御判物所持仕候、何とぞ子細候て家督断絶に及申候と見へ申候、是等も御筋目なる御仕置と乍恐奉存候、山下広内事源右殿へ申遣候を御聞被成候由被仰下候、其後少公へ委細申進候、定て相届可申と存候、当地にても委細存申者は無之候、私はちと存候筋候て左の諫書も写を一覧いたし申候、其後何の御沙汰も無之候、畢竟御用に成人品とは不奉存候、其故欺御奉公の御沙汰不承候、去共当代には珍敷器量の人品と奉存候、只今人心安不申事は、常憲院様御代以後新に被召出候者、御目見以上の者其実子は跡被下候、養子にはすきと不罷成跡断絶仕候、旧冬以来は医師別て多く不残断絶いたし候、実子有之ても代々実子可有之候にても無之候へば、一度は家絶申にて御座候、去年も儒者の内秋山半蔵と申もの実子無之跡絶申候、俄に養子は四国実父の方へ罷帰、妻は舅土岐重元と申医官の者へ引取申候、其外老母妻女など有之者、実子無之候へば跡絶申候故、何れも存生の内より妻女など悲み罷在候、旧臘御右筆役神原三郎左衛門と申者、実子無之候に付養子願候処に、此者文昭院様御代被召出候故願叶不申候、其故此間御暇申候由沙汰仕候、是に付新座の者共はすきと眉をひそめ罷在候、冗官を沙汰仕候事は唐太宗貞觀の時分も有之事候得共、只今の役料の様成事にて候、新座にても被召出禄を一度被下候へば、是は常禄にて候、子孫の事は我人大切に存事に候へば忠臣は不存候、其外の者は第一子孫の儀を存候て御奉公も精出候、然処にケ様に候ては此後御暇申者多く可有之と奉存候、御先代終に不承儀に御座候、御蔵入は百万石と申候、常憲院様華奢を御極に付、京、大阪、江戸等の御蔵儲米すきと金銀共に虚耗致候、当御代に相成諸事御簡略被遊候て、国儲を厳有院様御代の通に可被遊との儀にて、漸く去年時分より江戸上方共に米金共に復本いたし候由承申候、其に付米金共に致払底其上に去年大分の水損に候故、一倍御簡略と申儀にて、勿論朝夕の御膳も一汁三菜に罷成、其外御城にて御老中に被下候料理も一汁一菜位に罷成候、上よりは老中以下の膳部の事は何とも不被仰出候得共、御膳一汁三菜と申儀に候故、老中已下自然と右の通罷成申候、酒も一献に罷成申候、去暮など例年被下候御褒美金など無之、御切米被下置候面々も百俵に金八両宛御借被成、当春可被下候由に御座候、御加増と申儀はすきと無之、たゞ御役料を御加増被仰付候、是は御尤に奉存候へども、夫を曾て御加増無之と申事は偽成事に御座候、功德有之人々は子孫迄も其沢及申儀と奉存候、直言をば御容納被遊御様子には及見申候へども、誰も執政諸役人の中申者一人も無之候、それも直言の人有之候はゞ弥御用可被遊候哉、其段難量儀に御座候、学も下々はやり申様には被遊度被思召体奉存候へども、是以御自分に御好被遊候御様子は

まだ承及不申候、御代々終に無之程の御英主に御入被遊候へば、何卒此上段々御治功も成就候て、万世御沢を被り候様に仕度御事乍恐奉存候得共、兎角天命有之事に候へば、時節未至不申にて可有之候、六諭衍義の儀前書申進候通に御座候、私より和語に調指上申候、已後何の御沙汰も無之候、本書は旧臘板出来百部余り摺候てさし上申由書物屋申候、外へは未流布不仕候、去冬木下平三郎事は御前へ被為召中庸講釈被仰付候、小講にて退候へば、今少講候様にと御望被仰候由、一段の首尾と承申候、来月二日より高倉屋敷講釈も平三郎始申筈に御座候、私は四日当り申候、易の泰卦の半より講申筈に御座候、去夏より土岐丹波守殿被招候て中庸を講じ申候、存の外学識有之人にて珍重奉存候、只今廿八九と見へ申候、随分好字被申候、当月も日を約し申候処此度火事にて延申候、近日可参と奉存候、存出次第書候て進申候、例の御衆うち寄御覽可被成候(正月廿三日 賜斎賢礼幹書中)。

尚以て賤息忠三郎へ御伝言忝奉存候、則為申聞候処可然申上候様にと申候、旧臘元服致候て名を改只今忠三郎と申候、此者生質至極愚蒙懦弱何程教戒仕候ても、世に申候様に釘の様にてすぎと受不申候、学文も至極不器用にて一語も通不申候、当年十七歳に罷成候へども、十歳計の愚童にて御座候、是も大成不幸と奉存候、小々不出来成子は世上に例も有之、千人に勝れ申候痴兒を所持候事不及是非奉存候、記憶はよく候故責て書を覚候様と存候て世話致し候へ共、夫も懦弱にて勤候事不罷成候、其上習あしく候故、只今大悪事は不仕候へども私居不申候はゞ、いかやう成悪友に被誘候て相応の家声を散々可仕も難量、今二三年私存命いたし候はゞ見合候て、此時分迄も改不申候はゞ料簡も有之候、左様の節ふと各様御聞被成候はゞ不審も可被思召と存候故内々御懇意候故申上置候、各様の儀は乍憚親類同事に奉存候へばかやうの儀かくし申事も無之候、外人へは父として子の事は不申筈に候得共、各様御事は各別に奉存候故申上候、中根権七郎私方に暫逗留仕候内にも、権七郎定て笑止に存候事ども可有之と奉存候、小谷久右衛門事を亡友伊兵衛殿苦勞に被致私どもにも被申候、只今身に存当り申候、何程愚痴にても小氣に候へば少理直成方有之候処に、しかも小氣にも無之候故至て危き物に奉存候、無是非事に御座候、何卒其内天助も有之少し宛も物の合点致し、禍を得不申程にも罷成候へば仕合奉存候、不入事ふと申出候て事長罷成申候、是に付ても私身後文字の事は新八郎に託し申外無之候故、此者息災を願申儀に御座候、湿瘡もすぎと快罷成候由、大慶に存候。

552 ◆ 一 春來御用の儀被仰付、且又先日は御書被成下、御領国の絹御献上被遊候由にて私へも被懸御意、重畳難有奉存候、此儀青地御兄弟其外御懇意の衆中へも被仰達可被下候。

553 ◆ 一 私御用の儀段々首尾よく相勤申候内、六諭衍義かな書のものも大方相濟、此間序跋被仰付候、近日相濟可申と存候、追付判行可仕筈にて候間、当年中には其御地などへも可参と存候、段々御好共有之候処無滯大方濟大慶不過之存候、委細は権七郎物語可申候。

二月廿八日

室 新助

奥村源左衛門様

尚以山下広内事其後何とも不承候、拝領の事可為虚説奉存候、志は奇特に候へども、申様何とも未熟千万成事に候へば、中々御信用には不足事に候処、其後御沙汰無之かと奉存候、已上。

二月廿二日の貴翰忝致拝見候、先以御健康無御別条貴丈弥御堅固御勤被成旨珍重奉存候、正月廿二日の貴翰も相達申候、春來御用繁候て他事をば抛却仕候に付、其御地へも書状を調不申、各様へ御無音罷過候、前月廿二日の御書中には、賤息忠三郎事など被仰下御懇篤の御紙上共細読、感涙にも及申体に御座候、此度取込是等の儀は省略仕候、追て可申上候。

553 ◆ 一 昨八日御用候て早々可罷出旨有馬兵庫頭殿より申來、罷出候処、御座ノ間へ被召出、書經大禹謨の内「人心惟危、道心惟微」の一段講釈仕候、首尾無残処候間先々御氣遣被成被下間敷候、其節の有増左に申進候通に御座候、去年より私へ御用の儀被仰渡候は、

御黒書院竹ノ御廊下迄罷出申候、昨日も右の処へ罷出候処兵庫殿被出、御先祖様へ御勤の儀御尋被遊候処、当分存寄の趣申上候へば、弥相考追て委細可申上旨被仰出、其上にていまた御用候間ひかへ可申旨に御座候故、右の所に相待罷在候処、御近習衆大島雲平と申人被罷出、只今御前へ被召出講釈被仰付候、書経の内を御聞可被遊候、何れの処講可申候哉可然処を申上候様にとの事に御座候、私申候は、二典三謨何れと乍申「人心惟危、道心惟微」と申一段別て肝要の段にて候間、是を講じ可然奉存候旨申上候処、追付御前へ可罷出旨にて右御黒書院より直に御座間へ罷出候処に、御直に近寄候様にと再三上意にて候故、御成被遊候向ひの敷居際までにじり寄候処に、敷居の内へ入候様に上意に付、敷居半に懸り候程ににじり寄候て平伏仕罷在候、然処に此間被仰付候六諭衍義のかな書弥出来仕候哉と御尋候故、段段出来仕候旨申上候、其より高倉屋敷講釈の事其外御尋の儀共有之、一々御請申上候、其後宰相様御儀御尋被遊候、年寄候へども健にて国政等の事今以自身に承候様に御聞被遊候、其通に候哉と御尋候故申上候は、御意の通に御座候、生質丈夫の上に平生養生能候故、只今も年に合候ては並には勝れ候て達者に御座候、国政並家中仕置等の事大小共に自分に不承儀は無之候由申上候処、法律などの事日頃定置申儀は無之哉と御尋に候故、私申上候は、別におし立定置申儀は不承候、第一大法の儀は江戸の御法令を守り候て、其通に家中へも急度申渡候、其外少々の儀は時に依候て申出候由申上候処、又御意被遊候は、家老共の中加賀守目がねを以申付候ものは無之候哉と御尋に候故、私申上候は、代々家老職を勤申は相極り罷在候、其外は目がねにて申付候ものも有之由申上候へば、其等は抜群に取立候哉の旨御尋被遊候故、私申上候は、目がねにて申付候者も大方先祖家筋にて申付候故、厚禄の者共に御座候、抜群取立候者は承不申候由申上候、扱御意には、利家は武功と申隠もなき人がらにて候、其後はあの家に指繼国政等取立申は誰にて候哉と御意にて候故、私申上候、利家は元祖にて候、二代は利長と申候、是は病身にて候故差て承及たる儀も無之候、三代肥前守事は国政の儀に心慮を尽し、此代に立置申儀共今以不易の段に罷成申候、あの家にては名人の様に申慣候、扱其子筑前守事早世仕候へども至極仁心有之者にて、忠孝ともに等しき生付にて、只今あの家の者共殊の外したひ申由申上候へば、其後私事加州には何年罷在候哉、加州雪は何程降候哉御尋被遊候故、夫々御請申上候処に、只今講釈御聞可被遊候、見台持て参候へと御小性衆へ被仰付候へば、其儘御見台持参仕候処に御成被遊候、御間敷居の内へ見台直し候へと上意に候、扱私儀右御縁類に平伏致罷在候処、御間の内へはいり候へと上意に候へば、相伺罷在候処再三上意に候へば、御見台の際により不申候ては講釈成不申事故、乍慮外足を半分御間の敷居にかけ候て、御見台の際へ寄両手を突講釈仕候、其に付上意には文字等の義理上御不案内に候へば、委敷申上候ても御得心難被遊候間、文字の訳は不申候て唯道理を第一に申上候様にと、御笑被遊ながら御謙遜の御様子にて候、講釈済候て其儘にじり下り候て退出仕候処に、御意には講釈能わけ立申事にて候、ケ様に候へば御前の御耳などへも落申候、重ても今日の通にて心得候様にと御意に候故、其儘立とまり候て御礼申上退出致し申候、先有増此通にて御座候、冥加に叶ひ難有仕合可申様は無之候、是も御家より罷出申故一ツは御心易も被思召候かと奉存候へば、宰相様御威光と難有奉存候、然其此段申上候事はいかゞと奉存候故、心底にばかり存罷在候、其元へは貴丈の外へは不申進候、講釈は人心惟危の一段蔡沈が註迄講申事に候、劣甥新八郎へも此趣被仰知可被下候、奥村殿小寺殿尤御舎弟様へも被仰達可被下候、今日の便に早速申進候、此紙面昨夜燈下に調候間わけ見へ申間敷候、以上。

三月九日

室 新助

青地藏人様

尚以左に申通講釈の時分、御側衆御小性衆、御小納戸衆、御側医師衆不殘御次にて承被申候、何も罷出聞候様にと上意にて候、八時半時の事に候故御老中などは不殘退出の跡

にて御座候、扱々晴がましき事に合候て、退出候へば汗に罷成申候、御威光故とは申ながら平生の養生不足故と今更恥入申事に御座候、御心安かやうの儀も申上候、以上。追て左の一巻例の御衆の外へは御沙汰御無用に奉存候、其段は私より貴丈に常々御心に被懸被下候得ば不及申上候以上。

右紙面三月廿日頃到来、幸藤大夫儀廿二日令首途江戸へ罷越候に付、藏人方より舍人殿迄相達奉入御覽候、去年も此類の来状有之候、但其時分は秘申度様子の儀御座候に付、封印を以直に差上申候、此度は又左様の品は無御座候に付、舍人存寄次第第一覽有之候上にて被指上候様に副状も仕相達申候、四月三日参着仕即日に舍人まで相達、且又口上に申合候は、去年一度並此度の紙面の御内見の趣新助殿には聊不申入候、承被申候ては若泥みも出来候ては如何と奉存候、夫故一向の趣は其心得可被成旨申述候、翌四日舍人被申聞候は、昨夜右紙面被返下相返可申哉、ケ様の物は又御請被遊候儀も有之候故、此方に取置申度存候、如何可有之哉の旨被申聞候に付ひかへ置候間、本紙は其許へ御留置可被成候、其段藏人へも可申遣旨申述候。

556◆一 拙者事一昨十七日御用候て登城仕候処、又講釈被仰付候、臯陶謨の首二段註とも講申候、首尾よく相勤候間可御心安候、知人安民の処、巧言令色孔壬の処随分委細申上候、講釈過候て又上意共有之無残処首尾にて候、有馬殿、加納殿杯も御次に聞被申候、感心の体にて候、打続侍講被仰付難有仕合に候へば本望の事に存候、老後に至候に多年学申候效も有之候間、寸志直に申上候事冥加に叶候儀に奉存候、近日の町便に先草々申進候、青地殿奥村殿などへ被申伝可被下候、以上。

三月十九日

室 新助

大地新八郎殿

557◆一 六諭衍義の事御尋被成候、去年一通り下書相濟差上候処、当春に至り又御好共有之やうく前月廿日に相濟書坊へ相渡り京都へ遣申候、追付板出来参可申と存候（四月三日 賜小寺遵路書中）。

尚以高倉屋敷講も今以無異議相勤申候、只今拙者は易を講申候、豫卦迄参申候、此度巡講に付下見候て、易をば余程合点仕様に覺申候扱々世変物情の中の儀共、聖人さへ太過なき事は易により候様に被仰候、左様に可有之儀に奉存候、木下平三郎詩経、荻生惣七郎は礼記、土肥源四郎は書経にて候、何も聴衆鮮少に候、荻生礼記杯は七八人十人位有之候、平三郎詩経は二十人余と相見申候、拙者易只今は総てよりは聴衆多御座候、四十人余五十人に及申候、以上。

557◆一 先頃青地長氏迄申進候、侍講の儀貴公にも御覽被成候て、此度思召共被仰聞致承知候、右私紙面は青地兄に被仰談当地へ被遣候由不存寄儀に御座候、乱雑の紙面如何奉存候得共、最早被指上候儀に候へば其通に奉存候、八日以後十七日外の御用にて登城候へば又侍講被仰付候、先日早々新八郎迄申遣候御聞可被下候と奉存候、其日の首尾有増左に申進候、御慰に御覽被成例の衆へも御廻し可被下候、先十七日御用の儀にて罷出候処、四ツ時過より八ツ半時迄埒明不申、空腹にも罷成散々に疲労の処、侍講可被仰付旨有馬兵庫殿を以被仰出候、いつも八ツ時迄も在城候へば、御目付中より頓て御台所へ参食事調申候へども、其日ははや済可申様に存候て待合申内、右の通に御座候故支度可仕様も無之候、扱先日講じ申候末に安民と申処有之候間、其処を講じ候様にとの儀に御座候故、兵庫殿迄申入候は、只今空にて存付不申候、ちよと御本を御見せ被下度旨申候へば、御前より書経を被致持参、見候て上候様にとの儀に御座候、八日に講じ候は大禹謨の内にて候、其よりよほど末に臯陶謨の内に、臯陶曰「都在知人在安民」と申事有之候、此一段は前の段を承り候て記し申候故、前段より講じ不申候はゞ語意貫通は仕がたく奉存候、前段より講じ候てはよほど長く可有之候、御退屈も可被遊候間文段の続きはいかやうに候へ共、右安民の

段ばかり講可申候哉の旨兵庫殿へ申談候へば、其儘窺被申候処、前段とも講じ候へとの儀に御座候、前段は「日若稽古臯陶曰云々都慎厥身修思永云々」其次段に臯陶曰「都在知人在安民云々何畏乎巧言令色孔壬」と有之候、さて兵庫殿遠江守殿引導にて御座間へ罷出候へば、八日の通に御成被遊御見台に御書物のせ候て、御成被遊の間に敷居際に直され候、御目通平伏候て罷出候へば、づつと参候様に上意に付其儘膝行いたし、右の御見台に付候て両手を突講じ申候、昔に候はゞ是程の儀にはよはり申間敷候へども、中々其御地に罷在候時分などと違候て、朝より相詰候故老衰精神疲候て声も出にくき程に御座候、去共聖賢の御蔭にて根に強き処有之候故、急度辞氣を改候て講申候、勿論御側衆其外御后従衆、御小納戸衆など迄不殘御次に被承候、四書と違候て五経は常に講じ申儀も無之、其上下見も不仕ふと講候故、何の料簡も無之書に向申候て一通本文を素読仕候内に料簡いたし申候、講説の内私料簡にて申上候処計只今書付申候、「厥身修思永云々」と有之候処、私申上候は、修身と申候事大学八条目の一ツにて御座候、先手短に申上候はゞ、身の修理を仕候事にて御座候、不義無道の人は僉議に及不申儀に奉存候、其外は大略さしたる悪も無之候へども、工夫無之候ては日々に破損仕候、一言一行にても氣随成事有之候敷、道理に違申事有之候へば身の破損と申物に御座候、修理を加へ不申候て捨置候へば、段々に大破に及申事に御座候、殊に人の上に被成御座候御身は、一言一行も下々手本に成り、人々目をつけ罷在儀に候へば、日々に御修理を被加候事簡要に奉存候、是身修と申物に御座候、思永と申は何事も一旦の料簡にて仕事は必後悔有之物に御座候、軽き事にてさへ左様に御座候、況や天下の政事などは一旦の思案にては難仕事に御座候へば、末を慮り候て相定候を思永と申候、扱次の段に及び「在知人在安民」の処、安民と申儀人君の第一の事に御座候間、安民を先に申候て知人は其跡にて可申儀に候処に、臯陶知人と申事を安民のかしらに被申事意味有之儀に御座候、安民は第一人君の急務に御座候へ共、御器量御座候ても御一人の力にて治り申物にては無之候、よき人を御拳被成候て夫々に役儀被仰付、手分被成御治め被成外は無之儀に御座候、然ば人を目き、仕事安民の道具を求申様成物に御座候、刀鈍く候ては何程の勇士も働自由に罷成不申候、夫故其次に安民と申候は「知人則官人」と申候、百官各其職替り候へば、官人と申候は夫々相応の材ある人を其官に仕を官人と申候、凡人と申物、材に得かた不得かた有之物に御座候、一ツも用に立不申者としては余り無之ものに御座候、知人と申候時は、其材の得かたを目利仕候て、相応の官職を命じ候へば皆用に立可申候、其用様悪敷候はゞ用に不立の人多く出来可申候、去るに依て知人と申事聖人さへ難事に被思召候、其のみならず、今一ツ聖人の常々御油断不被成事有之候は、巧言令色の人を風と用られ候へば大成害に候故是を氣遣被思召候、材を知て用ひ不材を知て不用と申迄にて候へば余り難儀にても無之候へども、材有人の内軽薄者有之候、風と材有にだまされ候て用ひ候へば、国家天下の禍にて、此人材有之候故言葉を巧に致し、顔色をよきやうに似せ候て尤成事計申、又は正しき人の様にも見へ申候故、ふとだまされ候て用ひ候へば、上の権をかり候て己が自由を致し人をそこなひ候得共、其非を巧言令色にてぬりかくし申候故、後にはあらはれ候へども初には是を用ひ候て後悔仕候事、唐日本古今共に毎々有之儀に御座候、聖人の明智にてさへ是を畏れ給ふ儀に御座候、材有人の中に此品の人必有之物に御座候へば、御油断難成儀と奉存候大略此通に御座候、蔡沈が註ともに講じ候故よほど長座にて御座候、相濟候て御前を其儘退出仕候へば御呼懸被遊、只今の講じ申趣に候へば、禹は此時いまだ天下の主にて無之候哉の旨御尋御座候、御意の通此時は臯陶と同じく舜の臣にて、互に政治を僉議被成候儀にて御座候旨申上候へば、また六諭衍義かな書はやく出来候様に被遊度旨上意にて候故、一三日中に差上可申旨申上其儘退出仕候、有馬加納兩人御次にて講釈よく聞へ承事に候由被申候、六諭衍義かな書去年出来差上候処、当春御出し被成書中少し宛御好みの処有之、其をひたと改指上申候、其上序跋も被仰

付旁板下未相濟候故、右の御ふり御尋に御座候、よき手にかゝせ可申旨被仰出候故、筆耕には如何に存候て、当地にて尊円流の能書と世に申候石川勘助と申浪人の事申上候へば、勘助手を御覧の上に此者に可申付旨に為申談候、一三日過候て勘助方より相濟候てさし上、跋は唐の文章に調可申旨に付、跋ばかりは私手跡にて調さし上候、其後相濟候て前月末に書坊へ町奉行中より被相渡、早速京へ遣し板にほり申候、近き内には板出来參可申候間其後諸国へも流布可仕候、随分簡約に被成度由にて漸かな書四十枚程可有之候、六論衍義大意と名付申候、是も御好みに御座候、末に詩每篇に有之候、詩をば其儘不殘日本往來物の様に大きく調させ可申旨被仰出候、是は民家などにて小児の手習仕候物に、幸手本にも仕候様にとの思召にて御座候、今川庭訓の様成類にて、其よりは風教に助け有之物に御座候、本書を少宛取候て一々直し申にては無之又一通りかな書の書体別の物に御座候、頓て其御地などへも參可申候間御覧可被成候。

562◆一 去年以来御用の品ども多端に候へば、一々は筆紙に難尽候、防火の儀治水の儀などに付御尋の事有之候、此間は御先祖様へ御追孝の事去年も御尋被遊候、又此度も被仰出候、今迄不被遊儀にても向後被遊可然儀と申上候へとの儀に御座候、是は委細に申上候、四時の祭忌日の祭被遊候様に仕度、上野増上寺にて被仰付候ては魚肉は御用難被成可有之候間、御精進に成共御丁寧被仰付、酒は日本にて神前にもそなへ申儀に候間、儒者もさして驚申間敷候間、三献の御拝礼有之候様に仕度候、若又紅葉山にて被取行儀に候はゞ、魚鳥の御料理にても無構事に奉存候、此段御料理被遊候様仕度、さて毎月朔望には御廟へ御名代として急度大臣を被進、御上香可然奉存候、其香をば於御前御直に御渡、勿論御頂戴被遊御済被遊可然奉存候、御祭礼の時分は御自身に御配膳可然奉存候、但御膳を御持參被遊候には及申間敷候、御かよひの者持參し候を、御位牌の前にて御取被遊直に御居へ被遊可然奉存候、有増箇様の事にて候其外も御尋の儀共書付申上候、其度毎に大形委敷申上候段為申聞候へと被仰出候、推參成事ども毎々申上候へども、少も思召に背申候様子にて無之候、私申通尤に思召候へども、其通には御行ひ難被遊由、御意旨先日にも有馬殿被申候故、私申候は、向後にては御尋の儀有之候節は、上の御行ひ難被遊を考候て取繕ひ申上候事は難仕候、私へ御尋に御座候へば乍推參私料簡の通を申上候、其上にて御用捨被遊候段は上の御料簡次第に奉存候、左様に各様にも御心得被下候へと申置候、只惜くは人材すきと無之御精力を被尽候事乍不堪感歎候、先日も衣服料理等式法御定被遊度由有馬殿被申候、内々私へも咄申置候様にとの御儀に候由、先以難有仕合奉存候、衣服等も御式法定り候はゞよく可有之奉存候、左候へば私共召仕候若党等の者は、木綿衣服相応の儀に候へども、御城下などへは絹の衣服にて無之候ては不罷成候故是に難儀仕候、左候へば私共召遣候者も、歴々の侍もさして替申儀は無之候、但諸事の式御定被遊候も、必竟天下の風俗改り候様にとの思召故にて候、只今の風俗中々式法にて改り可申旨は不奉存候、元より前に急度御教令有之候て、諸人耳目を改候様致し其後御法式出候様に仕度奉存候、たとへば五穀の種何程よき種にても、地を拵へ無之沙石荆棘を去り不申候て其上へまき候へば、何程種よく候ても育ち申まじく候、先地拵へを被遊候様に仕度由申候へば、有馬殿殊の外感心の体にて御座候、大方被申上たる物と奉存候。

右の諫勿論国家の秘事にても無之候へ共、外へはすきと不申事に御座候、貴公青地長公扱は小寺殿へは御見せも可被成候、新八郎へも御見せ置可被下候、扱御覧濟候はゞ、此紙面火中被成可被下候、御両所並新八郎などへ御知らせ置候事別事に非候、私事迄居申候へば仕合と奉存候、余り久敷は罷在間敷候、七十迄罷在候てもはや四五年にて候、死後に私数ならず候へども是程には身をも立申段、文字の端にも申こめ置度との事に御座候、名聞の様に候へども、立身行道顕名後世は孝の終とも有之候へば、立身行道など申事の万分ヶ一にも不足事に候へ共、少々平生の所学に負不申とも可申候敷、御隣察可被下候、尚期後音

之時候、以上。

四月九日

室 新助

奥村源左衛門様 貴報

私儀昨夜御台所町火事に付罷出候時分に、立野筋と申候に付石川町迄罷越、新阪へ懸り笠舞村通り罷越候処、笠舞村入口狭く火消の面々被罷帰候に付、尚又込合馬上にて難行違相見候故、馬より下立歩行にて道の左へ寄罷越候処、笠舞村中藪たゞみにて梯子持候者の跡より、若党体の者火本を仕廻罷帰候様子にて行違候節、先へ立候私提燈持を突のけ、其次に罷在候私若党小崎喜内と申者に提燈持突あたり、其次に罷在候私へも右喜内あたり申程の体に付、右喜内申候は、此方より道を除け罷通候処、如何の儀とあなたを突のけ申候へば、右喜内胸を取候に付此方よりも彼の者の胸を取申内、私若党の内草野政右衛門と申者、並町附足軽小頭岩脇太左衛門立寄、道脇の藪際へ押臥候へば、右若党体の者名を為名乗られ候へと申に付振放候処、其儘起上り藪の内通百姓家前へ逃申候、群集の内逃失申と存、右私家来共は最前の処に罷在候処、脇道より私罷在候道へ罷越、主人は何方に被在候哉と、又者体には慮外の口上にて声を懸申に付、是に罷在候て先刻よりの様子見届候処、道を除け罷通候者を突のけ段々不法法の体、何方の家来に候哉と申聞候へば不及返答刀に手を懸、私前へ間近く罷越半抜懸申に付抜打に仕候、藪の内にて提燈も間も隔有之、闇にて見兼候へども面の内へ切付申様に覺申候、右の疵にて後へ退候処を又切懸候へば、逃出候間追懸候へども藪の内へ入、其内群衆の内へ入交り逃失申候、私儀近年痛所御座候て行歩も不自由に付、追掛切留不申段心の仕合に御座候、其辺家来にも為相尋候へども、疵付申者も相見へ不申候間、傍輩共など引取申体に相考候故、先其分にて罷帰り申候、手付申者の儀に御座候間奉願度所存の品も御座候へども、私役儀にては火事場へ罷出候御役人中、毎度於火事場致参会御用等も申談候儀に御座候へば、互の家来以来迎も如何様の首尾可有之も難計儀に御座候故、其段は差扣申候、大方の儀は毎々其分に仕置候へども、夜前の儀は右段々の首尾殊に私へ手向申候故無抛仕合に御座候、右若党体の者何方の家来に御座候哉相知不申候間、旁以御断申上候、以上。

三月十二日

宮崎長太夫

奥村内記様

右の儀に付同十四日月番内記殿の宅へ長太夫御招、江戸へ言上被成候間、自分遠慮可仕旨被申渡候、其夜御用番をも同役金森内匠に引渡候、翌十五日内匠迄左の通紙面長太夫方より差遣別紙相添存寄有之に付不遁者へも不申聞候条、寺西三郎平始め必沙汰無之様に申遣候。

私儀今般於火事場大音帯刀家来手向申候に付、切害仕候趣先達て紙面を以申上候処、江戸表へ被仰上候間、自分遠慮可仕旨昨日被仰渡奉承知候、上より被仰付候遠慮にて御座候へば、兎角不及申上儀に御座候、自分遠慮仕候様に御座候へば、今般の首尾先達て申上候通り、帯刀家来無法の仕形故、私家来も難黙止仕合、私儀へも手向ひ申す上は切害可仕外無之儀と奉存候、帯刀儀も其場にも不罷在一円不存儀御座候へ共、家来の儀に御座候へば、帯刀手前も何とぞ品も御座候はゞ、何分にも可奉畏候得共、私共自分遠慮仕候儀、又は軽き者相手の様に罷成候首尾に御座候ては、向後火事場へ罷出候ても、御役儀の締りも無之無詮仕合奉存候、重き御役儀も被仰付置、重々御厚恩の私儀に御座候へば、如何様の儀に御座候ても何分にも可奉畏候へども、外の儀と違迷惑至極に奉存候、仮令追て遠慮御免許被遊候ても最早御役儀難相勤首尾と奉存候、其節存念申上候ては御意の上恐多奉存候、各様御心得を以被仰渡の節存念申上置度、覺書を以如斯申上候、以上。

三月十五日

宮崎長太夫

奥村内記様

右紙面之趣に付十五日出仕の刻、於御城内匠内々を以野村勘兵衛次に伊藤内膳へも相談、内匠も同役の儀何とぞ指留候様にも可仕候得共、今日其身の上に箇様の儀有之候ても同事に存念候故、指留可申存寄は無之候、然共乍此上何卒御年寄衆御相談の筋も可有之哉と紙面扣置、箇様にと紙面私迄指申出候、如何可有之哉の旨御内談申入候処、各御詮議の上十五日内匠迄内記殿御申渡の趣、右の紙面の通に候。

只今金森内匠被參被申聞候は、内記殿より申談度儀候間可參旨申来候に付、則參候処、宮崎長太夫儀昨日御用差扣自分遠慮仕候様申談候へ共、今日弥僉議いたし候へば、及其儀間敷候間遠慮無之罷出、御用も相勤可申候、不致出仕儀御帳にも難調儀に御座候間、煩にて罷出不申旨紙面相調可被差越候、明日も早速罷越候儀如何に候はゞ、先当分気色相滞候分にて引罷在可然旨御申候由被申聞候付、被仰越候趣承知仕候得共、昨日より致遠慮御用番も相送、町中触渡候上の儀に御座候得ば、一日遠慮も千日を遠慮も同事に被存候、差扣申儀は如何様共可仕候得共、罷出御用相勤申儀は難成筋と被存候故相勤間敷候、私支配無御座候事に候はゞ、右任仰罷出御番等も可相勤候、右の趣にては御締にも難成趣に存候、且又今日出仕不仕儀氣分引の書付出可申旨、此儀は別て難成趣に被存候、数年御横目役相勤罷在候、私事箇様の書付等差出候ては御後闇儀、又々支配有之者箇様の儀仕候ては、支配中箇様の類申出候時分、如何相心得可申物に御座候哉、決て私儀は指出申間敷候、此旨御申達可被下旨申入候、去とも内匠殿何卒私料箇不宜儀も御座候はゞ、被仰聞候様仕度旨申入候へば、何とも不及挨拶旨被申、兎角其段内記殿可相達候、併従是伊藤内膳殿、野村勘兵衛殿罷越致示談宜料箇も御座候哉、其上にて内記殿へ罷越候敷、又是へ罷越候敷可仕旨にて帰被申候、御案内如此御座候、以上。

三月十五日

宮崎長太夫

三郎平様

右御披見被為成候て、伊織殿、藏人殿、藤太夫殿、兵庫へ御廻可被下候、以上。

右の趣に付勘兵衛殿宅へ内記殿、内匠殿參会相談の上、藏人呼に被指越、罷越示談の上、十五日夜勘兵衛殿、内匠殿、藏人三人同道長太夫宅へ罷越、各存寄段々申入候上、如前々罷出可相勤に罷成、其夜内匠殿内記殿宅へ被罷越、今夜より御用相勤候段被申達候、十六日より出勤事済申候、出仕の儀は長太夫存念の通御申達此方より不及貪着候、帯刀家来は□と申者にて右之疵不宜相果候旨□。

先達て長太夫殿一卷に付、御当地にて承及申趣有増申上候、其後慥に承申様子は直に長太夫へ申遣候、御聞も被遊候哉、当地にては区々に申慣候、十五日重て御僉議有之候て不及遠慮候儀御近習の衆を初めにて、誰にも皆申様は、豫州殿湿瘡にて引籠り、最初の僉議に不被相加候に付、自分に遠慮可申渡候処、散々不同心にて沙汰の限成内記殿御取捌とて気に入不申、重て不及遠慮趣に罷成候、流石の儀と皆々感申旨にて、私へ被相尋候表裏の儀何共返答に難儀仕候、並々の衆中被相尋方へは御僉議相替候趣は、金森氏殊外世話に被致候様子の体に承及申候と迄返事仕置候、右兵衛様御兄弟復庵、郡弥三兵衛、高田弥右衛門其外に庄田、青木兩人衆へは有増申聞候へば、皆々大違成推量説とて我折に御座候、借此許の御沙汰若存ずる様無御座候ては氣の毒成事と奉存候処、至極御尤成御沙汰共に御座候、此事も区々にて信用難成事共も御座候付、凶書殿へ潜に御尋申上、荒々被仰聞候て安堵仕候、定て其許にても潜に御聞も可被遊旨奉察候、但是も重て御僉議相改申趣は何故にてと申儀は、御存知無御座候故一々御物語仕候、爰許へ始て申来候は、其許十六日出の早飛脚廿二日に到来、早速達御聴候処、長太夫自分に遠慮申渡候は如何之儀に候哉、早々為政出勤候様早飛脚を以可申遣旨被仰出、廿三日朝其段申遣候、御親翰を以長太夫儀於武備



拙き様子は無之儀と思召候、但何卒武道に拙き子細も候哉、其段僉議仕可申上旨、三人の衆へ被仰出候旨各僉議仕候処、御意の通に奉存候旨御請上り申候体に承及申候、然処十九日日出中飛脚廿四日到着、其節重て僉議仕候処、長太夫不及遠慮事に示談仕候に付、十六日より出勤仕候旨言上有之処、尤に被思召の旨被仰出、其段申遣候由被仰聞候、此趣に御座候へば、此度の巨細は先無言上事と奉存候に、今伊豫殿の御思案候て重て御僉議相改申と覺申候衆中多御座候、是程の大儀を御病中なれば拙、最初不及御相談事可有之候哉、夫は推察の説に存候間申入候得共、委細の首尾物語不仕候面々は合点不仕候、此紙面の趣尚更長太夫殿に御逢被成候節被懸御目、其上にて火中可被下候。

569◆一 右衛門督様御参府当六日に御座候、御夫婦様御間柄如旧被為成、恐悦至極の御様子に御座候、御着の日大塚久太夫を御呼被成被仰聞候は、近年御夫婦様御間柄の事御あやまり被成候、今年よりすきと御改被成候、依之お賀長八郎様御袋事は御殿出前縁に御付被成候、当地にて御息女様御袋有之候、是は芝の御屋敷へ先遣し御上屋敷に有之候、表御広敷はこぼち可申旨御直に被仰渡候、六日より昼夜如旧御広敷に被成御座候、久太夫儀は去春御自分に鳥取へ罷越、近年御夫婦様御間柄の御不出来をすきと存寄申上、偕立帰相公様御前へ罷出、御夫婦御間柄実は御別条無御座候趣明細に言上仕、此上の事は私奉談合候などと直に申上置候由、然処今般右の様子にて久太夫安堵大慶可申様無之候、忠厚の至と奉存候、私共迄恐悦の事に奉存候、以上。

四月十日

青地藤太夫

藏人様 密啓

先生其許迄被遣候御書中に御先祖様へ御つかへ被遊様御尋に付て、右の一件如何様の儀に御座候哉、不苦候はゞ其筋承知仕度旨申上候処、御祭の儀に候、今般被仰上候趣は、存生の父母先祖等へ年始其外振舞仕候時分、精進の膳部と申儀可有之様は無御座候、上野増上寺等の御廟は寺院の内に有之儀に候へば、魚鳥御用難被遊儀に奉存候、幸紅葉山に御廟御座候へば、此品にて四時の御祭礼有之急度魚鳥を以御祭有之、三献の儀御自身に御執行被遊候はゞ可宜候、上野増上寺にても酒の儀は不苦儀に可有御座候へば、三献の儀は兎角御自身にて可有御座候、扱御祭礼相濟於御牌前其御酒御頂戴可被遊歟、幸此儀は於紅葉山も権現様御酒は只今迄御頂戴の旨承候へば、外の御酒も御同前に可被遊候事歟、新物は只今迄も御献上の儀に御座候、是も毎度御使者御前へ被為召御自身御渡可被遊歟、御代香も右の通にて可然奉存候、中華の天子亦廟へ使者を以献上等の節、香は必頭上に戴候て、其上にてつかひへ被授候礼儀に御座候故、箇様に有之度物に奉存候旨被仰上候処、一々尤に被思召候、但只今の時節、何とも左様には難被遊有之様思召候旨、兵庫殿を以被仰出、兵庫殿迄被仰入候、総て私御請の心得は聖賢の意に相叶可申と奉存候趣を以直申上候、時勢におゐて可宜哉否との考は、先は不仕心得に御座候、御用捨は御上の御裁断に御座候、此以後とても左様に御心得可被下候、平生学問の力を以存寄候通、真直に申上候旨申述置候旨被仰聞候、此頃愚直の儀被仰忌諱に御触可被遊哉と少御氣遣にも御座候処、一段の御首尾にて御安堵被成候旨被仰聞候、是は如何の御様子に御座候哉と御尋申上候処、色々考物被仰付一々紙面に御請申上候、其紙面の内に一事申上候趣は、近年井上河内守殿など御相談ばしらにて、常憲院様御代以来被召出候者共実子の分は役目被仰付候、養子の分は一向御取挙被遊間敷旨被仰出有之、其後段々右の趣に罷成候に付、数年以来養子に致し置候者も実父方へ相返申すも数多有之候、実子有之者もいつまで実子つゞき可申も難計儀に候故、兎角憲廟、昭廟、章廟此御三代に罷出候者共は悲泣仕迄にて人心不安候、此一事にて御譜代の族迄も色々誹謗仕候、尤常憲院様御代被召出候輩の内には役者如きの者共多く、医師などにも膏藥一包指上候へば、早二三百俵宛被下候て、官医の列へ入申候、此等の輩有之候につきての御新令には御座候へ共、是等の為に左も無之者迄も一律に罷成候儀、人心不

服の第一事と奉存候、何とぞ御処分有之儀と奉存候、且又御加増被下候分は一代限に御取  
挙可被遊との儀は左も可有御座候敷、周の代世祿と有之候は、士は士の祿定り有之卿大夫  
も卿大夫の常祿有之、其常祿を世襲仕事にて、位田等の類は世々仕可申様無御座候、左候  
へば御役料同意に御加増の分は、御取挙被遊候とても是にはさのみ人心不服之患は有之間  
敷奉存候など、申様成事共にて、此外にも少寸志を申上候、一々御覽被遊尤に思召候、只  
今御前へ被為召出、猶更御直に存寄御聞可被遊と思召候へば、山里へ被為入候刻にて不被  
召候、此旨可申聞旨兵庫頭殿を以被仰出候、総て御意に応候儀は大方御前にて御聞届被遊  
候、左候へば御聞届も被遊故と忝奉存候、只恐くは御寛大にて右の様子成存寄相調紙面も  
封じ申儀成不申候、其故取次の衆御覽の前に内見仕候様子に御座候、是は却て気の毒成か  
たに被思召候旨被仰聞候。

右両件当廿八日御面語の節承知仕候、奥村丈御父子並小寺大地両兄其外も不苦御衆へ御物  
語可被下候、以上。

四月晦日

青地藤太夫

藏人様

今度増上寺にて有章院様御年忌の節、御茶湯は上様御自身御備被遊候旨、世間沙汰にて承  
申候、是は先生被仰上候趣に付御感動被成、先御茶湯にても御備被遊候哉と奉察候、御代  
々終に無之儀の旨にて取沙汰仕候(右同人五月廿二日 書中)。

三月十七日侍講以後、前月廿九日又御前へ被召出良久御直に御尋の儀共有之、其上にて私  
此度撰進仕候六諭衍義の跋を講じ候様との儀にて御前にて議じ申候、委細は筆紙に難申  
尽、其より前御尋の儀有之候て段々書付候て上候処に、右廿九日御前に罷出候節、御直に  
上意有之御尋の儀、當時に一々引当申上候事別てに被思召候、其上所存の儀共申上候、是  
又御覽被遊候由御意に御座候、私申上候は、推参の儀共申上候処に、難有上意冥加に叶申  
候由直に御請申上候へば、御笑被成御会釈の御様子に御座候、是にて余事御推察被成可被  
下候、藏人殿へも其趣御達被成可被下候、只老衰精神日々減候様に覺申候(五月廿四日 賜  
奥村修運書中)。

昨廿六日先生御殿迄御出被成、左兵衛殿を以被仰上候は、昨日有馬兵庫頭殿より御用有之  
旨申来登城被成候処、段々被仰出候趣御座候、就夫直に可申上儀共に御座候、急成御用と  
は不奉存候間、何時にても被仰下次第参上可仕候、先右□□□□□承合に参候様、推量と  
噂も可有御座と指し扣へ、来二日頃何とぞ罷越御物語承知可仕候、先此趣源左衛門殿新八  
郎殿へ被仰達可被下候、廿九日出に若其許へ被仰進候は、御状の御写一通私方へ可被下  
候、結句夫にて早も又委敷も承知仕候事可有御座候、以上。

五月廿七日

礼幹 拝

密事の次第申上候、去暮の儀に候哉、林家より金子を過分に相公様へ御預被申、利潤の  
加り申様にとの儀に御座候て、則会所奉行へ御渡置被遊候旨、左兵衛殿始承及申衆中の  
咄に御座候、御前へ事の外御隠密と相見へ、笠間氏などへ尋候へば、一向口も開き不申  
候、近頃不興成事市井の徒も可恥事にて御座候、是にて存当り候へば、安芸侯家への儀  
も同事と奉存候、御前に御難儀に可被思召候、是を笑止に奉存候、以上。

574◆一 先生御宅へ今朝御見舞申上候処、今度の一巻委細被仰聞、有増覚申趣左の通御  
座候。

去廿五日有馬兵庫頭殿於御城被申聞候は、御自分存知の通近年以来御産所入少く御用も手  
痞候上、去秋御領過分の損毛に付、御蔵米を以御切米等被下候儀も成兼申体に候、諸侯の  
家の仕置等方々御聞合被遊候処、家中跡目或は半分家督申付候も有之候、或は加増新知の  
分は指除、代々取来候知行迄も申付候も有之候或は家督の節知行は付不申族も有之候、只  
今公儀の御様子にては御加増新知可被下候様も無之候、常祿さへ指痞申積候故、此通にて

は末々に罷成御蔵入払底に及可申候、ケ様にては埒明不申儀にて候、加賀守殿事は大国と申し、其上只今は年来に候へ共、ついに家来等に相違無之体に候、然処加増新知の類不絶、そこ／＼に被申付候様子に候、定て何卒心当の図り考等の有之儀にて、数十年以来の格不相替儀と上にも思召候、御手前被罷越加賀守殿の料簡の趣承候て可被申上候、則御内意に付申聞候旨被申候、先生被仰上候は、委細奉畏候、此等の趣以紙面は難申達奉存候、取次を以申述候儀は難成筋に御座候、直に相尋候様に可仕哉と奉存候旨、被仰達候其儀は相伺可申旨にて暫間有之被罷出、上意には成程直に承候て可然儀に候旨被仰出候、依之翌日御屋形へ御出被成、佐々木左兵衛殿を以被仰上候趣は、則先書に申上候通に御座候、扱相公様御居間書院にて御逢被成、御側衆を御呼被成候故、脇差を取御寄候処、只其儘と御意に候得共、無刀にて御側へ寄候て御仕置方の儀に付、直に御尋申上候て思召承候訳にて御座候旨申上候処、御用の儀に候へば幾度も御逢被成て能候、又は紙面にて可然旨御意に付、紙面の儀と心付候へ共、少難調筋も御座候、其上直に承可宜旨上意に付、何時にても御逢被下候様に申上候処、早速御目見被仰付於私忝儀奉存候旨御挨拶申上、其上にて右御尋の趣申上候へば、近頃不被思召寄儀にて難有思召候、御尋にて被思召候へば、いづれも只今迄御家中家督等被下候儀御格無相違被仰付、但何故に指つかへ不申候と申御考も無之候、又此図りとして御心当りの儀も無之候、此御尋にて御当座に被思召、当日は御家にて十五六歳迄の者は、知行の三の一被下、三の一被下置候者不絶有之候、且又有故て跡目断絶の者間々有之候、扱は新開の地出来仕候も多有之候、此三色にてむめ合申かと思召候、此外に御考被成置候御図りなどは無之候、差当り此外に御請は無御座候、只今は御老耄被成候仕置の儀も思召様も難被成候、そなたの蔭にて能事心付候間若狭守へ申含置、若狭守代り成候はゞ、ケ様の考可仕置儀に候、最早手前代の内其間も無之儀故、家中跡目等の差支申事は有之間敷候、扱は御請にては無之候、御手前への物語に候。

敵有院様御代々御腰脚指痞申儀有之、其上凶年にて何とも可被遊様無之に付、諸大名より夫々知行米御借被成可然との御相談有之候処、保科故肥後守殿達て其儀は不可然事と被申上、只敵敷御儉約被遊候事に候、扱は旗本中の知行の免御借被成候て可然哉とて、是にて事済申候由、肥後守殿直に手前へ被申聞候、扱又当上様諸事被遊様御尤成事共多、御代々の上様の内にも余り無之程に奉存罷在候、此存寄誰へ可申様も無之候に付、家来共の内へは申聞候て、御尊申上儀に候、下々に至候ては当上様はやぶさか成様に申儀候に承及申候、此儀は曾て無御頓着、専御儉約御守被成候て可然事と存候、御前代の内に御役人衆の内心得悪敷、無益の新法又は筋もなき事共被取上候て、公儀の広き事にも御難儀成事共に成来、勿論是等の趣は御請にては無之候旨御意に御座候に付、折節於御前講釈等被仰付候時分毎度御尊有之、御大老に御成候へ共、今以仕置等御直に被成、数年以来何の御越度も無御座旨上意にて、私式迄恐悦奉存候旨被仰上候処、左様の御尊も有之忝思召候旨御挨拶有之候て御退出被成候、翌廿七日登城候て兵庫殿へ御請の趣并御物語の儀共被仰上候処、委細達上聞候処、入組たる御使に候処、申達候様宜敷候に付、加賀守存寄も委敷御聞被遊候て尤成事共に候、且又物語の趣御承知被遊、是以尤に思召候旨兵庫頭殿を以て被仰出候、兵庫殿被申候は、加賀守殿何の考も無之、心当も凶も無之旨御申候儀はさすが老功と奉存候、図り考の無之儀は有之間敷候旨被申候処、御前へ可罷出旨にて御座間へ被召出、上意には入込たる儀申様宜敷候て、加賀守存寄も委細御聞被遊候、外の物語も御聞被成御満足被成候、加賀守気色の体は如何見請候哉と御尋に付、私も久々にて側近く相寄顔色も見請申候、年来故形は御老衰の様に相見申候、乍然気力口上等は指て昔に替不申候、久敷持病にて乍憚足の裏に痛御座候、其痛に指引御座候て、悪敷時分は前々登城も断申儀毎度御座候、昨日は朝より気色宜敷候て、夫故御顔色も快相見申旨申上候へば、氣力達者にて別て一段に思召候、今日講釈御聞可被遊処、御普請被仰付候得ば、其音にて紛敷候間、重て御

聞可被遊旨上意にて退出仕候、此趣以紙面舍人殿迄申達候処、御直書被下御親翰も加り候に付、即刻兵庫殿迄為持遣候へば、御書入上覽追て兵庫殿より被相達候、其段申上兵庫殿紙面又舍人迄遣候へば、又御書被成下其分に難成兵庫殿へ遣候へば、未其返事は不参候旨被仰聞候、右御書先生には余御用にて御座有間敷候歟、私事先年親筆にて紙面も戴候へ共、如御存知留置申事難成候に付所持不仕候、此直書私へ可被下候哉と申上候へば、則被下候、上様の御手迄触申御書、殊に一枚紙の御書に付別て重宝仕置候、御文言左の通御座候。

尚以老境殊更手戦候故、乍略儀、代筆を以申入候、以上。

芳簡令披閱候、然ば兵庫頭殿へ御請の趣被相達候処、達上聞重疊難有上意誠以過分忝仕合御座候、且亦御前へ被召出拙者所勞の儀御尋の旨、別て畏入奉存御事に候、重て兵庫頭殿迄次手の節可然可預御心得候、以上。

五月廿八日

加賀宰相

室新助殿

578◆一 右御物語未承以前御尋申上候は、去月廿八日芙蓉の間御役人、并諸番頭、諸物頭其外布衣以上の御役人衆御老中列座、戸田山城守殿被仰渡候は、当春より段々可被下置御切米の儀、去年御領損毛甚敷、其上打続御物入の儀有之、御定の通相渡不申候、此様子にて候へば、尚暮可被下御切米等の御心当も無之由、其訳は追て御書出を以可被仰聞候間、面々兼て其覚悟可仕旨被仰渡候由、是は如何の被仰出候哉、身に預り不申輩迄も驚申候、指当先生御勝手等無滞御切米相渡候てさへ、何とも難被成筈に兼々奉察候処、此儀承候てあきれ申候、余りの儀に何とぞ子細有之態と被仰出、追て其訳立可申哉と奉存候、御救こそ無御座とも、軽き御切米取候衆はせめて御定の通可被下事に御座候、御勝手は如何に成候哉と申候処、当年春の御切米三の一渡候て、夏の御切米も沙汰無之候、春夏二度を先相渡し、其後夏の御切米に及申筈に候へ共、其さへ沙汰無之候へば、暮なども御切米はすきと渡申間敷候、切米取申輩ひしと潰可申候、拙者など只今飯米さへ無之体にて、蔵宿より少づゝ金米共に借て一日送りに仕体に候、御切米の人々何も其通と見申候、去年の水損莫大の事と聞へ、御蔵入不足故と存候、何の仔細もなく弥難相渡趣、朔日に重て御書立も出で申旨 被仰聞候、ヶ様に御尋申上候は御日用御手痞可被成と奉察候に付、少分ながら私方より金五両計は進上可申候、十日過に月俸可請取と奉存候、其時分迄は御心当も御座候哉と申上候へば、指て御急切成事は無御座候、心入の程御満足被成候旨被仰候、私月俸も四月より請取跡へ引足可申旨にて、自余よりは少分に相渡り申筈の旨承知仕候へ共、私事は誠入用の時分は左兵衛殿も被成御座候へば、幾重にも罷成候故、難儀仕程の儀は無御座候因りに御座候間、御氣遣被下間敷候、扱木下平三郎殿一昨日此方へ御出、当春三十三俵可有之処、十一俵ならで相渡不申候旨御物語にて承り候旨申候へば、先生にはそれ迄も御請取不被成候由被仰候、平三郎殿は此方様より過分に御合力有之、御子息へも此方より御切米御取候、先生には一向外の助無御座候、蔵宿つゞけ申も定て高利の事共にて可有之候と御尋申候へば、只今迄に四十両計つゞけ申候、最早御統難被成、先年火事に御逢被成候節、平三郎より御合力の儀相願被申候節、先生へも同事に御願候様に被申候へ共、御不同心にて御願不被成、其節山本源右衛門迄御噂有之、新助は何故願不申候哉との儀にて、あなたより御助成可被下候旨有之儀を、事がましく可奉辞とは不被思召候此方より願の儀は如何に仕候にても難成事に候、其段は各も同事の料簡に候、去年娘嫁娶いたし、心外の費百両計に及申候、然処当春以来右の趣に成申候、依之今年は不及是非候、宰相様へ奉願五十両も拝借仕、年々に返済仕候様に仕度旨被仰聞候に付、只今に至ては不苦筋にて可有御座候、但御願可 被仰入と思召候哉と御尋申上候へば、舍人迄可申入候、舍人へ相達候儀は私へ迄御紙面を以可被仰聞候、其内其許様へも御内談被成、御願の筋御相談可被成旨被仰聞候に付、成程私へ被仰聞候て可然奉存候、但今少御見合可被成候、私月俸も請取候

はゞ、一二月御つゞき被成候程の儀は罷成可申候、藏人方へ申遣料簡も御聞被成、私も藏人存寄承候て其上の儀に可被遊候、ケ様の趣藏人は存寄、格別の儀も有之宜敷御座候旨申上候へば、先生も其思召に候、頓て別て御用多難被仰遣候間、明日の便に私方より相談仕候様に被仰聞候、思召奇特と可被仰進候、私へも可被仰付候、舍人内匠へ迄申達様の句面の事に御座候間、其元より草案にても可被遣候哉、此節の儀に候故御延引被成可然と、是は私の内存の儀に御座候、先生へは不申上候、此日の御用も有増承知仕候、今般の一件さへ今日漸相調申候処、中々他事には難及候、追て可申上候。

580◆一 公儀向近年御物入と申事難心得御尋申上候処、常憲院様御代莫大御費兎角可申様も無之、御府庫虚耗に及候上御蔵入の図りもなく、新知加増多く有之、後々は可被成様無之、専方なく金銀吹改にも及申候御代に成、急に金銀如旧被仰付候故、実に今以府庫空敷候、無益の医師迄にも御知行高四十万石に及申旨にて、当年又凶年にも候はゞ、如何様の儀に可及も難計候、御切米迄も無之地方の面々も、免御借の儀に可罷成候哉の旨被仰聞候、私差当存候は、京大坂等に富有の商人、たとへば唐金喜右衛門如きの者何程も可有之候、此等の輩より金銀御借被成、御切米不足の面々へ金子を以被渡、天下の米穀御買上に成候はゞ、自由に事調可申候、人情含怨申様成命令にて、何とも御笑止事と奉存候旨申上候へども、当春以来勘定方に色々利発成者共遂穿議、最早此外無之と申趣に成り候て、如斯相究り申体に候旨被仰聞候、此紙面大地兄外奥村丈小寺兄へ被懸御目可被下候、但御宅地へ御招可被懸御目候哉、其外の君は御了簡次第に可被遊候、先生も此儀被入御念被仰聞候、御前への一件は左兵衛へ潜に御物語仕筈に御座候、以上。

六月三日

青地藤太夫

藏人様

近頃不存寄御事御心安御内談等被仰越候段は恐悦成御儀、殊に外と違諸事御熟成の御手本にも被為成候御事は、乍憚御手柄成御事、誠御喜悦にも可被思召候儀と奉存候、先生にもケ様の御使御勤被成候御事、御首尾も宜敷故と奉察、次には此方様にも御親みも出来本望の至御座候、但御尋の御本意は何とも難心得事にて無御座候や、諸侯の家の不宜例を御聞合被遊候段、近頃失望申御事に奉存候、御請も乍恐瑣細成御意の趣に奉存候、只跡目等の儀は古例を以申付候、加増新地等の儀は賞罰難廢事のみ了簡を加へ、心当の図り等の儀は只今迄心付も無之罷在候、第一自分の上俟約を守の儀老後別て心付申し候、ケ様の儀にて国用不足も無之候哉などと、御請被遊度物にて無御座候哉と推参千万ながら残念奉存候、左候はゞ上様にも急度御料簡も改り可申候、先生御取次被成候迄に御座候哉、定て何卒被仰上候事も可有之物と奉察候、此御使相済以後不日御切米の儀、御役人衆へ被仰渡候も、いや成事に被存候、只今諸事先生御用御勤の御様子、旗本衆新井氏の様に沙汰可仕哉と氣遣に存候、御切米の事などは一二も無之常禄の儀に候処、御無理至極に相聞へ申候、不被為成迄も御借銀にても被遊、先外の御僉議に不及、早速被下候様御沙汰可有之事、人主の御本意たるべく候、扱其後は以来の御心当の図被仰渡、其段は有司存候者可有之候、御自分御料簡の通、京大坂所々の富有の者より御借被成候はゞ、何程にても相滞儀無之筈、其上御切米の分何程過分被申候ても、公儀の上にては今年不足分纔の儀にて可有之候、夫を只今より当暮の御切米迄成かね可申被仰出近頃失望申候、夫よりは御医師等四十万石の費無之筋、被召出候面々は不殘御扶持被召放、或は甲州杯は元来其罪有之家に候へば、一万石計に被成候て、其余は御知行被召上、ケ様の御償に被成方結句人情にかなひ、道理の筋も可有之は、跡目等のひゞき此方様へも移可申幾微の様に奉存候、近頃いや成事かと存候、近来本多弥兵衛外に国守衆在江戸の内国許にて跡目申付候、跡目の御格止申候、于今弥兵衛殿所為の様に御家中にて申慣候、近頃疎忽の儀ながら指当り候愚意真直に書記申候、不苦思召候はゞ此紙面先生へも被懸御目候様仕度候、昭廟は如形御篤実成御政務の節の様に

相見へ候へ共、少迂闊にて事の成就其功有かね申候、当上様には御決断格別の御様子、実に有為の主と相見へ申候得ば、今度の御請など何とぞ被仰上趣も候はゞ、其功早速相見へ可申ものをと奉存候事に候、早々御火中へ、故肥後守様御咄并御俵約の儀乍憚御尤成御儀奉存候、御切米の事は御俵約の筋とは難申候、御気色の儀御尋等誠以恐悅成事に候、御書御拝受の旨珍重存候。

蔵人方より先頃の返事、私紙面に貼紙仕指越申候、其内に乍憚自分存寄の一料簡申越候、尤の様にも奉存候間、御慰勞則蔵人貼紙懸御目候、先生御事昭廟の御時新井氏を申候様に、御簾本衆にても申慣候かと氣遣に存候哉、其儀も相見へ申候、御城坊主衆私方へ毎々被罷越、遠慮もなき戯言同事に種々被申候に付、私も先頃以来傾耳承候へ共、少善悪共何の御噂も不承候、聞番共も坊主衆同事色々浮説紛り咄し申内にも、耳に立申儀無御座候故安堵仕罷在候、先生事は右の通にて御座候、只今上の御儀を種々誹謗にがく敷奉存候、人の言をも亦可畏にて御座候故、宜敷申儀を承候様に無御座候、爰許へ御使に御越被成候様杯も一向邪推にもとかふ不申候、復庵事は近侍の者中村典膳並伊藤平太夫兩人へは無二の間柄にて、昼夜参会仕候故至て機密の儀も承り出し、彼是申儀のみに御座候へ共、此一事は聊推察にも参不申候、先是にて一段の儀と珍重奉存候、近日御面上可申上候、以上。

六月廿八日

青地藤太夫

新助様

御覽後御火中可被成候。

五月廿八日御老中被仰渡之覚

584◆一 芙蓉ノ間御役人並諸番頭、諸物頭衆、其外布衣以上の御役人衆へ御老中列座、戸田山城守殿被仰渡候は、当春より段々可被下置御切米の儀去年御領御損毛に其上打続御物入の儀有之、御定の通に相渡可申候、此御様子にて候へば、当暮可被下置御切米等の御心当も無之候、其訳は追て御書付を以可被仰聞候間、面々兼て其覚悟可仕旨被仰渡候由。

覚

総て近年諸国風水の損毛相続、御蔵納方不足有之候に付、諧簾本御給米金渡り方、並諸商人への御払方等まで及遅滞候由達御聞彼是被仰出候品雖有之、当分の儀にて大勢の御給米金渡方行届兼候処、去年は諸国別て不納の上、堤、川除等の破損等多く有之難捨置、数ヶ所御普請被仰付候、其のみならず、御領の百姓共及飢渴候者は御救米被下置、其上於御当地御城辺は不及申、其外所々破損数ヶ所有之、臨時の御物入多、諸職人御払方等も不足に付、去年冬御切米金の内少々相減候故、別て御勝手向減省等の儀被仰付候、扱又御料所の内にて運送悪敷所は、御年貢米其所にて所相場に相払、過半下直に相納事に候、然共御給米金渡方は御当地の時相場にて被下候故、彼是御失脚多候、尤御切米等の儀別て無滞様にとの思召故、当春に至り去冬切米金減候分も不残被下置候、夫故当春借の儀も未だ不残は不相渡候、依之段々跡引に成、当夏御借米も早速渡候手当難成程の事に候、右の通の儀に候へば、当冬御切米渡方必定可為不足候、然ば去冬の残米金当春被下候分、当冬相減被下候にて可有之候、且又此上若水損毛等有之においては、大勢の人悉難被育儀にも成行候ては、公私の難儀以外成事に候、依之今度和泉守御蔵入並諸向御入用等吟味の儀被仰付候、大身小身の面々自分勝手の儀万事相減候、覚悟専要に候条、右為心得被仰出候、以上。

寅六月朔日

当三日先生御物語の内一件追て記置申上候、公儀御台所入近年以来以外減少仕、中々外人の推量に及申儀には無之候、其有増は先書に記候趣に御座候、依之御勘定奉行へ被仰渡、随分御余計出来候様に日々御僉議候得共、はかゞ敷存寄儀無之候、先生へも兵庫頭殿を以被仰出有之、存寄申上候様にとの儀に御座候、乍然何れも存知の通算用等度支尚書の工

夫は不被成候故、勘定所の儀別て御不案内に候、乍然随分工夫も仕、若存付候儀も候はゞ可申上旨御請被成候処、被仰出候は、諸侯参勤の儀御代々御定法被為成、隔年の参勤にて天下の諸侯大半江戸に相詰候、其故公私の費夥敷工商の類も準之致充満候、中華の法は如何候哉相考可申候、五年三年宛にて参勤候はゞ可然物と思召の旨被仰出候に付、此事は天下の大事国勢の盛衰にも預申候故、軽々敷了簡も難申上候、追て相考中華代々の様子も可申上候、京、大坂、駿河等総て遠所御城代の類、一倍の御加増御例にて御座候、過分の御費に罷成候、此類向後妻子引越に被仰付、十年も十五年も相勤候様に被遊候はゞ、引越の料は少かさみ可申候得共、数年の内にて御費用省可申候、且又小普請其外にも当時指て御用無之、諸簾本江戸近辺十里内外の地へ引込在郷仕罷在、御用の年迄相勤候様に被遊候はゞ、工商類も準之自然に減少可仕候、中華にて全盛の時の都にても、城下に如此天下の者致充満罷在候事は無御座候、畿内近辺に散在仕事にて御座候旨被仰上候処、両件共尤に思召候、但遠所御城番等妻子引越候はゞ、立身無之様に存知氣鬱仕間敷候哉、是さへつかへ不申候はゞ、一段に思召候旨被仰出候、引越候ても其頭並御目付等指添儀に候故、勤方御聞届少にても宜敷者は早速被召寄、其々御役替等被仰付候はゞ、御奉公勤申間敷事とは不奉存旨被仰上候処、猶更御思案可被遊旨被仰出候由、隔年に参勤の事むかし牧野翁此事を被論候て、畢竟ケ様にては却て永久難成事、天下の困窮に成候事と被仰出候儀など被思召合候、先生にも其通に被思召候、何とぞ被仰上様も可有之旨御咄に御座候、私申上候は是は、一大事の儀に奉存候、此等の儀迄も御内談に被及候事白衣の宰相と奉存候、恐悅の至奉存候、兼て私式も諸侯参勤の礼何とぞ改候はゞ可然と申事御座候、其上隔年参勤と申儀従国初の御定制とは不承及候、東照宮台徳公御代には、或五年或三年にて相勤候体承申候、従大猷公以来隔年に相定候様に承及申候、ケ様の儀は白石丈能僉議も被仕置候様に承及申候、少御聞合も可被成候哉、但八九年以来天下の諸侯随従有之、在国よりも却て在江戸の方宜敷様に成来候処、只今一旦御俚約の為此制一度御ゆるめ被遊候はゞ、天下の大勢削弱に罷成申儀も可有之哉、此所如何可有之候哉定見成兼申候、尤其所へ御心付は可有御座候と奉存候旨申上候へば、成程にも其心付有之候、第一大猷公の御時分の通、御簾本の方根づよく候へば不苦候得共、当時御簾本の方至て困窮に候折柄に候故、此儀も大切に候旨被仰聞候、交代定期の儀白石へ尋可申も、只今は内藤宿へ住居中々対面も成不申旨被仰候て、廿日の御物語は相止申候、其後私に料簡仕見申候は、隔年の参勤只今御改被成、或は三五年とも罷成候はゞ、当分公私共各別可有候得ども、天下の勢の何様にも変可申も豫難計ものに候、然共此御心付被遊候事空敷止候も、機会を被失候様にて残念成ものに御座候、私の一策は只隔年と申御定制は其儘被立置候て、在江戸は六ヶ月在国は十八ヶ月に被成、一年半在国の様に被遊候はゞ如何に可有之候哉、左候へば自然と一年在国の輩も間々有之筈に候得共、隔年の格は立申候、ケ様に心付申候に付、当十一月得尊意候節此一件も申上候、家人は不議政と申儀御座候へば、別て私儀可申上儀にて無御座候へ共、只自分工夫の為存寄の趣申上候旨にて御物語仕候へば、皆々被仰上候に、諸侯参勤隔年の儀中華にも無御座候哉、或は五年三年にて一度朝覲の礼に御座候、国初諸大臣の衆永久の慮は無之、只江戸表御繁昌に相見申候迄に被心付、隔年に被相定候儀と相見申候、此儀は私若年の比経済の学に有志老人共は毎度申上たる儀にて、迎も永久には難続可有御座候の僉議も仕候、但此御定制も久敷事に御座候処、俄に御改め被遊候はゞ、却て国勢の弱みにも罷成間敷ものとも不存候、足利家の中葉天下の諸大名しかかゝ参勤不仕、後には氣随に罷成、將軍の召にも不応、終に天下の大乱にも及申候、扱軍法を以考候時は軍形兵勢と申二つは孫子が書にも骨髓の事に仕候、凡軍を立候には先軍兵になり形を付候て、其なり形の内へ入候て用候処、自然にきほひ付候て勝を取申候、少も其なり形くづれ、きほひ薄成候へば可勝様無御座候、此意にて天下の治にもなりときほひ御座候、数十年のなり一旦にくづれ



候はゞ、自然ときほひぬけ候て難取返儀にも及可申敷、左候時は大事至極の儀に御座候間先此儀は御止も被遊只国々参勤の従者減少仕候様急度被仰出、扨前にも申上候通御簾本無用の人に在郷被仰付候はゞ、此両様にて大分御上下の人減可申様に奉存候旨被仰上候へば、被仰出候には、諸侯従者減少の儀新助が身にて不存筈に候、如何様嚴重に被仰付候ても中々三の一にも減申ものにて無之候、既紀州に被成御座候内度々人数減少候様にとの事にて、道中などは御減被成候へば、一年御在府の内色々の儀にて御人御入用出来、終には可有程の御人高に成申候、諸侯皆此筈に思召候、御前に思召候には、隔年参勤の儀元來権現様、台徳院様御定にては無御座候、大猷院様御代江戸御城下何と仕候ても淋敷候間、諸大名妻子共に在江戸有之、隔年の参勤可然との儀にてケ様に成り、只今は御城下に不充満にて却て宜敷候、むかしの儀は各別に候、乍然ケ様に成來候儀を三年五年など、被遊候ては却て如何に候間、天下諸侯を四ツに分、半年は在江戸、一年半は在国仕候様に御定可被遊敷と思召、足利家の時諸大名参勤不仕事を新助は氣遣存候体に思召候、乍然是も不苦候、左様の勢にては無之候、たとひ諸侯の内二人や三人謀反仕候分は御手当何程も御座候、若大勢申合候ても謀反に候はゞ却て江戸にて大勢相集居候はゞ御凶難被成、国々にて左様の仕形有之者御手当被遊よく候、とかく右の通四ツに御分、交代の凶を御工夫可被遊候、諸簾本在郷の儀は一段尤成心附と思召候旨被仰出候、外人一円可存様も無之儀に候、私事故被仰聞其心得可仕旨被仰候、此趣の儀に御座候条、例の学友衆にても御咄も御無用に可被遊候、先生へも其段申上置候、唯御了簡の程承知仕度奉存候、私方迄其段可被仰下候、以上。

六月十三日

青地藤太夫

藏人様

今月廿六日尾張様水戸様不時御登城有之、於御座間御密談何事と申事一円御沙汰は無之候、水戸様御請の内には御代々無御座儀奉存候旨被仰上候儀迄相知申由、坊主衆廿八日罷越被申聞段、先生へ廿九日御來臨の節申上候処、先日又御前へ被召出御人払にて、加納遠江守殿、有馬兵庫頭殿兩人迄にて候、御側に罷出候処兵庫頭殿迄御意には、諸大夫交代の儀に付其方へ迄申聞置候趣、委細兩人に申て聞存寄可申上旨上意に候処、有馬殿謹て被申候は、交代の儀弥在江戸半年回りも可被遊思召候、新助儀以後天下のよわみにも可罷成哉との氣遣有之趣申上候、猶更存寄委敷申上可然旨被申候処、上意には総て久敷事を改候儀は十分可宜儀にても、先は人々彼此申物にて候、其上新助存寄も一理有之儀に候へば、只今其氣遣は無之候、畢竟江戸人馬甚敷に付、自然と衰微の基に成候、諸大名従者減少候様に何程申渡候ても、江戸詰仕候身にては可有之程の人数無之候ては難成事に候、御身の上にて御覚有之候、決て交代の格此度御改可被成と思召候旨上意に候、御請は最前も申上候通、先年よりケ様の儀工夫有之候、老人共申候は、江戸の御繁昌至極仕、諸大名隔年に参勤無懈怠御威光盛に御座候へ共、ケ様にては永久の御法には難成事に候、畢竟は参勤の期にも参勤仕兼申様にも可相成候敷、然ば何とぞ相改可然杯申たる者ども御座候、私申上候趣は、余り奥を取候て万世の後、御当家何代目の御代より交代の期御改め被成候てより、諸大名在国多く罷成、其より参勤も懈怠仕候など、後世に批判も仕候へば、御名の出申儀とも又は実在在江戸をしたひ競て参勤候処ゆるまり可申敷などとの遠慮過申了簡を以、申上候趣に御座候、乍然段々御僉議の趣にて存候得ば元來御定権現様台徳院様より出申儀にても無御座候、大猷院様御代江戸繁昌の為、隔年に御定被遊候儀にて御座候、只今却て繁昌過候て江戸の御為不宣候に付御改被成候儀、其上隔年と申御定も替不申、一年の内は江戸たるべき諸大名半分、在江戸と申ものに御座候故、上意の通私も氣遣に奉存、江戸表の御政道さへ正敷候て寛怠無御座候へば、右の氣遣は無御座候旨被申上候処、遠所の御城番等は向後妻子引越の儀等弥其通に被仰渡候、御国用不足の儀は二三年も過候はゞ、御償相



可知申旨上意に付、私奉存候は、京、大坂等に富有の町人何程と申数も無御座候、此等所持仕候金銀は、皆上の御金銀と申物に御座候故、少々の利分を被下御取上被遊候はゞ、慥成御蔵へ奉預と申物に御座候故、忝奉存候て指上可申ものに奉存候旨申上候処、左様の儀は当分の儀にて、此度の僉議には不預事に候、御先代以来御蔵も空虚に罷成、御台所入も無之ものを人の存候て批判し笑可申かとて、色々の計略を以勝手を取続たるものに候、計略を以御取続可被成ならば、只今迎も可被成事に候得共、其は皆当分いやゝの儀にて御同心不被成事に候旨上意に付、御申上候は当分ながら此度は御切米等、先御借銀を以被渡下候様に仕度旨奉存趣に御座候、計略の儀にては無御座候旨申上候処、兵庫頭殿比日新助へ御勝手方御不如意の趣実儀を申聞候へば、肝をつぶし奉驚候由御申上候に付、私式もケ様に可有御座候は不奉存候、近比御笑止千万成事に奉存候旨申上候。

御不如意の様子或御勘定方の人申聞候は、誓詞の上の儀にて候故有体成事は難申聞候、只たとへを以可申聞候、其方身上二百俵の内百俵は公開入用、百俵は内証日用の入用と有之に候へば、せめての事に候、二百俵にて日用内証等の入用金二歩計有之候はゞ、今日立ち可申候哉、今の上様の御勝手此二分位と被存候、無興千万成事共に候。

常憲院様御代既に御台所入過半の上出濟、何とも可被成様無之候て、金銀改一倍二倍の吹出しを以当座いやゝに成、猶不足は砂除銀などゝ申名目を以て御取上被成候、其上文昭院様へ移弥可被成様も無御座候に付四宝銀に成候処、無間薨御、此間の御費用莫大成事に候処、当御代火急に四五年の内天下の悪銀不残復本被仰付、然上に去年の凶年甚敷事にて、一時に御潰れ被成候趣に候、当上様思召候、此御様子少も御隠不被遊、押出して天下の者へ為御知被成、其上にて大き成処より御取直し可被成御思慮に被成御座候旨。

592 ◆ 1 上意には左様に急度手をつき罷在候ては中々成間敷候、手もあげ候て可申上候、総て其方共の類存寄御尋被遊候ても、何も御尤ゝと計申上罷在候に付、何とも御相手に難被成候、其方事は存寄不残申上候に付御心得にも成候、夫故切て御前へも被為召候旨御意に付、兎角可申上様も無御座、難有上意冥加に相叶申旨御請申上候処、此間誰彼相識共申候は、籟本中風俗悪敷罷成候間、是は学校建立いたし急度教を立候はゞ、可宜旨頻に申候、此儀は如何存候哉と御尋に付、乍憚学校の儀は御無用に可被遊候、聖人の御言葉は万世の手本にて、如何様の時節にも不合事は無御座候、指当論語に民は富し候て扱教ると御座候、教は風俗を改申事に御座候、且又斉桓公は周末の霸王に御座候、桓公の宰相に管仲と申人は政務に事の外長練仕候て、御当家にて土井大炊頭、松平伊豆守杯の様に、千歳の後迄も手本に仕程の者に御座候、此管仲も衣食足て礼讓を知らず申候、人世の大本は衣食の二ツに御座候、近年御籟本中衣食に足不申候故、教の所へは參候儀にて無御座候、然処今の時学校等の御沙汰御座候て一円心服は不仕候、却てあざみ笑ひ可申候恒の産無之に恒の心あるは、士の事と孟子に御座候へ共、只今の士中々行儀にても無之候、学校の儀は物識共すゝめ候故、是も難捨其方へ尋候事にて、申通の趣に候へば、不入ものと上意に付、畢竟結構成思召寄に御座候間、一三年も過何卒其時節到来の儀も可有御座と奉存候旨御請申上候。

此学校の儀は、定て林大学頭か木下平三郎より申上たる物にて可有之候、近時迂濶の至極、出家の吾宗旨を崇敬の脇ひら不見に、寺院建立の心と同断とて御笑被成候。

右の通交代の儀は大形御決定被遊候様に見申候、然ば廿六日水戸様御請の御一言は此儀にて可有之候、水戸様御生質事の外御發明にて、西山黄門様の再来の様に申候由、扱諸大名半年の詰の代には役銀出申込に候へ共、少分の儀にて諸大名の勝手には莫大宜敷事共に候由に候、此御一策誠万世の通令にも可罷成事ながら、乍恐惜き事は名あしく相聞、下民の唱気の毒成事も可有御座候旨申上候へば、其儀は可有事と氣の毒に思召候旨被仰候。

593 ◆ 1 能州の内日野小左衛門殿支配所御預地に被仰付儀に付被仰聞候は、去年笠島村

公事有之節、上様思召には加賀、能登、越中三ヶ国の儀は一円に領知の筈に付、少も御領は有之間敷筈に候故、何故ケ様に御蔵入有之候哉と御尋に候へども、曾て覚申者無御座候、先生も御覚不被成候、然処誰にて候哉、是は前田大和守今の丹後守先祖へ新知一万石被下候時分、能州の内にて一万石御引替可有之旨にて、ケ様に成来候て申上候者有之、夫にて埒明申候旨被仰聞申に付、左様の首尾も御座候哉私共不慥成候へ共、承伝候は左様に於て無御座候、是は瑞龍院様御時分、土方勘兵衛後に河内守殿と申方、則瑞龍院様従弟の続に御座候、関ヶ原の時分佐竹家に塾居有之候処、関東より加州の御使被相勤、其節の功に加州領の内を以一万石、從瑞龍院様敷合力分の扶助有之候、初は越中岩瀬辺にて領知の処、微妙院殿の時分岩瀬は江戸往来に障に罷成候に付、能州の内を以替地に被相願其通に罷成候旨、其後孫河内守殿何故にて候哉、領知被召上候て御領に罷成候旨承及申候、勘兵衛殿御直參の儀は最初よりの儀に有之候哉、左様の儀私は慥に不存候、右の訳にても候哉、今以右代官所は土方領と加州にて下々申慣候旨御物語仕候、

此一件は聞捨難成事と奉存候候旨達御内聴候、私申入候趣も定て相違の儀可有御座と奉存候、尤相違の儀承知仕候はゞ、追て新助殿へ可申入心得に御座候旨、奥書を以上申候、

晦日の夜の事にて御座候。

594◆一 比日六諭衍義大意板下相調候浪人石川勘助儀、町奉行所へ被召出白銀二枚被下、殊の外難有かり先生御宅へも御札に罷出候、此者申候は、町中にて手習子供取申押立候者御改被成候得ば、八百人余御座候、其内重も立申者十人計、勘助も其内にて名主召連罷出候処、手習師匠仕候者共無益の手本相調可申よりは、此書の内を可然様に幾切も調候て子供へ教可申候、夫故御上より被下候旨にて、右の者共へ一冊づゝ被下候、一段を手本六ッ宛に相調専教申旨勘助申候由、御物語御座候。

右昨日私御小屋へ御見舞暫被成御座候内、御密談御座候条忘不申内に増相調懸御目候、以上。

六月晦日

藏人様

青地藤太夫

尚以七月三日万石以上の御衆中不殘登城有之候様に、今朝於御城被仰付候(七月朔日)。先生御勝手方は御難儀千万成儀何とも気の毒存候、御自分にて少々被立御用候ても当分の儀に候、中々後迄届申にても無之候、依之舍人殿など迄可被仰達趣、成程此様子に至候ては成否は各別苦間敷儀と存候、被仰達様は、何とぞ爰許より草案調候て進上は難仕事、其許の様子紙面も又様子と少づゝ違申物にて候、書不尽言とはケ様の儀と被存候、畢竟随分御無心等被成次第不被仰上思召に御座候へども、先年御類焼、去年御息女様御婚礼も随分輕被成候へども、只今の時節故思召の外御費用は分限不相応に入増、当春以来扶持方米何程計、などて御請取不被成、此以後もしかゝ難被下被仰渡、当春以来只今迄は蔵宿等より、何程計御借用候て御続被成候へ共、最早左様に打続候事も仕兼申体、只今に至候てはひしと被及御困窮候、先年御拝借被成候会所銀を何年以前御返済事済申候間、此度何程計何年計の年賦を以御拝借被成度思召候、近比被仰上兼候へ共、必至と御行詰被成候に付、御自分迄被及御内談候て、半切御紙面御調舎人一名にて、則舎人へ直に御逢尚更思召の趣御口上にて被仰含御願被成可然存候、此間彼是上よりの御取次等御勤被遊、左様の序に被乗候様成邪推も可有之候哉、其段も尚更御遠慮に思召候へ共、尤左様の処に御心付も無之、指懸り御行詰に付御願被成候段、御口上にて被仰達方真直に可然かと奉存候、御自分など御取次、又は内匠連名などは却て不入物と被存候、万一舎人好候はゞ、夫は尤勝手次第格別の儀と存候、此節は暫御延引可然哉と御申越に付右申進候、御内存と存候程拙者も同事に存候へ共、末に成候はゞ、此方御參勤御礼彼是と申候て、舎人初事繁成一入調兼可申候旨、右申遠慮も有之候へ共と申儀、御口上にて直に被仰達可然様に可存候、先生も別紙を以申

上候様に申越候へ共、同事両様に無益の儀、其上先生も御用多内一通りの書状さへも比日は指控へ、暑氣見舞さへ未不申上、御自分御越以後は毎便御様子承候故、結局控へ申かた可然と存候間、此儀は尚更直には不申上候、此紙面を以申上頼入申候、先拙者存念は如此にて候、山本氏其許有合候はゞ一段の儀に候ものをと存候。

先生御勝手一卷の儀に付、藏人存寄承合候処、是も附紙を以申越候間則入高覽候の通に可被遊哉、左候はゞ私弥藏人存寄一往御口上書拝見被仰付、其上にて舎人へ御達被遊候様に仕度奉存候、乍恐傍觀意得も有之間敷者共奉存候、一往拝見も仕其上の御事にも仕度候、私御取次仕候儀は不入事の様子に藏人付紙には相見へ候へども、金銀の一卷は我人平交の間柄にて直には難申入ものも御座候間、私取次仕一先舎人内証承候ても可然候はん敷などと奉存候、此段御独断の上にいづれへ成共御一定可被遊候、木下殿去比御内談の趣も御座候間、弥被仰合御同道被成舎人へ御直談も可被成候哉、兎角はいづれにても御口上書は御達可被遊候間、近々御草案御調被遊為御見可被下候、猶更藏人申越候趣共御座候へ共一々不能筆紙候、其上不差急事に御座候間、其内奉期御面謁候、右舎人へ被仰達候事は不同に被思召立可宜様に奉存候。

597◆一 昨廿六日尾張様、水戸様不時御登城にて、於御座間御密談有之、一円何事と申儀相知不申、但水戸様御請是は御代々に終に無御座儀と奉存候趣被仰上候、御一言迄相知申抔と昨日も申慣候、以上。

六月廿八日

青地藤太夫

新助様

今朝室新助殿私御貸小屋へ被罷越、別紙口上書一通持参被相渡候、且又被申聞候は、此趣御自分様へ直に相願可然様にも存候へ共、御直談に及候ては御差図難被成筋も候へば如何と存知、私迄相達申候、但直に申達可然様子に候はゞ、追て於御殿得御意可申達候、私勝手儀は山本源右衛門能存知罷在候事に付、御当地に有合候はゞ、源右衛門へ内談に及、御示談仕候様に頼可申所存に候へ共、有合不申候に付私迄申聞候、数年難涉の勝手に御座候処、今年に至り必至と可仕様無御座候、依之過分の願奉存候へ共、只今は七八十両拝借仕度存候、内五十両計は去暮娘婚礼の節借用の内にて御座候、藏宿手前へ返済仕候ねば、飯米のつゞけも、いなみ申族に御座候に付、乍迷惑拝借の儀奉願度内談仕候旨被申聞、則持参の紙面御自分様迄懸御目候、以上。

六月九日

青地藤太夫

大野木舎人様

私儀先年私宅類焼仕候、其上去年娘婚礼為致候、尤輕儀に候へ共不相応程費用もかゝり、旁不勝手に罷成申候、当分藏宿より金子飯米取替候て跡先取続き罷在候処、当年御切米四ノ一ならで相渡り不申、当暮御切米も減少可仕由に御座候、其故勝手難儀仕候間、可然儀に御座候はゞ、金子七八十両拝借奉存候、私儀御家に罷在候内何の御奉公も不申上、其以後も何の御用にも相立不申儀に候処、ケ様の儀申上候事迷惑至極奉存候、其故御無心等不申上覚悟に罷在候得共、当年ひと勝手指詰り候に付、御自分様迄御相談申入候、御料簡被成候て大野木舎人殿迄被仰達御内意を被得被下候様に仕度候、先年御当地へ罷越候時分会所支配の銀借用仕候、是も去々年迄に返済仕申候、此度拝借被仰付被下候はゞ是又年賦を以返上仕度奉存候、以上。

六月廿九日

室 新助

青地藤太夫様

同日八ツ時比舎人迄右両通相達、新助殿願の趣如何可有之候哉、私取次候て不宜候はゞ直に御示談有之様可申達候哉、先は私申上候ては思召等被仰聞候にも宜敷筈の様子に了簡仕候に付、取次候て申達し候旨、申述べ候処舎人殿被申聞候は、惣て拝借被申儀御家中を始め

御出入の衆中にも決て難成候、その上木下平三郎殿毎度拝借の儀私へまで被申聞候、先比も拝借の儀達て被申聞候、達御聴候へば一向御頓着に不被及候、但珍敷書物等御慰に被指上候はゞ、御礼旁入用程金子被下候様成事は又格別と思召に付、其趣示談仕候へば何やらん殊の外珍書、平之丞殿自筆の書入等も有之書物被致献上候依之金子も被下積りに候、箇様の儀共御座候間私へ直談に及候ては一向成不申候、取次仕候て一段と存候、先此両通は預置申候旨被申聞候に付能き儀承知仕候、平三郎殿には左様の珍書も有之幸の儀に御座候、新助殿には四書五経も無之、先年類焼の後私共同事の弟子中申談、少々書物も遣申候様の体に御座候故、中々平三郎殿格には成不申候、紙面御請取私に於て忝奉存候、前年類焼の時分山本源右衛門御当地に有合、私と申談少許の合力など仕候へ共、御存の通の者共に候へばしかくと申儀も及不申、依之同姓藏人奥村源右衛門など申談漸百両計才覚仕遣候、小屋懸等も出来仕候、去年娘婚禮の時分も少々合力にも及候へども中々行届申程の儀も無御座候、然処今年の様子に罷成候ては何共可仕様無御座候に付、不及是非箇様の首尾に御座候、新助殿存寄は今年猶更御無心等申上聞敷心得と相聞候、乍然昔の通候へば一僕にて、有にまかせ候て朝夕を被送候ても自由に罷成事に御座候へ共、去年以来は毎々御用有之登城有之、中ノ口にては御直参にても刀を為持候て殿中へ入申格に御座候処、小者体に刀為持被申候儀も何とも難成、心外の儀にて不任所存候旨被申候、且又其品こそは口外も難成様子に御座候、御用にも不存寄御使も被相勤候、箇様の時分に乘じ候て拝借の儀も申上様に有之候様に有之候ては、数年以来遠慮仕候覚悟も無に罷成候様にて迷惑さうに相見へ申候へ共、左様の儀迄心附候ては最早可仕様も無御座候に付、存切私へも被申聞候為体に奉存候、此上は如何様共弥御思案被成被達御内聴候様に仕度旨申述候処、一々承届候、先請取置候旨被申候事。

同日七ツ時前武藤庄兵衛を以御尋被成候は、新助に息女有之嫁娶も済申儀曾て只今迄御存知不被遊候、何方へ何頃嫁娶相済候哉の旨被仰出候、息女兩人有之候処、一女は先年御当地にて病死致し、一女は御右筆高階半治郎殿息へ去年九月婚禮相済申候旨申上候、此御尋の体は舍人殿へ相達候、二通はや御指上と存候、又御尋は御切米は何程相渡り申様子に候哉、承及申趣可申上旨同人被申聞候、先月末か当月初木下平三郎殿溝口七太夫殿へ被申聞候は、御切米春以来十三俵ならで渡り不申難儀被仕候旨咄にて御座候、此儀承候に付嘸新助殿可為難儀と奉存候、其翌日尋に遣候へば平三郎殿も請取不申候と申来、員数は不被申聞候、十日計も過又尋に遣候へば、此間少々相渡り申候、定て段々可被下と存候由申来候、今朝面談にて承候へば、段々相渡候て四の一請取申旨被申聞候、俵数は不承候由申上候。

600◆一 廿八日夕水野和泉守殿御宅へ聞番御招被仰渡候は、能州の内日野小左衛門御代官所一万四千石余、向後御領地に被仰付候旨にて御書立相渡申候、御礼若狭守様御勤可被遊候処、御痛有之御登城も御断の儀に付、長門守様御名代の儀被仰遣候処御気色悪敷候、依之如何可被遊哉の旨御伺候処、御家老を以可被仰上候旨御指図有之、津田玄蕃被仰渡候、常の御使とは違候間聞番相副候はゞ尚更可宜旨被仰出候、扱右御旨為聴長門守様、備後守様、右衛門督様、安芸守様、摂津守様、並日野小左衛門殿へ御使被遣候、室新助殿へ舍人内匠より紙面を以、昨夕水野和泉守殿へ聞番被召寄、能州の内日野小左衛門殿御支配の分御預地に被仰付、誠思召懸も無之儀難有思召候、此段御直書を以可被仰聞と思召候へ共、今日の儀事の外御隙入御座候に付兩人へ被仰渡、紙面を以為御知被成候旨被仰遣候に付、八ツ半時分御祝詞に御出表向御悦、一通りは佐々木左兵衛を以御申上、右内匠舍人を以被仰遣候御礼の趣は藤太夫を以申上候、右の儀金沢への御使者は石黒太郎右衛門昨夜中被仰渡、御書出来次第発出候筈に候。

601◆一 右の趣源左衛門殿、武兵衛殿、新八郎殿へ被仰達可被下候何卒可然被仰出有之

候様にと奉存候、已上。

六月廿九日

藏人様

青地藤太夫

兼山秘策 第五冊終

起享保七年至八年

602◆一 七夕の朝先生御面諭被仰聞候件々、此間両三度御用にて御登城被成候、御機密の事迄も御尋有之候、箇様にては定て誓詞も可被仰付哉と存候、左候へば私とても一切被仰聞がたく候、今の内御咄可被成候、先昨日御登城の処、取次を以御尋被成候は、御簾本中年少の者など弓馬の儀は不及申事に候、学問も深き事は無之候とも、小学四書は素読も仕得申程に心懸候様被遊度候、馬など指当自分の用に立申程乗候へば能候、只今迄の様子其処迄も不参候、唐にて士の及第など仕候法委細御聞被遊度候、相考へ可申上の旨にて委細奉畏、考合追て可申上候、指当存寄候は、学問の道は畢竟上より不被行候ては、下々発起可申様無御座候、只今御学問御数寄候様に御座候へども、御真実に御勤被遊候御様子には相見不申候、上箇様の体にて下々感発仕ものにては無御座候、扱御老中方並各様などの内学問の筋御存知にて御用候へば、末々にも出精可申候へ共、御一人も左様の方無御座候、初よりの衆は其通にても、只今御取挙の方少も其筋御存知の者に候へば、頼も出来可仕候へ共、此度安藤対馬守御老中被仰付候へども、事外の嫌と申候、同列の内に酒井修理大夫は学問も数寄、人品も却て宜様申候候処、此人は御取出不被遊候て、対馬守など罷出候に付、私共は望を失申候旨兵庫殿へ迄申述候、右考物にて今日は隙入申候、扱先日も被為召御尋の趣有之、委細存寄紙面を以申上候へば一段宜敷思召候旨にて、其紙面は御留被遊候、此一件は喜敷事の様に存候故、申聞候旨被仰聞候、御尋の趣は先祖以来同じ程の官位に候処、其子孫の内抜群年齢も有之、格別の趣を以官位御授候処、年若き同輩の内より其身も昇進の儀預申候例可有之哉、先は年少の者の方より辞退も可仕候処、却て左様に無之時申付様の趣も可有之候、何とも覺申儀は無之候哉の旨被仰出候に付、広き事共に御座候間、定て御尋の趣に似寄申儀も可有御座候か、覺は不仕候間相考可申上候、指当存寄候は、後漢光武帝中興の時二十八将とて、武功の名臣、廿八人同様に侯爵に被封候へども、追て其内鄧禹と申人文武兼備の器勝たる人に付、擢て三公に被任候、さればとて外の者共何廉申儀一人も無御座候、宋太祖の時趙普王韓琦など三人同様被召仕候処、後に韓魏公一人勝れて子孫迄も宜敷御取挙候へども、外の子孫何廉申たる儀も無御座候、辞退も申上候は道にて御座候、何廉訟申者に候もそれは道に背候故、幾重にも可被遊事にて可有御座候、弥相考可申上旨御請仕候処、諸儒の評論可有之儀に思召候間、左様の儀も見当次第、書載可入上覧旨被仰出候御考候処、拓跋魏の代、専門地を以登庸する事今の日本の風に、能似申候、光祿勳干烈が子登例を引て官を転ぜん事を請候趣、能此度の御尋に相叶申候、〔干烈事見干北魏孝文帝大和十九年通鑑〕門地を以官職を授候事不可然の趣は、李冲が論明白に候〔李冲論見同二十年〕此の一事を書拔能聞へ申様に和解いたし上之候、何とやらん相公様、中納言様に被成度思召の様に愚察仕候、大猷院様御外孫と申御筋目も、又外に無之儀に候、御齒徳と申誰あつて異論を容可申様も無之儀と存候旨被仰聞候に付、此一件何とぞ寡君内聴にも達候て、可然と思召被仰知候哉と御尋申上候処、左様にては無之候、若何とぞ御家御先祖の内、被任中納言候例にても、たとひ兵庫殿心得にて被尋候首尾も候はゞ、大形推量はづれば仕間敷候間、左様の儀も候はゞ重て可申聞候、只今の儀は至極の推察の趣に候故、疎末成事申候儀不入事と被仰聞候、是は恐悦成事に奉存候。

604◆一 此度交代の儀に付御書出拜見仕候処、乍恐御文言如何敷存処多御座候、其故考候へば、先生御潤色を経し物とは不被存候、作御直しも被成候哉の旨申述候処、少も為御見不被遊候、御恥辱をも不被顧に有之儀など、近頃不入御文体、後世の議論も生じ可申様に存候、御文旨被成御座候故、只御質直に被思召まゝ御調被遊たるものゝ、御簾本中にては風俗悪敷候故、却て御謀略にて態と々様に御調被成候物と申ものも有之候、曾て御謀略

にては無之、御真実に御難儀に被思召候に付、別に御近習に御役人中などへ御出被成候、御紙面杯にも諸大名へ斯様の儀被仰渡、人別も難被遊程に思召候旨相見申候、両通とも御自身の御文言にて、少御自慢の方に御座候旨被仰聞候、私申候は、罪己の詔等の御心持にて、誠に以難有御儀に奉存候、乍然辞令も又大事のものに御座候、此度の御書出は別て簡明にて、しかも天下一同に感動仕候様の御文法も可有之物に候処、残念成事に奉存候間申上候処、水戸殿御請出来仕候の旨申慣候、但し是にも浮説有之候、其内別て虚説は、此度上様には諸大名中より十分一上納米可被仰付と有之候処、水戸殿達て不可然旨申上候て、百分一に罷成候杯と、歴々の内にも申慣候、全以無之儀、上様には初発より至て軽く御借米被成、御切米の不足、並新田川除等の御入用の処さへつぐのはれ候へば宜敷候、諸大名とても近年困窮に候へば、何とぞ天下と共に有余有之様御改被遊度との御儀にて、交代も各別諸大名の為に宜敷様御改被遊候、但し御借米被遊候間、十分一にて可然旨御老中の内より被相伺候へども、御用不被遊候、水戸殿御請被成候様殊外宜敷、上様にも再三御称嘆被成候旨に候ところ、夫さへ如何様の儀に候哉不相知候処、去廿六日水戸殿御帰館の後、御もりの内讃岐殿より御附置被成候老人御側へ罷出、御用の筋を私式承り度と申上候儀にては無御座候、御請は如何様に被仰上候哉、不苦趣御座候は、御意承り度被申上候処、御用の趣御内談に付、尾張殿御請は、御代に無御座御儀に候へども、段々御僉議にて相極候上と御座候へば、私ども何の存寄も無御座旨被申上候に付、尾張御請の通御通議段々相極、其の上にて私共存寄も御聞被遊儀に御座候、外かに存寄は無御座候へども、大切の御相談にて候間、退出以後追て存寄御座候は、可申上儀に奉存候、尾張殿如何と御挨拶被成候へば、上様再三水戸殿存寄一段尤に候、指急ぎ申す品にても無之候間、追て如何様にも料簡可申上上意に候、依之追て弥不苦儀可然思召候間被仰上候旨、右老人へ御咄被成候旨、小池氏潜在先生へ被申上候旨被仰聞候、以上。

七夕

青地藤太夫

藏人様

八朔には午前より安芸守様御出、御両公様共悠々被遊御対顔、八半時過より右衛門督様、摂津守様御出何も御饗膳も出、前後二時計御対談一段御清快恐悦の儀に奉存候、其刻先生も御出被成候へば、右衛門督様いまだ御近附にて無御座候旨御聞被遊、御前御誘引にて御小書院迄御出被得御意候、先生殊外忝ながら冥加に御叶被成候旨被仰候、御機嫌克御様子為可申上右の様も申上候、此日本多帯刀殿潜在被仰入候御口上の内、端々承候趣申聞候、其趣は此間は殊外御気色御快被成御座候左候は、御手今少御痛被遊候迄に御座候、近々御参勤の御礼も御願可被遊と思召候由、且又御国より近々年寄中御召寄可被成と思召候旨被仰候、是は内々の事と存候旨御申聞候、恐悦の至に奉存候。

606◆一 先生去頃此方様へ御使御勤被成候趣、並諸候交代の儀等に付、其元様より被仰下候趣、懸御目候へば、其刻被仰聞候は、藏人殿、武兵衛殿などは、別てもどかしく御おもひ候事は尤に候、拙子も色々致工夫思案候へ共、畢竟納約自牖の意簡要の時節と存候、聖賢の教を御信用の処難得事に候故、そろ／＼其筋へ御趣被遊候様にと存候、其上は天命の所使然にて候旨被仰御笑被成候、先頃以来御尋に付、紙面を以て御上被成候品々多御座候、或は川除、新開等、或は諸候交代等、古今に通じ宜敷仕様、又は撰拳詮撰の類、唐虞より三代、並漢魏晋隋唐宋明に至迄、一世／＼の法を挙候て、其代々の善悪を記し、畢竟當時通行被遊可宜様子、先生の断案を以被仰上候、御草稿もなく冊物も被成御上候事に御座候、明備詳書可申様も無之儀に候、何とぞ御留書も被成候は、写置申度ものと申上候処、後来御考察の物にても候に付、旁御扣に被成度候へども、事長品々御草稿さへも難被成候故、御扣は猶更難被成候、御自分にも気の毒に思召候へ共、不及是非旨被仰聞候処、権七幸罷出候間、早々為御写被成候は、如何と申上候へば、中々用に立つ物にて無之旨被仰候、

夫故私申上候は、一度上覽相濟候へば事濟申候間、被仰上候て御申おろし被成、御ひかへ被成、重て御上げも被遊可然候哉左候はゞ私にても不苦候はゞ可被仰付候、写候て御用にお立候様仕度ものと申上置候、多分は右の趣には成申間敷候間、近頃惜敷ものに奉存候、権七事弥有馬兵庫殿へ相濟、晦日より勤仕と承申候。

607◆一 八朔於御城加納遠江守殿、兵庫殿御見届にて誓詞被成候、兵庫頭殿挨拶には、是は結構成思召寄にて珍重に存候旨御申候由、元來從先生御願の筋にて誓詞被仰付候、前書は存寄の通可相調旨被仰出候由、向後御尋の品々不依何事、存寄真直に申上、すこしも身がまへ不仕、心底に残し申間敷趣一ヶ条、御仕置の筋にて御内談の儀いさゝか他言仕間敷候趣一ヶ条、此二ヶ条心付申分に御座候、此外は尤被仰渡次第の儀と奉存候旨被仰上候處、此二ヶ条にてよろしく候旨被仰出候旨、先は兼々兩人の衆へ被仰達候趣は、毎々御機密の儀も御人私にて御尋被遊御請等申上候處、退出候後如何様の御用に候哉と尋申者多御座候、誓詞仕候へば致遠慮、自然と尋申者無之筈に候、且又返答も仕能御座候、実は誓詞仕候有無により申儀にては無御座候へ共、我不知御用の筋洩申間敷ものとも不存候、以神文誓詞仕候へば、心中にても有之、以來如何様に疎遠の地にて指出候ても、述懐の気味無之為にも宜敷候、私式軽き者殊に新参者、大切至極の御用共承候處、不存寄御用の筋、外様へ洩候儀有之候ても、各様御疑も無之筈に存候、斯様の趣を以誓詞も被仰付被下候へば宜敷、御用も勤め能御座候旨、七夕以前兩人の者へ被仰達置候處、委細達上聞候處、夫には不及儀と一旦被仰出候御様子に候處、追て御僉議も候哉、八朔に被仰付候由、斯様の子細有之候に付、兵庫頭殿挨拶有之候哉と奉存候。

608◆一 当月中旬頃御勘定頭、並其場御役人御目通遠慮被仰付候、如何様の子細に候哉、先頃得御意候節御尋申上候へば、是は勘定頭中より申上候ての儀に候、其子細は上総下総の内に、多く新開に可仕田地有之旨訴申候浪人二人有之、彼目安箱へ書付入置候、依之右浪人に御代官池田喜八郎、並萩原源八被差副、東金(とうが子)と申所へ被遣候處、百姓どもは田畠に難開處の旨、色々断申候へ共、誠精吟味仕候へば、成就田地五六万石も可出来の所と申候、見聞の処罷帰言上有之候處、源八は直に御代官に被仰付候、浪人も一人宛喜八郎、源八へ御附被成候旨、依之御勘定頭以下役人中、只今迄心附不申、浪人式却て斯様の処にも心附、言上仕候儀不念の仕合に御座候間、遠慮も可仕哉と被申上候處、尤に思召候、御目通遠慮可仕候旨にて、毎日御用は被相勤候へ共、御目通は遠慮に御座候、御目附萩原源八衛門は、当春より大井河の川堰御用に付被仰付、久敷罷越御普請出来に付今般罷帰候て此一巻不存候へ共、内々心付不申儀は同事に付、是も御目通遠慮仕候處、御勘定頭以下不残同月廿八日御免被遊候、源左衛門川除御用は夥敷御費、御代々無御座程の御普請に付、是も成就仕候へば田地新開過分の儀に候由、「山下広内上書の内に記し置候、川除の儀に御座候よし」源左衛門は最初被仰付候時分、於御前段段被仰渡、遠慮の儀彼此相伺候ては、事調申間敷候、大概の儀を被仰渡候、是に準じ候事は、御入用の品々構不申候、如何様に成共存寄次第可申付候、御用金等源左衛門断次第少も無滞相渡候様、御勘定所へ被仰渡候其心得可仕被仰渡候、源左衛門彼場へ罷越段々申付候處、被仰渡候とは格別に違ひ申す儀五ヶ所有之、御入用も莫大の儀に付、一往相伺取付可申哉と存候へ共、御直に被仰渡候趣有之候に相伺候ては、上意に不応筈に候、乍然何とぞ達上聞度存、右五ヶ所の儀委細書記、絵図写相添候様申付候間、達上聞候旨申上候處委細御聞届被遊候、但最初に斯様の儀有之候共不及言上可相勤旨被仰渡候、尤相伺申にては無之へ共、氣遣仕様子に被思召候、向後は斯様の儀に不及候条、右紙面等御返被遊候旨にて不残被返下候「当夏御切米俄に指支申候も、実は御入用にて勘定所より急に取立遣候故に候、其故源左衛門を度々叱申旨先生被仰候」今般罷帰候ても、首尾能於御前御聞届、拝領物等有之候旨、扱東金新開地百姓共難渋仕候事は、此辺先年より三奉行附の与力中御知行被下候地方の内近く候故、



年々隠田に仕置、百石二百石計の知行も、御人百姓共過分の免の高に成有之候、此度右の様子露預仕儀に付、色々申立及難渋候、最初訴申浪人は、此趣能々存知候者故、申出候体に御座候旨、三奉行附与力共此度相改、御切米にも可被成哉と申候、然ば御勘定頭遠慮は此下心かと奉存候、此一件は先生物語の外にて御座候、奥村丈小寺大地両兄へ御物語可被下候。

八月三日夜

青地藤太夫

藏人様

十五日本多君話、先頃肥後守殿を以追付宰相様御隠居被成、若狭守様御家督にて御入部被成候様御願可被成思召、御内意の趣御月番迄被仰入候様子に候処、御隠居の儀は暫御見合可被成候。若狭守様御入部の儀は、御勝手次第との趣潜在承候に付為知申候、尤外へ咄は不仕候様可相心得旨御申候に付、是は兼て推察とは格別の品に御座候、何方より御聞被成候哉と申入候へば、雁ノ間御詰衆の内、御月番と肥後守殿と御内談の様子を潜在承申方有之、其人被申候由、此儀暫御ひかへ有之様にとの御内意は、定て御隠居前に中納言に御転任可被成との趣にて可有之候、若州様御入部被成、来年三月御参勤にて可有之旨被申候、六郷主馬も今日申聞候は、若州様御入部御暇来月と承及候旨、申候間御申聞候、此咄の次に宰相様御事は、上様御内々には御後見などと思召との儀は、近頃不存懸結構成事に候、終に私式不承及儀にて候旨申候処、此儀を只今まで不承候哉、先年不時に若州様被為召候て、御直に御鷹被進、為御養生御下屋敷等にて、御鷹野も被成候様との御意等有之、前廉に御老中へ御直談有之被仰候は、只今天下諸大名の内、加賀守年齢と申、筋目と申、随一の家にてしかも終に越度無之儀に候、若狭守も指つゞき様子も宜敷候へば、三家同事に御鷹等御直に被下候ても可宜候、加賀守は天下の為御後見にも思召候旨上意に付、御老中も格別に被存候、此儀は其砌水野和泉守殿、潜在御申聞にて致承知候、且又御三家へも其前上意には、只今三家皆々若年に成被申候、我等事も紀の国にて庶流に候処、不存寄本家を継申候、今天下の為に正統御帰被成候事は格別の儀に候へば、此儀は暫外に被成、御三家の上にて被思召候へ共、又は諸大名の上にも加賀守程家柄と申、筋目正敷儀は無之候、左候へば各仕置等の手本に被成可宜候、御前にも御後見と被思召候旨、上意有之候旨承及申候、斯様の事共引合存候へば、今年八十の御事にて御隠居御願被成候ても御留被成候は、右段々の思召と存候、左候へば尾張紀伊国御年若に候へ共、大納言に御移被成此方様中納言に可被成儀と申者共御座候被申聞候先頃申上候一大事と符合仕候様にも奉存候、何とぞ事実に仕度候、此話共は各別の趣に候間、大方実説にて可有之候、

612◆一 今年雲雀御拝領は養仙院様御三家、並此方御父子様其外には小笠原峰雲老迄に被下候由、峰雲老には如何様の儀に候哉と相尋候へば、此人器量有之、常憲院様御代柳沢美濃守殿へ甲府御城被下、其上美濃守打物の願の由にて薙刀御赦免可被成と有之節、両様共不可然存候へ共、甲府の儀は御預城も御座候はゞ何時御取上被成候ても、自余の例も御座候間、左も可有御座候哉、薙刀の儀は御家門の内にも諸大名の内にも、御赦免無之人々有之程重き義に候へば、御無用に被成可然旨被申上候処上意に不応、美濃守願の通薙刀御赦免有之、佐渡守殿「峰雲老」御前悪敷罷成候、其以文昭院様御代、初て間部越前守殿能役者より段々出頭威勢つき候儀、此人氣に入不申眼気悪敷候旨申上、或時連署の判を態と見苦敷すへ、最早斯様御座候由申上、御老中御免に御座候、今以壯健眼気も指て悪敷無之旨、或時眼気の様子御尋有之候処、御代に相成不思議に眼気宜敷罷成候旨被申上候、斯様の儀にて隠居の内には、此人常々御懇に被遊候旨。

612◆一 此頃の儀に候由、松平右京大夫殿御老中迄存寄御申入候は、近年大名の内行状不宜候方有之、一月に三度の出仕さへ氣随にまかせ、爾々登城無之候、郡大名の内には三両人も其類相見へ申候、斯様の類其分に被成置候ては、以来此類多罷成不可然候、只今の

内急度隠居被仰付候歟、又は年わかき無子者は、相応の仮養子を以家も立、御用弁候様有之可然存候旨被申入候へば、何も尤に被思召候旨沙汰仕候、右大名と申は有馬玄藩頭殿の儀にて可有之候か、郡大名と申候は先指つけて備後守様の儀と相聞申候、今度御参府の日も御並にはづれ、御月番一ヶ所迄御勤被成、其外へは御使者を以被仰達候、勿論道中より御気色御滞おして御参府の旨被仰入候へども、常々の御様子露頭の儀に付、此儀も其内の一事と申候由、御本家へ御無礼の儀も粗及沙汰申候由、此方様へ前月廿七日御着の砌、暫の内御出被成御目見被成以後、御参府御礼被仰上候日など、御父子様共御待被成候旨に候へ共御出不被成候、当十五日、「当日御拜領雲雀御披、御一門様方不残御出」に、もはや御登城御断に付、昼の御饗応にも御出不被成候、しかも其夜は山崎権之丞小屋へ御成にて、宝生将監は直に参上仕候などとの事に御座候、今度長門守様御見廻被成へ共、終に御対面不被成候由、野口兵部出頭弥増、道中御旅宿玄閑迄駕籠御免、殊に横付に被仰付候、去年以前の儀はかぞへがたく候に付、その分に仕候へ共今度御参府以後二十日計の内、はや如此の御様子に御座候、此間山崎権之丞儀何の御用に候哉、帯刀殿へ見廻に罷越、直談の上備後守様御様子申出し難儀かり候旨、依之帯刀殿内々存寄の儀有之候付、一料簡申聞候へば忝儀に存候、今暫御待被成、弥登城等被致懈怠、本家へも無礼止不申候はば、御相談可申旨罷帰候帯刀殿御申聞に候、右御料簡は如何様の儀に候哉と御尋申入候へば、近年水野和泉守殿、備後守様御噂毎度被申候、その日振少し宰相様へも申上候様にとのおもはくと聞へ候へ共、謎の様成事故終に不申上候、然処今般右京大夫殿存寄御老中も尤との儀に候へば如何様にも上様より御沙汰可有之も難計候、然ば何とぞ宰相様急度御異見被仰遣、先三度の御登城さへ被成候へば、公儀表は差て御頓着も有之間敷儀に候故、其趣の御異見一通の御使に御座候、私へ被仰付、次第罷越可申候、権之丞も内々を以私迄相願候趣に、宰相様へ可申上料簡に候の旨御申聞に候、是は乍恐感入候御心附共御頼母敷存候旨挨拶仕候、手前存寄は不肖乍ら、前田帯刀は病身にで爾々相勤得不被申候、横山数馬は扣へがちの思案にて、斯様の御使難仕可有之候、左候へば私相応の儀の上、和泉守殿御噂被申候儀数度の事にて覚罷在候、且又故弥兵衛殿存生の内、大蔵大輔様御不行状多有之内、常憲院様御代生類御憐最中に、於御下屋敷無構殺生被成、犬をも御殺被成候儀、且又御参勤往来に女中を御召連れ被成候、此二ヶ条を相公様御自筆に御調被遊、弥兵衛殿御使にて急度被仰遣候、大蔵様殊外御行当被成急度御止可被成候、忝き儀に思召候とて御礼被仰上候、当座は左様に有之候得共、存外又追て其通の御振廻有之候処、重て又弥兵衛殿御使にて被仰遣、御本家の儀故万一日自公儀御尋も有之候はゞ、如何可被遊候哉、相公様より外斯様の儀可被仰御方御心付無御座候に付、再往被仰遣候旨に御座候、大蔵大輔様殊外御迷惑かりに御座候、弥兵衛此御使相勤被申儀殊忝がり候て遺言に被仕候、斯様の儀も御座候故、たとひ相公様思召に不叶候共、今一往和泉守殿御噂被申候か、又は権之丞存切頼に参次第可申上と存寄候、大蔵大輔様へさへ両度御異見被成候宰相様に候処、只今迄備後守様へ其御沙汰無之儀近頃不審千万成る事の旨御申聞に候、誠に以不存寄事共、初て承申趣にも御座候故旁委細申上候、尤以御沙汰被下間敷候、去春御在府の内、長門守様御舎弟様御仮養子に御願被成、御書付御月番直渡しの儀通例に御座候、和泉守殿御用番の内に候処、朝御宅へ御越の儀は難被成候間、晩景御越被成度旨被仰達候処、和泉守殿より被仰越候は、登城前各得御意候儀は、御前代已来旧例にて、私の仕儀にては無御座候、未明より段々被罷出候御自分に限、晩景得御意候ては同役中存寄も可有之候、其儀は難成候間朝御出有之様に可被成候旨申参候、然処朝はいつも持病心にて難罷出候旨被仰遣、何とも埒明不申候、外の御用番の時に可被成哉との儀に候処、最早御発駕の砌に候、何とも無興に成申候、井上河内守殿御内縁有之候付、河内守殿より和泉守殿へ御挨拶有之外例に成申間敷候間、晩景御達有之候様にとの儀に罷成、終に晩景御越候、其御越被成候様暮六ツ時に御越被成、弥

和泉守殿不機嫌にて其時分も御噂有て候由、此外去年去々年の御行状、筆を捨申事共不能一二候。

615◆一 仙台只今の家老の内、本多伊賀と申者八千石取申候、佐州様より御筋目有之に付、周防守殿、外記殿、帯刀殿へ筋目有之旨にて、切々付届仕、周防守殿へも書通仕候由、乍然いづれもの筋と申儀外記殿にも御覺無御座候旨私も覺不申候、其許にて加藤次殿へも御尋被成被思召出候はゞ可被仰下候、伊賀方へ系図写差越候様被仰遣候様に申入置候。

615◆一 佐州様奥方様は戸田家と申儀、本多豊前殿にて相知申旨御申聞、豊前殿は伯耆守殿孫にて御座候、弥委御聞出被成御書記被下候様申入置候。

八月二十六夜

礼幹 再拝

616◆一 勢州白子の人外海(トノカイ)玄伯は紀州領の者なり、依て当上様御平生の儀能存知、御幼稚の時対山様御子様方御三人を召、御箆箭一ツ御出し、是は鏢にて候、各へ可被下候間御撰取可被成旨被仰候、則中納言様御ひらき被成、御撰にて三ツ御取被成候、其次に内蔵頭殿御同然御取被成候、主税頭様は暫御思案被成、是は不残拝領仕度旨被仰上候、対山様御悦成例の大気者不残被下候旨御意にて候、扱御拝領被成候て、御附の御家来衆へ皆被下二三枚残候を御用被成候。

616◆一 有章院様薨御の日、俄に御城より召に參御出被成候へば、直に御継統被成候付、再び紀藩へ御帰不被成候、然処終に御居間辺、御手道具の類一ツも御取寄不被成候、御近習の面々もいづれに參候へとの儀も無之、只其日当番の輩迄内外共被為召候、此被為召候衆心附にて、御召料の御鎧並御刀脇指の御指替、斯様の御身に副申物一色づつ持參仕置、扱常々大屋武右衛門と申人御氣に入御召使候、其日当番にて無之候故不被為召候、此人は格別に候間多分御呼可被成事と諸人申候処、終に御呼不被成候、今足輕頭相勤罷在候、斯様の儀にて存候へば聖人の様に奉存候、只今吝嗇の様に申儀は、一円無之儀に存候旨申候。

616◆一 紀州にて或時川狩に御出被成候例にて、御川狩の前魚の集候様仕置候事に候、然処其日の御狩に魚一ツも無之、何の御慰も無之候、前廉魚を集置候もの共覺へ有之儀故、近頃合点の不參事としてひた物致吟味候処、川岸に殊外泥のあかり申処有之、依之致僉議候へば、前夜の内捕候者相知申候、沙汰の限成事故為致牢舎候、其段御聞被遊、此者の罪禁牢は過申候、元来有まじき馬鹿にて候、何者か我等が慰に仕候時節に臨て、魚を捕へあらはれずといふ事を不弁者のあるべき、其考もなく斯様の事仕候は至て馬鹿と可申候、然ども其分にては恐る事を不知ものにて、国中へ難差置ものに候国境迄送遣し払可申旨被仰付候、御弱年より常に大明律御教寄被成朝暮御覽被成候。

同月日

礼幹

御手紙拜見、弥御堅固被成御勤候由珍重奉存候、然ば一昨廿二日雨天故登城候処、八ツ時過如例御座の間へ被為召、中華の儀などいろ／＼御尋の儀有之、段々御請申上候、其後貞觀政要講釈を御聞可被成旨上意にて、御見台に御書物相添御近習衆持參、御座の間の外しきみの際に見台指置候へば、御座被成候間の内へ見台入れ可申旨上意にて御座候、私儀も御式居の内へ入候様上意有之、一ツ御間へ入候て御膝下にて講じ申候、講過候て其儘候へば、又上意有之暫く罷在候て其後此以後段々御聞可被成との上意にて退出いたし申候、御側衆も御次に被聞申候その外御近習衆も相見申候、退出の時分有馬殿、加納殿送り被申候が、わけよく立候て承事に候由挨拶にて候、首尾よくしまひ候て大慶此事に奉存候、段々御懇の上意共難有仕合奉存候、経書の儀は何とも不申上候、先此後も政要御聞被成候御様子に御座候、其内序にても候はば、可申上奉存候、以上。

九月廿四日

新助

藤太夫様

深美勘兵衛事、是は深美新右衛門姪孫にて浪人なり、去年以来息久太夫就御用長崎へ被遣

候処、勘兵衛も指添罷越、久太夫手助にも成申体に候、然る処当夏新右衛門病氣指重り看病人無之候、久太夫は不罷越候処、結句勘兵衛為看病罷越候、然処新右衛門病氣不宜、八月帰泉被仕候、勘兵衛今月中旬先生へ御暇乞に罷越、今般態々数百里罷越候処、看病の詮もなく罷帰、久太夫へ対し候ても無面目候、扱は近頃申上兼候へ共、一篇の御送行の文を奉得候て罷帰、責ての眉目に仕度旨急度願申候、乍然只今は日夜御暇無之、何と其求には難被忘候、詩にても不苦候はゞ、其内逗留中調置可申旨被仰聞候処、詩は望に無之候旨申罷帰候、然処廿四日に罷越、明後廿六日致首途候旨案内に罷越候、其日は高倉書院易経講釈、八ッ時前御仕廻御帰り候処に不時に被為召、貞觀政要御侍講の儀申来、推返し御登城被成候、暮前御退出被成候、此日は朝より寒氣甚敷、江戸中灰降昼より北風強吹申候、講釈声高に講じ候様に上意にて、前々より長々と被講候、扱夜中は萩原源左衛門殿へ兼約にて御越被成候、右の通に付勘兵衛所望には御叶難被成候、然処廿五日に罷越、弥明日発足仕候、御作文は如何被成被下候哉と責申候、右之段に付一円御心当無之候、但浪人の儀に候へば一二日逗留有之候ても苦間敷候、明日の発出相止候はゞ、何とぞ一篇御結構可被成候哉の旨被仰聞候へば、一兩日逗留仕候ても不苦候間、御一言を奉得度旨申候、依之廿五日暮頃より御とりかゝり、夜明迄一睡も不被成御かゝり被成候へば、一篇御出来被成候、御覽被成勘兵衛方へ可被遣と思召候処へ、私御見廻申上候付則為御見被成候、近頃御絶作と相見申候、御清書被成候へば畳紙有之候、幸一律詩御作御添被成候、御老衰被成廿四日など途中御氣息短促、長く世間の物にても無之などと御状にも被仰下候へ共、箇様の御精力御強健壯年の人も不可堪困倦候、私参扣仕候は、四ッ時に御座候、一円御草臥の体も無之候、大慶仕候。

619◆一 当主御容貌御詞氣等、牧野左平治殿に能く似申候、御音声別して被為似候旨先頃も被仰聞又此度も御申出し其儘に相聞申候、政要待講も廿四日迄にはや三度御聞被遊候、侍講の外毎々御前へ被為召、御問答の儀御座候端々奉承知候へ不能一二候。

619◆一 今月初四谷野へ御鷹狩の節、御先より只今鶴すはり可申体に御座候間、暫御扣被遊候様申来候、四谷村の内民家へ御入御待合被成候、其節其家の座敷に机案三四脚有之候、其上に折本にいたし候手本の様成物有之、御近習の衆へ被仰付御取寄御覽被成候へば、御代々の御条目を手本に仕たる物に御座候、家主に御尋被成候へば、百姓ながら医者を仕手跡相調候間、村中の子供罷越手習仕候、其手本にも仕又は読物にも教申候、今川庭訓よりも此方ましに可有御座と奉存候旨申上候、還御の翌日御勘定頭御付等不残被為召、昨日四谷にて箇様の儀有之候、是は外の村々へも箇様に仕候様に奉行所より申渡置候哉、如何の様子に候哉と御尋被遊候、曾て申渡候筋にては無御座候旨御請被申上候処、右之者奇特成事に思召候間、御褒を可被下候旨被仰出候、何方にても暫の内御立留り被遊候ものへは、白銀一枚宛被下候御格に候、此者へは外に被下物可有之旨御座、扱御奉行中へ右之趣被仰出候、外の村々へも奉行中より申渡、ヶ様に有之度ものとの思召に御座候也。

620◆一 当主御事御近習の衆中御噂被申候は、終に御怒被成人を御叱被遊候と申儀見聞仕候者無御座候、御腹の立と申事無御座御生質に候哉、替りたる事とて不審被申候旨、御度量の広大故にても可有御座候、何とぞ御徳化の被及万民悦服仕候様奉希候、以上。

十一月三日

青地藤太夫

藏人様

先月初頃上様御鷹野先にて百姓の家へ御入被遊、其家の座敷に巻物の手本有之御覽被遊候へば、御代々の御法度書を集め候物にて御座候、此儀先達て有増申上候様に覺申候、其砌四ッ谷辺と申上候様覺申候、今日新助殿へ懸御目候処、右百姓へ四五日前御褒美被下候御様子御咄被成候間、則右に申上候、右御鷹野先は、四ッ谷には無御座候、葛西辺島根村と申処へ被成御座候処、先より鶴居懸り候間、しばらく御待被遊候様申来候、依之百姓の家

へ御入被遊御覽候処、座敷に机多相見其上に巻物相見申候百姓の家ながら様子宜候に付家主御尋被成候処、百姓ながら医者を仕、吉田順庵と申者の由申上候、右巻物御覽被成候処、御代々の御法度書集申候間、如何様の様子に候哉御尋候処、順庵申候は、近所の子供罷越手習仕候に付、今川など教可申よりは御条目を教申候へば、手習にも又は読習申にも可宜儀に奉存候、子供に教へ申候、今日は御成に付、子供参不申旨申上候、翌日御勘定頭不殘被為召、昨日島根村にて斯様の儀御座候、御法度書読習候様、奉行中より申渡置候儀に候哉の旨御尋の処、申渡候筋にては無御座候、右順庵様子も上意にて始めて承候旨御請に御座候処、左候へば弥奇特成儀に思召候、何とぞ外の村々へも斯様に有之度儀に候、総て御法度筋其当座は寛候ても、程経候へば忘却仕候旨被仰出候、扱四五日以前右村々御代官伊奈半左衛門被為召、右順庵奇特成仕様に候為御褒美、白銀十枚被下候、且又六論衍義大意一帙拝領被仰付候、右の帙事外結構に相見申し候御認に御座候、就夫半左衛門殿帙の結構成儀を被申上候処、是は思召有之、結構に出来被仰付候、順庵拝領仕候はゞ定て所の者うち寄拜見可仕候、子孫へも相伝可申物と思召候、左様の儀旁態と結構に被仰付候旨被初渡候、此村に不限、六論衍義子供の手習にも持はやし候様、心懸可申旨被仰渡候由に御座候。

612◆一 此間目安箱の内に、伊奈半左衛門支配所の内、村の名は角田川小梅村庄蔵と申百姓御尋に付、存寄の儀書物三冊に仕立、紙面一通指添入置申候、御覽被遊御意に応候様子にて、翌日御勘定頭不殘被召被仰渡候は、追付御前へ可被為召候、差て可被仰渡御用は無御座、久不被成御逢候間、御前へ可罷出旨被仰出座の処、右庄蔵存寄申上候趣など有増上意にて、総て御役人中の手前勤方等の儀、去年以来目安箱の内へ書入置候事共品々有之候、善悪共末々の者申儀、其儘証拠に被遊候儀にては少も無之候、其御様子は去年以来何も存知の事候、然ば勤仕の筋に少も泥なく相勤候て宜く候、御用捨は上の御覚悟に御座候事に候、目安箱の内に有之候書付、夫々被為御見被遊候ても可有之候、扱は段々儉約の儀被仰渡候、総て儉約の儀は事急に仕候ては下々難儀仕儀に思召候、事のゆるやかに相調候て、御儉約に罷成候様可相心得候旨被仰渡候、何も退出に御座候、且又伊奈半左衛門被為召、支配の内某村庄蔵と申百姓存知の儀申上候、奇特に思召候、添紙面有之に付御覽被成候へば、三日は江戸に致逗留御左右を奉待候、三日過候はゞ在所へ可罷帰旨相調候、早速留置奇特思召候、可申聞候、段々御尋の儀も可有之候、必以て荒く申渡間敷候、右書物の外にも口上にて申上度儀候はば申上候様、やはらかに可申聞旨被仰渡候由、右三巻の書物如何様の趣に候哉相知不申候へ共、山下広内言とは違ひ、成程実体成紙面忠孝等の事より、段々存寄書記候、元来神道の学を仕者のよしに御座候、以上。

十一月廿五日

青地藤大夫

藏人様

私侍講于今不絶被仰付候、先月晦日にも相勤申候、御前へ罷出候へば、講前常々御咄など被遊、私式には無類の御懇意難有仕合奉存候、老生無材徳候へば中々可奉感動様も無之、残念に奉存候、去ども貞観政要逐段御聞被遊候間、少々の御裨益には可相成かと奉存候、余命無幾候へば幼少より学置候験に、些少成共世の益に罷成相果候はゞ、如命本望の儀とも可申候、当年御同氏藤太夫殿御在江戸故、当地珍敷事は藤太夫殿御物語申上候間、相達可申上存候、此間も少々好事有之、則藤太夫殿迄御咄申候て可申参と奉存候、言路もよほどひらき申候、其故下情通じ珍重成事に奉存候、只御先代以来府庫虚耗、年々の御使用も大分の事に候、何とぞ近年の内に御儲蓄も出来候様に被遊度被思召候御様子と聞へ申候、三年の儲なきは国非其国と申候へば、是を御尤と奉存候、其故水野和泉守殿を簡略奉行被仰付候、是によつて万端吟味弥泉州少も無用捨候故、諸役人も難儀の体に先日比は相聞へ申候、其砌侍講の節何とぞ其筋の事も出て候は講述可仕と存候処に、唐太宗良弓を弓工に為見被申候へば弓工のいはく、此弓はいづれも木心不正候故、木の脈理皆邪に良弓に非る

由申上候、太宗のいはく、弓矢を以天下を取り平生弓矢の事には習ひ候、其さへ相違有之候、まして朕天下を治る事日浅し、いよ／＼存違可有之候間、群臣何も心底を無慮慮申上候様に被仰候、胡致堂の論に、此弓工が申候は、太宗を諷諫致し候、木心不正と申は、君心不正のたとへにて候、其を太宗御合点不被成候由被申置候、是に依て私講じ候は、致堂の論尤にて候、但し不正と申候は必しも悪を申にては無之候、たとひ其事惡にて無之候ても、君心の少にても偏に候はゞ不正と申物にて候君の心少にても偏に参候はゞ、群臣其旨を受候て下へいよ／＼つよく申付候故、下の難儀にも罷成候事毎々有之、たとへば簡略を被遊候事は御尤成事に候へ共、思召其方へ少にても偏に参候へば、其方の御用承候者共思召に叶候様にいたし候故、御為に畢竟あしき事をもちへりみ不申、人の難儀も用捨不仕候間、たゞ己一分の功を立たがり申候、当分は思召の通はか取候て、御意に応じ可申候へども、畢竟御為あしき事にて候、あらまし如此に候、委細は簡略の事あまり急に仕まじく候、只其心得仕候て、漸々に致可申候、急に致候はゞ人々難儀に及び申事も可有之候、其処をよく簡弁致し候様に御直に被仰渡候、是程の益には罷成候間左様に御心得可被下候、是程の儀も只今空谷の足音と可被思召候、及暮わけ見へ申間敷候、奥源左衛門殿などへもそと被仰可被下候、たゞ／＼御仕置へ懸り候事〓誓詞に候故、すきと他言不仕候、是は私講積の趣にて候へば、格別の事に候故申進候、それともに御沙汰は御無用被成可被下候、且又最初講積の節申上候は、人通常に講御聞被成候へば、御養生薬を被召上候様成物に御座候、御病氣出候て申上候は、諫臣の仕事にて候、其故諫議大夫など御病氣を見てその的當の薬を指上申道理にても、常に侍講の官を被指置候は、養生薬をあがり候道理にて候、差當りの益は無之様に候へ共、畢竟は御無病の本に罷成候由直に申上候、其故か其後不絶侍講被仰付候、是も序ながら申進候、以上。

十一月四日

室 新助

青地藏人様

当三日御書中に、大聚斂の臣は泉州にては無之候哉、御預地の儀に付候ても、其気味有之体に御聞及被遊候旨承知仕、美事を申候様に無之儀に付延引仕候、只今左中に申上候、或時潜在御尋申上候は、当主御在位以来の儀ともは姑議論を止置、当春以来の御施行迄にても兎角非常の英主には相極申候、その上聖賢の道を御信用と相見へ、先生へも御知遇の体弥以御頼敷儀に御座候、然るに俗人の儀ながら、世上の毀誉相半仕候、甚敷は落首秀句にいたし醜惡を極申候、然ながら右の徒多は販商又は御旗本の内放逸の輩悪口仕候事の旨申候、少おとなしき者どもは中々左様には無之候、憲廟文廟兩代の極弊を御受被遊候へば、当主の被遊方にて無之、並々の事にては何の效も有之間敷と申候、頗御当家御再興の棟奉存候、先生には如何思召被成御座候哉と申候処、世上の毀誉御取上候事にて無之候、子産が鄭国を治候さへ、三年の内は童諷にも誰か子産を殺さんと申程に候へ共、後には父母の様に申候、畢竟積弊を改候時は、善事にても一旦俗の耳目を驚し候故、誹謗起るものと相見申候、但當時の様子施を御好の方は稀にて、御吝嗇の方御見被成候故、迎合仕候者のみ聞候て、色々聚斂の道を開申候、第一御儉約方主付被申候、水野和泉守殿老中の権を執て、聚斂を事と被致候故、御勘定頭など其方へ参申候、有馬兵庫守殿なども指て学識も無之候へば、指当り泉州の被申候方へ傾被申候、昨夜も萩原源左衛門へ参物語の様子、此等の事に及び申候、御勘定力の内にては、源左一人聚斂は国家の為によるしからずと存寄罷在人に候、此比も町中へ色々見苦敷事を巧出し申懸、あなたより運上差上候様致成候に付、源左急度不可然趣を泉州へ被中申述候、泉州不遜の言葉出申位に御座候由、源左申候は十年前迄に候はゞ、中々是程の儀申得候拙者に無之候所、慥に不可然事と存其趣を申述候は、皆先生御教誨の效と存候旨被仰聞候旨被申候、私申上候は御恥辱も不被顧候とて、天下の金銀を御借被遊候て、又此の度は切米衆へ百俵に四兩づゝ、来年迄御借被成候事などは、

別て天下への聞へも如何、又実に難儀に及び申徒多可有之儀に御座候、是は如何様の儀に御座候哉と申上候へば、先生も苦笑被成、是故種々悪口も止不申候、不慥事に候へども承及候一事有之候、神祖の御時天下富有、其上佐渡国を始天下の実山一時に開け、顆敷金銀御貯出来候に付、黄金六百枚に満候へは、ふんどん一枚宛に被為鑄、林道春に被命一枚／＼銘を雕付、御子孫に至り国家の御大事に成可申時、不得已候はゞ、御取出可被成候、御当用には必御無用と申意を記申候、此ふんどん三十六枚出来仕候、然処憲廟の時、一枚も不残御常用に御取遣被成候、それにても不足にて種々巧出候、砂除金等の事迄も起申候、此度此ふんどんも御先祖の御旧式に被遊可然被申出候、はや六枚とやらん出来候様に申候、神祖の御代さへ余不入儀に候、況此時代無益のふんどん瓦石の様に罷成有之事、甚不可然事に候、実正に候、其段は未御存知無之旨被仰候、扱被仰候は只今の様に海の物とも山のものとも難決候、天命の所在と被存候、但善き方は多き様に存候、後醍醐天皇の御時、御政務人望に叶不申、楠正成種々諫言も奉り、謀略も運し候へ共、其効無之候に付、誰やらん天下は如何と相尋候へば、身不肖に候へ共某、まだ世に罷在候と御聞候はゞ御運は可全と可被存候と答申由に候、然に終に湊用にて戦死仕候楠は名将の事故、一言を以其信を取其効も有之候、私楠の真似を申にては無之候へ共、似合に知己の主を奉得候上は、斯様に仕罷在候内は先心安可存候、何とぞ変も候はゞそれまでと可存候旨にて御笑被成候。右御談話、十月末つかた承知仕たる事に御座候、急々如律令。

十二月十二日

礼幹記

萩原氏泉州兵庫兩人へ御切米の内又御借用の儀にと申分は追て可申上候、

当七日頃より施薬院と申事起申候、小石川御殿地の跡に御小屋かゝり〔御小屋出来仕有之旨〕其内へ江戸中町人以下病者願次第、右御小屋の内にて療治為仕候、本服仕候迄は御扶持被下候筈、看病人の有無には不依候、看病仕候ては今日難続候はゞ、看病人は罷越御扶持も被下候筈とやらん、但病人迄とやらん、左様の儀はいまだ慥に無御座候、御医師の内林良適〔是は良喜紀州出〕岡丈庵〔是は近年迄御守殿付文庵子〕兩人付申候、御小屋へ附申役人多出来仕候由、いまだ廻状には不申来候、是も永木新左衛門咄申候、先生には橘隆庵も承合候へば、施薬院と唱申候、専不告の者御救の趣に御座候旨承知仕候、以上。

十二月十二日

礼幹

昨廿六日殿中には布衣以上の御役人不残、御譜代大名衆三汁七菜、大御饗応にて殊の外御祝有之、紅葉山神祖御霊前へは、戸田山城守殿を以御献上物品々御座候由、御三家へは安藤対馬守殿を以、三種二荷被進御三家よりは二種一荷御献上物の旨、如何様の品に候哉と奉存候処、神組御生日に御座候、壬寅は御同甲子に付、六十年に一度づゝの儀に付、分て此御祝に御座候、是等も乍恐御尤成思召寄の旨、同先生被仰下候。

628 ◆一 先日申上候、御弘方六十万両出申との趣は相遠に御座候、慥成町人会所へ参咄候由、伊織殿被仰聞候、十六万両の旨に候、十四年以前より相滞申分、但役人中より町人相對を以三分一減少にて可受取候哉、左候はゞ只今願者へ可被下候、若又三分一減少を不願者共へは幾年にても年賦に可被下旨の処、皆々三分一減じ納得仕相渡り申候、千両の処は七百両と申図の旨御座候、歓声満巷候旨口々に申候、兎角下愚の族は恩恵を可先事御座候。

628 ◆一 今暮前備後守様俄に御出、私有合御先達等も罷出候、御惣髪蓬々とし、鬢髪如雲と申様に見事に被成御座候、相公様より御杉重一組、梟一籠、嗣君へ御杉重一組、御交肴一籠御持参にて、御献上被成候、相公様には御隙入の旨にて御逢不被遊候、若狭守様は御居間へ被為召、御対面被成、追付被成御帰候、斯様の御志らしき儀は此度初ての儀と皆々申候、是は本多帯刀殿被致候事かと存寄候儀御座候故委細申上候、先達て申上候通り、諸大名御鷹の雁鳧段々御拝領の処、備後守様へも被下候筈と御沙汰御座候処、御拝領不被



成候、是は登城数度懈怠し衆中へは可為御無用との趣にて相止申候、弥其通と相見万石位の衆へ迄不殘御鷹の雁拝領相済申候、然慮当月十九日俄に上使を以雁二ツ御拝領被成候、其日帯刀殿は徳昌院殿月忌に付寺詣の処、途中へ早馬にて申参り寺詣も相止参扣有之、首尾能相済申候、其日帯刀殿存寄を御側へ有増申述、世上の取沙汰不興千万に御座候、御惣髮御願の以後も只今迄の通被成御座候はゞ、上の思召も悪敷可有御座候、第二には御本家へも御無礼言語同断の御様子、御入十歳に被為成候御親様へ斯様の御仕形、兎角可申上様も無御座候、少御心付御改被為成候様仕度の旨被申上候へば、存の外御請様宜敷、左様の沙汰とは不存候、向後切々御出にて御申聞候様被成度との趣にて、如何可有之哉と二十二日潜に被仰聞候、今日不存被成方、先々一段かと奉存候、帯刀殿心入共近頃感入申事共御座候、以上。

十二月廿七日

礼 幹

先生無御別条昨今共御書通に及び申候、内々一件舎人殿へ尋見申候へば、曾以御沙汰無御座旨御座候、木下氏へは昨日も染絹五端、塩鮭二尺被遣候、此衆四月以来見分仕候とも、三度か被遣物御座候、先生へは責て一度の御沙汰も無御座候、定て有子細事共にて可有御座候。

十二月廿八日

同

先生へ昨日以紙面申上候御返答候、廿七日被召御出候処、御内々にて御時服二ツ拝領被仰付、則御前へ罷出御礼可申上候旨被仰出候に付御出処、直に講釈御聞可被遊旨、上意にて、貞觀政要初冊一昨日より不殘講畢候、難有仕合奉存候、御首尾無殘所候間、氣遣仕間敷旨被仰出候、右の趣紙面に認奉達御聴可然趣に候はゞ、被達御聴可被下候旨、調舎人殿へ達候へば、成程可宜との拶挨拶にて被差上候、今以何の被仰出も無御座候、内々の一卷も御座候て終に今年一度の付届も無御座如何の儀と奉存候、先生御勝手春の事はしらず、先只今は跡先に成、藏宿にて取替御門へ遣被成候間、少も気づかい不仕候様に被仰下候、石黒氏も存外神妙に被懸心候間、春に至石黒氏申談、追て御相談可申上候、以上。

除日

青地藤太夫

享保八年

旧臘廿六日、東照宮御誕辰御祝有之儀は、先達て申上候通に御座候、此儀に付廿七日御侍講の砌被仰渡候は、林大学頭父子、右御慶事に付、祝辞致献上候、新助も指上候様にと被思召候旨被仰出候、依之廿七日より除日迄、御寢食も被廢御出来にて、兵庫頭殿を以御上被成候、誠御特命の儀別て珍重奉存候、御草稿は暫間有之為御見可被成候、未經照覧の上、何の被仰出も無御座候に付、御見合被成候旨御座候、拝見仕次第写入御覽、其後其元様へも尤指上可申候、以上。

正月四日

青地藤太夫

此書状相調置処、今昼佐竹京大夫殿御出に付、俄に八ツ時御使に参候処、幸之儀先広徳寺へ参詣仕扱駿河台へ参上仕被得其意候、随分御堅固御超歳被成候、去廿七日御侍講節之儀委曲御物語も承知仕候、東照宮御誕辰御祝之儀も、前廉色々御内談有之たる御事御座候、御生日を御没後に御祝被成儀候ても義理に叶可申敷、凡第一中華に例有之敷との上意にて、先生も御覚無之事、中古以上に可有之礼義にても尤無之候、但誠を以被起候ても、不苦筋にて可有之哉と被仰上候所、何とぞ中国の天子に有之例御聞被成度とて、色々御考被成候へば、永楽大典之内とやらんに、明太祖之御生日を代々に祭祀被成候事、御見当り被成候、生忌共祭り申儀能御座候旨、群臣の賀表も相見へ申候、是に御もとつき被遊候て御極被成候、同支幹故分て此度御大饗御催之儀は、思召より出申事と相見へ申候、此事は大典に相見不申候由、扱御祝辞の稿本拝見仕候、規祝之体を被兼候て、兎角可申様も無之結構に御座候、一兩日には為御写可被成と思召候旨被仰聞候、九日出に何とぞ進覧仕度奉存



候、此趣御学友衆其外山本氏へも為御知可被下候、忠三郎殿一段〱御成熟、何卒奉中御目見御願被成候様、強て申上候、左様にも可被成旨被仰候外、其元より可被仰遣候。

631◆一 先日申上候、帯刀殿、備後守殿へ寸志被申上候て、後廿七日暮此許へ被成御座、御両公様への御様子は、先達て申上候通御座候、廿八日にも御登城被遊、歳暮は此許へも御出、元朝も御登城直に御出、爰元にて御祝被成候、終に無之儀に付、元朝帯刀殿へ廿七日以来之御様子を申達、安堵被成候様申入候故、廿九日に御自筆之御状被下、今度心ざしの儀申上、殊外御満足被成候、以来心安致参上、世上之儀も申上候、心得にも成申事共無遠慮申上候様被成度候、御状の御しるしとて、御在所より到来候御餌栖之鳧二被下之、近比以忝次第内々推察仕候とは違候て、御すなほなる事珍重至極之旨申候、末々何とぞ御遂被成候様に仕度候、帯刀殿兼々心懸も有之上、此度の様子近比乍恐感入申候、沙汰は不仕候様に被申聞候へ共、其元様へは申聞度候旨申入候へば、夫は本望の儀に候間、前廉より之首尾申上候様に御申候間、如此御座候、以上。

正月四日

青地藤太夫

藏人様

先達て申上候、先生御作文一冊写候て、只今進上仕候、御前へ上候時分草々写不謹の書体に御座候へ共先々はやく進上申度、其儘懸御目候、御写直し可被遊候、先者に申上候儀承違候趣御座候条、左中に申上候、生忌共祭と申儀は、大明会典之内にて御見当被成候由、永樂大典は御文庫にも無御座候旨、且又群臣表賀之儀は、当今聖節之時迄之事にて、明にても表賀之文も定格有之、是は節行事例と申書に御座候、没後に先祖の誕辰、会典に祭典之事迄相見申候旨御座候、御前にて先生御自筆一冊御留置被遊度旨にて、一昨六日指上置申候、先生も御満悦に被思召候、殊一冊御留置被遊珍重に思召候旨、先私方より御挨拶可申達候、追て御挨拶可被仰遣旨にて相済申候。

正月八日

青地藤太夫

633◆一 今年も御切米取より、百俵に付金子四両づゝ御借被成候儀に付、萩原源左衛門執政水野泉州迄申入候は、近年御国用不足に付、御切米取より御借金被成候儀人々迷惑仕候へ共、去年迄は指上難儀にも不及候、春に至被下候へば同事に候へ共、今年米下直近來無之儀にて、軽き者共皆々被下候てさへ及難儀候、其上箇様之為旁、諸大名より上納金も被仰付儀と奉存候、左候へば今年之儀は不及御借金様に被遊度者と存候旨申述候処、泉州以外気色損じ、ヶ様の儀は拙子とも申候ても、御手前などは左様に被成候ては、御費用難償候と可被申管之義に候、悪敷心得之旨にて叱被申候、源左衛門重て被申候は、来年之御収納方をも図合候へば、御不益無之様相考候に付、此儀申上候、其上私支配之内にも御切米取多御座候、御知行にて地方取は皆高知の処、却て金収納仕、却て小給之者より御借金之儀を、近比不順成儀に候へば、私を初め地方取よりも御借被成候はゞ如何可有之哉、諸大名は御借金被成候へども、是は交替之格相改候に付、却て上納金よりも為勝手は宜敷罷成候、然れば只今迷惑仕候者は切米取にて御座候、箇様之儀存寄候に付、乍慮外存寄申述候とて、言葉を尽し申入候へば、泉州も言葉屈候哉、手前迄にても無之候、兵庫なども一円同心は有間敷候、兵庫へも可被申聞との儀に付、追て兵庫殿へ右之通申候へば、是も泉州同意に散々機嫌損じ、御自分之役には別て料簡違に候、泉州御申之通手前共簡様に存寄候とも、夫は難成儀と被申候てこそ宜しく候に、不入事との申様に付、源左衛門も最早致閉口候、然共兵庫殿聞捨に成がたく候故、其趣達上聞候と相見、翌日とやらん泉州迄被仰出、源左衛門料簡之通にて御収納につかへさへ無之候はゞ御切米被下候者共より御借金不被成程宜儀は無之候、僉議可有之儀と被仰出、重て源左衛門召出し、来年御収納に風水の損毛有之、又は諸国廻船之場所難渋有之候ても、少もつかへ無之考相成、慥に其図に候はゞ、可申聞との尋様に付、風水之損毛廻船之破損等は、豫難計儀に御座候故、左様之災

難は無之候ての因に御座候、御前代以来不時之儀迄も相考候て、慥に有余にて其余計を以御切米等被下候と、申因は無御座事に候、只大数を以相考、此通にては御不足は無之候筈と申儀に御座候、不時之儀は如何様之変可有之も難計候故、其儀は其時の様子次第、又如何様にも罷成候儀に候旨答申述候へば、萩原近江守利口過候て、何之因も無之儀共を申述候処、老中に被問詰候ては、跡へも先へも不参事共を申出候、各の申様皆其類にて候旨被申候に付、源左衛門申候は、近江守不屈之仕形は偏く人の存したる儀に御座候、私儀此御用相勤、近江守仕形を似せ申儀は無御座候、無考儀にて此度之御借金には不及儀と、申上候事にては一円無御座候旨申述候処、終には去秋之通御切米取一統百俵四両宛御借金と申に相極り候由。

此儀に付先達て申上候、萩原氏憤嘆は出申儀にて御座候、源左衛門殿も軽き役人にても無御座候、御役料三百俵被下、御勘定頭之下へ属申候、別て御儉約方主付相動被申候に付、泉州並兵庫殿へも愚意を申述べられ候。

635 ◆ 一 右の様子先生十月廿五日夜御聞被成候、晦日は政要の侍講被仰付候節、御側に兵庫殿並加納遠江守殿兩人侍座被仕候、太宗良弓を十張御取出し秘蔵被成、弓工へ為御見被成候へば弓工是は木心不正候故、百理邪にて良弓にては無之旨奏聞仕候処、太宗大に感有之、朕弓馬を以天下を取候故、弓を觀事甚多し、然に却て此弓工には目利不及、左候へば天下を取て日浅ければ、治平候様には候へ共、何程政治に不足所可有之難計候、自今以後五品以上の京官毎々罷出、政治之得失百姓之病苦を可申上との御儀に候、太宗御心附之程可申様も無之結構成事共、誠に三代以来の賢主、貞觀之太平を御施被成候も是故と奉存候、但右弓工の木心不正と申上候は底意有之候て、太宗を諷練仕候儀と相見へ申し候、此事は宋朝の胡氏が料簡に御座候、いづれに胡氏が申通弓工は太宗の御内心を見届候て、諷諫仕候趣と相見申し、凡心の不正と申事、或は女色に耽り行跡を乱し、或は酒色を嗜て悪敷風俗に陥るなど、申儀は、一向悪事にて候故不正など申儀に及不申候、不正と申は善事にては、其事偏に成候へば不正に罷成候、大学に正心誠意と御座候も、意を誠に仕候上に、悪事は無御座候へども、心偏重する所御座候へば、不正にして邪に成行申候、たとへば儉約を守り申程之事は無御座候へ共、儉約に偏に成候へば、種々の弊出来申候、只今御儉約第一に被思召候て、御身之上を始質素に被遊候儀は、結構至極之儀に候へ共、是も偏に参候へば、諸役人共は人々の功を立申度、しかも不正の心を以偏急に万事儉約を宗に仕候へば、一旦は御為に相見候へども、未々之者へ移り候ては迷惑も仕、難儀にも及候て、畢竟は上の御為に不宜候、畢竟は御為に不宜様に罷成候へ共、只一旦の御為をのみ存候は、衆人の習に御座候故不及是非奉存候、扱太宗云々と本文の意に移し被講候由。

636 ◆ 一 右の翌日十一月朔日、御勘定頭三人御前へ被為召、御儉約之儀被仰出候へば、殊外急に申付候故、未々に迷惑仕候者も出来と御聞及被成候、ゆるやかに仕候てしかも御儉約に成申仕様は何程も可有之候旨、御直に御意の趣先書に記申通に御座候、泉州へも被仰出有之体に承及申候、永原新右衛門先日罷越、頃日御儉約方余程ゆるやかに罷成候御沙汰に御座候とつぶやき申候、誠に仁人之言有利哉と奉存候。

636 ◆ 一 其次の段御侍講に太宗諫を納らるゝ事盛徳の一事に御座候事は不及申候、群臣の上を恐れ言葉を尽しがたく可有之かとの御遠慮にて、御顔色を和申上よき様に被成候儀は別て難有儀に御座候、玄宗皇帝は太宗の孫にて御座候、或時鏡を御覽候て御憂被成候体相見申候、御近習の者相伺候は、何故御憂色御座候哉と申上候へば、思召の外御疲被成候様見へ申候故、如何様の儀に候哉と御憂被成候旨上意候処、近習の佞人共能幸に存申上候は、されば張九齡を宰相に被遊候て、以来御窮屈にのみ仕なし候故、日々に御疲候様に内々何も申候、少御遊楽も被成候て可宜と申上候処、玄宗暫く思案被成、されば九齡を用ひて以来、朕は疲候へども、天下は肥候様に覺候旨上意にて弥九齡を御用被成候故、小人

共貌を改罷在候、貞觀の政を御慕被成候故、開元年中天下大に治り、太平の天子と唱申程に御座候、此事には私存寄に不審御座候は、玄宗の朕は疲たれども天下は肥たりとの上意、合点参らず候、天下肥候は、御身も共に御肥可被成事に御座候、此御疲被成候と御覚被成候御心根故、九齡もけふたく思召外には御崇敬の様にて、内々は御疎ましく有之候処へ、御近習の佞人とも乗候て、色々讒言も構申候、初の内は右の様に被仰候へども、後には御実心あらはれ、九齡も遂はれ、李林甫如きの悪人御登庸有之、段々天宝年中に成、安祿山が乱出来終に蜀へ潜幸に及申候、然は畢竟李天子御身の上を誉候て、追従申者は、皆小人の流にて、一旦けふたく思召候もの共は多は賢者の流にて御座候旨御講候由。

右講畢て退出候処遠江守殿送り被申候て、扱々御蔭に拙子共迄結構成事共承候旨挨拶被申聞候。

右旧臘廿一日調置候、十一月廿五日御物語の旨、正月廿二日到来（礼幹記之）。

637◆一 月迫に至町中に十四年以前御前代に相滞有之候、御買掛大半被下候、十六万両出申候旨町人共申候て歓迎声充街申候、先生へ御尋申上候へば、十万八千両と御聞被成候旨被仰候、常憲院様御代の御買掛莫大の儀に付、総高の内三分一引候て御渡被下候ても、納得の者へは被下候十分共可請取旨申者へは、年賦を以可被下之旨被仰出候処、大半三分引にて請取候旨（右附録）。

638◆一 旧冬十四日諸御用達当年分の御払金不残被下候、其節戌年より丑年迄の御払金分三分引にて請取可申候、且又外残可被下候、諸方へ被仰出候、依之諸御用達共得心の上、同廿六日御払被下候由、大抵四十万両程の由。

正月三日聞番廻状の写

638◆一 旧臘関東の百姓の中より訴状差上申者有之、漢文にて調候て御勘定頭などよめかね候に付、辻六郎左衛門と申候、最前美濃の郡代にて候、只今萩原源左衛門など、同役にて候、此人少学文有之候故、先日御前にて右之訴状講釈被仰付、何も御勘定奉行並萩原氏など迄、於御前聴聞の由に候、よく聞へ申様読申候由、源左衛門物語にて候、然処講過候て各へ御直に被仰出候は、訴状の是非は先指置れ、上より被仰出候事を、かやうに批判致申上候事、御大慶の儀に被思召候、自今以後も箇様に下より無遠慮異儀を申上候様に被遊度の由上意に御座候、一統に難有儀とて奉感候、段々御仁政相達可申奉存候（正月二十五日 賜斎賢書）。

638◆一 去廿五日先生御宅へ参上仕候、御物語共早々御聞被遊度之旨有増筆記仕置候へ共、何とも此度は難申上候、当十一日私方へ御出の節御物語、且又昨夕あなたへ参候事候て承申趣など、中々大抵を超申儀ども筆紙にも先は難及御座候、去共秘策には書留申候は、追て透も御座候節、写可懸御目候別て昨夕承知の事共は君も君臣も臣千歳の一時に奉存候、殊に武藤庄次郎殿と申人出来、兎角可申様も無御座候、箇様には申上候へ共、其許御領地の儀に付、野村殿物語の趣委細被仰下承知仕候、扱扱非道の事共不興に奉存候、皆以水野執事の取捌と奉存候、此人の儀に付候ても、当十四日到て御直言被仰上候、何と成行可申哉無心元程の事に御座候、大切至極の事も封事は御嫌被成候由にて、ひらき紙面に付有馬殿は一覧も有之由仰聞られ候、就夫無心元奉存候事に御座候、君不密則失臣と御座候故、少御慎密に有之度物に奉存候、是は外の儀にては無之、先生御身の上を気の毒奉存候故にて御座候、此度野村氏物語の趣は幸頃日先生御心懸の事共に候間、以書面可懸御目と奉存候（一月十七日夜 礼幹来書中）。

正月廿五日先生得御意候節、当廿日不時に被為召候は、御寿賀の儀にて御座候哉、御侍講に御座候哉と申上候処、両様の儀にては無御座候、去年以来存寄共申上置候事に付被仰出候品有之、乍恐結構成思召共にて奉恐感候、追而表向へ相知可申旨被仰聞候、如何様の御首尾に候哉と申上候へば、御簾本中跡目被仰付候趣の儀に候、一々申上候通と申

趣にては無之候得共、大抵申上置候趣に可被遊御様子に候、廿日兵庫頭殿を以段々御老中若年寄衆へ被仰渡候処、此趣新助へも可申聞旨上意に候、わざ／＼被為召被仰聞候、御請申上置候上に、近比不存寄難有儀に奉存候、御老中、若年寄衆迄被仰出候儀を、私へも被為仰渡候儀、誠に不存寄事冥加至極奉存候旨申述候処、尤成心付候間其段も追て可申上旨、兵庫殿挨拶有之候。

640◆一 頃日御勘定方仕様不宜奉存候旨、御領百姓名主の子に学問有之者紙面を以申出候、其紙面常体の文段にて無之、文章に相調候に付、御奉行以下読得申者無之、兎角通不申候、御勘定吟味役辻六郎左衛門は、萩原源左衛門相司にて昔より学問有之候、右紙面今般於御前御老中以下御勘定頭等何も罷出僉議有之候処、六郎左衛門読候て、難通所は一々可致講釈旨被仰出候付、六郎左衛門被講候、依之皆通じ申候、其上にて被仰出候は、右名主の子被仰渡候趣を、とくと合点不仕候付、斯様に申候かと思召候、近日当地へ呼出、委敷申聞候はゞ得心可仕儀と思召候、但斯様の者共此方の非を心付、如此以紙面申出候事、珍重成事にて無之候哉、何も珍重に可存候事と再往御称嘆被遊候旨、将又此間橘隆庵など御次へ相詰申内、色々物語の折に、唐の太宗と日本の秀吉と能似候、不入合戦数寄にては無之候哉、秀吉も朝鮮陣迄を仕出し、夫にて天下も不治候、太宗も晩年迄高麗を攻られ其流矢にあたり、終に崩御とも申伝候など、咄候処、御叱被成太宗と言人は秀吉と同日に申人にて無之候、但し不入陣数寄は如何にも皆いふ通、不入事と上意に候。

640◆一 先日被仰聞候は、御直に御尋被遊候は、新井筑後守学問は如何様に候哉との御儀に付、筑後守儀古今に通じ博識の者にて御座候、世間に博識の者多候へ共、多は中華の事迄に博御座候処、筑後守は日本の事に殊外委敷、和漢の事引合候て能弁じ申候旨申上候処、暫あつて筑後は文飾の多きものと、御聞被遊候旨上意に候、其通とも何共難申上儀に付、只謹で罷在候へば、外の儀など御尋に付退出被成候処、御近習の衆を以筑後守何ぞ御尋被遊候共可申上候哉、如何存知被成候哉との被仰出に候、是又可申様無之に付、上意を以御尋被遊候に、存知罷在候儀を不申上儀は御座有間敷と奉存候、但近年老衰仕候て、物覚悪敷罷成候由申聞候、近年の儀も失念仕候事多く御座候旨申上候へば、其後は何の被仰出も無之候、其内筑後に逢候はゞ、此趣可申聞哉とも存候。

641◆一 上様至極御無欲の御事、皆とくと御見聞被成候、凡人君の類斯様程寡欲成御生質の出来仕候儀は、近比妙成儀に候、指当人々へ過分の者など、御施被遊候儀無之に付、御吝嗇の様に世間申慣私式迄も其疑有之候処、真実御不欲の儀無比類儀共に候、夫故声色の御好自然と無之候、至て御生質の美可申様も無之候、新井筑後守御代始に沙汰不宜候て、御擯斥被遊候へ共、只今にても其身さへすなをに候はゞ、御用可被遊思召之体に推察仕候、御寡欲の儀此度慥に見届候旨被仰聞候、日外海外氏物語の儀存申合候。

641◆一 私申上候は、去暮宰相殿へ御願の儀は先年至て御困窮の時分以来、終に被仰達候事も無御座候処、此度は同姓蔵人以下金沢に学友中一同に私迄内談も仕、達て御願被成候ても可然旨申越候、私も尤示談の趣に任せ可宜と存候、御紙面も取次相達候処、今以兎角のいらへも不被申出候、たとへ氣に入不申候共、一往成不成との挨拶可有之処、其儀さへも無御座候、然ば去暮も被申上候通、御願の品御指止被成候間、御紙面相返候様に被成度などと、舍人迄一往申達候ても可然様に、心付及御相談候へ共左候はば却て催促仕様に相聞へ候へば、却て不入事に候、第一拙老の方へ難渋成事を申懸候様に候、非本意候、左候へば一向此儀は齒牙にも不掛と申趣に被成置、可宜様に御相談故、其分には仕置候へ共、畢竟は先生へ私の恥辱をあたへ申様に罷成、近頃迷惑至極奉存候、是程心外の迷惑は無御座候に付、何とぞ神意を承り占決仕度存、今日天満宮へ参詣仕、宮籤を取試候処、近比不存寄をもしろき籤辞に御座候条持参仕候、此許に被指置可被下

候、此天龍の二字は、何れを指たる語にて哉、籤杯の儀先生御心中に不相叶、無益の儀に心を用申事に可被思召候得ども、私心底不得已如此に御座候、籤を取申儀此度初ての儀に御座候旨申上候処、籤辞も奇特の物にて、又能く合申候、我等身上の儀を先年是も天満宮の籤取申者有之候、其籤に「一朝良匹別」と申す句、其時分何等の儀と申儀、誰へも難会候処、近年にて見候へば、当上様の事と慥に相見申候、且又十三年前辛卯の年、江戸へ被為召候旨金沢へ申来候、拙者心には公儀へ被為召出候事と相心得候故、別に占決にも不及事に候処何も達て申候間、関帝靈籤取候得ば、「玉兔重生応発跡」と云句有之候、此玉兔重生とは何等の儀に候哉、其時分皆々難会候、今年癸卯の年にて段々不存寄御用も相勤候に付今見候へば重ての卯の年は、其蹤跡も可有之との儀、其間漁翁の様にて江辺に可罷在との趣に候、能く合申ものに候、心入過分に候とて、籤辞御取寄被成候。

癸卯正月廿五日 天満宮籤辞 第四十四吉

般中黒白子 一著要先機

天龍降甘沢 洗出旧根基

文昭廟御代取候由 天満宮籤 第三十二吉

似玉蔵深石 休将故眼看

一朝良匠別 方見宝光寒

辛卯歳関帝籤

第十二籤乙丙中平 姜太公釣魚

君今庚申 未享通

且向江頭 作釣翁

玉兔重生 応発跡

万人頭上 逞英雄

為御慰旁委細申上候、籤辞の意御考被遊思召可被仰下候、以上(三月七日到来)。

正月廿五日夜

礼幹 再拜

643 ◆ 1 一月十一日先生御来訪御物語の件々、比日被為召候序被仰出候は、武藤庄十郎と申者御存知候哉、学問如何様候哉と御尋に付、私被召出候砌より心安仕候者に御座候、学問の様子博識多材などと申類にては無御座候、酒井讚岐守儒臣松田善三郎と申者弟子にて、四書、五経、小学、近思録の類迄、日夜相学候て為人も実体に御座候旨申上候処、庄十郎儀封事を奉り候、其内に御籙本以下御救被成候て可然旨申儀を第一に書記申候、尤には思召候へ共、急に御救も難被遊候、其上先は御籙本末々迄も常禄を被下置候処、不覺悟にて不如意に罷成候者共は、なにと可被遊候哉、新助心安仕候へば一段の儀に被思召候、此旨庄十郎へ申聞御救可被遊様幾重にも僉議仕候て、追て可申上旨上意に付奉畏候旨御請申上、扱庄十郎殿へ御逢被成、其段被仰達候処、殊外忝かり又は驚被申候、御尋被成候は、いつ比封事御上被成候哉と委敷御聞被成候へば、先生といへども可申入、とは不奉存候へ共、右の首尾に候条、前後の様子可申上旨にて被申候は、四五年も前御尋にも罷成、御仕置の筋存寄の儀は可申上旨、諸頭中へ被仰渡由慥に承及申候、然は頭中より組中へも可申聞事と相待候へ共、一同に組中へは沙汰無之候、拙子小普請入の身に候へば、別て不申聞筈に候、然ながら斯様に御明主様に奉遭事は、千載の一遇、殊更御尋迄被成候に黙止候儀無本意候に付、先年存寄封事に認、其時分小普請頭何某持参いたし候、「此人姓名、私致失念候、」其頭甚仰天にて小普請入申し、其身分際にて存寄等可申上儀甚不可然候、第一身の禍に可相成候間、取置帰可申旨再三被申候庄十郎申候は、禍の所は不苦奉存候、御尋にも可被成儀は可申上との上意、頭分平組も差別は有之間敷儀に御座候、乍然御取次難被成子細御座候へば、不及是非儀に奉存候、

さればとて自分の頭指置、外へ可申様も無御座候、左候はゞ御返可被成旨申入候処、取次難被成哉と申一言にて、少氣付候哉、先受取置候条可被罷帰旨に付、忝存候旨申入罷帰候処、追て庄十郎不遁衆中を右の頭被招、右の段々申述、近比不入事に奉存候、其身の為に不可然事と存候間留申候、此上は各料簡可有之儀に存候旨被申候、三宅忠七郎なども一家の内にて各寄合、其内宿老にて重職の衆、頭へ対し相止候様にと被申候に付、無是非其封事取戻申候、扱存候は最早宿志難遂候、畢竟頭を憚候故にて、先致隠居三百石の禄子息に譲り、扱宿志の趣相調、去年の夏以来有馬兵庫殿宅へ持参致御上可被下と相伺候へば、少も繕不被申一段奇特の旨挨拶にて請取被申候、此首尾にて今般不存寄上意、殊先生と可申談旨被仰出候儀難有仕合奉存候、此上は右封事隱置可申儀にても無之旨にて、先写一冊被懸御目候由にて、便御懷中被成私へも為御見被成候、折節左兵衛殿御出合の刻、是も御覽被成候、數十ヶ条の儀に御座候、皆以「堯舜我君堯舜我民の」意味にて、都て聖賢の第一等の事共に御座候、逐一感嘆に不堪候、我国開闢以来斯様の封事は有之間敷奉存候、此一冊の外にも有之文言に相見申候、先生も殊外御善色に御座候。

上様御徳量の廣大此一事にても可存候、御請に常々心安仕候旨申上候処、はや其儘封事の儀被仰出相談の上、御救被成候様幾重にも相調可指上との御事は、何等の御徳量に候哉と被仰候。

646◆一 紀伊侯に被成御座候内、日光へ被成御参詣候折節、東照宮神輿日光の町中を奉渡候、神主共へ御尋被成候は、幸の処へ被成御座候、神輿御渡被成候間、御供被成度候、如何可有之哉の旨被仰聞候処、神主申上候は、御指図申上候儀は恐多奉存候故難申上候、御子孫様の儀に御座候へば、御供被成候はゞ、御先祖様御喜悅可被遊儀の様奉存候旨申上候へば、其方左様に存候へば、東照宮御意と思召候、左様に候はゞ、御歩供可被遊旨にて、神輿の跡より御歩供被成候、然処町中に見物の男女、誰申共なく一々見せより下り候て、土の上に坐候て見物仕候、其様子御覽被成、何故何も見せより下り候哉と為御尋被成候へば、紀州様御歩供被遊候へば、見せに座居は何共恐多奉存如此の旨申上候処、是は不可然候、東照宮神輿御通りは、累年の儀に候、其時さへ見せにて見物仕候ものども、紀州様にて下り可申様は無之儀に候、何も毎々の様可仕旨被仰渡、皆々如本見せへ上り候、其様子御覽被成候て、御供被成候旨、今度水戸宰相様御元服の日前には、於御前御拝領の御腰物、代金七八十枚以上の物に御座候て、御献上物も夥敷例に候処、此度は只十枚余の御道具にて、赤銅装にて被進候、偕御献上物は可為御無用との御事にて相済申候、以上。

二月十二日

青地藤太夫

646◆一 武藤氏上疏の写、今一度見申度追て先生へ申上候へば、早速取に越候て御返被成候、御写は不被成候旨被仰候、数十条の儀一過読迄の儀に付、一々は記得不仕候、其内警策と存候一条有増覚候間書記申候、如左に御座候、人主の第一義可被遊儀は御学問にて御座候、其学問と申候に真贋の二ツ御座候、先帝王の実学を御学問可被成とならば、師範の人を御選被成、專其人に御学可被遊事に候、経済の功は皆此真実の学問の中より出申候、今金銀を以譬喩可仕候、悪金銀又は贗金銀にても上の命令次第に、物貨には罷成候へ共、精金銀とは自然と違ひ、天下万民一旦命令に随ひ候迄にて、心服は不仕候、其故既に近年金銀の為似ものは、悉御改易被遊候御事に奉存候、学問も同事に御座候、天下に学問より上の善事は無御座候へ共、是も為似物御座候、只今世上に発向仕候て、大儒碩学の様申候内に、大に為似物御座候、金銀さへ為似物は自然と合点不仕候、況聖賢の大道を似せ申分にては、害は出来仕候とも善には成不申候、然者一人の御師範

を御見立被遊候儀、大事至極奉存候旨申趣に御座候、此外にも多警策相見申候、広内が上疏とは同日の談にて無御座候、写置不申近比残念奉存候。

647◆一 十六日先生へ得御意庄十郎殿に被仰談候儀は如何相成候哉、御尋申上候処、十四日迄に相済、庄十郎殿紙面を主本にいたし、副紙面相調、兵庫頭殿を以即日上之申候、いまだ何とも御沙汰無之候、兵庫頭殿内見にて少氣に入不申口振顔色も見申候由被仰候、御副紙面の趣に有増如此、庄十郎紙面には専諸簾本御救可被遊謀略と、又御学問を無御懈怠可被遊と申趣を申述候、先達て被仰出候者、御簾本末々迄一統に御救と申儀とくと御合点難被遊候、軽き者共皆常禄を被下置候処、人々不覚悟にて不如意に罷成候を、御救被遊候へばとて、何ぞ不覚悟の処直り可申哉、其上到て御勝手方御不如意に付、諸大名より上納米被仰付、一旦の急を御償被成候趣、巨細の儀は庄十郎委敷合点仲間敷候間、此所も弁候様可申聞候、御前の思召には大名なりとも、其常禄の内を以上納米被仰付候へば、畢竟御余米を以追ては諸大名へ可被相渡事と思召候、斯様の思召も承知仕候て、御救のたてを相考申候様に、庄十郎へ示談可仕旨被仰出候、先生御別格に付、諸簾本御救も被下置候処、人々不覚悟にて不如意に罷成を、人々御救可被遊儀は、とくと御合点難被遊旨乍恐御尤至極の儀に奉存候、但困窮及候者共、不残不覚悟にて如此と申にても無御座候、第一御前代に上より華麗を御好被遊候て、二三十年以来日々奢侈に罷成斯様には有之間敷儀と心附申者迄も、世の風俗に随て質素を失候に付、自然と一統困窮仕候、二三十年以来の通にて不相改候はゞ、天下は禍乱に及可申候と、少智識御座候者共は潜に嘆罷在候処、享保元年已来、当御代に罷成、御質朴の儀近代稀成御様子に付、万民眼を付替、有識の者共は再度天下の禍乱を免れ候様に奉祝候儀、誠御中興の御美政と奉存候、乍然御身の上には御儉約を御行被遊候迄にて、下々急度仕りたる被仰渡はいまだ無御座候故、数十年以来馴染申候風俗故、一同には合点不仕、声色に御耽不被遊事と御儉約を御守被遊候事も、只上の御物数寄御生質とのみ申慣候て、人々風俗を改申所へは心附不申と相見申候、今一事を以て申上候間、是を以余事を御計ひ可被遊候、火消役の儀は、火を消申儀専要の事に御座候へば、別て華麗の入申儀にては無御座候、敵有院様御代より、常憲院様御代始迄は、革羽織の外毛織等着用仕儀は無御座候処、不図羅紗織の類を用來、只今は一人の身にて十余り二十計も袴、紅白黒黄青紫其外異類異形の儀巧出し、一度火事の節着用仕候へば、二度着用不仕輩も有之様に申慣候、如此の類中々筆紙に難尽御座候、斯様の不覚悟の徒に何程御救被遊候共、此通にては勝手続可申様無御座候、然は急度下々迄も儉約相守候様御法式被仰渡候て、其上に候はゞ御救も立可申候、扱不覚悟にて無御座候へども、勝手不如意の子細は前々申上候通、世上の風俗にひかされ不得已候て、分限を失申候処、近年毎歳に火災にて人々家財も焼却仕候のみならず、火事の費に乗じ、物価年年に高直に罷成、昔には数倍の直段に罷成候、且又不慮の損失にあひ、又は娘等多所持仕候者は、婚姻の費に無是非身代も仕損し申候、然処御仕置の宜故にても候哉、俄に米下直に相成候て、物価はさのみ違ひ無御座候故、侍中は内外の艱難にて甚困窮仕候へば、末々の者程御救不被遊候ては、難続奉存候、只今の御急務は下の奢侈を急度御正被遊候と、物価の下直に罷成候様、御僉議被仰付候と此二ツにて御座候、是則御救の一事にても可有之候、物価下直に仕候儀、別て不案内の儀に御座候故、如何様に被仰付可然と申儀は難申上奉存候へども、第一京大坂等に富有商人ども、万人日用の者を或は買置に仕、又は問屋の銀本を仕候て、米価の高下には無貪着、只おのれ／＼が厚利を得候様に、物の直段を此者共の自由を得候様に仕來候て、奉行頭人も是には手を難下儀候様、度外の儀に仕候、夫を受候て商買仕候者共は、多は一日過の者に候故、直段を下げ売候ては今日を難過候故、自然と高直の物下り不申候、日

用の物と申候は絹、布、木綿、並綿、麻の類、酒、油、薪柴等の物に至迄、皆富有の者共の手に落候て、自由を得申故と奉存候、何とぞ御僉議有之、官より直段を定候て、運漕等の費相応の利潤を得候様、相計ひ候て米価相当の物価に可相成様に奉存候。

650◆一 恐多儀至極奉存候得共、好御序に付所存の趣申上候、御身の御養生を第一に被為遊候様にと奉存候、御壯健にて御無病に被成御座恐悅至極に奉存候へども、第一の御養生は御飲食と御色欲との二ツにて御座候、然に前にも申上候通、元来御質素に被成御座候故、自然と声色の御耽は不被成御座候様外聞にても申慣候へども、衽席の上の儀は、外人難察事に御座候、誰々にても自身の工夫を以、過度すれば精気を損し、養生に害ありと自得候て、其程を考申度儀に御座候、文昭院様御色欲深被成御座候様に、其砌外間にて申慣候に付、乍恐大事の儀と奉存、存よりの筋も申上度儀に奉存候へども、其頃は中々私式の者一言も申上候事罷成候御様子にては無御座候に付、新井筑後守へ迄は再三此事申聞候へども、曾て外間に申御様子にては無御座候旨申聞候に付、其通と奉存寸志も不申上候処、果て御不養生にて俄に御病氣付被遊候、万分之一の御裨補にも可相成候処、寸志不申上候、只今以残念至極奉存候、如何様に賢明の名君にても、御病身に被為成候ては、太平の望も無御座候、将又御酒を御好被遊候て折節御大酒も被遊候様に外様にては申者も御座候、御酒も被為過候へば、脾胃に湿熱を帯候て、疾病生じやすきものに御座候、たとひ被為召上候と、も二三日づつも透間御やめ被遊、又好時節被為召上候様に、加減被遊候はゞ、御養生の為に可宜儀と乍憚奉存候。

651◆一 御儉約第一の時節に付、御身の上を始、諸事其沙汰御座候儀は、誠以可申上様も無御座候、結構成御思慮前々も申上候通御座候、但御儉約に付御奉行被仰付、御奉行の心得不宜候へば、却て御為に不可然事も出来仕ものに御座候、是には別て御了簡御加可被遊儀と奉存候、たとへば上様さへも、諸役人共物事申上よき様に被遊、一往被仰渡候上にてても、存寄申上候様に毎々被仰出候、然処奉行として其身の權勢を専に仕、諸役人の料簡は不得申出様に仕成、且やゝもすれば過言無礼も御座候体承及申候、諸役人とても皆御譜代の歴々にて御座候処、乍御用過言無礼に涉り、剩存寄も上へ不通にて、疑敷の上には不及是非、身を失ひ申儀も可致出来と心得、兎角奉行の指図次第に仕置候へば、今日の上宜敷候故閉口仕族も御座候、若強て存寄も申述不首尾罷成候はゞ、一分難立候て其分には難仕ものも可有御座候歟、左候はゞ必定御為に不宜儀も出来可仕様に奉存候、此儀は別て御了簡被為遊可然御儀に奉存候。

右のケ条、御文段等前後も仕、多分先生の思召を取失申処も可有之候へ共、十六夜乍立談承候処、大抵此通に御座候、此奉行と御座候は、水野執事の事に御座候、封事に候はゞ姓名も御頭可被成候へ共、披紙面殊兵庫殿一覽も有之旁、奉行と被成候兵庫頭事も申上度儀候へども、其儀は何とも難成候。

泉州事聚歛数寄迄にても無御座、驕奢至極に付、諸役人皆々致憤鬱、精も出不申候、比日松平伊豆守殿何事やらん御用の儀被申談候へば、御自分は尻首にて物云様成人にて候と申候、豆州御用被相仕廻候て、側へねじより私申候事は尻首にて申様成者と被仰聞候、平生共に尻首にて物申たる竟は無御座候、別て御用の筋に左様之儀不存寄儀にて御座候旨、急度被申出候処、是は手前申誤不図申たる口上に候間、御免候へとの申様にて事済申候、斯様の儀共居多の旨被仰聞候、此間も中川執事と同様に相聞申候、式部殿不恭緩怠比日は別て甚敷罷成候、安芸守様、前田伊豆守殿なども宰相様御家にて、終に見不申風体の者に候とて、御噂散々の旨帯刀殿御申聞候、御客前にてても手懷御座候、斯様の仕形にて却て私共は腹をすへかね申候、扱は先生へ私寸志申上候は、御老中の儀など被仰上候時は、是非共御封印を以御上被成候様仕度候、兵庫殿とても俗腸の人の儀、其上和泉守殿と内証は一致の人にて候も難計御座候、「君不密則



失臣、幾事不密則害成」と申戒も御座候、第一は上の御為、第二は先生の御為かと奉存候、向後御伺被成とも、封事に被成候様にと乍恐申上候処、当時の風俗には封密の儀も時宜に不叶候旨被仰聞候、紙面にも申上、私は憂喜相交候と申上候へば、御返事別紙の通に御座候。

653◆一 先生被仰聞候は、兵庫殿此紙面一覽にて、御色欲の儀と御大酒との儀は、不入儀に存候、元来外間にては左様に申候共、曾て両様共各氣遣候程の儀は無御座候、御酒などは中々御大酒は不被遊候旨被申聞候に付、左様に御座候へば、別て恐悅の儀と奉存候、御身の上御覚無御座候へば、猶更御養生の御心附とも罷成候故、只此まゝ指上申度旨申述候処、即刻被差上候、奉行の一段は兎角何とも不被申候へ共、氣に入ら顔色に相見申候、暫有て御一覽被遊候間、可罷帰との儀にて退申候、又被仰候は比日荻生惣七御前へ被為召候由、講釈は不仕旨に候、惣右衛門弟にて異学の徒に候若此等申述候儀を御信用も被遊候様に罷成候はゞ、最早頼は無之候とて、御憂色相見申候、私申上候は、紀州に七年か被成御座候内、紀国には伊藤仁斎が弟子共数輩可有之候、学寮迄被仰付候、然は必仁斎学流を御用可被遊候とて、源藏兄弟を始、彼徒時を得候様申候処、終に御一言も仁斎が学問の類に及不申候由承及候、御聡明の程も知申様に奉存候、此一事は別て天命に預申儀と奉存候、必しも御憂慮被成間敷旨申上候。

653◆一 十五日帯刀殿話、長門守様御家中騒動先一鎮訳立申候、比日近藤主計御直に申上度事有之旨申候得共、去晦日御目見被仰付候以後、一度も御逢不被成候、斯様候ては何共訳立不申旨申候処、不時の間と申候て、三間に五六間の土蔵の内に窟室を御構、其内へ御入候て、誰々も不罷越候旨何も申候、主計申候は其内へ可罷越は、不応御意御手討に被成候て其分に候由申候て、三ヶ条紙面に相調罷越申候、其三ヶ条は、御家中へ月俸可被渡下事、町人共へ御払方可被下候事、三月へ入候はゞ、早速御発駕可被成候事、此外は何も不申上候旨にて、押付其内へ入申候、紙面の趣被仰渡可被下候、若御聞届難被成候はゞ、如何様にも被仰付可被下旨、直に申上候処、三ヶ条共如何様とも主計取計可申旨被仰聞候間、退出仕、即御家中の者とも呼集、月俸被下候旨申渡、町人共も召集、去る暮御払方滞候処能相勤候、此度不殘相渡候旨申聞候、扱三月六日、九日の内御発駕被成候旨申渡候、是にて事済申候、扱は戸倉善佐私宅へ参申聞候、比日水野和泉守殿へ致参上候処、長門守様御家中の様子、並御発駕の儀御尋被成候て被仰聞候は、何とも合点不参様子にて、御本家の油断に候、宰相殿より如何様にも被申付、其上にも訳立不申候はゞ、隠居御願、舎弟の内被立候ても事済申儀に候、如何様子承候哉と御尋、何とも可申上様無御座候、御自分様へ可有御尋旨候、其心得候様申候、とかく斯様の時分罷越候事、不入事と存候て相扣、不罷越候旨御申聞候、其後承候へば安藤対馬守殿より聞番呼に参候て、参勤交代の儀は大切成事候、去冬の儀は雪中にも罷成候故、御願も聞へ申候、最早二月にも及申候、早速帰郷被成可然旨、御申渡候趣有之旨に御座候。

右窟室の事は、去夏比より下の申慣、土蔵と築山とは俄出来、此方様より見へ申候、暮合には長門守様御羽織掛にて、小坊主二三人御供にて其上へ御あがり被成、四方を御詠候体相見申候、此所を不時の間と申候旨、其内に幾日も被成御座候旨、御料理人も罷越候事成不申候、何者が何を拵進上仕候哉、一円御食事の様子も知不申旨申候、以上。

二月十八日

青地藤太夫

右三冊の紙面一冊に書記、只今進覽仕候、以上。

二月廿二日

礼幹 再拝

右御返事御別紙の写。

向後封事可然の旨は又得其意奉存候、是等の事当地の時宜に叶不申候、只今迄有馬殿など執達の事に封事と申儀は無之候、とかく見合候て如何様とも可仕候、此事執達の以後いまだ登城不仕候、侍講も無之候、如何様の様子と奉存候、兎角二三日中には総体の善悪は相知可申、一二事の善悪にては難決候、以上。

二月十九日

昨日先生へ得御意候、弥御堅固被成御座候、廿九日御侍講被仰付、未被講前、此間は久く御聞不被遊候、御内所御隙入共有之旨、御直の上意にて御座候、二月二日御講釈之後、長福様余程御気色御滞被遊、且又小次郎様御袋様御病死等にて、御懈怠被遊候事に相聞申候、扱御講談畢御退出可有之と相成候処、色々上意共多く有之、大形一時計御前に御座候て、御次の衆も久敷御咄被遊候と申程に御座候、御書物の儀にては無之種々御尋の事共御座候旨、去四日急度仕候旨諫疏御上被成候後、初て被為召候儀故、如何可有御座候哉と、先生も被思召、私も御様子如何と奉存候処、右の御様子奉安堵候事に御座候、以上。

三月二日

礼幹

武藤庄十郎殿男子兩人有之候、一門広き人にて千石計づゝの衆へ、養子入用にて次男を方々より養子に望候へ共、異姓の事故同心無之、何方へも不遣候、扱次男へ申聞候様は、其方事何某くより貰申度との儀に候へ共、我等は存候はたとひ一万石取候方にては、養子に参取候は、知行取に参候と申ものに候、先祖の心より見給候はゞ、悦被申間敷と存候、我苗名を以令名を頭し候はゞ、先祖の心に叶可申様存候、乍然人々の心得有之ものに候へば、其方心得次第とも存候、如何と被申候へば、次男も外へ養子に罷越申志無之旨、被申候て悦被申候旨、斯様の儀迄心附無欲の者に御座候、御聞置候様にと兵庫頭殿へ御咄被成候旨、先生被仰聞候(礼幹 三月廿六日書中)。

当廿二日岩松様御供の内、頭分並御抱守へ御饗応の後に、式部殿を以御目錄被下候、茨木覚(ノイ荻原)左誘引にて被罷出候、私は御馳走に懸り、其席に罷在候故、引しざり罷在候、右目錄御渡候節、前後共何も急度平伏仕、御礼をも被申上候処、終に手さへつき不被申御礼は無御座候、扱御目錄数通故、人々交名をもり付に致し候を、其儘御渡置候心覚故、せめて殿付にても候へば、堪忍仕にても可有之候処、左様にも無之扱々不興成事と奉存候、医師も兩人罷越候処、私少々挨拶仕り、小札は自分の心覚に候故取放申筈に候処、取込にて其儘に仕置候、是にて御取可被成哉と申候へば、其心得の旨申候、但頃日御横目前田源兵衛、高田善太夫兩人を、以外叱被申候旨、其趣などは大臣の器量有之様に相聞申候、兩人罷出申候は当月へ入御門外へ罷出候者、甚多相見申候、頭分無油断申聞候体候へ共止不申候、少し各様より急度其心得仕候様、頭支配迄被仰聞候はゞ、御縮にも罷成様奉存候旨申述候処、各は一円合点不参事迄を被申候、総て御横目の第一に可心得事は抜け候て、左様の瑣細の事迄に被心附候、御内心の儀に斯様に長詰に候へば、氣鬱も可仕候間、為歩行罷出候事も可有之候、御近習の者共は御指図にて罷出候品も候様に承及候、悪所等へ参不宜筋有之儀は、人人の不覚悟に候へば、頭支配承候とても可仕様は有之間敷候、左様の者有之候為に、御門の出入差止候儀有之間敷事に候、各勤方の儀に付ては、此方より可申入と存候所に候、様子次第御聞にも可奉達と存候旨被申候付、如何様の思召寄に候哉と相尋候へば、前月廿一日廿六日御能等有之節、各兩人御部屋へ両御横目間もなく見物人作法に無之様とて、殊外の世話に相見へ申候、其様子には違、手前共見物の席へ御近習の御小性中のみならず、御居間方の坊主共打交、始終見物仕候、此儀は一言のさしひきも見へ不申、両御方様付の面々始、狩野本阿弥等迄も、見物仕罷在候処、外見に如何可存候哉、見苦敷様存候、斯様の重立候処御心附無之候て、瑣細の儀迄何廉被申候故、一円勤方合点不参候旨被申候由、次にて承

候者申聞候、若驕泰にて被申儀に候へば、弥如何にて御座候へ共、いづれに尤に相聞申候、斯様の儀にても候哉、当廿一日御能の節は、表御小性並坊主類は、表に付申候、但其日は御構の様子違候故にても御座候哉、表と奥とのしきりとて、竹にて欄かんを張申候て、通路成不申候処、是も此度は止申候、(右同断)。

当朔日安芸守様、大内記殿、並備後守様も御出合有之、御密談の品、誰可存様は尤も無御座候旨先便にも申上候通り御座候、然処比日潜在承及び候儀御座候、是は聞番も手前にて、外より相聞候趣に御座候、水野和泉守殿前月末、大内記殿へ被申入候は、御手前は加賀守殿へ心安く被罷越候、御用の筋なども被申通候間申達候、此の度国許へ御暇被下候前日、若狭守殿を以て御願の品紙面を以て被仰聞候、諸大夫闕人の儀も御願被成候、此の趣同役何も承知難仕候、拙子事は御心安筋有之候に付、存じ寄申入候、加州の事は安房山城両諸大夫有之以来、其筈の処致中絶候、就夫宰相殿いまだ中将の時、常憲院様上意を以て、向後諸大夫兩人被仰渡候、四人に成候儀は、常憲院様御成の時、格別の趣きを以て被仰付候、此趣に候へば、四人の数は当分の儀にて、闕人は其儘にても可有之候へ共、只今迄段々連綿も仕候、此の度の事御暇被仰渡候時分、御願に付時節も不宜、其上迎極月ならでは叙爵難成候其内御隠居被成候へば、弥諸大夫の闕は御願不及事に存じ候、然れば御扣も可被成歟、但一生隠居無之例も候へば、御隠居の趣に不罷成候はゞ、諸大夫の闕御願置も可然候、此

両様の内に被成候様御申達可有之候、右の通りには存候へ共、拙子存寄には御隠居御願可宜様存候、若狭守殿年齢と申し、国の仕置可然儀に候、且又宰相殿近年御病氣御養生も有之、御暇被仰出候も御願候て、在府被成候、去年参府御礼も名代にて相済み、終に一度之登城も無之、御暇被下候、然らば養生に候へども、本腹の期も無之事に候、今年又為養生滞府御願も如何候はんや、去年在府中責て一度登城有之、御玄関前迄成共被罷出、行歩不相叶是迄にて退出など、申す趣にも候はゞ可宜事と、拙子などは存じ候、諸大名の手に罷成候宰相殿に候へば、格別の儀に候、外の衆にては年若く候ても、隠居可被仰付事に候、左候はゞ旁御隠居御願可宜存候旨御申含みの旨、当九日戸田山城守殿御用番に付き、湯原甚左衛門を以て被仰遣候は、得御意申述度儀御座候に付、十一日、十二日、十三日の内、御透き次第罷越申度候、但今以所勞不宜殊に長座難成候間、松平安芸守殿を以て申上度候、御隙可被仰聞旨被仰遣候処、何も隙に罷在候条、御勝手次第安芸守殿御出候様可被成旨申来候、昨日北川久兵衛を以て御書を芸州様迄被遣候へば、十二日に山城守殿へ御越可被成旨御返答にも申し来候、多分右の趣にても可有之哉と申候、安芸守様十五日御発駕の筈に付、十三日に御餞別に此方へ御出の筈に御座候。

659 ◆ 一 備後守様、京都へ御寄の御願は難叶候間、御願不被成候、岐祖路通今朝御発駕被成候、昨夕御餞別に此方へ被成御座候。

660 ◆ 一 長門守様又為御養生御滞府の儀、比日六郷主馬殿を以御願の処、其通に被仰出候。

四月十一日

青地藤太夫

別紙大密事申上候、尤御覽後御火中可被下候、安芸守様弥昨十二日山城守殿へ御越被成、爰元へは御用人甲田舎人を以、御書被進尤御答書被遣候、定て彼一件にて可有御座候、何とぞ御首尾好様に仕度事と、乍恐奉存候。

四月十三日

同人

兼山秘策 第六冊終

起享保八年至十年

廿日に六郷主馬殿御招、本多帯刀殿相伴にて御料理出で申し候、帯刀殿御帰りの節、御申聞候は、御隠居御願御内意の分は、安芸守殿にて相済み申し候、近々表向より御願紙面主馬殿を以て御上被成度候、就夫御文言長く罷成不宜候間、松平大隅守殿家督の節、薩摩守殿御願紙面の趣き宜き方に候間、其の紙面の写御入用候間、御才覚候様に御意御座候由、幸主馬殿大隅守殿へ被参候ゆゑ、写取り可指上との儀に御座候旨、潜在被申聞候、昨廿二日主馬殿御出有之、右写封印にて被差出候体に承り及び申候、被罷帰候節左兵衛殿に挨拶、御隠居御願の御書付廿四日に御渡被成、廿五日指上申筈に候、若御成候へば廿六日に上申筈に候、恐悦の儀と存候旨被申候処、左兵衛殿大きに御より被成、御障無御座候節御苦勞に奉存候と迄に被仰候由、則私へも被仰聞恐悦の至奉存候、町中には誰穩密可仕様は無御座候故、今月中上使を以御隠居被仰出候筈と先頃より申慣候、段々御吉左右可申上候。

661◆一 駒ヶ原御狩の様子、御承知被遊、御鑓、鉄砲にて五ッ御留め被成候儀、古今武家にて稀成る事に思召候旨、御尤奉存候、頃日護持院跡の、空地へ御成り御鷹狩御つかひ被遊候節、一ッ橋御門の御番所にて、御焼飯可被召上旨にて俄に被為入候、畳余り不宜に付、毛氈二三枚敷き候様に被成御座、被召上候、其の砌り御番所飾の鉄砲御自身御取被遊候へば、さび候までにも無之、火の口処を貫錢よりにてくゞり有之候、御覽被成、脇へ御捨て置き被成候由、当番の方殊の外迷惑の体にて、即日御近習まで罷り出で御噂も有之候哉、御近習衆へ被相伺候ところ、曾て何の御噂も無之旨被申候由、乍然其の日より武具御改みがき飾り直し候、諸方へも移り其の通りに申しケ様には候へども、先生には潜在御歎息共多く御座候、頓て金子野（コガネノ）と申し、当地より七里余有之候処に、御狩御催しに御座候由、御一宿の筈に御座候旨、ケ様に禽荒し有之候ては、自余の事も無御心許候、聚斂の臣多く指し出で候方に罷り成り候、如此に候ては、貞観政要の方は遠々しく罷り成り候筈、気の毒成る事と被仰候、学問博識にてさへ正路の方へ参り申すは稀に相見へ申し候、然らば御不学と申し候、此日の儀に候て、御歎息に御座候、「一薛居州独如宋王何」と申儀候へば、尤成事に奉存候、然ども宜方は多相見へ申候、一昨廿一日松平左近将監殿御老中被仰付候、是は最前和泉守と申方、只今迄大坂御城代にて三十八歳に御成御座候、其の日紀州、水戸両御家へ安藤対馬守殿不時に上使として御越被成候、水戸様聞番より御老中可被仰付御内意にて可有之との御沙汰に候旨申来候、人々も左様申候、乍然一統には左様の趣にては無御座、上使御老中被仰付候以後の儀に御座候、且又安藤殿御老中に被仰付候時分、分て御三家へ上使も無御座候、是は何とぞ重き御用の品にて可有之と申候何とぞ、此方様御隠居の節、黄門に被為移御内談にても候かと、成らぬまでも奉願事に御座候。

662◆一 今日俄に飯高重兵衛殿御招の処、八ッ半時過御出にて御対顔被遊候、私当番にて前後御使に罷出御口上等申述候、廿五日御上可被遊候御紙面の御相談と相見へ申候、殊の外御手振ひ被遊候に付、御印章にて御上被遊度趣の体に御座候、其御例も有之旨にて御座候、今日は朝より御肩御痛被遊候に付御灸被成候、夫にて御宜敷御対顔も被遊候御様子に御座候、一段御機嫌克御様子奉恐悦候、段々御慶事ども可申上候、以上。

四月廿三日夜

青地藤太夫

藏人様

御願書に付御印章に相極申候、但御添紙面にて御手振ひ申趣御調可被遊候哉、又は御肩書に可被遊哉との趣、昨日主馬殿まで石黒太郎左衛門を以被仰達、尤御書も参申候、主馬殿

御返答の趣、御眼疾故御印章被遊候趣、御調被遊可然旨御申上候、御手振ひ申儀は御当分の御事故、不入様子に御申上候体に相聞申候、昨日は御書付到来不仕候、今昼までには出来為持可被遊候間、廿六日朝山城守殿へ御持参被成可被下、兼て今朝御待も可被成哉も為念被仰述候趣を、太郎左衛門より主馬殿取次迄御紙面申達候様に被仰出候、定て今日中被為進候にて可有御座候、恐悦の至御同然奉存候、但表向被仰出候品にては無御座候故、人々乍存知口外不仕候、甚御意得可被遊候、御印章俄に昨日御細工人共三人仕人々彫申候旨に御座候、段々御吉左右共可申上候、御火中。

四月廿五日

青地藤太夫

藏人様

昨廿五日御願書付大河原弥左衛門を以主馬殿へ被遊候、今朝主馬殿御上被成候、俄に此方へ御出御料理等も出申候、武藤左兵衛明廿七日当地発足の筈に御座候、段々御吉左右可申上候、以上。

四月廿六日

青地藤太夫

藏人様

御願の筋未何の御沙汰も無御座候、御吉左右次第に富田主税御国へ可被遊旨廿七日御内意被仰出候旨に御座候、総て此度の御願表向にても御返答、又は御口上書御帳には其訳相知候へ共、第一嗣君へは終に不被仰進由慥成人の物語承知仕候、玄蕃殿、内蔵助殿も聊御聞無之故、御風を受候てひそくと申候て、誰も口外不仕様に仕候、如何の儀に候哉、右衛門督様、長門守様へは御直書を以被仰達、備後守様へは御飛脚を以被仰遣候、何とぞ中納言御拜任の様にと日々奉待儀に御座候、定て爰元の御様子日夜御左右御待可被遊と奉存候。

五月朔日

青地藤太夫

藏人様

昨日帯刀殿に懸御目候、御隠居御願の内に備後守様へ三万石新開の内不存寄御事に候、玄蕃殿は行歩悪敷候故、御目見御願被成間敷旨、其外少々の事共承り申処も御座候へども不能一二候、帯刀殿と承申儀人々へ咄候ては互に不可然事故、聊口外不仕候、以上。

五月二日

長州様又々秋まで直に御滞留の御願、近々被仰上候筈に爰元へも被仰進候、先頃主馬殿取次被申候中々もはや誰も御使可相勤とは被中間敷旨両帯刀殿被申候、如何罷成候事に御座候哉、近藤主計、小塚将監両人は御舍弟様の内御家督候様、達て爰元様へも申上候処、富山に罷在候御家老ども余り残念奉存候間、一度御帰被成其上の儀に仕度被申候由、此両端相公様次第に可仕と伺候へば、富山の者ども申趣可然思召候との御事にて、いまだ訳立不申候旨、是は帯刀殿咄にて承候。

五月三日

青地藤太夫

藏人様

今朝五時過若狭守様御登城為御名代右衛門督様御登城の処、於御座間御両方様御一所にて被為召、相公様御隠居御願の通、若狭守様御家督無相違御直被仰渡候、昼頃右衛門督様御直被仰上候、恐悦の至御同前に奉存候、主税は明後日頃発出候趣に承及申候、京へは吉野善八、安芸へは大村伝蔵、会津へは御大小性の内高知にて可有之体に御座候、此趣は誰も不承事違可申も不知候、私にても可有之哉と無御心元候半と先申上置候、以上。

五月十九日

青地藤太夫

藏人様

佐藤故五郎左衛門弟子の内菅野彦兵衛と申者、御城下講堂を建候て、軽きもの共集め教授仕度所願御座候へども、宅地も借可申様無御座候、本庄の末六万と申辺にて三百坪計の地

御貸被下候はゞ、自分に講堂を構、射芸、御術迄も此処にて稽古仕候様仕度奉存候趣に紙面に調目安箱に入置候処、町奉行今月十一日被仰渡、彦左衛門儀奉行所に罷出、願の趣被承届候様に被仰出候、彦兵衛願の趣委細承届被申上候処奇特被思召候、六万と申処は事の外程遠く候間、近き所にて屋敷賃遣候様に被仰出、新大橋の向にて三百坪計の地借地相叶申候、且又追ては教授候様子次第、場所も御替竹木等も可被下候旨被仰渡、不存寄仕合に成申候、但其身学才指ての儀にて無御座候、佐藤氏へ就学仕候も二三年計の儀に御座候、彦兵衛内存は、其身にては信仰の者有之間敷候、佐藤は同学にて名望も有之候間、三宅丹次郎を以講師に可仕と存寄候に付其趣申談候処、丹次郎曾て同心無之、老後の儀旁難罷出旨申候由、是は前廉内談にも可及の処、少彦兵衛疎末に候旨先生被仰候、射御の儀は彦兵衛心安仕候内に弓の上手博勞に馬の上手有之、其兩人弟子共取立申望有之申合儀に御座候旨、箇様の事どもに候へば、末々とても指て願有之程の儀にも有之間敷かと、是も先生被仰聞候、以上。

五月六日

右彦兵衛様子聞番廻状にも十一日に申来候旨、今日久々に駿河台へ參上仕御尋申上候へば、被仰聞候趣に御座候、論語御講日にて十人計聴衆有之外の事承不申、前月は一度も御侍講無之候、以上。

五月六日

青地藤太夫

藏人様

昨九日内々御願被仰上の趣は町飛脚に早々申上候、追て飛脚も參候条先達て御承知可被遊と奉察候、昨夜成瀬内蔵助殿若狭守様御前へ被為召、御普為聴(フイテウ)私共へも可申間旨被仰出、四ッ時過罷出奉承知候、委細の儀は被仰出も無御座候、昨昼帯刀殿に頼候て右衛門督様へ御尋被成候様申談候処、追て被仰聞候趣有増左の通に御座候、御座の間へ右衛門督様、若狭守様御一所に被為召、先右衛門督様上意の趣加賀守隠居願の通三家へも相達候、則隠居被仰渡候間目出度思召候、数十年來国許の仕置宜敷家中無異議候、此上猶更若狭守家督後見有之様に被思召候へども、久々御逢不被遊候、隠居の後とても痛所宜敷候節、何時によらず登城有之候様被遊度候、養生簡要に思召候、此旨宜敷可申達旨御詔に御座候、若狭守様へ加賀守隠居願に付家督無相違被仰付目出度被思召候、加賀守数年国許仕置等宜敷候条、猶更無油断仕置の儀御心懸可被成との趣御詔に御座候旨、定て少々の相違可有御座候へ共、私承受申趣如此に御座候、恐悅至極の御事御同然奉存候、猶御座の間御直に被仰渡候と申儀は、御三家の外は陸奥薩摩も無之由、尾張太納言様御隠居の御時分の御様子にて御吸物出不申候迄に御座候、右衛門督様も御名代故初て御座の間へ御入被成候と被仰候由、右御様子に候へば向後相公様御同格の御事と相見へ申候。

668◆一 昨夜富田甚五右衛門、庄田五左衛門、中村吉兵衛、三人今般御両公様御献上物等の儀可相勤候、伊藤平太夫富田主税、水越三右衛門三人今般年寄中被為召候に付、其御小屋等の儀主付可相勤候、聞番三人今般御用猶更精入聞合等可相勤旨被仰渡候、以上。

五月十日

青地藤太夫

藏人様

669◆一 若狭守様十五日御登城如常御大広間へ御着座被成候処、御目付御出今日より於御黒書院御目見の儀に候間、是へ御越候様にと御挨拶に付、松ノ御廊下迄御越被成候処へ、大目付横田備中守殿内藤日向守殿兩人御出、今日より宰相様只今迄の御部屋へ御入被成候様御指図に付其通に被遊候、御帰以後尤相公様へ被仰上、御三家並御一同様方へ御普為聴(フイテウ)被仰遣候、帯刀殿話に承候へば、御黒書院御礼の儀事の外重き品に付於御前可被仰渡哉との趣候処、是式の儀に候へば左様の品には及間敷旨、御老中迄被仰出右の通に御座候、相公様も元禄二年八月より始て於御黒書院御礼被仰上候、然処此度などはなん

でもなき事と申位の御首尾に付、殿中にても諸人目も付替候旨に御座候、恐悦の至に奉存候。

668◆一 先生昨十七日も御侍講後良久敷御前被成御座候、御懇の上意迄も被蒙候旨先刻被仰下候、如何様の御様子に候哉、追て委細可申上候、以上。

五月十八日

青地藤太夫

藏人様

密啟御家督の後相公様御前へ御出被成、此度御願に付御隠居被仰出私御家督相続被仰渡難有儀思召候、万端不功に御座候間尤相窺候て相勤度被思召、殊に御仕置方の儀は無覚束候故、只今までよりは切々御前へも罷出、御指図御受被成度旨被仰上候処、何時によらず御出被成御伺可被成候、御仕置方無覚束被思召候儀尤に思召候、但御仕置の筋は御代々御達も有之、年青中の手前に格も有之相窺可申候、夫とも何事に不依御伺被成候はゞ、御指図可被遊旨御意の旨、又重て御家督の御儀相濟候はゞ、御老中を始候て段々御振舞も可有之候、左候へば只今の御書院等疎略にて如何に候間、御造作の儀は思召の通如何様とも被仰付候様にと思召候旨被仰出候処一々奉畏候、但御書院等の儀先年以来、將軍宣下の御饗応さへ相濟申候間、少も手瘡申儀無御座候、御家督の儀重き事に候へども御私用に候へば、只此儘にて御修復被成候て可宜と思召候旨御請被仰上候旨。

669◆一 当十五日八ツ時分林大内記殿、御城より直に参上於御居間書院御対顔候節、平蔵、半太夫並のもの共拜見候処、大内記殿直に少御用の筋に候条何れも被相控候様にと挨拶に付御人払に成申候、何御用に候哉訊可存様無御座候処、頃日潜在承及候筋御座候間申上候、内記殿被申上候趣は、今朝御前へ罷出候処、上意には若狭守、加賀守同事に於黒書院目見申渡候儀遅からぬ事に候得共、若狭守殿は成立宜しく格別に思召候故、万事加賀守同事に被仰付候、此儀其方罷越加賀守へ可申聞との上意に付参上仕候との趣御座候旨、誠以何もく恐悦至極の儀に奉存候、大切の儀ながら慥成人潜在被申聞候、誰へも口外不仕約束にて承知仕候へども、恐悦の余り潜在申上候、以上。

五月十八日

青地藤太夫

今度御隠居御願の砌橋隆庵へ御意被成候は、三年以前隠居の儀井上河内守殿迄申達置候処、未不遅儀に候間見合可申旨に付指控罷在候、今般は戸田山城守殿迄松平安芸守を以申達候処、相願候様にとの事に付弥奉願候、次第に行歩不自由其外痛処多有之候間、もはや交代御難儀可有之と存候の旨被仰候、御交代難被遊との趣は御国にて御隠居と思召候哉、但江戸表に御隠居可被遊との儀に候哉、其趣は何とも御意無之旨隆庵先生へ御物語の旨御話に候。

670◆一 伊勢屋吉兵衛話近年諸国へ被仰出和書の遺篇段々御搜索被遊候、御国よりは法曹類林全部類聚国史の内等被指上候、其外国々より多上り候処、林大学頭父子に被仰付真偽為御正被遊候て、林家より実書の極候て被出上にて相極り候、御文庫に納り申候、然処林家父子正本と極候て指上の内にも、偽作と見へ申物有之候、偽書に極候て指上申内に真本と相見申物有之候、上にも御不審難晴候に付、三月伝奏衆中院大納言殿等参府の刻御近習御右筆下田幸太夫と申人学問有之、箇様の儀心得申方に付、此人に御書物等御渡、高家中条山城守殿へ指添被遣候て、真偽の処被聞召度被仰遣候処、伝奏衆しかと難弁候間、帰京の後何も僉議仕候て、其上に可申上との趣にて一円訳立不申候、実は中院殿初何も和学無之、真偽見定申程の識鑑も無之故と相見へ申候、然処山城守殿幸太夫へ御申聞候は、拙子心安仕候者に羽倉齋宮と申者有之候、是は京都稻荷社人に候処、神職は弟へ譲其身は隠逸仕折節当地へ罷出只今も参居申候、此者殊の外和学に委敷、僉議相極居申者に候是に御聞合候ては如何可有之候哉と内談被申候、其段達上聞候処、則山城守宅にて致参会為吟味

候様に被仰出、毎日／＼校讐も有之、林家より極被上候内大半相違有之其趣申上候、法曹類林一部は真本に相極申候、就中三代格並類聚国史の内に真偽甚見やすく、一度齋宮弁決仕候へば、誰も合点参申事に候、三代格は全部真本と林家申上候処、其内にも後人の書加へ証拠には、三代格曰云々と有之処に御座候、是にて相知申候儀の旨申候、御前より被仰出候は、大学頭能年にて簡様妄成儀共申上置候、兼て御不審被思召候、今の大学頭召寄、幸太夫引合承届候様に有馬兵庫頭殿迄被仰出候、其通に被承届候処父子共御請不分明成事共にて、此趣にては難申上候間、紙面を以可申上由に罷成候、其砌兵庫頭殿幸太夫へ被申候は、拙子共不学文旨にてさへ能合点参候儀に候処、大内記父子簡様に迄胡乱に仕置候て、極申事は如何の儀と噂有之候処、幸太夫申候は、私共も内々其儀を不審に存如何と申儀に御座候、

あまりの儀に是程の書も読得不申かと申事に御座候旨申候処、今の大学頭立聞仕罷在、其儘其席へ罷出、幸太夫推参成事を申候、拙子家柄にて相極置候を指出候て善悪を申上候のみならず、是程の物を読申間敷とは過言至極とて、以の外声高に罷成申候、幸太夫申候は、成程御噂を申過言に及申儀は紛無之候、御自分父子簡様に偽作紛無之物を、真本全きものと極被上候儀は如何の存寄に候哉と申候へば、三代格全部取揃御喜悦に思召候、是にて相濟候様に思召候旨にて御渡被成候ものを、我等方にて全無御座候旨申上候へば、疵に罷成、御喜悦被遊候御邪魔に罷成申候、夫故真本全無相違と申上置候旨被申候処へ、御近習衆被罷出何事を声高に口論仕候哉との儀に付、幸太夫有増申上候へども、全部被思召候旨被仰出候処、左様に不存旨申上候へば、疵に成申との趣は相控不申上候、追て父子共不念至極の儀申上候以来、証拠にも罷成候事に候処、如此申上置候誤書付可指上旨被仰出候て書付被指上候、此後林家の極不被仰付、羽倉頃日迄逗留大半直偽相弁申上候、御家より上り候法曹類林は真本全書紛なく存候旨申候、林家真本を申上候は大半常々心安臆負に存候衆より上り申分は僉議も無之、真本と極置申候、皆利徳の方にて極申沙汰に付、散々の様子に御座候旨吉兵衛申候、先生若御聞不被成候哉、御尋申上候へば、則頃日幸太夫直に御聞被成候旨被仰聞候、以上。

五月廿六日

青地藤太夫

藏人様

六月十四日六郷主馬殿御招、於御居間書院御対顔、本多帯刀殿も被罷出候、主馬殿を以御老中へ可被仰達趣、御隠居御礼之節、相公様には松平肥前守、若狭守様には加賀守と御改称被成度、且又酒井撰津守様へ御婚禮の儀八月中御極被成候、此旨可被仰達旨御覚書御渡被遊候旨、右御改称の儀先頃聞番を以御伺被成候趣に候、小松宰相と御称し被成度旨候処、小松御住居相定候上にては可然候、御先代も小松中納言と被称候て、公儀に被仰上候旧例も候哉、先早速今般の御礼被仰上、御称号の儀は如何様にも追て可成事に候旨申来候由、御先代の旧例可有之候へ共、年久敷事に付、其時分の留帳は加州に有之、御急用に難立候間、左候は、松雲軒と可被称哉の旨御窺の処、三位の参議等に此称号には不相当に可有之旨申来候、依之主馬殿を以表向より右の通被仰達候敷の事。

673 ◆ 一 若狭守様御登城の節御供御家老七人、本多安房守、横山監物、奥村内記、今枝民部、津田玄蕃、成瀬内蔵助、中川式部先達被仰達候処、玄蕃式部病氣に付兩人減申候、但玄蕃嫡子刑部為名代登城候様被遊度、此度御国より被召寄候段被仰達候処此者難成候、惣て病氣に付名代と申儀御直参にて、畢竟病氣本復の時重て御目見可仕筈に候へば、名代を以御礼も申上候、陪臣の儀は其時に当り人高を以の儀に候、最初十人と被仰達候へば、其人には違候ても十人の数は不苦候、此度七人と被仰上候内、兩人難罷出候ても、献上物は御納戸へ納り候へば、七人の員数に闕は無御座候、然らば名代と申す儀は難成候旨申来候、且又七人の内民部乗物の儀難成候、只分迄乗用前田近江守、奥村伊豫守、本多凶書、



前田修理、玉井勘解由以上十一人にて候、其上に民部加り候へば、十二人に罷成候、元來十人の処唯今迄一人過有之候趣に候故、難調様子に申来候、重て被仰遣候は以後に若狹守様御願候為にも候間、此方様御家並には乗物何挺御免と申儀被仰聞候様被成度候、何挺と申員數も御存知無之候故、臨時御願も不都合に有之、如何に候と申趣被仰達候処、乗物員數何程杯と申儀は、役筋の儀に付難申入候、其時分可有指図趣に申来候、依之勘解由長病にてはや江戸へ不罷出候間、勘解由代り民部乗用仕候様被成度旨被仰達候処、致承知候旨申来候由。

674◆一 十五日晚景御用番より聞番被召寄相公様、肥前守、少将様、加賀守御願の通被仰出候旨、且又民部乗用も其通の旨申来候、以上。

六月十六日

青地藤太夫

藏人様

674◆一 当十八日公儀御役人衆一統御加俸被仰付候、則別紙相調懸御目候、「耳聞録載之」御代々にも前世にも不承及事に奉存候、是も根有之儀に御座候、日外先生に御尋にも御書記御上被成候内に、一件是にて御座候、目札等の内官録相応の儀、明細に御書上被成候、御当時の儀も被仰上候条と被仰付候、御側衆も浄円院様御付人にも聊以無御親疎御定と相見、別てく奉感称候、此上は先生へ早速御加恩にても有之様にも風説申候、此紙面例の衆へ御廻し可被下候、尤金沢中に流布は可仕候得共、右の趣は外に可存様無御座候、潜在御物語可被遊候。

675◆一 今般は御礼大形十八九日の内にて可有之とて、十七日には万端不殘御内習相濟申候、其内安房守殿以下御供の衆御老中若年寄衆へ御礼御勤の趣相極申候、安房守殿以下五人一列太刀目録自身持参其外も同格と聞番も申達候、御家老衆も其通に有之決定仕候、私は八ツ時より詰番故其砌様子も不承候、翌十八日朝番にて罷帰候処、途中へ坂井伊平太罷越し、御使にては無御座候、篠井氏など申談私へ迄内談罷越候、昨日御僉議にていづれも様御同列に相極申候、房州様思召は先達て私へも被仰聞、万端昔の様にとは可有之様も無御座候、大形の儀は当時の例に御心得被成候旨被仰聞候、此度僉議も其心得に付御先格は違候へ共、其分に被成候由、御帰被成候ても被仰候由、乍然徳昌院様の時と違申迄にても無御座候、安房守殿御叙爵の節、御老中御勤共違申儀に付、私は如何存候哉内証申聞度伊平太差越候由、源五右衛門も被申候旨にて罷越申候様子承届候へば、御老中方以下へ御勤の節、徳昌院様は御一人分立聞番も相副御勤、近江守殿以下は不殘一列に御勤、御太刀目録も先達て

使者を以被遣、近江守殿以下は自分持参にて是にて亦聞番相副申候、御叙爵の時は勿論御一人に付、如先例使者を以被遣跡より御勤に御座候、如何可相心得哉と申候故、私立帰聞番中に承合候処、甚十郎甚八へ罷在候て被申聞候は、十七日御僉議の節、一円此先例不存控帳にも無御座候故、御僉議次第御一列にも申談候、右の趣候へば、只旧例の通先達て御使者にて被遣可然候、但聞番今一人罷越儀は決て難成候、少将様御供に一人御献上物納候処へ、一人雇罷越、一人残候は年寄衆御誘引仕候、若從御前御使番にても御出被成候へば相調候へ共、其儀は此方より難申上旨被申聞候に付、先御使者を以御勤の訳は相濟申候、内蔵助殿前へ罷出右の趣申述、聞番中存寄も申述候得ば、あなた方にも旧例御存知無之、十七日の趣に申談候、聞番存寄の通に弥可申談候、安房守殿御一人立御勤無之候ても一列に御勤にて、却て並と違申品も知可申旨被仰聞候、私存寄候は、安房守殿には左様にて宜有之候へ共、監物殿以下各別に相見申処如何敷ものに奉存候間、何卒御窺被成聞番加入出候様に被成度ものに奉存候、私御使番相勤候内、聞番不足の時相勤申事も有之旨申述候、其段御承知被成候間、内蔵助殿より御伺可被成旨被仰聞候故、則其趣伊平太を以申上置候、

十八日右の趣共達御聴候処、本多の家は以前御暇被下候時分、御馬迄も被下候家に候へ共、段々末に罷成候故御旧例もぬけ申候、せめて右の様成儀にても、先格の通すたり不申様仕可然旨被仰出、弥其通に罷成、依之御目録も献上の外は名乗無御座候事旧例に御座候、此度御右筆所にも一統に名乗記し申候、是も十八日に不残書改被申候、御一人立御勤の儀は、翌日頃内蔵助殿御伺被成候処、聞番加人は従御前可被仰付候間、弥八日立被相勤候様に被仰出、何も角も訳立申候、御玄関前御供の衆儀も、委細聞番衆へ申談上下供、兩人に談置候、随分御首尾も宜敷御座候可安尊意候、此趣凶書殿加藤次殿主水殿へ被仰上可被下候、以別紙不得申上候、以上。

六月廿一日

青地藤太夫

藏人様

廿六日先生話、今度酒井讚岐守殿大坂へ發出候、前日松田善三郎方へ兵庫頭殿より直に手紙を以尋に参候は、其方事大坂へ供に罷越候哉、若又当地に罷在候哉、承度事に候間可申越旨申来候、善三郎儀今度御息金十郎殿の傳に被申付、悴某を大坂へ供に被申付、善三郎礼遇も厚く家老並に御申付候、兵庫頭殿へは従是御請可申上旨申遣候間、如何様に可申遣哉、讚岐守殿へ相尋候へば、右の品委敷申遣候儀は不入事に付、少用事御座候て当地に相残罷在候と、申遣候様に被申渡候故其通申遣候、其後兵庫頭殿より申来候は、留主に罷在候儀に候はゞ、折々相招講釈承候様に可有之候、其意得有之候て、此趣讚岐守殿へ申進置候様に可仕旨申来候、此様子兵庫頭殿御自分の御用には不相聞候、子細有之体に御座候、去年以来善三郎へ御尋の趣御請の様子承事にて、上にも能学者と思召被成御座候様子に御座候、江戸中荻生惣右衛門以下多有之儒者共候へ共、一人も御眷顧の儀は無御座候処、善三郎事は武藤庄十郎師匠学術の宜敷処を御慕被遊候儀、御英明の程も奉察候儀に御座候旨被仰聞、右金十郎殿今年九歳に成被申、聡明成事驚申咄御座候間申上候、讚岐守殿未当地に御座候内、四月頃或日善三郎方へ庄三郎殿被罷越咄被罷在候内雷鳴強仕候、善三郎申候は、此雷にては御子息機嫌伺に可罷出事に御座候、乍残念御帰被下候様に申入候、庄三郎殿も尤とて被罷帰候、偕罷出候得ば、金十郎殿側の者へ御申付御上屋敷へ使を以御様子伺可然旨自身心付にて即刻申渡候、其使軽き役の者に申付候様子被承候てケ様の時分御様子伺を伺候には、重き物を以伺候て委敷承候て可罷越事に候迎、自身人指を被致候て重者罷越候、九歳にてケ様の儀は珍敷事と善三郎追て庄三郎殿へ物語仕候。

678 ◆ 一 中根権七事一両日以前一人扶持に金一両加増被申付、長屋之内へ老母引越致養育候程の部屋被貸渡候に付、近々浦賀へ老母迎罷越候旨御座候、先一段に奉存候、此恩恵程の儀も、此度五千石に被成下、候故と相聞候。

678 ◆ 一 先生御宅地の内へ又桜田団蔵と申者罷越、自分に三四畳敷許の居所を構学問仕候、去頃申上候幸田庄太郎と兩人に罷成候、皆萩原源左衛門殿部下の者共と相見申候、権七程には未相見候、先生御為には御邪魔の方にも可有御座候へ共、又宜敷事共も御座候、御家僕も多相見用心にも能御座候、誠所謂「所処成聚」と申類に御座候、以上。

六月廿四日

青地藤太夫

大地新八郎様

御手紙拜見、弥御堅固御勤被成珍重奉存候、昨日小川作左衛門へ伝附仕候、一紙御返し受取申候、内落申出へ御貼子被成下被入御念忝存候、是は本地の高に引合其役の定禄と相見申候、国元にて大身の者と同役罷成難儀の者も有之候処、向後一同に罷成儀と奉存候、此以後は役替にて領地の増も有之候て、其後預候て死去候へば、又本禄になり申つもりに御座候、乍恐御尤成儀と奉存候、唯今迄本禄に役料合候ては、此度の御定にて少々減じ申人も有之候故、如何奉存候処に、昨日承候へば、唯今迄取来候は其分に被成向後は此格に被成候段被仰渡候由承申候、弥結構成儀奉存候、只今より三倍二倍に被成候人も多く有之、

箇様にては小身成者にても器量次第に進み、其役を去り候へば、本祿に返り申格に罷成候故、人材を御挙用も自由に相成申候、御前代の様に寵遇にて独立候て、世祿を増候様成事は此以後先は無之候、其も其人に德行など有之、特恩の人は各別にて可有之奉存候、万々期貴面候、以上。

六月廿一日

鳩巢

浚新兄 拝復

追而御側衆の定祿存の外少く御座候、是も御前代などは各別と奉存候、兎角英傑の所為と奉存候、其に付ても千載の遺恨と奉存候、以上。

廿八日御家督御礼の時分、為御名代伊豆守殿御出の儀、是は御側衆へ上意有之候て右衛門督様相止候由、其趣は御隠居の節は相公様重候て先に被仰渡候、御礼の儀は名代と有之候へば家来にても其通の趣に御座候、其故御礼の時分は少将様重候て先に被仰上候、依之此度は少将様迄上意も御座候由、是にて訳聞へ候様に奉存候。

679◆一 玄蕃殿式部殿献上物は納り申筈に御座候処、其日に罷成病人にて御目見不申上候故、難納旨にて相返り申候、弥以気の毒成ものに御座候。

680◆一 先日申上候小松宰相と御調被遊候事、其後林家父子六郷殿等へ被遣候に、又加賀宰相と御調被遊候由、如何の御様子と不審に奉存候、承合候処聞番を以先日申上候通、御老中迄被仰達候処、兎角小松御住居以後の事に被成可然候、未達上聞内に御座候間、先御無用と申趣に申来候由承及申候、以上。

七月三日

青地藤太夫

藏人様

先日房州公潜に被仰聞候は、私同役の内に苦々敷様子の儀有之候、苔をまくり可申候、但なき寝入にも成可申かと被仰候、近頃無心許様子故追て御尋申上度候へ共、左様の透も無御座候、先日帯刀殿にて只御相手向に罷在候故、先日被仰候事は誰と申上候事は遠慮に御座候、当地の儀に御座候哉、金沢の事に御座候哉、夫迄被仰聞可被下と申上候へ共何とも不被仰聞、人持の内にも有之と迄被仰聞候、左候へば金沢の事に御座候哉、御聞及の趣は無御座候哉、偕其後帯刀殿へ潜に御尋被成候様に申置候処、帯刀殿御尋候へ共、尤外の事に被成不被仰候旨、但一事奇妙の事御座候、今般従相公様少将様に御親筆を以御家督初に候へば、被召仕候者共の内或は御取立被成度、御加増役替等も被仰付度者候は、其段可被仰上候、又は御奉公の様子不可然者は急度被仰付候様にも可有之候、兎角賞罰の儀御心付可被遊との趣被仰進候処、其御請に御奉公の様子不可然思召候は、中村吉郎兵衛第一番に御座候旨、帯刀殿物語にて潜に承申候、然ば当地の儀にても御座候哉、此人仕形の事は先達て申上候通一円難心得事共、但心有之者共気の毒奉存罷在候は、多分は十分宜敷者と思召可被成御座候、此処苦々敷奉存罷在候処、右申上候趣に候へば、恐悦至極奉存候、中川執事は御病氣、左候へば是皆当公御幸の内にも可有御座候、御火中被遊可被下候、以上。

七月三日

青地藤太夫

藏人様

彼諫書御上被成候以後、目安の内に何者にて候哉、水野執政の儀を丁ど先生被仰上候趣を相調、其上散々悪敷相調入置候処、其書付の姓名は御切抜被成泉州へ被下候由、泉州殊の外迷惑にて、其後我等のこまり候者は只々儒者共に候と申儀を度々御つぶやき被申候旨風説の旨先生御物語に御座候、右の被遊様にては猶頼母敷奉存候処、久々御侍講も被廢候儀は何とやらん御疎斥の気味にも候哉と、私方より御尋申上候へば、何れに御あきの方に可有之候、大臣を論候者は一旦宜敷様にて、後来疎斥せられ候ものと被仰候、七月下つかたの御物語に御座候、乍然八月以来は折々侍講も御座候、当四日は御退出候処へ兵庫殿を以色々御尋も有之体、爰元様の儀など有之旨私へも被仰下候故、則昨日三通迄紙面も

上申候、昨夜は御夜は御朱章にて被返下御挨拶も被仰出則申上候、以上。

九月八日

礼幹

八月十一日雑司谷へ御鷹野に被為成候刻、松平右京大夫殿屋敷の辺御通の処、原八弥居屋敷の前にて、八弥布上下着用直訴申上候旨申候、御徒目付見付扣候て直訴は御停止御大法の旨申候て、御目付大久保市郎右衛門へ被相達候、市郎右衛門御供に付、則若年寄大久保長門守殿へ相達候、長門守殿承届候へば、一封の紙面差上候旨申候、直訴御停止に候へ共、先紙面は請取置候旨被申聞候、還御の後入上覽候敷、追て市郎右衛門迄被仰出候、御直参の輩直訴御停止の儀は権現様以来御大法に候、其子細は其々頭支配人有之候へば、其頭其支配へ相達候へば指上申儀に候、但八弥事は不案内にて左様の御大法も不存箇様に仕候哉、若は乍存箇様仕候哉承届候様被仰出、則市郎右衛門宅へ召寄被承届候処、八弥申候は、権現様以来御大法の儀能奉存候、総て御法度の儀は常々心懸承知仕候、此度寸志申上候品中々頭共へ相達候共可経上覽様には不奉存候、左候へば本意も達不申、御大法を背候も覚悟の儀に御座候、如何様に被仰付候とも、其段は御怨に可奉存候様は無御座候旨申候、此段奉達上聞候処先閉門可申付旨被仰出候、只今は閉門仕候、如何様の儀申上候哉、其段は尤不相知候へ共、寸志申上候旨申候へば、御為に可罷成事にて可有之旨先生被仰候、幼少より学問の志有之、十八才の時先生も一度招請被申御越被成候、今年二十四五歳と御覺被成候、為人も宜敷実体篤実の人品に相見申候旨御物語に御座候、以上。

十月二日

礼幹

私侍講の事御聞及の通、七月晦日以後御沙汰なく候処、前月四日俄に被為召御用被仰付候、即日侍講も被仰付、同月九日御礼式過候て及晩右の御用の物相調持参候所其日又侍講被仰付候、同月晦日又被為召御用被仰付、其日侍講被仰付候、右御用は五常五倫を仮名にて解候て上ケ可申旨に御座候、随分短く候て能聞候様に可仕旨御座候、九日に五常は済し指上候処、晦日侍講の時分能聞へ候旨御直に御意にて御座候、則其日五倫をも右の通に可仕旨是又御直に被仰渡候、只今案じ見申候、仮名にて随分短く御好に候故申達しがたく致難儀候、大方是も済し申候、是を追て藤太殿より御写し可被進候間、御覽可被成候。

683 ◆ 一 去年より酒井撰津守殿へ折節参候て論語を講じ申候、大学は相済申候、是は左衛門尉殿より去年私へ被仰付、撰津守殿へ何とぞ月に五六度も参り候様被成度旨御頼に御座候、

唯今高倉屋敷講釈其外御用も有之候間度々には罷成間敷候、御近所にも候間月に二三度は参上、可仕旨許諾仕候、此通の首尾にて参候処に、其後懈怠のみにて不申来候、撰津守殿只今御年若に候故、第一御嫌と見へ申候、跡は加藤大二と申家老を殘置被申候て、左衛門尉殿は御在所へ御越し被成候、大二は佐藤五郎左衛門に書を承候て、学文有之と見へ申候、其故撰津守殿学文の為来春迄殘し置可申由に御座候、先頃左衛門尉殿御発駕前に御婚儀相済申、以後学文大二申入候へ共沙汰無之に付、左衛門尉殿へ急度申入候由、左衛門尉殿より近習者を使に撰津守殿へ学問御心懸薄く候間、此後不絶私方へ申遣候て講釈承られ候様にとの儀に候由、頃日大二方より内証申聞せ候、左衛門尉殿御頼の儀にて已に許諾致候へば、月に三四度は申来候はば可参心得にて候、其も遠方に候へば難成候へ共程近にも候、其上あなたより駕籠供の人共に迎越被申候へば行歩の労も無之、只惜くは撰津守殿学文御嫌其上曾て下地無之候間、畢竟埒明申間敷候、家老何も学を好み候故左衛門尉殿へ進め申と見へ申候、其上左衛門尉殿も先年常憲院様御代奥に御詰候時分、御不学にて御難儀被成候由、依之て撰津守殿には何卒学文被成候様にと被申候由に御座候、右殿父の命又は家老共の異見にて御難儀乍講釈御聞候体に見へ、折節講中眠も見申候、重ては急度可申入共存候へ共先見合申候て罷在候、右様の儀申入候て答有之様

子に候へば申甲斐も有之候、中々其所には及申程には無之候、余程気の毒事と奉存候、唯

今は其御家御婚家にも候へば、別て残念共可申候、不入儀乍ふと存付候間申進候、御覧の後火中可被成候、以上。

十月九日

室新助

青地藏人様

追て申上候、五月中御家督御祝詞申上候に付、六月中貴報致拜見候、御返報共に候間一々再言不申上候、其内安積覺兵衛事被仰下候、其後覺兵衛閉門御免被成役儀等無相違、此上の仕合奉存候、覺兵衛嫡子不覺悟者にて水戸に遊女町有之、遊女を盗み其外悪事共発覚仕候、同類も歴々の子共有之、五六人親類へ御預被成候、死罪に究候様に申候処、追放被仰付、親共は無別儀御免被成候、其内覺兵衛事は学者の儀に候処、常々子の不覺悟を不存候段似合不申旨別て水戸殿思召不宜候、去年先公中納言殿神主、始て水戸にて御祖廟へ奉祠の時分万端覺兵衛指図の筈にて御廟へ未明に罷越申処、刻限取違殊の外遅参にて家老中其外御供の人々先へ罷越相待候へ共、以の外遅く不首尾至極にて候、其段御耳に立候て其時分も遠慮被仰付候、其上にて又嫡子の事出来散々の儀に候へ共、先御免にて如前勤候て此上の珍重奉存候、当地保田縫殿と申候て、四五千石取申人有之候、幼少にて当春死去跡断絶仕候、此祖父越前守と申子無之候故、水戸御家来佐藤伊兵衛と申者の兄内記と申者を養子に仕候、然処に其後実子出来候、其節辞し去可申物に御座候、如何の儀に候哉其儘保田を名乗候て、彼家に養はれ罷在候、越前守実子名は覺不申其も致早世、縫殿致相続申候、越前妻は西山中納言殿御姪子の由、寡婦に罷成ぢせう院と被申候、此人の側に遣候、女中を縫殿家来の中に縁組、右内記取持候処に相違の儀にて、右家来内記を討候て立のき申候、是により内記弟伊兵衛水戸を暇もらひ兄の讐をねらひ申候、曾て右敵を見知り不申候由、見知申下人を案内に致し方々廻り候由にて近き者に候由、本望達候へかしと奉存候、水戸殿にも伊兵衛は歴々の者に候処、右家来輕者に候へば、何とぞ被成様も可有之かと色々僉議も有之と聞候へ共、いかにしても喧嘩の事にて候へば、公儀へ被仰上御尋と申筋も不罷成、暇を被下候其時分安積佐藤兩人同時に難儀出来候て、何も笑止成事に御座候処、光覺兵衛は事済申候、右の喧嘩以後追付縫殿は死去断絶に及申候、屋敷は御弓町にて、本郷御屋敷御近所にて頃日五六人に渡り申候、移替申世と奉存候、以上。

各様御眷願不淺候間、私侍講の首尾御聞被成度可思召と奉存候間、有増任筆候、前月四日御用有之由にて、有馬兵庫頭殿より由来登城仕候処、仁義礼智信の五字を頭へ置候て、和字にて其儀を二行宛解し申を掛物に仕候を、兵庫頭殿被携出候て如何存候哉と被申候故、手跡も能余程古く相見申候、定て堂上方より出申物にても可有之奉存候、何も尤成事には候へ共、五常の訳すきと違申候、仁義礼智にはづれ申道理は無之候へども、各其筋有之候事に候処に、仁の下に断申儀も、礼に似申候、義の下に断申儀も智に混申候、五常の訳をとくと合点不仕者の仕たる物に相見へ申旨申上候へば、私に五常を如此手短く仮名書仕候て指上申候様にと被仰出候、私申上候には、此通短く申候ては中々申取り難く奉存候、何程荒く申述候にも仮名の儀に候へば、是より余程長く可罷成奉存候旨申上候へば、是より少長く候ても不苦由に候故、兎角調見可申旨申上候処、追付御前へ被召出如例貞觀政要の講濟候て膝行退出の節、上意有之候故相控候処に、右五常のかな書の事被仰出候て、古来五常の儀を和歌などに読置申は無之哉御尋に御座候、終に見及不申旨申候処に、私事は和歌をも好み申様御聞被遊候、堂上方などへ承申儀も有之哉と御意に候故、左様の儀は終に無之由申上候処、公家にては学文有之者誰と承候哉御意に候故、野々宮中納言殿学才有之候様に承及申候、唯今死去にて御座候、唯今は近衛前摂政殿御学文有之候様に承申候、御文章なども少々見申候処、余程の御学力と奉存候旨申上候処、其外に承不申哉と御尋候故、其外には未承候由申上候、偕公家にも儒者など寄合候て、学文詮議仕候様成事も有之候哉

と御意に候故、委細の儀は不奉存候、伊藤源助と申老儒京都に有之候、只今は相果申候、此者公家へも罷趣、堂上方に弟子も有之候様に承候旨申上候へば、源助事は御聞及被遊候、如何の学文に候哉と御尋に候ゆへ、私申上候は、人物は宜敷ものゝ様に承申候、学問は異字と被存候旨申候処、何とて左様に存候哉と御意に候故、和漢ともに古来程子朱子を用申候処、源助事は自分の見を以程朱を譏り申候、兎角学文は程朱の学を正統と仕事に御座候、明の中比王陽明出申候て、朱子を譏り申候て一分に見を立申候、夫より唐にても異見申者も有之候へ共、何れも皆一旦ははやり申候へども、畢竟は程朱に帰し申候」由申上候へば、陽明が学はいか様の事に候哉、朱子とは如何の違にて候哉、たとへば大学の明明徳の事など朱子と陽明との相違をそれにて只今申候様にと御意御座候故、私申上候は、事長き儀に御座候間唯今有増を申上候、朱子の説は明徳と申すものは、聖人愚人共に天より受候て替儀は無之候へ共、聖人より以下は氣質人欲と申もの有之候て明徳を昏まし申候、唯今是を明に仕べく候はゞ、善の善たる道理を窮め、悪の悪たる道理を窮候て、善悪の筋を委敷存知候て、さて私欲を去り元来の明に復り申に御座候、其故致知格物を最初の工夫に仕申候、致知格物と申は念慮の上より言行の上に至迄、事々物々の上にて其理を窮め我知を尽し申儀に御座候、然処に陽明申候は、人ごとに明徳具り候へば、事物の上にて一々究申に及不申候、左様に仕候はゞ却て外に心はせ候て実を失可申候、只私欲をさへ去り申候へば、自然と明徳は明に罷成候間、千万専らに私欲をさり申修行にて候由申候、ちよと承候処は手短にて尤成様にきこへ申候へ共、昨今平人の上にて頭より私欲を去り可申と存候ても、道理の筋を明に不存候ては、私欲と存ながらも道理に力なく候て、中々除申余事罷成間敷奉存候、朱子の学に従ひ候て義理の筋を明に仕候はゞ、次第に道理を見付申候処慥に罷成候て、私欲を去り申儀も可罷成奉存候、先大略朱子陽明の相違此処にて御座候由申上候処、得と御合点不被遊御様子に御座候故、私重て申上候は、明明徳は陽明が申様に修行仕候ても、少しは功を得可申候へ共、新民の工夫に罷成候ては、天下国家の事其事に即て一々其理を明に不仕候て、只私欲を去り申工夫ばかりにては如在なしに、ひたと道理に違可申と奉存候、新民も本来明徳の内に御座候へば、新民の事相違有之候はば、明徳も実は未明と申物に御座候旨申上候へば、其にて御得心被成たる御様子に御座候、其後は御意も絶間有之候故見合候て、其儘御前を罷立申候。

688◆一 是より前に侍講の時分、鄭の国亡び申事を斉恒公鄭の父老に被尋候処、鄭の君善を善とし悪を悪とする故に亡び申旨申候、桓公不審被致候へば、父老されば善を善として用る事不能、悪を悪として去る事不能故に亡び申候旨申候、此処を講じ申時分、私申上候は、総じて古来名人の言はうらを申儀有之候、うらを申は必意味有之物に御座候、是とは事違ひ申儀に候へ共、世に申伝候は、大猷院様御時伊豆守御右筆に御用の事に付調させ候時分、急ぐ事に候間静に調候へと申候、急事に候間はやく書候へと可申候を、却て静に書候へと申事うらを申候て、殊の外意味有之儀と奉存候、総て上の御用と申候ては、誰もあつく油断は不仕候、然処に上に立申もの、権柄にまかせ候て急に迫り申付候へば、いとゞ心せき不存寄不調法仕出し申候、其処を伊豆守能致合点候て、急御用に候間静に書候へと申候は、御祐筆の気を落付申為に御座候、早く急に調候へと申候はゞ、書損ひ又は落字など仕に究り申候、然れば調直し申候故却て遅く成候、物かゝせ申候に限り不申、万事此会得可有儀に御座候へば、右伊豆守申候名言と奉存候、総て急事には静に申付候筈と奉存候、唯今鄭の父老が申事も、善を悪て悪を好候故亡び申と可申候を其うらを申候、善を善と不知悪を悪としらずして、善を不用悪を不去とは不知故に候故、もし知候はゞ善を用ひ悪を去り、可申と頼も有之候、善を善として不用、悪を悪として不去候へば、もはや頼も無之、其処を桓公へ可申と存候て殊に如此よしを申候、是亦意味有之儀と奉存候、是は少有為而申上候儀に御座候。

689◆一 九日重陽の御礼衆退出以後、右五常の仮名書調差上申候、直に又待講被仰付、右仮名書御好み有之取りて罷帰候。

689◆一 晦日右仮名書改差上候処に、御前へ被召出かな書能聞へ候様に被思召候、迎もの儀五倫をも此通に調可申上旨御意に御座候、奉畏候旨直に御請申上候、以後直に待講被仰付候、権万紀李仁発と申者群臣の非を太宗へ申上候、太宗是を御悦にてひたと御近付群臣の事を御聞候、房玄齡か事などをも申上候、其故群臣危懼仕候て気の毒に存候へ共、誰も申上候者無之候処、例の魏徵身を捨候て申上候に付、右兩人を御遠ざけ被成候由、此処を講じ申候、私申上候には、通鑑其外歴史を以中国歴代の治乱を考申候処、創業の君は何れも能御座候、二三代を経候へば上の威光次第に強く罷成下へ遠く罷成故、執権の人々自然と威勢つき申候て中にて取はからひ申事、多くは上へはよろしき様に申上候故下情通じ不申、総て有体に知れ不申候、其故日々に国政敗れ候て、終には衰乱に及申事何も其通に相見申候、然る処に太宗其院をよく御合点被成候て下へ近く被成、諫言を御容何事も下へいはせ御聞被成候故、天下の事有体に知れ、中にてまぎらかし申儀透と不罷成候、貞觀に太平を被致候は第一是故と奉存候、然共物は一得一失申儀有之、太宗の下言を御採用御尤成事には候へ共、其に付下より権万紀如き小人上の御好みを致合点、群臣の事をむざと申上候、太宗も一段重宝に被思召候、魏徵不申上候はゞ如何の害に可罷成も不存候、総て役人は其職を身に引受候て始終を考候て相勸申故、一旦の料簡にては難計候、当分は不可然様に見へ申儀も有之候へども、末を考へて仕儀も毎々有之候、然処を傍より一旦の了簡を以何角とは非仕候はゞ、上へ申上候ては諸役人さし足に罷成物に御座候、是又甚不可然儀に御座候、魏徵申上候処至極と奉存候旨申上候、是も少有為而の言にて御座候、此間の講義大略如此御座候、此外も御察可被成候、如何様少補には可罷成と奉存候、只恨くは此方に誠の上を感動する事無之、只解説のみに候故其効無之筈と奉存候。

691◆一 去月廿二日曹司谷へ御成の時分、小石川御成道にて原八弥と申候て父は長右衛門と申候て私も知人にて候、八弥も長右衛門時分彼宅へそば切振舞申候て一日参候時分逢申候、当年二十五六の者にて御座候、長右衛門常憲院様御代桐ノ間に申候、其後小普請に罷成此六七年以前病死仕候、右八弥屋敷門前御通の時、麻上下着用仕候て直奏差上申候、御成の時分御通り路は家の門を公儀の御徒衆固め、門内より一人も出し不申候、然処に入弥罷出候故達て差留申候へば、寸志申上度儀有之直奏仕候間、左様に意得候様に申候、御徒頭土屋平三郎と申候人〔是は私両度出合講釈など聞被申候、萩原源左衛門など同事に語申候〕聞届御目付中へ達候処へ、右直奏御目付請取にて指上之申候、其後大久保市郎石衛門と申者御目付の宅へ呼候て、段々御尋の儀も有之候由、何を申上候とも存じたる者無之候、右八弥は萩原源左衛門と少由緒有之候故、八弥近き親類早速源左へ知らせ、其親族の人何事を申上候哉と尋候へば、其儀は申候て不入物に候間申事不罷成候、兎角自身の儀にても無之、又人の上を申候儀にても無之候、只寸志有之候て申上候儀に候由八弥申由に候、左候へば何とぞ御政務へ懸り申事にても有之候哉、右大久保方にて御尋は、御代々直奏は御停止被仰出候、其段を不案内にて不存候哉と御尋に候処、八弥申上候は、成程其段能存罷在候、然共頭へ申入候ては中々取次申間敷と存候故、存切候て一命を捨申上候、如何様に被仰付候ても毛頭御恨に不奉存候由、申上候事は知不申候、先は随分落着き宜しく相見へ候由申候、其後閉門被仰付候、是は御法度背き申候故先斯様有之筈に御座候、申上候事忠義に御座候はゞ、畢竟は宜敷可有之候由申候、以上。

十月九日

室新助

奥村源左衛門様

青地藏人様

其外例の面々

692 ◆ 一 原八弥殿先頃御目付大久保市郎右衛門殿宅にて御尋の時分も、終夜対談有之候処、始終口上作法共に見事成様子にて御目付衆被感候由、上よりも閉門被仰付候得共、寛に仕置一門共参会可為致御大法迄に閉門被仰付置候旨被仰出候て、首尾は宜候由先生御物語、世上沙汰にも右の通申候。

692 ◆ 一 閉門の内御知行被召上候儀は、常憲院様以来の御法に御座候処、近年は閉門の衆何れも御知行其儘被下、御知行不被下候ては誰か養置可申候哉と被仰出有之、如此罷成候旨申候、御寛政に御座候。

692 ◆ 一 頃日戸田山城守殿御主付、其下へ黒田豊前守殿御目付小笠原平兵衛殿、並林大内記殿等相加り御用御勤候旨、専ら御儉約の儀被仰出筈に申候、又家中迄も内に有之様に申候旨先日帯刀殿被仰聞候、又或説に先生も御加り被成候由風説御座候に付、七日得御意御尋申上候処、曾て御加り不被成候、専ら婚礼の儀式御定候様御聞伝被成候、華麗無之様にと申より儉約の儀も取沙汰仕候敷、御目付小笠原氏被相加候も其筋に被仰聞候、何れにも左様の儀御沙汰及申事は恐悦成事に奉存候、以上。

十一月九日

青地藤太夫

藏人様

先日従是進候細書御覽被成、学友中にも御廻し被成候はゞ得其意奉存候、当月も一度進講の処、講釈前御直に歴史の事など御尋被成良久及問答候、私並の者など斯様に御前へ度々罷出御心易被遊事、比類無事に御座候へば難有仕合奉存候、何とぞ其効も有之様に奉願候へ共、老夫不才不徳の身故存様に無之段気の毒奉存候、其段筆紙には難申候、先日五常五倫の仮名書被仰付候、後後は板にも罷成後世へも伝り可申候処、いつ出来候哉、誰が所作に候哉、相知不申候てはいかゞに候間、跋を加へ可申旨重て被仰出候、則撰進候処早速応御意候て相濟申候、何事も敏速成事にて少も滞着無之候、其故当分御用勤の儀も氣鬱仕候事は無之候、是は徳川の御家風と奉存候、此間水戸宰相殿の御様子承候て驚入申事共に候、当年十八才に御成被成候処、御政務等の事透と御聽断被成、家老中など思慮及申事にて無之候、其上学を御好み常々経書講釈御聞被成候、私甥小池源太左衛門並のもの共侍講相勤申、先日も論語子路衣弊温袍の章を講申候由、講過候て被仰候は、今日の講人君杯には入不申儀と聞へ申候、但講じ申者の心得あるべき事に候、此方などの身にも装束衣服等の善悪にも構不申心得と同事たるべし、此処を講じ可申儀に候由被仰候由、源太左衛門など驚嘆仕申候、十八才の大人には斯様の賢識珍敷奉存候、何とぞよき輔相を進候はゞ頼敷君に御座候、其外申進度事有之候へども、筆紙に難尽候間早々如此御座候、以上。

十月廿四日

室新助

青地藏人様

694 ◆ 一 五日先生へ立寄一時計得貴意色々御物語ともに御座候、従公儀儉約被仰渡候事弥御聞被成候、慥成事にては曾て無之、午年より急度相改り申候筈、各別替り申事の様に申候由被仰聞候、婚礼の儀も入組六ヶ敷事に相聞候旨、先生には御加り不被成候由、御存知無之旨被仰候。

694 ◆ 一 菅野彦兵衛講堂存外聴衆も多く御座候、但し仏老の非を甚敷誹り申候て、出家など聴聞に罷出候ても居申事も難成程の事にて退出仕候、講堂の床に火懸物をかけ置申候、其絵は衣冠正敷貴人と見へ申者一人書き、側に沙門に繩をかけ引居、扱又釈迦と阿弥陀の像を泥水へ投入申体を為書置申候由、是は定て守屋大臣にて可有之候、偕々不入事を仕却て害を招き可申旨思召の由被仰候、石介が五賢一不肖の詩を作り候さへ、范希文は「為兒輩害吾事」とやらん申候、不人事と奉存候。

694 ◆ 一 本多喜十郎殿御舎弟有之様申慣候処、御妹一人有之迄候旨、夫故か郡山城地は松平紀伊守殿へ御預、三万五千石の役高にて在番、「外より申来候ば、郡山領の内三万石



御預内一万石の役高を以被相勤候筈の旨、且又上屋敷御差上、家来共は下屋敷へつぼみ可申旨被仰出何れも下屋敷へ退散仕候、以上。

臘月八日

青地藤太夫

藏人様

菅野彦兵衛事被仰候通に奉存候、先頃町奉行所へ被召呼候て、此度講堂建申事、且又平生常産の儀など委細被尋候処に、此度作事は少々田地所持仕候を沽却仕候て建申候、常産の事は、少々門弟共有之是等助にも罷成、且又右田地の余いまだ少々有之候故、飢渴及申程の儀も無之由御返答申上候由、其以後産に成申筋候は、何にても願候様にと町奉行被申候由、其身申候は、右の通にて当分何とぞ暮し候間願事無之由申候、然処町屋敷表十五間奥九間の町屋敷家も有之候、本所辺さいぎ町とやらん申所にて被下候常産の為と被思召候事と奉存候、外に金三十両拝領被仰付候、其身難有儀可奉存候、陰徳陽報と奉存候、道学の為に田地沽却て講堂存知候事一器量有之者と被存候、異端を破し申候も「能言而距楊墨」の心たるべく候、碌々たる徒とは不存候、いか様来春に成候は、知人にも可罷成候と奉存候、彼と懇の者頃日参り候て物語り申候、以上。

十二月十三日

室新助

青地藤太夫様

享保九年

692◆一 日外申進候原八弥と申直奏申上候者も、頃日知行被召放在郷へ被遣外へ不罷出引込居候様に被仰出候、何事を申上候哉相知不申候へ共、兎角御仕置に懸り申儀を寸志を申上候様人々取沙汰致し候、始終様子落付此度被仰渡候時分も、少しも動ずる体にても無之とて誉申候、おしき儀に奉存候、閉門被仰付、一往相済申候処斯様被仰付候事、又頃日訴状箱へ一封入候哉と人々推量仕候、いかゞ候哉慥成事は相知不申候、又去年春時分より私方へ参候内に飯室勝之進と申人有之候、養父は飯室甚五郎と申候て小普請にて候、二百俵計取申候、若き人には候へ共殊の外篤志に見へ申候、学力は無之候へ共生質勇志にて、養父小身にて勝之進へ用金等もしかゞ宛行不申候へ共、私共所へ無僕にて木布位の装束にて被さ参候、左様に候処に少も泥無之体に見へ申候、日々武芸並学文に心懸申事無比類様に御座候、然ば唯今迄能師も無之、学文に志有之候へ共得と合点不仕処に、私門下に遊候てより格別義理を会得仕り、養父母等に仕へ申を始、朋友等の交接に至候迄前非をさとり申候事、君父の恩にもおとり不申とて老父を殊の外信向に御座候、然処此人養父方の一家に、町野宗八と申候て当年十四五才に罷成申候、父は早世候て祖父の家督を統候て罷在候、祖父は御代官にて御座候、死去仕候時分、一族の中島海伊兵衛と申者を宗八後見に頼候て相果申候、此伊兵衛大悪人にて宗八を害し候巧みなど仕候由、其上宗八幼稚の内に町屋敷其外金子なども過分に有之候を己押預致し申、右宗八母後家に罷成候て永寿院と申て、女中には珍敷程利発者にて、其段を頭へ直参致し訴へ申事毎々に及候故、頭より御内意得申候歟、先年右伊兵衛をば引離し、一門中にて後見可仕旨頭より申渡し候と申候、右永寿院は少子細候て兄の方へ参居申候て、宗八と一所に不罷在候、是も畢竟は伊兵衛永寿院一所に居申をいやに存候てたくみ申事の由にて、其子細は事長き事にて御座候、然処右の通頭より伊兵衛引離し候故、永寿院宗八方へ罷越一所に罷在候処、伊兵衛宗八祖父遺言にて、宗八と母永寿院一所指置申間敷候由、是は永寿院一度再縁いたし申候事などにて、祖父氣に入不申候、其外にも子細有之候て、とかく宗八と永寿院母子不通仕候様にと遺書有之候由訴状箱へ入申候、其故右の遺言をもて永寿院事向後宗八と一所に指置申間敷由若年寄中より御申渡にて、母子不存寄事にて互に涕泣仕候体何とも難忍候、縦ひ再縁仕候共、斯様の儀にて祖父氣に入不申とも、唯今既に宗八家督相続仕、現在の母を養ひ不申候て別居仕候ては、家督を領し候ても本望に無之事にて候、家督を差上候ても此儀は奉願度由幼

少なから申候、其上天下の御政務に付ても孝行の筋にも違申儀に候、然処伊兵衛不愔遺書を御取上被成、母子を義絶候様との儀御政道の疵にも可罷成候間、母子一所に被差置可被下候、私推参成儀申上候は、其段は死罪に被仰付候ても毛頭御恨に不奉存候由、勝之進一封差上申候外に、母子も右の願銘々に差上候由、何れも訴状箱に入申候、数度御僉議の上〔評定所へ永寿院、宗八、勝之進其外一類中並伊兵衛被召出、寺社奉行牧野因幡守殿町奉行一人御目付出合候て、御吟味候様被仰渡候、〕伊兵衛事は遠流、永寿院宗八は無御構候間勝手次第に一所に可罷在候、其外親類中伊兵衛と致一味候者、又は伊兵衛手前より金子など致借用候者など、大勢御吟味候上閉門遠慮の者も有之候、借勝之進事は証状箱に入申候一封、且又評定所におゐて無憚儀共申上候、其に付養父甚五郎に御預被成候、おしこみ置可申候、尤甚五郎家督は此者には被仰付間敷候由被仰渡相済申候、其後勝之進より私方へ密に一封差越右の首尾しらせ、本望の通宗八母子一所に被仰付候上は、其身事少も遺恨無之泰然と罷在候、是も私蔭にて候由申越候、右訴状の内にも御政務の事申上、且又評定所にて当時御政務の非を不憚申上候由に御座候、ちと申過たりと見申候、頃月萩原源左物語にて承候へば、評定所にては此度の事宗八儀にて申上候にても無之候、是を伊兵衛申通に被成候て母子義絶に罷成候ては、三網の道絶申候など、申候由、是又御政道には人才を得申事第一と私存申内に賢人一人有之候、御尋候は、申上度などと申候由、斯様の儀を承候に過言も有之と奉存候、去共勇義の士に候処、おしき事仕候と不堪嗟嘆候、一兩日以前に勝之進に書通仕度一封調、本郷御屋敷へ参上の帰に町野宗八宅へ〔上野門前広小路うしろにて〕持参仕候へば、永寿院出候て不存寄逢申候、宗八をば勝之進押籠られ候以後、私方へ早々罷越知人に罷成、向後参候て講釈なども承候様に迎指越申候、此度の事共何共不存体に候、天王聖明臣罪当誅の事など頃日も申遣候、籠居の中随分慎候様にと存候、頃日世にも原八弥と飯室勝之進同事連兩人並称し申候、兩人共に惜敷事に奉存候。

698 ◆一 菅野彦兵衛事于今不相替講釈仕候て、聴衆も多有之候由に候、如來教此人は傑出の士とも可申候、終に逢不申候故しかとは不存候、頃日酒井右衛門尉殿家來旅川弥右衛川と申鐘の師仕候者江戸致発向申候、地を致拜領鐘を広く教申候様に其場を構申度候由、是又鐘を上覽被遊候様に奉願旨訴状箱へ入置申候、御取上不被成候由評定所にて被仰渡候処、再三入申候故左衛門尉殿用人被呼候て、右弥右衛門儀左衛門尉へ御渡被成候間、外へ出し不申候様にしまり仕候様との儀にて、頃日妻子引離し在所へ参り申候、散々の沙汰罷成申候、是は彦兵衛まねを仕候ての儀と奉存候、不料簡者にて御座候、不入儀ながら申進候、以上。

閏四月廿四日

室新助

青地藏人様

御位牌題書の事被仰下、御発駕前本多図書殿より私へ御意得被成度候間、所存可申越候旨御申越被成候、神主の儀に候へば、御姓名、御官位等陷中粉面調様も愚見有之候へ共、俗流御位牌の事に候間、御法名御除被成事は成申間敷候、御法名に御姓名等相雑候事いかゞに候間、只俗流に御名御官位計にて被指置可然哉と申進候、其に付参議の事は官位相当不相当にかまひ不申、首に題し申筈に御座候、院号の事は法諡にも準し可申候、御当家台徳院様以来御院号何も最首に題し有之候、是は勿論勅賜に候故にても有之候へ共、とかく最首に題し不申候ては不順成様に候間、私存候は、一松雲院故参議従三位行左近衛権中将肥前徳翁一斎大居士」如此たるべく哉と申遣候、一兩日前御屋敷へ参上候へば、図書殿へ御出懸御目通候故、弥右の通りに申入候、不存寄儀御尋被成候と奉存候処に、長公よりの御紙上にて、さては長公より御伺被成候に付及此儀申と奉存候、此趣長公へ御物語被成可被下候、尤御代々の御牌の格次第には候へ共、御姓名をも元來加へ申度ものに候由先日図書殿へ而上に申入候、御法名の中へ混し候事不都合如何にも奉存候故、不入物の様に申候へ

共、跡に能存候得ば、寺に被指置候御位牌ながらも、御姓名は有之度物かとも奉存候、此上は御僉議次第に奉存候、以上。

七月廿四日

室新助

青地藤太夫様

御位牌御法号御官位等の調様、御自分の御意得に被成度被思召候間御尋被成候、御書付被遣両様の内何れ宜敷存候哉、且又官位前後の調様は有職の人へも御尊被成度候、兎角無遠慮委曲申上候様に被成度旨、御紙上の趣奉得其意候、御存の通唐の神主は粉面陷中二重に仕候て、陷中は官姓名等委細に記し、粉面には其称号杯を記し申事に御座候、法号を神主に記し申儀は無御座候、然共此度御尋被成候は寺家の位牌の式にて、御寺に被指置儀にて可有之と奉存候、左候へば御法号を被指除候事は難被成可有御座候間、其通に相隨候て、愚案の趣左に申進候。

700◆一 御法号を御官位の首に記申儀は其例不承候へ共、日本近来歿後には寺僧の付け申候院号を第一に常に称し申儀にて候間、御書付の通御院号を首に置候ても可然奉存候、御当家台徳院様も御院号を御官位の上に被成候、勿論是は勅賜にて候へば格別の品に御座候得共、是又例共可罷成儀に奉存候。

701◆一 参議の事位階の相当不相当に限り不申、位署の首に置申例に候由承被申候間、是以御書付の通可然奉存候。

701◆一 御書付に左近衛中将従三位と有之候、此儀有職の事知申人へも承合候処、総て官にても位にても少も高く候を先に出し申式に御座候、参議とても三位に叙せられ候事は、規模に仕候儀にて御座候、況や衛府などは不相当にて別て結構成事に御座候、然ば左近衛中将の下に書候事不可然奉存候、肥前大守と御書付に有之候へ共、是は其儘肥前守に被成可然奉存候。

右之通に付愚案の通署申候はば、「松雲院殿故参議従三位左近衛権中将肥前徳翁一斎大居士」又位署書法式の通に候へば、「松雲院殿故参議従三位行近衛権中将兼肥前守徳翁一斎大居士」、位階の方官より高く候へば、官の上に行の字を加へ申例にて御座候、其式職原にも相見申候。

701◆一 御美名且又普原と申儀も調申儀に候哉、御聞被成度旨御追て書に被仰下候、右に申上候通唐の神主格に候へば、姓名は字迄も記し申筈に候へ共、此度の儀は御寺に被指置候御位牌の儀に候へば御姓名と御法号と交り申候ては、不可然奉存候間、御無用に被成候様にと乍憚奉存候。

701◆一 神儀と有之候儀僧家に申来候例に御座候はゞ、其通に被成可然奉存候、唐の位牌には官位姓名等の外神主と書し申筈に御座候、唯今神主と書し申候はゞ、僧家の位牌には少しかたく聞へ不都合にも御座候間、神位などと被成可然哉と奉存候、同じ儀ながら神位に仕候へば、常に位牌にも相応仕候様に奉存候、夫ともに僧家に必神儀と仕候例に御座候はゞ、其通に被成候とても後難有御座間敷奉存候。

六月十八日

室新助

本多図書様

御手紙致拜見候、土用過候ても暑気未除候、弥御清健御勤被成珍重奉存候、然ば重て被仰下候はゞ、別紙御書付の通承知仕候、愚案左に申進候通に御座候。

702◆一 加越能三州を被領ながら又肥前守に被任候事古代其例無之儀に御座候故、古今位署等に其例相見不申候、只今新規の了簡を以相加候はゞ、則御書付被下候通、権中将の下に兼肥前守の上へ書入申外は有之間敷奉存候、然共乍恐私奉存候は、三州を被領候儀は御代々の儀に御座候、御位牌の儀は其人々の称号を記し置ものに御座候へば、御官位兼肥前守迄にて宜敷可有之儀に奉存候、但御寺に御座候御代々の御位牌の面に加越能三州大守

と有之、其例に此度被相極候儀に候はゞ格別の事に御座候、以上。

六月七日

室新助

本多図書様

御牌而宝円寺和尚被書記候趣、且又御自分思召寄の品其段総御奉行へ御申達得心に候処、宝円寺一向同心無之候由、扱々気の毒千万に候、爰元へも宝円寺より被書出候趣致拜見候上に、御位階被記候儀相違候様有之旨民部殿と申候得共、総御行より被上候儀、とかく彼是申に不及儀と申候て罷在候、広徳寺よりの書付は如被仰越大概宜敷様に申事に候、されども爰元御牌面の御書付も近き頃出来候て、迎もの儀に室新助殿へ御内談有之、大内記殿へ畢竟御相談の上にて出来候様に仕度儀と存候、新助殿へは拙者意得にて承合候処、委曲被申越候趣有之候、為御意得御一覽候て御返し可被成候、則此度進候、如此迄仕候ても存候様に力及不申候、其元にて二条様御使者御院号等写罷越申度旨に付、水島より段々の様子岡田伊右衛門迄申越の趣も承知仕候、和尚かたく被申候へば、何とも難成儀と存候、畢竟御牌面の儀は、其時の住職の被調候事に候へば、後代心ある人見申候て、不案内成出家調候と存候て可有之との御沙汰にて御座候、広徳寺出来の御書付も写候て懸御目候、以上。

七月十三日

本多図書

青地藏人様

広徳寺御位牌の面

松雲院殿参議従三位近衛権中将徳翁一斎大居士

酒井撰津守殿御奥方様御安産以後、御母子様もに御安泰、御男児様追付御成育被成候とて、先日も家来中為申聞殊の外悦被申候、先日も参候て論語を講じ申候、加藤清左衛門と申大二弟にて御座候、学力有之余程慥成ものに見へ申候、其故左衛門尉殿より撰津守殿へ御付置被成と見申候、先日も私へ被申聞候は、私事は格別に存候に付為申聞候、撰津守殿学を好み被申候様常に御内助候様にと、奥方年寄中を以申入候処に、新助講釈遠のき申時分は御氣を可被付候間、心安く存候へと奥より被仰出候由清左衛門申候講釈御聞候時分氣をつけ申程の事は奥方様を頼み可申候、只願申候は何程講釈御聞候ても、御心より趣き不申候ては無益の事に候間、只御心より御好み被成候様連々被仰可被下候、御心体の事は私共得と不奉存候故御頼申上候、其外御行儀等の事は数ならず候へども、左衛門尉様御付置被遊候儀に候へば、私申兼候て奥方様へ奉願と申儀は無之由申候とて咄申候、気散じ者に見へ申候、此事長公清左衛門殿の外へは御咄御無用と存候、清左衛門も私へならでは不申聞候。

704◆一 侍講九月十四日に罷出候以後不罷出候、此間は御用多御様子に相見申候、随分御機嫌よく御鷹野には度々御成被遊候、当月十五日長福様此後若君様と可奉称旨一統御弘有之、御老中御列座被仰渡候、同十七日御目通にて紅葉山御宮御社参、廿一月一統御目見被仰付候、其時分も御父子様御同道にて表へ出御にて御座候、二ノ御丸へ其儘被成御座、二ノ丸附の衆御老中より初め皆々相極申候、委細定て其地へも可申参候間不得申進候。

705◆一 山田大助只今儒者役被仰付、私共仲間に罷成申候、荻生惣右衛門師範を受申候様聞申候、師弟と申にても無之由に御座候、とかく博識を第一に仕候、いかゞ成行可申候哉難計候、先頃侍講の時分大助事弥勤学仕候哉、其後逢候哉など御直に御尋被遊候あたり、御請申上退出可仕と存候処に、よき序と奉存候て直に申上候は、学問の世に大益に罷成事は、士の風儀も改り末々迄の風俗も移り申候へば、自然と悪人も少く罷成、天下の御為第一の善事に御座候、然処に儒者たるもの義と理の僉譲うとく、人を教申道に暗く候間、何の益も無之儀と奉存候、詩文などは只今如何様上手に罷成候ても、世の為何の益にも立不申候儀と奉存候、其故第一経学をいたさせ申度儀に奉存候、大助事唯今如何意得候て学問仕候哉、無覚束奉存候旨申上候へば、とかくの御意は無之候故、見合御前を罷立申候、此儀先遠て有馬殿へも申入候得共、得と感心無之、是は荻生が博学を殊の外感じ被申由承

り申候、其故とくと請合不申顔色にて候故、幸と奉存御直に申上候、定て異風成学問と被思召候哉と奉存候、此一見識にて松雲院様御意にも入不申又此度も世に遇申間敷奉存候、只今江戸は荻生流の異学はやり申候、六経は注疏を用、歴史は通鑑綱目を禁じ、温公通鑑為読候由頃日承申候、其外申度まゝの儀共に御座候。

705◆一 綾部新平頃日豊後杵築より書状被申越候、無事に参着候由申越候、頃日又大坂より小林道本と申もの二元は大坂御城付与力、只今子に渡し、其身は隠居いたし罷在候処。身も自由に罷成申候、実学を好み七書の注などいたし申候」不図私宅へ参候て、書簡致持参申候折節、拙者事病中臥褥候て罷在候故対面不致、忤忠三郎出し申候、右の書簡見候へば、上へ一封差上申合点にてはるぐゝ大坂より下り候処に、大坂にて私事只今待講も仕候事承及、私取次候て上へ達候様にと願申趣にて御座候、上書の条々半は理に不当候へども尤成事とも相見申候、折角私を目当にいたしはるぐゝ下り候処無下に返し候事も無本意、又私取次候て指上候事は不罷成事に候、其故病中委細の返翰を裁し遣申候、其書中兎角指し候様に申遣候、委細は筆紙に不能候、思の外感服いたし候、早速草稿を火中いたし存とまり可申旨申越候、其後両度参候故乍病中致参会、緩々粗飯など振舞語申候、よほど志も有之、俗流の徒とは格別に見申候、右の草稿焚可申と奉存候へども、亭主居申所に間も無之、不図見候て不審に可存候間、私方にて焚捨られ候へと先日致持参候故請取置申候、必しも焚捨不申候ても不苦儀に奉存候故其儘指置申候、来春御下向の時分草稿並私返簡共に懸御目可申候、流石江戸に罷在候へば、箇様の人物にも出合申候、以上。

十一月廿八日

室 新助

青地藤太夫様

先生御談話

706◆一 兼々御聞及の奇童山田宗見事、唯今は山田大助と申候、二百俵被下駿河台先生御宅の辺に罷在候間、此人奇材先生にも御驚被遊候旨被仰候、未被召出以前、先生御侍講の序此者の儀御尋に付、奇材の段被仰上候、被召出候以後、又御侍講の序学問は弥進み候哉など、御尋に付、段々御請被仰上候て、其上に被仰上候は、大助など学文の仕様何と相意得候て学文仕候哉、其段無覚束奉存候旨被仰上候へば、如何の儀と上意に付、学文と申物天下の大益に御座候と申儀は、今日の言行より初候て風俗まで宜敷罷成候故に、大益と申事に御座候、学者経義にうとく理に暗く御座候て、何の益にも立不申候、詩文など巧に御座候迎も、天下の益には少も成不申候、然処大助など博識文翰等を本に仕候様子に相見候故、天下の御用には立申間敷と気の毒に奉存候旨被仰上候処「是は有為被仰上候体に御座候」兎角の御意も無御座黙して被為入候旨被仰候。

707◆一 大阪に鈴木貞斎と申候て浅見門弟の学者御座候、酒井讃岐守殿大阪へ御越の節、儒臣松田善三郎当地に罷在善三郎忤何某大阪に供に被召連候処、用事にて当地に被遣候其跡に於大阪家来の者共学文仕候為にとて、被尋候て右貞斎被呼出候、貞斎儀右松田何某に書を寄候て、先生へ疑問四五ヶ条呈し申候旨、其疑問の趣余程学力も有之体さすが浅見門弟程有之候と被思召候、あなたより俗書にて疑問申越候へ共、後世にも残申ためと被思召、漢文にて批点被遊候旨右御文翰追て為御見可被遊旨被仰候。

707◆一 豊後杵築松平市正殿儒臣綾部進平と申者、学者を教誨仕候に、専小学を以教導仕候事兼々先生も御聞及被遊候、当年御当地に罷在候て先生御居宅へ参上仕候、御対談被遊候処篤実の学者と相見申候由、此者先生へ申上候は、学文と申もの高遠なる事は入不申、学者所以明人倫にて御座候へば、とかく五倫の道を以学者を導より外無之候、五倫の上にて導候へば、上王公大人より下庶民の賤に至迄、君臣・父子・夫婦・兄弟無之ものは候はず、いやと申されぬ事にて御座候、左候へば自ら学者も信従仕候、夫を近世高遠の筋を以学者を教候故学者倦候て信従不仕候と奉存候、夫故私儀は専五倫の筋を以浅近に教諭仕候

存寄に御座候の旨申上候由、余程篤実に相見申者の由被仰候〔家庭指南と題し申候て、右の趣を文翰に著申候、文翰も余程宜敷候旨被仰候〕。

708◆一 先頃大阪の人小林道本と申者、先生御居宅へ参上仕得貴意度旨申候て、金百疋台にすへ目録の上に贅と申一字を書申候外に書簡一通指添申候、右書簡を別笥に写候て、此別冊には点を付候て持参仕候、折節先生御氣滞にて御平臥に被成御座候時分に御座候、右贄金は当座に御返し被遊候て、箇様の類何方よりにも受納不被遊候に付御返被遊候、右書簡は只今急には御覽難被遊候処、天下の政事の是非を段々存寄相調候ものにて御座候、半中半否にて御座候旨被仰候、右の存寄目安箱へ入候て申上度候へ共、若焼捨られ候へば何の益も無之に付、先生迄相達候存寄にて候、先生御儀千里の外迄篤行の君子と奉称候間身を危ふみ寵を被惜候て箇様の儀被打捨候儀は御座有間敷候へ共、猶更左様の儀無御座様に奉願候、此度武州の土に尸を血ぬり候心得にて覚悟を窮罷在候、於大阪妻子親族にも一言も不為申聞候などと段々相調候て、摂州の隠士と称候て書簡を奉候旨、志は潔事に候へ共、是等時の事体に不通ものと被思召候、先生より右の趣可被仰上様は決て無之事と被思召候、去共其分に被打捨置候ては埒明不申候故、御病中御難儀ながら御返簡御調被遣候、其趣大略は右書簡の趣尤と被思召候へ共、中々当時の勢先生など御取次可被上事体にては無之候間、其段不被為成候に付御返し被遊候、定て此方身を遁れ寵を窃申者と可被存候へども、左様被存候ても少も此方構不申候間相返申候、扱は此方存寄候儀有之候を黙して止候も不本意に付申入候、御自分事書簡には摂州の隠士と被称候へば、官守言責二の任は無之人にて候、然処上より御尋も無之事を被申上候は、事理に於て当り不申敷と存候、伊尹有莘の野に耕被申候も、湯の三聘有て罷出候、孔明南陽に耕も、劉主の三顧あつて後被出候、右両人の衆彼三聘三願無之候はゞ、一生耕種の業に身を終可被申候、隋の文仲子文帝に書を上り候て文帝不被取上候、是王道の辱と先儒論じ置候、左候へば其責無之候を、此方より申上候事自衛申にて、道理には不申と存候間、一往存寄申入候段被仰遣候へば、又返書指越候て、被仰遣候段々此方にて相考不申にては無御座候へ共、如何しても難黙奉存右の通仕候へ共、被仰下候趣一々感服仕候間、右存寄相止候間書簡をも焚捨申由申越候、其後駿河台へ被罷越候て右書簡焚捨可申と申上候へども、寓舎にて焚捨候ては主人怪み可申候間持参仕候、此元にて御焚捨可被下旨申候て持参仕候に付、御請取置被遊候未御焼不被遊候旨被仰聞候、右御文翰共追て為御見可被遊候旨被仰候、道本書簡何とぞ密々御借被遊候様に申上度奉存候へ共、余の儀と違申事故如何敷先指控罷帰申候、右二三人の者共余程の者共と被思召候由被仰候、道本儀は小出弥市右衛門と申候て大阪に罷在候与力にて候処、杵を名代に出し候て、其身は隠士に罷成、姓名共に改候て小林道本と申旨に御座候、此等一兩輩の外は少々学力御座候へば、文辞博洽を専として志行曾て無之、或は篤実の生質有之候は学力曾て無之候旨御嘆息に御座候、今日拝謁御物語承申候に付、先相調入御覽申候、記憶不慥候間相違の儀も可有御座候、其御心得御覽被遊可被下候、以上。

十二月五日

小寺武兵衛

奥源左衛門様

青地蔵人様

青藤大夫様

大新八郎様

成宇兵衛様

享保十年

710◆一筆致啓上候、寒氣甚候へども、御清勝御勤仕被成候哉承度奉存候、拙者儀去る十一日御城に被為召、西丸奥儒者被仰付、役料二百俵被下置候旨御月番水野和泉守殿被仰渡候、誠不存寄儀難有仕合奉存候、即日於御城誓詞被仰付、翌日より毎日西丸へ相詰候処に、向後隔番三番に相勤可申旨昨日被仰渡、勤方も緩やかに罷成致安堵候、但奥詰被仰付、此間も御小納戸衆と同席に相詰申候、奥詰衆は外交の儀厳密成事に御座候、老夫事は品も替

申者に候間、向後交接往来仕度方一々其姓名等書付にて差出し可申旨にて、此間書出し申事に御座候、其中第一其許御家の儀は御家来筋の私事に候間、向後も御饗応の席には指控候とも、寒暑の御見廻には不相替参上仕度旨願置申候、定て近日分け立可申と存候、余事追て可得貴意候、恐惶謹言。

十二月十七日

室新助

奥村源左衛門様

其外例の人々

十一日先生西丸奥詰御儒者役被仰付、御役料二百俵被下旨昨日聞番廻状にて承知仕候、早々先使を以成共御様子可承候処、御成夜に入候迄御門留不及是非、今朝四ツ時前罷出御挨拶参上仕候へばはや西丸へ御登城不得御意候、忠三郎殿御物語の様子如左御座候、十日に若年寄衆三人連署の奉書到来に付、十一日御登城被成候処、水野和泉守殿を以被仰出候は、近年高倉屋敷講積の儀被仰付候処、精に入相勤諸人の為にも罷成候旨御聞被遊候、然は西丸御近習被仰付御役料二百俵被下候、大納言様御側の者共皆々問指南仕候様にと被思召候旨被仰渡候、内通坊主衆相添候て西丸へ御上り、夫より御老中若年寄衆不残御勤被成候得ば、御痛散々にて中途にて暫御座し御休被成候位に御座候旨、昨十二日誓詞、御老中不残御列座の中にて血判御誓詞被成候旨、両上様にも昨日御札相済申候、御直談承候はゞ委敷事も可有之候へども、先如此御座候、以上。

十二月十三日

青地藤太夫

藏人様

猶以先生御役料二百俵、只今三ノ一ならでは渡り不申候、代金図りにて年十七両相渡申筈の旨御家来申候、御加増に候へば公儀も不残相渡申格の由御座候、以上。

712◆一 昨日駿河台へ参上、今度の後始て悠々得御意候、御威光故にも御座候哉、御痛処も透と宜敷相見御快談に御座候、御詰番も隔日と三番と替候、御出勤に罷成申候、爰元へ御出入の儀も御様子承候へば、賀州より被召出候私の儀に御座候間、加賀守方へは寒暑の付届の外用事有之節往来仕度奉存候、饗応等の節は勝手等へ相詰候儀も相控可申と申趣にて、其外松平大和守殿、土岐丹後守殿、酒井撰津守殿等の衆中是不残御書立候て、只今迄往来被成候旨と申て御調申候旨御座候、多分此方様の御通路も可成哉と被仰候、御前向の儀は其日誓詞前書に候由、妻子不相洩趣の儀有之故一向何事も不入事と被仰候、尤箇様に可有御座事故御尋も不申上候、御年来よりは御器量もすぐれ、御寛大の御生質と相見へ申候。

712◆一 御近習の衆中をしなべて、寛容にて、兄かおぢの介抱申様にて御勤被成能御座候、詰所にも大火鉢有之其廻りにて咄し御部舎には幾つも火鉢有之寒氣御忘被成候旨、各別に悠々と有之由被仰候。

713◆一 御宅も火事以後初て畳も改り、天井なども張直し、いかふ見懸迄も宜敷大慶仕候、此旨新八郎殿へ御咄可被下候、以上。

十二月廿三日

青地藤太夫

藏人様

起享保十一年至十六年

713◆一 旧臘廿一日大納言様御誕辰にて御祝など被下、御本丸へ御出の節雪降申候、新助に雪の詩は無之哉と御尋被遊候、無御座旨御請にて御出被遊候、御近臣の内へ詩作無御座段申上置候、但作候て可差上候哉、それには不及候哉の旨御尋候処、御作候て被指上候はゞ可宜との儀に付、律詩二篇御上被成候処、此詩の講釈御聞可被成候、召出候様御意にて、廿三日初て於御前右詩意を被講候（浚新書中、詩稿在別紙）。

正月元日

御手紙拜見、夜来より風雪寒威難凌御座候、愈御清勝御勤被成珍重奉存候、老夫事愈肩脊の病も全快、且又氣宇も清快到覺候条貴意安被思召可被下候、当地中村玄春と申官医の子息にても近来相見候処に、殊の外篤学にて老夫門下に遊び申度旨達て被申候故任其意候、医学も年少に候得共かたのごとく精確に候て未頼もしく相見申候、此人老夫氣分を伺、且又診脈等被致候て常服の薬考、今朝初て丸薬を製し候て給候、医案を書付給候文字も当地医家の中に難得奉存候、医案尤と相聞申候、此丸薬当年中に用候様に被申候、相応可仕と奉存候、いよゝ息災に可被成候間御氣遣被成被下まじく候、御序の節藏人殿へも被仰遣可被下候、待講の御さは無之候、昨日非番にてゆるゝ休息仕候、明日は罷出申候、東方朔が避世金馬門と申儀有之候、老夫も世を西丸に避と存候て罷在候、各様御期望とは大に違申事と奉存候、以上。

正月廿五日

室新助

青地藤太夫様

老夫事無異に西丸御番相勤候間可安貴意候、先頃土肥源四郎を二丸へ小次郎儀御附け被成、只今迄二十人扶持御前代より被下置候ところ、此度二百俵に被成候、是れも老夫同事の番を承申候、源四は壮年の人に候得ば長くつとめ可被申候、老夫事は先づ一日ゝと相勤め申候、来年は七十に罷成候はゞ致仕の年にて御座候、昔漢賈誼新進の人を以、文帝のために俄に長大息して治安の策を陳じ候、絳灌が輩曾て同心不仕候、文帝も賈生が策を迂闊不足用と存候哉、長沙王大傳に被申付候、古来迂儒の論世に過不申事不珍奉存候、此所に至ては大人の徳有之、人至誠を以感動候はゞ又格別たるべく候其は中々賈生など及可申儀にて無之候、況や老腐の才におゐて涓埃の效も難得事に奉存候。

四月十四日

室新助

青地藏人様

享保十三年

拙者役儀断の儀前書に有増申進候、奥詰の面々は総て願の儀先経御内意、其上にて表向より申上候、其故先頃中島備前守藪主計頭拙者共此衆の支配に候故、右兩人へ書付を以申達候趣は、私儀先年西丸奥儒者に被仰付、御役領拝領重疊難有仕合奉存候、然処一兩年別て老衰仕、其上手しびれ痛専一呼吸短促、御城内往来仕候にも息切難儀仕候、其に付御役儀御断申上度奉存候、此段日本神明偽無之候、以御慈悲役儀御赦免被遊被下候様奉願候旨申入候処、十日程過候て思召も有之旨先願差止可申旨御側衆被申聞候故、先奉畏旨御請申上候処、此廿一日御側衆大久保伊勢守殿を以被仰渡候は、私事年罷寄勤方難儀仕旨被聞召候、向後御番相勤に及不申候間、気分も宜時分は勝手次第可罷出候、朔望にも天気悪敷時分は罷出に不及候旨被仰出候、拙者事西丸へ御附被遊間も無之役儀御断申上候得ば如何願の通早速御赦免被遊候儀難計奉存候処、不存寄結構被仰出難有仕合奉存候、上にも老人の儀故御優恩にて如斯被仰出候事別て感戴仕事に御座候、此通に候得ば緩緩保養可仕と、先々致安堵候、以上。



二月廿七日

室新助

大地新八郎殿

716◆一 拙者役儀願候事優命有之候趣は前書に申進候、此間は大納言様御庖瘡にて当月初より毎日罷出申候、至極御軽段々御順快被遊、昨十五日三番御湯迄相濟恐悦至極奉存候、其故一兩日は拙者も在宿仕候、只今御番御免被遊候故緩々家居仕申候、折節御機嫌窺に罷出可申奉存候、拙者只今奥にての支配中島備前守敷主計頭兩人にて候、敷主計頭は其先祖敷内匠と申候て、秀吉相州北条陣の時分渡部勘兵衛と同じく、山中城を乗取申候中村式部賣口にての儀にて候、其嫡流は細川越中殿家に罷在候右主計頭は支流御座候よほど器量有之人と見申候、此度私優恩の命有之時分謝辞申入候処に、此上は随分保養候て長命に可罷在候、御用有之段に候得ば、其元への御用は大切の事に候旨あいさつにて御座候、かやうのあいさつ申者は外に一人も無之候、さすか内匠子孫と存候。

717◆一 荻生惣右衛門死去の事も前書に申入候、日外其元へも遣候俗書をも板行候て、若年寄本多伊豫守殿序を書被申候、百世の公論を不待して世上に非笑仕由に御座候、人性善に候故是程衰申候得共、若年寄中序文にても上よりも特旨にて去年御目見被仰付候ても同心不仕候、上方辺の学者もいろいろ邪説を唱申候、頃日鈴木貞齋と申候人只今大坂に居申候、浅見重次郎門弟にて候、定て中泉氏などは知り被申候て可有之候、此人独り山崎家の神道に同心不仕候、比日貞齋より申越承候得ば、山崎嘉右衛門なども見限り果申候、湯武を纂弑と申候由、伯夷が見にて候哉、終に中国にても漢唐以来不承異説にて御座候、其外伊藤が門流異説を申候得共、是は結句其程の害は無之候、山崎の流神道に荷担いたし候て大に正道を害し候由、不及是非事と存候、当地にても宋儒の跡を守候者は師儒と称し申内には無之候、老夫一人にて候、大厦の類一木の所支に非候得共、所聞を尊び所知を行て一生を終申覚悟にて候。

717◆一 岩淵氏より其後又書状越申候、弥無事に官暇の時分は昼夜勤学無懈怠由申越候、只今姓氏を改苜孝七郎と申候、孝孺も改候て徳林と申候由、字も申越候得共失念致候、此人難得聡敏にて候、辺土に居候て惜儀に存候(右三月廿九日自大地兄到来写置と大地兄書之)。

此比御本丸より御用の事被仰出、荻生惣七と申儒役の衆宅にて、足利学校より出申候十三經を以て、汲古閣の本と読合せ被仰付候に付、私儀も折節見廻り、右の内山井善六と申惣右衛門門弟書入申候処有之候、弥其通にて能候哉吟味仕可申旨被仰渡候、定て近日初り可申と存候、左候得ば右惣七郎宅へ拙者儀折節罷越申候、斯様の事も老衰にて相勤候事無覺束候得共、成次第相勤可申存候(与甥大地氏書中)。

七月二日

718◆一 御聞及の通荻生惣七郎宅にて十三經校合被仰付、私事も折節見廻り可申旨に付最早兩三度罷越申候、大久保と申候四谷辺に居宅候て遠方にて御座候、是は上州足利学校に有之候十三經の内七經迄古板並に写本有之、只今汲古閣万曆版等の本とは所々相違有之、其故校合被仰付候、比日も論語を見申候処、学而篇、「貧而樂、富而好礼」の処、「貧而樂道」と有之候、述而篇、「一舉一隅不以三隅反」の処、「一舉一隅而示之不以三隅反」と有之候、惣七郎などは殊の外同心に候得共、愚見はさやうに不存候、多分後人の附益と奉存候、あまり聞へ過候て語意浅く御座候得共、異説を好み申風俗故さやうの処に氣付申者無之候(賜齋賢書中)。

八月十三日

荻生惣七郎方にて校合いたし候は七經並孟子にて御座候、七經は五經に孝經を相添申候、十三經不殘有之と相見候処、残りは紛失と奉存候、其外文選なども參申候、是は金沢文庫の本に候処、北条氏政其時分の足利の住持に講釈聞被申、右文選を足利学校へ寄進被致候

末に氏政の名印有之候、右七経の内書き本も有之候、印板の本も文字の形明朝以来には各別の物に候間、宋板又は五代の時分の板と存候、総て印板は五代馮道が時分より起り申候、其より前は皆書写仕候、論語「貧而樂、富而好礼」と申処、「貧而樂道、富而好礼」と有之候、道字只今の本には見へ不申候故、惣七など秘藏の事に申候て、樂とばかり有之候故、孔顔の樂何事ぞと周程など僉議に候得共、樂道と有之候得ば是にて何の僉議も不入事と申候、樂道と申は、いかにしても浅くきこへ申候、是は多分下の好礼に対して後人道の字を加へ申たる物と奉存候、其証拠には其所何晏の解にたゞ樂と計挙候て道字は無之候、然れば弥後人の了簡にて此一字を加へ申と存候、述而篇の「挙一隅而不以三隅反」の処も、「挙一隅而示之不以三隅反」と有之候、是もよく聞へ候様には候得共、後人の附益と存候、是皆書本にて書写の人加へ申にて可有之候、当地の学者浅見にて好異申候故、かやうの儀申習し候て程朱を譏り申候、頃日承候得ば、長崎の沈燮庵と申唐人渡り候由、公儀よりも何角御尋の儀共惣七郎深見久太夫など承候而申遣候、如何様の人品に候哉、定て何の替申儀も有之間敷存候、右の儀共劣甥新人郎へ御逢の時分御咄被成可被下候、別に申遣事勞倦いたし申候間御伝達可被下候、先比彼方へ「執御乎、執御乎、吾執御矣」と有之候処吾執御矣と足利本に有之候朱子も執御にして、註せられ候得共、幸前漢書吾丘寿王が伝に、此論語の語を引候処に吾執御矣と有之候上は、足利本よろしく候、朱子も此本をば見不被申候何の僉議も無之と惣七郎申候故、是は前漢書慥成証拠に存候故、早速前漢書をかりよせ見申候処大に違申候、吾丘寿王が伝には孔子曰、「執御乎、執御乎」とはかり挙候て、下の吾執御矣の一句は引不申候、寿王射の事を第一に申候とて、此孔子の語を引申上、吾執御矣の筈と申すまゝに意得たるにて御座候、何れも粗浅輕薄此類にて候、此儀も新人郎へ御伝達被成可被下候、先日新人郎方へ前漢書を考可申旨申遣かと覺申候、存の外の相違にて候、荻生氏など申儀皆此類にてあらき儀と可被思召候、以上(賜浚新書中、寿王伝孔子曰、吾何執、執御乎)。

九月十三日

今茲戊申十二月廿五日余兄伯孜君卒、享年五十七、鳩巢先生傷怛の余、辞を千里に緘て余札幹をして靈座の下に読しむ、既に祭奠し畢て感泣の情に不勝、聊蜂腰一首を讀て懷を述る者也、于時己酉二月初七日、奠告し了て焚之

千里よりなけ木をつゝむ言の葉に 君がふたりの心をぞ知る

維享保十四年歲次己酉、正月十九日、室直清、遠具茶菓、敬祭青地君伯孜之靈、嗚呼伯孜、命止斯耶、哲人其萎、古今所嗟、惟君孝友、為政於家、方其在国、声誉日加、既而登庸、利劍就磨、解紛治劇、英鋒莫遮、偉哉若人、大邦之華、況復崇儒、隆師親友、求之士林、罕見其偶、吾在朔方、学行無取、君迺相信、不渝於久、三十余年、眷顧滋厚、謂君強健、必得其寿、豈料忽亡、使吾在後、嗚呼哀哉、往吾東徙、尺素往復、千里雖阻、寸心可掬、中遭家災、生計縮縮、君為經營、恩如骨肉、交誼之篤、聞者嘆服、辱知無報、老朽自慙、今也聞喪、不能匍匐、感念當時、失聲望哭、嗚呼哀哉、尚饗。

221◆一 某伯孜先生と申談、鳩巢先生往復書簡の内世事に涉り、秘密の事外人の聞を恐るゝ品々には本書を焚棄て、兼山秘策、麗沢秘策と題し巾箱に藏め置、殆後に投火せん事を欲す、但急死難豫計の故に、互に卒死の時は相伝て焚べしと誓ふ、伯孜君雖非卒死、某看護せる故某に授て焚しむ、而に予所筆の秘策を投火し、伯孜君手書の秘策を存し置、相續て書加るのみ、聊愛敬の心を寓すると云爾。

221◆一 世事に不預人と共に可觀もの、並書中經義に及ぶ事共は、多は可觀小説の内に載之。

221◆一 国事秘談の類は、麗沢秘策附録と題し若干卷有之、秘策と同じく一套にせるのみ。

721◆一 享保十五年庚戌四月天下諸大名参勤の儀如旧例、来年より一年詰の格にて御出、且又上納米も来亥年より御止の旨被仰渡候、御書立如左

覚

722◆一 当三月御暇被下候面々、当秋九月参勤の時節可被相伺候。

722◆一 当三月参勤の面々、当九月御暇可被下候間、参勤時節の事は来年二月中可被相伺候。

722◆一 当九月参勤の輩、来年四月六日御暇可被下候。

722◆一 来春参勤の輩は、当九月中参勤可被相伺候。

戌四月

御勝手向不調に付、近年上ヶ米被仰付、御用も弁し御機嫌に被思召候、右上ヶ米の儀今年にも御用捨被遊度被思召候得共、いまだ御勝手向難相調候旨役人共申に付、来年より上ヶ米御用捨被遊候、依之従来年参勤交代の儀可為前々之通候、来年参府の面々は、当秋参府の時節可被相伺候、其節可相達候、右の趣可申聞置旨被仰出候、但半年代の面々も、来年より可為前之通候、以上。

戌四月

朱書右如旧例被仰出候子細は、近年米価追て下直に相成候、十年以前に比べては半減の内に成候、扱諸物の直段絹布等類は米に応じ候様に候得共、其外の品は価不下候、依之士家迄にても無之、四民共に困窮に及候旨申候、色々御詮議の処天下一同上納米有之候に、新開の地甚多罷成候と、扱は少直段宜敷成候はゞ、公儀御払米有之と、此三色より米価下り候旨、商人共の手前より言上仕候由取沙汰仕候。

723◆一 御腰物備前義兼代金二十五枚 老中水野和泉守

近来病身に罷成、大切の御役儀若仕落等も有之候得ば如何被思召候間、御役儀御免被成候、緩々可致休息の由於御用部屋松平左近将監を以被仰渡追て御前へ被召出、右御腰物拝領被仰付候。

723◆一 諸侯参勤前々の通一年交代に被仰出候、是にて米価少貴く罷成申事の由申候、比日水野和泉守殿老中役儀御免被成候、近年病身に罷成、大切の御用自然間違も有之候得ば、如何に被思召候間御免被成候、緩々養生仕候様に御前へも被召出御懇の上意、且又御腰物迄も被下候、首尾能は御座候得共、久世大和守殿、戸田山城守殿など役儀御断に候へ共御免不被成、一生御大老にて終り被申候、此度和泉守殿の儀はこなたより断無之候処、御免被成候得ば能首尾とは難申候由取沙汰仕候、委細の儀は手叶不申候故、草々以上(先生賜札幹書中)。

六月

723◆一 追啓旧臘当地御家人五百俵以下御奉公相勤候面々、下は与力並二十俵三十俵取申下役等迄拝借被仰付候、五百俵に金三十両、其より段々減じ、私共二百俵にて十五両致恩貸候、「私云御役料二百俵は不預候」総高十二三万両の儀と申候、当年より十年に返納仕筈にて候、当春儉約の法令急度可被仰出由、其迄の取続の為に拝借被仰出由に候、其故小身の輩旧臘は不存寄難儀に及不申候、下々難儀言外御苦勞に被遊、去年以来段々御賑恤の上、又拝借被仰付候事忝御儀奉存候、然処此度恩貸の金を直に悪所へ致持参候者有之由頃日承候、扱々歎敷儀と難黙止候てかな書的一篇当春録し置申候、此間小寺市郎右衛門殿より歳旦の詩尋に被遣候故、かな書の物も一所に進候、大方市郎右衛門殿より御写し被成其元へも可被遣かと奉存候、御覧可被成候、右の趣新八郎へも御物語可被下候、以上(辛亥正月賜書之内 仮名書一篇載可觀小説)。

正月廿四日

724◆一 十六年二月万石以下へ儉約の御定書出申候、諸侯の分は国方にて可准之、右御

書出候写は組用留帳載之。

724◆一 去年以来米価貴く成候様にとの御仕置のみにて、諸侯交代迄も相改め一年詰に成候得共、米価猶下直に成申候(朱書 予一策可觀小説十六卷に記之)。

724◆一 三月廿七日江戸米問屋共へ被仰渡同晩方より廿八日へかけ、江戸中米屋蔵に封付に成、悉く有合候米被召上候。

(只今迄相場一両に付二石二斗程)

一 一石八斗五升

上米

(同 二石三斗五升程)

一 一石九斗八升

中米

(同 二石四斗五升程)

一 二石八升

下米

右の直段に被召上晦日朔日に早速代金不残相渡候、伊勢丁米問屋岩倉屋勘七方にて承届候、伊勢丁迄に米問屋四五十軒計有之米数六十万俵計有之候、町々米屋共の米数は難計候。

御勘定所張紙

725◆一 米穀下直に付公儀にて買上多被仰付之候、二十万石以上の面々も於江戸大坂買米被申付候様用意可有候時節の事は追て可相達候、買米致耶の儀は、大岡越前守、駒木根肥後守、稻生下野守内へ可被承合候。

四月

紀伊中納言殿

尾張宰相殿

徳川鶴千代殿

松平加賀守

松平大隅守

松平陸奥守

松平兵部大夫

松平大炊頭

松平筑前守

松平相模守

松平長門守

松平安芸守

松平土佐守

松平淡路守

細川越中守

松平信濃守

松平肥後守

佐竹右京大夫

有馬中務大輔

藤堂和泉守

伊井掃部頭

右命下り候処、近年以来諸国甚困窮、米穀の貯一向無之、各国用の米も無之程に罷成候、何を以東都大坂等にて買米可罷成候哉、近頃下情に不通被仰渡候と諸人申候処、同月十五日江戸大火、二十万石以上の諸侯大半焼失仕候、夫故にても候哉無程右買米の儀は相止候。

726◆一 五月廿二日町人の内十四人米買被仰付、種々瑣細の事共有之、米価も右に付一両計に成候、金沢の米価は漸三十目計に成候。

享保十六年亥歳

726◆一 七月六日御先手頭細井左次右衛門殿を以、松平左近將監殿奉りたるにて御屋敷へ被罷越被申候趣、米価高直に成候様に色々被仰付第一御買米も被遊候、然処金銀御手痞にて思召の様に御買米難被成候、外の諸大名方とは違候て此内急度御返済可有之候条、金子十五万両御借用被成度との趣、御家老前田勘解由、玉井市正へ迄被申述候、兩人申候は、近年一統の困窮且又去々年暮上屋敷焼失、当春迄に少々家作も仕掛候箇様の儀共にて未々家来共も難渋仕候、漸京大坂にて致借銀家作も半仕かけ、又は近年家来共へも少々は貸渡候得共、借銀さへも相調不申、今以家中は救得不申候、城附金銀の儀は私共兩人近年の役人故員数も不存候、加賀守も年若家督無間事故中々其様子も不知案内事に御座候、国許家老共へ相尋御用程の金高可有之候哉、其段相しらべ御請も可仕の趣に申述候、畢竟細井氏直にも被申上、何とぞ速に御請有之様に仕度と被申候旨、仍之拾五万両御用に御立可被成趣の御挨拶有之候、仍之其段御書記被下候様にとの事にて御調被遣候、翌七夕御登城の処出仕相済候後、老中列座大目附も被罷出、此度御借金速に御請被成御喜悦に被思召候旨被申述、御直の上意も有之と也、此旨御当地に早飛脚を以申来、御城付御金獅々の蔵より十

五万両取出し諸方御土蔵へ入置、段々九月より十月迄に京へ被遣候、京師へ持運候御費迄も銀百貫目の余入用の旨に候、但正銀を以被遣候、豊臣御代の朱封銀等御馬廻組定番組外より八人宛都合二十四人、並裁領足軽三百人指副銀座にて吹替申候、右獅々の御蔵へ入有之金銀は微妙公以来の儀にて、松雲公八十年御在位の内終に御手附候事無之候、此度初ての儀と申候。

727◆一 天下の事右の趣に成来候、大体を被失候儀不及言議事也(私記)。

727◆一 御別紙に被仰聞候一件、当地にては其砌より沙汰仕候、其故拙者もとくより承申候、此度上の御用に御立被遊御大慶に思召候由被仰上候由承之、乍憚御尤奉存候、此節一統困窮故外の諸侯成申儀にては無之候、さすが御大国故に候由当地にても取沙汰申候、松雲院様御存世の節、御前代の時三十万両迄は御用に御立可被成候由被仰上置候由、是は二三年前以前さる歴々の物語にて慥成儀の様聞申候、左候得ば左様の儀にて此度右の半分被仰出候様に奉存候、直に大坂へ被遣候由、成程大坂にて被召上候米代の御手伝の由当地にても申候、始終何角に御国の御世話ながら、無比類御用に相立被成候事乍憚珍重に奉存候(先生来書の内)。

亥九月廿四日

新助

右御借金に付被仰渡並御請等の写(半切紙面)。

松平加賀守へ内意の覚

近年来穀下直にて一統難儀に付、於公儀御用意金を以去年当年買上米多く被仰付之候、此上も猶更江戸大坂にて可被仰付候、併公儀計にても左様には難調候、大身の面々へも買米可被仰付候間、用意の様に先達て申通候得共、面々にて買米有之候ては如何に付、御手伝候様に可被仰付候、当年類火に逢候面々も多候得ば、一同難被仰付候、此節の事に候間御手伝候様にと被思召候、金十五万両程被指出儀は罷成間敷哉、尤来年急度町人共上納致筈に候間、其節可被相返候、此旨内意可承の由御沙汰に付申達候。

御請の御紙面等左に記(半切紙)。

近来米穀下直にて一統難儀に付、御買米被仰付候、就夫委曲被仰渡奉畏候、先般御懇の御内意の趣忝仕合奉存候、被仰聞候通金十五万両指出可申候、御請の儀何分にも可然様御沙汰可被下候、以上。

七月六日

松平加賀守

松平左近将監殿へ細井左次右衛門殿より被出候紙面左に記。

松平加賀守家老共私迄申候は、此度御買来の儀に付、十五万両加賀守御手伝の御内意被仰渡、右金高指出可申由加賀守奉畏候旨御請申上候に付、早速国元へ申遣取揃次第々指越候様に可仕候、然共去春類焼別て不如意に罷在候故、遅滞の儀可有御座哉無、心元奉存候、此段私に承置様に申聞候、以上(右上巻に細井左次右衛門と書之)。

七月六日

729◆一 享保十七年右十五万両の内、七万両九月八日御返済、残金に付被仰上筋有之、左の通御書付添御書付写。

今年西国筋虫付損亡に付て御領所夫食御入用も多、其上損亡有之輩へも拝借等被仰付候に付て当暮可被相返御金の儀延引有之様に被致度由、先達て被申聞の趣達御耳候処、早速心付何れも迄被申聞候段御機嫌の御事に候、就夫西国筋へ廻米等多入用に付、御買米をも被仰付事に候得ば、被申聞候通当暮被相返、御金の儀は延引候て、至来夏可被指戻候間可被得其意候。

十二月九日

729◆一 大津重郎左衛門名跡可被仰付哉否と申儀に付、私存寄も可申上旨先日御意被遊候、兼て私も思案仕見申候、嗣男無御座上の儀ながら妻並娘も御座候儀に候、其身智養子

にても願置候事と候、尤其願を御聞届被下御知行は半知可被下事の様に奉存候、名跡に不可及と申族も御座候、其趣は木村久平忠義の志を以打果し、言葉も掛打懸候処、脇指をも不拔合候、責て鞘ながら成共打合可申処おくれを取候ものに候、左様のものに名跡可被仰付様は無之儀と御家中にても申体に御座候、一旦聞へ申様にて、却而武士道不吟味成族の申様と奉存候、其子細は久平元来忠義の志にて無御座段は明白に相知申候、其上比興成仕形共にて、御座敷の内にて而も一方口の役所に只一人御用相勤罷在候を、忍入ねらひ打に右手を切落し申程初太刀に仕負申候、千百人にも勝れ申強力者にて、右手に深手を得ながらも抜合働可申歟、平々の人何を被成可申哉、久平存貯候のみならず、刀迄も抜持忍入候儀に候へば闇打同事と奉存候、然ばおくれの沙汰には不及儀に被存候、若此度おくれの沙汰を以名跡御立不被下候は、御奉公相勤候重職の衆も氣折て面白からぬ心底も出可申様に奉存候、箇様に存寄申儀に御座候故、たとひ重郎左衛門養子等の類遺書に不相見候共、可然家柄の人御見立被遊、娘と一所に被仰付名跡御立、夫を以後家をも養育仕候様に被仰付被下候は、亡魂も忝可奉存候事歟と奉存候、将又久平老母も嶺広院様御意被遊候通の子細も候得ば、少々御扶持被為下候儀一段可然御仁恩とも奉存候、妻子とは違ひ母の儀に御座候得ば格別の事と奉存候、幸に是にて釣合も宜敷罷成、御陰徳の一事にも可成様に奉存候、乍恐愚意の趣如斯に御座候、以上。

亥十月九日

青地藤太夫

安房守様

730◆1 大津重郎左衛門儀常に悪事の趣も無之処、足輕木村久平疎忽の存入故、遂不慮の死候事寔無是非仕合不便の至りに候、件の趣に候間重郎左衛門儀男子有之候は、尤可及名跡之沙汰候得共男子無之候、且此間重郎左衛門遺書取上令披見候処、享保九年相調置候遺書にて、其節三歳のせがれを名跡願置候、此者先年令病死候、右の外願置候者も無之、其以来の遺書は無之候、然は唯今は一向其身願の趣は無之事に候得共、重郎左衛門儀代々全相勤、其上重き役儀迄も申付置候ものゝ跡及断絶候儀無本意事と存候、娘一人有之迄にて同姓の内養子等可申付者無之候、依之南部兵左衛門次男只之進も年来も相応に候間、重郎左衛門遺知の内百石遣之名跡相統為仕、右娘と一所に申付候、此段大津伝六へ申渡故重郎左衛門妻並娘へ可為申聞候、尤南部兵左衛門並次男只之進へ可被申渡候、只之進儀重郎左衛門旧宅へ勝手次第為引移可申候、組は大組へ指加之候条、此等の趣可被申渡候、以上。

亥十二月 日

家老中